宗典部

第七巻

BL
1411
T8J3
1929
v.31

Tripitaka. Japanese. 1929
Showa shinshu kokuyaku
Daizokyo

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和新纂
國譯大藏経

LIBRARY
MAY 31 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

BL
1411
T8J3
1929
V. 31

昭和新纂

國譯大藏經 宗典部 第七卷

日蓮宗聖典 目次

宗要篇

觀心本尊鈔 …… 一

開目鈔 …… 二五

立正安國論 …… 九六

撰時鈔 …… 一一八

報恩鈔 …… 一七〇

教義篇

三大祕法鈔 …… 二二三

本尊問答鈔 …… 二二七

法華取要鈔 …… 二二九

教機時國鈔……二五〇
諸法實相鈔……二五六
顯佛未來記……二六一
聖愚問答鈔……二六七
持妙法華問答鈔……三〇二
會谷鈔……三一二
諫曉八幡鈔……三三二
法門可被申樣之事……三五〇

信行篇

如說修行鈔……三六三
四信五品鈔……三六九
生死一大事血脈鈔……三七六
佐渡御書……三七九
法華行者值難事……三八六
轉重輕受法門……三八九

法蓮鈔……三九一
崇峻天皇御書……四一一
三澤鈔……四一七
秋元御書……四二三
祈禱鈔……四三三
身延山御書……四四八
四恩鈔……四五六
異體同心鈔……四六二
下山鈔……四六四

消息篇

船守彌三郎許御書……四九五
月水御書……四九七
南條兵衛七郎殿御書……五〇四
與北條時宗書……五一二
弟子檀那中御書……五一三

金吾殿御返事……五一四
四條金吾女房御書……五一五
土木殿御返事……五一六
土籠御書……五一七
寺泊御書……五一八
佐渡御勘氣鈔……五二三
富木殿御返事……五二三
四條金吾殿女房御返事……五二四
四條金吾殿御返事……五二六
日妙聖人御書……五二九
新尼御前御返事……五三四
さじき女房御返事……五三九
妙一尼御前御消息……五四〇
兵衞志殿御返事……五四三
清澄寺大衆中……五四七

忘持經事……五五〇
種種御振舞御書……五五三
四條金吾殿御返事……五七五
四條金吾殿御返事……五七六
諸人御返事……五七八
檀越某御返事……五七九
千日尼御前御返事……五八〇
千日尼御前御返事……五八六
上野殿御返事……五九〇
聖人御難事……五九三
中興入道消息……五九五
妙一尼御前御返事……六〇〇
上野殿後家尼御前御書……六〇一
王日殿御返事……六〇三
法衣御書……六〇三

小菱古御書……六四
兵衛志殿御返事……六四
光日上人御返事……六五
上野殿御返事……六八
地引御書……六八
上野殿母尼御前御返事……六一
大夫志殿御返事……六二
春初御消息……六二
波木井殿御報……六三

日蓮宗聖典

宗典部
第七卷

宗要篇

如來滅後五五百歳始觀心本尊鈔

本朝沙門　日蓮　撰

【一】『摩訶止觀』第五に曰く、「夫れ一心に十法界を具す。一法界に又十法界を具すれば百法界なり。一界に三十種の世間を具すれば、百法界に卽ち三千種の世間を具す。此の三千、一念の心に在り。若し心無くんば已みなん、介爾も心あれば、卽ち三千を具す。乃至、所以に稱して不可思議境と爲す、意此に在り」等云云。

【二】問うて云く、『玄義』に一念三千の名目を明すか。答へて云く、妙樂云く「明さず」。問うて曰く、『文句』に一念三千の名目を明すか。答へて曰く、妙樂云く「明さず」。問うて曰く、其妙樂の釋如何。答へて曰く、「並びに未だ一念三千と云はず」等云云。問うて曰く、『止觀』の一二三四等に、一念三千の名目を明すか。答へて曰く、之れなし。問うて曰く、其證如何。答へて曰く、妙樂云く、「故に止觀に至つて正しく觀法を明すに、並びに三千を以て指南と爲す」等云云。疑つて云く、『玄義』の第二に云く、「又一法界に九法界を具すれば、百法界に千如是」等云云。『文句』第一に云く、「一入に十法界を具すれば、一界又十界なり。十界各十如是あれば、卽ち是れ一千なり」等云云。『觀音玄』に云く、「十法界交互なれば、卽ち百法界あり。千種の性相冥伏して心に在り、現前せずと雖

〔一〕縮遺九二八頁、文永十年（五十二歳）佐渡流罪中の作。末法の一切衆生の尊崇歸依すべき本門の本尊を明にしたる『當身一期の大事』と言ふ重要篇にして全遺文の生命骨髓也。

【二】一篇の論旨一念三千を以て貫く。茲には先づ止觀の文を引いて其の名目を擧ぐ。

【摩訶止觀】【玄義】（妙法蓮華經玄義）【文句】（妙法蓮華經文句）天台大師の法華三大部、玄義は大意玄旨を述べ、文句は隨文解釋、止觀は實踐修行を明す。

【十法界】佛、菩薩、緣覺、聲聞、天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄の十界。

【三十種の世間】五陰、衆生、國土の三世間、相、性、體、力、作、因、

縁、果、報、本末究竟等の十如是を具するをいふ。

【二】一念三千は止觀の第五以下の外に明されざるを示し以て其の最祕最密を示す。

【妙樂】支那天台宗中興の祖、荊溪大師湛然のこと、玄義釋籤文句記止觀輔行等の極要書あり。

【觀音玄】（觀音玄義）天台大師の講述。

【弘決】「摩訶止觀輔行傳弘決」一荊溪記妙樂大師の止觀註釋行。

【二十五法】止觀の方便行たる二十五種の行法。

【說己心中所行法門】己心内證の法門を說くの意。

【三】天台宗の一念三千が重寶なることを說く。

【玄文等】玄義、文句等の略。

【五時】華嚴、阿

も、宛然として具足す』」等云云。」問うて曰く、「『止觀』の前の四に、一念三千の名目を明すか。」答へて曰く、「『妙樂云く、「明さず。」』」問うて曰く、「其の釋如何。」答ふ、「『弘決』第五に云く、『若し正觀に望めば、全く未だ行を論ぜず。亦二十五法に歷て、事に約して、解を生ず。方に能く正修の方便と爲すに堪へたり。是の故に前の六をば、皆解に屬す。』」等云云。又云く、『故に止觀の正しく觀法を明すに至つて、並びに三千を以て、指南と爲す。乃ち是れ終窮究竟の極說なり。故に序の中に、說己心中所行法門と云ふ、良に以あるなり。請ふ尋ね讀まん者、心に異緣無かれ。』等云云。

【三】夫れ智者の弘法三十年、二十九年の間は、『玄』、『文』等の諸義を說いて、五時、八教、百界、千如を明し、前五百餘年の間に諸非を責め、並びに天竺の論師の未だ述べざるを顯はす。章安大師云く、『天竺の大論尙ほ其の類に非ず、震旦の人師何ぞ勞はしく語るに及ばん。此れ誇耀に非ず、法相の然らしむるのみ。』等云云。墓ない哉天台の末學等、華嚴、眞言の元祖の盜人に一念三千の重寶を盜み取られて、還つて彼等が門家となりぬ。章安大師兼て此の事を知つて、歎いて言く、『此の言若し墜ちなば將來悲むべし。』云云。」

【四】問うて曰く、「百界千如と一念三千と差別如何。」答へて曰く、「百界千如は有情界に限り、一念三千は情非情に亙る。」不審して云く、「非情に十如是亙るならば、草木に心あつて有情の如く成佛を爲すべきや、如何。」答へて曰く、「此事難信難解なり。天台の難信難解に二あり。一には教門の難信難解、二には觀門の難信難解なり。其の教門の難信難解とは、

含、方等、般若、法華涅槃の五時。
【八教】化儀の四教たる頓、漸、祕密、不定と化法の四教たる藏通別圓の四教とを合せていふ。
【章安大師】天台大師の弟子灌頂のこと、三大部の筆受に當り且つ著書多し。
【大論】龍樹の作大智度論のこと。
【震旦】支那のこと、
【四】一念三千が萬法を包含することを說く。
【有情界】衆生界と同じく心情あるもの。
【非情】心情なき草木國土等をいふ。
【教門】教相門。
【觀門】觀心門。
【二乘闡提】聲聞、緣覺と斷善根の者。
【外典內典】外道書と佛書。

一佛の所說に於て、爾前の諸經には、二乘闡提は未來永く成佛せず。教主釋尊始めて正覺を成し、法華經迹本二門に來至し給ひ、彼の二說を壞る。一佛二言、水火なり。誰人か之を信ぜん。此は教門の難信難解なり。觀門の難信難解とは百界千如一念三千は非情の上の色心の二法、十如是是れなり。爾りと雖も木畫の二像に於ては、外典內典共に之を許して本尊と爲す。其義に於ては、天台一家より出でたり。草木の上に色心の因果を置かずんば、木畫の像を本尊と恃み奉ること無益なり。疑つて云く、「草木國土の上の、十如是因果の二法は何れの文に出でたるか。」答へて曰く、「『止觀』第五に曰く、『國土世間亦十種の法を具す。所以に惡國土相性體力等。』と云云。『釋籤』第六に云く、『相は唯だ色に在り、性は唯だ心に在り、體力作緣は義色心を兼ぬ。因果は唯だ心、報は唯だ色に在り。』等云云。『金錍論』に云く、『乃ち是れ一草一木一礫一塵各一佛性あり、各一因果あり、緣了を具足す。』等云云。」

【五】問うて曰く、「出處既に之を聞く、觀心の心如何。」答へて曰く、「觀心とは我が己心を觀じて十法界を見る、是れ觀心と云ふなり。譬へば他人の六根を見ると雖も、未だ自面の六根を見ざれば、自具の六根を知らず、明鏡に向ふの時、始めて自具の六根を見るが如し。設ひ諸經の中に、處處に六道竝びに四聖を載すと雖も、『法華經』竝びに天台大師所述の『摩訶止觀』等の明鏡を見ざれば、自具の十界、百界千如、一念三千を知らざるなり。」問うて曰く、「『法華經』は何れの文ぞ、天台の釋は如何。」答へて曰く、「『法華經』第一『方便

【釋籤】妙樂の玄義註釋。
【金剛錍】（金剛錍論）妙樂の著。
【緣了】緣因佛性、了因佛性のこと。
【五】觀心を說き十界所具の十界を明す。
【六根】眼、耳、鼻、舌、身、意の六官。
【六道】地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六界。
【四聖】聲聞、緣覺、菩薩、佛の四界。
【佛知見】佛智に同じ佛の慧なり。
【阿僧祇劫】阿僧祇（Asamkhya）無數と譯す、劫（kalpa）普通に長時と譯す。
【阿耨多羅三藐三菩提】（Anuttara samyaksambodhi）無上正等正覺と譯す、佛の覺。
【地涌千界】涌出品に於て大地より

品』に云く『衆生をして佛知見を開かしめんと欲す。』等云云。是れ九界所具の佛界なり。『壽量品』に云く『是の如く我れ成佛してより已來、甚だ大に久遠なり。壽命無量阿僧祇劫、常住にして滅せず。諸の善男子、我本と菩薩の道を行じて成ぜし所の壽命、今猶ほ未だ盡きず、復上の數に倍せり。』等云云。此の經文は佛界所具の九界なり。經に云く、『提婆達多、乃至、天王如來。』等云云。地獄界所具の佛界なり。經に云く、『一を藍婆と名く、乃至、汝等但だ能く法華の名を受持せん者を擁護せん、福量る可からず。』等云云。是れ餓鬼界所具の十界なり。經に云く、『龍女、乃至、等正覺を成ず。』等云云。此れ畜生界所具の十界なり。經に云く、『婆稚阿修羅王、乃至、一偈一句を聞いて、阿耨多羅三藐三菩提を得。』等云云。修羅界所具の十界なり。經に云く、『若し人佛の爲の故に、乃至、皆已に佛道を成ず。』等云云。此れ人界所具の十界なり。經に云く、『大梵天王、乃至、我等亦是の如く、必ず當に作佛することを得べし。』等云云。此れ天界所具の十界なり。經に云く、『舍利弗、乃至、華光如來。』等云云。此れ聲聞界所具の十界なり。經に云く、『其の緣覺を求むる者、比丘、比丘尼、乃至、合掌し敬心を以て、具足道を聞かんと欲す。』等云云。此れ即ち緣覺界所具の十界なり。經に云く、『地涌千界、乃至、眞淨大法。』等云云。此れ即ち菩薩所具の十界なり。經に云く、『或は己身を說き、或は他身を說く。』等云云。即ち佛界所具の十界なり。」

【六】問うて曰く「自他面の六根、共に之を見る。彼此の十界に於ては、未だ之を見ず、

涌出せる本化の諸大菩薩をいふ。
【八】五に續いて十界互具を明し、特に人界所具の十界を明す。
【六難九易】法華經を弘通するの難きを十五比喩を以て說きたるもの、九易といふも法華經弘通の難事に比すれば他の大難も尙ほ易行なりとの意なり。
【隨自意】隨他意の對、對機に依らざる自由意志の意。
【正像】滅後の三時代の初め正法時代と像法時代。

如何が之を信ぜん。」答へて曰く、「『法華經法師品』に云く、『難信難解』と。『寶塔品』に云く、『六難九易』等云云。天台大師の云く、『二門悉く昔と反すれば、難信難解なり。』章安大師云く、『佛此を將て大事と爲す、何ぞ解し易きことを得べけんや。』等云云。傳教大師云く、『此の法華經は最も爲れ難信難解なり。隨自意の故に。』等云云。夫れ在世の正機は過去の宿習厚きの上、教主釋尊、多寶佛、十方分身の諸佛、地涌千界、文殊彌勒等、之を扶けて諫曉せしむるに、猶ほ信ぜざる者之あり。五千席を去り、人天移さる。況んや正像をや。何に況んや末法の初めをや。汝之を信ぜば、正法にあらじ。」問うて曰く、「經文幷びに天台、章安等の解釋は疑網なし。但し火を以て水と云ひ、墨を以て白しと云ふ。設ひ佛說たりと雖も、信を取り難し。今數數他面を見るに、但だ人界に限つて餘界を見ず。自面も亦復是の如し、如何が信心を立てんや。」答ふ、「數數他面を見るに、或時は喜び、或時は瞋り、或時は平かに、或時は貪り現じ、或時は癡現し、或時は諂曲なり。瞋るは地獄、貪るは餓鬼、癡は畜生、諂曲なるは修羅、喜ぶは天、平かなるは人なり。他面の色法に於ては、六道共に之れあり。四聖は冥伏して現ぜずとも、委細に之を尋ねば、之れあるべし。」問うて曰く、「六道に於て分明ならずと雖も、粗之を聞くに、之を備ふるに似たり。四聖は全く見えず、如何。」答へて曰く、「前には人界の六道之を疑ふ。然りと雖も強ひて之を言しかば、相似すとの言を出す。四聖も又爾るべきか。試みに道理を添加して、萬が一之を宣べん。所以世間の無常眼前に有り、豈に人界に二乘界無からんや。無顧の惡人も猶ほ妻子を慈愛

【七】凡夫の劣心卽ち己心に佛界を具することを明す。
【一闡提】(Icchantika)の譯、略して闡提といふ。
【阿鼻】(Avici)の音譯、無間と譯す、無間地獄のこと。
【四依の菩薩】衆生の依止すべき四種の大菩薩。
【理卽】天台の六卽の第一、一切衆生が眞如の理卽ち佛性を具へて未だ之を自覺せざる位。
【四韋陀】四吠陀(Veda)の異音譯。
【大通久遠の下種】法華經の化城喩品に出づる三千塵點劫の久遠に出世し

す、菩薩界の一分なり。但だ佛界ばかり現じ難し。九界を具するを以て強ひて之を信じ、疑惑せしむること勿れ。『法華經』の文に人界を說いて云く、『衆生をして佛知見を開かしめんと欲す』と。『涅槃經』に云く、『大乘を學する者は、肉眼ありと雖も、名けて佛眼と爲す』等云云。末代の凡夫出生して『法華經』を信ずるは、人界に佛界を具足するが故なり。」

【七】問うて曰く、十界互具の佛語分明なり。然りと雖も我等が劣心に、佛法界を具すること、信を取り難き者なり。今時之を信ぜずば、必ず一闡提と成らん。願くは、大慈悲を起して之を信ぜしめ、阿鼻の苦を救護し給へ。」答へて曰く、『汝既に唯一大事因緣の經文を見聞して之を信ぜずんば、釋尊より已下、四依の菩薩、並びに末代理卽の我等、如何が汝が不信を救護せんや。然りと雖も試みに之を言はん。佛に値ひ奉りて覺らざる者の、阿難等の邊にして得道する者之れ有り。其れ機に二あり、一には佛を見奉り法華にして得道す。二には佛を見奉らずとも法華にして得道するなり。其上佛教已前の漢土の道士、月支の外道、儒教『四韋陀』等を以て緣と爲して正見に入る者之れ有り。又利根の菩薩、凡夫等の『華嚴』、『方等』、『般若』等の諸大乘經を聞きし緣を以て大通久遠の下種を顯示する者多多なり。例せば獨覺の飛花落葉の如し。敎外の得道是れなり。過去の下種結緣無き者と權小に執着する者は、設ひ『法華經』に値ひ奉るとも、小權の見を出でず。自見を以て正義とするが故に、還つて『法華經』を以て或は小乘經に同じ、或は『華嚴』、『大日經』等に同じ、或は之を下す。此等の諸師は儒家、外道の賢聖より劣る者なり。此

て法華經を說ける大通智勝佛の時に於る下種。

【獨覺】辟支佛(Pratyekabuddha)の譯、緣覺に同じ。

【權小】權大乘と小乘の略。

【八】己心に佛界を具することと隨つて三千を具することに疑を構へて更に詳說の端を開く。

【三惑已斷】見思、塵沙、無明の三惑を已に斷盡せること。

【始成正覺】伽耶の菩提樹下に於て始めて正覺を成就せること、久遠實成に對す。

【因行】成佛前に於る因位の修行。

【十方臺上】十方世界の諸佛を化身とせる蓮華藏世界蓮華臺上の佛のこと

等は且らく之を置く。十界互具、之を立つるは、石中の火、木中の花、信じ難けれども、緣に値ひて出生すれば之を信ず。人界所具の佛界は、水中の火、火中の水、最も甚だ信じ難し。然りと雖も龍火は水より出で、龍水は火より生ず。心を得ざるも現證あれば之を用ゆ。既に人界の八界、之を信ず、佛界何ぞ之を用ゐざらん。堯舜等の聖人の如きは、萬民に於て偏頗なし、人界の佛界の一分なり。不輕菩薩は所見の人に於て佛身を見る。悉達太子は人界より佛身を成ず。此等の現證を以て之を信ずべきなり」

【八】問うて曰く「教主釋尊は（此より堅固に之を秘せ）三惑已斷の佛なり。又十方世界の國主、一切の菩薩、二乘、人天等の主君なり。行の時は梵天左に在り、帝釋右に侍り、四衆八部後に從ひ、金剛前に導き、八萬法藏を演說して、一切衆生を得脫せしむ。是の如き佛陀、何を以て我等凡夫の己心に住せしめんや。又迹門、爾前の意を以て之を論ずれば、教主釋尊は始成正覺の佛なり。過去の因行を尋ね求むれば、或は能施太子、或は儒童菩薩、或は尸毗王、或は薩埵王子、或は三祇百劫、或は動逾塵劫、或は無量阿僧祇劫、或は初發心時、或は三千塵點等の間七萬五千六千七千等の佛を供養し、劫を積み行滿じて、今の教主釋尊と成り給ふ。是の如き因位の諸行は、皆我等が己心所具の菩薩界の功德なるか。果位を以て之を論ずれば、教主釋尊は始成正覺の佛、四十餘年の間、四教の色身を示現し、爾前、迹門、『涅槃經』等を演說して、一切衆生を利益し給ふ。所謂る『華嚴』の時の十方臺上の盧舍那、『阿含經』の三十四心斷結成道の佛、『方等』、『般若』の千佛等、『大日』、『金剛頂』

と、華嚴經の教主をいふ。

【盧舍那】 毘盧舍那（Vairocana）の略。

【三十四心斷結成道】 見思の惑心を三十四に分類し、これを斷じて成道せること、結は惑に同じ。

【如來藏】 眞如のこと。

等の千二百餘尊、並びに迹門『寶塔品』の四土の色身、『涅槃經』の或は丈六と見る、或は小身大身と見る、或は盧舍那と見る、或は身虚空に同じと見る。四種の身、乃至、八十御入滅、舍利を留めて正像末を利益し給ふ。本門を以て之を論ずれば、教主釋尊は五百塵點已前の佛なり。因位も又是の如し。其より已來、十方世界に分身し、一代聖教を演說して、塵數の衆生を教化し給ふ。本門の所化を以て、迹門の所化に比較すれば、一渧と大海と、一塵と大山となり。本門の一菩薩を、迹門の十方世界の文殊觀音等に對向すれば、猨猴を以て帝釋に比するに尚ほ及ばず。其外十方世界の斷惑證果の二乘、並びに梵天、帝釋、日月、四天、四輪王、乃至無間大城の大火災等此等は皆我が一念の十界なるか、己心の三千か、佛說たりと雖も、之を信ずべからず。此を以て之を思ふに、爾前の諸經は實事なり、實語なり。『華嚴經』に曰く「究竟じて虚妄を離れ、染なきこと虚空の如し」。『仁王經』に云く「源を窮め性を盡して妙智存せり」。『金剛般若經』に云く「清淨の善のみあり」。馬鳴菩薩の『起信論』に云く「如來藏の中に、清淨の功德のみあり」。天親菩薩の『唯識論』に云く「謂く餘の有漏と、劣無漏の種は、金剛喩定が現在前する時極圓明純淨の本識を引く。彼の依に非ざるが故に、皆永く棄捨す」等云云。爾前の經經と『法華經』と、之を校量するに、彼の經經は無數なり。時說既に長し、一佛二言彼に付くべし。馬鳴菩薩は付法藏第十一の佛記に之れ有り。天親菩薩は千部の論師、四依の大士なり。天台大師は邊鄙の小僧にして、一論をも宣べず、誰か之を信ぜん。其上多を捨てて小に付くとも、『法華

經』の文分明ならば、少し恃怙あらんも『法華經』の文に何れの所にか、十界互具、百界千如、一念三千の分明なる證文之れ有りや。隨つて經文を開拓するに『斷諸法中惡』等云云。天親菩薩の『法華論』堅慧菩薩の『法性論』に、十界互具之れ無く、漢土南北の諸大人師、日本七寺の末師の中にも此義なし。但だ天台一人の僻見なり、傳敎一人の謬傳なり。故に清涼國師の云く『天台の謬りなり。』慧苑法師の云く『然るに天台は小乘を呼んで三藏經となし、其の名謬濫するを以て。』等云云。了洪が云く『天台獨り未だ華嚴の意を盡さず。』等云云。得一が云く『拙いかな智公、汝は是れ誰が弟子ぞ。三寸に足らざる舌根を以て、覆面舌の所說の敎時を謗ず。』等云云。弘法大師の云く『震旦の人師等、諍つて醍醐を盜んで各自宗に名く。』等云云。夫れ一念三千の法門は、一代の權實に名目を削り、四依の諸論師其義を載せず、漢土日域の人師も之を用ゐず。如何が之を信ぜん。」

【九】答へて曰く「此の難最も甚し、最も甚し。但し諸經と『法華』との相違は、經文より事起つて分明なり。未顯と已顯と、證明と舌相と、二乘の成と不と、始成と久成と等、之を顯はす。諸論師の事は天台大師曰く『天親龍樹內鑒冷然たり。外には時の宜しきに適ひ、各權りに據る所あり。而るに人師偏へに解し、學者苟くも執し、遂に矢石を興し、各一邊を保つこと、大に聖道に乖けり。』等云云。章安大師曰く『天竺の大論尙ほ其の類に非ず、眞旦の人師何ぞ勞はしく語るに及ばん。此れ誇耀に非ず、法相の然るのみ。』等云云。天親、龍樹、馬鳴、堅慧等は內鑒冷然なり。然りと雖も時未だ至らざるが故に之

【清涼國師】支那華嚴宗の澄觀。
【慧苑】支那華嚴宗の學者。
【了洪】同上（但和漢不明）
【得一】日本法相宗の學者、傳敎大師と論爭せり、德一に同じ。
【智公】天台大師智顗のこと。
【覆面舌】面を覆ふ舌、廣長舌相のことにて茲は釋尊をいふ。
【醍醐】醍醐味の略、最極上味の敎理の意味。
【九】疑に答へて己心に佛界を具することを略說し、其の難信難解を高調す。
【未顯と已顯】未顯眞實と已顯眞實

【成と不】成佛と不成佛。
【内鑒冷然】知つて之を言はぬこと。
【蘊在】つつみたもつこと。
【遮會】會を遮ること。
【一〇】一念三千を知れる者、三國諸師中僅に三人のみなるを説き、難信難解の法門なるを示す。

を宣べざるか。人師に於ては、天台已前は或は珠を含み、或は一向に之を知らず。已後の人師、或は初めに之を破して後に歸伏の人あり、或は一向用ゐざる者も之れあり。但し「斷諸法中惡」の經文を會すべきなり。彼は「法華經」に爾前の經文を載するなり。往いて之を見よ。經文分明に、十界互具之を説く。所謂る「衆生をして佛知見を開かしめんと欲す」等云云。天台此の經文を承けて云く、「若し衆生に佛の知見無くんば、何ぞ開を論ずる所あらん。當に知るべし、佛の知見衆生に蘊在することを」云云。章安大師の云く「衆生に若し佛の知見なくんば、何ぞ開悟する所あらん。若し貧女に藏なくんば、何ぞ示す所あらん」等云云。但し會し難き所は上の教主釋尊等の大難なり。此事を佛遮會して曰く「已今當説、最爲難信難解」と。次下の六難九易是れなり。天台大師の云く「二門悉く昔と反すれば、信じ難く解し難し。鋒に當るの難事なり」。章安大師の云く「佛此を將て大事と爲す。何ぞ解し易きことを得べけんや」。傳教大師の云く「此の法華經は最も爲れ難信難解なり、隨自意の故に」等云云。

【一〇】夫れ佛より滅後の一千八百餘年に至るまで、三國に經歴して、但だ三人のみ有つて始めて此の正法を覺知せり。所謂る月支の釋尊、眞旦の智者大師、日域の傳教、此の三人は内典の聖人なり。問うて曰く「龍樹、天親等は如何」。答へて曰く「此等の聖人は、知つて之を言はざりし仁なり。或は迹門の一分之を宣べて、本門と觀心とを云はず。或は機あつて時なきか、或は機と時と共に之なきか。天台、傳教已後は之を知る者多多なり、

【一】初の大難を遮し廣く己心に佛界を具することを明す。

【佛の三種の身】法報應三身のこと
【方等】玆は大乘經の意味。

二聖の智を用ゆるが故なり。所謂る三論の嘉祥、南三北七の百餘人、華嚴宗の法藏、清凉等、法相宗の玄奘三藏、慈恩大師等、眞言宗の善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏等、律宗の道宣等、初めには反逆を存し、後には一向に歸伏せしなり。

【一】但し初めの大難を遮せば『無量義經』に云はく『譬へば國王と夫人と、新に王子を生ぜん。若は一日、若は二日、若は七日に至り、若は一月、若は二月、若は七月に至り、若は一歲、若は二歲、若は七歲に至り、復國事を領理すること、能はずと雖も、已に臣民に宗敬せられて、諸の大王の子以て伴侶とせん。王及び夫人、愛心偏へに重くして、常に與に語らん。所以は何ん、稚小なるを以ての故にと云はんが如し。善男子、是の持經者も亦復是の如し、諸佛の國王と是の經の夫人と和合して、共に是の菩薩の子を生ず。若し菩薩是經を聞くことを得て、若は一句、若は一偈、若は一轉、若は二轉、若は十、若は百、若は千、若は萬、若は億萬恒河沙無量無數轉せば、復眞理の極を體すること能はずと雖も、乃至、已に一切の四衆八部に宗仰せられて、諸の大菩薩を以て眷屬と爲し、乃至、常に諸佛に護念せられて、慈愛偏へに覆はれん。新學なるを以ての故なり』等云云。『普賢經』に云く『此大乘經典は諸佛の寶藏、十方三世諸佛の眼目なり。乃至三世の諸の如來を出生する種なり。乃至、汝大乘を行じて、佛種を斷ぜざれ』等云云。又云く『此方等經は、是れ諸佛の眼なり。諸佛是に因つて五眼を具することを得。佛の三種の身は方等より生ず。是れ大法印にして、涅槃海に印す。此の如き海中より、能く三種の佛の清

【一一】 諸經に久遠實成を顯はさず隨って一念三千の法門なきを示す。

【近因近果】 因行成佛ともに近きこと。

【三五の遠化】 法華經に說く如き三千塵點劫五百億塵點劫の久遠に於る教化。

【別圓四藏】 化法の四教に於る別圓二教と四種寶藏。

【藏通二教】 化法の四教の初め二教。

【一三】 己心に凡聖界を具することを說き一念三千の論證を進む。

【會通】 會融疏通すること、解答のこと。

【六波羅蜜】 布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六種の修行、波羅蜜(Paramita)は度と譯す。

淨身を生ず。此の三種の身は人天の福田なり。」等云云。

【一二】 夫れ以みれば釋迦如來一代の顯密、大小の二教、華嚴眞言等の諸宗の依經、往いて之を勘ふるに、或は十方臺葉の毘盧遮那佛、大集雲集の諸佛如來、般若染淨の千佛示現、大日、金剛頂等の千二百尊も、但だ其の近因近果を演說して、其の遠因果を顯はさず。速疾頓成之を說けども、三五の遠化を亡失し、化道の始終迹を削りて見えず。『華嚴經』、『大日經』等は一往之を見るに別圓四藏等に似たれども、再往之を勘ふれば、藏通二教に同じて未だ別圓にも及ばず。本有の三因之れなし、何を以てか佛の種子を定めん。而るに新譯の譯者等、漢土に來入するの日、天台の一念三千の法門を見聞して或は自らの所持の經經に添加し、或は天竺より受持するの由之を稱す。天台の學者等、或は自宗に同ずるを悅び、或は遠を貴んで近を蔑り、或は舊を捨てて新を取り、魔心愚心出來す。然りと雖も詮する所は、一念三千の佛種に非れば、有情の成佛、木畫二像の本尊は有名無實なり。」

【一三】 問うて曰く、「上の大難未だ其の會通を聞かず、如何。」答へて曰く、「『無量義經』に云く、『未だ六波羅蜜を修行することを得ずと雖も、六波羅蜜自然に在前す。』等云云。『法華經』に云く、『具足の道を聞かんと欲す。』等云云。『涅槃經』に曰く、『薩とは具足に名づく。』等云云。龍樹菩薩の云く、『薩とは六なり。』等云云。『無依無得大乘四論玄義記』に云く、『沙とは譯して六と云ふ、胡法には六を以て具足の義と爲すなり。』『吉藏の疏』に云く、『沙とは飜じて具足と爲す。』『天台大師の云く、『薩とは梵語なり、此に妙と飜ず。』等云云。私に會

【無依無得大乘四論玄義】略して四論玄義といふ、唐の均正（慧均僧正）の著。

【身土】正報たる身體と依報たる國土。

通を加へば、本文を黷すが如し。爾りと雖も文の心は、釋尊の因行果德の二法は、妙法蓮華經の五字に具足す。我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功德を讓り與へ給ふ。四大聲聞の領解に云く、「無上の寶珠求めざるに自ら得。」云云。我等が己心の聲聞界なり。「我が如く等しくして異ること無けん。」「我が昔の所願の如き、今已に滿足しぬ。」「一切衆生を化して、皆佛道に入らしむ。」「妙覺の釋尊は我等が血肉なり。因果の功德は骨髓に非ずや。「寶塔品」に云く、「其れ能く此の經法を護ることあらん者は則ち爲れ我及び多寶を供養するなり。乃至、亦復諸の來り給へる化佛の諸の世界を莊嚴し光飾し給ふ者を供養するなり。」等云云。釋迦多寶十方の諸佛は我が佛界なり。其の跡を紹繼して、其の功德を受得す。「須臾も之を聞けば、即ち阿耨多羅三藐三菩提を究竟することを得」とは是れなり。「壽量品」に云く、「然れども我實に成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由陀劫なり。」等云云。我等が己心の釋尊は、五百塵點、乃至所顯の三身にして、無始の古佛なり。經に云く、「我本菩薩の道を行じて、成せし所の壽命、今猶未だ盡きず、復上の數に倍せり。」等云云。我等が己心の菩薩等なり。地涌千界の菩薩は、己心の釋尊の眷屬なり。例せば太公、周公旦等は周武の臣下、成王幼稚の眷屬、武内の大臣は神功皇后の棟梁、仁德王子の臣下なるが如し。上行、無邊行、淨行、安立行等は、我等己心の菩薩界なり。妙樂大師云く、「當に知るべし、身土一念の三千なり。故に成道の時此の本理に稱うて、一身一念法界に遍し。」等云云。

【一四】夫れ始め寂滅道場、華藏世界より、沙羅林に終るまで、五十餘年の間、華藏密嚴三變四見等の三土四土は、皆成劫の上の無常の土に變化する所の、方便、實報、寂光、安養、淨瑠璃、密嚴等なり。能變の敎主涅槃に入れば、所變の諸佛隨つて滅盡す。土も又以て是の如し。今本時の娑婆世界は、三災を離れ、四劫を出でたる、常住の淨土なり。佛既に過去にも滅せず、未來にも生ぜず、所化以て同體なり。此れ即ち己心の三千具足、三種の世間なり。迹門十四品には未だ之を說かず、法華經の内に於ても時機未熟の故か、此の本門の肝心「南無妙法蓮華經」の五字に於ては、佛猶ほ文殊、藥王等にも之を付屬し給はず。何に況んや其の已下をや。但だ地涌千界を召して、八品を說いて之を付屬し給ふ。其の本尊の爲體く、本時の娑婆の上に、寶塔空に居し、塔中の「妙法蓮華經」の左右に、釋迦牟尼佛多寶佛、釋尊の脇士上行等の四菩薩、文殊、彌勒等は四菩薩の眷屬として末座に居し、迹化他方の大小の諸菩薩は、萬民の大地に處して雲閣月卿を見るが如く、十方の諸佛は、大地の上に處し給ふ。迹佛迹土を表するが故なり。是の如き本尊は、在世五十餘年に之れ無し。八年の間にも但だ八品に限る。正像二千年の間は、小乘の釋尊は、迦葉阿難を脇士と爲し、權大乘並びに涅槃、法華經の迹門等の釋尊は、文殊、普賢等を以て脇士と爲す。此等の佛をば正像に造り畫けども、未だ壽量の佛在さず。末法に來入して、始めて此の佛像出現せしむべきか。」

【一五】問ふ、「正像二千餘年の間は、四依の菩薩並びに人師等、餘佛、小乘、權大乘、爾

【一四】正しく久遠本時の十界互具を說きて一念三千を結し、一轉して此本時の互具三千を本尊として其の體相を述べ、更に斷る本尊は本門八品のみに限ることを明し、以て一念三千より觀心本尊に及ぶ。

【華藏密嚴三變四見等の三土四土】華藏世界、蜜嚴淨土、法華の三變土、沙羅四見の國土、三土は同居、方便、實報、四土は之に安養を加へたるもの。

【成劫】四劫の一、六道を生ずる時代。

【本時】本有といふほどの意味。

【八品】涌出品より囑累品に至る本門八品。

【迹化他方】迹化は本化に對す、垂迹時の教化を受けたる諸菩薩が他方

の國土より來れるをいふ。

【今本時乃至世界なり】の一段は漢文にて四十五字ある故四十五字の法體と名くる重要文。

【二五】本門の本尊未だ顯れざるを明さんため四種三段（又は五重三段）を說く。

【前四味】醍醐味たる法華以前の四味卽ち前四時の教をいふ。

【本無今有】本來常住に非ざること。

【已今當】法華經の法師品に出づる已說今說當說の三說をいひ法華經以外の諸經を意味す。

【大通十六の時】大通智勝佛の十六王子が出家得道して法華經を覆誦せし時。

前、迹門の釋尊等の寺塔を建立すれども、本門壽量品の本尊、並びに四大菩薩をば、三國の王臣倶に未だ之を崇重せざる由之を申す。此事粗ぼ之を聞くと雖も、前代未聞の故に、耳目を驚動し、心意を迷惑す。請ふ重ねて之を說け、委細に之を聞かん。答へて曰く、『法華經』一部八卷二十八品、進んでは前四味、退いては『涅槃經』等の一代諸經、惣じて之を括るに、但だ一經なり。始め寂滅道場より、終り『般若經』に至るまでは序分なり。『無量義經』、『法華經』、『普賢經』の十卷は正宗なり。『涅槃經』等は流通分なり、正宗十卷の中に於て、亦序正流通あり、『無量義經』並びに『序品』は序分なり。『方便品』より、『分別功德品』の十九行の偈に至るまでの十五品半は正宗分なり。『分別功德品』の現在の四信より『普賢經』に至るまでの十一品半と、一卷は流通分なり。又法華經等の十卷に於ても二經あり。各序正流通を具するなり。『無量義經』と『序品』は序分なり。『方便品』より『人記品』に至るまでの八品は正宗分なり。『法師品』より『安樂行品』に至るまでの五品は流通分なり。其の教主を論ずれば、始成正覺の佛、本無今有の百界千如を說いて、已今當に超過せる、隨自意難信難解の正法なり。過去の結緣を尋ぬれば、大通十六の時佛果の下種を下し、進んでは『華嚴經』等、前四味を以て助緣と爲して、大通の種子を覺知せしむ。此は佛の本意にあらず。但だ毒發等の一分なり。二乘凡夫等は前四味を緣と爲し、漸々に法華に來至して種子を顯はし、開顯を遂ぐるの機是れなり。又在世に於て始めて八品を聞く人天等、或は一句一偈等を聞いて下種と爲し、或は熟し或は脫し、或は『普賢』

【毒發】涅槃經に出づる譬說により法華經の佛種を毒藥に譬へ、佛種の開發を毒藥の發生に譬へたるもの。

【三說】前記已今當の三說。

【覆相教】實相が覆はれたる教。

【前三教】化法の四教中最後の圓教を除けたるもの。

【種熟脫】下種、調熟、脫益の略。

【灰斷】灰身滅智を說く小乘經のこと。

【旃陀羅】(Caṇḍāla)の音譯。屠者のこと。

『涅槃』等に至り、或は正像末等に小權等を以て緣と爲して『法華』に入る。例せば在世の前四味の者の如し。又本門十四品の一經に、序正流通あり。『涌出品』の半を序分と爲し、『壽量品』と前後の二半、此を正宗と爲す。其餘は流通分なり。其の教主を論ずれば、始成正覺の釋尊にあらず。所說の法門も亦天地の如し。十界久遠の上に、國土世間既に顯はる。一念三千、殆ど竹膜を隔てたり。又迹門並びに前四味、『無量義經』、『涅槃經』等の三說は悉く隨他意の易信易解、本門は三說の外の難信難解、隨自意なり。又本門に於ても序正流通あり。過去大通佛の『法華經』より、乃至現在の『華嚴經』乃至迹門十四品『涅槃經』等の一代五十餘年の諸經、十方三世諸佛の微塵の經經は、皆『壽量』の序分なり。一品二半よりの外は、小乘教、邪教、未得道教、覆相教と名く。其の機を論ずれば、德薄垢重、幼稚貧窮孤露にして禽獸に同じ。爾前、迹門の圓教すら尙ほ佛因にあらず、況んや『大日經』等の諸の小乘經をや。何に況んや華嚴、眞言等の七宗等の、論師人師の宗をや。與へて之を論ずれば、前三教を出でず。奪つて之を云へば、藏通に同ず。設ひ法は甚深と稱すとも、未だ種熟脫を論ぜず、還つて灰斷に同ず、化の始終無しとは是れなり。譬へば王女たりと雖も、畜種を懷姙すれば、其子尙ほ旃陀羅に劣れるが如し。此等は且らく之を閣く。迹門十四品の正宗の八品は、一往之を見るに、二乘を以て正と爲し、菩薩、凡夫を以て傍と爲す。再往之を勘ふれば、凡夫正像末を以て正と爲す。正像末の三時の中にも、末法の始めを以て正が中の正と爲す。」

【二六】末法正機の證を擧げ、末法下種の要法は一念三千の珠を裹める題目五字なるを示す。

【久種】久遠下種。

【一品二半】本門の肝心たる壽量品とその前後二品の各半品をいふ。

【二七】末法正機と下種の要法たる妙法五字の付囑とを詳說す。

【二六】問うて曰く「其の證如何。」答へて曰く、「法師品」に云く、「而かも此經は、如來の現在すら猶ほ怨嫉多し、況んや滅度の後をや。」「寶塔品」に云く、「法をして久住せしめん。乃至、來る所の化佛、當に此の意を知るべし」等。「勸持」「安樂」等之を見るべし。迹門是の如し。本門を以て之を論ずれば、一向に末法の初めを以て正機と爲す。所謂る一往之を見る時は、久種を以て下種と爲し、大通前四味迹門を熟となし、本門に至つて等妙に登らしむるを脫と爲す。再往之を見れば、迹門には似ず。本門は序正流通倶に末法の始を以て詮と爲す。在世の本門と末法の初めとは、一同に純圓なり。但し彼は脫、此は種なり。彼は一品二半、此は但だ題目の五字なり。」

【二七】問うて曰く「其の證文如何。」答へて曰く、「涌出品」に云く「爾の時に他方の國土の、諸の來れる菩薩摩訶薩の、八恒河沙の數に過ぎたる大衆の中に於て、起立し合掌し、禮を作して佛に言さく、世尊、若し我等が佛の滅後に於て、此の娑婆世界に在つて勤加精進して、是の經典を護持し讀誦し、書寫し供養せんことを聽し給はば、當に此土に於て廣く之れを說き奉るべしと。爾の時に佛、諸の菩薩摩訶薩衆に告げ給はく、止みね、善男子、汝等が此經を護持せんことを須ゐじ」等云云。「法師」より已下五品の經文、前後水火なり。「寶塔品」の末に云く、「大音聲を以て普く四衆に告げ給はく、誰か能く此の娑婆國土に於て、廣く妙法華經を說かん者なる」等云云。設ひ教主一佛たりと雖も、之を奬勸し給はば藥王等の大菩薩、梵帝日月、四天等は重んずべき處に、多寶佛、十方の諸佛、客佛

【前三後三の六釋】文句に「止善男子」の止を止召の三義とし、各三釋を下したるをいふ。

【輔正記】道暹の作、文句及び記の註釋書。

として之を諫曉し給ふ。諸の菩薩等は此の慇懃の付屬を聞きて、「我不愛身命」の誓言を立つ。此等は偏へに佛意に叶はんが爲なり。而るに須臾の間に佛語相違して、過八恒沙の此の土の弘經を制止し給ふ。進退維れ谷まる、凡智に及ばず。天台智者大師、前三後三の六釋を作つて之を會し給へり、所詮迹化他方の大菩薩等に、我が内證の「壽量品」を以て授與すべからず。末法の初めは謗法の國、惡機なるが故に之を止め、地涌千界の大菩薩を召して「壽量品」の肝心たる「妙法蓮華經」の五字を以て、閻浮の衆生に授與せしめ給ふなり。又迹化の大衆は釋尊、初發心の弟子等に非ざるが故なり。天台大師の云く、「是れ我が弟子なり、應に我が法を弘むべし」。妙樂云く、「子父の法を弘む、世界の益あり」。「輔正記」に云く、「法是れ久成の法なるを以ての故に、久成の人に付す」等云云。又彌勒菩薩疑請して云く、經に云く、「我等、復佛の隨宜の所說、佛所出の言、未だ曾て虚妄ならずと信じ、佛の所知は皆悉く通達すと雖も、然も諸の新發意の菩薩、佛の滅後に於て、若し是の語を聞かば、或は信受せずして、而も法を破する罪業の因緣を起さん。唯然、世尊、願くは爲に解說して、我等が疑ひを除き給へ。及び未來世の諸の善男子、此事を聞き已つて、亦疑ひを生ぜじ。」等云云。文の意は、壽量の法門は滅後の爲に之を請ずるなり。「壽量品」に云く、「或は本心を失へる、或は失はざる者あり。乃至、心を失はざる者は、此の良藥の色香倶に好きを見て、即ち之を服するに、病盡く除こり愈えぬ。」等云云。久遠下種、大通結緣、乃至前四味、迹門等の一切の菩薩、二乘、人天等の、本門に於て得道する是れ

【一八】末法下種の要法の本化付嘱を再説し、要法とは妙法五字なるを詳説し、以て五字を本尊とする意を示す。

【名體宗用教】玄義十卷に出づ、法華經の題目を釋するにこの五重玄を以てす。

なり。經に云く『餘の心を失へる者は、其父の來れるを見て、亦歡喜し問訊して、病を治せんことを求むと雖も、然も其の藥を與ふるに、而も敢て服せず。所以は何ん、毒氣深く入つて本心を失へるが故に、此の好き色香ある藥に於て、美からずと謂へり。乃至、我今當に方便を設けて、此の藥を服せしむべし。乃至、是の好き良藥を、今留めて此に在く。汝取つて服すべし、差えじと憂ふること勿れと。是の教をなし已つて、復他國に至つて、使を遣はして還つて告ぐ。』等云云。『分別功德品』に云く『惡世末法の時』等云々。」

【一八】問うて曰く「此の經文の『遣使還告』は如何。」答へて曰く「四依なり。四依に四類あり。小乘の四依は、多分は正法の前の五百年に出現す。大乘の四依は、多分は正法の後の五百年に出現す。三に迹門の四依は、多分は像法一千年、少分は末法の初めなり。四に本門の四依は、地涌千界、末法の始めに必ず出現すべし。今の『遣使還告』は地涌なり。『是好良藥』とは『壽量品』の肝要たる名體宗用教の『南無妙法蓮華經』是れなり。此の良藥をば佛猶ほ迹化に授與し給はず。何に況んや他方をや。『神力品』に云く『爾の時に千世界微塵等の菩薩摩訶薩の地より涌出せる者、皆佛前に於て、一心に合掌し、尊顏を瞻仰して、佛に白して言さく、世尊、我等佛の滅後、世尊分身所在の國土、滅度の處に於て、當に廣く此經を說くべし。』等云云。天台云く『但だ下方の發誓のみを見る。』等云云。道暹云く『付囑とは、此經は唯下方涌出の菩薩に付す。何が故にか爾る。法是れ久成の法なるに由るが故に、久成の人に付す。』等云云。夫れ文殊師利菩薩は東方金色世界の不動佛の弟子、

【本法所持の人】本化の大弟子をいふ。

【兼帶】華嚴經は圓教に別教を兼ね般若經は圓教に通別二教を帶說し純圓眞實教に非る劣教なることを意味す。

【果分】因分に對する語、因行に依つて得たる大果。

觀音は西方無量壽佛の弟子、藥王菩薩は日月淨明德佛の弟子、普賢菩薩は寶威德淨王佛の弟子なり。一往釋尊の行化を扶けんが爲に、娑婆世界に來入す。又爾前、迹門の菩薩なり。本法所持の人に非ざれば、末法の弘法に足らざる者か。經に云く、「爾の時に世尊、乃至、一切の衆の前に、大神力を現じ給ふ。廣長舌を出して上梵世に至らしめ、乃至、十方世界の衆の寶樹の下の、師子座上の諸佛も、亦復是の如く、廣長舌を出し給ふ」等云云。夫れ顯密の二道、一切の大小乘經の中に、釋迦諸佛座を並べ、舌相梵天に至る文之れ無し。『阿彌陀經』の廣長舌相、三千を覆ふは有名無實なり。『般若經』の舌相三千光を放ちて般若を說くは、全く證明に非ず。此は皆兼帶の故に、久遠を覆相するが故なり。是の如く十神力を現じて、地涌の菩薩に妙法の五字を囑累して云く、經に云く、「爾の時に佛、上行等の菩薩大衆に告げ給はく、諸佛の神力は是の如く、無量無邊不可思議なり。若し我是の神力を以て、無量無邊百千萬億阿僧祇劫に於て囑累の爲の故に、此經の功德を說くとも、猶ほ盡すこと能はじ。要を以て之を言はば、如來の一切の所有の法、如來の一切の自在の神力、如來の一切の祕要の藏、如來の一切の甚深の事、皆此經に於て宣示顯說す」等云云。天台云く、「爾時佛告上行より下は、第三結要付囑なり」云云。傳敎云く、「又『神力品』に云く、要を以て之を言はば、如來の一切の所有の法、乃至、宣示顯說す 經文已上 明かに知んぬ、果分の一切の所有の法、果分の一切の自在の神力、果分の一切の祕要の藏、果分の一切の甚深の事、皆法華に於て宣示顯說するなり」等云云。此の十神力は、「妙法蓮

【捃拾遺囑】正意の付囑に對して簡べる語、神力品に於る本化の塔中別付囑、囑累品に於る迹化の塔外總付囑に對して之に漏れたる所化に對する付囑をいふ。

【一九】本化の大菩薩の末法下種を述べ、特に謗法者を主とすることを說く。

【閻浮提】(Jambudvipa)の音譯、須彌四洲の一にして南方に位する故、南閻浮提ともいふ、穢州と譯す。

華經」の五字を以て、上行、安立行、淨行、無邊行等の四大菩薩に授與し給ふなり。前の五神力は在世の爲、後の五神力は滅後の爲なり。爾りと雖も再往之を論ずれば、一向に滅後の爲なり。故に次下の文に云く、『佛滅度の後に、能く是經を持たんを以ての故に、諸佛皆歡喜して、無量の神力を現じ給ふ。』等云云。次下の「囑累品」に云く、『爾の時に釋迦牟尼佛、法座より起つて大神力を現じ給ふ。右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩で、乃至、今以て汝等に付屬す。』等云云。地涌の菩薩を以て頭として、迹化他方、乃至梵釋四天等に是經を囑累し給ふ。『十方より來れる諸の分身の佛、各本土に還り給ふ。乃至、多寶佛の塔還つて故の如くし給ふべし。』云云。「藥王品」已下、乃至「涅槃經」等は、地涌の菩薩去り了つて、迹化の衆、佗方の菩薩等の爲に、重ねて之を付屬し給ふ。捃拾遺囑是れなり。」

【一九】疑つて曰く、「正像二千年の間に、地涌千界閻浮提に出現して、此經を流通するか。」答へて曰く、「爾らず。」驚いて云く、「「法華經」竝びに本門は佛の滅後を以て本と爲して、先づ地涌千界に之を授與すと、何ぞ正像に出現して此經を弘通せざるや。」答へて云く、「宣べず。」重ねて問うて云く、「如何。」答ふ、「之を宣べず。」又重ねて問ふ、「如何。」答へて曰く、「之を宣ぶれば一切世間の諸人、威音王佛の末法の如く、又我が弟子の中にも、粗ぼ之を說かば、皆誹謗を爲すべし、默止せんのみ。」求めて云く、「說かずんば、汝慳貪に墮せん。」答へて曰く、「進退惟れ谷まれり、試みに粗ぼ之を說かん。「法師品」に云く、『況んや

【威音王佛】法華經の常不輕品に說かるる佛、

【一】末化の大菩薩正像に出でず末法に現はる所以を明し、隨つて本門の本尊並に本門の題目も正像に顯はれざることを明す。

【理具】但だ理として三千を具することをいふ、事行の對なり。

【事行】理具に對す、事相の上に立つ修行。

【幼稚】末法の衆生の劣機淺根なるを譬ふ、妙法五字を乳に譬へたるなり。

滅度の後をや。『壽量品』に云く『今留めて此に在く』。『分別功德品』に云く『悪世末法の時』。『藥王品』に云く『後の五百歳、閻浮提に於て、廣宣流布せん』。『涅槃經』に云く『譬へば七子あり、父母平等ならざるに非ざれども、然も病者に於て、心則ち偏へに重きが如し』等云云。已前の明鏡を以て佛意を推知するに、佛の出世は靈山八年の諸人の爲にあらず、正像末の人の爲なり。又正像二千年の人の爲にあらず、末法の始、予が如き者の爲なり。『然も病者に於て』と云ふは、滅後の法華經誹謗の者を指すなり。『今留めて此に在く』とは、『此の好き色香ある藥に於て美からず』と謂へる者を指すなり。

【一】地涌千界正像に出でざるは、正法一千年の間は小乘權大乘なり。機、時共に之れなし。四依の大士小權を以て緣と爲して、在世の下種之を脱せしむ。謗多くして熟益を破るべき故に、之を說かず。例せば在世の前四味の機根の如し。像法の中の末に觀音、藥王、南岳、天台等と示現し出現して、迹門を以て面と爲し、本門を以て裏と爲して、百界千如、一念三千、其の義を盡せり。但だ理具を論じて、事行の『南無妙法蓮華經』の五字、並びに本門の本尊、未だ廣く之を行ぜず。所詮圓機有つて、圓時なき故なり。今末法の初め、小を以て大を打ち、權を以て實を破し、東西共に之を失し天地顚倒せり。迹化の四依は隱れて現前せず、諸天其國を棄て、之を守護せず。此時地涌の菩薩、始めて世に出現し、但だ『妙法蓮華經』の五字を以て幼稚に服せしむ。『因謗墮惡、必由得益』とは是れなり。我が弟子之を惟へ。地涌千界は教主釋尊の初發心の弟子なり。寂滅道場にも來らず、雙

【因謗墮惡必由得益】謗法の罪によつて惡道に墮し、其を緣として成佛の益を得るをいふ。

【三佛】釋迦佛、多寶佛、分身諸佛をいふ。

【折伏】攝受の對、惡人惡法等をくぢき伏せしめること破邪に同じ。

【攝受】折伏の對、おさめ受け持つこと。

【二】本化大菩薩出現して本門の本尊を顯はす則近きにあるを示す。

【東方の鵝王】藥師如來のこと。

林最後にも訪はず、不孝の失之れ有り。迹門十四品にも來らず、本門の六品には座を立つ。但だ八品の間に來還せり。是の如き高貴の大菩薩、三佛に約束して之を受持す。末法の初めに出でざるべきか。當に知るべし、此の四菩薩折伏を現ずる時は、賢王と成つて愚王を誡責し、攝受を行ずる時は、僧と成つて正法を弘持す。」

【三】問うて曰く「佛の記文は云何。」答へて曰く、「『後の五百歲、閻浮提に於て廣宣流布せん。』天台大師記して曰く『後の五百歲、遠く妙道に沾ほはん。』妙樂記して曰く、『末法の初め、冥利無きにあらず。』傳教大師云く『正像稍過ぎ已つて、末法太だ近きにあり。』等云云。『末法太だ近きにあり』の釋は、我が時は正時に非ずといふ意なり。傳教大師日本にして、末法の初めを記して云く『代を語れば像の終り、末の初め、地を尋ぬれば唐の東、羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生、鬪諍の時なり。經に云く、猶多怨嫉、況滅度後と、此の言良に以あるなり。』と。此の釋に『鬪諍の時』と云云。今の自界叛逆、西海侵逼の二難を指すなり。此時地涌千界出現して、本門の釋尊の脇士と爲り、一閻浮提第一の本尊此國に立つべし。月支震旦、未だ此の本尊ましまさず。日本國の上宮、四天王寺を建立す。未だ時來らず、阿彌陀他方を以て本尊と爲す。聖武天皇東大寺を建立し給ふにも、『華嚴經』の教主なり。未だ『法華經』の實義を顯はさず、傳教大師粗ぼ『法華經』の實義を顯示す。然りと雖も時未だ來らざるの故に、東方の鵝王を建立して、本門の四菩薩を顯はさず。所詮地涌千界の爲に此を讓り與へ給ふ故なり。此の菩薩佛敕を蒙りて、近く大地の下に在り。

【先兆】涌出品に於る大地震動の如く大地震等ありて後本化の出現となることを意味す。

【三】自ら本化大菩薩の出現として末法の衆生に一念三千の珠を裹める妙法五字の袋を懸けしむる佛の大慈悲を實行すること即ち本門の本尊を顯はすことを結論す。

【世法】世間法のこと。

正像に未だ出現せず、末法にも又出で來らずば大妄語の大士なり。三佛の未來記も亦泡沫に同じ。此を以て之を惟ふに、正像になき大地震大彗星等を出來する、此等は金翅鳥、修羅、龍神等の動變にあらず、偏へに四大菩薩を出現せしむべき先兆なるか。天台云く「雨の猛きを見て龍の大なるを知り、花の盛なるを見て池の深きを知る。」等云々。妙樂云く、「智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る。」等云云。

【三】天晴れぬれば地明かなり、法華を識る者は世法を得べきか。一念三千を識らざる者には、佛大慈悲を起し、妙法五字の袋の内に此の珠を裹み、末代幼稚の頸に懸けさしめ給ふ。四大菩薩の此の人を守護し給はんこと、太公周公の成王を攝扶し、四皓が惠帝に侍奉せしに異らざる者あり。」

文永十年癸酉卯月二十五日　　日蓮　註之

【一】縮遺七四七頁、文永九年（五十一歳）佐渡流罪中の作。『此文の心は日蓮によりて日本國の有無はあるべし云云〔三〕とある如く末法大導師の自覺を披瀝せるものにして、本尊鈔に亞ぐ若くは之に並ぶ重要書なり。

【二】一篇の論旨主師親三德を以て終始す、玆には總じて三德と三道とを擧ぐ。

【儒外內】儒教と外道（印度の）と佛教となり。

【二】儒家（今は老莊をも合む）の古聖賢を擧ぐ。以下五重相對の第一內外相對中の儒佛對也。

【公胤】報恩鈔には弘演とす、正しくは弘演なり。

【三】儒家の聖典を擧げ其の所詮を明す。

開目鈔上

【一】夫れ一切衆生の尊敬すべき者三つあり、所謂る主師親これなり。又習學すべきもの三つあり、所謂る儒外內これなり。

【二】儒家には三皇五帝三王、此等を天尊と號す、諸臣の頭身、萬民の橋梁なり。三皇以前は父を知らず、人皆禽獸に同ず。五帝以後は父母を辨へて孝を致す。所謂る重華は頑闐しき父を敬ひ、沛公は帝となつて太公を拜す。武王は西伯を木像に造り、丁蘭は母の形を刻めり。此等は孝の手本なり。比干は殷の世の滅ぶべきを見て、強ひて帝を諫め、頭を刎ねらる。公胤といひし者は、懿公の肝を取りて我が腹を裂き、肝を入れて死しぬ。此等は忠の手本なり。尹壽は堯王の師、務成は舜王の師、太公望は文王の師、老子は孔子の師なり。此等を四聖と號す。天尊頭を傾け、萬民掌を合はす。

【三】此等の聖人に三墳〔三〕五典〔三〕三史〔三〕等の三千餘卷の書あり。其の所詮は三玄を出でず。三玄とは、一には有の玄、周公等此を立つ。二には無の玄、老子等。三には亦有亦無等、莊子が玄これなり。玄とは黑なり。父母未生以前を尋ぬれば、或は元氣よりして成り、或は貴賤苦樂是非得失等は皆自然等、云云。是の如く巧みに立つといへども、未だ過去未來を一分も知らず。玄とは黑なり、幽なり、かるが故に玄といふ。但し現在ばかり知れる

【四】儒典を佛教の初門とし、聖賢を菩薩の垂迹とし以て儒教を開顯す。
【佛圖】佛陀(Buddha)の異音譯。
【眞丹】震旦に同じ。
【五】外道の古仙及び聖典を擧げ其の所詮を述ぶ。以下內外相對中の外佛對。
【摩醯首羅天】大自在天(Maheśvara)の音譯。
【毘紐天】毘溼拏天(Viṣṇu)の異音譯。

に似たり、現在に於て仁義を制して、身を守り、國を安んず。此に相違すれば族を亡ぼし家を滅す等いふ。此等の賢聖の人人は聖人なりといへども、過去を知らざること、凡夫の背を見ず、未來を鑑みざること、盲人の前を見ざるが如し、但し現在に家を治め孝を致し、堅く五常を行ずれば、傍輩も敬ひ、名も國に聞え、賢王も之を召して、或は臣となし、或は師と頼み、或は位を讓り、天も來つて守り仕ふ。所謂る周の武王には五老來り仕へ、後漢の光武には二十八宿來つて二十八將となりし是れなり。

【四】然りと雖も過去未來を知らざれば、父母主君師匠の後世をも助けず、不知恩の者なり、眞の賢聖にあらず。孔子が「此の土に賢聖なし、西方に佛圖といふものあり、此れ聖人なり」といひて、外典を佛法の初門となせし是れなり。禮樂等を教へて內典わたらば、戒定慧を知り易からせんが爲、王臣を教へて尊卑を定め、父母を教へて孝行を知らしめ、師匠を教へて歸依を知らしむ。妙樂大師云く、「佛教の流化實に茲に賴る、禮樂前に驅せて眞道後に啓く」等云云。天台云く、「金光明經に云く、一切世間所有の善論、皆此經に因る。若し深く世法を識れば、卽ち是れ佛法なり」等云云。「止觀」に曰く、「我三聖を遣はして、彼の眞丹を化す」等云云。「弘決」に云く、「清淨法行經に云く、月光菩薩彼に顏回と稱し、光淨菩薩彼に仲尼と稱し、迦葉菩薩彼に老子と稱す。天竺此の震旦を指して彼と爲す」等云云。

【五】二には月氏の外道、三目八臂の摩醯首羅天、毘紐天、此の二天をば一切衆生の慈父

【迦毘羅】(Kapila)數論派の開祖。
【漚樓僧佉】勝論派の開祖(Ulūka)の異音譯。
【勒娑婆】苦行仙
【四韋陀】四吠陀の異音譯。
【六師外道】釋尊當時中印度に於て最も勢力ありし教派。
【非想天】天上界中の最高天。
【色無色】色界定及び無色界定にて禪定中の最高處。
【屈歩蟲】尺とり蟲。
【五處】五官。
【六八】外道を内道に入る最要とし、以て外道を開顯す

悲母、又天尊主君と號す。迦毘羅、漚樓僧佉、勒娑婆、此の三人をば三仙と名く。此等は佛前八百年以前以後の仙人なり。此の三仙の所説を『四韋陀』と號す、六萬藏あり。乃至佛出世に當つて、六師外道、此の外經を習傳して五天竺の王師となる。支流九十五六等にもなれり。一一に流流多くして、我慢の幢高きこと非想天にも過ぎ、執心の心の堅きこと金石にも超えたり。其の見の深きこと巧みなるさま、儒家には似るべくもなし。或は過去二生三生、乃至七生、八萬劫を照見し、又兼て未來八萬劫を知る。其の所説の法門の極理、或は因中有果、或は因中無果、或は因中亦有果亦無果等云云。此れ外道の極理なり。所謂る善き外道は五戒十善戒等を持つて有漏の禪定を修し、上色無色を極め、上界を涅槃と立て、屈歩蟲の如く責め上れども、非想天より返りて三惡道に墮つ。一人として天に留まる者なし。然れども天を極むる者は永く歸らずと思へり。各各自師の義を受けて、堅く執する故に、或は冬寒に一日に三度恒河に浴し、或は髮を拔き、或は巖に身を投げ、或は身を火にあぶり、或は五處を燒く、或は裸形、或は馬を多く殺せば福を得、或は草木を燒き、或は一切の木を禮す。此等の邪義其の數を知らず。師を恭敬する事、諸天の帝釋を敬ひ、諸臣の皇帝を拜するが如し。

【六八】然れども外道の法九十五種、善惡に付けて、一人も生死を離れず。善師に仕へては二生三生等に惡道に墮ち、惡師に仕へては順次生に惡道に墮つ。外道の所詮は内道に入る、即最要なり。或る外道云く、「千年以後、佛出世す。」等云云。或る外道云く、「百年以後、佛

出世す』等云云。『大涅槃經』に云はく、『一切世間の外道の經書は皆是れ佛說にして、外道の說に非ず』等云云。『法華經』に云はく、『衆に三毒ありと示し、又邪見の相を現す。我が弟子是の如く方便して、衆生を度す』等云云。

【七】 三には大覺世尊は此れ一切衆生の大導師、大眼目、大橋梁、大船師、大福田等なり。外典外道の四聖三仙、其名は聖なりと雖も實には三惑未斷の凡夫、其の名は賢なりと雖も實には因果を辨へざること嬰兒の如し。彼を船として生死の大海を渡るべしや、彼を橋として六道の巷越えがたし。我が大師は變易猶ほ渡り給へり。況や分段の生死をや。元品の無明の根本猶ほ傾け給へり。況や見思枝葉の麤惑をや。

【八】 此の佛陀は三十成道より八十御入滅に至るまで、五十餘年が間、一代の聖教を說き給へり。一字一句皆眞言なり、一文一偈妄語にあらず。外典外道の中の聖賢の言すら、いふ事誤りなし、言と心と相符へり。況や佛陀は無量曠劫よりの不妄語の人、されば一代五十餘年の說教は、外典外道に對すれば大乘なり、大人の實語なるべし。初成道の始より、涅槃の夕に至るまで、說く處の法、皆眞實なり。

【九】 但し佛教に入つて五十餘年の經經、八萬法藏を勘へたるに、小乘あり、大乘あり、權經あり、實經あり、顯教、密教、輭語、麤語、實語、妄語、正見、邪見等の種種の差別あり。但『法華經』ばかり教主釋尊の正言なり、三世十方の諸佛の眞言なり。大覺世尊は四十餘年の年限を指して、其の內の恒沙の諸經を、『未顯眞實』八年の法華は『要當說眞實』と定

【三毒】貪欲、瞋恚、愚癡を三毒煩惱といふ。

【七】教主の勝劣によつて內外道即ち佛教と儒外二道との勝劣を判ず。以下內外對判也。

【三惑未斷】見思、塵沙、無明を未だ斷盡せざること。

【八】總じて佛教の勝れたるを判ず

【九】佛教中に於て特に法華經の超勝なるを總說す。以下五重相對の第二大小相對第三實權相對に入る。

【一〇】法華經の二箇の大事を擧げ以て法華超勝の細說に入る、初に一念三千の名目を出す
【文の底】文の意といふ意味、之より文上文底といふ重要教判生ず。
【二】一念三千は天台大師獨特の創見なるを說く。
【十方唯有一佛】十方世界に唯だ釋尊一佛のみあり。
【一方有佛】一方に多佛ありの意。
【一切有情悉有佛性】一切衆生悉有佛性に同じ『涅槃經』に出づ、一切衆生が悉く佛性を有する意。
【說かざらめ】說かないのは未だ可なりとしてもの意
【例せば】以下は自宗に盜み入れたることに就ての例を出せるなり。

め給ひしかば、多寶佛大地より出現して、『皆是眞實』と證明す。分身の諸佛來集して、長舌を梵天に付く。此言赫赫たり、明明たり、晴天の日よりも明かに、夜中の滿月の如し。仰いで信ぜよ、伏して懷ふべし。

【一〇】但し此の經に二箇の大事あり。倶舍宗、成實宗、律宗、法相宗、三論宗等は名をも知らず、華嚴宗と眞言宗との二宗は、偸かに盜んで自宗の骨目とせり。一念三千の法門は、但『法華經』の本門『壽量品』の文の底に沈めたり。龍樹天親知りて而も未だ弘め給はず、但我が天台智者のみこれを懷けり。

【二】一念三千は十界互具より事始まれり。法相と三論とは八界を立てて十界を知らず、況や互具を知るべしや。倶舍、成實、律宗等は『阿含經』によれり。六界を明らめて、四界を知らず、十方唯有一佛と云つて、一方有佛だにも明かさず。一切有情悉有佛性とこそ說かざらめ、一人の佛性猶ほ許さず。而るを律宗成實宗等の十方有佛有佛性なんど申すは、佛滅後の人師等の大乘の義を自宗に盜み入れたるなるべし。例せば外典外道等は、佛前の外道は執見淺し、佛後の外道は佛教を聞き見て、自宗の非を知り、巧みの心出現して、佛教を盜み取り自宗に入れて、邪見尤も深し。附佛教、學佛法成等是れなり。外典も亦斯の如し。漢土に佛法未だ渡らざりし時の儒家道家は、悠悠として嬰兒の如くはかなかりしが、後漢以後に釋教渡りて對論の後、釋教漸く流布する程に、釋教の僧侶破戒の故に、或は還俗して家に還り、或は俗に心を合せ、儒道の内に釋教を盜み入れたり。『止觀』の第

【弘】弘決の略。
【押高】高きを押すこと。
【二教の概】概見といふ程の意。
【八萬十二】八萬法藏十二部經の意味の略にて佛經のこと。
【五千二篇】老子道德經のこと、上下二篇五千言ある故なり。
【南三北七】江南三師江北七師の判教者を指す。
【玄奘】唐朝に入竺して戒賢より法相宗を直傳す。
【慈恩】玄奘の弟子窺基、支那法相宗の大成者。
【超過の心】勝れたりと思ふ心。
【澄觀】賢首大師法藏の弟子。

五に云く「今世多く惡魔の比丘有りて戒を退き家に還り、駈策を懼畏して更に道士に越濟し、復名利を邀めて、莊老を誇談し、佛法の義を以て、偸んで邪典に安き、高きを押して下きに就け、尊を摧いて卑に入れ、概して平等ならしむ。」云云。『弘』に云く、「比丘の身と成つて佛法を破滅す、若くは戒を退き家に還るは、衞の元嵩等が如し、即ち在家の身を以て佛法を破壞す。此の人正教を偸竊して、邪典に助添す。押高等とは、道士の心を以て二教の概と爲し、邪正をして等しからしむ、義是の理なし、曾て佛法に入つて正を偸んで邪を助け、八萬十二の高きを押して、五千二篇の下れるに就け、用つて彼の典の邪鄙の教へを釋するを摧尊入卑と名づく。」等云云。此の釋を見るべし、次ぎ上の心なり。佛教又斯の如し。後漢の永平に、漢土に佛法渡りて、邪典破れて、內典立つ。內典に南三北七の異執起りて、蘭菊なりしかども、陳隋の智者大師に打ち破られて、佛法再び群類を救ふ。

其の後法相宗、眞言宗、天竺より渡り、華嚴宗又出來せり。此等の宗宗の中に、法相宗は一向天台宗に敵を成す宗にて法門水火なり。然れども玄奘三藏、慈恩大師、委細に天台の御釋を見ける程に、自宗の邪見飜へるかの故に、自宗をば棄てれども、其の心天台に歸伏すと見えたり。華嚴宗と眞言宗とは、本は權經權宗なり。善無畏三藏、金剛智三藏、天台の一念三千の義を盜みとりて自宗の肝心とし、其の上に印と眞言とを加へて、超過の心を起す。其の仔細を知らぬ學者等は、天竺より大日經に一念三千の法門ありけりと打ち思ふ。華嚴宗は澄觀が時『華嚴經』の『心如工畫師』の文に、天台の一念三千の法門を偸み入

【二】天台宗が一念三千の重寶を失ひたるを難ず。

【三】爾前と法華（前四十餘年と後八年）の相違を擧げ、先づ二乘作佛を說く。

【然もや】其うであらうか、然るならんといふ意味。

れたり、人是を知らず。日本我朝には華嚴等の六宗天台眞言以前に渡りけり。華嚴、三論法相、諍論水火なりけり。傳教大師此國に出でて、六宗の邪見を破るのみならず、眞言宗が天台の法華經の理を盜み取つて自宗の極とする事現はれ畢んぬ。傳教大師宗宗の人師の異執を捨てて、專ら經文を前として責めさせ給ひしかば、六宗の高德八人、十二人、十四人、三百餘人竝びに、弘法大師等責め落されて日本國一人もなく天台宗に歸伏し、南都東寺、日本一州の山寺、皆叡山の末寺となりぬ。又漢土の諸宗の元祖の天台に歸伏して謗法の失を免れたる事も露はれぬ。

【二】又其の後漸く世衰へ、人の智淺くなる程に、天台の深義は習ひ失ひぬ。佗宗の執心は強盛になるほどに、漸く六宗七宗に天台宗落されて、弱り往くかの故に、結句は六宗、七宗等にも及ばぬ言ふにかひなき禪宗 淨土宗に落されて、始めは檀那漸く彼の邪宗にうつる。結句は天台宗の碩德と仰がるる人人皆おち行きて、彼の邪宗を助く。然る程に六宗八宗の田畠所領皆倒され、正法失せ果てぬ。天照大神、正八幡、山王等諸の守護の諸大善神も、法味を嘗めざるか、國中を去り給ふかの故に、惡鬼便りを得て國已に破れなんとす。

【三】此に予愚見を以て前四十餘年と後八年との相違を勘へ見るに、其の相違多しと雖も、先づ世間の學者も許し、我が身にも然もやと打ち覺ゆる事は、二乘作佛、久遠實成なるべし。『法華經』の現文を拜見するに、舍利弗は華光如來、迦葉は光明如來、須菩提は名相如來、迦旃延は閻浮那提金光如來、目連は多摩羅跋栴檀香佛、富樓那は法明如來、阿難は山

【五百七百】五百人及び七百人の阿羅漢。

【學無學】無學は阿羅漢(Arhan)の譯、學は未だ學地即ち修行中の者。

【一四】爾前の諸經に二乘の得道なきことを述ぶ。

【爾前】法華以前

海慧自在通王佛、羅睺羅は蹈七寶華如來、五百七百は普明如來、學無學二千人は寶相如來、摩訶波闍波提比丘尼、耶輸陀羅比丘尼等は一切衆生喜見如來、具足千萬光相如來等なり。此等の人人は、「法華經」を拜見し奉るには尊きやうなれども、爾前の經經を披見の時は興醒むる事ども多し。其の故は佛世尊は實語の人なり、故に聖人大人と號す。外典外道の中の賢人聖人天仙なんど申すは、實語に付けたる名なるべし。此等の人人に勝れて第一なる故に、世尊をば大人とは申すぞかし。此の大人、「唯以一大事因緣故出現於世」と名告らせ給ひて「未顯眞實」「世尊法久後、要當説眞實」「正直捨方便」等云云。多寶佛證明を加へ、分身舌を出す等は、舍利弗が未來の華光如來、迦葉が光明如來等の説をば、誰の人か疑網をなすべき。

【一四】而れども爾前の諸經も又佛陀の實語なり。「大方廣佛華嚴經」に云く、「如來の智慧大藥王樹は、唯二處に於て生長の利益を作す能はず。所謂る二乘の無爲廣大の深坑に墮つると、及び善根を壞る非器の衆生の大邪見貪愛の水に溺るるとなり」等云云。此の經文の心は、雪山に大樹あり、無盡根と名く。此を大藥王樹と號す。閻浮提の諸木の中の大王なり。此の木、高さは十六萬八千由旬なり。一閻浮提の一切の草木は此の木の根ざし、枝葉華果の次第に隨つて、華果成るなるべし。此の木をば佛の佛性に譬へたり、一切衆生をば、一切の草木に喩ふ。但し此の大樹は火坑と水輪の中に生長せず。二乘の心中をば火坑に喩へ、一闡提人の心中をば水輪に喩へたり。此の二類は永く佛になるべからずと申す經文なり。

『大集經』に云く、『二種の人あり、必ず死して活せず、畢竟じて恩を知り恩を報ずること能はず。一には聲聞、二には緣覺なり。譬へば人ありて深坑に墮墜し、是の人自利し他を利すること能はざるが如く、聲聞緣覺も亦復是の如し。解脫の坑に墮して、自利し及び他を利すること能はず』等云云。外典三千餘卷の所詮に二つあり。所謂る孝と忠となり。忠も又孝の家より出でたり。孝と申すは高なり、天高けれども孝よりは高からず。又孝とは厚なり、地厚けれども孝よりは厚からず。聖賢の二類は孝の家より出でたり。何に況んや佛法を學せん人、知恩報恩なかるべしや。佛弟子は必ず四恩を知つて、知恩報恩をいたすべし。其の上舍利弗迦葉等の二乘は、二百五十戒、三千の威儀を持ち整へ、惣じて味淨無漏の三靜慮『阿含經』を究め、三界の見思を盡せり、知恩報恩の人の手本なるべし。然るを不知恩の人なりと世尊定め給ひぬ。其故は、父母の家を出て出家の身となるは、必ず父母を救はんが爲なり。二乘は自身は解脫と思へども、利他の行闕けぬ。設ひ分分の利他ありと雖も、父母等を永不成佛の道に入るれば、却りて不知恩の者となる。『維摩經』に云く、『維摩詰又文殊師利に問ふ、何等か如來の種と爲す。答へて曰く、一切塵勞の疇は如來の種と爲る。五無間具するを以てすと雖も、猶ほ能く此の大道意を發す』等云云。又云く『譬へば族姓の子、高原陸土には青蓮芙蓉の衛華を生せず、卑濕汚田に乃ち此の華を生ずるが如し』等云云。又云く『已に阿羅漢を得て應眞と爲る者は、終に復道意を起して、佛法を具すること能はざるなり。根敗の士の其の五樂に於て、復利すること能はざるが如

【外典三千餘卷】以下の一段は報恩を高調し以て爾前諸經の失を發す。
【四恩】父母の恩、國王の恩、衆生の恩、三寶の恩。
【味淨無漏の三靜慮】味禪、淨禪、無漏禪のこと、修禪の階段なり。
【見思】見惑思惑
【塵勞の疇】煩惱の衆生といふに同じ、塵勞は煩惱のこと。
【五無間】無間地獄に墮つべき五逆罪をいふ。
【應眞】阿羅漢の譯。
【根敗】官能に缺陷あること。

【三菩提心】正等覺(Sambodhi)を求むる心。

【淨名經】維摩經の譯。

し。」等云云。文の心は、貪瞋癡等の三毒は佛の種となるべし、殺父等の五逆罪は佛種となるべし。高原の陸土には青蓮華生ずべし、二乘は佛になるべからず。言ふ心は二乘の諸善と凡夫の惡と相對するに、凡夫の惡は佛になるとも、二乘の善は佛にならじとなり。諸の小乘經には、惡を誡め善を讃む。此經には二乘の善を譏り、凡夫の惡を責めたり、却つて佛經とも覺えず、外道の法門のやうなれども、詮ずる處は二乘の永不成佛を強く定めさせ給ふにや。『方等陀羅尼經』に云く、『文殊、舍利弗に語らく、猶ほ枯樹の如く更に華を生ずるや否や。亦山水の如く、本處に還るや否や。折れたる石、還つて合ふや否や、焦れる種芽を生ずるや否や。舍利弗の言く、否なり。文殊の言く、若し得べからずんば、何ぞ我に菩提の記を得るを問うて、心に歡喜を生ずるや。』等云云。文の心は、枯れたる木華咲かず、山水山に還らず、破れたる石合はず、焦れる種生ひず。二乘亦斯の如し、佛種を焦れり等となん。『大品般若經』に云く、『諸の天子、今未だ三菩提心を發さざる者、應に發すべし。若し聲聞の正位に入れば、是の人能く三菩提心を發すこと能はざるなり。何を以ての故に、生死の爲に障隔を作す故に。』等云云。文の心は、二乘は菩提心を起さざれば、我隨喜せじ、諸天は菩提心を發せば、我隨喜せん。『首楞嚴經』に云く、『五逆罪の人は、是れ首楞嚴三昧を聞いて、阿耨菩提心を發して、還つて作佛することを得ん。世尊、漏盡の阿羅漢は、猶ほ破器の如く、永く是の三昧を受くるに堪忍せず。』等云云。『淨名經』に云く、『其れ汝に施す者は福田と名けず、汝を供養せん者は三惡道に墮す。』等云云。文の心

【一五】法華の二乘作佛を驚歎す。

【あらませしか】古來種種の解釋あつて意味分明ならず、今は前後の文脈により「あつたとしても」といふ意味に解釋せば可ならんかと思ふ。

は、迦葉、舍利弗等の聖僧を供養せん人天等は、必ず三惡道に墮つべしとなり。此等の聖僧は佛陀を除き奉りては、人天の眼目、一切衆生の導師とこそ思ひしに、幾許の人天大會の中にして斯う度度仰せられしは、本意なかりし事なり。只詮ずる所は、我が御弟子を責め殺さんとにや。此の外牛驢の二乳、瓦器金器螢火日光等の無量の譬を取つて、二乘を呵嘖せさせ給ひき。一言二言ならず、一日二日ならず、一月二月ならず、一年二年ならず、一經二經ならず、四十餘年が間無量無邊の經經に、無量の大會の諸人に對して、一言も許し給ふ事もなく、謗り給ひしかば、世尊は不妄語なりと、我も知る人も知る天も知る地も知る、一人二人ならず百千萬人、三界の諸天、龍神、阿修羅、五天、四洲、六欲、色、無色、十方世界より雲集せる人天、二乘、大菩薩等、皆これを知る。又皆是を聽く。各各國國へ還りて娑婆世界の釋尊の說法を彼彼の國國にして、一一に語るに、十方無邊の世界の一切衆生一人もなく、迦葉、舍利弗等は永不成佛の者、供養しては惡しかりぬべしと知りぬ。

【一五】而るを後八年の『法華經』に忽ちに悔い還して二乘作佛すべしと佛陀說かせ給んに、人天、大會信仰を爲すべしや。用ゆべからざる上、先後の經經に疑網をなし、五十餘年の說教皆虛妄の說となりなん。されば『四十餘年未顯眞實』等の經文はあらませしか、天魔の佛陀と現じて後八年の經をば說かせ給ふかと、疑網する處に、實にしげに劫國名號と申して、二乘成佛の國を定め、劫を記し、所化の弟子なんどを定めさせ給へば、教主釋尊の

御語已に二言になりぬ。自語相違と申すは是なり。外道が佛陀を大妄語の者と笑ひしこと是なり。人天大會興醒めてありし程に、爾の時に東方寶淨世界の多寶如來、高さ五百由旬、廣さ二百五十由旬の七寶塔に乘じて、教主釋尊の人天大會に、自語相違を責められて、左宣べ右う宣べ、種種に宣べさせ給ひしかども、不審猶ほ晴るべしとも見えず、持て扱ひて在せし時、佛前に大地より涌現して虚空に上り給ふ。例せば暗夜に滿月の東山より出づるが如し。七寶の塔、大虚に懸らせ給ひて大地にも付ず、大虚にも付かせ給はず、天中に懸りて、寶塔の中より梵音聲を出して證明して曰く、「爾時に寶塔の中より大音聲を出して歎めて言はく、善哉善哉、釋迦牟尼世尊、能く平等大慧教菩薩法、佛所護念の妙法華經を以て大衆の爲に説き給ふ。是の如し是の如し。釋迦牟尼世尊所説の如きは皆是れ眞實なり。」等云云。又云く、「爾の時に世尊、文殊師利等の無量百千萬億舊住娑婆世界の菩薩、乃至人非人等、一切の衆の前に於て、大神力を現じ給ふ。廣長舌を出して上梵世に至らしめ、一切の毛孔より、乃至十方世界衆の寶樹の下の師子の座の上の諸佛も、亦復是の如く、廣長舌を出し、無量の光を放ち給ふ。」等云云。又云く、「十方より來り給へる諸の分身の佛をして各本土に還らしめ、乃至多寶佛の塔還つて故の如くし給ふべし。」等云云。

【一六】大覺世尊初成道の時は、諸佛十方に現じて釋尊を慰喩し給ふ上、諸の大菩薩を遣はしき。『般若經』の御時は、釋尊長舌を三千に覆ひ、千佛十方に現じ給ひ、『金光明經』には、四方に四佛現せり。『阿彌陀經』には、六方の諸佛、舌を三千に覆ふ。『大集經』には、

【廣長舌】妄語等の語過なき相とせらる。

【一六】法華と爾前との説相の相違を述べて勝劣を判じ二乘作佛が法華獨特なるを證す。

【一七】二乘作用を結し、日蓮聖人が法華を宗とする立場を明にする伏線とす。

十方の諸佛菩薩、大寶坊に集れり。此等を『法華經』に引合せて勘ふるに、黄石と黄金と、白雲と白山と、白冰と銀鏡と、黑色と青色とをば、翳眼の者、眇目の者、一眼の者、邪眼の者は見違へつべし。『華嚴經』には先後の經なければ、佛語相違なし、何に就けてか大疑出で來べき。『大集經』、『大品經』、『金光明經』、『阿彌陀經』等は、諸の小乘經の二乘を彈呵せんが爲に、十方に淨土を說き、凡夫菩薩を欣慕せしめ、二乘を煩はす。小乘經と諸大乘經と一分の相違ある故に或は十方に佛現じ給ひ、或は十方より大菩薩を遣はし、或は十方世界にも此經を說く由を示し、或は十方より諸佛集り給ふ。或は釋尊舌を三千に覆ひ、或は諸佛の舌を出す由を說かせ給ふ。此れ偏に諸の小乘經の十方世界唯有一佛と說かせ給ひし思ひを破るなるべし。『法華經』の如くに、先後の諸大乘經と相違出來して、舍利弗等の諸の聲聞、大菩薩、人天等に『將非魔作佛』と思はれさせ給ふ大事にはあらず。而るを華嚴、法相、三論、眞言、念佛等の翳眼の輩、彼彼の經經と『法華經』とは同じと打思へるは、拙き眼なるべし。

【一七】但し在世は四十餘年を捨てて『法華經』に付き候ふ者もやありけん。佛滅後に此經文を開見して、信受せんこと難かるべし。先づ一つには爾前の經經は多言なり、『法華經』は一言なり。爾前の經經は多經なり。此經は一經なり、彼彼の經經は多年なり、此經は八年なり。佛は大妄語の人、永く信ずべからず。不信の上に信を立てば、爾前の經經は、信ずる事もありなん、『法華經』は永く信ずべからず。當世も『法華經』をば、皆信じたるやう

【一八】二大特色の一たる久遠實成に入る、初に諸經に久遠實成を祕するを述ぶ。
【住劫第九の減】住劫は四劫（成、住、壞、空）の第二期、世界の成立及び滅亡等の變遷に關する一種の見方に關して、釋尊出世の時期は之に當ると見るなり。
【實報華王】華嚴經の說相。
【十玄六相】以下華嚴經の敎理。

なれども、法華經にてはなきなり。其の故は、『法華經』と『大日經』と、『法華經』と『華嚴經』と、『法華經』と『阿彌陀經』と、一なるやうを說く人をば悅んで歸依し、別別なるなんど申す人をば用ゐず。たとひ用ゆれども、本意なき事と思へり。日蓮云はく、日本に佛法渡りて已に七百餘年、但だ傳敎大師一人ばかり法華經を讀めりと申すをば、諸人是を用ゐず。但し『法華經』に云はく、「若し須彌を接て他方の無數の佛土に擲げ置かんも、亦未だ爲れ難しとせず。乃至、若し佛滅後の惡世中に於て、能く此經を說かん、是れ則ち爲れ難し。」等云云。日蓮が强義、經文には符合せり。法華經の流通たる『涅槃經』に、「末代濁世に謗法の者は十方の地の如し、正法の者は爪上の土の如しと說かれて候は、如何がし候べき。日本の諸人は爪上の土か、日蓮は十方の土か、能く能く思惟あるべし。賢王の世には道理かつべし。愚主の世には非道先をすべし。聖人の世には『法華經』の實義顯はるべし等と心得べし。此の法門は迹門と爾前と相對して、爾前の强きやうに覺ゆ。もし爾前强るならば、舍利弗等の諸の二乘は永不成佛の者なるべし。如何が嘆かせ給ふらん。

【一八】二には敎主釋尊は住劫第九の減、人壽百歲の時、師子頰王には孫、淨飯王には嫡子、童子悉達太子、一切義成就菩薩是れなり。御年十九の御出家、三十成道の世尊、始め寂滅道場にして實報華王の儀式を示現して、十玄六相、法界圓融、頓極微妙の大法を說き給ひ、十方の諸佛も顯現し、一切の菩薩も雲集せり。土といひ、機といひ、諸佛といひ、始といひ、何事に就けてか大法を祕し給ふべき。されば經文には、「自在力を顯現して、爲めに圓

【心佛及び衆生の文】心佛及衆生是三無差別の文、心如工畫師の文と共に華嚴經第十卷（六十華嚴）にあり

【海印三昧】華嚴の説時に佛が入られし三昧即ち定にして、天地萬象悉く大海面に印映する如く、佛の定心に諸法炳然として現はるることに名く。

【歷劫修行】發心より成佛までの間に多劫の修行を歷るをいふ。

【略開三、廣開三】略して開三（三乘を開く）顯一し、廣く開三顯一すること、法華經方便品にあり。

滿經を説く』等云云。一部六十卷は、一字一點もなく圓滿經なり。譬へば如意寶珠は一珠も無量珠も共に同じ、一珠も萬寶を盡して雨らし、萬珠も萬寶を盡すが如し。『華嚴經』は一字も萬字も但だ同じ事なるべし。心佛及び衆生の文は、華嚴宗の肝心なるのみならず、法相、三論、眞言、天台の肝要とこそ申し候へ。此等程の甚じき御經に何事をか隱すべきなれども、二乘闡提不成佛と説かれしは、珠の疵と見ゆる上、三處まで始成正覺と名告らせ給ひて、久遠實成の『壽量品』を説き隱させ給ひき。珠の破れたると月に雲の懸れると、日の蝕したるが如し、不思議なりし事なり。『阿含』、『方等』、『般若』、『大日經』等は佛説なれば、甚じき事なれども、『華嚴經』に對すれば言ふに數なし、彼の經に祕せんこと、此等の經經に説かるべからず。されば諸の『阿含經』に云く、『初め成道』等云云。『大集經』に云く、『如來成道始め十六年』等云云。『淨名經』に云く、『始め佛樹に座して力魔を降す。』等云云。『大日經』に云く、『我昔道場に坐して』等云云。『般若仁王經』に云く、『二十九年』等云云。此等は言ふに足らず、只耳目を驚かす事は、『無量義經』に『華嚴經』の『唯心法界』、『方等般若經』の『海印三昧』、『混同無二』等の大法を書き上げて、或は『未顯眞實』或は『歷劫修行』等と下す程の御經に、『我先に道場菩提樹の下に端坐すること六年阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり』と。初成道の『華嚴經』の始成の文に同せられし。不思議と打ち思ふ處に、此は『法華經』の序分なれば、正宗の事を言はずもあるべし。『法華經』の正宗、略開三、廣開三の御時、『唯佛與佛乃能究盡諸法實相』等。『世

【一九】久遠實成の依文を出す。

【二〇】爾前迹門の失を擧ぐ。

【行布】修行の階位に次第を有することをいふ。

【發迹】迹門を發くこと。

尊法久後」等、「正直捨方便」等。多寶佛迹門八品を指して、「皆是れ眞實」と證明せられしに、何事をか隱すべきなれども、久遠壽量をば祕せさせ給ひて、「我始め道場に坐し、樹王を觀じて亦經行す。」等云云。最第一の大不思議なり。

【一九】されば「彌勒菩薩」涌出品に、四十餘年の未見今見の大菩薩を、「佛、爾して乃ち之を教化して、初めて道心を發さしむ。」等と説かせ給ひしを、疑つて云く、「如來太子たりし時、釋の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得給へり。是より已來、始めて四十餘年を過ぎたり。世尊云何ぞ此の少時に於て、大に佛事を作し給へる。」等云云。教主釋尊此等の疑ひを晴さんが爲に、「壽量品」を説かんとして、爾前迹門の所聞を擧げて云く、「一切世間の天人及び阿修羅は、皆今の釋迦牟尼佛、釋氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得給へりと謂へり。」等云云。正しく此の疑ひを答へて云く、「然るに善男子、我實に成佛してより已來、無量無邊、百千萬億那由佗劫なり。」等云云。

【二〇】「華嚴」乃至「般若」「大日經」等は、二乘作佛を隱すのみならず、久遠實成を説き隱させ給へり。此等の經經に二つの失あり。一には行布を存する故に仍ほ未だ權を開せず、迹門の一念三千を隱せり。二には始成を言ふ故に、曾て未だ迹を發せず、本門の久遠を隱せり。此等の二つの大法は一代の綱骨、一切經の心髓なり。迹門「方便品」は、一念三千、二乘作佛を説いて、爾前二種の失一つを脱れたり。然りと雖も未だ發迹顯本せざれば、實の一

【三一】本門の久遠實成に依り二乘作佛の根據たる一念三千も究竟することを說く。

【四教の果、四教の因】爾前の諸經に說かれたる四教（藏通別圓）の佛果及び其佛因のこと

【本因本果】本門の佛因佛果、卽ち本佛所具の因果。

【三二】諸經の諸佛を悉く本佛の垂迹とし以て統一的佛陀觀を建設す。

【權佛】實佛に對す、權大乘の佛又は垂迹示現の假佛の意味。

【三三】疑を構へて久遠實成が本門壽量品の肝要なることを述ぶ。

【づり】强りの意か。

念三千も現はれず、二乘作佛も定まらず、水中の月を見るが如し、根なし草の波の上に浮べるに似たり。

【三一】本門に至つて始成正覺を破れば、四教の果を破る。四教の果を破れば四教の因破れぬ。爾前迹門の十界の因果を打ち破つて、本門の十界の因果を說き顯はす。此れ卽ち本因本果の法門なり。九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備はりて、眞の十界互具、百界千如、一念三千なるべし。

【三二】斯うて顧みれば、『華嚴經』の臺上十方、『阿含經』の小釋迦、『方等』、『般若』、『金光明經』、『阿彌陀經』、『大日經』等の權佛等は、此の壽量の佛の天月、暫く影を大小の器に浮べ給ふを、諸宗の學者等近くは自宗に迷ひ、遠くは『法華經』の壽量品を知らず、水中の月に實月の想ひをなし、或は入つて取らんと思ひ、或は繩をつけて繫ぎ留めんとす。天台曰く、『天月を識らず、但だ池月を觀ず』等云云。

【三三】日蓮案じて云く、『二乘作佛すら猶ほ爾前强に覺ゆ、久遠實成は又似るべきもなき爾前づりなり。其の故は、爾前、法華相對するに、猶ほ爾前强き上、爾前のみならず、迹門十四品も一向に爾前に同ず。本門十四品も『涌出』、『壽量』の二品を除きては、皆始成を存せり。雙林最後の『大般涅槃經』四十卷、其外の法華前後の諸大乘經に一字一句もなく、法身の無始無終は說けども、應身報身の顯本は說かれず。如何が廣博の爾前、本迹、涅槃等の諸大乘經をば捨てて、但だ涌出、壽量の二品には付くべき。

【一四】法相宗の立場より法華經の二乘作佛一切皆成を難ず。
【都率】(Tuṣita)の音譯兜率とも書す。
【阿輸舍國】(Ayodyā)阿踰陀の異音譯、中印度西部にあり。
【尸那】支那のこと。
【月氏】印度の形容代名詞。
【無性有情】無佛性の衆生。
【決定性】決定して自果を證する三乘のこと。
【一五】華嚴眞言二宗の立場より二乘作佛久遠實成は法華經に限らずと難ず。

【一四】　されば法相宗と申す宗は、西天の佛滅後九百年に無著菩薩と申す大論師在しき。夜は都率の內院に上り彌勒菩薩に對面して、一代聖教の不審を發き、晝は阿輸舍國にして法相の法門を弘め給ふ。彼の御弟子は世親、護法、難陀、戒賢等の大論師なり。戒日大王頭を傾け五天幢を倒して此に歸依す。尸那國の玄奘三藏、月氏に至りて十七年、印度百三十餘の國國を見聞きて諸宗をば振り捨て、此の宗を漢土に渡して、太宗皇帝と申す賢王に授け給ひ、肪尙、光基を弟子として、大慈恩寺並びに三百六十餘箇國に弘め給ふ。日本國には、人王三十七代孝德天皇の御宇に、道慈、道昭等習ひ渡して、山階寺に崇め給へり。三國第一の宗なるべし。此宗の云く、始め『華嚴經』より、終り『法華』、『涅槃經』に至るまで、無性有情と決定性の二乘は永く佛になるべからず。佛語に二言なし。一度『永不成佛』と定め給ひぬる上は、日月は地に落ち給ふとも、大地は反覆すとも、永く改變あるべからず。されば『法華經』、『涅槃經』の中にも、爾前の經經に嫌し、無性有情、決定性を正しく衝い指して、成佛すとは說かれず。まづ眼を閉ぢて案ぜよ。『法華經』、『涅槃經』に、決定性、無性有情正しく佛になるならば、無著、世親ほどの大論師、玄奘、慈恩ほどの三藏人師、是を見ざるべしや、此を載せざるべしや、是を信じて傳へざるべしや、彌勒菩薩に問ひ奉らざるべしや。汝は『法華經』の文に依るやうなれども、天台、妙樂、傳教の僻見を信受して、其の見を以て、經文を見る故に、爾前に『法華經』は水火たりと見るなり。

【一五】　華嚴宗と眞言宗は、法相、三論には似るべきもなき超過の宗なり。二乘作佛、久遠

實成は『法華經』に限らず『華嚴經』『大日經』に分明なり。華嚴宗の杜順、智儼、法藏、澄觀、眞言宗の善無畏、金剛智、不空等は、天台、傳教には似るべきもなき高德の人、其上善無畏等は大日如來より系亂れざる相承あり。此等の權化の人、爭でか誤りあるべき。隨つて『華嚴經』には『或は釋迦、佛道を成じ已つて、不可思議劫を經るを見る。』等云云。『大日經』には『我は一切の本初なり。』等云云。何ぞ但だ久遠實成、壽量品に限らん。譬へば井底の蝦が大海を見ず、山左が洛中を知らざるが如し。汝但だ『壽量』の一品を見て、『華嚴』、『大日經』等の諸經を知らざるか。其上、月氏、尸那、新羅、百濟等にも、一同に二乘作佛、久遠實成は『法華經』に限るといふか。

【二六】されば八箇年の經は、四十餘年の經經には相違せりといふとも、先判後判の中には、後判に就くべしといふとも、猶ほ爾前づりにこそ覺ゆれ。又但だ在世計りならば、さもあるべきに、滅後に居せる論師人師、多くは爾前づりにこそ候へ。

【二七】據う『法華經』は信じ難き上、世も漸く末になれば、聖賢は漸く隱れ、迷者は漸く多し。世間の淺き事すら猶ほ誤り易し。何に況や出世の深法誤りなかるべしや。犢子、方廣が聰敏なりし猶ほ大小乘經に過てり。無垢、摩沓が利根なりし、權實二教を辨へず。正法一千年の內は在世も近く、月氏の內なりし、既に斯の如し。況んや尸那、日本等は、國も隔て音も異れり。人も鈍根なり、壽命も日淺し、貪、瞋、癡も倍增せり。佛世を去りて歲久し、佛經皆誤れり、誰の智解か直かるべき。佛『涅槃經』に記して曰く『末法には正法

【二六】上來の諸難を結す。

【二七】法華經の難信難解を說き上來の諸難に答へんとす。

【犢子】印度小乘の一派にして、無我の佛教內に我を立てて外道に墮せる犢子部の派祖の名。

【方廣】大乘の空觀を誤解して空幻とし外道に墮せる者。

【二八】法華經の二大事實を知れる者は日蓮一人なるを斷ず。
【外凡內凡】外凡位內凡位の略、菩薩の位次。
【嗛し】欺くこと
【此の二邊】言ふと言はずと。

の者は爪上の土、謗法の者は十方の土』と見えぬ。『法滅盡經』に曰く、『謗法の者は恒河沙、正法の者は一二の小石』と記し置き給ふ。千年五百年に一人なんども、正法の者有り難からん。世間の罪に依つて惡道に墮つる者は爪上の土、佛法に依つて惡道に墮つる者は十方の土、俗より僧、女より尼多く惡道に墮つべし。

【二八】此に日蓮案じて云く、世已に末代に入つて二百餘年、邊土に生を受け、其上下賤其上貧道の身なり。輪廻六趣の間には、人天の大王と生れて萬民を靡かす事、大風の小木の枝を吹くが如くせし時も、佛にならず、大小乘經の外凡、內凡の大菩薩と修し上り、一劫、二劫、無量劫を經て菩薩の行を立て、已に不退に入りぬべかりし時も、强盛の惡緣に落されて佛にもならず。知らず、大通結緣の第三類の在世を漏れたるか、久遠五百の退轉して今に來るか。『法華經』を行ぜし程に、世間の惡緣、王難、外道の難、小乘經の難なんどは忍びし程に、權大乘、實大乘經を極めたるやうなる、道綽、善導、法然等が如くなる惡魔の身に入りたる者『法華經』を強く讚め上げ、機を強ちに下し、『理深解微』と立て、『未有一人得者』、『千中無一』等と嗛ししものに、無量生が間恒河沙の度賺されて權教に墮ちぬ。權教より小乘經に墮ちぬ、外道外典に墮ちぬ。結句は惡道に墮ちけりと、深く之を知れり。日本國に之を知れる者は、但だ日蓮一人なり。此を一言も申し出すならば、父母、兄弟、師匠、國主の王難必ず來るべし。いはずば慈悲なきに似たりと思惟するに、『法華經』、『涅槃經』等に此の二邊を合せ見るに、いはずば今生は事なくとも、後生は必

【三障四魔】三障は煩惱障、業障、報障、四魔は五陰魔、煩惱魔、死魔、天子魔。

【一九】法華經弘通の大難を述べ、以て法華經の行者なる證明に資す。

【擯出】擯斥すること、今は流罪を意味す。

ず無間地獄に墮つべし。いふならば三障四魔必ず競ひ起るべしと知りぬ。二邊の中にはいふべし。王難等出來の時退轉すべくば、一度に思ひ止むべしと、且らく休らひし程に、「寶塔品」の六難九易是れなり。我等ほどの小力の者、須彌山は投ぐとも、我等程の無通の者、乾草を負うて劫火には燒けずとも、我等程の無智の者、恒沙の經經をば讀み覺ゆとも、「法華經」は一句一偈も末代に持ち難しと說かるるは是れなるべし。今度强盛の菩提心を起して、退轉せじと願じぬ。

【一九】既に二十餘年が間、此の法門を申すに日日月月年年に難重なる。少少の難は數知らず。大事の難四度なり。二度は暫く措く。王難已に二度に及ぶ。今度は已に我が身命に及ぶ。其の上弟子といひ、檀那といひ、僅の聽聞の俗人なんど來つて重科に行はる、謀反なんどの者の如し。「法華經の第四」に曰く、「而も此經は如來の現在にすら猶ほ怨嫉多し、況や滅度の後をや。」等云云。「第二」に云く、「經を讀誦し書持することあらん者を見て、輕賤憎嫉して、結恨を懷かん。」等云云。「第五」に云く、「一切世間怨多くして信じ難し。」等云云。又云く、「諸の無智の人の惡口罵詈するあらん。」等。又云く、「國王、大臣、婆羅門、居士に向つて、誹謗して我が惡を說いて、是れ邪見の人なりと謂はん。」又云く、「數數擯出せられん。」等云云。又云く、「杖木瓦石もて之を打擲せん。」等云云。「涅槃經」に云く、「爾の時に多く無量の外道有つて、和合して共に摩訶陀の王阿闍世の所に往き、今は唯一の大惡人有り、瞿曇沙門なり。一切世間の惡人、利養の爲の故に、其の所に往集して、眷屬と爲つて、能

【得一】德一に同じ、智證大師と論諍せる學者。
【東春】智度法師の「法華義疏」の異名。
【顯戒論】傳教大師が南都小乘戒に對し大乘圓頓戒を主張せし著書。
【僧統奏して曰く】僧統が大師を讒奏せし言なり。
【法華の何況也】法華經の猶多怨嫉況滅度後の文を指す。
【秀句】傳教大師の法華秀句の略。

く善を修せず。「呪術の力の故に、迦葉及び舍利弗目犍連等を調伏す」等云云。天台云く、「障り未だ除かざる者を怨と爲し、聞くを喜ばざる者を嫉と名づく」等云云。南三北七の十師、漢土無量の學者、天台を怨敵とす。得一云く、『咄い哉智公、汝は是れ誰が弟子ぞ、三寸に足らざる舌根を以て、覆面舌の所說を謗する』等云云。「東春」に云く、「問ふ、在世の時、許多の怨嫉あり。佛滅度の後、此經を說く時、何が故ぞ亦留難多きや。答へて云く、俗に良藥口に苦しと言ふが如く、此經五乘の異執を廢して、一極の玄宗を立つ。故に凡を斥け聖を呵し、大を排ひ小を破り、天魔を銘して毒蟲と爲し、外道を說いて惡鬼と爲し、執小を貶して貧賤と爲し、菩薩を挫して新學と爲す。故に天魔は聞くを惡み、外道は耳に逆へ、二乘は驚怪し、菩薩は怯行す。此の如きの徒、悉く留難を爲す。怨嫉多しの言豈唐しからんや」等云云。「顯戒論」に云く、「僧統奏して曰く、西夏に鬼辯婆羅門あり、東土に巧言を吐く禿頭の沙門あり、此れ乃ち物類冥召して世間を誑惑す」等云云。論じて曰く、昔齊朝の光統を聞き、今は本朝の六統を見る、實なる哉、法華の何況也」等云云。「秀句」に云く、「代を語れば則ち像の終り、末の初め。地を尋ぬれば則ち唐の東、羯の西。人を原ぬれば則ち五濁の生、闘諍の時なり。經に云く、猶多怨嫉、況滅度後。此の言良に以あるなり」等云云。夫れ小兒に灸治を加ふれば、必ず父母を怨む。重病の者に良藥を與ふれば、定めて口に苦しと患ふ。在世猶ほ然り、乃至像末邊土をや。山に山を重ね、波に波を疊み、難に難を加へ、

【三〇】勸持品二十行の偈を色讀せることを述べ、法華經の行者たる法證を表す。

非に非を增すべし。像法の中には天台一人『法華經』一切經を說の如く讀めり。南北これを怨みしかども、陳隋二代の聖主眼前に是非を明らめしかば、敵遂に盡きぬ。像法の末に傳敎一人『法華經』一切經を佛說の如く讀み給へり。南都、七大寺蜂起せしかども、桓武、乃至、嵯峨等の賢主、我と明らめ給ひしかば、又事なし。今末法の始め二百餘年なり。況滅度後の兆に、鬪諍の序となるべき故に、非理を前として、濁世の驗に、召し合せられずして、流罪、乃至、命にも及ばんとするなり。されば日蓮が『法華經』の智解は、天台、傳敎には千萬が一分も及ぶ事なけれども、難を忍び慈悲の勝れたる事は、畏れをも懷きぬべし。定めて天の御計らひにも預かるべしと存ずれども、一分の驗もなし。彌々重科に沈む。還つて此の事を計り見れば、我身の法華經の行者に非ざるか。又諸天善神等の此國を捨てて去り給へるか、旁疑はし。

【三〇】而るに『法華經』の第五の卷『勸持品』の二十行の偈は、日蓮だにも此國に生れずば、殆ど世尊は大妄語の人、八十萬億那由佗の菩薩は、提婆が虛誑罪にも墮ちぬべし。經に云く、『有諸無智人惡口罵詈等』、『加刀杖瓦石』等云云。今の世を見るに、日蓮より外の諸僧、誰の人か『法華經』につけて、諸人に惡口罵詈せられ、刀杖等を加へらるる者ある。日蓮なくば此の一偈の未來記は、妄語となりぬ。『惡世中比丘、邪智心諂曲』、又曰く、『白衣の與めに法を說いて、世に恭敬せらるること、六通の羅漢の如し』。此等の經文は、今の世の念佛者、禪宗、律宗等の法師なくば、世尊は又大妄語の人、『常に大衆の中に在り』。

【正、妙の二本】正法華と妙法華との二本。

【三類の强敵】俗衆增上慢、道門增上慢、僭聖增上慢の三類の法敵をいふ。

【三二】疑を搆へて法華經の行者たる證明を堅くす。

乃至、國王、大臣、婆羅門、居士に向つて「等」今の世の僧等日蓮を讒奏して流罪せずば、此の經文空し。又云く『數數見擯出』等云云。日蓮『法華經』の故に度度流されずば、數數の二字如何せん。此の二字は天台、傳教も未だ讀み給はず、況んや餘人をや。末法の始の驗、『恐怖惡世中』の金言の合ふ故に、但だ日蓮一人是を讀めり。例せば世尊『付法藏經』に記して云く『我が滅後一百年に阿育大王といふ王あるべし。』『摩耶經』に云く『我滅後六百年に龍樹菩薩といふ人、南天竺に出づべし。』『大悲經』に云く『我が滅後六十年に末田地といふ者、地を龍宮に築くべし。』此等皆佛記の如くなりき。然らずば誰か佛教を信受すべき。而るに佛『恐怖惡世』『然後末世』『末法滅時』『後五百歲』なんど『正』『妙』の二本に正しく時を定め給ふ。當世法華の三類の强敵なくば、誰か佛說を信受せん。日蓮なくば、誰をか法華經の行者として佛語を助けん。南三北七、七大寺等、猶ほ像法の法華經の敵の內なり、何に況んや當世の禪、律、念佛者等脫るべしや。經文に我が身符合せり。御勘氣を蒙れば彌悅びを增すべし。例せば小乘の菩薩の未斷惑なるが願兼於業と申して、作りたくなき罪なれども、父母等の地獄に墮ちて大苦を受くるを見て、形の如く其の業を造つて、願つて地獄に墮ちて苦むに同じ。苦に代れるを悅びとす。此も又斯の如し。當時の責めは堪ふべくもなけれども、未來の惡道を脫すらんと思へば悅ぶなり。

【三二】但し世間の疑ひといひ、自心の疑ひと申し、爭でか天扶け給はざるらん。諸天等の守護神は佛前の御誓言あり、法華經の行者には、猿になりとも法華經の行者と號して早早に

【二】二乘が報恩のため法華經の行者を守護すべき理由を擧ぐるため、舍利弗、目連、阿難、羅睺羅に就て述ぶ。
【三界】欲、色、無色の三界。
【梵帝】梵天、帝釋。
【證果】阿羅漢果のこと。

佛前の御誓言を遂げんとこそ思すべきに、其義なきは、我が身法華經の行者にあらざるか。此の疑ひは此書の肝心、一期の大事なれば、處處にこれを書く上、疑ひを强くして答を構ふべし。

【三】季札といひし者は、心の約束を違へじと、王の重寶たる劍を徐の君が墓に掛く。王尹といひし人は、河の水を飮みて、金の鵞目を水に入れ、公胤といひし人は、腹を割いて主君の肝を入る。此等は賢人なり、恩を報ずるなるべし。況んや舍利弗、迦葉等の大聖は、二百五十戒、三千の威儀一つも缺けず、見思を斷じ三界を離れたる聖人なり。梵帝、諸天の導師、一切衆生の眼目なり。而るに四十餘年が間、永不成佛と嫌ひ捨て果てられてありしが、『法華經』の不死の良藥を嘗めて、燋れる種の生ひ、破れたる石の合ひ、枯木の華さき果なりなんどせるが如く、佛になるべしと許されて、未だ八相を唱へず、爭でか此經の重恩をば報ぜざらん。若し報ぜずば、彼彼の賢人にも劣りて、不知恩の畜生なるべし。毛寶が龜は、襖の恩を忘れず、昆明池の大魚は命の恩を報ぜんと、明珠を夜中に捧げたり。畜生すら猶ほ恩を報ず、何に況んや大聖をや。阿難尊者は斛飯王の次男、羅睺羅尊者は淨飯王の孫なり。人中に家高き上、證果の身となつて成佛を障へられたりしに、八年の靈山の席にて、山海慧、蹈七寶華なんど如來の號を授けられ給ふ。若し『法華經』在さずば、如何に家高く大聖なりとも、誰か恭敬し奉るべき。夏の桀、殷の紂と申すは、萬乘の主、土民の歸依なり。然れども政惡くして世を滅せしかば今に惡き者の手本には、桀紂、桀

【三】次に廣く諸の聲聞に就て述ぶ

紂とこそ申せ。下賤の者、癩病の者も、桀紂の如しと言はれぬれば、罵られたりと腹立つなり。千二百無量の聲聞は、「法華經」に在さずば、誰か名をも聞くべき、其の音をも習ふべき。一千の聲聞、一切經を結集せりとも、見る人よもあらじ、况て此等の人人を繪像木像に顯はして、本尊と仰ぐべしや。此れ偏へに法華經の御力に依て、一切の羅漢歸依せられさせ給ふなるべし。諸の聲聞、「法華」を離れさせ給ひなば、魚の水を離れ、猿の木を離れ、小兒の乳を離れ、民の王を離れたるが如し、爭でか法華經の行者を捨て給ふべき。

【三】諸の聲聞は爾前の經經にては、肉眼の上に、天眼、慧眼を得、「法華經」にして、法眼、佛眼備はれり。十方世界すら猶ほ照見し給ふらん。何に况んや此の娑婆世界の中、法華經の行者を知見せられざるべしや。設ひ日蓮惡人にて、一言二言、一年二年、一劫二劫乃至百千萬億劫此等の聲聞を惡口罵詈し奉り、刀杖を加へ參らする色なりとも、「法華經」をだにも信仰したる行者ならば、捨て給ふべからず。譬へば幼稚の父母を罵る、父母これを捨つるや。梟鳥、母を食ふ、母これを捨てず。破鏡、父を害す、父の獸これに從ふ。畜生すら猶ほかくの如し、大聖、法華經の行者を捨つべしや。されば四大聲聞の領解の文に云く「我等今は眞に是れ聲聞なり。佛道の聲を以て一切をして聞かしむべし。我等今は眞に阿羅漢なり。諸の世間、天、人、魔、梵に於て普く其の中に於て、應に供養を受くべし。世尊は大恩まします。稀有の事を以て憐愍教化して、我等を利益し給ふ。無量億劫にも、誰か能く報ずる者あらん。手足を以て供給し頭頂を以て禮敬し、一切を以て供養す

【三四】爾前に於ける聲聞の不過を擧げ法華經の大恩を高調する前提とす。

とも皆報ずること能はじ、若は以て頂戴し、兩肩に荷負して、恒沙劫に於て、心を盡して恭敬し、又美膳無量の寶衣、及び諸の臥具、種種の湯藥を以てし、牛頭栴檀及び諸の珍寶を以て塔廟を起て、寶衣を地に布き、斯の如き等の事、以て供養すること恒沙劫に於てすとも、亦報ずること能はじ。等云云。

【三四】諸の聲聞等は、前四味の經經に幾許ぞの呵責を蒙り、人天大會の中にして恥辱がましき事、其の數を知らず。然れば迦葉尊者の啼泣の音は三千を響かし、須菩提尊者は茫然として手の一鉢を捨つ。舍利弗は飯食を吐き、富樓那は畫瓶に糞を入ると嫌はる。世尊鹿野苑にしては、阿含經を讃歎し二百五十戒を師とせよなんど慇懃に賞めさせ給ひて、今又何時の間に我が所說をば斯うは謗らせ給ふと、二言相違の失とも申しぬべし。例せば世尊、提婆達多を、汝愚人なり、人の唾を食ふと罵詈せさせ給ひしかば、毒箭の胸に入るが如く思ひて、恨みて云く、瞿曇は佛陀にはあらず、我は斛飯王の嫡子、阿難尊者が兄、瞿曇が一類なり。如何に惡しき事ありとも、內內敎訓すべし。此等程の人天大會に、此程の大禍を現に向って申すもの、大人佛陀の中にあるべしや。されば先先は妻の敵、今は一座の敵、今日よりは生生世世に大怨敵となるべしと誓ひしぞかし。此を以て思ふに、今諸の大聲聞は、本外道婆羅門の家より出でたり。又諸の外道の長者なりしかば、諸王に歸依せられ、諸檀那に尊まる。或は種姓高貴の人もあり、或は富饒充滿の族もあり。而るに彼彼の榮官等を打ち捨て、慢心の幢を倒して、俗服を脫き、壞色の糞衣を身に纏ひ、白

【九横の大難】九種の大横難のこと。何何を九大難とするかは一定せず。
【波瑠璃王】毘瑠璃王又は瑠璃王とも言ふ、釋尊の晩年に釋迦族を滅せし悪王。
【六師】六師外道
【瞿曇】(Gotama)の音譯、釋尊の族姓。

拂弓箭等を打ち捨てて、一鉢を手に握り、貧人乞丐なんどの如くして、世尊に附き奉り、風雨を防ぐ宅もなく、身命を續ぐ衣食乏少なりしありさまなるに、五天四海皆外道の弟子檀那なれば、佛すら九横の大難に遭ひ給ふ。所謂る提婆が大石を飛ばせし、阿闍世王の醉象を放し、阿耆多王の馬麥、婆羅門城の漿、旃遮婆羅門女が鉢を腹に伏せし、何に況んや所化の弟子の數難、申す計りなし。無量の釋子は波瑠璃王に殺され、千萬の眷屬は醉象に踏まれ、華色比丘尼は提婆に害せられ、迦盧提尊者は馬糞に埋まれ、目揵尊者は竹杖に害せらる。其上六師同心して、阿闍世、婆斯匿王等に讒奏して云く、瞿曇は閻浮第一の大悪人なり。彼が到る處は三災七難を前とす、大海の衆流を集め、大山の衆木を集めたるが如し。瞿曇が處には、衆悪を集めたり。所謂る迦葉、舍利弗、目連、須菩提等なり。人身を受けたる者は、忠孝を先とすべし。彼等は瞿曇に賺されて、父母の教訓をも用ゐず。家を出で、王法の宣旨をも背いて、山林に至る。一國に跡を留むべき者にはあらず。されば天には日月衆星變を爲す。地には衆夭盛んなりなんど訴ふ。堪ふべしとも覺えざりしに、又打ち添ふ禍と、佛陀にも打ち副ひ難くてありしなり。人天大會の衆會の砌にて、時時呵責の音を聞きしかば、いかにあるべしとも覺えず、只慌つる心のみなり。其上、大の大難の第一なりしは、「淨名經」の「其れ汝に施す者は福田と名けず、汝を供養する者は三悪道に隨す」等云云。文の心は、佛、菴羅苑と申す處に在せしに、梵天、帝釋、日月四天、三界の諸天、地神龍神等、無數恒沙の大會の中にして云く、須菩提等の比丘等を供養せん

【三五】「未顯眞實」によつて二乘の不過一轉して福となりしを說く。

【三六】斯る大恩ある二乘の法華經の行者を守護せざるを疑ふ。

【教內】以下は禪宗を指す。

【捨閉閣抛】は淨土宗を指す。

天人は三惡道に墮つべし。此等を打聞く天人は、此等の聲聞を供養すべしや。詮ずる處は佛の御誓を用ゐて、諸の二乘を殺害せさせ給ふかと見ゆ。心あらん人人は、佛をも踈みぬべし。されば此等の人人は、佛を供養し奉りし序にこそ、僅の身命をも扶けさせ給ひしか。されば事の心を案ずるに、四十餘年の經經のみ說かれて、法華八箇年の所說なくて御入滅ならせ給ひたらましかば、誰の人か此等の尊者をば供養し奉るべき。現身に餓鬼道にこそ在すべけれ。

【三五】而るに四十餘年の經經をば、東春の大日輪寒氷を消滅するが如く、無量の草露を大風の零落するが如く、一言一時に『未顯眞實』と打ち消し、大風の黑雲を卷き、大虛に滿月の處するが如く、靑天に日輪の懸り給ふが如く『世尊法久後、要當㆑說㆓眞實㆒』と照させ給ひて、華光如來、光明如來等と、舍利弗・迦葉等を赫赫たる日輪、明明たる月輪の如く、鳳文に記し龜鏡に浮べられて候へばこそ、如來滅後の人天の諸檀那等には、佛陀の如くは仰がれ給ひしか。

【三六】水澄まば月影を惜むべからず、風吹かば草木靡かざるべしや。『法華經』の行者あるならば、此等の聖者は大火の中を過ぎても、大石の中を通りても、訪らはせ給ふべし。迦葉の入定も事にこそよれ、如何にとなりぬるか。不審しとも申すばかりなし。後五百歲の當らざるか、廣宣流布の妄語となるべきか。日蓮が法華經の行者ならざるか。『法華經』を教內と下して、別傳と稱する大妄語の者を守り給ふべきか。捨閉閣抛と定めて『法華經』の

【三七】菩薩人天等も爾前の諸經にては佛恩深からざるを述べ、以て法華の價値を高調せんとす。

【十住以下】華嚴の說法。

【不思議解脫】圓通無礙不思議自在なる解脫にも法身の菩薩の證得するところ。

門を閉ぢよ、管を抛てよと彫り付けて、法華堂を失へる者を守護し給ふべきか。佛前の誓ひはありしかども、濁世の大難の烈しきを見て、諸天下り給はざるか。日月天に在ます、須彌山今も崩れず、海潮も增減す、四季も形の如く違はず、如何になりぬるやらんと、大疑愈積り候。

【三七】又諸大菩薩、天人等の如きは、爾前の經經にして記別を得るやうなれども、水中の月を取らんとするが如く、影を體と思ふが如く、色形のみありて、實義もなし。又佛の御恩も深くて深からず。世尊初成道の時は、いまだ說教もなかりしに、法慧菩薩、功德林菩薩、金剛幢菩薩、金剛藏菩薩等なんど申せし六十餘の大菩薩、十方の諸佛の國土より教主釋尊の御前に來り給ひて、賢首菩薩、解脫月等の菩薩の請に赴いて、十住、十行、十回向、十地等の法門を說き給ひき。此等の大菩薩の所說の法門は、釋尊に習ひ奉るにあらず。十方世界の諸の梵天等も來つて法を說く。又釋尊に習ひ奉らず。總じて華嚴會座の大菩薩、天龍等は、釋尊已前に不思議解脫に住せる大菩薩なり。釋尊の過去因位の御弟子にやあるらん、十方世界の先佛の御弟子にやあるらん。一代教主始成正覺の佛の御弟子にあらず。阿含、方等、般若の時、四教を佛の說き給ひし時こそ、漸く御弟子は出來して候へ。此も又佛の自說なれども、正說にはあらず。所以いかんとなれば、方等、般若の別圓二教は「華嚴經」の別圓二教の義趣を出でず。彼の別圓二教は教主釋尊の別圓二教にはあらず。法慧等の大菩薩の別圓二教なり。此等の大菩薩は、人目には佛の御弟子かとは見

【無師智】師無くして得たる佛智。

【三八】無量義經の「未顯眞實」によつて一大轉回を來せることを述ぶ。

【三九】方便品の略開三顯一により始めて一念三千を明したることを述べ爾前の失に相對せしむ。

ゆれども、佛の御師ともいひぬべし。世尊彼の菩薩の所說を聽聞して、智發して後、重ねて方等般若の別圓を說けり。色も替らぬ『華嚴經』の別圓二教なり。されば此等の大菩薩は、釋尊の師なり。『華嚴經』に此等の大菩薩を數へて、善知識と說かれしは是れなり。善知識と申すは、一向師にもあらず、一向弟子にもあらずある事なり。藏通二教は又別圓の枝流なり。別圓二教を知る人、必ず藏通二教を知るべし。人の師と申すは、弟子の知らぬ事を教へたるが師にては候なり。例せば佛より前の一切の人天外道は、二天三仙の弟子なり。九十五種まで流派したりしかども、三仙の見を出でず。教主釋尊も彼に習ひ傳へて、外道の弟子にて在ませしが、苦行樂行十二年の時、苦、空、無常、無我の理を悟り出でてこそ、外道の弟子の名をば離れさせ給ひて無師智とは名告らせ給ひしか。又人天も大師とは仰ぎまゐらせしか。されば前四味の間は、教主釋尊、法慧菩薩等の御弟子なり。例せば文殊は釋尊九代の御師と申すが如し。常は諸經に、不說一字と說かせ給ふも是れなり。

【三八】佛、御年七十二の年、摩竭提國靈鷲山と申す山にして、『無量義經』を說かせ給ひしに、四十餘年の經經を擧げて、枝葉をば其の中に攝めて『四十餘年未顯眞實』と、打ち消し給ふは此なり。此時こそ諸大菩薩、諸天人等は、慌てて實義を請せんとは申せしか。『無量義經』にて實義と覺しき事一言ありしかども、未だ實なし。譬へば月の出でんとして、其體東山に隱れて、光西山に及べども、諸人月體を見ざるが如し。

【三九】『法華經方便品』の略開三顯一の時、佛略して、一念三千、心中の本懷を宣べ給

【四味三教】四味とは法華以前の四時。三教とは化法四教の初三をいふ。
【大經】茲は大涅槃經の略。
【薩とは以下】具は足道と妙法蓮華經なることを説明するため也。
【薩達磨分陀利伽蘇多攬】（Saddharmapundarikasutra）の音譯。
【薩哩達磨】（Saddharma）の音譯。
【南無】（Namah）の音譯。歸依と譯す。

ふ。譬への事なれば、時鳥の音を寢覺たる者の、一音聞きたるがやうに、月の山の半を出でたれども、薄雲の覆へるが如く、幽かなりしを、舍利弗等驚きて、諸天、龍神、大菩薩等を催して『諸天、龍神等、其數恒沙の如し、佛を求むる諸の菩薩大數八萬あり、又諸の萬億國の轉輪聖王の至れる、合掌し、敬心を以て具足の道を聞かんと欲す。』等とは請せしなり。文の心は四味三教、四十餘年の間、未だ聞かざる法門、承はらんと請せしなり。此文に『欲聞具足道』と申すは『大經』に云く『薩とは具足の義に名づく。』等云云。『無依無得大乘四論玄義記』に云く『沙とは譯して六と云ふ、胡法六を以て具足の義と爲す也。』等云云。吉藏の『疏』に云く『沙とは翻じて具足と爲す。』等云云。天台の『玄義』の八に云く『薩とは梵語、此に妙と翻ず。』等云云。付法藏の第十三、眞言、華嚴、諸宗の元祖、本地は法雲自在王如來、迹に龍猛菩薩、初地の大聖の『大智度論』千卷の肝心に云く『薩とは六也。』等云云。『妙法蓮華經』と申すは漢語也。月支には『薩達磨分陀利伽蘇多攬』と申す。善無畏三藏の法華の肝心の眞言に云く『曩謨三曼陀沒駄南（歸命普佛陀）唵（三身如來）阿阿暗惡（開示悟入）薩縛勃陀（一切佛）枳攘（知）娑乞蒭毘耶（見）誐誐曩三婆縛（如虚空性）囉乞叉儞（離塵相也）薩哩達磨（正法）浮陀哩伽（白蓮華）蘇駄羅（經）惹（入）吽（遍）鑁（住）發（歡喜）縛日羅（堅固）囉乞叉（擁護）吽（空無相無我）娑婆訶（決定成就）』此の眞言は南天竺の鐵塔の中の『法華經』の肝心の眞言なり。此の眞言の中に、薩哩達磨と申すは正法なり。薩と申すは正なり、正は妙なり。妙は正なり。正法華、妙法華是れなり。又妙法蓮華經の上に南無の二字を置けり。『南無妙法蓮華經』是れなり。妙とは具足、六とは六度萬

行、諸の菩薩六度萬行を具足するやうを聞かんと思ふ。具とは十界互具、足と申すは一界に十界あれば、當位に餘界あり、滿足の義なり。此の經一部八卷二十八品、六萬九千三百八十四字、一一に皆妙の一字を備へて、三十二相八十種好の佛陀なり。十界に皆己界の佛界を顯はす。妙樂云く、『尙ほ佛果を具す、餘果も亦然り。』等云云。佛此を答へて云く、『衆生をして佛知見を開かしめんと欲す。』等云云。衆生と申すは舍利弗、衆生と申すは一闡提、衆生と申すは九法界、衆生無邊誓願度、此に滿足す。『我本と誓願を立て一切の衆をして我が如く等くして異ること無からしめんと欲す。我が昔の願ぜし所の如き、今は已に滿足しぬ。』等云云。諸大菩薩、諸天等此の法門を聞いて領解して云く、『我等昔より來、數々世尊の說を聞き奉れども、未だ嘗て是の如き深妙の上法を聞かず。』等云云。傳教大師云く、『我等昔より來、數數世尊の教を聞き奉れどもとは、昔は『法華經』の前に『華嚴經』等の大法を說くを聞けるを謂ふなり。未だ曾て是の如き深妙の上法を聞かずとは、『法華經』の唯有一佛乘の教へを未だ聞かずと謂ふなり。』等云云。『華嚴』、『方等』、『般若』、『深密』、『大日』等の恆河沙の諸大乘經は、未だ一代の肝心たる、一念三千の大綱骨髓たる二乘作佛、久遠實成等を未だ聞かずと領解せり。

【四一】壽量品に於る久遠實成の遠序を述ぶ。

【證前、起後の寶塔】迹門の說法を眞實と證明し、後の本門を起す寶塔なること。

開目鈔　下

【四一】又今よりこそ、諸大菩薩も、梵帝、日月、四天等も、教主釋尊の御弟子にては候へ。されば『寶塔品』には、此等の大菩薩を、佛我が御弟子等と思す故に、諫曉して云く、『諸の大衆に告ぐ、我が滅度の後、誰か能く此經を護持し讀誦せん。今佛前に於て自ら誓言を說け。』とは强かに仰せ下せしか。又諸大菩薩も、『譬へば大風の小樹の枝を吹くが如し。』等と、吉祥草の大風に從ひ、河水の大海へ引くが如く、佛には隨ひまゐらせしか。而れども靈山日淺くして、夢の如く現ならずありしに、證前の寶塔の上に、起後の寶塔あつて、十方の諸佛來集せる、皆我が分身なりとなのらせ給ひ、寶塔は虛空に釋迦多寶坐を竝べ、日月の靑天に竝出せるが如し。人天大會は星を聯ね、分身の諸佛は大地の上、寶樹の下の師子の牀に在ます。『華嚴經』の蓮華藏世界は、十方此土の報佛、各各に國國にして、彼界の佛、此土に來て分身と名のらず。此界の佛、彼界へ往かず、但法慧等の大菩薩のみ互ひに來會せり。『大日經』、『金剛頂經』等の八葉九尊三十七尊等、大日如來の化身とは見ゆれども、其の化身、三身圓滿の古佛にあらず。『大品經』の千佛、『阿彌陀經』の六方の諸佛、未だ來集の佛にあらず。『大集經』の來集の佛、又分身ならず。『金光明經』の四方の四佛は化身なり。總じて一切經の中に各修各行の三身圓滿の諸佛を集めて、我が分身とは

【平等意趣】法身平等因果平等といふ如き意趣、意趣とは意味なり。

【四二】涌出品に於る本化の地涌を述べて久遠實成の前提とす。

【補處】當來成佛の位置。

【迷惑】まどふ。

說かれず、是れ『壽量品』の遠序なり。始成四十餘年の釋尊が、一劫十劫等已前の諸佛を集めて分身と說かる。さすが平等意趣にも似ず、彩しく驚かし。又始成の佛ならば、所化十方に充滿すべからざれば、分身の德は備はりたりとも、示現して益なし。天台云く「分身既に多し、當に知るべし成佛の久しきことを。」等云云。大會の驚きし意を書かれたり。

【四二】 其上に地涌千界の大菩薩、大地より出來せり。釋尊に第一の御弟子と思しき、普賢文殊等にも似るべくもなし。『華嚴』、『方等』、『般若』、『法華經の寶塔品』に來集せる大菩薩『大日經』等の金剛薩埵等の十六の大菩薩なんども、此の菩薩に對當すれば、獼猴の群る中に帝釋の來り給ふが如し、山人に月卿等の雜はるに異らず。補處の彌勒すら猶ほ迷惑せり、何に況んや其の已下をや。此の千世界の大菩薩の中に、四人の大聖在ます。所謂る上行、無邊行、淨行、安立行なり。此の四人は虛空、靈山の諸菩薩等、眼も合せ心も及ばず。『華嚴經』の四菩薩、『大日經』の四菩薩、『金剛頂經』の十六大菩薩等も、此の大菩薩に對すれば、翳眼の者の日輪を見るが如く、海人が皇帝に向ひ奉るが如し。大公等の四聖の衆中に有りしに似たり、商山の四皓が惠帝に仕へしに異らず。巍巍堂堂として尊高なり。釋迦多寶、十方の分身を除きては、一切衆生の善知識とも賴み奉りぬべし。彌勒菩薩心に念言すらく、我は佛の太子の御時より、三十成道、今の靈山まで、四十二年が間、此界の菩薩、十方世界より來集せし諸大菩薩皆知りたり。又十方の淨穢土に、或は御使ひ、或は我と遊戲して、其の國國に大菩薩を見聞せり。此の大菩薩の御師なんとは、如

何なる佛にてやあるらん。よも此の釋迦多寶の十方の分身の佛陀には似るべくもなき佛にてこそ在すらめ。雨の猛きを見て龍の大なる事を知り、華の大なるを見て池の深き事は知んぬべし。此等の大菩薩の來る國、又誰と申す佛に値ひ奉り、いかなる大法をか習修し給ふらんと疑ひし、餘りの不審さに、音をも出すべくもなけれども、佛力にやありけん、彌勒菩薩疑つて云く、「無量千萬億の大衆の、諸の菩薩は、昔より未だ曾て見ざる所なり。是の諸諸の大威德の精進の菩薩衆は、誰か其の爲に法を說いて、敎化して成就せる。誰に從つてか初めて發心し何れの佛法をか稱揚せる。世尊、我昔より來、未だ曾て是事を見ず。願くは其の所從の國土の名號を說き給へ。我常に諸國に遊べども、未だ曾て是事を見ず。我此衆の中に於て、乃し一人をも知らず、忽然に地より出でたり。願くは其の因緣を說き給へ。」等云云。天台云く、「寂場已降、今座より已往、十方の大士、來會絕えず、限るべからずと雖も、我補處の智力を以て悉く見、悉く知る。而れども此の衆に於て、一人をも識らず。然るに我十方に遊戲して諸佛に覲奉し、大衆に快く識知せらる。」等云云。妙樂云く、「智人は起を知り、蛇は自ら蛇を識る。」等云云。經釋の心分明なり。詮ずる處は初成道より來、此土十方にて此等の菩薩を見奉らず、聞かずと申すなり。佛此の疑ひを答へて云く、「阿逸多、汝等昔より未だ見ざる所の者は、我此の娑婆世界に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得已つて、是の諸の菩薩を敎化し示導して、其の心を調伏して、道の意を發さしめたり。」等。又云く、「我伽耶城菩提樹下に於て、坐して最正覺を成ずることを得

【覲奉】　見奉ること。

【調伏】　調御制伏。

【會會】說法の會座ごとに。【第一の疑】久遠實成の顯本を喚起す重大なる疑なる故なり。【疾成】疾得成佛。

て、無上の法輪を轉じ、爾して乃ち之を教化して、初めて道心を發さしむ。今皆不退に住せり。乃至、我久遠より來、是等の衆を教化せり。」等云云。此に彌勒等の大菩薩、大に疑ひ思ふ、『華嚴經』の時、法慧等の無量の大菩薩集る。如何なる人人なるらんと思へば、我が善知識なりと仰せられしかば、さもやと打ち思ひき、其後の大寶坊、白鷺池等の來會の大菩薩も爾の如し。此の大菩薩は彼等には似るべくもなき、舊りたりげに在ます。定めて釋尊の御師匠かなんど思しきを、『令初發道心』とて、幼稚の者どもなりしを教化して弟子となせりなんど仰せあれば、大いなる疑ひなるべし。日本の聖德太子は人王第三十二代、用明天皇の御子なり。御年六歲の時、百濟、高麗、唐土より老人どもの渡りたりしを、六歲の太子、我が弟子なりと仰せありしかば、彼の老人ども又合掌して我が師なり等云云。不思議なりし事なり。外典に申す、或者道を往けば、路のほとりに年三十許りなる若者が、八十許りなる老人を捉へて打ちけり。如何なる事ぞと問へば、此の老翁は我が子なりなんど申すと語るにも似たり。されば彌勒菩薩等疑つて云く「世尊、如來太子たりし時、釋の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得給へり。是より已來、始めて四十餘年を過ぎたり。世尊云何ぞ此の少時に於て、大に佛事を作し給へる。」等云云。一切の菩薩、始め『華嚴經』より四十餘年、會會に疑ひを設けて、一切衆生の疑網を晴らす中に、此の疑ひ第一の疑ひなるべし。『無量義經』の大莊嚴等の八萬の大士、四十餘年と今との歷劫、疾成の疑ひにも超過せり。『觀無量壽經』に

【觀經】觀無量壽經のこと。

【四二】壽量品に於る久遠實成の顯本を述べ諸佛統一の本佛を明す。

韋提希夫人の子阿闍世王が提婆に唆されて、父の王を禁錮め、母を殺さんとせしが、耆婆、月光に諫されて、母を放ちたりし時、佛を請じ奉りて、先づ第一の問ひに云く、『我れ宿昔何の罪あつて、此の惡子を生み、世尊復何等の因緣あつて、提婆達多と共に眷屬と爲り給ふ』等云云。此の疑ひの中に、世尊復何等の因緣有て等の疑ひは、大なる大事なり。輪王は、敵と共に生れず、帝釋は、鬼と共ならず。佛は無量劫の慈悲者なり、如何に大怨と共には在ます。還つて佛には在まさざるかと疑ふなるべし、而れども佛答へ給はず。されば『觀經』を讀誦せん人、『法華經の提婆品』へ入らずば、徒事なるべし。『大涅槃經』に迦葉菩薩の三十六の問ひも、これには及ばず。されば佛此の疑ひを晴させ給はずば、一代の聖教は泡沫に同じ、一切衆生は疑網に罹るべし。『壽量』の一品の大切なる是れなり。

【四二】其後佛『壽量品』を說いて云く、『一切世間の天人及び阿修羅は、皆今の釋迦牟尼佛は釋氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず。道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得給へりと謂へり。』等云云。此の經文は始め寂滅道場より、終り『法華經の安樂行品』に至るまでの、一切の大菩薩等の所知を擧げたるなり。『然るに善男子、我實に成佛してより已來、無量無邊、百千萬億、那由陀劫なり。』等云云。此の文は『華嚴經』の三處の『始成正覺』、『阿含經』の『初成』、『淨名經』の『始坐佛樹』、『大集經』の『始十六年』、『大日經』の『我昔坐道場』、『仁王經』の『二十九年』、『無量義經』の『我先道場』

【四三】更に諸佛の所化即弟子を本佛に統一す。

【無明の邊域】【明の分位】無明と明と對し、邊域と分位と對す。一分の位とは一分の聖者の位をいふ。

『法華經の方便品』の『我始坐道場』等を、一言に大虚妄なりと破る文なり。此の過去常顯はるる時、諸佛皆釋尊の分身なり。爾前迹門の時は、諸佛釋尊に肩を並べて各修各行の佛なり。かるが故に諸佛を本尊とする者、釋尊等を下す。今『華嚴』の臺上、『方等』、『般若』、『大日經』等の諸佛は、皆釋尊の眷屬なり。佛三十成道の御時は、大梵天王、第六天等の知行の娑婆世界を奪ひ取り給ひき。今爾前迹門にして、十方を淨土と號して、此土を穢土と說かれしを打ち返して此土は本土なり、十方の淨土は垂迹の穢土となる。

【四三】佛久遠の佛なれば、迹化他方の大菩薩も、教主釋尊の御弟子なり。一切經の中に此の『壽量品』在さずば、天に日月の、國に大王の、山河に珠の、人に神の無からんが如くしてあるべきを、華嚴、眞言等の權宗の智者と思しき、澄觀、嘉祥、慈恩、弘法等の一往權宗の人人、且は自らの依經を讚歎せん爲に、或は云く、『華嚴經』の教主は報身『法華經』は應身と。或は云く、『法華壽量品』の佛は無明の邊域、『大日經』の佛は明の分位等、云云。雲は月を隱し、讒臣は賢人を隱す。人讃れば黃石も玉と見え、諛臣も賢人かと覺ゆ。今濁世の學者等、彼等の讒義に隱されて、『壽量品』の玉を翫ばず。又天台宗の人人も誑かされて、金石一同の思ひをなせる人人もあり、佛久成に在さずば、所化の少かるべき事を辨ふべきなり。月は影を慳まざれども水なくば映るべからず。佛衆生を化せんと思せども、結緣薄ければ八相を現ぜず。例せば諸の聲聞が初地、初住には上れども、爾前にして自調自度なりしかば、未來の八相を期するなるべし。然れば教主釋尊始成ならば、今

【今參り】 新參。

【四四】 諸宗本尊に惑へることを述ぶ。

【勝應身】 應身に勝劣を分けたる中の勝應身なり。

此の世界の梵帝、日月、四天等は、劫初より此土を領すれども、四十餘年の佛弟子なり。靈山八年の法華結縁の衆、今參りの主君に思ひ着かず、久住の者に捨てらるゝが如し。今久遠實成あらはれぬれば、東方の藥師如來の日光、月光、西方阿彌陀如來の觀音、勢至、乃至十方世界の諸佛の御弟子、「大日」「金剛頂」等の兩部の大日如來の御弟子の諸大菩薩、猶ほ教主釋尊の御弟子なり。諸佛釋迦如來の分身たる上は、諸佛の所化申すに及ばず、何に況んや此土の劫初より來の日月衆星等、教主釋尊の御弟子にあらずや。

【四四】 而るに天台宗より外の諸宗は本尊に惑へり。倶舍、成實、律宗は三十四心斷結成道の釋尊を本尊とせり。天王の太子が迷惑して、我が身は民の子と思ふが如し。華嚴宗、眞言宗、三論宗、法相宗等の四宗は大乘の宗なり。法相三論は勝應身に似たる佛を本尊とす。天王の太子、我が父は侍と思ふが如し。華嚴宗、眞言宗は釋尊を下げて、盧舍那大日等を本尊と定む。天子たる父を下げて、種姓もなき者の法王の如くなるに就けり。淨土宗は釋迦の分身の阿彌陀佛を有縁の佛と思ひて、教主を捨てたり。禪宗は下賤の者、一分の徳あつて父母を下ぐるが如し。佛を下げ經を下す。此れ皆本尊に迷へり。例せば三皇已前は父を知らず、人皆禽獸に同ぜしが如し。「壽量品」を知らざる諸宗の者は畜に同じ、不知恩の者なり。故に妙樂云く、「一代教の中、未だ曾て遠を顯はさず。父母の壽知らざるべからず。若し父の壽の遠を知らざれば、復父統の邦に迷ふ。徒に才能と謂ふとも、全く人の子に非ず」等云云。妙樂大師は唐の末、天寶年中の者なり。三論、華嚴、法相、眞言等

【四五】諸宗が爾前法華の勝劣を知らず、知るとも法華の勝を盜むことを辨ず。

【種子無上】十無上の一、無上は尊勝の意。

【理同事勝】理は法華大日同じきも、事は大日經勝れりといふ判なり。

の諸宗、並に依經を深く見、廣く勘へて、『壽量品』の佛を知らざる者は、父統の邦に迷へる、才能ある畜生と書けるなり。『徒謂才能』とは華嚴宗の法藏、澄觀、乃至眞言宗の善無畏三藏等は才能の人師なれども、子の父を知らざるが如し。傳教大師は日本顯密の元祖『秀句』に云く、『他宗所依の經は一分佛母の義有りと雖も、然れども但だ愛のみあつて嚴の義を闕く。天台法華宗のみ嚴愛の義を具す。一切の賢聖、學無學、及び菩薩の心を發せる者の父なり。』等云云。

【四五】眞言、華嚴等の經經には種熟脱の三義名字すら猶ほ無し、何に況や其義をや。華嚴、眞言經等の一生初地の卽身成佛等は、經は權經にして過去を隱せり。種を知らざる脱なれば、超高が位に登り、道鏡が王位に居せんとせしが如し。宗宗互ひに權を諍ふ。予此を爭はず、但だ經に任すべし。『法華經』の種に依つて、天親菩薩は種子無上を立てたり。天台の一念三千是れなり。『華嚴經』乃至諸大乘經『大日經』等の諸尊の種子、皆一念三千なり。天台智者大師一人此の法門を得給へり。華嚴宗の澄觀、此義を盜んで『華嚴經』の『心如工畫師』の文の神とす。眞言『大日經』等には、二乘作佛、久遠實成、一念三千の法門是れなし。善無畏三藏が震旦に來て後、天台の『止觀』を見て智發し、『大日經』の『心實相、我一切本初』の文の神に、天台の一念三千を盜み入れて、眞言宗の肝心として、其の上に印と眞言とを飾り、『法華經』と『大日經』との勝劣を判ずる時、理同事勝の釋を作れり。兩界の曼荼羅の二乘作佛、十界互具は、一定『大日經』にありや、第一の

【ほのぼのといふ歌】人麿の名歌。

【良諝】正しくは良濟、唐朝天台の學僧、智證大師彼に相承せり。

【攝引門】眞實の教に引入るべき方便門の意。

【會二破二】二乘を會して一乘を顯し、二乘を破して一乘を顯すこと。

【故亦兩存】法相法華の兩つを並存すること、慈恩の弟子鏡水の『玄贊要集』にある文。

誑惑なり。故に傳教大師云く『新來の眞言家は即ち筆受の相承を泯し、舊到の華嚴家は即ち影響の軌模を隱す。』等云云。俘囚の島なんどに渡りて、ほのぼのといふ歌は我詠みたりなんど申さば、夷僻の者は然こそと思ふべし。漢土日本の學者又斯の如し。良諝和尚云く『眞言、禪門、華嚴、三論、乃至、若し法華等に望めば是れ攝引門』等云云。善無畏三藏の閻魔の責に與らせ給ひしは此の邪見に因る。後に心を翻へし『法華經』に歸伏してこそ、此の責をば脫れさせ給ひしか。其後善無畏、不空等、『法華經』を兩界の中央に置きて、大王の如くし、胎藏の『大日經』、金剛の『金剛頂經』をば左右の臣下の如くせし是れなり。日本の弘法も教相の時は、華嚴宗に心を寄せて『法華經』をば第八に置きしかども、事相の時は、實慧、眞雅、圓澄、光定等の人人に傳へ給ひし時、兩界の中央に上の如く置かれたり。例せば三論の嘉祥は『法華玄』十卷に『法華經』を第四時、會二破二と定むれども、天台に歸伏して七年仕へ廢講散衆して身を肉橋となせり。法相の慈恩は『法苑林』七卷十二卷に、一乘方便、三乘眞實等の妄言多し。然れども『玄贊』の第四には『故亦兩存』等と、我宗を不定になせり。言は兩方なれども、心は天台に歸伏せり。華嚴の澄觀は、華嚴の疏を造つて、華嚴法華相對して、『法華』を方便と書けるに似たれども『彼宗之を以て實と爲す、此宗の立義理通ぜざる事なし』等と書けるは、悔い還すにあらずや。善無畏弘法も亦斯の如し。龜鏡なければ我が面を見ず、敵なければ我が非を知らず。眞言等の諸宗の學者等、我が非を知らざりし程に傳教大師に値ひ奉つて、自宗の失を知るなる

べし。

【四六】されば諸經の諸佛、菩薩、人天等は、彼彼の經經にして佛にならせ給ふやうなれども、實には『法華經』にして正覺なり給へり。釋迦諸佛の衆生無邊の總願は、皆此經に於て滿足す。『今者已滿足』の文是れなり。

【四七】予事の由を推量るに、『華嚴』、『觀經』、『大日經』等を讀み修行する人をば其の經經の佛、菩薩、諸天等守護し給ふらん、疑ひあるべからず。但し『大日經』、『觀經』等を讀む行者等、法華經の行者に敵對をなさば彼の行者を捨てて法華經の行者を守護すべし。例せば孝子慈父の王敵となれば、父を捨てて王に參る、孝の至りなり、佛法も亦斯の如し。『法華經』の諸佛菩薩十羅刹、日蓮を守護し給ふ上、淨土宗の六方の諸佛、二十五の菩薩、眞言宗の千二百等、七宗の諸尊守護の善神も日蓮を守護し給ふべし。例せば七宗の守護神が傳教大師を守り給ひしが如しと思ふ。」

【四八】日蓮案じて云く、「『法華經』の二處三會の座に在ましし、日月等の諸天は、法華經の行者出來せば、磁石の鐵を吸ふが如く、月の水に遷るが如く、須臾に來て行者に代りて、佛前の御誓ひを果させ給ふべしとこそ覺え候に、今まで日蓮を訪らひ給はぬは、日蓮『法華經』の行者にあらざるか。されば重ねて經文を勘へて、我身に當てて身の咎を知るべし。」

【四九】疑つて云く、「當世の念佛宗、禪宗等をば、何なる智眼を以て『法華經』の敵人、

【四六】諸經の諸佛乃至人天等法華經に依て成佛せるを述べ、以て法華經の大恩を示す。

【四七】諸佛諸天等及大恩ある法華經の行者を守護すべきを述べ、以て【三二】に照應す。

【孝子云云】聖人の大義名分を示す文。

【四八】未だ守護なきは法華經の行者に非る故かと、行疑を構へて更に證明す。

【二處三會】法華經の說處に靈山會と虛空會と二處あり、虛空會を中に挿んで三會あるをいふ。

【四九】法華經の行者他になきを證す

一切衆生の悪知識とは知るべきや。答へて云く、「私の言を出すべからず、經釋の明鏡を出して謗法の醜面を浮べ、其の失を見せしめん。生盲は力及ばず。」法華經の第四寶塔品に云く、「爾の時に多寶佛、寶塔の中に於て半座を分ち釋迦牟尼佛に與へ給ふ。爾の時に大衆、二如來の七寶の塔の中の師子の座の上に在して結跏趺坐し給ふを見奉る。大音聲を以て普く四衆に告げ給はく、誰か能く此の娑婆國土に於て廣く妙法華經を說かん。今正しく是れ時なり。如來久しからずして當に涅槃に入るべし。佛此の妙法華經を以て、附屬して在ること有らしめんと欲す」等云云。第一の勅宣なり。又曰く、「爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說いて言く、聖主世尊久しく滅度し給ふと雖も、寶塔の中に在して、尙ほ法の爲に來り給へり。諸人云何ぞ勤めて法に爲はざらん。又我が分身の無量の諸佛恒沙等の如く來れるも、法を聽かんと欲して各妙なる土及び弟子衆、天人龍神、諸の供養の事を捨てて、法をして久しく住せしめんが故に、此に來至し給へり。譬へば大風の小樹の枝を吹くが如し。是の方便を以て、法をして久しく住せしむ。諸の大衆に告ぐ、我が滅度の後、誰か能く此の經を護持し讀誦せん。今佛前に於て、自ら誓言を說け。」第二の鳳詔なり。「多寶如來、及び我が身集むる所の化佛、當に此の意を知るべし。」「諸の善男子各諦かに思惟せよ。此れは爲れ難き事なり、宜しく大願を發すべし。諸餘の經典、數恒沙の如し。此等を說くと雖も、未だ爲れ難しとするに足らず。若し須彌を接つて他方無數の佛土に擲げ置かんも、亦未だ爲れ難しとせず。若し佛滅後、惡世の中に於て、能く此經

【五〇】六難九易の何れに屬するかを以て上掲告勅の經が法華經に限ることを證し依て法華經の行者たる證明に充つ。

を說かん、是れ即ち爲れ難し。例ひ劫燒に乾きたる草を擔ひ負ひて、中に入つて燒けざらんも亦未だ爲れ難しとせず。我が滅度の後に若し此經を持ちて、一人の爲にも說かん是れ即ち爲れ難し。諸の善男子、我が滅後に於て、誰か能く此の經を護持し讀誦せん。今佛前に於て、自ら誓言を說け」等云云。第三の諫勅なり。第四第五の二箇の諫曉『提婆品』にあり。下に書くべし。此の經文の心は眼前なり。靑天に大日輪の懸れるが如し、白面に黶あるに似たり。而れども生盲の者と邪眼の者と、各謂自師の者、偏執家の者は見難し。萬難を捨てて道心あらん者に記し留めて見せん。西王母が園の桃、輪王出世の優曇華よりも値ひ難く、沛公が項羽と八年漢土を爭ひし、頼朝と宗盛が七年秋津島に戰ひし、修羅と帝釋と、金翅鳥と龍王と阿耨池に諍へるも、此には過ぐべからずと知るべし。日本國に此の法顯はるる事二度なり。傳教大師と日蓮となりと知れ。無眼の者は疑ふべし、力及ぶべからず。此の經文は日本漢土月氏、龍宮天上、十方世界の一切經の勝劣を、釋迦多寶、十方の佛來集して定め給ふなるべし。」

【五一】問うて云く『華嚴經』、『方等經』、『般若經』、『深密經』、『楞伽經』、『大日經』、『涅槃經』等は九易の中か、六難の内か。答へて云く、『華嚴宗』の杜順、智儼、法藏、澄觀等の三藏大師讀んで云く、『華嚴經』と『法華經』とは六難の内、名は二經なれども、所說乃至理是れ同じ。四門觀別なれども見諦を見ること同きが如し。法相の玄奘三藏、慈恩大師等讀んで云く、『深密經』と『法華經』とは同じく唯識の法門にして、第三時の敎へ、

【了義經、不了義經】義理圓滿の經と圓滿ならざる經。
【黒論、白論】不明なる論と明了なる論。
【莊嚴己義】自己の教義を飾ること

六難の内なり。三論の吉藏等讀んで云く、『般若經』と『法華經』とは名異體同、二經一法なり。善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏等讀んで云く、『大日經』と『法華經』とは理同じ、同じく六難の内の經なり。日本の弘法讀んで云く、『大日經』は六難九易の内にあらず、『大日經』は釋迦所說の一切經の外、法身大日如來の所說なり。又或人云く、『華嚴經』は報身如來の所說、六難九易の内にはあらず。此の四宗の元祖等、賢僧に讀みければ其の流を汲む數千の學徒等も又此の見を出でず。日蓮嘆いて云く、上の諸人の義を左右なく非なりと言はゞ當世の諸人面を向くべからず。非に非を重ね、結句は國主に讒奏して、命に及ぶべし。但し我等が慈父、雙林最後の御遺言に云く、「法に依つて人に依らざれ」等云云。人に依らず等とは、初依、二依、三依、第四依なり。普賢、文殊等の等覺の菩薩法門を說き給ふとも、經を手に握らざらんをば用ゆべからず。了義經に依れ不了義經に依らざれと定めて、經の中にも了義不了義經を糾明して、信受すべきにこそ候ひぬれ。龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』に云く、「修多羅黒論に依らずして、修多羅白論に依れ」等云云。天台大師云く、「修多羅と合ふ者は錄して之を用ゐよ。文なく義なきは信受すべからず」等云云。傳教大師云く、「佛說に依憑して、口傳を信ずること莫れ」等云云。圓珍智證大師云く、「文に依つて傳ふべし」等云云。上に擧ぐる所の諸師の釋皆一分經論に依つて勝劣を辨ふるやうなれども、皆自宗を堅く信受し、先師の謬義を糾さざる故に、曲會私情の勝劣なり、莊嚴己義の法門なり。佛滅後の犢子方廣、後漢已後の外典は、佛法外の外道の見よりも、

【索胆纜】(Sūtra)の異音譯、契經又は經と譯す。【毘奈耶】(Vinaya)の音譯、調伏又は律と譯す。【阿毘達磨】(Abhidharma)の音譯、對法又は論と譯す。

三皇五帝の儒書よりも邪見強盛なり、邪法巧みなり。華嚴、法相、眞言等の人師、天台宗の正義を嫉む故に、實經の文を會して權義に順ぜしむること强盛なり。然れども道心あらん人は偏黨を捨て、自他宗を爭はず、人を侮づる事なかれ。『法華經』に云く『已今當』等云云。妙樂云く『縱ひ經あつて諸經の王と云ふとも、已今當說最爲第一とは云はず』等云云。又云く『已今當の妙茲に於て固く迷ふ謗法の罪苦長劫に流る』等云云。此經釋に驚いて、一切經竝に人師の疏釋を見るに、狐疑の冰解けぬ。今眞言の愚者等印眞言のあるを恃みて眞言宗は『法華經』に勝れたりと思ひ、慈覺大師等の眞言勝れたりと仰せられぬればなんど思へるは言ふに效なき事なり。『密嚴經』に云く『十地華嚴等と、大樹と神通、勝鬘、及び餘經と、皆此經より出でたり。是の如きの密嚴經は一切經の中に勝れたり。』等云云。『大雲經』に云く『是の經は即ち是れ諸經の轉輪聖王なり。何を以ての故に、是の經典の中に衆生の實性、佛性、常住の法藏を宣說する故なり。』等云云。『六波羅蜜經』に云く『所謂る過去無量の諸佛所說の正法、及び我が今說く所の所謂る八萬四千の諸の妙法蘊、攝して五分と爲す。一には索胆纜、二には毘奈耶、三には阿毘達磨、四には般若波羅蜜多、五には陀羅尼門なり。此の五種の藏を以て、有情を教化す。若し彼の有情、契經、調伏、對法、般若を受持すること能はず、或は復有情、諸の惡業、四重、八重、五無間罪、方等經を謗ずる一闡提等の、種々の重罪を造るに、消滅して速疾に解脫し、頓に涅槃を悟ることを得せしむ。而も彼が爲に諸の陀羅尼藏を說く。此の五の法藏は譬へば乳、

【般若波羅蜜多】(Prajñāpāramitā)の音譯智度と譯す。

【陀羅尼】(Dhāraṇī)の音譯總持と譯す。

【發趣】發願又は希望の意。

酪、生蘇、熟蘇及び妙なる醍醐の如し。總持門とは、譬へば醍醐の如し。醍醐の味は乳、酪、蘇の中に微妙第一にして、能く諸の病を除き、諸の有情をして身心安樂ならしむ。總持門とは、契經等の中に最も是れ第一にして能く重罪を除く」等云云『解深密經』に云く「爾の時に勝義生菩薩復佛に白して言く、世尊初め一時に於て、波羅痆斯仙人の墮處、施鹿林の中に在つて、唯だ聲聞乘を發趣する者の爲めに、四諦の相を以て正法輪を轉じ給ひき。是れ甚だ奇、甚だ爲れ希有なり。一切世間の諸の天人等、先より能く法の如く轉ずる者あることなしと雖も、而も彼の時に於て轉じ給ふ所の法輪は、有上なり、有容なり、是れ未了義なり、是れ諸の諍論安足の處なり。世尊昔第二時の中に、唯だ發趣して大乘を修する者の爲め、一切の法は皆自性なく、無生無滅にして、本來寂靜なり。自性涅槃なるに依り、隱密の相を以て正法輪を轉じ給ひき。更に甚だ奇にして、甚だ爲れ希有なりと雖も、而も彼の時に於て轉じ給ふ所の法輪、亦是れ有上なり、容受する所あり、猶ほ未だ了義ならず、是れ諸の諍論安足の處なり。世尊今第三時の中に於て、普く一切乘を發趣する者の爲に、一切の法は皆自性なく、無生無滅、本來寂靜、自性の涅槃にして自性の性なきに依り、顯了の相を以て正法輪を轉じ給ふ。第一甚だ奇にして最も爲れ希有なり。今に于いて世尊轉じ給ふ所の法輪、無上無容にして、是れ眞の了義なり、諸の諍論安足の所にあらず。」等云云『大般若經』に曰く「聽聞する所の世出世の法に隨つて、皆能く方便して般若甚深の理趣に會入し、諸の造作する所の世間の事業も亦般若を以て法性

に會入し、一事として法相を出る者を見ず。」等云云。『大日經』第一に曰く、「祕密主大乘行あり、無緣乘の心を發す。法に我性なし。何を以ての故に、彼の往昔是の如く修業せし者の如く、蘊の阿賴耶を觀察して、自性幻の如しと知る。」等云云。又曰く、「祕密主、彼是の如く無我を捨て、心主自在にして、自心の本不生を覺す。」等云云。又云く、「所謂る空性は根境を離れて無相にして境界なく、諸の戲論に越えて、虛空に等同なり。乃至極無自性。」等云云。又云く、「大日尊祕密主に告げて言く、祕密主、云何なるか菩提たる、謂く、實の如く自心を知る。」等云云。『華嚴經』に云く、「一切世界の諸の群生、聲聞乘を求めんと欲すること有ること尠し。緣覺を求むる者、轉た復少し、大乘を求むる者、甚だ希有なり。大乘を求むる者猶ほ爲れ易く、能く是の法を信ずる是れ甚だ難し。況や能く受持し、正憶念し、說の如く修行し、眞實に解せんをや。若し三千大千界を以て頂戴すること一劫、身動かざらんも、彼の所作未だ爲れ難からず。是法を信ずるは是れ甚だ難し。大千塵數の衆生の類に、一劫諸の樂具を供養せんも、彼の功德未だ爲れ勝れず、是の法を信ずるは爲れ殊勝なり。若し掌を以て十佛刹を持し、虛空中に於て住すること一劫なるも、彼の所作未だ爲れ難からず。是の法を信ずるは爲れ甚だ難し。十佛刹塵の衆生の類に、一劫諸の樂具を供養せんも、彼の功德未だ勝れりとせず。是法を信ずるは爲れ殊勝なり。十佛刹塵の諸の如來を、一劫恭敬し供養せん。若し能く此の品を受持せん者の功德彼よりも最勝と爲す。」等云云。『涅槃經』に云く、「是の諸の大乘方等經典、復無量の功德

【五二】法華經の六難九易を知ることは法華經と諸經との勝劣を知る樞要なるを斷ず。

を成就すと雖も、是の經に比せんと欲するに、喩へを得ざること百倍千倍百千萬億倍、乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。善男子、譬へば牛より乳を出し、乳より酪を出し、酪より生蘇を出し、生蘇より熟蘇を出し、熟蘇より醍醐を出す。醍醐は最上なり、若し服することある者は、衆病皆除き、所有の諸藥も悉く其中に入るが如し。善男子、佛も亦是の如し。佛より十二部經を出し、十二部經より修多羅を出し、修多羅より方等經を出し、方等經より般若波羅蜜を出し、般若波羅蜜より大涅槃を出す、猶ほ醍醐の如し。醍醐と云ふは佛性に喩ふ」等云云。此等の經文を法華經の已今當六難九易に相對すれば、月に星を並べ、九山に須彌を合せたるに似たり。

【五二】然れども華嚴宗の澄觀、法相、三論、眞言等の慈恩、嘉祥、弘法等の佛眼の如くなる人、猶ほ此の文に惑へり。何に況んや盲眼の如くなる當世の學者等、勝劣を辨ふべしや。黑白の如く明かに、須彌芥子の如くなる勝劣猶ほ惑へり。況んや虛空の如くなる理に迷はざるべしや。教の淺深を知らざれば、理の淺深を辨ふものなし。卷を隔て、文前後すれば、教門の色辨へ難ければ、文を出して愚者を扶けんと思ふ。王に小王大王、一切に少分全分、五乳に全喩分喩を辨ふべし。六波羅蜜經は有情の成佛あつて無性の成佛なし、何に況んや久遠實成を明さず。猶ほ『涅槃經』の五味に及ばず、何に況んや『法華經』の迹門本門に對すべしや。而るに日本の弘法大師此の經文に惑ひ給ひて『法華經』を第四の熟蘇味に入れ給へり。第五の總持門の醍醐味すら『涅槃經』に及ばず、いかにし給ひけ

【一渧云云】樞機を握ることの肝要なるを力說せる文。

【當世日本國云云】聖人の自覺法悦を示す文。

【五二】提婆品の二箇の諫曉を擧げて、二【四九】の文に合せ、法華の超勝と末法爲正法とを證し以て謗法を結せんとす。

【五逆七逆】無間地獄に墮つべき五種及び七種の重罪。罪名は諸說あり。

るやらん。而るを『震旦の人師、爭つて醍醐を盜むこと』天台等を盜人と書き給へり。「惜い哉古賢醍醐を嘗めず。」等と自歎せられたり。此等は推措く、我が一門の者の爲に記す、他人は信ぜざれば逆緣なるべし。一渧を嘗めて大海の潮を知り、一華を見て春を推せよ。萬里を渡りて宋に入らずとも、三箇年を經て靈山に到らずとも、龍樹の如く龍宮に入らずとも、無著菩薩の如く彌勒菩薩に値はずとも、二處三會に値はずとも、一代の勝劣はこれを知れるなるべし。蛇は七日が內の洪水を知る、龍の眷屬なる故。烏は年中の吉凶を知れり、過去に陰陽師なりし故。鳥は飛ぶ德人に勝れたり。日蓮は諸經の勝劣を知ること、華嚴の澄觀、三論の嘉祥、法相の慈恩、眞言の弘法に勝れたり。天台、傳敎の跡を偲ぶ故なり。彼の人人は天台、傳敎に歸せさせ給はずば、謗法の失脫れさせ給ふべしや。當世日本國に、第一に富める者は日蓮なるべし。命は法華經に奉り、名をば後代に留むべし。大海の主となれば、諸の河神皆從ふ。須彌山の王に諸の山神從はざるべしや。『法華經』の六難九易を辨ふれば、一切經讀まざるに從ふべし。

【五三】『寶塔品』の三個の勅宣の上に、『提婆品』に二個の諫曉あり。提婆達多は一闡提なり、天王如來と記せらる。『涅槃經』四十卷の現證は此の品にあり。善星、阿闍世等の無量の五逆謗法の者の一を擧げ頭を上げ、萬を收め枝を從ふ、一切の五逆、七逆、謗法、闡提、天王如來に現はれ了んぬ。毒藥變じて甘露となる、衆味に勝れたり。龍女が成佛此れ一人にはあらず、一切の女人の成佛を現はす。法華已前の諸の小乘經には、女人の成佛を

【五三】經文によつて三類の强敵を出す。

【阿練若】（Aranya）の音譯、空閑寂靜なる處。

【納衣】糞掃衣のこと。

許さず。諸の大乘經には成佛往生を許すやうなれども、或は改轉の成佛にして、一念三千の成佛にあらざれば、有名無實の成佛往生なり。擧一例諸と申して、龍女が成佛は末代の女人の成佛往生の道を踏み明けたるなるべし。儒家の孝養は今生に限る、未來の父母を扶けざれば、外家の聖賢は有名無實なり。外道は過未を知れども、父母を扶くる道なし。佛道こそ父母の後世を扶くれば、聖賢の名はあるべけれ。然れども、法華經已前等の大小乘の經宗は、自身の得道猶ほ叶ひがたし、何に況んや父母をや、但文のみあつて義なし。今、法華經の時こそ、女人成佛の時、悲母の成佛も顯はれ、達多の惡人成佛の時、慈父の成佛も顯はるれ。此經は內典の孝經なり。二箇の諫め了んぬ。

【五三】已上五箇の鳳詔に驚いて、「勸持品」の弘經あり。明鏡の經文を出して、當世の禪、律、念佛者、並びに諸檀那の謗法を知らしめん。日蓮といひし者は、去年九月十二日子丑の時に頸刎ねられぬ。此は魂魄佐渡の國に至りて、返る年の二月、雪中に記して有縁の弟子へ贈れば、恐ろしくて怖ろしからず、見ん人如何に怖ぢぬらむ。此は釋迦多寶十方の諸佛の、未來日本國當世を寫し給ふ明鏡なり、紀念とも見るべし。「勸持品」に云く、「唯願くは慮ひし給ふべからず。佛滅度の後、恐怖惡世の中に於て、我等當に廣く說くべし。諸の無智の人の惡口罵詈等し、及び刀杖を加ふる者あらん、我等皆當に忍ぶべし。惡世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、未だ得ざるを爲れ得たりと謂ひ、我慢の心充滿せん。或は阿練若に、納衣にして空閑に在つて、自ら眞の道を行ずと謂つて、人間を輕賤する者

【記】【東春】等は[illegible]鈔に於て證明せり。

あらん。利養に貪著するが故に、白衣の爲に法を說いて、世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん。是の人惡心を懷き、常に世俗の事を念ひ、名を阿練若に假つて、好んで我等が過を出さん。常に大衆の中に在つて、我等を毀らんと欲するが故に、國王、大臣、婆羅門、居士、及び餘の比丘衆に向つて、誹謗して我が惡を說いて是れ邪見の人、外道の論議を說くと謂はん。濁劫惡世の中には、多く諸の恐怖あらん。惡鬼其身に入つて、我を罵詈毀辱せん。濁世の惡比丘は、佛の方便、隨宜所說の法を知らず、惡口して顰蹙し、數數擯出せられん」等云云。『記』の八に云く、「文に三、初の一行は通じて邪人を明す、卽ち俗衆なり。次の一行は道門增上慢の者を明す。三に七行は僭聖增上慢の者を明す。此の三の中に初の者は忍ぶべし、次の者は前に過ぎたり、第三最も甚し。後後の者は轉た識り難きを以ての故に」等云云。『東春』に智度法師云く、「初めに有諸より下の五行は、第一に一偈は三業の惡を忍ぶ、是れ外惡の人なり。次に惡世の下の、一偈は是れ上慢出家の人なり。第三に或有阿練若より下の三偈は、卽ち是れ出家の處に一切の惡人を攝す」。又云く、「常在大衆より下の兩行は、公處に向つて法を毀り人を謗ず」等云云。『涅槃經』の九に云く、「善男子、一闡提あり羅漢の像を作して空處に住し、方等大乘經典を誹謗せん。諸の凡夫の人見已つて、皆眞の阿羅漢是れ大菩薩なりと謂はん」等云云。又云く、「爾の時に是の經、閻浮提に於て當に廣く流布すべし。是の時當に諸の惡比丘有つて是の經を抄略し、分つて多分と作し、能く正法の色香美味を滅すべし、是の諸の惡人、復

【五四】當世の三類の怨敵及び法華經の行者を指摘せんとして先づ疑を構ふ。

【鷲峰雙林の日月】法華經涅槃經を說處を以て表はし、之を日月に譬ふ。

是の如き經典を讀誦すと雖も、如來の深密の要義を滅除して、世間の莊嚴の文飾無義の語を安置す。前を抄して後に著け、後を抄して前に著け、前後を中に著け、中を前後に著く、當に知るべし、是の如きの諸の惡比丘は是れ魔の伴侶なり』等云云。六卷の『般泥洹經』に云く、『阿羅漢に似たる一闡提有つて惡業を行じ、一闡提に似たる阿羅漢有つて慈心を作さん。羅漢に似たる一闡提ありとは是の諸の衆生方等を誹謗せるなり。一闡提に似たる阿羅漢とは、聲聞を毀呰し廣く方等を說くなり。衆生に語げて言く、我汝等と倶に是れ菩薩なり。所以は何ん、一切皆如來の性有るが故にと。然も彼の衆生、一闡提なりと謂はん。』等云云。『涅槃經』に云く、『我涅槃の後、乃至正法滅して後、像法の中に於て、當に比丘有るべし。持律に似像して少かに經を讀誦し、飲食を貪嗜し、其の身を長養す。袈裟を服すと雖も、猶ほ獵師の細視徐行するが如く、猫の鼠を伺ふが如し。常に是の言を唱へん、我羅漢を得たりと。外には賢善を現はし、内には貪嫉を懷かん。啞法を受けたる婆羅門等の如し。實に沙門に非ずして沙門の像を現じ、邪見熾盛にして正法を誹謗せん。』等云云。

【五四】夫れ鷲峯雙林の日月、毘壇東春の明鏡に、當世の諸宗竝に國中の禪、律、念佛者が醜面を浮べたるに、一分も曇りなし。『妙法蓮華經』に云く、『於佛滅度後、恐怖惡世中。』『安樂行品』に云く、『於後惡世』又云く、『於末世中。』又云く、『於後末世、法欲滅時。』『分別功德品』に云く、『惡世末法時。』『藥王品』に云く、『後五百歲』等云云。『正法華經の勸說品』に云く、『然後來末世』等云云。『添品法華經』に云く等。天台の云く、『像法の中、南三

【毗壇】は妙樂の釋のこと、妙樂の住處毗陵（毗壇ともいふ）にありし故に名く。

北七は法華經の怨敵なり。」傳敎の云く、「像法の末、南都六宗の學者は法華の怨敵なり。」等云云。彼等の時は未だ分明ならず。此は敎主釋尊多寶佛、寶塔の中に日月の並ぶが如く、十方分身の諸佛、樹下に星を列ねたりし中にして、正法一千年、像法一千年、二千年過ぎて末法の始めに「法華經」の怨敵三類あるべしと、八十萬億那由佗の諸菩薩の定め給ひし、虛妄となるべしや。當世は如來滅後二千二百餘年なり。大地を指さば外るとも、春は花は咲かずとも、三類の敵人必ず日本國にあるべし。さるにては、誰誰の人人か三類の中なるらん、又誰人か法華經の行者なりと指されたるらん、覺束なし。彼の三類の怨敵に我等入りてやあるらん、又法華經の行者の中にてやあるらん、覺束なし。周の第四昭王の御宇二十四年、甲寅四月八日の夜中に、天に五色の光氣、南北に亙つて晝の如し。大地六種に震動し、雨降らずして江河井池の水增さり、一切の草木に花咲き果實りたりけり、不思議なりし事なり。昭王大に驚く。大史蘇由占つて云く、西方に聖人生れたり。昭王問うて云く、此國如何。答へて云く、事なし。一千年の後に彼の聖言此の國に渡つて衆生を利すべし。彼は僅の外典の一毫未斷見思の者、然れども一千年の事を知る。果して佛敎一千一十五年と申せし、後漢の第二明帝の永平十年丁卯の年、佛法漢土に渡る。此は似るべくもなき、釋迦多寶、十方分身の佛の御前の諸菩薩の未來記なり。當世日本國に、三類の法華經の敵人なかるべしや。されば佛、「付法藏經」等に記して云く、「我が滅後に正法一千年が間、我が正法を弘むべき人、二十四人次第に相續すべし。」迦葉、阿難等は且措きぬ。一百

【五五】俗衆增上慢を示す。

【五六】道門增上慢を示す。

年の脇比丘、六百年の馬鳴、七百年の龍樹菩薩等、一分も違はず已に出で給ひぬ。此事如何お答しかるべき。此經相違せば、一經皆相違すべし。所謂る舍利弗が未來の華光如來、迦葉の光明如來も皆妄語となるべし。爾前返つて一定となりて、永不成佛の諸聲聞なり、犬野干を、供養すとも、阿難等をば供養すべからずとなん。如何せん、如何がせん。」

【五五】第一の「有諸無智人」と云ふは經文の第二の「惡世中比丘」と第三の「納衣の比丘の大檀那」等と見えたり。隨つて妙樂大師は俗衆等云云。「東春」に云く、「公處に向ふ」等云云。

【五六】第二の法華經の怨敵は、經に云く、「惡世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に未だ得ざるを爲れ得たりと謂ひ、我慢の心充滿せん。」等云云。「涅槃經」に云く、「是の時に、當に諸の惡比丘あるべし、乃至、是の諸の惡人復、是の如き經典を讀誦すと雖も、如來深密の要義を滅除せん。」等云云。「止觀」に云く、「若し信無きは、高く聖境に推して、己が智分に非ずとす。若し智なきは、增上慢を起し、己れ佛に均しと謂ふ。」等云云。道綽禪師が云く、「二に理深解微なるに由る。」等云云。法然云く、「諸行は機に非ず時を失ふ。」等云云。「記」の十に云く、「恐らくは人謬り解せん者、初心の功德の大なることを識らずして、而して功を上位に推して此の初心を蔑にせん。故に今彼の行淺く功深きことを示し、以つて經力を顯はす。」等云云。傳教大師云く、「正像稍過ぎ已つて、末法太だ近きにあり。法華一乘の機、今正しく是れ其時なり。何を以て知ることを得る、「安樂行品」に云く、末世法

【大經】大涅槃經のこと。

【相待妙絶待妙】前三教に相對する圓、四教超越の圓。

滅の時なり。」等云云。慧心の云く、「日本一州圓機純一なり。」等云云。道綽と、傳教と、法然と慧心と、何れ此を信ずべしや。彼は一切經に證文なし。此は正しく「法華經」に依れり。其上日本國一同に、叡山の大師は受戒の師なり。何ぞ天魔の付ける法然に心を寄せ、我が剃頭の師を投げ棄つるや。法然智者ならば、何ぞ此釋を選擇に載せて和會せざる。人の理を隱せる者なり。第二の「惡世中比丘」と指さるるは、法然等の無戒邪見の者なり。「涅槃經」に云く、「我等悉く邪見の人と名づく。」等云云。妙樂云く、「自ら三教を指して皆邪見と名く。」等云云。「止觀」に云く、「大經に云く。此よりの前は我等皆邪見の人と名くるなり、邪豈に惡に非ずや。」等云云。「弘決」に云く、「邪は即ち是れ惡なり。是故に正に知るべし、唯圓を善と爲す。復二意あり、一には順を以て善と爲し、背を以て惡と爲す、相待の意なり。著を以て惡と爲し、達を以て善と爲す、相待、絶待、倶に須らく惡を離るべく、圓に著する尙ほ惡なり、況んや復餘をや。」等云云。外道の善惡は、小乘經に對すれば皆惡道、小乘の善道乃至四味三教は「法華經」に對すれば皆邪惡、但だ「法華」のみ正善なり。爾前の圓は相待妙、絶待妙に對すれば猶ほ惡なり。前三教に摂すれば、猶ほ惡道なり。爾前の如く彼の經の極理を行ずる猶ほ惡道なり。況んや「觀經」等の、猶ほ「華嚴」、「般若經」等に及ばざる小法を本として、「法華經」を「觀經」に取り入れて、還つて念佛に對して閣抛閉捨せる法然並びに所化の弟子等檀那等は、誹謗正法の者にあらずや。釋迦多寶十方の諸佛は、法をして久しく住せしめんが故に、此に來至し給へり。法然並び

【五七】僭聖增上慢を示す。

に日本國の念佛者等は、『法華經』は末法に念佛より前に滅盡すべしと、豈に三聖の怨敵にあらずや。

【五七】第三の怨敵は『法華經』に云く、「或は阿練若に納衣にして空閑に在つて、乃至白衣の與めに法を說いて、世に恭敬せらるること、六通の羅漢の如くならん。」等云云。六卷の『般泥洹經』に云く、「羅漢に似たる一闡提有つて惡業を行じ、一闡提に似たる阿羅漢有つて慈心を作さん。羅漢に似たる一闡提ありとは、是れ諸の衆生の方等を誹謗するなり。一闡提に似たる阿羅漢とは、聲聞を毀呰して廣く方等を說き、衆生に語げて言く、我汝等と倶に此れ菩薩なり。所以は何ん、一切皆如來の性あるが故にと。然も彼の衆生は一闡提と謂はん。」等云云。『涅槃經』に云く、「我涅槃の後、像法の中に於て、當に比丘あるべし。持律に似像して少かに經典を讀誦し、飲食を貪嗜し其の身を長養す。袈裟を服すと雖も猶ほ獵師の細視徐行するが如く、猫の鼠を伺ふが如し。常に是の言を唱へん、我羅漢を得たりと。外には賢善を現はし內には貪嫉を懷かん。瘂法を受けたる婆羅門等の如く、實には沙門に非ずして沙門の像を現じ、邪見熾盛にして正法を誹謗せん。」等云云。妙樂云く、『第三最も甚し。後後の者は轉た識り難きを以ての故に。』等云云。『東春』に云く、『第三に惑有阿練若の下の三偈は卽ち是れ出家の所に一切の惡人を攝す。』等云云。『東春』に『卽ち是れ出家の所に一切の惡人を攝す。』等とは、當世日本國には何れの處ぞや。叡山か園城か東寺か南都か建仁寺か壽福寺か建長寺か、能く能く尋ぬべし。延曆寺の出家の頭に甲冑

【補註】従義の天台三大部補註の略
【止】止觀の略。
【弘】弘決の略。

を甲ふを指すべきか。園城寺の五分法身の膚に鎧杖を帯せるか、彼等は經文に「納衣在空閑」と指すには似ず。「為世所恭敬如六通羅漢」と人思はず。又「轉難識故」と言ふべしや。華洛には聖一等、鎌倉には良觀等に似たり。人を怨む事なかれ。眼あらば經文に我身を合はせよ。「止觀」の第一に云く、「止觀の明靜なること前代未だ聞かず。」等云云。「弘決」の一に云く、「漢の明帝夜夢みしより陳朝に洎ぶまで預め禪門に厠はりて、衣鉢傳授する者」等云云。「補註」に云く、「衣鉢傳授とは達磨を指す。」等云云。「止」の五に云く、「又一種の禪人、乃至盲跛の師徒、二人倶に墮落す。」等云云。「止」の七に云く、「九の意世間の文字の法師と共ならず、亦事相の禪師と共ならず。一種の禪師は、唯だ觀心の一意のみあり。或は淺く或は僞る。餘の九は全く無し。此れ虚言にあらず、後賢眼あらん者は、當に證知すべきなり。」「弘」の七に云く、「文字法師とは内に觀解なくして法相を構ふるなり。事相の禪師とは、境智を閑はず鼻膈に心を止む、乃至根本有漏定等なり。一師唯觀心の一意有り等とは此は且らく與へて論を爲す、奪へば則ち觀解倶に闕く。世間の禪人偏へに理觀を尚んで、既に經を誦んぜず。觀を以て經を消し、八邪八風を數へて、丈六の佛と爲し、五陰三毒を合して、名けて八邪と爲し、六入を用て六通と爲し、四大を以て四諦と爲す。此の如く經を解するは、僞の中の僞なり。何ぞ淺く論ずべけんや。」等云云。「止觀」の七に云く、「昔鄴洛の禪師名は河海に播き、住する時は則ち四方雲の如くに仰ぎ、去る時は即ち阡陌群を成す。隱隱轟轟亦何の利益かある。臨終に皆悔ゆ。」等云云。「弘」の七に云く、

【五八】三類の強敵を總結す。

【證伏】其義に伏する意。

一、洛陽の西南とは、西は相州に在り、即ち鎌倉の都する所なり。東に佛法を興す。西國の一其の地を王化す。時人の宜を識つて其の名を出さず。洛は即ち洛陽なり」等云云。六卷の「般泥洹經」に云く、「究竟の處を見ずとは、彼の一闡提の輩の究竟の惡業を見ざるなり。」等云云。妙樂云く、「第三最も甚し、轉た識り難き故に」等云云。

【五九】無眼の者、一眼の者、邪見の者は末法の始めの三類を見るべからず。一分の佛眼を得たる者は此を知るべし。「向國王大臣婆羅門居士」等云云。「東春」に云く、「公處に向つて法を毀り人を謗す」等云云。夫れ昔像法の末には、護命、修圓等奏狀を捧げて、傳敎大師を讒奏す。今末法の始めには、良觀、念阿等偽書を註して將軍家に捧ぐ、豈に三類の怨敵にあらずや。當世の念佛者等、天台法華宗の檀那の國王、大臣、婆羅門、居士等に向つて云く、「法華經は理深、我等は解微、法は至つて深く機は至つて淺し」等と申し昧むるは、「高推聖境、非己智分」の者にあらずや。禪宗等の云く、「法華經は月を指す指、禪宗は月なり。月を得て、指何かせん。禪は佛の心、法華經は佛の言なり。佛、法華經等の一切經を說かせ給ひて後、最後に、一拈の華を拈つて迦葉一人に授く。其の證據に、佛の御袈裟を迦葉に付屬し、乃至付法藏の二十八、六祖までに傳ふ」等云云。此等の大妄語、國中を誑醉せしめて年久し。又天台、眞言の高僧等、名は其家に得たれども我宗に暗し。貪欲は深し、公家武家を恐れて、此義を證伏し讃歎す。昔の多寶分身の諸佛は、「法華經」の「令法久住」を證明す。今天台宗の碩徳は、理深解微を證伏せり。かるが故に日本國に但だ「法華經」

【五九】正しく法華経の行者を證し【二九】【三〇】に照應す。

【六〇】加護なきを難じて行者の資格を疑ひ、行者と難加護なきを述べて行者を證す。

の名のみあつて、得道の人一人も無し、誰をか『法華経』の行者とせん、寺塔を焼いて流罪せらるる僧侶は数を知らず、公家武家に諛ひて憎まるる高僧是れ多し。此等を法華経の行者と言ふべきか。

【五九】仏語空しからざれば、三類の怨敵已に国中に充満せり。金言の破るべきかの故に『法華経』の行者なし。如何がせん如何がせん。抑誰やの人か衆俗に悪口罵詈せらるる。誰の僧か刀杖を加へらるる。誰の僧をか『法華経』の故に公家武家に奏する。誰の僧か『数数見擯出』と度度流さるる。日蓮より外に日本国に取り出さんとするに人なし。日蓮は『法華経』の行者にあらず、天これを捨て給ふ故に、誰をか当世の『法華経』の行者として仏語を実語とせん。仏と提婆とは身と影との如し、生生に離れず。聖徳太子と守屋とは蓮華の花菓同時なるが如し。『法華経』の行者あらば、必ず三類の怨敵あるべし。三類は已にあり、『法華経』の行者は誰なるらむ。求めて師とすべし、一眼の亀の浮木に値ふなるべし。」

【六〇】或人云く、「当世の三類は略有るに似たり、但し『法華経』の行者なし。汝を『法華経』の行者と言はんとすれば、大なる相違あり。此の経に云く、『天の諸の童子以て給使を為さん』、刀杖も加へず、毒も害すること能はず。又云く、『若し人悪罵すれば、口則ち閉塞す』。又云く、『現世には安穏にして、後には善処に生れん』等云云。又云く、『頭破れて七分と作ること阿梨樹の枝の如くならん』。又云く、『亦現世に於て其の福報を得ん』等。又

【六三】大小の難を以て過去の宿業となし、値て善く謗法の罪因を捨つる故とす

云く、「若し復是の經典を受持する者を見て、其の過惡を出さんに、若しは實にもあれ、若しは不實にもあれ、此人現世に白癩の病を得ん」等云云。答へて曰く、「汝が疑ひ大に吉し、序に不審を晴らさん。『不輕品』に云く、『惡口罵詈』等。又云く、『或は杖木瓦石を以て之を打擲す』等云云。『涅槃經』に云く、『若は殺、若は害』等云云。『法華經』に云く、『而かも此經は如來の現在にすら、猶ほ怨嫉多し』等云云。佛は小指を提婆に破られ、九横の大難に値ひ給ふ。此は『法華經』の行者にあらずや。不輕菩薩は一乘の行者といはれまじきか。目連は竹杖に殺さる、『法華經』記前の後なり。付法藏の第十四の提婆菩薩、第廿五の師子尊者の二人は人に殺されぬ。此等は『法華經』の行者にはあらざるか。竺の道生は蘇山に流されぬ。法道は火印を面に燒いて江南に移さる。此等は一乘の持者にあらざるか。北野の天神、白居易は遠流せらる、賢人にあらざるか。」

【六三】事の心を案ずるに、「前生に『法華經』誹謗の罪なきもの、今生に『法華經』を行ず。これを世間の失に寄せ、或は罪なきを怨すれば、忽ち現罰あるか。修羅が帝釋を射る、金翅鳥の阿耨池に入る等、必ず返つて一時に損するが如し。天台云く、『今我が疾苦は皆過去に由る、今生の修福は報將來に在り』等云云。『心地觀經』に云く、『過去の因を知らんと欲せば、其の現在の果を見よ。未來の果を知らんと欲せば、其の現在の因を見よ』等云云。『不輕品』に云く、『其の罪畢へ已つて』等云云。不輕菩薩は過去に『法華經』を謗じ給ふ罪身にある故に、瓦石を蒙ると見えたり。又順次生に必ず地獄に墮つべき者は、重罪を

【六二】法華経の行者は加護の有無を超越すべきを断ず。

造るとも現罰なし、一闡提人是れなり」。『涅槃経』に云く「迦葉菩薩仏に白して言く、世尊、仏の所説の如きは大涅槃の光り一切衆生の毛孔に入る」等云云。又云く「迦葉菩薩仏に白して言く、世尊、云何ぞ未だ菩提心を発さざる者、菩提の因を得ん」等云云。仏此の問ひを答へて云く「仏迦葉に告げ給はく、若し是の『大涅槃経』を聞き、我れ菩提心を発すことを用ゐずと言つて、正法を誹謗すること有らんに、是の人即時に夜夢の中に於て、羅刹の像を見て、心中怖畏せん。羅刹語げて言く、咄し善男子、汝今若し菩提心を発さずんば、当に汝が命を断つべし。此の人惶怖し、寤め已つて即ち菩提の心を発さん。当に知るべし、是人是れ大菩薩なりと」等云云。いたうの大悪人ならざる者が、正法を誹謗すれば、即時に夢みて覚る心生ず。又云く「枯木石山」等。又云く「燋種甘雨に遇ふと雖も」等。又云く「明珠淤泥」等。又云く「人の手に創あるに、毒薬を捉るが如し」。又云く「大雨空に住せず」等云云。此等の多くの譬へあり。詮ずる所、上品の一闡提人になりぬれば、順次生に必ず無間獄に堕つべき故に、現罰なし。例せば夏の桀、殷の紂の世には天変なし。重科あつて、必ず世亡ぶべき故か。又守護神此国を捨つる故に、現罰なきか。謗法の世をば守護神捨て去り、諸天守るべからず。かるが故に正法を行ずる者にしるしなし、還つて大難に値ふべし。『金光明経』に云く「善業を修する者は日日に衰減す」等云云。悪国悪時是れなり。具さには『立正安国論』に勘へたるが如し。

【六二】詮ずる所は天も捨て給へ、諸難にも値へ、身命を期とせん。身子が六十劫の菩薩

【身子】舍利弗のこと。
【三五の塵】三千塵點、五百塵點。
【我日本の柱六六】有名なる三大誓願の文。
【六三】前段に過去の宿業とせる理由を説明し以て法華經の行者たる資格を證明す。

の行を退せしは、乞眼の婆羅門の責を堪へざる故、久遠大通の者の三五の塵を經る、惡知識に値ふ故なり。善に付け惡に付け、『法華經』を捨つるは地獄の業たるべし。大願を立てん、日本國の位を讓らむ、『法華經』を捨てて『觀經』等に就いて後生を期せよ、父母の頸を刎ねん、念佛申さずば、なんどの種種の大難出來すとも、智者に我が義破られずば用ゐじとなり。其外の大難、風の前の塵なるべし。我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ等と誓ひし願破るべからず。」

【六三】疑つて云く、「いかにとして汝が流罪死罪等を過去の宿習と知らむ。」答へて云く、「銅鏡は色形を顯はす、秦王驗僞の鏡は現在の罪を顯はす。佛法の鏡は過去の業因を現ず。『般泥洹經』に云く『善男子、過去に曾て無量の諸罪、種種の惡業を作る、是の諸の罪報は、或は輕易せられ、或は形狀醜陋、衣服足らず、飲食麤疎、財を求むるに利あらず、貧賤の家及び邪見の家に生れ、或は王難に遭ひ及び餘の種種の人間の苦報あらん。現世に輕く受くるは、斯れ護法の功德力に由るが故なり。』云云。此の經文日蓮が身に恰も符契の如し。狐疑氷解けぬ、千萬の難も由なし。一一の句我が身に合はせん。『或は輕易せらる。』等云云。『法華經』に云く、『輕賤憎嫉』等云云。二十餘年が間輕慢せらる。『或は形狀醜陋』、又云く『衣服足らざる』とは予が身なり。『飲食粗疎』は予が身なり。『財を求むるに利あらず』は予が身なり。『貧賤の家に生る』は予が身なり。『或は王難に遭ふ』等。此の經文疑ふべしや。『法華經』に云く、『數數擯出せられん。』「此の經文に云く、『種種』等

【六四】涅槃經の文を引きて難を會通す。

云云。『斯れ護法の功德力に由るが故に』等とは、『摩訶止觀』の第五に云く、『散善微弱なるは、動ぜしむること能はず、今止觀を修して、健病虧けざれば、生死の輪を動ず。』等云云。又云く『三障四魔紛然として競ひ起る。』等云云。我無始より以來、惡王と生れて『法華經』の行者の衣食田畠等を奪ひ取りせしこと數知らず、當世日本國の諸人の『法華經』の山寺を倒すが如し。又『法華經』の行者の頸を刎ぬること、其數を知らず。此等の重罪果せるもあり。未だ果さざるもあるらん。果すも餘殘未だ盡きず。生死を離れん時は必ず此の重罪を消し果てて出離すべし。功德は淺輕なり、此等の罪は深重なり。權經を行ぜしには、此の重罪未だ起らず。鐵を熱くに、甚う鍛はざれば疵隱れて見えず。度度責むれば、疵顯はる。麻子を絞るに、强く搾めざれば油少きが如し。今日蓮强盛に國土の謗法を責むれば、此の大難の來るは、過去の重罪を今生の護法に招き出せるなるべし。鐵は火に値はざれば黑し。火と合ひぬれば赤し。木を以て急に流を掲けば、波山の如し。睡れる師子に手を付くれば、大に吼ゆ。

【六四】『涅槃經』に云く『譬へば貧女の、居家救護の者あること無く、加ふるに復病苦飢渴に逼められて、遊行乞丐して他の客舍に止まり、一子を寄生す。是の客舍の主驅逐して去らしむ。其の產して未だ久しからざるに、是の兒を攜抱して他國に至らんと欲し、其の中路に於て惡風雨に遇つて、寒苦竝び至り、蚊虻蜂螫毒蟲の唼ひ食ふ所と爲る。恒河に逕由し、兒を抱いて渡る。其の水漂疾なれども、而も放ち捨てず。是に於て母子遂に共に倶

【六五】成佛の道は一念三千に限ることを説き、信心強盛すれば必ず成佛すべきを斷ず。

に沒しぬ。是の如き女人、慈念の功德、命終の後、梵天に生るるが如し。文殊師利、若し善男子有つて正法を護せんと欲せば、彼の貧女の恆河に在つて、子を愛念するが爲に身命を捨つるが如くせよ。善男子、護法の菩薩も亦應に是の如く寧ろ身命を捨つべし。是の如きの人は、解脫を求めずと雖も解脫自ら至ること彼の貧女の梵天を求めざれども梵天自ら至るが如し」等云云。此の經文は章安大師、三障を以て釋し給へり。其を見るべし。「貧人」とは法財の無きなり。「女人」とは一分の慈ある者なり。「客舍」とは穢土なり。「一子」とは「法華經」の信心了因の子なり。「舍主驅逐」とは流罪せらる。「其産未だ久しからず」とは未だ信じて久しからず。「惡風」とは流罪の敕宣なり。「蚊虻」等とは「有諸無智人、惡口罵詈等」なり。「母子共に沒す」とは終に「法華經」の信心を破らずして頭を刎ねらるるなり。「梵天」とは佛界に生まるるをいふなり。「引業」と申すは佛界まで變らず。日本漢土の萬國の諸人を殺すとも、五逆謗法なければ、無間地獄には墮ちず、餘の惡道にして多歳を經べし。色天に生まるること、萬戒を持てども、萬善を修すれども、散善にては生れず。又梵天王となる事、有漏の引業の上に、慈悲を加へて生ずべし。今此の貧女が子を念ふ故に梵天に生るるは、常の性相には相違せり。章安の二はあれども、詮ずる處は子を念ふ慈念より外の事なし。念を一境にするは定に似たり、專ら子を思ふは慈悲にも似たり。かるが故に他事なけれども、天に生るるか。

【六五】又佛になる道は、華嚴の唯心法界、三論の八不、法相の唯識、眞言の五輪觀等も、

【六六】攝受折伏二門を明す。
【攝】攝受の略。
【折】折伏の略。
【大經】大涅槃經。

實には叶ふべしとも見えず。但だ天台の一念三千こそ、佛になるべき道と見ゆれ。此の一念三千も、我等一分の慧解もなし。而れども一代經經の中には、此經ばかり一念三千の玉を懷けり。餘經の理は、玉に似たる黃石なり。沙を絞るに油なし、石女に子の無きが如し。諸經は智者猶ほ佛にならず、此經は愚人も佛因を種ゆべし。『解脫を求めずして、解脫自ら至る。』等云云。我竝びに我が弟子、諸難ありとも疑ふ心なくば、自然に佛界に至るべし。天の加護なき事を疑はざれ、現世の安穩ならざる事を嘆かざれと我が弟子に朝夕敎へしかども、疑ひを起して皆捨てけん。拙き者の習ひは、約束せし事を眞の時忘るるなるべし。妻子を不便と思ふ故、現身に別れん事を嘆くらん。多生曠劫に親みし妻子には、心と離れしか。佛道の爲に離れしか。何時も同じ別れなるべし。我が『法華經』の信心を破らずして、靈山に參りて、返りて導けかし。」

【六六】疑つて云く、「念佛者と禪宗等を無間と申すは、諍ふ心あり、修羅道にや墮つべかるらむ。又『法華經の安樂行品』に云く、『樂つて人及び經典の過を說かざれ。亦諸餘の法師を輕慢せざれ。』等云云。汝は、此の經文に相違する故に、天に捨てられたるか。」答へて云く、『止觀』に云く、『夫れ佛に兩說あり、一には攝、二には折なり。安樂行に「長短を稱せざれ」といふ如き、是れ攝の義なり。「大經」に刀杖を執持し、乃至首を斬れといふ、是れ折の義なり。與奪途を異にすと雖も、俱に利益せしむ。』等云云。『弘決』に云く、『夫れ佛に兩說あり等とは、『大經』に刀杖を執持せよとは、第三に云く、正法を護る者は五戒を

受けず、威儀を修せず。乃至下の文に仙豫國王等の文あり。又新醫禁じて云く、若し更に爲すこと有れば、當に其の首を斷つべし。是の如き等の文、竝びに是れ破法の人を折伏するなり。一切の經論此の二を出でず」等云云。『文句』に云く、「問ふ、大經には國王に親付し、弓を持し箭を帶し、惡人を摧伏せよと明す。此經は豪勢を遠離し、謙下慈善せよと。剛柔碩いに乖く、云何ぞ異らざらん。答ふ、大經には偏へに折伏を論ずれども、一子地に住す、何ぞ曾て攝受無からん。此經には偏へに攝受を明せども、頭破七分と云ふ、折伏無きにあらず。各一端を擧げて、時に適ふのみ」等云云。『涅槃經』の疏に云く、「出家、在家法を護らんには、其の元心の所爲を取り、事を棄て理を存して、匡に大經を弘めよ。故に護持正法と言ふ。小節に拘らず、故に威儀を修せずと言ふなり。昔の時は平にして法弘まる。應に戒を持すべし、杖を持つことなかれ。今の時は嶮にして法翳る。應に杖を持すべし、戒を持つこと勿れ。今昔俱に嶮なれば、應に俱に杖を持すべし。今昔俱に平なれば、應に俱に戒を持すべし。取捨宜しきを得て、一向にすべからず。」等云云。汝が不審をば、世間の學者多分道理と思ふ。如何に諫曉すれども、日蓮が弟子等も此思ひを捨てず。一闡提人の如くなる所に、先づ天台、妙樂等の釋を出して、彼が邪難を防ぐ。夫れ攝受折伏と申す法門は水火の如し。火は水を厭ふ、水は火を惡む。攝受の者は折伏を笑ふ、折伏の者は攝受を悲む。無智惡人の國土に充滿の時は、攝受を前とす。『安樂行品』の如し。邪智謗法の者の多き時は、折伏を前とす。『常不輕品』の如し。譬へば熱き時に寒水を用ゐ、

【六七】攝受折伏は時の宜しきに隨ふべきを說き末法の現在は折伏を主とすべきを示す。

寒き時に火を好むが如し。草木は日輪の眷屬、寒月に苦を得。諸水は月輪の所從、熱時に本性を失ふ。末法に攝受折伏あるべし、所謂る惡國破法の兩國あるべき故なり。日本國の當世は惡國か、破法の國かを知るべし。」

【六七】問うて云く「攝受の時折伏を行ずると、折伏の時攝受を行ずると、利益あるべしや。」答へて云く「涅槃經」に云く、「迦葉菩薩佛に白して云く、世尊、如來の法身は金剛不壞なり。未だ所因を知ること能はず、云何、佛の云く、迦葉、能く正法を護持する因緣を以ての故に、是の金剛身を成就することを得たり。迦葉我世世護持正法の因緣に於て、今是の金剛身常住不壞を成就することを得たり。善男子、正法を護持する者は五戒を受けず威儀を修せず、應に刀劍弓箭鉾槊を持すべし。能く是の如く種種に法を說くと雖ども、然も故ほ師子吼を作すこと能はず。非法の惡人を降伏すること能はず。是の如き比丘は自利し及び衆生を利すること能はず。當に知るべし。是の輩は懈怠懶惰なり。能く戒を持ち、淨行を守護すと雖も、當に知るべし、是人は能く爲す所無からむ。乃至、時に破戒の者有つて、是の語を聞き已つて、咸共に瞋恚して、是の法師を害せん。是の說法の者、設ひ復命終すとも、故ほ持戒自利利他と名く。」等云云。章安云く、「取捨宜しきを得て、一向にすべからず。」等。天台云はく、「時に適ふのみ。」等云云。譬へば秋の終りに種子を下し、田畠を耕やさんに、稻米を得ること難し。建仁年中に法然、大日の二人出來して、念佛宗、禪宗を興行す。法然云く、「法華經」は末法に入つては、「未有一人得者、千中無一」等云

【六八】折伏は大慈悲心より出るを述ぶ。

云云「大日」云く「教外別傳」等云云。此の兩義國土に充滿せり。天台、眞言の學者等、念佛、禪の檀那を諂ひ畏るる事、犬の主に尾を振り、鼠の猫を畏るるが如し。國王將軍に宮仕へ、破佛法の因緣、破國の因緣を能く說き能く語るなり。天台、眞言の學者等、今生には餓鬼道に墮ち、後生には阿鼻を招くべし。設ひ山林に交はつて一念三千の觀を凝らすとも、空閑にして三密の油を溢さずとも、時機を知らず、攝折の二門を辨へずば、爭でか生死を離るべき。」

【六八】問うて云く、念佛者、禪宗等を責めて、彼等に憎まれたる、如何なる利益かあるや。答へて云く、「涅槃經」に云く、「若し善比丘法を壞る者を見て置いて呵責し驅遣し擧處せずんば、當に知るべし、是の人は佛法の中の怨なり。若し能く驅遣し呵責し擧處せば、是れ我が弟子、眞の聲聞なり。」章安云く、「佛法を壞亂するは、佛法の中の怨なり。慈無くして詐り親しむは、是れ彼が怨なり。能く糾治せん者は是れ護法の聲聞、眞の我が弟子なり。彼が爲に惡を除くは、即ち是れ彼が親なり。能く呵責する者は是れ我が弟子なり。驅遣せざらん者は、佛法の中の怨なり」等云云。夫れ「法華經の寶塔品」を拜見するに、釋迦多寶、十方分身の諸佛の來集は何の心ぞ。「法をして久住せしめんが故に此に來至す。」等云云。三佛の未來に「法華經」を弘めて未來の一切の佛子に與へんと思召す御心の中を推するに、父母の一子の大苦に値ふを見るよりも強盛にこそ見えたるを、法然痛はしとも思はで、末法には「法華經」の門を堅く閉ぢて、人を入れじと塞き、狂兒を誑らかし

【六九】法華經の爲の誹謗は恥ならざるを說く。

【七〇】法華經の行者たる法を述べて全篇を結す。

て寶を捨てさするやうに『法華經』を抛てさせける心こそ無慚に見え候へ。我が父母を人の殺すに父母に告げざるべしや。惡子醉狂して父母を殺すを、制せざるべしや。惡人寺塔に火を放たんに、制せざるべしや。一子の重病を灸せざるべしや。日本の禪と念佛者とを見て、制せざる者は此の如し。『慈無くして詐り親むは即ち彼が怨なり。』等云云。日蓮は日本國の諸人に親しき父母なり。一切天台宗の人は、彼等が大怨敵なり。『彼が爲めに惡を除くは即ち是れ彼が親なり。』等云云。

【六九】無道心の者生死を離るる事は無きなり。教主釋尊の一切の外道に大惡人と罵詈せられさせ給ひ、天台大師の南北並びに得一に、三寸の舌もて五尺の身を斷つといはれ、傳教大師の南京の諸人に、最澄未だ唐都を見ず等と言はれさせ給ひし、皆『法華經』の故なれば恥ならず。愚人に譽められたるは第一の恥なり。日蓮が御勘氣を蒙れば、天台、眞言の法師等悅ばしくや思ふらん。且は無慚なり、且は奇怪なり。

【七〇】夫れ釋尊は娑婆に入り、羅什は秦に入り、傳敎は尸那に入り、提婆と師子とは身を捨つ。藥王は臂を燒く、上宮は手の皮を剝ぐ。釋迦菩薩は肉を賣る、樂法は骨を筆とす。天台の云く『時に適ふ而已』等云云。佛法は時に依るべし。日蓮が流罪は、今生の小苦なれば、嘆かしからず。後生には大樂を得べければ、大に悅ばし、悅ばし。」

立正安國論

【一】旅客來りて嘆いて曰く、「近年より近日に至るまで、天變地夭、飢饉疫癘遍く天下に滿ち、廣く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩既に大半に超え、之を悲まざるの族敢て一人も無し。然る間、或は利劍即是の文を專らにして、西土教主の名を唱へ、或は衆病悉除の願を恃みて、東方如來の經を誦し、或は病即消滅不老不死の詞を仰いで、法華眞實の妙文を崇め、或は七難即滅七福即生の句を信じて、百座百講の儀を調へ、或は秘密眞言の教に因りて、五瓶の水を灑ぎ、或は坐禪入定の儀を全うして、空觀の月を澄し、若くは七鬼神の號を書して、千門に押し、若くは五大力の形を圖して、萬戸に懸け、若くは天神地祇を拜して、四角四堺の祭祀を企て、若くは萬民百姓を哀れみて、國主國宰の德政を行ふ。然りと雖も唯肝膽を摧くのみにして、彌飢疫に逼る。乞客目に溢れ、死人眼に滿てり。屍を臥せて觀と爲し、尸を並べて橋と作す。觀れば夫れ二離璧を合せ、五緯珠を連ぬ。三寶世に在し、百王未だ窮らず。此世早く衰へ、其法何ぞ廢れたる。是れ何なる禍に依り、是れ何なる誤に由るや。」主人の曰く、「獨り此事を愁へて、胸臆に憤悱す、客來りて共に歎く、屢談話を致さん。夫れ出家して道に入る者は、法に依つて佛を期するなり。而るに今神術も協はず、佛威も驗しなし。具さに當世の體を

【】縮遺三七三頁、文應元年三十九歳、鎌倉に於る作。「法華經」を立正法として國を安んぜんと、幕府を直諫したるものにして、これより諸の王難相起せり。

【一】全篇客と主人との問答體を以て終始す、茲は先づ天變地妖等が正法に背くことに原因するを述ぶ、

【利劍即是】善導の「般舟讃」の文、稱名念佛を除罪の利劍とせしなり。

【西土教主】阿彌陀佛のこと。

【東方如來】藥師佛のこと。

【七鬼神】「卽塵神呪經」に出る七鬼神。

【五大力】「仁王經」に出る五大力大士。

【二離】日月の異稱。

【五緯】五星のこと。

【圓覆】天のこと
【方載】地のこと
【微管】小見、卑見等といふ程の意
【二】經證を出して諸難を擧ぐ。
【蘭室】善人高士の室をいふ。
【藥叉】（Yaksa）の音譯、夜叉に同じ。
【無辜】無罪に同じ。

觀るに、愚にして後生の疑ひを發す。然れば則ち圓覆を仰ぎて恨みを呑み、方載に俯して慮を深くす。倩微管を傾け、聊經文を披きたるに、世皆正に背き、人悉く惡に歸す。故に善神國を捨てて相去り、聖人所を辭して還らず。是を以て魔來り鬼來り、災起り難起る。言はずんばあるべからず。恐れずんばあるべからず。」

【二】客の曰く「天下の災、國中の難、余獨り嘆くのみに非ず。衆皆悲めり。今蘭室に入つて初めて芳詞を承るに、神聖去り辭し、災難竝び起るとは何の經に出でたるや、其證據を聞かん。」主人の曰く「其文繁多にして其證弘博なり「金光明經」に曰く、「其國土に於て、此經ありと雖も未だ嘗て流布せず。捨離の心を生じて、聽聞せんことを樂はず、亦供養し、尊重し讃歎せず。四部の衆、持經の人を見て、亦復尊重し、乃至供養すること能はず、遂に我等及び餘の眷屬、無量の諸天をして、此甚深の妙法を聞くことを得ず、甘露の味に背き、正法の流を失ひ、威光及び勢力あることなからしむ。惡趣を增長し、人天を損減し、生死の河に墜ちて、涅槃の路に乖かん。世尊、我等四王、竝びに諸の眷屬及び藥叉等、斯の如き事を見て、其國土を捨てて、擁護の心無けん。但我等のみ是王を捨棄するにあらず、必ず無量の國土を守護する諸大善神あらんも、皆悉く捨去せん。既に捨離し已りなば、其國當に種種の災禍有りて、國位を喪失すべし。一切の人衆皆善心無く、唯繫縛、殺害、瞋諍のみあつて、互ひに相讒諂し、枉げて無辜に及ばん。疫病流行し、彗星數出で、兩日竝び現じ、薄蝕恒なく、黒白の二虹不祥の相を表し、星流れ地動き、井

【七味】七味は甘、辛、酢、苦、鹹、澁、淡。
【三精氣】衆生を養ふ三種の精氣、地味精氣（五穀）衆生味精氣（人の壯健）法味精氣（三寶の力）
【鹹鹵】鹽分強く不毛の地となること。
【亢旱】亢は甚しの意、甚しき旱をいふ。
【獐鹿】獐も鹿の一種、父母を顧みざる不幸の者に譬ふ。
【五眼】肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼のこと。

の内に聲を發し、暴雨惡風時節に依らず、常に飢饉に遭ひて、苗實成らず、多く他方の怨賊ありて國内を侵掠し、人民諸の苦惱を受けて、土地として可樂の處あることなけん』已上。又、大集經に曰く『佛法實に隱沒せば、鬚髮爪皆長く、諸法も亦忘失せん。當時虛空の中に大なる聲ありて地を震ひ、一切皆遍く動ぜんこと猶ほ水上輪の如くならん。城壁破れ落ち下り、屋宇悉く圮れ拆け、樹林根枝葉華葉菓藥盡きん。唯淨居天を除きて欲界一切處の七味三精氣損減して、餘り有ることなけん。解脱の諸の善論、當時一切盡きん。生ずる所の華菓の味、希少にして亦美からず。諸有の井泉池一切盡く枯涸し、土地悉く鹹鹵し、剖裂して丘澗とならん。諸山皆燋燃して、天龍雨を降さず。苗稼皆枯死し、生ずる者皆死れ盡き、餘草更に生ぜず。土を雨らし皆昏闇にして、日月明を現ぜず。四方皆亢旱し、數數諸の惡瑞を現じ、十不善の業道、貪、瞋、癡、倍增して、衆生の父母に於ける、之を觀ること、獐鹿の如くならん。衆生及び壽命色力威樂減じ、人天の樂を遠離し、皆悉く惡道に墮せん。是の如き不善業の惡王惡比丘、我が正法を毀壞し、天人の道を損減し、諸天善神王の衆生を悲愍する者、此の濁惡の國を棄てゝ皆悉く餘方に向はん』已上。仁王經に曰く、『國土亂れん時は先づ鬼神亂る。鬼神亂るゝが故に萬民亂る。賊來りて國を劫し、百姓亡喪し、臣君太子王子百官共に是非を生ぜん。天地怪異し、二十八宿星道、日月時を失ひ、度を失ひ、多く賊の起ることあらん』と。亦曰く、『我今五眼をもつて明らかに三世を見るに、一切の國王は皆過去の世に五百の佛に侍へしに由つて、帝王主と

【七難】七種の難諸經に異説あり、「普門品」によれば火難、水難、羅刹難、王難、鬼難、枷鎖難、怨賊難。
【刹帝利】(Kṣatriya)の音譯、印度の武士階級の名稱。四姓の一。
【灌頂王】大國王のこと。
【四天下】四方の國。
【南斗】南じゆと訓む。

なることを得たり。是を以て一切の聖人羅漢、而も爲に彼の國土の中に來生して大利益を作さん。若し王の福盡きん時は、一切の聖人皆爲に捨て去らん。若し一切の聖人去らん時は、七難必ず起らん。』『藥師經』に曰く、『若し刹帝利灌頂王等の災難起らん時、所謂人衆疾疫の難、佗國侵逼の難、自界叛逆の難、星宿變怪の難、日月薄蝕の難、非時風雨の難、過時不雨の難あらん。』『仁王經』に曰く、『大王吾が今化する所は百億の須彌、百億の日月、一一の須彌に四天下あり。其の南閻浮提に十六の大國、五百の中國、十千の小國あり。其の國土の中に、七の畏るべき難あり。一切の國王是を難と爲すが故に。云何なるを難と爲す。日月度を失ひ、時節返逆し、或は赤日出で、黑日出で、二三四五の日出で、或は日蝕して光なく、或は日輪一重二三四五重輪に現ずるを一の難と爲すなり。二十八宿度を失ひ、金星、彗星、輪星、鬼星、火星、水星、風星、刁星、南斗、北斗、五鎭の大星、一切の國主星、三公星、百官星、是の如き諸星、各各變現するを二の難と爲すなり。大火國を燒き、萬姓燒盡せん。或は鬼火、龍火、天火、山神火、人火、樹木火、賊火あらん。是の如く變怪するを三の難と爲すなり。大水百姓を漂沒し、時節返逆して、冬雨降り、夏雪降り、冬時に雷電霹靂し、六月に氷霜雹を雨らし、赤水黑水青水を雨らし、土山石山を雨らし、沙礫石を雨らす。江河逆しまに流れ、山を浮べ石を流す。是の如く變ずる時を四の難と爲すなり。大風萬姓を吹殺し、國土山河樹木一時に滅沒し、非時の大風、黑風、赤風、青風、天風、地風、火風、水風あらん、是の如く變ずるを五の難と爲すなり。天地國

【穀貴】穀物少なくして價高きこと

【柱師】「大集經」に村主、府師とあるを斯く書きしなり

【三】佛法隆昌なるが如けれども惡比丘のみなるを述ぶ。

【鶖鷺子】舍利弗の譯名。

【鶴勒】迦葉の流を汲みし鶴勒夜那の略。

土亢陽し、炎火洞燃として、百草亢旱し、五穀登らず。土地赫燃して萬姓焦盡せん。是の如く變ずる時を六の難と爲すなり。四方の賊來りて國を侵し、內外の賊起り、火賊、水賊、風賊、鬼賊ありて、百姓荒亂し、刀兵劫起せん。是の如く怪する時を七の難と爲すなり。『大集經』に曰く、「若し國王有りて無量世に於て施戒慧を修すとも、我が法の滅せんを見て、捨てて擁護せずんば、是の如く種うる所の無量の善根、悉く皆滅失して、其の國當に三の不祥の事あらん。一には穀貴、二には兵革、三には疫病なり。一切の善神悉く之を捨離せば、其の王教令すとも人隨從せず、常に隣國の侵嬈する所たらん。暴火横に起り、惡風雨多く、暴水增長して人民を吹き漂はし、內外の親戚其れ共に謀叛せん。其の王久しからずして當に重病に遇ひ、壽終の後、大地獄の中に生ずべし。乃至王の如く、夫人、太子、大臣、城主、柱師、郡守、宰官も亦復是の如くならん。」夫れ四經の文朗かなり、萬人誰か疑はん。而るに盲瞽の輩、迷惑の人、妄りに邪說を信じて正教を辨へず。故に天下世上、諸佛衆經に於て、捨離の心を生じて、擁護の志無し。仍て善神聖人國を捨て所を去る。是を以て惡鬼外道災を成し難を致すなり」と。

【三】客色を作して曰く、「後漢の明帝は金人の夢を悟りて、白馬の教へを得、上宮太子は守屋の逆を誅して、寺塔の構へを成す。爾しより來、上一人より下萬民に至るまで、佛像を崇め經卷を專らにす。然れば則ち叡山、南都、園城、東寺、四海一州、五畿七道、佛經は星の如く羅り、堂宇雲の如く布けり。鶖子の族は則ち鷲頭の月を觀じ、鶴勒の流は

【鷄足】迦葉の入定せし山名。

【三趣】地獄、餓鬼、畜生の三惡趣

【阿練若、納衣】開目鈔にて說明せり。

【四道の聖人】小乘の四果を得たる聖者。

【正法】佛法のこと、又佛法尚ほ盛なる佛滅直後の時代に名く。

【像法】正法時代の次の時代、正法衰へて形像のみ盛なる時代。

亦鷄足の風を傳ふ。誰か一代の教へを褊し、三寶の跡を廢すと謂はんや。若し其證あらば委しく其故を聞かん。」主人喩して曰く、「佛閣甍を連ね、經藏軒を竝べ、僧は竹葦の如く、侶は稻麻に似たり。崇重年舊り、尊貴日に新たなり。但し法師は、諂曲にして人倫を迷惑し、王臣は不覺にして邪正を辨ずること無し。『仁王經』に云く、「諸の惡比丘、多く名利を求め、國王太子王子の前に於て、自ら破佛法の因緣、破國の因緣を說かん。其王別へずして此語を信聽し、横に法制を作りて佛戒に依らず。是を破佛破國の因緣と爲す。」『涅槃經』に曰く、「菩薩惡象等に於ては、心に恐怖すること勿れ。惡知識に於ては怖畏の心を生ぜよ。惡象の爲に殺されては、三趣に至らず、惡友の爲に殺されては、必ず三趣に至る。」『法華經』に云く、「惡世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、未だ得ざるを爲れ得たりと謂ひ、我慢の心充滿せん。或は阿練若に、納衣にして空閑に在り、自ら眞の道を行ずと謂つて、人間を輕賤する者有らん。利養に貪著するが故に、白衣の與に法を說いて、世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん。乃至常に大衆の中に在りて、我等を毀らんと欲するが故に、國王大臣婆羅門居士、及び餘の比丘衆に向つて、誹謗して我が惡を說いて、是れ邪見の人、外道の論議を說くと謂はん。濁劫惡世の中には、多く諸の恐怖有らん。惡鬼其身に入つて、我を罵詈毀辱せん。濁世の惡比丘は佛の方便隨宜所說の法を知らず、惡口して顰蹙し、數數擯出せられん。」『涅槃經』に云く、「我涅槃の後、無量百歳に、四道の聖人悉く復涅槃せん。正法滅して後、像法の中に於て、當に比丘あるべし。持律に似像して、

【四】惡比丘を指摘して正しく本論の主眼たる念佛者對破の本論に入る。

【選擇集】法然上人作「選擇本願念佛集」の略稱。

【佛心】禪のこと

【阿毗跋致】（Avaivartika）の音譯、不退と譯す、菩薩の位。

少しく經を讀誦し、飲食を貪嗜して、其身を長養し、袈裟を著すと雖も、猶獵師の細めに視て徐に行くが如く、猫の鼠を伺ふが如し。常に是の言を唱へん、我羅漢を得たりと。外には賢善を現し内には貪嫉を懷く、啞法を受くる婆羅門等の如し。實には沙門に非ずして沙門の像を現じ、邪見熾盛にして、正法を誹謗せん。」文に就いて世を見るに、誠に以て然なり。惡侶を誡めずんば、豈善事を成さんや。」

【四】客猶憤りて曰く、「明王は天地に因て化を成し、聖人は理非を察して世を治む。世上の僧侶は天下の歸する所なり。惡侶に於ては明王信ず可からず。聖人に非ずんば賢哲仰ぐ可からず。今賢聖の尊重せるを以て則ち龍象の輕からざるを知りぬ。何ぞ妄言を吐きて強ちに誹謗を成し、誰人を以て惡比丘と謂ふや。委細に聞かんと欲す。」主人の曰く、「後鳥羽院の御宇に法然といふ者あり、『選擇集』を作る。則ち一代の聖教を破し遍く十方の衆生を迷はす。其の選擇に云く、『道綽禪師、聖道淨土の二門を立て聖道を捨てて正しく淨土に歸するの文。』『初めに聖道門とは、之に就いて二あり。乃至、之に准じて之を思ふに、應に密大及び實大を存すべし。然れば則ち今の眞言、佛心、天台、華嚴、三論、法相、地論、攝論、此等八家の意、正しく此に在るなり。』『曇鸞法師の往生論の註に云く、謹んで龍樹菩薩の十住毘婆沙を案ずるに云く、菩薩阿毗跋致を求むるに二種の道あり、一には難行道、二には易行道なりと。』『此中の難行道とは、即ち是れ聖道門なり。易行道とは、即ち是れ淨土門なり。』『淨土宗の學者、先づ須らく此旨を知るべし。設ひ先より聖道門を學

【百即百生】百人が百人悉く往生すること。

【千中無一】千人中一人も成佛する者なきこと。

【定散の門】定善散善の二門。

ぶ人なりと雖も、若し淨土門に於て其の志あらん者は、須らく聖道を棄てて淨土に歸すべし。」又云く、「善導和尚、正雜二行を立て、雜行を捨てて正行に歸するの文、『第一に讀誦雜行とは上の『觀經』等の往生淨土の經を除いて已外、大小乘顯密の諸經に於て受持讀誦するを悉く讀誦雜行と名づく。乃至第三に禮拜雜行とは上の彌陀を禮拜するを除きて已外、一切の諸佛菩薩等、及び諸の世天等に於て禮拜し恭敬するを悉く禮拜雜行と名づく。』「私に云く、此の文を見るに、須らく雜を捨てて專を修すべし。豈に百即百生の專修正行を捨てて、堅く千中無一の雜修雜行を執せんや。行者能く之を思量せよ。」又云く、「『貞元入藏錄』の中に、始め『大般若經』六百卷より『法常住經』に終るまで、顯密の大乘經、總じて六百三十七部、二千八百八十三卷なり。皆須らく讀誦大乘の一句に攝すべし。當に知るべし。隨他の前には、暫く定散の門を開くといへども、隨自の後には、還つて定散の門を閉づ。一たび開いて以後永く閉ぢざるは、唯是れ念佛の一門なり。」又云く、「念佛の行者必ず三心を具足すべきの文、『觀無量壽經』に云く、『同經の疏に云く、問うて曰く、若し解行の不同、邪雜の人等ありて、外邪異見の難を防がん。或は行くこと一分二分にして、群賊等喚び廻すとは、即ち別解、別行、惡見の人等に喩ふ。』「私に云く、又此の中に一切の別解、別行、異學、異見等と言ふは、是れ聖道門を指すなり。」又最後結句の文に云く、「夫れ速に生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中に、且らく聖道門を閣きて、選んで淨土門に入れ。淨土門に入らんと欲せば、正雜二行の中に、且く

らく、諸の雜行を抛ちて、選んで應に正行に歸すべし。之に就いて之を見るに、曇鸞、道綽、善導の謬釋を引いて、聖道淨土、難行易行の旨を建て、法華眞言、總じて一代の大乘、六百三十七部、二千八百八十三卷、一切の諸佛菩薩、及び諸の世天等を以て皆聖道、難行、雜行等に攝して、或は捨て或は閉ぢ、或は閣き或は抛つ、此の四字を以て、多く一切を迷はし、剩へ三國の聖僧、十方の佛弟を以て、皆群賊と號し、併せて罵詈せしむ。近くは所依の淨土の三部經の『唯除五逆誹謗正法』の誓文に背き、遠くは一代五時の肝心たる、法華經の第二の『若人不信毀謗此經、乃至、其人命終入阿鼻獄』の誡文に迷ふ者なり。是に代末代に及び、人聖人にあらず、各冥衢に容りて、並に直道を忘る。悲しいかな瞳矇を拊たず、痛しいかな徒に邪信を催す。故に上國王より、下土民に至るまで、皆經は淨土三部の外の經なく、佛は彌陀三尊の外の佛なしと謂へり。仍て傳敎、義眞、慈覺、智證等、或は萬里の波濤を渉りて渡せし所の聖敎、或は一朝の山川を回りて崇むる所の佛像、若くは高山の巓に華界を建てて以て安置し、若くは深谷の底に蓮宮を起てて以て崇重す。釋迦、藥師の光を竝ぶるや威を現當に施し、虛空、地藏の化を成すや益を生後に被らしむ。故に國主は郡鄉を寄せて以て燈燭を明かにし、地頭は田園を充てて以て供養に備ふ。而るを法然の選擇に依て、即ち敎主を忘れて西土の佛陀を貴み、付屬を抛ちて東方の如來を閣き、唯四卷三部の經典を專にして、空しく一代五時の妙典を抛つ。是を以て彌陀の堂に非れば皆供佛の志を止め、念佛の者に非れば早く施僧の懷ひを忘る。故に

【唯除五逆誹謗正法】大無量壽經卷上にある文。
【一代五時】釋尊一代の說法を、華嚴、阿含、方等、般若、法華涅槃の五時に分つ、天台大師の敎判に始まる。
【冥衢】迷路に同じ。
【瞳矇を拊たず】瞳のくもりを除かざる意味、矇は瞳のくものこと。
【華界】佛堂のこと。
【蓮宮】佛寺のこと。
【四卷三部】淨土三部經の無量壽經が二卷ある故。

【圓、偏】相對する語にして、完全と不完全の意。

【五】經の權實を揀ぜず濫りに捨閉閣抛するを難ず。

【四論】龍樹の大論、中論、十二門論と其弟子提婆の百論とを併せて四論とす。

佛堂零落して、瓦松の煙老い、僧房荒廢して、庭草の露深し。然りと雖も各護惜の心を捨てて、竝に建立の思ひを廢す。是を以て住持の聖僧行きて歸らず、守護の善神去りて來ることなし。是れ偏へに法然の選擇に依るなり。悲いかな數十年の間、百千萬の人、魔緣に蕩かされて、多く佛敎に迷へり。傍を好んで正を忘る、善神怒りを爲さざらんや。圓を捨てて偏を好む、惡鬼便りを得ざらんや。如かず彼萬祈を修せんより、此の一凶を禁ぜんには。」

【五】客殊に色を作して曰く、「我本師釋迦文、淨土の三部經を說き給ひてより以來、曇鸞法師は『四論』の講說を捨てて一向に淨土に歸し、道綽禪師は『涅槃』の廣業を閣きて偏へに西方の行を弘め、善導和尚は雜行を抛ちて專修を立て、慧心僧都は諸經の要文を集めて念佛の一行を宗とす。彌陀を貴重すること誠に以て然なり。又往生の人其れ幾ばくぞや。就中法然聖人は、幼少にして天台山に昇り、十七にして六十卷に涉り、竝びに八宗を究め、具さに大意を得たり。其外一切の經論七遍反覆し、章疏傳記究め看ざることはなし。智は日月に齊く、德は先師に越えたり。然りと雖も猶出離の趣に迷ひ、涅槃の旨を辨へず。故に遍く覿、悉く鑒み、深く思ひ遠く慮り、遂に諸經を抛ちて、專ら念佛を修す。其上一夢の靈應を蒙り、四裔の親疎に弘む。故に或は勢至の化身と號し、或は善導の再誕と仰ぐ。然れば則ち十方の貴賤頭を低れ、一朝の男女步を運ぶ。爾しより來、春秋推移り、星霜相積れり。而るに忝くも釋尊の敎へを疎にして、恣に彌陀の文を譏る。何ぞ近

【蓼葉】たでのこと。
【溷厠】かわや。

年の災を以て聖代の時に課せ、強ちに先師を毀り、更に聖人を罵るや。毛を吹いて疵を求め、皮を剪りて血を出す。昔より今に至るまで此の如き惡言未だ見ず、惶るべく愼むべし。罪業至て重し、科條爭か遁れん。對座猶以て恐れあり。杖を携へて則ち歸らんと欲す。」

主人笑み止めて曰く、辛きを蓼葉に習ひ、臭きを溷厠に忘る。善言を聞きて、而も惡言と思ひ、謗者を指して聖人と謂ひ、正師を疑つて而も惡侶に擬す。其の迷ひ誠に深く、其の罪淺からず。事の起りを聞け、委しく其の趣を談ぜん。釋尊説法の内一代五時の間に、先後を立てて權實を辨ず。而るに曇鸞、道綽、善導既に權に就いて實を忘れ、先に依つて後を捨つ。未だ佛教の淵底を探らざる者なり。就中法然、其の流れを酌むと雖も其の源を知らず。所以は何ん。大乘經六百三十七部、二千八百八十三卷、並に一切の諸佛菩薩、及び諸の世天等を以て、捨閉閣抛の字を置いて、一切衆生の心を薄んず。是れ偏へに私曲の詞を展べて、全く佛經の説を見ず。妄語の至り、惡口の科、言ひても比ひなく、責めても餘りあり。人皆其の妄語を信じ、悉く彼の選擇を貴ぶ。故に淨土の三經を崇めて、而して衆經を抛ち、極樂の一佛を仰いで、諸佛を忘る。誠に是れ諸佛諸經の怨敵、聖僧衆人の讐敵なり。此の邪教廣く八荒に弘まり、周く十方に遍す。抑も近年の災を以て、往代に難ずるの由、強ちに之を恐る。聊か先例を引いて汝の迷ひを悟すべし。「止觀」の第二に、「史記」を引いて云く「周の末に被髪袒身禮度に依らざる者あり。」「弘決」の第二に此の文を釋するに、「左傳」を引いて曰く「初め平王の東遷するや、伊川に髪を被る者にして野に於て

【徴】しるし。
【阮籍】晋朝の名士。
【奴苟相辱しむ】いやしき言辭をなして罵り合ふこと。
【撙節兢持する】制度規律を保つて守ること。
【十八】賤身を以て勘狀を進ずる所以を述ぶ。
【華洛】京都又は朝廷。
【柳營】幕府。
【莠言】醜言に同じ。

祭るを見る。識者の曰く百年に及ばずして其禮先づ亡びんと。爰に知んぬ、徴前に顯はれ、災後に到ることを。又阮籍逸才にして蓬頭散帶す。後に公卿の子孫皆之に敎ひて奴苟相辱しむる者を、方に自然に達すといひ、撙節兢持する者を呼んで田舍と爲す。司馬氏の滅ぶる相と爲す。又慈覺大師の「入唐巡禮記」を案ずるに曰く、「唐の武宗皇帝會昌元年、敕して章敬寺の鏡霜法師をして、諸寺に於て彌陀念佛の敎へを傳へしむ。寺ごとに三日、巡輪すること絶えず。同二年、回鶻國の軍兵等唐の堺を侵す。同三年、河北の節度使忽ち亂を起す。其後大蕃國更た命を拒み、回鶻國重ねて地を奪ふ。凡そ兵亂秦項の代に同じく、災火邑里の際に起る。何に況んや武宗大に佛法を破し、多く寺塔を滅す。亂を撥むること能はずして、遂に以て事あり」〔已上取意〕此を以て之を惟ふに、法然は後鳥羽院の御宇、建仁年中の者なり。彼院の御事、既に眼前にあり。然れば則ち大唐に例を殘し、吾朝に證を顯す。汝疑ふこと莫れ、汝怪むこと莫れ。唯須らく凶を捨てて善に歸し、源を塞ぎ根を截るべし。」

【十八】客聊か和ぎて曰く、「未だ淵底を究めず、數其趣を知る。但し華洛より柳營に至るまで、釋門に樞楗あり、佛家に棟梁あり。然れども未だ勘狀を進せず、上奏に及ばず。汝賤身を以て、輙く莠言を吐く、其義餘りあり、其理謂れなし」主人の曰く、「予少量たりと雖も、忝くも大乘を學す。蒼蠅驥尾に附いて萬里を渡り、碧蘿松頭に懸りて千尋を延ぶ。弟子一佛の子と生れて、諸經の王に事ふ、何ぞ佛法の衰微を見て、心情の哀惜を起さ

【七】客前の非宗を示し、安國を願はば須く謗法を止むべきを説く。

ぎしんや。其上『涅槃經』に説く、「若し善比丘ありて、法を壞る者を見て、置いて呵責し驅遣し擧處せずんば、當に知るべし、是の人は佛法の中の怨なり、若し能く驅遣し呵責し擧處せば、是れ我弟子、眞の聲聞なり」と。余善比丘の身たりと雖も、「佛法中怨」の責を遁れんが爲に、唯大綱を撮つて、粗一端を示す。其の上去る元仁年中に延暦興福の兩寺より度々奏聞を經、勅宣御教書を申し下して、法然の「選擇」の印板を大講堂に取上げ、三世の佛恩を報ぜんが爲に之を燒失せしめ、法然の墓所に於ては感神院の犬神人に仰せ付けて破却せしむ。其の門弟、隆觀、聖光、成覺、薩生等は遠國に配流せられ、其後未だ御勘氣を許されず。豈未だ勘状を進せずと云はんや。」

【七】客則ち和いで曰く、「經を下し僧を謗ずること、一人として論じ難し。然れども大乘經六百三十七部、二千八百八十三卷、並びに一切の諸佛菩薩及び諸の世天等を以て、捨閉閣抛の四字に載す。其の詞勿論なり、其の文顯然なり。此の瑕瑾を守りて、其の誹謗を成す。迷うて言ふ歟、覺りて語る歟、賢愚辨ぜず、是非定め難し。但し災難の起りは『選擇』に因るの由、其の詞を盛にし、彌其の旨を談ず。所詮天下泰平國土安穩は君臣の樂ふ所、土民の思ふ所なり。夫れ國は法に依て昌へ、法は人に因て貴し。國亡び人滅せば、佛を誰か崇むべき、法を誰か信ずべきや。先づ國家を祈りて、須らく佛法を立つべし。若し災を消し難を止むるの術あらば聞かんと欲す」主人の曰く、「余は是れ頑愚にして、敢て賢を存せず。唯經文に就いて、聊か所存を述べむ。抑治術の旨、内外の間、其の文幾多ぞや。具さ

【四重】殺生、偸盜、邪淫、妄語の四重罪。

【五逆罪】五種の重罪。

【方等】方廣平等の意にて大乘のこと。

に學ぶべきことを辨し。但し佛道に入つて、數々愚案を廻らすに、謗法の人を禁めて、正道の侶を重んぜば、國中安穩にして天下泰平ならん。即ち『涅槃經』に云く、『佛の言く、唯一人を除きて、餘の一切に施さば、皆讃歎すべし。純陀問うて言く、何なるをか名づけて、唯除一人と爲す。佛の言く、此經の中に、說く所の如きは破戒なり。純陀復言く、我今未だ解せず、唯願はくは之を說き給へ。佛純陀に語りて言く、破戒とは、謂く一闡提なり。其餘のあらゆる一切に、布施するは皆讃歎すべし、大果報を獲ん。純陀復問ひ上る。一闡提とは其義云何。佛の言く、純陀、若し比丘及び比丘尼、優婆塞、優婆夷有りて、麁惡の言を發し、正法を誹謗せん。是の重業を造つて、永く改悔せず、心に懺悔無からん。是の如き等の人を名づけて、一闡提の道に趣向すと爲す。若し四重を犯し、五逆罪を作り、自ら定めて是の如き重事を犯すと知れども、而も心に初より怖畏懺悔無く、肯て發露せず、彼の正法に於て永く護惜建立の心無く、毀呰輕賤して、言に過咎多からん。是の如き等を亦一闡提の道に趣向すと名づく。唯此の如き一闡提の輩を除きて其餘に施さば、一切讃歎すべし。』又云く、『我往昔を念ふに、閻浮提に於て、大國の王と作れり。名を仙豫と曰ひき。大乘經典を愛念し敬重し、其心純善にして、麁惡嫉悋有ること無し。善男子我爾の時に於て、心に大乘を重んず。婆羅門の方等を誹謗するを聞き已つて、即時に其の命根を斷つ。善男子、是の因緣を以て、是より已來地獄に墮せず。』又云く、『如來昔國王と爲りて菩薩の道を行ぜし時、爾所の婆羅門の命を斷絕す。』又云く、『殺に三あり、謂

【示現生】菩薩が畜生に身を現ぜしこと。

【阿那含】(Anāgāmin)の音訳、不来と訳す小乗四果の一。

【五戒】不殺生、不偸盗、不邪淫、不妄語、不飲酒。

【鉾槊】ほこ、たて。

く、下中上なり。下とは蟻子乃至一切の畜生なり。唯菩薩の示現生の者を除く。下殺の因縁を以て、地獄、畜生、餓鬼に堕して、具さに下の苦を受く。何を以ての故に、是の諸の畜生に微の善根あり、是の故に殺す者は具さに罪報を受く。中殺とは凡夫の人より阿那含に至る、是を名づけて中と為す。是の業因を以て、地獄、畜生、餓鬼に堕して、具さに中の苦を受く。上殺とは父母、乃至阿羅漢、辟支仏、畢定の菩薩なり。阿鼻大地獄の中に堕す。善男子、若し能く一闡提を殺すことあらん者は、則ち此の三種の殺の中に堕せず。善男子、彼の諸の婆羅門等は、一切皆是れ一闡提なり」と。『仁王経』に云く、「仏波斯匿王に告げ給はく、是の故に諸の国王に付嘱して、比丘、比丘尼に付嘱せず。何を以ての故に、王の如き威力なければなり」と。『涅槃経』に云く、「今無上の正法を以て、諸王大臣、宰相及び、四部の衆に付嘱す。正法を毀る者をば、大臣四部の衆、当に苦治すべし」と。又云く、「仏の言く、迦葉、能く正法を護持する因縁を以ての故に、是の金剛身を成就することを得たり。善男子、正法を護持せん者は五戒を受けず、威儀を修せず、応に刀剣弓箭鉾槊を持すべし」又云く、「若し五戒を受持せん者あらば、名づけて大乗の人と為すことを得ざるなり。五戒を受けざれども、正法を護るを為さば、乃ち大乗と名づく。正法を護る者は、応に刀剣器仗を執持すべし。刀杖を持つと雖も、我是等を説きて、名づけて持戒と曰はん」』又云く、「善男子、過去の世に、此の拘尸那城に於て、仏の世に出で給ふ有りき。歓喜増益如来と号し奉る。仏、涅槃の後、正法世に住すること無量億歳なり。余の四十年に仏法未だ

護せず、爾時に一人の持戒の比丘あり、名を覺德と曰ふ。爾時に多く破戒の比丘あり、是の說を作すを聞き、皆惡心を生じ、刀杖を執持して是の法師を逼む。是時の國王、名を有德といふ。是事を聞き已つて、護法の爲の故に即ち說法者の所に往至して、是の破戒の諸の惡比丘と極めて共に戰鬪す、爾時、說法者厄害を免るることを得たり。王爾時に於て身に刀劍箭槊の瘡を被り、體に完き處は芥子の如き許りもなし。爾時に覺德尋いで王を讚めて言く、善哉、善哉、王今眞に是れ正法を護る者なり。當來の世に、此身當に無量の法器となるべし。王是時に於て、法を聞くことを得已つて心大に歡喜し、尋いで即ち命終して、阿閦佛の國に生ず。而も彼の佛の爲に、第一の弟子と作る。其の王の將從人民眷屬の戰鬪すること有りし者、歡喜すること有りし者、一切菩提の心を退せず、命終して悉く阿閦佛の國に生ず。覺德比丘却つて後壽終りて亦阿閦佛の國に往生することを得て、彼の佛の爲に聲聞衆の中の第二の弟子と作る。若し正法盡きんと欲すること有らん時、當に是の如く受持し擁護すべし。迦葉、爾時の王とは即ち我が身是なり。說法の比丘は迦葉佛是なり。迦葉、正法を護る者は是の如き等の無量の果報を得ん。是の因緣を以て我今日に於て種種の相を得て以て自ら莊嚴し、法身不可壞の身を成す。佛、迦葉菩薩に告げたまはく、是故に法を護らん優婆塞等は應に刀杖を執持して擁護すること是の如くなるべし。善男子、我涅槃の後、濁惡の世に國土荒亂し、互ひに相抄掠し、人民飢餓せん。爾時に多く飢餓の爲の故に發心出家するものあらん。是の如きの人を名づけて禿人と爲す。是の禿人の輩、

【倶】倶舎の略。

【墎外】都城外の国々のこと、各国の意で。

【鴈宇】寺の別名。

【鵝王】仏の相好のこと。

【如法経】法華経を如法に書写すること。

正法を護持するを見て、駆逐して出さしめ、若くは殺し若くは害せん。是故に我今持戒の人、諸の白衣の刀杖を持つ者に依って、以て伴侶と為すことを聴す。刀杖を持つと雖も我是等を説きて名づけて持戒と曰はん。刀杖を持つと雖も、命を断ずべからず」と。『法華経』に云く、『若し人信ぜずして此の経を毀謗せば、即ち一切世間の仏種を断ぜん。乃至其人命終して、阿鼻獄に入らん』と。夫れ経文顕然なり。私の詞何ぞ加へん。凡そ『法華経』の如くんば、大乗経典を謗る者は、無量の五逆に勝れたり。故に阿鼻大城に堕して、永く出づる期無けん。『涅槃経』の如くんば、設ひ五逆の供を許すとも、謗法の施を許さず。蟻子を殺す者は、必ず三悪道に落つ。謗法を禁むる者は、定めて不退の位に登る。所謂る覚徳とは是れ迦葉仏なり。有徳とは即ち釈迦文なり。『法華』、『涅槃』の経教は一代五時の肝心なり。其の禁め実に重し、誰か帰仰せざらんや。而るに謗法の族、正道の人を忘れ、剰へ法然の『選択』に依て、弥愚癡の盲瞽を増す。是を以て或は彼の遺体を忍びて木画の像に露はし、或は其妄説を信じて莠言の模を彫り、之を海内に弘め、之を墎外に翫ぶ。仰ぐ所は則ち其家風、施す所は則ち其門弟なり。然る間、或は釈迦の手指を切りて弥陀の印相を結び、或は東方如来の鴈宇を改めて西土教主の鵝王を居ゑ、或は四百余回の如法経を止めて西方浄土の三部経と成し、或は天台大師の講を停めて善導の講と為す。此の如きの群類、其れ誠に尽し難し。是れ破仏に非ずや、是れ破法に非ずや、是れ破僧に非ずや。此の邪義は即ち選択に依るなり。嗟呼悲いかな、如来誠諦の禁言に背くこと。哀れなるかな愚侶迷

【八】謗法を禁ずる道は施を止むるにありとす。

【能忍】釋迦（牟尼）の事。

【九】他國侵逼、自界叛逆二難を擧げて最後の結勸を行ふ。

惑の叢誘に隨ふこと。早く天下の靜謐を思はば須らく國中の謗法を斷つべし。」

【八】客の曰く、「若し謗法の輩を斷じ、若し佛禁の違を絶たんには彼の經文の如く斬罪に行ふべきか。若し然らば殺害相加へ罪業何ん爲んや。即ち『大集經』に云はく、『頭を剃り袈裟を著せば、持戒及び毀戒をも天人彼を供養すべし。則ち爲れ我を供養するなり。是れ我が子なり。若し彼を撾打することあれば、即ち爲れ我が子を打つなり。若し彼を罵辱せば、則ち爲れ我を毀辱するなり』と。料り知んぬ、善惡を論ぜず、是非を擇ぶことなく、僧侶爲るに於ては、供養を展ぶべし。何ぞ其子を打辱して、忝くも其父を悲哀せしめん。彼の竹杖の目連尊者を害せしや、永く無間の底に沈み、提婆達多の蓮華比丘尼を殺せしや、久しく阿鼻の焔に咽ぶ。先證斯れ明なり。後昆最も恐れあり。謗法を誡むるに似て、既に禁言を破る。此事信じ難し、如何が意を得ん。」主人の曰く、「客、明に經文を見て、猶ほ斯の言を成す、心の及ばざるか、理の通ぜざるか。全く佛子を禁むるに非ず、唯偏へに謗法を惡むなり。夫れ釋迦以前の佛教は其の罪を斬ると雖も、能忍以後の經説は則ち其の施を止む。然れば則ち四海萬邦、一切の四衆、其の惡に施さずして、皆此の善に歸せば、何なる難か並び起り、何なる災か競ひ來らん。」

【九】客則ち席を避け襟を刷ひて曰く、「佛教斯れ區にして、旨趣窮め難く、不審多端にして、理非明ならず。但し法然聖人の選擇現在なり。諸佛、諸經、諸菩薩、諸天等を以て、捨閉閣抛と載す、其の文顯然なり。茲に因つて聖人國を去り、善神所を捨て、天下

【鳩化、雀變】 [illegible]

【麻畝の性】 麻の如く直くなることを喩へる語。

飢渇し、世上疫病すと。今主人廣く經文を引いて、明に理非を示す。故に妄執既に翻り、耳目數朗かなり。所詮國土泰平天下安穩は、一人より萬民に至るまで好む所なり、樂ふ所なり。早く一闡提の施を止め、永く衆の僧尼の供を致し、佛海の白浪を收め、法山の綠林を截らば、世は羲農の世と成り、國は唐虞の國と爲らん。然して後法水の淺深を斟酌し、佛家の棟梁を崇重せん。」主人悦んで曰く「鳩化して鷹となり、雀變じて蛤となる。悦ばしい哉、汝蘭室の友に交はり、麻畝の性と成る。誠に其難を顧みて、專ら此言を信ぜば、風和ぎ浪靜かにして、不日の豐年ならんのみ。但し人の心は時に隨つて移り、物の性は境に依つて改まる。譬へば猶ほ水中の月の波に動き、陣前の軍の劍に靡くが如し。汝當座に信ずといへども、後定めて永く忘れん。若し先づ國土を安んじて、現當を祈らんと欲せば、速に情慮を廻らし、忩いで對治を加へよ。所以は何、「藥師經」の七難の内、五難忽に起り、二難猶殘れり。所以る他國侵逼の難、自界叛逆の難なり。「大集經」の三災の内、二災早く顯はれ、一災未だ起らず。所以る兵革の災なり。「金光明經」の内、種種の災過一一起ると雖も、他方の怨賊國内を侵掠する、此の災未だ露はれず、此の難未だ來らず。「仁王經」の七難の内、六難今盛んにして、一難未だ現ぜず。所以る四方の賊來りて國を侵すの難なり。加之、國土亂れん時は先づ鬼神亂る。鬼神亂るるが故に萬民亂ると。今此の文に就いて具さに事の情を案ずるに、百鬼早く亂れ、萬民多く亡ぶ。先難是れ明かなり、後災何ぞ疑はん。若し殘る所の難、惡法の科に依つて竝び起り競ひ來らば其時何が爲

【有爲の鄕】有爲轉變のくに、即ち現世。

んや。帝王は國家を基として天下を治め、人臣は田園を領して世上を保つ。而るに他方の賊來りて其の國を侵逼し、自界叛逆して其の地を掠領せば、豈に驚かざらんや、豈に騷がざらんや。國を失ひ家を滅せば、何れの所にか世を遁れん。汝須らく一身の安堵を思はば、先づ四表の靜謐を禱るべきものか。就中人の世に在るや、各後生を恐る。是を以て或は邪教を信じ、或は謗法を貴ぶ。各是非に迷ふことを惡むと雖も、而も猶ほ佛法に歸することを哀しむ。何ぞ同じく信心の力を以て、妄りに邪義の詞を崇めんや。若し執心飜らず、亦曲意猶存せば、早く有爲の鄕を辭して、必ず無間の獄に墮ちなん。所以は何、『大集經』に曰く、「若し國王有つて無量世に於て施戒慧を修すとも、我が法の滅せんを見て、捨てて擁護せずんば、是の如く種うる所の無量の善根、悉く皆滅失し、乃至、其の王久しからずして當に重病に遇ひ、壽終の後、大地獄に生ずべし。王の如く夫人、太子、大臣、城主、柱師、郡主、宰官の如きも亦復是の如くならん」『仁王經』に云く、「人、佛教を壞らば、復孝子なく、六親不和にして、天龍も祐けず、疾疫惡鬼、日に來りて侵害し、災怪首尾し、連禍縱橫し、死して地獄、餓鬼、畜生に入らん。若し出でて人と爲らば、兵奴の果報あらん。響の如く影の如く、人の夜書するに、火は滅すれども字は存するが如し。三界の果報も亦復是の如し」『法華經』第二に云く、「若し人信ぜずして、此の經を毀謗せば、乃至、其人命終して阿鼻獄に入らん」同第七卷「不輕品」に云く、「千劫阿鼻地獄に於て大苦惱を受く」『涅槃經』に云く、「善友を遠離し、正法を聞かず惡法に住せば、是の

【汝早く以下】有名なる安國論結論の文。

【實乘の一善】法華經のこと。

【一】領解を述ぶ。

【一佛】茲は彌陀のこと。

間の底に、沈沒して阿鼻獄に在つて、受くる所の身形縱横八萬四千由延ならん。廣く衆經を披きたるに、專ら謗法を重しとす。悲しいかな、皆正法の門を出でて深く邪法の獄に入る。愚かなるかな、各惡教の綱に懸りて鎭に謗教の網に纏はる。此の朦霧の迷ひ、彼の盛焰の底に沈む。豈に愁へざらんや、豈に苦しからざらんや。汝早く信仰の寸心を改めて、速かに實乘の一善に歸せよ。然れば則ち三界は皆佛國なり、佛國其れ衰へんや。十方は悉く寶土なり、寶土何ぞ壞れんや。國に衰微なく、土に破壞なくんば、身は是れ安全、心は是れ禪定ならん。此詞此言信ずべく、崇むべし。」

【一】客の曰く「今生後生、誰か愼まざらん。誰か恐れざらん。此の經文を披きて、具さに佛語を承はるに、誹謗の科至つて重く、毀法の罪誠に深し。我一佛を信じて諸佛を抛ち、三部經を仰ぎて諸經を閣きしは、是れ私曲の思に非ず、則ち先達の詞に隨ひしなり。十方の諸人も亦復是の如くなるべし。今世には性心を勞し、來生には阿鼻に墮せんこと、文明かに、理詳なり。疑ふべからず。彌彌貴公の慈誨を仰ぎ、益益愚客の癡心を開けり。速に對治を廻らして、早く泰平を致し、先づ生前を安んじ、更に沒後を扶けん。唯我が信ずるのみにあらず、又他の誤りを誡めんのみ。」

文應元年太歳庚申之に勘ふ。正嘉より之を始め文應元年に勘へ畢んぬ。

去ぬる正嘉元年太歳丁巳八月廿三日、戌亥の剋の大地震を見て之を勘ふ。其後文應元年太歳庚申七月十六日を以て、宿谷禪門に付いて最明寺入道殿に獻じ奉る。其後文永元年

太歳甲子七月五日大明星の時、彌彌此の災の根源を知る。文應元年太歳庚申より文永五年太歳戊辰の正月十八日に至るまで九箇年を經て、西方大蒙古國より、我が朝を襲ふべきの由牒状、之を渡す。又同六年重ねて牒状、之を渡す。既に勘文之に叶ふ。之に準じて之を思ふに未來亦然るべきか。此書は徴ある文なり。是れ偏へに日蓮の力に非ず。法華經の眞文、感の應する所か。

文永六年太歳己巳十二月八日之を寫す

【一】縮遺一一九頁、建治元年(五十四歲)身延入山直後の作。五綱教判(教、機、時、國、序)中特に時綱に就て詳述し、末法の現時は法華經に非れば得脫なきを明す。尙ほ本鈔は念佛、禪、眞言を總破し、特に眞言を詳破せり。

【二】時を知るの必要なるを總說す。

【寂滅道場の砌】華嚴說法の時。

【生身得忍】生身卽ち現身に無上法忍を得ること、卽身成佛のこと。

【一念三千】觀心本尊に詳述せらる。

【五障】提婆品に出づ、女人は梵天、

撰時鈔　上

釋子日蓮述

【一】夫れ佛法を學せん法は、必ず先づ時を習ふべし。過去の大通智勝佛は、出世し給ひて十小劫が間、一經も說き給はず。經に云く、「一たび坐して十小劫」又云く、「佛時未だ到らずと知しめして、請を受けて默然として坐し給へり。」等云云。今の教主釋尊は、四十餘年の程、法華經を說き給はず。經に云く、「說時未だ至らざるが故に。」と云云。老子は母の胎に處して八十年、彌勒菩薩は兜率の内院に籠らせ給ひて、五十六億七千萬歲を待ち給ふべし。彼の時鳥は春を送り、鷄鳥は曉を待つ。畜生すら尙ほ斯の如し。何に況んや佛法を修行せんに、時を糺さざるべしや。寂滅道場の砌には、十方の諸佛示現し、一切の大菩薩集會し給ふに、梵、帝、四天は衣を飜し、龍神八部は掌を合せ、凡夫大根性の者は耳を欹て、生身得忍の諸菩薩、解脫月等請を爲し給ひしかども、世尊は二乘作佛、久遠實成をば名字を祕し、卽身成佛、一念三千の肝心、其義を宣べ給はず。此等は偏へに是れ機はありしかども、時來らざれば宣べさせ給はず。經に云く、「說時未だ至らざるが故に。」等云云。靈山會上の砌には、閻浮第一の不孝の人たりし阿闍世大王座に列り、一代謗法の闡提たる提婆達多には、天王如來と名を授け、五障の龍女は、蛇身を改めずして佛に

帝釋、魔王、轉輪聖王、佛身の五身を成ずることを得ざるをいふ。

【決定性】決定して佛に成れざる者。今は二乘を指す。

【二】時を見て法を說くべきを明す。

【章安】天台大師の弟子灌頂。

なる。決定性の成佛は、燋れる種の花咲き菓なり、久遠實成は、百歳の叟二十五の子となれるかと疑ふ。一念三千は九界即佛界、佛界即九界と談ず。されば此經の一字は如意寶珠なり。一句は諸佛の種子となる。此等は機の熟不熟は措置きぬ。時の至れる故なり。經に曰く『今正しく是れ其時なり。決定して大乘を說く。』等云云。

【二】問うて云く「機にあらざるに大法を授けられば、愚人は定めて誹謗を作して惡道に墮つるならば、豈に說く者の罪にあらずや。」答へて云く、「人路を作るに路に迷ふ者あり、作る者の罪となるべしや。良醫藥を病人に與ふ、病人嫌つて服せずして死せば、良醫の失となるか。」尋ねて云く「法華經の第二に云く『無智の人の中に、此經を說くこと莫かれ。』同第四に云く『分布して妄りに人に授與すべからず。』同第五に云く『此の法華經は諸佛如來の祕密の藏なり。諸經の中に於て、最も其上に在り。長夜に守護して妄りに宣說せず。』等云云。此等の經文は、機にあらずば說かざれといふか。」今反詰して云く、「不輕品に云く『而も此の言を作さく、我深く汝等を敬ふ。』等云云『四衆の中に瞋恚を生じ、心不淨なる者あり。惡口罵詈して言く、是の無智の比丘』又云く『衆人或は杖木瓦石を以て之を打擲す。』等云云『勸持品』に云く『諸の無智の人の惡口罵詈等し、及び刀杖を加ふる者あらん。』等云云。此等の經文は、惡口罵詈乃至打擲すれども說かれて候は、說く人の失となりけるか。」求めて云く「此の兩說は水火なり、如何が心得べき。」答へて云く「天台云く『時に適ふのみ。』章安云く『取捨宜きを得て一向にすべからず。』等云云。釋

の心は、或時は謗じぬべきには且らく說かず。或時は謗ずとも強ひて說くべし。或時は一機は信ずべくとも萬機謗ずべくば說くべからず。或時は萬機一同に謗ずとも、強ひて說くべし。初成道の時は法慧、功德林、金剛幢、金剛藏、文殊、普賢、彌勒、解脫月等の大菩薩、梵、帝、四天等の凡夫大根性の者、其の數を知らず。鹿野苑の苑には、俱鄰等の五人、迦葉等の二百五十人、舍利弗等の二百五十人、八萬の諸天。方等大會の儀式には、世尊の慈父の淨飯大王懇に戀させさせ給ひしかば、佛宮に入らせ給ひて、『觀佛三昧經』を說かせ給ふ。悲母の御爲に忉利天に九十日が間籠らせ給ひしには、『摩耶經』を說かせ給ふ。慈父悲母なんどには、如何なる祕法か惜ませ給ふべきなれども、『法華經』をば說かせ給はず。詮ずる所機には依らず、時至らざれば如何にも說かせ給はぬにや。

【三】問うて曰く「如何なる時にか小乘、權經を說き、如何なる時にか『法華經』を說くべきや。」答へて云く「十信の菩薩より、等覺の大士に至るまで、時と機とをば相知り難き事なり。何に況や我等は凡夫なり。爭でか時機を知るべき。」求めて云く「些しも知る事あるべからざるか。」答へて云く「佛眼を借つて時機を考へよ、佛日を用て國土を照せ。」問うて云く「其の心如何」答へて云く、『大集經』に大覺世尊、月藏菩薩に對して未來の時を定め給へり。所謂る我が滅度の後五百歲の中は解脫堅固、次の五百年には禪定堅固以上一千年、次の五百年には讀誦多聞堅固、次の五百年には多造塔寺堅固以上二千年、次の五百年には「我が法の中に於て鬭諍言訟白法隱沒」等云云。此の五の五百歲、二千五百餘年に人

【俱鄰】（Kaundinya）の異音譯、憍陳如に同じ。

【三】經證を擧げて現時は法華經を弘むべきを明す。

【料簡】第五の五百歲に於て何法を弘むべきかにつきての經の撰擇。

【十住毘婆沙論】龍樹の作、其中に易行道を說けり。

【一閻浮提乃至唱ふるが如く】廣宣流布を說明する一節にして、括弧あるものとして讀過するを要す。

人の料簡種種なり。漢土の道綽禪師が云く、正像二千年、四箇の五百歲には、小乘と大乘との白法盛なるべし。末法に入りては、彼等の白法皆消滅して、淨土の法門、念佛の白法を修行せん人ばかり生死を離るべし。日本國の法然が料簡して云く、今日本國に流布する『法華經』、『華嚴經』並びに『大日經』、諸の小乘經、天台、眞言、律等の諸宗は「大集經」の記文の正像二千年の白法なり。末法に入ては彼等の白法は皆滅盡すべし。設ひ行ずる人ありとも一人も生死を離るべからず。『十住毘婆沙論』と、曇鸞法師の「難行道」道綽の「未有一人得者」、善導の『千中無一』是れなり。彼等の白法隱沒の次には「淨土三部經」「彌陀稱名」の一行ばかり、大白法として出現すべし。此を行せん人人は、如何なる惡人愚人なりとも、「十即十生、百即百生」「唯だ淨土の一門のみ有つて通入すべき路なり。」と是れなり。されば後世を願はん人人は、叡山、東寺、園城、七大寺等の日本一州の諸寺諸山の御歸依を止めて、彼の寺山に寄せ置ける田畠郡鄕を奪ひ取つて、念佛堂に附けば、決定往生南無阿彌陀佛と勸めければ我が朝一同に其義になりて今に五十餘年なり。日蓮此等の惡義を難じ破る事は、事舊り候ひぬ。彼の「大集經」の白法隱沒の時は、第五の五百歲當世なる事は疑ひなし。但し彼の白法隱沒の次には「法華經」の肝心たる「南無妙法蓮華經」の大白法の、「一閻浮提の內に八萬の國あり、其の國國に八萬の王あり、王王ごとに臣下並びに萬民までも今日本國に彌陀稱名を四衆の口口に唱ふるが如く」廣宣流布せさせ給ふべきなり。」問うて云く、「其の證文如何。」答へて云く、「法華經」第七に云く、

【智人】日蓮聖人自らを暗示す。

【小僧】前記智人のこと。

「我が滅度の後、後の五百歲の中に廣宣流布して、閻浮提に於て斷絕せしむること無けん」等云云。經文は『大集經』の白法隱沒の次の時を說かせ給ふに、「廣宣流布」と云云。同第六の卷に云く、「惡世末法の時、能く是の經を持つ者」等云云。又第五の卷に云く、「後の末世法滅せんと欲する時に於て」等。又第四の卷に云く、「而かも此經は如來の現在にすら猶怨嫉多し。況んや滅度の後をや」。又第五の卷に云く、『一切世間怨多くして信じ難し』。又第七の卷に、第五の五百歲、鬪諍堅固の時を說いて云く、「惡魔魔民、諸天龍夜叉、鳩槃荼等、其便を得ん」。「大集經」に云く、「我が法の中に於て鬪諍言訟」等云云。法華經」の第五に云く、「惡世の中の比丘」。又云く、「或は阿練若に有り」等云云。又云く、「惡鬼其身に入る」等云云。文の心は、第五の五百歲の時、惡鬼の身に入れる大僧等國中に充滿せん。其時に智人一人出現せん。彼の惡鬼の入れる大僧等時の王臣萬民等を語らひて、惡口罵詈、杖木瓦礫、流罪死罪に行はん時、釋迦、多寶、十方の諸佛、地涌の大菩薩等に仰せつけ、大菩薩は梵、帝、日月、四天等に申下され、其時天變地妖盛んなるべし。國主等其の諫めを用ゐずば、隣國に仰せ付けて、彼彼の國國の惡王惡比丘等を責めらるるならば、前代未聞の大鬪諍、一閻浮提に起るべし。其時日月所照の四天下の一切衆生、或は國を惜み、或は身を惜む故に、一切の佛菩薩に祈りを懸くとも驗しなくば、彼の憎みつる一人の小僧を信じて、無量の大僧等、八萬の大王等、一切の萬民、皆頭を地に付け掌を合せて一同に南無妙法蓮華經と唱ふべし。例せば神力品の十神力の時十方世界の一切衆生

【四】天台、妙樂、傳教等の釋論を引いて之を證す。

【妙樂大師】支那天台の中興荊溪大師湛然のこと。

一人もなく娑婆世界に向つて大音聲を放ちて南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と一同に叫びしが如し。」

【四】問うて云く、「經文は分明に候。天台、妙樂、傳教等の未來記の言ありや。」答へて云く、「汝が不審逆なり。釋を引かん時こそ、經論は如何にとは不審せられたれ。經文に分明ならば、釋を尋ぬべからず。さて釋の文經に相違せば、經を捨てて釋に就くべきか、如何。」彼云く、「道理至極せり。」然れども凡夫の習ひ、經は遠し、釋は近し。近き釋分明ならば、今少し信心を增すべし。」今云く、「汝が不審懇なれば、少少釋を出すべし。天台大師云く、「後五百歳遠く妙道に沾ふ。」妙樂大師云く、「末法の初め、冥利なきにあらず。」傳教大師云く、「正像稍過ぎ已つて、末法太だ近きにあり。法華一乘の機、今正しく是れ其時なり。何を以て知ることを得る。『安樂行品』に云く、「末世法滅の時なり。」又云く、「代を語れば則ち像の終り、末の初め、地を尋ぬれば唐の東、羯の西、人を尋ぬれば則ち五濁の生、鬪諍の時なり。經に云く、猶多怨嫉、況滅度後と、此言良に以あるなり。」」云云。夫れ釋尊の出世は住劫第九の減、人壽百歳の時なり。百歳と十歳との中間、在世五十年、滅後二千年と一萬年となり。其の中間に、『法華經』の流布の時二度あるべし。所謂る在世は八年、滅後には末法の始め五百年なり。而るに天台、妙樂、傳教等は、進んでは、在世『法華經』の時にも漏れさせ給ひぬ。退いては、滅後末法の時にも生れさせ給はず。中間なる事を歎かせ給ひて、末法の始めを戀ひさせ給ふ御筆なり。例せば阿私陀仙人が悉達太子の生れさ

【鬱頭羅弗】意義不明なれども、不信謗法の者の意ならん。

【五】印度の論師に此釋なきを述べ以て法華經の末法爲正を明す。初に正法一千年法華未顯を述ぶ。

せ給ふを見て悲んで云く、『現生には九十に餘れり、太子の成道を見るべからず、後生には無色界に生れて、五十年の說法の座にも列るべからず。正像末にも生るべからず。』と、歎きしが如し。道心あらん人人は、此を見聞きて悅ばせ給へ。正像二千年の大王よりも、後世を思はん人人は末法の今の民にてこそあるべけれ。此を信ぜざらんや。彼の天台の座主よりも、南無妙法蓮華經と唱ふる癩人とはなるべし。梁の武帝の發願に云く、『寧ろ提婆達多と成つて無間地獄には沈むとも、鬱頭羅弗とはならじと。』云云。」

【五】問うて云く、「龍樹、天親等の論師の中に此義ありや。」答へて云く、「龍樹天親等は內心には存せさせ給へども言には此義を宣べ給はず。」求めて云く、「如何なる故にか宣べ給はざるや。」答へて云く、「多くの故あり。一には彼の時には機なし。二には時なし。三には迹化なれば付囑せられ給はず。」求めて云く、「願くは此事能く聞かんと思ふ。」答へて云く、「夫れ佛の滅後二月十六日よりは正法の始めなり。迦葉尊者佛の付囑を受けて二十年、次に阿難尊者二十年、次に商那和修二十年、次に優婆崛多二十年、次に提多迦二十年、已上一百年が間は、但だ小乘經の法門をのみ弘通して、諸大乘經は名字もなし、何に況んや『法華經』を弘むべしや。次には彌遮迦、佛陀難提、佛駄密多、脇比丘、富那奢等の四五人、前の五百餘年が間は、大乘經の法門少少出來せしかども、取立てて弘通し給はず、但だ小乘經を面として止みぬ。已上『大集經』の先五百年、解脫堅固の時なり。正法の後六百年已後、一千年が前、其の中間に馬鳴菩薩、毘羅尊者、龍樹菩薩、提婆菩薩、

羅睺尊者、僧佉難提、僧伽耶舍、鳩摩羅馱、闍夜那、盤陀、摩努羅、鶴勒夜那、師子等の十餘人の人人、始めには外道の家に入り、次には小乘經を究め、後には諸大乘經を以て諸の小乘經を散散に破し失ひ給ひき。此等の大士等は諸大乘經を以て諸小乘經をば破せさせ給ひしかども、諸大乘經と『法華經』の勝劣をば分明に書かせ給はず。設ひ勝劣を少し書かせ給ひたるやうなれども、本迹の十妙、二乘作佛、久遠實成、已今當の妙、百界千如、一念三千の肝要の法門は分明ならず。但だ或は指を以て月を指すが如くし、或は文に當りて一端ばかり書かせ給ひて、化導の始終、師弟の遠近、得道の有無は總て一分も見えず。此等は正法の後の五百年、『大集經』の禪定堅固の時に當れり。正法一千年の後は、月氏に佛法充滿せしかども、或は小を以て大を破し、或は權經を以て實經を隱沒し、佛法種種に亂れしかば、得道の人漸く少く、佛法に付けて惡道に墮つる者數を知らず。

【六】正法一千年の後、像法に入つて一十五年と申せしに、佛法東に流れて漢土に入りにき。像法の前の五百年の內、始めの一百餘年が間は、漢土の道士と月氏の佛法と諍論して、未だ事定まらず。設ひ定まりたりしかども、佛法を信ずる人の心未だ深からず。而るに佛法の中に大小、權實、顯密を分つならば、聖教一同ならざる故、疑起りて却りて外典と伴ふ者もありぬべし。是等の畏れあるかの故に、摩騰、竺蘭は知つて而も大小を分けず、權實を云はずして止みぬ。其の後魏、晉、宋、齊、梁の五代が間、佛法の內に大小、

【本迹十妙】本門十妙、迹門十妙のこと。

【已今當の妙】已說今說當說の三說を超過せること。

【六】像法の初五百歲法華經未顯を述ぶ。

【摩騰、竺蘭】加葉摩騰と竺法蘭の略。始めて支那に佛法を傳へし人。

【南三北七】玄義十卷に出る十師の教判。

【七】像法の後五百歲の初二百年間法華未顯を述ぶ。

權實、顯密を爭ひし程に、何れこそ道理とも聞えずして、上一人より下萬民に至るまで、不審少からず。南三北七と申して、佛法十流に分れり。所謂る南には三時、四時、五時、北には五時、半滿、四宗、五宗、六宗、二宗の大乘、一音等、各義を立て、邊執水火なり。然れども大綱は一同なり。所謂る一代聖教の中には、『華嚴經』第一、『涅槃經』第二、『法華經』第三なり。『法華經』は『阿含』、『般若』、『淨名』、『思益』等の經經に對すれば眞實なり、了義經、正見なり。然りと雖も『涅槃經』に對すれば、無常教、不了義經、邪見の經等云云。漢より四百餘年の末、五百年に入て、陳隋二代に智顗と申す小僧一人あり。後には天台智者大師と號し奉る。南北の邪義を破りて、一代聖教の中には『法華經』第一『涅槃經』第二、『華嚴經』第三なり等云云。此れ像法の前五百歲。『大集經』の讀誦多聞堅固の時に相當れり。

【七】像法の後五百歲は、唐の始め太宗皇帝の御宇に、玄奘三藏月支に入て十七年が間、百三十ケ國の寺塔を見聞して、多くの論師に値ひ奉りて、八萬聖教、十二部經の淵底を習ひ究めしに、其中に二宗あり、所謂る法相宗三論宗なり。此の二宗の中に法相大乘を、遠くは彌勒、無著、近くは戒賢論師に傳へて、漢土に還りて、太宗皇帝に授けさせ給ふ。此の宗の心は佛教は機に隨ふべし。一乘の機の爲には、三乘方便、一乘眞實なり。所謂る『法華經』等なり。三乘の機の爲には、三乘眞實、一乘方便、所謂る『深密經』、『勝鬘經』等これなり。天台智者等は此旨を辯へず等云云。而かも太宗は賢王なり、當時名を

【八】像法時代に佛教日本に渡來せしが法華未顯なるを述ぶ。

一天に響かすのみならず、三皇にも超え、五帝にも勝れたるよし四海に響き、漢土を手に握るのみならず、高昌、高麗等の一千八百餘國を靡かし、内外を極めたる王と聞えし賢王の第一の御歸依の僧なり。天台宗の學者の中にも、頭を差出す人一人もなし。而れば『法華經』の實義、已に一國に隱沒しぬ。同じき太宗の太子高宗、高宗の繼母則天皇后の御宇に、法藏法師といふ者あり。法相宗に天台宗の襲はるる處を見て、前に天台の御時責められし『華嚴經』を取出して、一代の中には華嚴第一、法華第二、涅槃第三と立てけり。太宗の第四代、玄宗皇帝の御宇、開元四年、同じき八年に、西天印度より善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏、『大日經』『金剛頂經』『蘇悉地經』を持て渡り、眞言宗を立つ。此の宗の立義に云く、敎に二種あり、一には釋迦の顯敎、所謂る『華嚴』『法華』等、二には大日の密敎、所謂る『大日經』等なり。『法華經』は顯敎の第一なり。此經は大日の密敎に對すれば、極理は少し同じけれども、事相の印契と眞言とは絶えて見えず。三密相應せざれば、不了義經等云云。已上法相、華嚴、眞言の三宗、一同に天台法華宗を破れども、天台大師程の智人、法華宗の中に無かりけるかの間、内内は謂れなき由は存じけれども、天台の如く公場にして論ぜられざりければ、上、國王大臣、下、一切の人民に至るまで、皆佛法に迷ひて衆生の得道皆止まりけり。此等は像法の後の五百年の前二百餘年が内なり。

【八】像法に入て四百餘年と申しけるに、百濟國より一切經並びに教主釋尊の木像、僧尼等日本國に渡る。漢土の梁の末、陳の初めに相當る。日本には神武天皇よりは第三十代、

【淨名經】維摩（Vimalakirti）詰の譯名。

【九】像法八百年傳教大師始めて法華の眞實を顯すことを述ぶ。

欽明天皇の御宇なり。欽明の御子、用明の太子に上宮王子、佛法を弘通し給ふのみならず、並びに『法華經』、『淨名經』、『勝鬘經』を鎭護國家の法と定めさせ給ひぬ。其後人王第三十七代、孝德天皇の御宇に三論宗成實宗を、觀勒僧正百濟國より渡す。同き御代に道昭法師漢土より法相宗、倶舍宗を渡す。人王第四十四代、元正天皇の御宇に、天竺より『大日經』を渡してありしかども、而も弘通せずして漢土へ返る。此僧をば善無畏三藏といふ。人王第四十五代、聖武天皇の御宇に、審祥大德新羅國より華嚴宗を渡して、良辨僧正に授く。良辨僧正は聖武天皇に授け奉りて、東大寺の大佛を立てさせ給へり。同じき御代に、大唐の鑑眞和尚、天台宗と律宗を渡す。其の中に律宗をば弘通し、小乘の戒場を東大寺に建立せしかども、法華宗の事をば名字をも申し出させ給はずして入滅し了んぬ。

【九】其後人王第五十代、像法八百年に相當つて、桓武天皇の御宇に、最澄と申す小僧出來せり。後には傳教大師と號し奉る。始めには三論、法相、華嚴、倶舍、成實、律の六宗、並びに禪宗等を行表僧正等に習學せさせ給ひし程に、我と立て給へる國昌寺、後には比叡山と號す。此處にして六宗の本經本論と、宗宗の人師の釋とを引き合せて御覽ありしかば、彼の宗宗の人師の釋、所依の經論に相違せる事多き上、僻見多多にして、信受せん人人皆惡道に墮ちぬべしと考へさせ給ふ。其上『法華經』の實義は、宗宗の人人我も得たり我も得たりと自讃ありしかども、其義なし。此を申すならば喧嘩出來すべし。默して

【陳殿】陳帝の宮殿。

【身毒】印度の異音譯。

申さずば、佛の誓ひに背きなんと、思ひ煩はせ給ひしかども、終に佛の誡めを畏れて、桓武皇帝に奏し給ひしかば、帝此の事を驚かせ給ひて、六宗の碩學に召し合させ給ふ。彼の學者等、始めて慢の幢山の如し。惡心毒蛇のやうなりしかども、終に王の前にして責め落され六宗七寺一同に御弟子となりぬ。例せば漢土の南北の諸師、陳殿にして天台大師に責め落されて、御弟子となりしが如し。此はこれ圓定、圓慧ばかりなり。其上、天台大師の未だ責め給はざりし小乘の別受戒を責め落し、六宗の八大徳に、梵網經の大乘別受戒を授け給ふのみならず、『法華經』の圓頓の別受戒を叡山に建立せしかば、延暦圓頓の別受戒は、日本第一たるのみならず、佛滅後一千八百餘年が間、身毒、支那、一閻浮提に未だなかりし靈山の大戒、日本國に始まる。されば傳教大師は、其功を論ずれば、龍樹、天親にも超え、天台、妙樂にも勝れて在します聖人なり。されば日本國の當世の東寺、園城、七大寺、諸國の八宗、淨土、禪宗、律宗等の諸僧等、誰人か傳教大師の圓戒に背くべき。彼の漢土九國の諸律には、圓定、圓慧は天台の弟子に似たれども、圓頓一同の戒場は漢土に無ければ戒に於ては弟子とならぬ者もありけん。此の日本國は、傳教大師の御弟子にあらざる者は外道なり、惡人なり。而れども漢土、日本の天台宗と眞言の勝劣は、大師心中には存知せさせ給ひけれども、六宗と天台宗との如く公場にして勝負なかりける故にや、傳教大師已後には、東寺、七寺、園城の諸寺、日本一州一同に、眞言宗は天台宗に勝れたりと、上一人より下萬民に至るまで、思召思へり。然れば天台法華宗は、傳教大師の御時計

【一〇】末法に入つて二百餘歲の今時法華經の廣宣流布疑なきを結す。

【一一】法華經を弘むる者は日本國の一切衆生の父母なり師なり主なるを明し、開目鈔の文と照應す。

【色究竟】天の名。

りにぞありける。此の傳敎の御時は、像法の末、『大集經』の多造塔寺堅固の時なり。未だ『我が法の中に於いて闘諍言訟して、白法隱沒』の時には當らず。

【一〇】今末法に入つて二百餘歲、『大集經』の『我が法の中に於いて、闘諍言訟して、白法隱沒』の時に當れり。佛語實ならば、定めて一閻浮提に闘諍起るべき時節なり。傳へ聞く漢土は三百六十ケ國、二百六十餘州は已に蒙古國に打破られぬ。華洛既に破られて、徽宗、欽宗の兩帝、北蕃に生捕りにせられて、韃靼にして終に崩れさせ給ひぬ。徽宗の孫高宗皇帝は長安を攻落されて、田舍の臨安行在府に落ちさせ給ひて、今に數年が間京を見ず。高麗六百餘國も、新羅、百濟等の諸國等も、皆大蒙古國の皇帝に攻められぬ。今の日本國の壹岐對馬、竝に九國の如し。闘諍堅固の佛語地に墮ちず、宛かも是れ大海の潮の時を違へざるが如し。是を以て案ずるに、『大集經』の白法隱沒の時に次いで、『法華經』の大白法の日本國竝びに一閻浮提に廣宣流布せん事も疑ふべからざるか。

【一一】彼の『大集經』は佛說の中の權大乘ぞかし。生死を離るる道には、『法華經』の結緣なき者の爲には、未顯眞實なれども、六道四生三世の事を記し給ひけるは、寸分も違はざりけるにや。何に況んや『法華經』は、釋尊『要當說眞實』と名乘らせ給ひ、多寶佛は眞實なりと御判を添へ、十方の諸佛は廣長舌を梵天に付けて、誠諦と指し示し、釋尊は重ねて無虛妄の舌を色究竟に付けさせ給ひて、後五百歲に一切の佛法の滅せん時、上行菩薩に『妙法蓮華經』の五字を持たしめて、謗法一闡提の白癩病の輩の良藥とせんと、

【一二】大難と法華經の行者との關係を說く。

梵、帝、日月、四天、龍神等に仰せつけられし金言、虛妄なるべしや。大地は反覆すとも、高山は頽落すとも、春の後に夏は來らずとも、日は東へ歸るとも、月は地に落つるとも、此事は一定なるべし。此事一定ならば、闘諍堅固の時、日本國の王臣と、並びに萬民等が、佛の御使ひとして南無妙法蓮華經を流布せんとするを、或は罵詈し、或は惡口し、或は流罪し、或は打擲し、弟子眷屬等を種種の難に會はする人人、爭でか安穩にては候べき。これをば愚癡の者は咒咀すと思ひぬべし。『法華經』を弘むる者は、日本國の一切衆生の父母なり。章安大師云く『彼が爲めに惡を除くは、即ち是れ彼が親なり。』等云云。されば日蓮は當帝の父母、念佛者、禪衆、眞言師等が師範なり又主君なり。而るを上一人より下萬民に至るまで怨をなすをば、日月爭でか彼等が頂を照し給ふべき、地神爭でか彼等の足を戴き給ふべき。提婆達多、佛を打ち奉りしかば、大地搖動して火炎出でにき。檀彌羅王、師子尊者の頸を切りしかば、右の手、刀と共に落ちぬ。徽宗皇帝は法道が面に火印を燒きて江南に流せしかば、半年が内に夷人の手に懸り給ひき。蒙古の攻も亦斯の如くなるべし。設ひ五天の兵を集めて、鐵圍山を城とせりとも協ふべからず。必ず日本國の一切衆生兵難に値ふべし。されば日蓮が『法華經』の行者にてあるなきかは是れにて見るべし。

【一三】教主釋尊記して云く、末代惡世に『法華經』を弘通するものを惡口罵詈等せん人人は、我を一劫が間怨せん者の罪にも、百千萬億倍過ぎたるべしと說かせ給へり。而るを今の日本國の國主萬民等、我意に任せて父母宿世の敵よりも甚く憎み、謀反殺害の者より

【三】傳敎、日蓮の外に法華經の行者なきを斷じ、法華經の行者を迫害する者は大難に遭ふべしと說く。

【閻浮提第一】閻浮提は須彌四洲の一なれども此は世界第一といふ程の意味なり。

も強く攻めぬるは、現身にも大地破れて入り、天雷も身を裂かざるに不審なり。日蓮が『法華經』の行者にてあらざるか。若し然らば大きに歎かし。今生には萬人に責められて片時も安からず、後生には惡道に墮ちん事、歎かしとも申すばかりなし。

【三】又日蓮『法華經』の行者ならずば、如何なる者の一乘の持者にてはあるべきぞ。法然が『法華經』を拋てよ、善導が『千中無一』道綽が『未有一人得者』と申すが、『法華經』の行者にて候か。又弘法大師の云はく、『法華經』を行ずるは戯論なり』と書かれたるが、『法華經』の行者なるべきか。經文には『能く是經を持つ』『能く此經を說く』なんどこそ說かれて候へ。能く說くと申すは如何なるぞと申すに、『於諸經中最在其上』と申して、『大日經』『華嚴經』『涅槃經』『般若經』等に『法華經』は勝れて候なりと申す者をこそ、經文には『法華經』の行者とは說かれて候へ。若し經文の如くならば、日本國に佛法渡て七百餘年、傳敎大師と日蓮とが外は、一人も『法華經』の行者は無きぞかし。如何に如何にと思ふ處に、『頭破作七分』『口則閉塞』の無かりけるは道理にて候ひけるなり。此等は淺き罰なり。但一人二人等のことなり。日蓮は閻浮提第一の『法華經』の行者なり。此を謗り、此を怨む人を結構せん人は、閻浮第一の大難に値ふべし。これは日本國を振搖がす正嘉の大地震、一天を罰する文永の大彗星等なり。此等を見よ、佛滅度の後、佛法を行ずる者に怨を作すと雖も、今の如くの大難は一度も無きなり。南無妙法蓮華經と一切衆生に勸めたる人一人もなし。此の德は誰か一天に眼を合せ、四海に肩を比ぶべき

【一四】正法時代の上機に法華經を用ゐざる所以は「時」にあるを示す。

【玄、文、止】玄義、文句、止觀の略。

や。」

【一四】疑て云く「設ひ正法の時は、佛の在世に對すれば根機劣なりとも像末に對すれば最上の上機なり。爭でか正法の始めに、『法華經』をば用ゐざるべき。隨つて馬鳴、龍樹、提婆、無著等も、正法一千年の内にこそ出現せさせ給へ。天親菩薩は千部の論師、『法華論』を造て、諸經の第一の義を存す。眞諦三藏の相傳に云く『月支に『法華經』を弘通せる家五十餘家、天親は其の一なり。』と。已上正法なり、像法に入ては、天台大師像法の半に漢土に出現して『玄』と『文』と『止』との三十卷を造て『法華經』の淵底を極めたり。像法の末に傳教大師日本に出現して、天台大師の圓慧、圓定の二法を我朝に弘通せしむるのみならず、圓頓の大戒場を叡山に建立して、日本一州を皆同じく圓戒の地になして、上一人より下萬民まで、延暦寺を師範と仰がせ給ふ。豈に像法の時『法華經』の廣宣流布にあらずや。」答へて云く「如來の敎法は必ず機に隨ふと云ふ事は、世間の學者の存知なり。然れども佛敎は然らず。上根、上智の人の爲に、必ず大法を說くならば、初成道の時何ぞ『法華經』を說き給はざる。正法の先五百年に大乘經を弘通すべし。有緣の人に大法を說かせ給ふならば、淨飯大王、摩耶夫人に『觀佛三昧經』『摩耶經』を說くべからず。無緣の惡人、謗法の者に祕法を與へずば、覺德比丘は無量の破戒の者に『涅槃經』を授くべからず。不輕菩薩は誹謗の四衆に向つて、如何に『法華經』をば弘通せさせ給ひしぞ。されば機に隨つて法を說くと申すは、大なる僻見なり。」

【一五】龍樹、世親（天親）等が法華經の實義を述べざるを說く。
【世親】（Vasubandhu）の譯にて、舊譯にては天親とす。
【因緣所生法】中論第四の有名なる三諦偈の文をいふ「因緣所生法、我說即是空、亦名爲假名、亦是中道義」
【四教、三諦】藏、通、別、圓の化法四教と空、假、中の三諦。
【從義】唐末天台宗の學者「補註」「集解」等の名著あり。

【一五】問うて云く、「龍樹、世親等は『法華經』の實義をば宣べ給はずや。」答へて云く、「宣べ給はず。」問うて云く、「何なる經をか宣べ給ひし。」答へて云く、「『華嚴』、『方等』、『般若』、『大日經』等の、權大乘、顯密の諸經を宣べさせ給ひて、『法華經』の法門をば宣べさせ給はず。」問うて云く、「何を以て之を知るや。」答へて云く、「龍樹菩薩の所造の論三十萬偈、而れども盡して漢土日本に渡らざれば、其の心知り難しと雖も、漢土に渡れる『十住毘婆娑論』、『中論』、『大論』等を以て、天竺の論をも比知して此を知るなり。」疑つて云く、「天竺に殘る論の中に、渡れる論よりも勝れたる論やあるらん。」答へて云く、「龍樹菩薩の事は私に申すべからず。佛記し給へり。我が滅後に龍樹菩薩と申す人、南天竺に出づべし。彼の人の所詮は『中論』といふ論にあるべしと、佛記し給ふ。隨つて龍樹菩薩の流、天竺に七十家あり。七十人ともに大論師なり。彼の七十家の人人は、皆『中論』を本とす。『中論』四卷二十七品の肝心は『因緣所生法』の四句の偈なり。此の四句の偈は『華嚴』『般若』等の四教、三諦の法門なり。未だ『法華』開會の三諦をば宣べ給はず。」疑つて云く、「汝が如く料簡せる人ありや。」答へて云く、「天台云く、『中論を以て相比する事莫かれ。』又云く、『天親、龍樹內鑒冷然にして、外時の宜きに適ふ。』等云云。妙樂云く、『破會を論ぜば、未だ法華に若かざる故に。』云云。從義云く、『龍樹、天親未だ天台に若かず。』云云。」

【一六】問うて云く、「唐の末に不空三藏一卷の論を渡す。其の名を『菩提心論』と名く、龍猛菩薩の造なり云云。弘法大師云く、『此論は龍猛千部の中に第一肝心の論。』と云云。」答

【一六】「菩提心論」の荒誕、不空三藏の謬見を難ず。【龍猛】普通には龍樹(Nāgārjuna)の異譯とすれども異人なりとの說もあり、今は同人として扱へり。【荒量】荒誕といふ如し。【すべし】「爲べし」一の意なりとも言へど「統べし」の意とも解せらる。【一七】羅什三藏の譯のみ正確なる所以を說く。

へて云く、「此論一部七丁あり、龍猛の言ならぬ事處處に多し。故に目錄にも、或は龍猛、或は不空と兩方に、未だ事定まらず。其の上、此論文は一代を括れる論にもあらず、荒量なる事此れ多し。先づ『唯眞言法中の肝心』の文誤りなり。其の故は文證、現證ある『法華經』の卽身成佛をば無きになして、文證も現證も跡方もなき眞言の經に、卽身成佛を立て候。又唯といふ、唯の一字は第一の誤りなり。事の體を見るに不空三藏の私に作りて候を、時の人に重くせさせんが爲に、事を龍猛に寄せたるか。其の上不空三藏は誤る事數多し。所謂る『法華經』の觀智の儀軌に『壽量品』を『阿彌陀佛』と書ける、眼前の大僻見なり。『陀羅尼品』を『神力品』の次に置ける、『囑累品』を經末に下せる、此等は云ふに效なし。さるかと見れば、天台の大乘戒を盜んで、代宗皇帝に宣旨を申し、五台山の五寺に立てたり。而もまた眞言の教相には、天台宗をすべしと云へり。彼々誑惑の事どもなり。他人の譯ならば用ゆる事もありなん。此人の譯せる經論は信ぜられず。總じて月支より漢土に經論を渡す人、舊譯新譯に一百八十七人なり。羅什三藏一人を除いては、何れの人人も誤らざるはなし。其の中に不空三藏は、殊に誤り多き上、誑惑の心顯はなり。」

【一七】疑つて云く、「何を以て知るぞや。羅什三藏より外の人人は誤りなりとは、汝が禪宗、念佛、眞言等の七宗を破るのみならず、漢土日本に渡る一切の譯者を用ゐざるか、如何。」答へて云く、「此事は余が第一の祕事なり。委細には向つて問ふべし。但し少し申すべし。羅什三藏の云く、我漢土の一切經を見るに、皆梵語の如くならず。爭でか此事を顯は

【一八】天台大師尚ほ時を得ず、隨つて法華經の行者に非ることを示す。

すべき。但し一つの大願あり。身を不淨になして妻を帶すべし。舌ばかり清淨になして佛法に妄語せじ。我死せば必ず燒くべし。燒かん時、舌燒くるならば、我が經を捨てよと、常に高座にして說かせ給ひしなり。上一人より下萬民に至るまで願じて云く、願くは羅什三藏より後に死せんと。終に死し給ふ後、燒き奉りしかば、不淨の身は皆灰となりぬ。御舌ばかり火中に青蓮華生ひて其の上にあり。五色の光明を放ちて、夜は晝の如く、晝は日輪の御光りを奪ひ給ひき。扨こそ一切の譯人の經經は輕くなりて、羅什三藏の譯し給へる經經、殊に『法華經』は漢土に易易と弘まり給ひしか。」疑つて云く、「羅什已前は爾るべし。已後の善無畏、不空等は如何。」答へて云く、「已後なりとも譯者の舌の燒くるをば、誤りありけりと知るべし。されば日本國に法相宗の流行りたりしを、傳教大師責めさせ給ひしには、『羅什三藏は舌燒けず、玄奘、慈恩は舌燒けぬ』と責めさせ給ひしかば、桓武天皇道理と思して、天台法華宗へは遷らせ給ひしなり。『涅槃經』の第三、第九等を見參らすれば、我が佛法は月支より他國へ渡らん時、多くの謬誤出來して、衆生の得道薄かるべしと說かれて候。されば妙樂大師は『並びに進退は人に在り、何ぞ聖旨に關らん。』とこそ遊ばされて候へ。今の人人如何に經のままに後世を願ふとも、謬れる經經のままに願はば、得道もあるべからず。然ればとても、佛の御咎にはあらじと書かれて候。佛教を習ふ程には、大小、權實、顯密はさておく、是れこそ第一の大事にては候らめ。」

【一八】疑つて云く、「正法一千年の論師の內、心には『法華經』の實義の顯密の諸經に超

【千年の興、五百の實】聖人は千年に出で賢人は五百年に現はるといふ儒典の語をかりて天台大師を不世出の聖賢として讃歎せしなり。

【摩訶衍】大乘（Mahāyāna）の音譯。

過してある由は知し召したがら、外には宣說せずして、但だ權大乘ばかりを宣べさせ給ふことは、顯るべしとは覺えねども、其の義は少し聞え候ひぬ。像法一千年の半に天台智者大師出現して、題目の妙法蓮華經の五字を、『玄義』十卷一千枚に書き盡し、『文句』十卷には、始め『如是我聞』より、終り『作禮而去』に至るまで、一字一句に因緣、約教、本迹、觀心の四の釋を並べて、又一千枚に盡し給ふ。已上玄義、文句の二十卷には、一切經の心を江河として『法華經』を大海に譬へ、十方界の佛法の露一滴も漏さず、妙法蓮華經の大海に入れさせ給ひぬ。其の上、天竺の大論師の諸義一點も漏さず、漢土南北の十師の義、破すべきをばこれを破し、取るべきをば此を用ふ。其の上、『止觀』十卷を註して、一代の觀門を一念に統べ、十界の依正を三千に縮めたり。此の書の文體は、遠くは月支一千年の間の論師にも越え、近くは尸那五百年の人師の釋にも勝れたり。故に三論宗の吉藏大師、南北一百餘人の先達と、長者等を勸めて、天台大師の講經を聞けと勸むる狀に云く、『千年の興、五百の實、復今日に在り、乃至、南岳の叡聖、天台の明哲、昔は三業住持し、今は二尊に紹繼す。豈に止だ甘露を震旦に灑ぐのみならん。亦當に法鼓を天竺に震ふべし。生知の妙悟なり。魏、晉より此來典籍の風謠、實に連類なし。乃至、禪衆一百餘僧と共に智者大師を奉請す』等云云。終南山の道宣律師、天台大師を讃歎して云く、『法華を照了すこと、高輝の幽谷に臨むが如く、摩訶衍を說くこと、長風の太虛に遊ぶに似たり。假令ひ文字の師千群萬衆あつて數ば彼の妙辯を尋ぬとも、能く窮むる者なし。乃至、義は月を指す

に同じ、乃至、宗は一極に帰す。」云云。華厳宗の法蔵大師、天台を讃して云く、「思禅師智者等の如きは、神異に感通して、迹登位に参はる。霊山の聴法、憶今に在り」等云云。真言宗の不空三蔵、含光法師等、師弟共に真言宗を捨てて、天台大師に帰伏する物語に云く、『高僧伝』に云く、「不空三蔵と親り天竺に遊びたるに、彼に僧あり。問うて曰く、大唐に天台の教迹あり、最も邪正を簡び、偏円を暁むるに堪へたり。能く之を訳して、将に此土に至らしめむや」等云云。此の物語は含光が妙楽大師に語り給ひしなり。妙楽大師此の物語を聞いて云く、「豈に中国に法を失ひて、之を四維に求むるにあらずや。而も此の方に識ること有る者少し。魯人の如きのみ」等云云。身毒国の中に天台三十巻の如くなる大論あるならば、南天の僧いかでか漢土の天台の釈をねがうべき。是れ豈に像法の中に法華経の実義顕はれて、南閻浮提に広宣流布するにあらずや。答へて云く、「正法一千年、像法の前四百年、已上仏滅後一千四百余年に、未だ論師の弘通し給はざる一代超過の円定、円慧を、漢土に弘通し給ふのみならず、其の声月氏までも聞えぬ。法華経の広宣流布には似たれども、未だ円頓の戒壇を立てられず、小乗の威儀を以て円の慧定に切りつけるは少し便りなきに似たり。例せば日輪の蝕するが如し、月輪の欠けたるに似たり。何に況んや天台大師の御時は、『大集経』の読誦多聞堅固の時に相当って、未だ広宣流布の時にあらず。」

【一九】 問うて云く、「伝教大師は日本国の士なり。桓武の御宇に出世して、欽明より二百

【思禅師智者】 思禅師と天台大師。
【登位に参はる】 菩薩の初住の位に登ることにて、菩薩の位に入ること。
【教迹】 教の迹即ち教行のことか、又は遺教の意か。
【四維】 四隅のこと。
【魯人】 愚人のこと。魯人が自国の聖人孔子を知らざりしより来る語。
【一九】 伝教大師すら尚ほ未だ時を得ず、法華経の行者として法華経の真実義を顕はさざるを述ぶ。

【内證】内心の證悟。

【此の二人】天台、傳教をいふ。

餘年が間の邪義を難じ破り、天台大師の圓慧、圓定を證じ給ふのみならず、鑑眞和尚の弘通せし、日本小乘の三處の戒壇を難じ破り、叡山に圓頓の大乘別受戒を建立せり。此の大事は佛滅後一千八百年が間の、身毒、尸那、扶桑、乃至一閻浮提第一の奇事なり。内證は龍樹、天台等には或は劣るにもや、或は同じくもやあるらん。佛法の人を統べて一法となせる事は、龍樹、天親にも超え、南岳、天台にも勝れて見えさせ給ふなり。總じては如來御入滅の後、一千八百餘年が間、此の二人こそ『法華經』の行者にてはおはすれ。故に『秀句』に云く「若し須彌を接つて他方無數の佛土に擲げ置かんも、亦未だ爲れ難しとせず。乃至、若し佛の滅度に、惡世の中に於て、能く此の經を說かん、是れ則ち爲れ難し」等云云。此經を釋して云く「淺は易く、深は難しとは、釋迦の所判なり。淺を去つて深に就くは丈夫の心なり。天台大師は釋迦に信順して、法華宗を助けて、震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承して、法華宗を助けて、日本に弘通す」云云。釋の心は、賢劫第九の減、人壽百歲の時より、如來在世五十年、滅後一千八百餘年が間、高さ十六萬八千由旬、六百六十二萬里の金山を、有る人五尺の小身の手を以て、方一寸二寸等の瓦礫を握りて、一丁二丁まで投ぐるが如く、雀鳥の飛ぶよりも疾く、鐵圍山の外へ投ぐる者はありとも、『法華經』を佛の說かせ給ひしやうに說かん人は、末法には稀なるべし。天台大師、傳教大師こそ、佛說に相似して說かせ給ひたる人にて在すれとなり。天竺の論師は、未だ『法華經』へ行き着き給はず。漢土の天台已前の人師は、或は過ぎ、或は足らず。慈恩、法藏、

【二藏、三時、三轉法輪】三論の教判。聲聞藏と菩薩。有空中三時。根本法輪。枝末法輪、攝末歸本法輪の三法輪。

【三時、五性】法相の教判、教理。有空中の三時。無性有情、不定種性、聲聞決定種性、緣覺決定種性、菩薩決定種性の五性。

【四教、五教等】華嚴の教判、教理。小教、漸教、頓教、圓教の四教。漸教を大乘始教と終教とに分ちし五教。根本、枝末二法輪。六相圓融と十玄門（略）

【含靈】衆生のこと。

善無畏等は、東を西と言ひ、天を地と申せる人人なり。此等は傳教大師の自讃にはあらず。去る延暦二十一年正月十九日、高雄山に桓武皇帝行幸なりて、六宗七大寺の碩德たる、善議、勝猷、奉基、寵忍、賢玉、安福、勤操、修圓、慈誥、玄耀、歳光、道證、光證、觀敏等の十有餘人、最澄法師と召し合せられて宗論ありしに、或は一言に舌を巻いて二言三言に及ばず。皆一同に頭を傾け手を叉ふ。三論の二藏三時三轉法輪、法相の三時五性、華嚴宗の四教五教、根本枝末、六相十玄、皆大綱を破らる。例せば大屋の棟梁の折れたるが如し。十大德の慢幢も倒れにき。爾の時天子大に驚かせ給ひて同廿九日に弘世、國道の兩吏を勅使として、重ねて七寺六宗に仰せ下されしかば、各各歸伏の狀を載げて云く、「竊に天台の玄疏を見れば、釋迦一代の教へを總括して悉く其の趣きを顯はすに、通ぜざる所なく、獨り諸宗に逾え殊に一道を示す。其の中の所說、甚深の妙理なり。七箇の大寺、六宗の學生、昔より未だ聞かざる所、曾て未だ見ざる所なり。三論法相の久年の諍ひ、渙焉として氷の如く釋け、照然として既に明かに、猶ほ雲霧を披いて三光を見るが如し。聖德の弘化より以降、今に二百餘年の間、講ずる所の經論、其の數惟れ多し。彼此理を爭へども、其の疑ひ未だ解けず。而るに此の最妙の圓宗、猶ほ未だ闡揚せざりき。蓋し以みれば此間の群生、未だ圓味に應はざるか。伏して惟みれば、聖朝久しく如來の付を受け、深く純圓の機を結び、一妙の義理始めて乃ち興顯し、六宗の學者初めて至極を悟る。此界の含靈而今而後悉く妙圓の船に載り、早く彼岸に渡ることを得と謂つべし。乃至、善議等

【休運】休時の運。

【一】天台、傳教未通の深法を明す前、法華の難信を述ぶ。

【三祇】三祇劫の略。

【無見頂相】佛の相好の一。

幸かれて休運に逢ひ、即ち奇詞を閲す。深則に非らざるよりは、何ぞ聖世に託せんや。」等云云。彼の漢土の嘉祥等は一百餘人を集めて天台大師を聖人と定めたり。今日本の七寺二百餘人は、傳教大師を聖人と號し奉る。佛の滅後二千餘年に及んで、兩國に聖人二人出現せり。其上、天台大師の未弘の圓頓大戒を、叡山に建立し給ふ。此れ豈に像法の末に、法華經の廣宣流布するにあらずや。」答へて云はく「迦葉、阿難等の弘通せざる大法を、馬鳴、龍樹、提婆、天親等の弘通せる事、前の難に顯れたり。又龍樹、天親等の流布し殘し給へる大法を、天台大師の弘通し給ふ事、又難にあらはれぬ。又天台智者大師の弘通し給はざる圓頓の大戒を、傳教大師の建立せさせ給ふ事、又顯然なり。但し詮と不審なる事は、佛は說き盡し給へども、佛の滅後に迦葉、阿難、馬鳴、龍樹、無著、天親、乃至天台傳教の未だ弘通しましまさぬ、最大の深密の正法、經文の面に現前なり。此の深法今末法の始め、五五百歳に、一閻浮提に廣宣流布すべきやの事、不審極りなきなり。」

【一】問ふ「如何なる秘法ぞ、先づ名を聞き、次に義を聞かんと思ふ。此事若し實事ならば釋尊の二度世に出現し給ふか、上行菩薩の重ねて涌出せるか。急ぎ急ぎ慈悲を垂れられよ。彼の玄奘三藏は六生を經て月氏に入りて十九年、「法華一乘」は方便教、「小乘阿含經」は眞實教。不空三藏は身毒に返りて、「壽量品」を阿彌陀佛と書かれたり。此等は東を西といふ。日を月と誤てり。身を苦めて何かせん、心に染みて要なし。幸に我等末法に生れて、一歩を歩まずして三祇を越え、頭を虎に飼はずして無見頂相を得ん。」答へて曰く、

【ひすらぐ】磨れて薄くなること。

【立て入りの者】中に立入る者にて仲裁者のこと。

一此の法門を申さん事は、經文に候へば易かるべし。但し此の法門には、先づ三つの大事あり。大海は廣けれども死骸を留めず、大地は厚けれども不孝の者をば載せず。佛法には五逆を助け不孝をば救ふ。但し誹謗一闡提の者、持戒にして大智なるをば容されず。此の三つの禍とは、所謂る念佛宗と禪宗と眞言宗となり。一には念佛宗は、日本國に充滿して、四衆の口遊びとす。二に禪宗は、三衣一鉢の大慢の比丘の四海に充滿して一天の明導と思へり。三に眞言宗は、又彼等の二宗には似るべくもなし。叡山、東寺、七寺、園城、或は官主、或は御室、或は長吏、或は檢校なり。彼の內侍所の御鏡燒灰となりしかども、大日如來の寶印を佛鏡と憑み、寶劍西海に入りしかども、五大尊を以て國敵を切らんと思へり。彼等の堅固の信心は、設ひ劫石はひすらぐとも、傾くべしとは見えず、大地は反覆すとも、疑心起り難し。彼の天台大師の南北を責め給ひし時も、此宗未だ渡らず。此の傳教大師の六宗を虐げ給ひし時も洩れぬ。旁の強敵を免かれて還つて大法を掠め失ふ。其上、傳教大師の御弟子慈覺大師、此宗を取立てて、叡山の天台宗を掠め落して、一向眞言宗に爲しかば、此人には誰の人か敵を爲すべき。斯かる僻見の便りを得て、弘法大師の邪義をも咎むる人もなし。安然和尚少し弘法を難ぜんとせしかども、只華嚴宗の處ばかり咎むるに似て、還つて『法華經』をば『大日經』に對して沈め果てぬ。唯世間の立て入りの者の如し。」

【二】三宗を對破す、先づ淨土宗の謬誤を擧ぐ。

【往生要集】惠心僧都の作。

【永觀の十因】我國平安朝の人「往生十因」を作る。

撰時鈔　下

【二】問うて云く、此の三宗の謬誤如何。答へて云く、「淨土宗は齊の世に曇鸞法師と申す者あり。本は三論宗の人、龍樹菩薩の「十住毘婆沙論」を見て、難行道、易行道を立てたり。道綽禪師といふ者あり。唐の世の者、本は「涅槃經」を講じけるが、曇鸞法師が淨土に移る筆を見て、「涅槃經」を捨てて淨土に移つて、聖道、淨土の二門を立てたり。又道綽が弟子善導といふ者あり。雜行、正行二行を立つ。日本國に末法に入つて一百餘年、後鳥羽院の御宇に法然といふ者あり。一切の道俗を勸めて云く、「佛法は時機を本とす。「法華經」、「大日經」、天台、眞言等の八宗九宗、一代の大小、顯密、權實等の經宗等は、上根、上智の正像二千年の機の爲なり。末法に入つては、如何に功を盡して行ずるとも、其益あるべからず。其上、彌陀念佛に交へて行ずるならば、念佛も往生すべからず。此れ私に申すにはあらず、龍樹菩薩、曇鸞法師は「難行道」と名け、道綽は「未有一人得者」と嫌ひ、善導は「千中無一」と定めたり。此等は他宗なれば、御不審もあるべし。慧心先德に過ぎさせ給へる天台、眞言の智者は、末代に在すべきか。彼の「往生要集」には「顯密の教法は予が生死を離るべき法にはあらず。」又三論の永觀が「十因」等を見よ。されば法華、眞言等を捨てて一向に念佛せば、十卽十生、百卽百生と勸めければ、叡山、東寺、園城、

【二二】次に禪宗の誤謬を擧ぐ。【持齋】持律に同じ。

【二三】第三に眞言宗の誤謬を擧ぐ。先づ支那眞言宗に就て述ぶ。

七寺等、始めは諍論するやうなれども、『往生要集』の序の詞道理かと見えければ、顯眞座主落ちさせ給ひて、法然が弟子となる。其上設ひ法然が弟子とならぬ人人も、彌陀念佛は他佛に似るべくもなく口吟みとし、心よせに思ひければ、日本國皆一同に法然房の弟子と見えけり。此の五十餘年が間、一天四海一人もなく法然が弟子となる。法然が弟子となりぬれば、日本國一人もなく、謗法の者となりぬ。譬へば千人の子が一同に一人の親を殺害せば、千人共に五逆の者なり。一人阿鼻に墮ちなば、餘人墮ちざるべしや。結句は法然流罪を憎みて、惡靈となつて、我並びに弟子等を科せし國主、山寺の僧等が身に入つて、或は謀反を起し、或は惡事を作して、皆關東に滅されぬ。僅に殘れる叡山、東寺等の諸僧は、俗男、俗女に侮らるること、猿猴の人に笑はれ、俘囚が童子に蔑如せらるるが如し。

【二二】禪宗は又此の便りを得て、持齋等となつて人の眼を迷はかし、貴げなる氣色なれば、何に僻法門を言ひ狂へども、失とも覺えず。禪宗と申す宗は、教外別傳と申して、釋尊の一切經の外に、迦葉尊者に密かに囁かせ給へり。されば禪宗を知らずして一切經を習ふものは、犬の雷を噛むが如し、猿の月の影を捕るに似たりと云云。此の故に日本國の中に、不孝にして父母に捨てられ、無禮なる故に主君に勘當せられ、或は若なる法師等の學文に懶き、遊女の物狂はしき本性に叶へる邪法なる故に、皆一同に持齋になりて、國の百姓を食ふ蝗蟲となれり。然れば天は天眼を瞋らし、地神は身を震ふ。

【二三】眞言宗と申すは、上の二つの災には似るべくもなき大僻見なり。あらあら此を

【會二破二】二乘を會して一乘となし、二乘を破して一乘を顯す。

申すべし。所謂る大唐の玄宗皇帝の御宇に、善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏、『大日經』、『金剛頂經』、『蘇悉地經』を月支より渡す。此の三經、說相分明なり。其の極理を尋ぬれば會二破二の一乘、其の相を論ずれば印と眞言とばかりなり。尙ほ『華嚴』『般若』の三一相對の一乘にも及ばず、天台宗の爾前の別圓ほどもなし。但藏通二敎を面とするを、善無畏三藏思はく、此の經文を現はに言ひ出す程ならば、華嚴、法相にも嘲つかれ、天台宗にも笑はれなん。大事として月支よりは持ち來りぬ。黙せば本意にあらずとや思ひけん、天台宗の中に一行禪師といふ僻人一人あり、これを語らひてさて漢土の法門を語らせけり。一行阿闍梨打數かれて、三論、法相、華嚴等をあらあら語るのみならず、天台宗の立てられるけるやうを申しければ、善無畏思はく、天台宗は天竺にして聞きしにも猶ほ打勝れて、累むべきやうもなかりければ、善無畏、一行を打ぬひて云く、「和僧は漢土には小賢しき者にてありけり、天台宗は神妙の宗なり。今眞言宗の天台宗に累む處は、印と眞言とばかりなり」と言ひければ、一行然もやと思ひければ、善無畏三藏、一行に語りて云く、「天台大師の法華經に疏を造らせ給へる如く、大日經の疏を造りて、眞言を弘通せんと思ふ。汝書きなんや」といひければ、一行が云く、「易う候。但しいかやうに書き候べきぞ。天台宗は惡き宗なり、諸宗は我も我もと爭ひを爲せども、一切に叶はざる事一つあり。所謂る『法華經』の序文に『無量義經』と申す經を以て前四十餘年の經經をば、其門を打塞ぎ候ひぬ。『法華經』の法師品』、『神力品』を以て、後の經經をば防がせぬ。肩をならぶ經經をば

【三説】[illegible]

【甲なる】甲は乙に對す、勝れたる意。

【一四】次に日本に眞言宗に就て述ぶ

今此の文を以て責め候はゞ「大日經」をば三說の中には何處にか置き候べき」と問ひければ、爾の時に善無畏三藏大に巧んで云く「『大日經』に『住心品』といふ品あり。『無量義經』の四十餘年の經經を打ち拂ふが如し。『大日經』の『入漫荼羅』已下の諸品は、漢土にては『法華經』、『大日經』とて二本なれども、天竺にては一經の如し。釋迦佛は舍利弗、彌勒に向つて、『大日經』を『法華經』と名づけて、印と眞言とを捨てて、但理ばかりを說けるを、羅什三藏此を渡す。天台大師此を見る。大日如來は『法華經』を『大日經』と名づけて、金剛薩埵に向つて說かせ給ふ、此を『大日經』と名づく、我面のあたり天竺にして此れを見る。されば汝が書くべきやうは、『大日經』と『法華經』とをば水と乳とのやうに一味となすべし。若し爾らば『大日經』は、已今當の三說をば、皆『法華經』の如く打下すべし。さて印と眞言とは、心法の一念三千に莊嚴するならば、三密相應の秘法なるべし。三密相應する時ならば天台宗は意密なり。眞言は甲なる將軍の甲鎧を帶して、弓箭を横たへ、太刀を腰に帶けるが如し。天台宗は意密ばかりなれば、甲なる將軍の赤裸なるが如くなるらん。」と言ひければ、一行阿闍梨は此のやうに書きけり。漢土三百六十か國には此の事を知る人なかりけるかの間、始めには勝劣を諍論しけれども、善無畏等は人は重し、天台宗の人人は輕かりけり。又天台大師程の智ある者もなかりければ、但日日に眞言宗になりて、さてやみにけり。年久しくなりければ、いよいよ眞言の誑惑の根深く隱れて候ひけり。

【一四】日本國の傳教大師漢土に渡りて、天台宗を渡し給ひ、序に眞言宗を並べ渡す。天

【立てう】立てようの意。

【三五】特に弘法大師の謬見を破す。

台宗を日本の皇帝に授け、眞言宗を六宗の大徳に習はせ給ふ。但し六宗と天台宗の勝劣は、入唐已前に定めさせ給ふ。入唐已後には圓頓の戒場を立てう立てうとの論の計りなかりけるあわひだ、敵多くしては戒場の一事成りがたしと思召しけん、又末法に責めさせんとや思召しけん、皇帝の御前にしても論ぜさせ給はず、弟子等にも捗捗しく語らせ給はず。但し『依憑集』と申す一卷の祕書あり、七宗の人人の天台に落ちたるやうを書かれて候文なり。彼の文の序に、眞言宗の誑惑一筆見えて候。弘法大師は同じき延暦年中に御入唐、青龍寺の惠果に値ひ給ひて、眞言宗を習はせ給へり。御歸朝の後、一代の勝劣を判じ給ひけるに、第一眞言、第二華嚴、第三法華と書かれて候。此の大師は世間の人人は以ての外に重んずる人なり。但し佛法の事は、申すに恐れあれども、以ての外に誤き事ども見えたり。此事をあらあら考へたるに、漢土に渡らせ給ひては、但だ眞言の事相の印、眞言ばかり習ひ傳へて、其義理をば委くも思索らせ給はざりける程に、日本に渡りて後、大に世間を見れば、天台宗以ての外に崇みたりければ、我が重んずる眞言宗弘め難かりけるかの故に、本日本國にして習ひたりし華嚴宗を取出して、『法華經』に勝れたる由を申しけり。それも常の華嚴宗に申すやうに申すならば、人信ずまじとや思召しけん、少し色を替へて、是は『大日經』、龍猛菩薩の『菩提心論』、善無畏等の實義なりと、大妄語を引添へたりけれども、天台宗の人人甚う咎め申す事なし。

【三五】問うて云く、「弘法大師の『十住心論』、『祕藏寶鑰』、『二敎論』に云く、「此の如き

【乘乘】諸の乘法といふ意。
【得一】德一のこと。
【三時教】有、空、中の三時教。

乘乘、自乘に名を得れども、後に望めば戯論と作る」又云く、「無明の邊域にして、明の分位にあらず」又云く、「第四熟蘇味なり。」又云く、「震旦の人師等諍つて醍醐を盜んで、各自宗に名く」等云云。此等の釋の心如何。答へて云く、「予此の釋に驚いて、一切經並に大日の三部經等を披き見るに、「華嚴經」と「大日經」とに對すれば「法華經」は戯論、「六波羅蜜經」に對すれば盜人、「守護經」に對すれば無明の邊域と申す經文は、一字一句も候はず。此事は最甲斐なき事なれども、此の三四百餘年に日本國の若干の智者どもの用ゐさせ給へば、定めて故あるかと思ひぬべし。且らく此易き僻事を擧げて、餘事の果敢なき事を知らすべし。「法華經」を醍醐味と稱する事は、陳隋の代なり。「六波羅蜜經」は唐の半ばに、般若三藏此を渡す。「六波羅蜜經」の醍醐は陳隋の世に渡りてあらばこそ、天台大師は眞言の醍醐をば盜ませ給はめ。傍例あり、日本の得一が云く、「天台大師は「深密經」の三時教を破る、三寸の舌を以て五尺の身を斷つべし」と罵りしを、傳教大師此を正して云く、「「深密經」は唐の始め、玄奘三藏之を渡す。天台は陳隋の人、智者御入滅の後數ケ年あつて「解深密經」渡れり。死して已後に渡れる經をば、爭でか破し給ふべき。」と責めさせ給ひて候ひしかば、得一は詰るのみならず、舌八つに裂けて死し候ひぬ。これは彼には似るべくもなき惡口なり。「華嚴の法藏、三論の嘉祥、法相の玄奘、天台等乃至南北の諸師、後漢より已下の三藏人師を皆押へて、盜人と書かれて候なり。其上又「法華經」を醍醐と稱することは天台等の私の言にはあらず。佛「涅槃經」に「法華經」を醍醐と說かせ給ふ。天

【伝法院】紀伊根来にあり、正覚房の開基なり。
【正覚房】覚鑁のこと。
【顕乗】顕教のこと。
【二六】念、禅、真言三宗の野狐を一応結す。

親菩薩は『法華論』に『法華経』を醍醐と書かれて候。竜樹菩薩は『法華経』を妙薬と名づけさせ給ふ。されば『法華経』等を醍醐と申す人々ならば、釈迦多宝十方の諸仏、竜樹、天親等は悪人にて在すべきか。弘法の門人等、乃至日本の東寺の真言師、如何に自眼の黒白は拙くして弁へずとも、他の鏡を以て自禍を知れ。此の外『法華経』を戯論の法と書かるる事、『大日経』、『金剛頂経』等に分明なる経文を出されよ。設ひ彼々の経経に『法華経』を戯論と説かれたりとも、訳者の誤る事もあるぞかし。能く能く思慮のあるべかりけるか。孔子は九思一言、周公旦は沐には三たび握髪り、食には三たび吐哺けり、外典のはかなき、世間の浅き事を習ふ人すら、賢人は斯う候ぞかし。いかに斯る浅ましき事にはありけるぞらん。斯る僻見の末なれば、彼の流派の末流と称する正覚房が『舎利講の式』に云く、『尊高なる者は不二摩訶衍の仏なり、驢牛の三身は車を扶くること能はず。秘奥なる者は両部の漫荼羅の教なり、顕乗の四法は履を採るに堪へず』と云云。顕乗の四法と申すは、法相、三論、華厳、法華の四人、驢牛の三身と申すは『法華』、『華厳』、『般若』、『深密経』の教主の四仏、此等の仏僧は真言師に対すれば、正覚、弘法の牛飼、履物取る者にも足らぬ程の事なりと書いて候。

【二六】彼の月氏の大慢婆羅門は生知の博学、顕密の二道を胸に浮べ、内外の典籍を掌に握る。されば王臣頭を傾け、万民師範と仰ぐ。余りの慢心に、世間に尊崇する者は大自在天、婆藪天、那羅延天、大覚世尊、此れ四聖なり。我が座の四足にせんと、座の足に作り

【敷曼荼羅】密具とする曼荼羅。
【賢愛論師】大慢婆羅門と論爭せし學者。
【三階禪師】三階教を倡唱せし人。

て、笑して法門を申しけり。當時の眞言師が釋迦佛等の一切の佛を搔集めて、灌頂する時敷曼荼羅とするが如し。禪宗の法師等が云く、此宗は佛の頂を蹈む大法なりといふが如し。而るを賢愛論師と申せし小僧あり。彼を禁すべき由申せしかども、國王萬民これを用ゐず。結句は大慢が弟子等、檀那等に申し告げて、無量の妄語を構へて、惡口打擲せしかども、少しも命を惜まず罵りしかば、帝王賢愛を憎みて、詰めさせんとし給ひし程に、反りて大慢が責められたりしかば、大王天に仰ぎ地に伏して、歎いて宣はく、朕は目のあたり此事を聞いて邪見を晴しぬ。先王は如何に此者に誑らされて阿鼻地獄に在すらん」と、賢愛論師の御足に取り付きて、悲涙せさせ給ひしかば、賢愛の御計らひとして、大慢を驢に乘せて、五竺に面を曝し給ひければ、彌々惡心盛になりて、現身に無間地獄に墮ちぬ。今の世の眞言と禪宗等とは此に替れりや。漢土の三階禪師云く、「教主釋尊の『法華經』は第一第二階の正像の法門なり。末代の爲には、我が作れる『普經』なり。『法華經』を今の世に行ぜん者は、十方の阿鼻獄に墮つべし。末代の根機にあたらざる故なり」と申して、六時の禮讃、四時の坐禪、生身佛の如くなりしかば、人多く尊みて、弟子萬餘人ありしかども、僅の少女の『法華經』を讀みしに責められて、當座には音を失ひ、後には大蛇になりて、若干の檀那弟子並びに少女、處女等を呑み食ひしなり。今の善導、法然等が『千中無一』の惡義も、これにて候なり。此等の三つの大事は、已に久しくなり候へば、いやしむべきにあらねども、申さば信ずる人もやありなん。これよりも百千萬億倍信じ難き

【一七】再び日本眞言の謬見を破す。

【東寺】茲は眞言宗の意味。

【一八】叡山密教慈覺大師に始まるを詳述す。

最大の悪事侍り。

【一七】 慈覺大師は傳教大師の第三の御弟子なり。然れども上一人より下萬民に至るまで、傳教大師には勝れて在します人なりと思へり。此人眞言宗と法華宗の實義を極めさせ給ひて候が、眞言は『法華經』には勝れたりと書かせ給へり。而るを叡山三千人の大衆、日本一州の學者等、一同の歸伏の義なり。弘法の門人等は、大師の『法華經』を『華嚴經』に劣ると書かせ給へるは、我が方ながらも少し強きやうなれども、慈覺大師の釋を以て思ふに、眞言宗の『法華經』に勝れたる事は一定なり。日本國にして眞言宗を『法華經』に勝ると立つるをば、叡山こそ強き敵なりぬべかりつるに、慈覺を以て三千人の口を塞ぎなば、眞言宗は思ふが如し。されば東寺第一の方人、慈覺大師には過ぐべからず。例せば淨土宗、禪宗は、餘國にては弘まるとも日本國にしては延暦寺の許されなからんには無邊劫は經とも叶ふまじかりしを、安然和尚と申す叡山第一の古徳、『教時諍論』と申す文に、九宗の勝劣を立てられたるに、第一眞言宗、第二禪宗、第三天台法華宗、第四華嚴宗等云云。此の大謬釋に就いて、禪宗は日本國に充滿して、已に亡國とならんとするなり。法然が念佛宗の流行りて、一國を失はんとする因縁は慧心の『往生要集』の序より始まれり。師子の身の中の蟲の師子を食ふと、佛の記し給ふは實なるかなや。

【一八】 傳教大師は日本國にして十五年が間、天台、眞言等を自見せさせ給ふ。生知の妙悟にて師なくして、悟らせ給ひしかども、世間の不審を晴さんが爲に、漢土に亘りて、天

【やうやう】樣樣の意か。

台、眞言の二宗を傳へ給ひし時、漢土の人人はやうやうの義ありしかども、我が心には、法華は眞言に勝れたりと思召し故に、眞言宗の宗の名字をば削らせ給ひて、天台宗の止觀、眞言等并かせ給ふ。十二年の年分得度の者二人を置かせ給ひ、重ねて止觀院に『法華經』、『金光明經』、『仁王經』の三部を鎭護國家の三部と定めて、宣旨を申し下して、永代日本國の第一の重寶、神璽、寶劍、内侍所と崇めさせ給ひき。叡山第一の座主義眞和尚、第二の座主圓澄大師までは、此義相違なし。第三の慈覺大師御入唐、漢土に渡りて十年が間、顯密二道の勝劣を八箇の大徳に習ひ傳ふ、又天台宗の人人廣脩、維蠲等に習はせ給ひしかども、心の内に思しけるは、眞言宗は天台宗には勝れたりけり。我が師傳教大師は、未だ此事をば悉しく習はせ給はざりけり。漢土に久しくも渡らせ給はざりける故に、此法門は荒唐に見在しけるやと思して、日本國に歸朝し、叡山の東塔止觀院の西に、總持院と申す大講堂を立て、御本尊は金剛界の大日如來、此の御前にして『大日經』の善無畏の疏を本として『金剛頂經』の疏』七卷、『蘇悉地經の疏』七卷、已上十四卷を作る。此疏の肝心の釋に云く『教に二種あり。一は顯示教、謂はく三乘教なり、世俗と勝義と未だ圓融せざるが故に。二は祕密教、謂はく一乘教なり、世俗と勝義と一體にして融するが故に。祕密教の中に亦二種あり、一には理祕密教、諸の『華嚴』、『般若』、『維摩』、『法華』、『涅槃』等なり。但だ世俗と勝義との不二を說いて、未だ眞言、密印の事を說かざるが故に。二には事理倶密教、謂はく『大日經』、『金剛頂經』、『蘇悉地經』等なり。亦世俗と、勝義と

【釋の心云云】所謂「一理同事勝」を指すなり。

【官主】座主の異稱。

の不二を說き、亦眞言密印の事を說く故に」等云云。釋の心は、「法華經」と眞言の三部との勝劣を定めさせ給ふに、眞言の三部經と法華とは、所詮の理は、同じく一念三千の法門なり。然れども密印と眞言等の事法は「法華經」には缺けて在せず。「法華經」は理祕密、眞言の三部經は事理俱密なれば、天地雲泥なりと書かれたり。然かも此筆は私の釋にはあらず、善無畏三藏の「大日經の疏」の心なりと思せども、尙尙二宗の勝劣不審にやありけん、將又他人の疑ひを散ぜんとや思しけん。大師慈覺の傳に云く、「大師二經の疏を造り、功を成し已畢つて、心中獨り謂へらく、此疏佛意に通ずるや否や、若し佛意に通せざれば、世に傳流せじ。仍て佛像の前に安置し、七日七夜深誠を翹企し、祈請を勤修す。五日の五更に至つて夢みらく、正午に當つて、仰いで日輪を見て、弓を以て之れを射る。其の箭日輪に當つて、日輪即ち轉動す。夢覺めての後深く佛意に通達せりと悟り、後世に傳ふべしと云ふ。」等云云。慈覺大師は本朝にしては傳教、弘法の兩家を習ひ究め、異朝にしては八大德並びに南天の寶月三藏等に、十年が間最大事の祕法を究めさせ給へる上、二經の疏を造り了り、重ねて本尊に祈請を爲すに、智慧の矢已に中道の日輪に當りて打驚かせ給ひ、歡喜の餘りに、仁明天皇に宣旨を申副へさせ給ひ、天台の座主を眞言の官主となし、眞言の鎭護國家の三部とて、今に四百餘年が間、碩學稻麻の如し、渴仰竹葦に同じ。されば桓武、傳教等の日本國に建立せる寺塔は一字もなく眞言の寺となりぬ。公家も武家も一同に、眞言師を召して師匠と仰ぎ、官を爲し寺を預け給ふ。佛事の木畫の開眼供養は、八宗一同に

【一九】慈覺大師の僻見を難ず。

【ついさして】つきさして即ち指示して。

大日佛眼の印眞言なり。」

【一九】疑つて云く、「『法華經』を眞言に勝ると申す人は、此釋をば如何せん、用ゆべきか、又捨つべきか。」答ふ、「佛の未來を定めて云く、『法に依つて人に依らざれ』と。龍樹菩薩の云く、『修多羅に依るは白論なり、修多羅に依らざるは黑論なり』と。天台の云く、『復修多羅と合せば、錄して之を用ひよ。文なく、義なきは、信受すべからず』。傳教大師の云く、『佛說に依憑して、口傳を信ずること莫れ』等云云。此等の經、論、釋の如くんば、夢を本にはすべからず。但ついさして、『法華經』と『大日經』との勝劣を分明に說きたらん經論の文こそ大切に候はめ。但し印眞言なくば、木畫の像の開眼の事、此又嗚呼の事なり。眞言の無かりし已前には、木畫の開眼は無かりしか。天竺、漢土、日本には、眞言宗已前の木畫の像は、或は行き、或は說法し、或は御物語あり。印、眞言を以て佛を供養せしより以來、利生も方々失せたるなり。此は常の論談の義なり。此の一事に於ては、但し日蓮は分明の證據を餘所に引くべからず。慈覺大師の御釋を仰いで信じて候なり。」問うて云く、「何と信ぜらるるや。」答へて云く、「此の夢の根源は、眞言は『法華經』に勝ると造り定めての御夢なり。此の夢吉夢ならば、慈覺大師の合せさせ給ふが如く、眞言勝るべし。但し日輪を射ると夢に見たるは、吉夢なりといふべきか。內典五千七千餘卷、外典三千餘卷の中に、日を射ると夢に見て吉夢なる證據を承るべし。少少此れより出し申さん。阿闍世王は天より月落つると夢に見て、耆婆大臣に合せさせ給ひしかば、大臣合せて云く、佛の御入滅な

【三〇】眞言は亡國の惡法なる現證を擧ぐ。

り。須拔陀羅、天より日落つると夢に見る。我と合せて云く、佛の御入滅なり、修羅は帝釋と合戰の時、先づ日月を射奉る。夏の桀、殷の紂と申せし惡王は、常に日を射て身を滅し、國を破る。摩耶夫人は日を孕むと夢に見て、悉達太子を產ませ給ふ。かるが故に佛の幼名をば日種といふ。日本國と申すは、天照大神の日天にて御座す故なり。されば此の夢は天照大神、傳教大師、釋迦佛、『法華經』を射奉れる矢にてこそ、二部の疏は候なれ。日蓮は愚痴の者なれば、經論も知らず。但だ此の夢を以て『法華經』に眞言勝れたりと申す人は、今生には國を滅し家を失ひ、後生には阿鼻地獄に入るべしとは知りて候。今現證あるべし。

【三〇】日本國と蒙古との合戰に、一切の眞言師の調伏を行ひ候へば、日本勝ちて候ふならば、眞言は秀逸じかりけりと思ひ候ひなん。但し承久の合戰に、若干の眞言師の祈り候ひしが、調伏せられ給ひし權の大夫殿は勝たせ給ひ、後鳥羽院は隱岐の國へ、御子の天子は佐渡の島島へ、調伏し遣り參らせ候ひぬ。結句は野干の鳴きの、己が身に負ふなるやうに『還著於本人』の經文に少しも違はず、叡山の三千人、鎌倉に攻められて一同に從ひ果てぬ。然るに又鎌倉日本を失はんと祈るかと申すなり。これを熟熟知る人は、一閻浮提一人の智人なるべし。熟熟知るべきか。今は鎌倉の世盛なる故に、東寺、天台、園城、七寺の眞言師等と、竝びに自立を忘れたる『法華經』の謗法の人人、關東に落ち下りて頭を傾け膝を屈め、樣樣に武士の心を取りて、諸寺諸山の別當となり、長吏となりて、王位を失

【三二】權經の題目の後に實經の題目流布すること、並に日蓮は閻浮提第一の法華經の行者なることを證す。

ひし惡法を取出して、國土安穩を祈れば、將軍家並びに所從の侍已下は、國土の安穩なるべき事なんめりと打思ひてあるほどに、『法華經』を失ふ大禍の僧どもを用ゐらるれば、國定めて亡びなん。亡國の悲しさ、亡身の歎かはしさに、身命を捨てて此事を現はすべし。

【三二】國主世を保つべきならば、怪しと思ひて尋ぬべき所に、只讒言の者の言のみ用ゐて、樣樣の讐を爲す。而るに『法華經』守護の梵天、帝釋、日月、四天、地神等は、古の謗法をば不思議とは思せども、此を知れる人なければ、一子の惡事の如く打許して、詐り愚なる時もあり、又少し摘み知らする時もあり。今は謗法を用ゐたるだに不思議なるに、稀稀諫曉する人をば却つてあだを爲す。一日二日、一月二月、一年二年ならず、數年に及ぶ。彼の不輕菩薩の杖木の難に値ひしにも勝れ、覺德比丘の殺害に及びしにも越えたり。而る間、梵釋の二王、日月四天、衆星地神等やうやうに瞋り、度度諫めらるれども、彌彌あだを爲す故に、天の御計らひとして、隣國の聖人に仰せ付けられて此を誡め、大鬼神を國に入れて人の心を誑らかし、自界反逆せしむ。吉凶に就けて瑞大なれば難多かるべき理にて、佛滅後二千二百三十餘年が間、未だ出でざる大長星、未だ震らざる大地震出來せり。漢土日本に、智慧勝れ才能甚じき聖人は度度ありしかども、未だ日蓮ほど『法華經』の方人して、國土に强敵多く儲けたる者は無きなり。先づ眼前の事を以て日蓮は閻浮提第一の者と知るべし。佛法日本に渡つて七百餘年、一切經は五千七千、宗は八宗十宗、智人は稻麻の如し、

【三三】天變地妖等の内外の圍難は法華經の行者を迫害するためなるを述ぶ。

弘通は竹葦に似たり。然れども佛には阿彌陀佛、諸佛の名號には彌陀の名號程弘まりて在するは候はず。此の名號を弘通する人は、慧心は『往生要集』を作る、日本國三分が一は一同の彌陀念佛者。永觀『十因』と『往生講の式』を作る、扶桑三分が二分は一同の念佛者。法然『選擇』を作る。本朝一同の念佛者。而れば今の彌陀の名號を唱ふる人人は、一人が弟子にはあらず。此の念佛と申すは『雙觀經』、『觀經』、『阿彌陀經』の題名なり。權大乘經の題目の廣宣流布するは、實大乘經の題目の流布せんずる序にあらずや。心あらん人は此を推しぬべし。權經流布せば、實經流布すべし。權經の題目流布せば、實經の題目又流布すべし。欽明より當帝に至るまで七百餘年、未だ聞かず、未だ見ず「南無妙法蓮華經」と唱へよと、他人を勸め、我と唱へたる智人なし。日出でぬれば星隱る、賢王來れば愚王滅ぶ。實經流布せば權經の止まり、智人「南無妙法蓮華經」と唱へば、愚人の此に隨はんこと、影と身と、聲と響との如くならん。日蓮は日本第一の法華經の行者なる事敢て疑ひなし。これを以て推せよ、漢土月氏にも、一閻浮提の内にも、肩を並ぶる者はあるべからず。」

【三三】問うて云く「正嘉の大地震、文永の大彗星は、如何なる事によつて出來せるや。」答へて云く「天台云く、『智人は起を知り、蛇は自ら蛇を識る』等云云。」問うて云く「心如何」答へて云く「上行菩薩の大地より出現し給ひたりしをば、彌勒菩薩、文殊師利菩薩、觀世音菩薩、藥王菩薩等の四十一品の無明を斷ぜし人人も、元品の無明を斷ぜざれば

【見思】見惑と思惑。
【四十一品】四十一種のこと。
【三】經文を引いて之を證し、三宗の祖を破佛の三蟲、慈覺等を傳教身中の三蟲と斷ず。

愚人といはれて、『壽量品』の南無妙法蓮華經の末法に流布せんずる故に、此の菩薩を召し出されたるとは知らざりしといふ事なり。」問うて云く、「日本、漢土、月支の中に、此事を知る人あるべしや。」答へて云く、「見思を斷盡し四十一品の無明を盡せる大菩薩だにも、此事を知らせ給はず。何に況んや一毫の惑をも斷ぜざる者どもの、此事を知るべきか。」問うて云く、「智人なくば何でか此を對治すべき。例せば病の所起を知らぬ人の病人を治すれば、人必ず死す。此の災の根源を知らぬ人人が祈りをなさば國將に亡びん事疑なきか、あら淺ましや、あら淺ましや。」答へて云く、「蛇は七日が内の大雨を知り、烏は年中の吉凶を知る。此れ即ち大龍の所從、又久學の故か。日蓮は凡夫なり、此事を知るべからずと雖も、汝等は略これを知らさん。彼の周の平王の時、禿にして裸なる者出現せしを辛有といひし者占つて云く、百年が内に世滅びん。同じき幽王の時、山川崩れ大地震ひき。白陽と云ふ者勘へて云く、十二年の内に大王事に値はせ給ふべし。今の大地震、大長星等は、國主日蓮を憎みて、亡國の法たる禪宗と念佛者と眞言師を方人せらるれば、天怒らせ給ひて出させ給ふ處の災難なり。」

【三】問うて云く、「何を以てか此を信ぜん。」答へて云く、「『最勝王經』に云く、『惡人を愛敬し、善人を治罰するに由るが故に、星宿及び風雨皆時を以て行はれず』等云云。此の經文の如きんば、此國に惡人のあるを、王臣此を歸依すといふ事疑ひなし。又此國に智人あり。國主此を憎みて怨すといふ事も又疑ひなし。又云く、『三十三天の衆咸忿怒の心を生

【持】破に對する語。

【名相の】名のみ形のみの。

じ、變怪の流星墮ち二の日倶時に出で、他方の怨賊來つて國人喪亂に遭はん。」等云云。已に此國に天變あり地妖あり、他國より此を攻む。三十三天の御怒りあること又疑ひなきか。『仁王經』に云く、「諸の惡比丘、多く名利を求め、國王太子王子の前に於て、自ら破佛法の因緣、破國の因緣を說く。其王別へずして、信じて此語を聽く。」等云云。又云く、「日月度を失ひ、時節反逆し、或は赤日出で、或は黑日出で、二三四五の日出で、或は日蝕して光り無く、或は日輪一重二重四五重輪現ぜん。」等云云。文の心は、惡比丘等國に充滿して國王、太子、王子等を誑らかして、破佛法、破國の因緣を說かば、其國の王等此人に誑らかされて思すやう、此法こそ持佛法の因緣、持國の因緣と思ひ、此言を納めて行ふならば、日月に變あり、大風と大雨と大火等出來し、次には內賊と申して、親類より大兵亂起り、我が方人しぬべき者をば皆打失ひて、後には他國に攻められて、或は自殺し、或は生擒りにせられ或は降人となるべし、是れ偏へに佛法を亡し國を滅す故なり。『守護經』に云く、「彼釋迦牟尼如來所有の敎法は、一切の天魔外道の惡人、五通の神仙、皆乃至少分をも破壞せず、然るに此の名相の諸の惡沙門、皆悉く毀滅して餘りあること無からしむ。須彌山をば假ひ三千界の中の草木を盡して薪と爲し、長時に焚燒すとも一毫も損すること無し。若し劫火起つて、火內より生ずる時は、須臾に消滅せんに灰燼をも餘すこと無きが如し。」等云云。『蓮華面經』に云く、「佛阿難に告げ給はく、譬へば師子の命終せんに、若は空、若は地、若は水、若は陸、所有の衆生敢て師子の身の宍を食はず、唯師子自ら諸の蟲を

【積行】修行の功を積むこと。

【三衣】僧服のこと。

【六蟲】六宗の僧なれば六蟲なり。

生じて自ら師子の宍を食ふが如し。阿難、我が佛法は餘の能く壞るにあらず。是れ我が法の中の諸の悪比丘、我が三大阿僧祇劫積行し、勤苦し、集むる所の佛法を破らん」等云云。經文の心は、過去の迦葉佛、釋迦如來の末法の事を訖哩枳王に語らせ給ひ、釋迦如來の佛法をば、如何なる者か失ふべき。大族王の五天の堂舍を燒拂ひ、十六の大國の僧尼を殺せし、漢土の武宗皇帝の九國の寺塔四千六百餘所を消滅せしめ僧尼二十六萬五百人を還俗せし等の如くなる悪人等は、釋迦の佛法をば失ふべからず。三衣を身に纏ひ、一鉢を頸に掛け、八萬法藏を胸に浮べ十二部經を口に誦せん僧侶が、彼の佛法を失ふべし。譬へば須彌山は金の山なり。三千大千世界の草木を以て、四天六欲に充滿して積み籠めて、一年二年、百千萬億年が間燒くとも、一分も損ずべからず。而るを劫火起らん時、須彌の根より豆ばかりの火出でて、須彌山を燒くのみならず、三千大千世界を燒失ふべし。若し佛記の如くならば、十宗八宗内典の僧等が、佛教の須彌山をば燒拂ふべきにや。小乘倶舍、成實、律僧等が大乘を猜む、胸の瞋恚は炎なり。眞言の善無畏等、禪宗の三階等、淨土宗の善導等は、佛教の師子の肉より出來せる、蝗蟲の比丘なり。傳教大師は三論、法相、華嚴等の日本の碩德等を、六蟲と書かせ給へり。日蓮は眞言、禪宗、淨土等の元祖を三蟲と名づく。又天台宗の慈覺、安然、慧心等は、法華經、傳教大師の師子の身の中の三蟲なり。此等の大謗法の根源を正す日蓮にあだを爲せば天神も惜み地祇も怒らせ給ひて災夭も大に起るなり。」

【三四】國難によつて捨邪歸正するを期待す。

【三五】三度の高名卽ち國主諫曉を擧ぐ。

【三四】されば心得べし。一閻浮提第一の大事を申す故に最第一の瑞相此に起れり。憐れなるかなや、歎かしきかなや、日本國の人皆無間大城に墮ちむ事よ。悦ばしきかなや、樂しいかなや、不肖の身として今度心田に佛種を植ゑたる。今にしも見よ大蒙古國數萬艘の兵船を浮べて日本國を攻めば、上一人より下萬民に至るまで、一切の佛寺、一切の神寺をば投棄て、各聲を連合て『南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經』と唱へ、掌を合せて助け給へ日蓮の御房、日蓮の御房と叫び候はんずるにや。例せば月支のいふ大族王は幻日王に掌を合せ、日本の宗盛は梶原を敬ふ。大慢の者は敵に隨ふといふ。此の理なり。彼の輕毀大慢の比丘等は始めには杖木を調へて、不輕菩薩を打ちしかども、後には掌を合せて失を悔ゆ。提婆達多は釋尊の御身に血を出ししかども、臨終の時には南無と唱へたりき。『佛』とだに申したりしならば地獄には墮つべからざりしを、業深くして、但だ南無とのみ唱へて、佛とは言はず。今日本國の高僧等も、南無日蓮聖人と唱へんとすとも、南無ばかりにてやあらずらん。ふびん、ふびん。

【三五】外典に云く、未萠を知るを聖人といふ。內典に云く、三世を知るを聖人といふ。予に三度の高名あり。一つには去にし文應元年太歲庚申七月十六日に『立正安國論』を最明寺殿に奏し奉りし時、宿谷の入道に向つて云く、『禪宗と念佛宗とを失ひ給ふべしと申させ給へ。此事を御用ゐなきならば、此一門より事起りて、佗國に攻められさせ給ふべし。』二には去にし文永八年九月十二日申の時に、平左衛門尉に向つて云く、『日蓮は日本國の棟

梁なり、予を失ふは日本國の柱を倒すなり。只今に自界反逆難とて同志打ちし他國侵逼難とて、此國の人人他國に打殺さるるのみならず、多く生擒にせらるべし。建長寺、壽福寺、極樂寺、大佛、長樂寺等の一切の念佛者、禪僧等が寺塔をば燒拂ひて、彼等が頸を由比の濱にて切らずば、日本國必ず滅ぶべし』と申し候ひ了んぬ。第三には去年〈文永十一年〉四月八日に左衞門尉に語つて云く、『王地に生れたれば、身をば隨へられ奉るやうなりとも、心をば隨へられ奉るべからず、念佛の無間獄、禪の天魔の所爲たる事は疑ひなし。殊に眞言宗が此の國土の大なる禍にては候なり。大蒙古を調伏せん事、眞言師には仰せ付けらるべからず。若し大事を眞言師調伏するならば、彌彌急いで此國滅ぶべし。』と申せしかば、頼綱問うて云く、『何時頃寄せ候べき。』予言く、『經文には何時とは見え候はねども、天の御氣色瞋り少からず、急に見えて候。よも今年は過し候はじ。』と語りたりき。此の三つの大事は日蓮の申したるにはあらず、只偏に釋迦如來の御神我が身に入り替らせ給ひけるにや。我が身ながらも悦び身に餘る。『法華經』の一念三千と申す大事の法門は是れなり。經に云く、『所謂諸法如是相』と申すは何事ぞ十如是の始めの相如是が、第一の大事にて候へば、佛は世に出でさせ給ふ。『智人は起を知る、蛇は自ら蛇を知る』とは是れなり。一滴集りて大海となる、微塵積りて須彌山となれり。日蓮が『法華經』を信じ始めしは、日本國には一滴一微塵の如し。『法華經』を二人三人、十人百人千萬億人唱へ傳ふる程ならば、妙覺の須彌山ともなり、大涅槃の大海ともなるべし。佛になる道は此より外に又求むる事なか

【三六】龍口法難の時に於て、夙に自界叛逆、他國侵逼の二國難を豫言せし所以を明し、日蓮は日本第一の大人なりと斷ず。

【痛きと痒きと】謗法の失を逃ると亡國とは所謂「痛し痒し」なりとの意。

れ。」

【三六】問うて云く「第二の文永八年九月十二日の御勘氣の時は、如何にとして我を損せば自他の軍起るべしとは知り給ふや。」答ふ「『大集經』五十に云く、『若し復諸の刹利、國王、諸の非法を作し、世尊の聲聞の弟子を惱亂し、若は以て毀罵し、刀杖をもて打斫し、及び衣鉢種々の資具を奪ひ、若は他の給施に留難を作す者有らば、我等彼をして自然に卒かに他方の怨敵を起さしめ、及び自界の國土にも亦兵起り、病疫飢饉、非時の風雨、鬪諍言訟讒謗せしめ、又其王をして久しからずして、復當に己が國を亡失すべからしむ。』等云云。夫れ諸經に諸文多しと雖も、此の經文は身に當り時に臨んで、殊に尊く覺うる故に、これを選し出す。此經文に我等とは、梵王と帝釋と、第六天の魔王と日月と、四天等の三界の一切の天龍等なり。此等の上首佛前に詣して誓つて云く、『佛の滅後、正法、像法、末代の中に、正法を行ぜん者を邪法の比丘等が國主に訴へば、王に近き者、王に心寄せなる者、我が尊しと思ふ者の言ふ事なれば、理不盡に是非を糾さず、彼の智人を散散に恥に及ばせなんどせば、其故ともなく其國に卒かに大兵亂出現し、後には他國に攻めらるべし。其國主も亡せ其國も滅びなんず。』と說かれて候。痛きと痒きとは是れなり。日蓮が身には今生にはさせる失なし、但だ國を扶けんが爲、生國の恩を報ぜんと申せしを、御用ゐなからんこそ本意にあらざるに、剩へ召し出して、『法華經』の第五の卷を懷中せるを取出して、散散と苛責み、結句は小路を渡しなんどせしかば、申したりしなり。日月、天に處し

【自界叛逆難】聖人佐渡流罪中に北條一門の内亂ありしをいふ。

【二七】人の高下大小は所持の經に依ることを説く。

【大天】摩訶提婆(Mahādeva)の譯、佛滅三百年頃印度に出世す。

【鐵腹】博學を誇り鐵鍱を腹に卷きたりと大論に見ゆる婆羅門。

給ひながら、日蓮が大難に値ふを今度代らせ給はずば、一つには日蓮が「法華經」の行者ならざるか、忽に邪見を改むべし。若し日蓮「法華經」の行者ならば忽に國に驗を見せ給へ。若し然らずば今の日月等は、釋迦、多寶、十方の佛を誑かし奉る大妄語の人なり。提婆が虚誑罪、倶伽利が大妄語にも、百千萬億倍過ぎさせ給へる、大妄語の天なりと聲を揚げて申せしかば、忽に出來せる自界叛逆難なり。然れば國土痛く亂れば、我が身は言ふに效なき凡夫なれども、御經を持ち參らせ候ふ分齊は當世には日本第一の大人なりと申すなり。」

【二七】問うて云く「慢煩惱は七慢九慢八慢あり。汝が大慢は佛教に明す所の大慢にも百千萬億倍勝れたり。彼の徳光論師は彌勒菩薩を禮せず、大慢婆羅門は四聖を座とせり。大天は凡夫にして阿羅漢と名乘る。無垢論師が五天第一といひし、此等は皆阿鼻に墮ちぬ、無間の罪人なり。汝爭でか一閻浮提第一の智人と名乘れる、大地獄に墮ちざるべしや。恐ろし、恐ろし。」答へて云く「汝は七慢九慢八慢等をば知れりや。大覺世尊は三界第一と名乘らせ給ふ。一切の外道が云く、只今天に罰せらるべし、大地割れて入りなんと。日本國の七寺三百餘人が云く、最澄法師は大天が蘇生か、鐵腹が再誕か等云云。而りと雖も、天も罰せず、却て左右を守護し、地も割れず金剛の如し。傳教大師は叡山を立てて一切衆生の眼目となる。結句七大寺は落ちて弟子となり、諸國は檀那となる。されば現に勝れたるを勝れたりといふ事は、慢に似て大功徳なりけるか。傳教大師云く「天台法華宗の諸宗

【人を入れて】人を引き入れての意。

に勝れたるは、所依の經に據るが故に自讃毀他ならず。」等云云。『法華經』第七に云く、『衆山の中に、須彌山爲れ第一なり。此の法華經も、亦復是の如し。諸經の中に於て、最も爲れ其の上なり。」等云云。此の經文は、已說の『華嚴』、『般若』、『大日經』等、今說の『無量義經』、當說の『涅槃經』等の五千七千、月支、龍宮、四王天、忉利天、日月の中の一切經、盡十方界の諸經は、土山、黑山、小鐵圍山、大鐵圍山の如し。日本國に渡らせ給へる『法華經』は、須彌山の如し。又云く、『能く是の經典を受持すること有らん者も、亦復是の如し。一切衆生の中に於て、亦爲れ第一なり。」等云云。此の經文を以て案ずるに、『華嚴經』を持てる普賢菩薩、解脫月菩薩等、龍樹菩薩、馬鳴菩薩、法藏大師、清涼國師、則天皇后、審祥大德、良辨僧正、聖武天皇、『深密般若經』を持てる勝義生菩薩、須菩提尊者、嘉祥大師、玄奘三藏、太宗、高宗、觀勒、道昭、孝德天皇、眞言宗の『大日經』を持てる金剛薩埵、龍猛菩薩、龍智菩薩、印生王、善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏、玄宗、代宗、慧果、弘法大師、慈覺大師、『涅槃經』を持ちし迦葉童子菩薩、五十二類、曇無讖三藏、光宅寺の法雲、南三北七の十師等よりも、末代惡世の凡夫の一戒も持たず、一闡提の如くに人には思はれたれども、經文の如く、已今當に勝れて『法華經』より外は佛になる道なしと强盛に信じて、而も一分の解なからん人人は、彼等の大聖には百千萬億倍の勝りなりと申す經文なり。彼の人人は、或は彼の經經に且らく人を入れて『法華經』へ移さんが爲なる人もあり、或は彼の經に著を爲して『法華經』へ入らぬ人もあり。或は彼の經經に留

【三八】傳教の語及び經文を引いて法華經受持者の果報を說く。

【安明に積み】安明とは須彌(Sumeru)の譯名の一、大功德を積むこと。

逈るのみならず、彼の經經を深く執する故に、『法華經』を彼の經に劣るといふ人もあり。されば今『法華經』の行者は心得べし『譬へば一切の川流江河の諸水の中に、海爲れ第一なるが如く、法華經を持つ者も、亦復是の如し。又衆星の中に、月天子、最も爲れ第一なるが如く、法華經を持つ者も亦復是の如し。』等と御心得あるべし。當世日本國の智人等は衆星の如し、日蓮は滿月の如し。」

【三八】問うて云く「古へ斯くの如くいへる人ありや。」答へて云く、「傳教大師の云く、『當に知るべし。佗宗所依の經は、未だ最爲第一ならず。其の能く經を持つ者も、亦未だ第一ならず。天台法華宗は、所持の經最爲第一なるが故に、能く法華を持つ者も、亦衆生の中の第一なり。已に佛說に據る、豈に自歎ならんや。』云云。夫れ騏驎の尾に附ける蝱の、一日に千里を飛ぶといひ、輪王に隨へる劣夫の、須臾に四天下を廻るといふをば、難ずべしや疑ふべしや。『豈自歎ならん哉』の釋は、肝に銘ずるか。若し爾らば『法華經』を經の如くに持つ人は、梵王にも勝れ、帝釋にも超えたり。修羅を隨へば須彌山をも荷ひぬべし。龍神を使はば、大海をも汲み干しぬべし。傳教大師云く、『讃むる者は福を安明に積み、謗る者は罪を無間に開く。』等云云。『法華經』に云く、『經を讀誦し書持すること有らん者を見て、輕賤憎嫉して、結恨を懷かん。乃至、其の人命終して、阿鼻獄に入らん。』等云云。教主釋尊の金言眞ならば、多寶の證明違はずば、十方の諸佛の舌相一定ならば、今日本國の一切衆生、無間地獄に墮ちん事疑ふべしや。『法華經』の八の卷に云く、『若し後の世に

【三九】法華經を弘むるには不惜身命なるべきを述ぶ。

於て、是の經典を受持し讀誦せん者は、乃至、所願虚しからず、亦現世に於て其の福報を得ん。』又云く、『若し之を供養し讚歎すること有らん者は、當に今世に於て現の果報を得べし。』等云云。此の二つの文の中に『亦於現世得其福報』の八字、『當於今世得現果報』の八字、已上十六字の文空くして、日蓮今生に大果報なくば、如來の金言は提婆が虚言に同じく、多寶の證明は瞿伽利が妄語に異らず。謗法の一切衆生も、阿鼻地獄に墮つべからず、三世の諸佛もましまさざるか。されば我が弟子等、心みに『法華經』の如く、身命も惜まず修行して、此度佛法の實否を心みよ。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

【三九】「抑も此の『法華經』の文に、『我身命を愛せず、但だ無上道を惜む。』『涅槃經』に云く、『譬へば王使の善く談論して方便に巧みなる、命を他國に奉くるに、寧ろ身命を喪ふも、終に王の所説の言教を匿さざるが如し。智者も亦爾なり。凡夫の中に於て身命を惜まず、要必大乘方等、如來の秘藏、一切衆生皆佛性有りと宣説すべし。』等云云。如何様なる事ある故に身命を捨つるまでにてあるやらん、委細に承り候はん。」答へて云く、「予が初心の時の存念は、傳教、弘法、慈覺、智證等の勅宣を給うて漢土に渡りし事の『我不愛身命』に當れるか、玄奘三藏の漢土より月氏に入りしに、六生が間身命を滅しし此等か。雪山童子の半偈の爲に身を投げ、藥王菩薩の七萬二千歳が間臂を燒きし事かなんど思ひし程に、經文の如きんば、此等にはあらず。經文に『我れ身命を愛せず』と申すは、上に三類の敵人を擧げて、彼等が罵り責め、刀杖に及んで、身命を奪ふとも見えたり。又

『涅槃經』の文に、「寧ろ身命を喪ふ」等と說かれて候は、此下の經文に云く、「一闡提あり、羅漢の像を作し、空處に住し、方等大乘經典を誹謗す。諸の凡夫人見已つて皆眞の阿羅漢、是れ大菩薩なりと謂はん」等云云。彼の『法華經』の文に、第三の敵人を說いて云く、「或は阿練若に、納衣にして空閑に在つて、乃至、世に恭敬せらるることを爲ること六通の羅漢の如き有らん」等云云。『般泥洹經』に云く、「羅漢に似たる一闡提有つて、惡業を行ず」等云云。此等の經文は、正法の强敵と申すは、惡王惡臣よりも、外道魔王よりも、破戒の僧侶よりも、持戒有智の大僧の中に、大謗法の人あるべし。されば妙樂大師書いて云く、「第三最も甚し、後後の者は轉た識り難きを以ての故に」等云云。『法華經』の第五の卷に云く、「此法華經は諸佛如來祕密の藏なり、諸經の中に於て最も其上に在り」等云云。此經文に、「最在其上」の四字あり。されば此經文の如きんば『法華經』を一切經の頂にありと申すが、『法華經』の行者にてはあるべきか。而るを又國に尊重せらるる人人數多ありて、『法華經』の勝りて在する經經ましますと申す人人に責め合ひ候はん時、彼の人は王臣に御歸依あり、『法華經』の行者は貧道なる故に、國擧つて是れを賤み候はん時、不輕菩薩の如く、賢愛論師が如く申し强らば、身命に及ぶべし。此が第一の大事なるべしと見えて候。此事は今の日蓮が身に當れり。予が分際として、弘法大師、慈覺大師、善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏なんどを、『法華經』の强敵なり、經文眞ならば無間地獄は疑ひなしなんど申すは、裸形にして大火に入るは易し、

【四〇】諸佛諸天の加護あるべきを信す。
【加し】加護すること。

須彌山を手に取て投げんは易し、大石を負うて大海を渡らんは易し、日本國にして此の法門を立てんは大事なるべし、云云。

【四一】靈山淨土の教主釋尊、寶淨世界の多寶佛、十方分身の諸佛、地涌千界の菩薩等、梵、釋、日月、四天等に冥に加し顯に助け給はずば、一時一日も安穩なるべしや。」

【縮遺一四五一頁】建治二年（五十五歳）身延に於ける作。師道善房の入寂に際し、清澄山の淨顯、義淨二人に寄せて其墓所に讀ましめたる一種の追悼文なり。本抄の大旨は、末法には法華經のみ弘まるべきこと、法華經の肝心は妙法五字七字なることより進んで本門の三大秘法を明し、廣宣流布の功德を道善房に歸したるものなり。

【一】父母、師匠、國恩を報ずべきを總說す。

【老狐は以下】支那の古傳說を引用して報恩の肝要なるを證せしなり。

【弘演】開目抄には公胤とす、正しくは弘演なり。

【二】報恩の道は出家學佛にあることを說き、道善房に隨順せざりしこ

報恩抄　上

日蓮撰

【一】夫れ老狐は塚を後にせず、白龜は毛寶が恩を報ず。畜生すら斯の如し、況んや人倫をや。されば古の賢者豫讓といひし者は、劍を呑みて智伯が恩に充て、弘演と申せし臣下は、腹を割いて衞の懿公が肝を入れたり。何に況んや佛教を習はん者、父母師匠國恩を忘るべしや。

【二】此の大恩を報ぜんには、必ず佛法を習ひ究め、智者とならで叶ふべきか。譬へば衆盲を導かんには、生盲の身にては橋河を渡しがたし。方風を辨へざらん大舟は、諸商を導きて寶山に到るべしや。佛法を習ひ究めんと思はば、暇あらずば叶ふべからず。暇あらんと思はば、父母師匠國主等に隨ひては叶ふべからず。是非につけて、出離の道を辨へざらんほどは、父母師匠等の心に隨ふべからず。此義は諸人思はく、顯にも外れ冥にも叶ふまじと思ふ。然れども外典の孝經にも、父母主君に隨はずして忠臣孝人なるやうも見えたり。內典の佛經に云く「恩を棄て無爲に入るは、眞實報恩の者なり」等云云。比干が王に隨はずして賢人の名を取り、悉達太子の淨飯大王に背きて三界第一の孝となりし是れなり。

【三】斯の如く存じて、父母師匠等に隨はずして、佛法を窺ひし程に、一代聖教を悟る

とゐ強ち不孝に非る所以を述ぶ。
【無爲】浮業界をいふ、寂靜無爲の意。
【三】各宗各各自讃毀他ありて信じ難きを説く。
【小乘の三宗】倶舍、成實、律の三宗。
【四】諸經の王は一經なるべきを述べ、其は法華經なるを説く。

べき明鏡十あり。所謂る倶舍、成實、律宗、法相、三論、眞言、華嚴、淨土、禪宗、天台法華宗なり。此の十宗を明師として、一切經の心を知るべし。世間の學者等思へり、此の十の鏡は、皆正直に佛道の道を照せりと。小乘の三宗は暫くこれを措く、民の消息の是非につけて他國へ渡るに用なきが如し。大乘の七鏡こそ、生死の大海を渡りて、淨土の岸に着く大船なれば、此を習ひ釋いて、我が身も進み人をも導かんと思ひて、習ひ見る程に、大乘の七宗、何れも自讃あり。「我が宗こそ一代の心は得たれ、得たれ」等云云。所謂る華嚴宗の杜順、智儼、法藏、澄觀等、法相宗の玄奘、慈恩、智周、智昭等、三論宗の興皇嘉祥等、眞言宗の善無畏、金剛智、不空、弘法、慈覺、智證等、禪宗の達磨、慧可、慧能等、淨土宗の道綽、善導、懷感、源空等。此等の宗宗、皆本經本論によりて、「我も我も一切經をさとれり、佛意を究めたり」と云云。彼の人人云く「一切經の中には『華嚴經』第一なり、『法華經』、『大日經』等は臣下の如し。」眞言宗の云く、「一切經の中には『大日經』第一なり、餘經は衆星の如し。」禪宗云く、「一切經の中には『楞伽經』第一なり。」乃至餘宗斯の如く、而も上に擧ぐる諸師は、世間の人人各各思へり、諸天の帝釋を敬ひ、衆星の日月に隨ふが如し。我等凡夫は何れの師なりとも信ずるならば、不足あるべからず。仰いでこそ信ずべけれども、日蓮が愚案晴れ難し。

【四】世間を見るに、各各我も我もといへども、國主は但だ一人なり。二人となれば國土穩かならず。家に二の主あれば其家必ず破る。一切經も亦斯の如くやあるらん。何れの

【已今當】已說、今說、當說。

【如意寶珠】意のままに欲するものを現出する寶珠。

【肉髻】髻の如き形をなして肉の隆起せるもの。

【俗諦、眞諦】俗見、眞見の意。

經にても任せ、一經こそ一切經の大王にては在すらめ。而るに十宗七宗まで各各諍論して隨はずば、國に七人十人の大王ありて萬民穩かならじ。何んがせんと疑ふ處に、一の願を立つ、我八宗十宗に隨はじ。天台大師の專ら經文を師として一代の勝劣を勘へしが如く、一切經を開き見るに、『涅槃經』と申す經に云く、「法に依つて人に依らざれ」等云云。依法と申すは一切經、不依人と申すは佛を除き奉りて、外の普賢菩薩、文殊師利菩薩、乃至上に擧ぐる處の諸の人師なり。此の經に又云く「了義經に依つて不了義經に依らざれ」等云云。此經に指すところの了義經と申すは『法華經』、不了義經と申すは『華嚴經』、『大日經』、『涅槃經』等の已今當の一切經なり。されば佛の遺言を信ずるならば、專ら『法華經』を明鏡として、一切經の心をば知るべきか。隨つて『法華經』の文を開き奉れば、『此の法華經は諸經の中に於て最も其上に在り』等云云。此の經文の如くば、須彌山の頂に帝釋の居せるが如く、輪王の頂に如意寶珠のあるが如く、衆木の頂に月の宿るが如く、諸佛の頂上に肉髻の住せるが如く、此の『法華經』は『華嚴經』、『大日經』、『涅槃經』等の一切經の頂上の如意寶珠なり。されば專ら論師人師をすてて經文に依るならば、『大日經』、『華嚴經』等に『法華經』の勝れ給へる事は、日輪の青天に出現せる時、眼明かなる者の天地を見るが如く、高下宛然なり。又『大日經』、『華嚴經』等の一切經を見るに、此の經文に相似の經文一字一點もなし。或は小乘經に對して勝劣を說かれ、或は俗諦に對して眞諦を說き、或は空假に對して中道を讚めたり。譬へば諸の小國の王が我

【我が身】【我】無量義經のこと。

【御料簡】御撰擇といふ意。

【五】十方三世の諸佛の諸經中にも法華經に勝る說なきを說く。

が國の臣下に對して大王と云ふが如し。『法華經』は諸王に對して大王等と云云。但し『涅槃經』ばかりこそ、『法華經』に相似の經文は候へ。されば天台以前の南北の諸師は迷惑して『法華經』は『涅槃經』に劣ると云云。されども專ら經文を開き見るには、『無量義經』の如く『華嚴』、『阿含』、『方等』、『般若』等の四十餘年の經經を擧げて、『涅槃經』に對して、我が身勝ると說いて、又『法華經』に對する時は、『是の經の出世は、乃至、法華の中八千の聲聞に記莂を授くることを得て、大果實を成ずるが如く、秋收冬藏して更に所作無きが如し。』等云云。我と『涅槃經』は『法華經』には劣ると說ける經文なり。斯う經文は分明なれども南北の大智の諸人の迷てありし經文なれば、末代の學者能能眼を留むべし。此の經文は但だ『法華經』、『涅槃經』の勝劣のみならず、十方世界の一切經の勝劣をも知りぬべし。而るを經文にこそ迷ふとも、天台、妙樂、傳教大師の御料簡の後は、眼あらん人人は知りぬべき事ぞかし。然れども天台宗の人たる慈覺、智證すら、猶ほ此の經文に暗し、況んや餘宗の人人をや。」

【五】或人疑つて云く「漢土日本に渡りたる經經にこそ、『法華經』に勝れたる經は在せずとも、月氏、龍宮、四王、日月、忉利天、都率天なんどには、恒河沙の經經ましますなれば、其の中に『法華經』に勝れさせ給ふ御經やましますらん。」答へて云く「一を以て萬を察せよ、庭戸を出でずして天下を知るとは是れなり。癡人が疑つて云く『我等は南天を見て、東西北の三空を見ず、彼の三方の空に此日輪より別の日やましますらん。山を隔て

【一闡提】 斷善根の衆生。

【等覺】 妙覺に次ぐ菩薩の位。

【廣長舌】 無虚妄を示す相。

【壊劫】 四劫の第四、世界の破壊する時期。

煙の立つを見て火を見ざれば、煙は一定なれども、火にてやなかるらん。」斯の如くいはん者は一闡提の人と知るべし、世尊に異らず。『法華經の開經無量義經』に、釋迦如來金口の誠言をもて、五十餘年の一切經の勝劣を定めて云く、「我が所説の經典は無量千萬億にして、已に説き今説き當に説かん。而も其中に於て、此の法華經は最も爲れ難信難解なり」等云云。此の經文は、但だ釋迦如來一佛の説なりとも、等覺已下は仰いで信ずべき上、多寶佛東方より來りて、眞實なりと證明し、十方の諸佛集まりて、釋迦佛と同じく廣長舌を梵天に付け給ひて後、各各の國國へ還らせ給ひぬ。已今當の三字は、五十年並びに十方三世の諸佛の御經を一字一點も殘さず引き載せて、『法華經』に對して説かせ給ひて候なり。十方の諸佛此座にして御判形を加へさせ給ひ、各各又自國に還らせ給ひて、我が弟子等に向はせ給ひては、『法華經』に勝れたる御經ありと説かせ給はば、其の所化の弟子等信用すべしや。又我は見ざれば、月氏、龍宮、四天、日月等の宮殿の中に『法華經』に勝れさせ給ひたる經やおはしますらんと疑ひをなす。されば梵、釋、日月、四天、龍王は、『法華經』の御座にはなかりけるか。若し日月等の諸天、『法華經』に勝れたる御經ましますと、汝は知らずと仰せあるならば、大誑惑の日月なるべし。」日蓮せめて云く、「日月は虚空に住し給へども、我等が大地に處するが如くして墮落し給はざる事は、上品の不妄語戒の力ぞかし。『法華經』に勝れたる御經ありと仰せある大妄語あるならば、恐らくは未だ壊劫に至らざるに、大地の上にどうと墮ち候はんか、無間大城の最下の堅鐵にあらずば、止まりがたからんか。

【瞿伽梨】（Kokāli）の異音譯、佛に背きて提婆の弟子となり佛弟子を誹謗せる比丘。
【大慢】撰時鈔に詳出す。
【六】他宗の諸師を佛敵と嘗す、ために諸大難に遭ふは法華經の行者として必然のことなるを述ぶ。

大妄語の人は須臾も空に處して、四天下を廻り給ふべからずと責め奉るべし。而るを華嚴宗の澄觀等、眞言宗の善無畏、金剛智、不空、弘法、慈覺、智證等の大智の三藏大師等、『華嚴經』『大日經』等は『法華經』に勝れたりと立て給はば、我等が分際には及ばぬ事なれども、大道理の推すところは、豈に諸佛の大怨敵にあらずや。提婆、瞿伽梨も物ならず、大天、大慢外に求むべからず。彼の人人を信ずる輩は、恐ろし、恐ろし。」

【六】 問うて云く、「華嚴の澄觀、三論の嘉祥、法相の慈恩、眞言の善無畏、乃至弘法、慈覺、智證等を、佛の敵と宣ふか。」答へて云く、「此れ大なる難なり。佛法に入りて第一の大事なり。愚眼を以て經文を見るには『法華經』に勝れたる經ありと云はん人は、設ひ如何なる人なりとも、謗法は免れじと見えて候。而るを經文の如く申すならば、いかでか此諸人佛敵たらざるべき。若し又恐れをなして指し申さずば一切經の勝劣空しかるべし。又此の人人を恐れて末の人人を佛敵といはんとすれば、彼の宗宗の末の人人の云く、『法華經』に『大日經』を勝りたりと申すは、我が私の計らひにはあらず、祖師の御義なり。戒行の持破、智慧の勝劣、身の上下はありとも、所學の法門に違ふ事なしと申せば、彼の人人に失なし。又日蓮此を知りながら、人を恐れて申さずば、『寧ろ身命を喪ふとも教を匿さざれ』の佛陀の諫曉を用ゐぬ者となりぬ。如何がせん。云はんとすれば、世間恐ろし、止まんとすれば佛の諫曉遁れ難し。進退此に谷まれり。宜なるかなや、『法華經』の文に云く、『而かも此經は如來の現在にすら猶ほ怨嫉多し、況んや滅度の後をや。』又云く、『一切世間怨多

【波瑠璃王】釋迦族を滅したる王、毗瑠璃王の異音譯

【八】正法時代に於ける迫害を述ぶ。

【四依】衆生の依りどころとなる四種の菩薩。

【提婆菩薩】龍樹の弟子にして、佛在世の提婆に非ず

くして信じ難し」等云云。釋迦佛を摩耶夫人孕ませ給ひたりければ、第六天の魔王摩耶夫人の御腹を通し見て、我等が大怨敵、『法華經』と申す利劒を孕みたり、事の成ぜぬ先に如何にしてか失ふべき。第六天の魔王大醫と變じて淨飯王宮に入り、「御産安穩の良藥を持ち候ふ大醫あり」とのゝしりて、毒を后に參らせつ。初生の時は石を降らし、乳に毒を交へ城を出でさせ給ひしには、黑き毒蛇と變じて道に塞がり、乃至提婆、瞿伽梨、波瑠璃王、阿闍世王等の惡人の身に入りて、或は大石を投げて佛の御身より血を出し、或は釋子を殺し、或は御弟子等を殺す。此等の大難は、皆遠くは『法華經』を佛世尊に說かせ參らせじとたばかりし。『如來現在猶多怨嫉』の大難ぞかし。此等は遠き難なり。近き難には、舍利弗、目連、諸大菩薩等も、四十餘年が間は『法華經』の大怨敵の中ぞかし。「況んや滅度の後」と申して、未來の世には、又此の大難よりも勝れて恐ろしき大難あるべしと說かれて候。佛だにも忍び難かりける大難をば、凡夫は爭でか忍ぶべき。況んや在世より大なる大難にてあるべかんなり。如何なる大難か、提婆が長三丈廣さ一丈六尺の大石、阿闍世王の醉象には過ぐべきとは思へども、彼にも過ぐべく候なれば、小失なくとも大難に度度値ふ人をこそ、滅後の『法華經』の行者とは知り候はめ。

【八】付法藏の人人は四依の菩薩、佛の御使なり。提婆菩薩は外道に殺され、師子尊者は檀彌羅王に頭を刎ねられ、佛陀密多、龍樹菩薩等は赤幡を七年十二年さし通す。馬鳴菩薩は金錢三億が代りとなり、如意論師は思ひ死に死す。此等は正法一千年の内なり。

【九】天台大師の法華第一の教判を述ぶ。

【九】像法に入つて五百年、佛滅後一千五百年と申せし時、漢土に一人の智人あり。始めは智顗、後には智者大師と號す。『法華經』の實義を有りの儘に弘通せんと思ひ給ひしに、天台已前の百千萬の智者、種種に一代を判ぜしかども、詮じて十流となりぬ。所謂る南三北七なり。十流ありしかども、一流をもて最とせり。所謂る南三の中の第三の光宅寺の法雲法師是れなり。此人は一代の佛教を五つに分つ。其の五の中に三經を選び出す。所謂る『華嚴經』、『涅槃經』、『法華經』なり。一切經の中には『華嚴經』第一、大王の如し。『涅槃經』第二、攝政關白の如し。第三『法華經』は公卿の如し。此より已下は萬民の如し。

此人は本より智慧賢き上、慧觀、慧嚴、僧柔、慧次なんど申せし大智者より習ひ傳へ給へるのみならず、南北の諸師の義を攻め破り、山林に交はりて『法華經』、『涅槃經』、『華嚴經』の功を積みし上、梁の武帝召し出して、内裏の内に寺を立て光宅寺と名づけて、此法師を崇め給ふ。『法華經』を講ぜしかば、天より花降ること在世の如し。天監五年に大旱魃ありしかば、此の法雲法師を請じ奉りて『法華經』を講ぜさせ參らせしに、『藥草喩品』の『其雨普等、四方俱下』と申す二句を講ぜさせ給ひし時、天より甘雨下りたりしかば、天子御感の餘りに、現に僧正に爲し參らせて、諸天の帝釋に仕へ、萬民の國王を恐るるが如く、我と仕へ給ひし上、或る人夢みらく、此人は過去の燈明佛の時より『法華經』を講ぜる人なり。『法華經の疏』四卷あり。此疏に云はく、『此經未だ碩然ならず』。亦云はく、『異の方便』等云云。正しく『法華經』は未だ佛理を究めざる經と書かれて候。此人の御義佛意に相叶

【一同の義】同一の意見。

ひ給ひければこそ、天より花も下り、地も動りけめ。斯る奇瑞も有りし事にて候ひしかば、陳上の人人、さては『涅槃経』は『華厳経』、『法華経』には勝れることにこそあるなれと思ひし上、新羅、百済、高麗、日本まで此の疏ひろまりて、大體一同の義にて候ひしに、法雲法師御死去ありていくばくならざるに、梁の末、陳の始めに智顗法師と申す小僧出来せり。南岳大師と申せし人の御弟子なりしかども、師の義も不審にありけるかの故に、一切経蔵に入つて度度御覧ありしに、『華厳経』、『涅槃経』、『法華経』の三経に疑を出し、北の三師の中に殊に『華厳経』を讃じ給ひき。別して疏文を作りて、日日に功を積し給ひしかば、南北の人思はく、此人も『華厳経』を第一と思すよと見えし程に、法雲法師が一切経の中に華厳第一、涅槃第二、法華第三と立てたるが余りに不審なりける故に、殊に『華厳経』を御覧ありけるなり。斯くて『一切経』の中に『法華経』第一、『涅槃経』第二、『華厳経』第三と見定めさせ給ひて、嘆き給ふやうは、如来の聖教は漢土に渡れども、人を利益する事なし。却つて衆生を悪道に導くこと、人師の誤りによれり。例せば国の長とある人、東を西と言ひ、天を地と言ひ出しぬれば、万民は皆の如くに心得べし。後に賤しき者出来して、汝等が西は東、汝等が天は地なりと言はば、用ふる事なき上、我が長の心に叶はんが為に、今の人を罵り打ちなんどすべし。如何がせんとは思せしかども、さて黙すべきにあらねば、光宅寺の法雲法師は謗法に依つて地獄に堕ちぬと罵らせ給ふ。其の時南北の諸師蜂の如く蜂起し、烏の如く烏合せり。智顗法師をば頭を破るべきか、国を逐ふべきかなんど申せし程に、陳主此を聞召

して、南北の數人に召し合せて、我と對論して聽かせ給ひき。法雲法師が弟子等の學者、法歲、慧曉、慧嵩なんど申せし、僧正、僧都已上の人人百餘人なり。各惡口を先とし、眉を上げ眼を瞋らし、手を擧げ拍子を叩く、而れども智顗法師は末座に坐して色を變ぜず言を誤らず、威儀徐にして諸僧の言を一一に牒を取り、言每に責め返す。押返して難じて云く、「抑も法雲法師の御義に、第一華嚴、第二涅槃、第三法華と立てさせ給ひける證文は何れの經ぞ。慥かに明かなる證文を出させ給へ」と責めしかば、各頭を低せ色を失ひて、一言の返事なし。重ねて責めて云く、『無量義經』に正しく、「次說方等十二部經、摩訶般若、華嚴海空。」等云云。佛、我と『華嚴經』の名を呼び上げて『無量義經』に對して未顯眞實と打消し給ふ。『法華經』に劣りて候ふ『無量義經』に、『華嚴經』は責められて候ひぬ。如何に心得させ給ひて、『華嚴經』をば一代第一とは候ひけるぞ。各御師の御方人せんと思さば、此の經文を破りて、此に勝れたる經文を取り出して、御師の御義を助け給へ」と責めさせ給ふ。又『涅槃經』を法華經に勝るると候ひけるは、如何なる經文ぞ。『涅槃經』の第十四には、『華嚴』、『阿含』、『方等』、『般若』を擧げて、『涅槃經』に對して勝劣は說かれて候へども、全く、『法華經』と『涅槃經』との勝劣は見えず。次上の第九の卷に、『法華經』と『涅槃經』との勝劣分明なり。所謂る經文に云く、「是經の出世は、乃至、法華の中の八千の聲聞記莂を受くることを得て、大果實を成ずるが如きは、秋收冬藏して更に所作無きが如し。」等云云。經文明かに諸經をば春夏と說かせ給ひ、『涅槃經』と『法華經』とをば果

實の位とは說かれて候へども、『法華經』をば秋收冬藏の大果實の位、『涅槃經』をば秋の末冬の始め捃拾の位と定め給ひぬ。此の經文正しく『法華經』には我が身劣ると承伏し給ひぬ。『法華經』の文には、已說今說當說と申して、此の『法華經』は前と並びとの經經に勝れたるのみならず、後に說かん經經にも勝るべしと、佛定め給ふ。已に教主釋尊斯く定め給ひぬれば、疑ふべきにあらねども我が滅後は如何と疑ひ思して、東方寶淨世界の多寶佛を證人に立て給ひしかば、多寶佛大地より踊り出でて『妙法華經皆是眞實』と證し、十方分身の諸佛重ねて集まらせ給ひ、廣長舌を大梵天に付け、又教主釋尊も付け給ふ。然して後多寶佛は寶淨世界へ歸り、十方の諸佛各本土に歸らせ給ひて後、多寶、分身の佛も在せざらんに、教主釋尊『涅槃經』を說いて、『法華經』に勝ると仰せあらば、御弟子等は信ぜさせ給ふべしや』と責めしかば、日月の大光明の修羅の眼を照すが如く、漢王の劍の諸侯の頸に懸りしが如く、兩眼を閉ぢ一頭を低れたり。天台大師の御氣色は、師子王の狐兎の前に吼えたるが如し、鷹鷲の鳩雉を責めたるに似たり。斯の如くありしかば、さては『法華經』は『華嚴經』、『涅槃經』にも勝れてありけりと、震旦一國に流布するのみならず、還つて五天竺までも聞え、月支大少の諸論も、智者大師の御義には勝れず。教主釋尊兩度出現しますか、佛教二度現はれぬと褒められ給ひしなり。

【一〇】 其後天台大師も御入滅なりぬ。陳隋の世も代りて唐の世となりぬ。章安大師も入滅なりぬ。天台の佛法漸く習ひ失ひし程に、唐の太宗の御宇に、玄奘三藏といひし人、貞

【震旦】 支那のこと。
【月支】 印度の異稱として用ゐたり
【一〇】 玄奘三藏の法華方便の教判を述ぶ。

【三乘眞實一乘方便】三乘各別の教が眞實、三乘を一乘に歸する教は方便なりとの判。

【五性各別】撰時鈔に詳し。

【一】賢首の法華第二の教判を擧ぐ

【攝末法輪】枝末の教を攝めて根本の教に歸せしむる教のこと。

【二】善無畏等の法華第二の教判を擧ぐ。

觀三年に始めて月氏に入りて、同十九年に歸りしが、月氏の佛法習ひ盡して、法相宗と申す宗を渡す。此宗は天台宗と水火なり。而るに天台の御覽なかりし『深密經』、『瑜伽論』、『唯識論』等を渡して、『法華經』は一切經には勝れたれども、『深密經』には劣るといふ。而も天台は御覽なかりしかば、天台の末學等は智慧の薄きかの故に、然もやと思ふ。又太宗は賢王なり、玄奘に御歸依淺からず。言ふべき事ありしかどもいつもの事なれば、時の威を恐れて申す人なし。『法華經』を打返して、三乘眞實、一乘方便、五性各別と申せし事は、心憂かりし事なり。天竺よりは渡れども、月氏の外道が漢土に渡れるか、『法華經』は方便、『深密經』は眞實といひしかば、釋迦多寶、十方の諸佛の誠言も還りて虛しくなり、玄奘、慈恩こそ時の生身の佛にてはありしか。

【一】其後則天皇后の御宇に前に天台大師に責められし『華嚴經』に、又重ねて新譯の『華嚴經』渡りしかば、先の憤りを果さんが爲に、新譯の『華嚴經』を以て天台に責められし舊譯の『華嚴經』を扶けて、華嚴宗と申す宗を、法藏法師と申す人立てぬ。此宗は『華嚴經』をば根本法輪、『法華經』をば攝末法輪と申すなり。南北は一華嚴、二涅槃、三法華、天台大師は一法華、二涅槃、三華嚴。今の華嚴宗は、一華嚴、二法華、三涅槃等云云。

【二】其後玄宗皇帝の御宇に、天竺より善無畏三藏『大日經』、『蘇悉地經』を渡す。金剛智三藏『金剛頂經』を渡す。又金剛智三藏の弟子あり、不空三藏なり。此の三人は月氏の人、種姓も高貴なる上、人柄も漢土の僧に似ず。法門も何とは知らず、後漢より今に

【一三】妙樂大師の天台宗中興を述ぶ

至るまでなかりし印と眞言といふ事を相副へて、ゆゆしかりしかば、天子頭を傾け、萬民掌を合す。此の人人の義に云く、『華嚴』、『深密』、『般若』、『涅槃』、『法華經』等の勝劣は顯教の內、釋迦如來の說の分なり。今の『大日經』等は大日法王の勅言なり。彼の經經は民の萬言、此經は天子の一言なり。『華嚴經』、『涅槃經』等は、『大日經』には梯を立ても及ばず。但だ『法華經』ばかりこそ『大日經』には相似の經なれ。されども彼經は釋迦如來の說、民の正言、此經は天子の正言なり。言は似たれども、人がら雲泥なり。譬へば濁水の月と淸水の月の如し、月の影は同じけれども、水に淸濁ありなんど申しければ、此の由を尋ね顯はす人もなし。諸宗皆落ち伏して、眞言宗に傾きぬ。善無畏、金剛智死去の後、不空三藏又月氏に歸りて『菩提心論』と申す論を渡し、愈愈眞言宗盛んなりけり。

【一三】但し妙樂大師といふ人あり。天台大師よりは二百餘年の後なれども、智慧かしこき人にて、天台の所釋を見明らめてありしかば、天台の釋の心は、後に渡れる『深密經』、法相宗、又始めて漢土に立ちたる華嚴宗、『大日經』眞言宗にも、『法華經』は勝れさせ給ひたりけるを、或は智の及ばざるか、或は人の畏るるか、或は時の王威を怖づるかの故に言はざりけるか。斯くてあるならば、天台の正義已に失せなん。又陳隋已前の南北が邪義にも勝れたりと思して、三十卷の末文を作り給ふ。所謂『弘決』、『釋籤』、『疏記』是れなり。此の三十卷の文は、本書の重れるを削り、弱きを扶くるのみならず、天台大師の御時なかりしかば御責めにも免れてあるやうなる、法相宗と華嚴宗と眞言宗とを、一時に取挫

【一四】佛教の日本傳來を述ぶ。
【先生】前生に同じ。
【一五】傳教大師の法華を宗とするを述ぶ。

がれたる書なり。

【一四】日本國には人王第三十代欽明天皇の御宇、十三年壬申十月十三日に百濟國より一切經、釋迦佛の像を渡す。又用明天皇の御子、聖德太子佛法を讀み始め、和氣の妹子と申す臣下を漢土に遣はして、先生の所持の「法華經」を取寄せ給ひて持經と定む。其後人王第三十七代孝德天皇の御宇に、三論宗、華嚴宗、法相宗、倶舍宗、成實宗渡る。人王第四十五代聖武天皇の御宇に律宗渡る。已上六宗なり。孝德より人王第五十代の桓武天皇に至るまでは、十四代一百二十餘年が間は、天台、眞言の二宗なし。

【一五】桓武の御宇に、最澄と申す小僧あり。山階寺の行表僧正の御弟子なり。法相宗を始めとして、六宗を習ひ究めぬ。而れども佛法未だ極めたりとも覺えざりしに、華嚴宗の法藏法師が作りたる「起信論の疏」を見給ふに、天台大師の釋を引き載せたり。此疏こそ仔細ありげなれ。此國に渡りたるか、又未だ渡らざるかと不審ありし程に、或人に問ひしかば、其人の云く「大唐の揚州龍興寺の僧鑒眞和尚は天台の末學、道宣律師の弟子、天寶の末に日本國に渡り給ひて、小乘戒を弘通せさせ給ひしかども、天台の御釋持ち來りながら弘め給はず、人王第四十六代孝謙天皇の御宇なり」と語る。其書を見んと申されしかば、取り出でて見せ參らせしかば、一返御覽ありて、生死の醉を覺ましつ。此書を以て六宗の心を尋ね明らめしかば、一一に邪見なる事顯はれぬ。忽ちに願を發して云く、「日本國の人皆謗法の者の檀越たるが、天下一定亂れなんず。」と思して、六宗を難ぜられしかば、

【各一軸乃至悟らんや】三乘の權經と一實の法華經とを混同し、歴劫修行に拘泥するが如きは、到底即身成佛等の出來得るものにあらずの意。

【休運】佳き時運

七大寺六宗の碩學蜂起して、京中烏合し、天下皆騒ぐ。七大寺六宗の諸人等、惡心熾盛なり。而るを去ぬる延暦二十一年正月十九日に天皇高雄寺に行幸ありて、七寺の碩德十四人、善議、勝猷、奉基、寵忍、賢玉、安福、勤操、修圓、慈誥、玄耀、歳光、道證、光證、觀敏等の十有餘人を召し合はす。華嚴、三論、法相等の人人、各各我が宗の元祖が義に違はず。最澄上人は六宗の人人の所立一一に牒を取りて、本經本論、並びに諸經諸論に指し合はせて責めしかば、一言も答へず、口をして鼻の如くになりぬ。天皇驚き給ひて、委細に御尋ねありて、重ねて敕宣を下して、十四人を責め給ひしかば、承伏の謝表を奉りたり。其の書に云く、「七箇の大寺、六宗の學匠、乃至、初めて至極を悟る」等云云。又云く、「聖德の弘化より以降、今に二百餘年の間、講ずる所の經論其の數多し。彼此理を爭つて、其の疑ひ未だ解けず。而も此の最妙の圓宗、猶ほ未だ闡揚せず」等云云。又云く、「三論法相久年の諍、渙焉として氷の如く解け、照然として既に明かなり。猶ほ雲霧を披いて、三光を見るが如し」云云。最澄和尚、十四人が義を判じて云く、「各一軸を講じて、法鼓を深谷に振ふに、賓主三乘の路に徘徊し、義旗を高峰に飛ばすに、長幼は三有の結を摧破し、猶ほ未だ歴劫の轍を改めず、白牛を門外に混ず、豈に善く初發の位に昇り、阿荼を宅內に悟らんや」等云云。弘世、眞綱二人の臣下云く、「靈山の妙法を南岳に聞き、總持の妙悟を天台に闢く。一乘の權滯を慨き、三諦の未顯を悲む」等云云。又十四人の云く、「善議等牽かれて休運に逢つて、乃ち奇詞を閲す、深期に非ざるよりは、何ぞ聖世に託せん哉。」

【一六】傳教大師の法華最第一の見解を述ぶ。

等云云。此の十四人は華嚴宗の法藏、審祥、三論宗の嘉祥、觀勒、法相宗の慈恩、道昭、律宗の道宣、鑒眞等の、漢土日本の元祖等の法門、瓶は異なれども水は一つなり。而るに十四人彼の邪義を捨てて傳教の「法華經」に歸伏しぬる上は、誰の末代の人か「華嚴」「般若」「深密經」等は「法華經」に超過せりと申すべきや。小乘の三宗は又彼の人人の所學なり。大乘の三宗破れぬる上は、沙汰の限りにあらず、而るを今に仔細を知らざる者、六宗は未だ破れずと思へり。譬へば盲目が天の日月を見ず、聾人が雷の音を聞かざる故に、天には日月なし、空には聲なしと思ふが如し。

【一六】眞言宗と申すは、日本人王第四十四代と申せし、元正天皇の御宇に善無畏三藏「大日經」を渡して、弘通せずして漢土へ歸る。又玄昉等、「大日經の義釋」十四卷を渡す。又東大寺の得清大德渡す。此等を傳教大師御覽ありしかども、「大日經」「法華經」の勝劣如何と思しける程に、旁不審ありし故に、去ぬる延暦二十三年七月御入唐、西明寺の道邃和尚、佛隴寺の行滿等に値ひ奉り、止觀、圓頓の大戒を傳受し、靈感寺の順曉和尚に値ひ奉り、眞言を相傳し、同延暦二十四年六月に歸朝して桓武天皇に御對面、宣旨を下して六宗の學生に、止觀、眞言を習はしめ、同七大寺に置かれぬ。止觀眞言の二宗の勝劣は、漢土に仔細あれども、又「大日經の義釋」には、理同事勝と書きたれとも、傳教大師は善無畏三藏の誤りなり。「大日經」は「法華經」には劣りたりと知し召して、八宗とはせさせ給はず。眞言宗の名を削りて、法華宗の内に入れ七宗となし、「大日經」をば法華天台宗

の傍依經となして、『華嚴』、『大品般若』、『涅槃』等の例とせり。而れども大事の圓頓の大乘別受戒の大戒壇を、我が國に立てう立てじの諍論が煩はしきに依りてや、眞言、天台の二宗の勝劣は、弟子にも分明に教へ給はざりけるか、但し『依憑集』と申す文に、正しく眞言宗は法華天台宗の正義を偸み取りて、『大日經』に入れて理同とせり。されば彼の宗は天台宗に落ちたる宗なり。況や不空三藏は善無畏、金剛智入滅の後月氏に入りてありしに龍智菩薩に値ひ奉りし時、「月氏には佛意を明らめたる論釋なし。漢土に天台といふ人の釋こそ邪正を擇び偏圓を明らめたる文にては候ふなれ。あなかしこあなかしこ、月氏へ渡し給へ。」と慇に誂へし事を、不空の弟子含光といひし者が妙樂大師に語れるを、『記』の十の末に引き載せられて候を、此『依憑集』に取り載せて候。『法華經』に『大日經』は劣ると知し召す事、傳教大師の御心顯然なり。されば釋迦如來天台大師、妙樂大師、傳教大師の御心は、一同に『大日經』等の一切經の中には『法華經』は勝れたりといふ事は分明なり。又眞言宗の元祖といふ龍樹菩薩の御心も斯の如し。『大智度論』を能く能く尋ぬるならば、此事分明なるべきを、不空が誤れる「菩提心論」に皆人誑かされて、此事に迷惑せるか。

【一七】又石淵の勤操僧正の御弟子に、空海といふ人あり。後には弘法大師と號す。去ぬる延暦二十三年五月十二日に御入唐、漢土に渡りては金剛智、善無畏の兩三藏の第三の御弟子、惠果和尙といひし人に兩界を傳受し、大同二年十月二十二日に御歸朝、平城天皇の

【一七】弘法大師の大日第一法華第三の教判を述ぶ。
【兩界】金剛界と胎藏界。

御宇なり。桓武天皇は御崩御、平城天皇に見參し、御用ゐありて御歸依他に異りしかども平城程もなく嵯峨に世を取られさせ給ひしかば、弘法引入れてありし程に、傳教大師は嵯峨天皇の弘仁十三年六月四日御入滅、同じき弘仁十四年より、弘法大師、王の御師となり、眞言宗を立てて東寺を給ひ、眞言和尚と號し、此より八宗始まる。一代の勝劣を判じて云く、第一眞言『大日經』、第二『華嚴』、第三は『法華涅槃』等云云。『法華經』は『阿含』『方等』、『般若』等に對すれば眞實の經なれども、『華嚴經』、『大日經』に望むれば戲論の法なり。教主釋尊は佛なれども、大日如來に向ふれば無明の邊域と申して、皇帝と俘囚との如し。天台大師は盜人なり、眞言の醍醐を盜みて、『法華經』を醍醐といふなんど書かれしかば、『法華經』は秀逸と思へども、弘法大師に値ひぬれば、物の數にもあらず。天竺の外道はさて置きぬ。漢土の南北が、『法華經』は涅槃經に對すれば。邪見の經といひしにも勝れ、華嚴宗が、『法華經』は『華嚴經』に對すれば枝末經と申せしにも超えたり。彼の月氏の大慢婆羅門が、大自在天、那羅延天、婆藪天、教主釋尊の四人を高座の足に造りて其上に上つて邪法を弘めしが如し。傳教大師御存生ならば、一言も出ざるべかりける事なり。又義眞、圓澄、慈覺、智證等も如何に御不審はなかりけるやらん。天下第一の大凶なり。

【一八】慈覺大師の法華、大日理同事勝の判を述ぶ。

【一八】慈覺大師は去ぬる承和五年に御入唐、漢土にして十年が間、天台眞言の二宗を習ふ。『法華』『大日經』の勝劣を習ひしに、法全、元政等の八人の眞言師には、『法華經』と、

【一九】智證大師の法華、大日理同事勝、眞言、止觀兩業の判を述ぶ。

『大日經』は理同事勝等云云。天台宗の志遠、廣脩、維蠲等に習ひしには、『大日經』は方等部の攝等云云。同じき承和十三年九月十日に御歸朝、嘉祥元年六月十四日に宣旨下る。『法華』『大日經』等の勝劣は漢土にして知り難かりけるかの故に、『金剛頂經』の疏』七卷、『蘇悉地經』の疏』七卷、已上十四卷。此疏の意は『大日經』『金剛頂經』『蘇悉地經』の義と、『法華經』の義は、其の所詮の理は一同なれども、事相の印と眞言とは、眞言の三部經勝れたりと云云。此は偏へに善無畏、金剛智、不空の造りたる『大日經』の疏の意の如し。而れども我が心に猶ほ不審や殘りけん。又心には解けてんけれども、人の不審を晴らさんとや思しけん。此の十四卷の疏を御本尊の御前にさし置きて、御祈請ありき。斯うは造りて候へども、佛意計り難し。『大日』の三部や勝れたる、『法華經』の三部や勝れると御祈念ありしかば、五日と申す五更に忽に夢想あり。『青天に大日輪懸り給へり。矢を以て此を射ければ、矢飛んで天に上り、日輪の中に立ちぬ、日輪動轉して已に地に落ちんとすと思ひて、打覺めぬ』。悅んで云く、『我に吉夢あり、法華經に眞言勝れたりと造りつる文は佛意に叶ひけり』と悅ばせ給ひて、宣旨を申し下して日本國に弘通あり。而も宣旨の意に云く『遂に知んぬ、天台の止觀と眞言の法義とは理冥に符へり』等云云。祈請の如きんば『大日經』に『法華經』は劣れるなるやうなり。宣旨を申し下すには『法華經』と『大日經』とは同じ等云云。

【一九】智證大師は本朝にしては、義眞和尚、圓澄大師、別當、慈覺等の弟子なり。顯密

【攝引門】攝取引入門の意。
【論の記】「法華論ノ記」の略。

の二道は、大體此國にして學し給ひけり。天台、眞言の二宗の勝劣の御不審に、漢土へは渡り給ひけるか。去ぬる仁壽二年に御入唐、漢土にしては、眞言宗は法全、元政等に習はせ給ひ、大體『大日經』と『法華經』とは理同事勝、慈覺の義の如し。天台宗は良諝和尙に習ひ給ふ。眞言、天台の勝劣は『大日經』は『華嚴』、『法華』等には及ばず等云云。七年が間漢土に經て去ぬる貞觀元年五月十七日に御歸朝。『大日經の旨歸』に云く、『法華尙ほ及ばず、況んや自餘の教をや』等云云。此釋は『法華經』は『大日經』には劣る等云云。又『授決集』に云く、『眞言禪門乃至、若し法華華嚴涅槃等の經に望むれば、是れ攝引門なり』等云云。『普賢經の記』、『論の記』に云く、『同じ』等云云。貞觀八年丙戌五月廿九日壬申、勅宣を申し下して云く、『如聞らく眞言、止觀兩教の宗、同じく醍醐と號し、倶に深祕と稱す。』等云云。又六月三日の敕宣に云く、『先師既に兩業を開いて、以て我が道と爲す。代代の座主相承して兼ね傳へざること莫し、在後の輩、豈に舊迹に乖かんや。如聞らく山上の僧等、專ら先師の義に違して、偏執の心を成す、始んど餘風を扇揚し舊業を興隆するを顧みざるに似たり。凡そ厥れ師資の道、一を闕きても不可なり。傳弘の勤め、寧ろ兼備せざらんや。今より以後、宜しく兩教に通達するの人を以て延曆寺の座主と爲し、立てて恆例と爲すべし。』云云。されば慈覺、智證の二人は傳教、義眞の御弟子、漢土に渡りては又天台、眞言の明師に値ひてありしかども、二宗の勝劣は思ひ定めざりけるか。或は眞言勝れ、或は法華勝れ、或は理同事勝等云云。宣旨を申し下すには、二宗の勝劣を論ぜ

【二〇】慈覺、智證の義を難じ、其の謗法を責む。

【法護三藏】正法華經の譯者。

ん人は違敕の者と戒められたり。此等は皆自語相違といひぬべし、他宗の人はよも用ゐじと見えて候。但し『二宗齊等』とは、先師傳教大師の御義と、宣旨に引き載せられたり。抑も傳教大師何れの書に書かれて候ぞや、此事能く能く尋ぬべし。

【二〇】慈覺、智證と日蓮とが、傳教大師の御事を不審申すは、親に値うての年爭い、日天に値ひての目比べにては候へども、慈覺、智證の御方人をせさせ給はん人人は、分明なる證文を構へさせ給ふべし。詮ずる所は信を取らんが爲なり。玄奘三藏は月氏の『婆沙論』を見たりし人ぞかし。天竺に渡らざりし寶法師に責められにき。法護三藏は印度の『法華經』をば見たれども、『囑累』の先後をば漢土の人見ねども、誤りといひしぞかし。設ひ慈覺、傳教大師に値ひ奉りて習ひ傳へたりとも、智證、義眞和尚に口決せりといふとも、傳教、義眞の正文に相違せば、豈に不審を加へざらん。傳教大師の『依憑集』と申す文は大師第一の祕書なり。彼の書の序に云く『新來の眞言家は則ち筆授の相承を泯ぼし、舊到の華嚴家は即ち影響の軌模を隱し、沈空の三論宗は彈呵の屈恥を忘れて稱心の醉を覆ひ、著有の法相は僕陽の歸依を非みし、青龍の判經を撥ふ等。乃至、謹んで依憑集一卷を著はして同我の後哲に贈る。其の時興ること、日本第五十二葉弘仁の七丙申の歳なり。』云云。次下の正宗に云く『天竺の名僧、大唐天台の教迹最も邪正を簡ぶに堪へたりと聞きて、渇仰して訪問す。』云云。次下に云く『豈に中國に法を失うて、之を四維に求むるにあらずや。而かも此方に識ること有る者少し、魯人の如き耳。』等云云。此書は法相、三論、華嚴、

【魯人】魯人が自國の孔聖を知らざりしより不明迂愚の意に用ふ。

眞言の四宗を責めて候文なり。天台、眞言の二宗同一味ならば、爭でか責め候べき。而も不空三藏等をば、魯人の如しなんど書かれて候。善無畏、金剛智、不空の眞言宗秀逸じくば、爭でか魯人と惡口あるべき。又天竺の眞言が天台宗に同じきも、又勝れたるならば、天竺の名僧爭でか不空に誂へ、中國に正法なしとはいふべき。それは如何にもあれ、慈覺智證の二人は、言は傳教大師の御弟子とは名告らせ給へども、心は御弟子にあらず。其故に此書に云く、「謹んで依憑一卷を著はして、同我の後哲に贈る」等云云。同我の二字は、眞言宗は天台宗に劣ると習ひてこそ同我にてはあるべけれ。我と申し下さるを宣旨に云く「專ら先師の義に違ひ偏執に心を成す」等云云。又云く「凡そ厥れ師資の道、一を闕きても不可なり」等云云。此の宣旨の如くならば、慈覺、智證こそ專ら先師に背く人にては候へ。斯う責め候も恐れにては候へども、此を責めずば「大日經」、「法華經」の勝劣破れなんと存じて、命を的に懸けて責め候なり。此の二人の人人の弘法大師の邪義を責め候はざりけるは、最も道理にて候ひけるなり。されば粮米を盡し人を煩はして、漢土へ渡らせ給はんよりは、本師傳教大師の御義を能く能く盡させ給ふべかりけるにや。されば叡山の佛法は、但だ傳教大師、義眞和尚、圓澄大師の三代ばかりにてやありけん。天台の座主已に眞言の座主に移りぬ。名と所領とは天台山、其主は眞言師なり。されば慈覺大師、智證大師は、已今當の經文を破らせ給ふ人なり。已今當の經文を破らせ給はば、豈に釋迦、多寶、十方の諸佛の怨敵にあらずや。弘法大師こそ第一の謗法の人と思ふに、これは其に

【二】所持の經第一ならば能持の人も第一なることを說く。

は似るべくもなき僻事なり。其故は、水火天地なる事は、僻事なれども人用ふる事なければ、其の僻事成ずる事なし。弘法大師の御義は餘り僻事なれば、弟子等も用ふる事なし。事相ばかりは其門家なれども、其教相の法門は、弘法の義言ひ難き故に、善無畏、金剛智、不空、慈覺、智證の義にてあるなり。慈覺、智證の義こそ、眞言と天台とは、理同なりなんど申せば、皆人然もやと思ふ。斯う思ふ故に事勝の印と眞言とに付いて、天台宗の人人、畫像木像の開眼の佛事を奪はんが爲に、日本一同に眞言宗に落ちて、天台宗は一人も無きなり。例せば法師と尼と、黑きと青きとは紛ひぬべければ、眼暗き人はあやまつぞかし。僧と男と、白と赤とは眼暗き人も迷はず、況んや眼明なる者をや。慈覺、智證の義は、法師と尼と、黑きと青きとが如くなる故に、智人も迷ひ、愚人も誤り候うて、此の四百餘年が間は、叡山、園城、東寺、奈良、五畿七道、日本一州、皆謗法の者となりぬ。

【三】抑も『法華經』の第五に、『文殊師利、此法華經は諸佛如來の祕密の藏なり。諸經の中に於て、最も其上に在り』云云。此の經文の如くならば、『法華經』は『大日經』等の衆經の頂上に住し給ふ正法なり。さるにては善無畏、金剛智、不空、弘法、慈覺、智證等は此の經文をば如何會通せさせ給ふべき。『法華經』の第七に云く、『能く是の經典を受持すること有らん者も、亦復是の如し。一切衆生の中に於て、亦爲れ第一なり』等云云。此の經文の如くならば、『法華經』の行者は川流江河の中の大海、衆山の中の須彌山、衆星の中の月天、衆明の中の大日天、轉輪王帝釋諸王の中の大梵王なり。傳教大師の『秀句』と

【三】三國に於て法華經の行者は、釋尊、天台、傳教の三人なるを說く

申す書に云く、『此經も亦復是の如し。乃至、諸の經法の中に、最も爲れ第一なり。能く是の經典を受持すること有らん者も、亦復是の如し。一切衆生の中に於て、亦爲れ第一なり。已上經文なり』と引き載せさせ給ひて、次下に云く、『天台法華玄に云く等云云。已上玄文』と書かせ給ひて、上の心を釋して云く『當に知るべし、他宗所依の經は未だ最も爲れ第一ならず。其の能く經を持つ者も、亦未だ第一ならず。天台法華宗所持の『法華經』は、最も爲れ第一なり。故に能く法華を持つ者も、亦衆生の中の第一なり。已に佛說に據る豈に自歎ならんや』等云云。次下に讀る、釋に云く、『委曲の依憑、具さに別卷あるなり』等云云。『依憑集』に云く、『今吾が天台大師法華經を說き、法華經を釋すること群に特秀し、唐に獨步す。明かに知んぬ、如來の使なり。讃むる者は福を安明に積み、謗る者は罪を無間に開く』等云云。『法華經』、天台、妙樂、傳教の經釋の心の如くならば、今日本國には『法華經』の行者は一人も無きぞかし。

【三】月氏には教主釋尊、『寶塔品』にして、一切の佛を集めさせ給ひて、大地の上に居せしめ、大日如來ばかり寶塔の中の南の下座に居ゑ奉りて、教主釋尊は北の上座に着かせ給ふ。此の大日如來は『大日經』の胎藏界の大日、『金剛頂經』の金剛界の大日の主君なり。兩部の大日如來を郎從等と定めたる、多寶佛の上座に、教主釋尊居させ給ふ。此れ卽ち『法華經』の行者なり。天竺斯の如し。漢土には陳帝の時、天台大師南北に攻め勝ちて、現身に大師となる。『群に特秀し、唐に獨步す』といふ是れなり。日本國には傳教大師六宗

に攻る事もこそ、日本の始め第一の根本大師となり給ふ。月氏、漢土、日本に但だ三人ばかりこそ、於一切衆生中、亦為第一にては候へ。然れば「浅きは易く深きは難きは釈迦の所判なり。浅きを去つて深きに就くは、丈夫の心なり。天台大師は釈迦に信順して、法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承して、法華宗を助けて日本に弘通す」等云云。仏滅後一千八百余年が間に、「法華経」の行者、漢土に一人、日本に一人、已上二人、釈尊を加へ奉りて已上三人なり。外典に云く、聖人は一千年に一たび出で、賢人は五百年に一たび出づ。黄河は涇渭流れを分けて、五百年には半河清み、千年には共に清むと申すは、一定にて候ひける。

【三】 然るに日本国は叡山ばかりに伝教大師の御時法華経の行者ましましけり。義真、円澄は第一第二の座主なり。第一の義真計りは、伝教大師に似たり。第二の円澄は半ばは伝教の御弟子、半ばは弘法の弟子なり。第三の慈覚大師は、始めは伝教大師の御弟子に似たり。御年四十にて漢土に渡りてより、名は伝教の御弟子、其の跡をばつがせ給へども、法門は全く御弟子にはあらず。而れども円頓の戒ばかりは、又御弟子に似たり。蝙蝠鳥の如し。鳥にもあらず、鼠にもあらず。梟鳥禽、破鏡獣の如し。「法華経」の父を食ひ、持者の母を噛めるなり。日を射ると夢に見し是れなり。されば死去の後は墓なくて止みぬ。智証の門家園城寺と慈覚の門家叡山と、修羅と悪竜と合戦暇なし。園城寺を焼き、叡山を焼く。智証大師の本尊の慈氏菩薩も焼けぬ、慈覚大師の本尊、大講堂も焼けぬ、現身に無間地獄を

【三】伝教大師の後、叡山諸法の山と化して跡なきを述ぶ。

【梟鳥禽】ふくろふのこと。

【破鏡獣】親を食ふといふ獣類。

【慈氏】弥勒の譯。

【一四】弘法大師の跡、謗法の罪によつて紛爭滅亡せるを述ぶ。

【尼犍】尼犍子の塔。

感ぜり。但だ中堂ばかり殘れり。

【一四】弘法大師も亦跡なし。弘法大師の云く『東大寺の受戒せざらん者をば東寺の長者とすべからず』等の御誡めの状あり。而れども寛平法皇は仁和寺を建立して、東寺の法師を移して『我が寺には叡山の圓頓戒を持たざらん者をば住せしむべからず』と、宣旨分明なり。されば今の東寺の法師は鑑眞が弟子にもあらず、弘法の弟子にもあらず、戒は傳教の御弟子なり。又傳教の御弟子にもあらず、傳教の『法華經』を破失す。去ぬる承和二年三月二十一日に死去ありしかば、公家より遺體をば葬らせ給ひ、其の後誑惑の弟子等集りて御入定と云云。或は髪を剃りて參らするぞといひ、或は三鈷を漢土より投げたりといひ、或は日輪夜中に出たりといひ、或は現身に大日如來となりたりといひ、或は傳教大師に十八道を教へ參らせたりといひて、師の徳を擧げて智慧に代へ、我が師の邪義を扶けて王臣を誑惑するなり。又高野山に本寺、傳法院といひし二つの寺あり。本寺は弘法の建てたる大塔、大日如來なり。傳法院と申すは正覺房の立てし金剛界の大日なり。此の本末の二寺晝夜に合戰あり。例せば叡山、園城の如し。誑惑のつもりて日本に二つの禍の出現せるか。糞を集めて栴檀となせども、燒く時は但だ糞の香なり。大妄語を集めて佛と號すとも、但だ無間大城なり。尼犍が塔は數年が間利生廣大なりしかども、馬鳴菩薩の禮を受けて忽ちにくづれぬ。鬼辯婆羅門が帷は多年人を誑らかせしかども、阿濕縛窶沙菩薩に責められて破れぬ。拘留外道は石となつて八百年、陳那菩薩に責められて水となりぬ。道士は漢土

を誑らかすこと数百年、[illegible]、竺国に貴められて仙経も焼けり、趙高が国を取りし、王莽が位を奪ひしが如く、『法華経』の位を取って『大日経』の所領とせり。法王すでに国に失せぬ、人王豈に安穏ならんや。」

【三五】日本一同に謗法の國となれるを說き、謗法を責めて諸難に遭ふ所以を述ぶ。

【廻心】捨邪取正の心。

報恩鈔　下

【三五】「日本國は慈覺、智證、弘法の流なり、一人として謗法ならざる人はなし。但し事の心を案ずるに、大莊嚴佛の末、一切明王佛の末法の如し。威音王佛の末法には改悔ありしすら、猶は千劫阿鼻地獄に墮つ。何に況んや、日本國の眞言師、禪宗、念佛者等は、一分の廻心なし、是の如く展轉して無數劫に至る」こと疑ひなきものか。斯る謗法の國なれば、天も棄てぬ。天棄つれば舊き守護の善神も、祠を燒いて寂光の都へ歸り給ひぬ。但だ日蓮ばかり留まり居て告げ示せば、國主これをあだみ、數百人の民に或は罵詈、或は惡口、或は杖木、或は刀刃、或は宅宅ごとに塞き、或は家家ごとに逐ふ。これに叶はねば我と手を下して、二度まで流罪あり。去ぬる文永八年九月の十二日に頸を切らんとす。『最勝王經』に云く、「惡人を愛敬し、善人を治罰するに由るが故に、他方の怨賊來つて、國人喪亂に遭ふ。」等云云。『大集經』に云く、「若は復、諸の刹利國王有つて、諸の非法を作して、世尊の聲聞の弟子を惱亂し、若は以て罵詈し、刀杖もて打斫し、及び衣鉢種種の資具を奪ひ、若は他の給施せんに留難を作さば、我等彼をして自然に他方の怨敵を卒起せしめん。及び自ら國土も亦、兵起り、病疫飢饉し、非時の風雨、鬪諍、言訟せしめん。又其王をして久しからざらしめ、復當に己が國を亡失せしむべし。」等云云。此等の如きは、

【二九】謗法の國には内外の國難競ひ來ることを述ぶ。

日蓮此國に無くば、佛は大妄語の人、阿鼻地獄はいかで脱れ給ふべき。

【二九】去ぬる文永八年九月十二日に、平左衛門尉並に數百人に向つて云く、日蓮は日本國の柱なり、日蓮を失ふ程ならば、日本國の柱を倒すになりぬ、等云云。此の經文に智人を國主等、若は惡僧等が讒言により、若は諸人の惡口に依て失にあつるならば、俄に軍起り、又大風吹かせ他國より攻むべし等云云。去ぬる文永九年二月の同士軍、同じき十一年の四月の大風、同じき十月に大蒙古の來りしは、偏へに日蓮が故にあらずや。況んや前よりこれを勘へたり、誰の人か疑ふべき。弘法、慈覺、智證の誤り、並びに禪宗と念佛宗との禍相起りて、逆風に大波起り、大地震の重なるが如し。されば漸く國衰ふ。太政入道が國を押へ、承久に王位盡き果てて、世東に移りしかども、但だ國中の亂れにて、他國の攻めはなかりき。彼は謗法の者は國に充滿せりといへども、支へ顯はす智人なし。かるが故に平なりき。譬へば師子の眠れるは、手を附けざれば吠えず。迅き流は櫓を支へざれば波高からず、盗人は止めざれば怒らず。火は薪を加へざれば熾んならず。謗法はあれども顯はす人なければ國も穩かなるに似たり。例せば日本國に佛法渡り初めて候ひしに、始めは何事もなかりしかども、守屋佛を燒き僧をいましめ堂塔を燒きしかば、天より火の雨ふり、國に疱瘡起り、兵亂續きしが如し。此はそれには似るべくもなし。謗法の人人も國に充滿せり。日蓮が大義も强く攻め懸かる。修羅と帝釋と、佛と魔王との合戰にも劣るべからず。『金光明經』に云く、「時に隣國の怨敵是の如きの念を起さん、當に四兵を具して、

【云云】省略法也。

【二七】末法には謗法者多數にて正法を信ずる者は少數なるを說く。

彼の國土を壞るべし。』等云云。又云く、『時に王見已つて、即ち四兵を嚴ほひ、彼の國に發向し、討罰を爲さんと欲す。我等爾の時に當に眷屬無量無邊の藥叉、諸神と、各形を隱して爲に護助を作し、彼の怨敵をして自然に降伏せしむべし。』等云云。『最勝王經』の文、又斯の如し。『大集經』云云。『仁王經』云云。此等の經文の如きんば、正法を行ずる者を國主あだみ、邪法を行ずる者の方人せば、大梵天王、帝釋、日月、四天等隣國の賢王の身に入り替りて、其國を攻むべしと見ゆ。例せば訖利多王を雪山下王の攻め、大族王を幻日王の失ひしが如し。訖利多と大族とは月氏の佛法を失ひし王ぞかし。漢土にも佛法を滅せし王、皆賢王に攻められぬ。此は彼には似るべくもなし。佛法の方人なるやうにて、佛法を失ふ法師の方人をする故に、愚者は總て知らず。智者なんども常の智人は知り難し。天も下劣の天人は知らずやあるらん。されば漢土、月氏の古の亂れよりも大きなるべし。

【二七】『法滅盡經』に云く、『吾般泥洹の後、五逆濁世に、魔道興盛し、魔沙門と作つて吾道を壞亂せん。』乃至、惡人轉た多く、海中の沙の如く、善者甚だ少くして、若は一、若は二。』云云。『涅槃經』に云く、『是の如き等の涅槃經典を信ずる者は、爪上の土の如く、乃至、是の經を信ぜざる者は、十方界の所有の地土の如し。』等云々。此經文は、予が肝に染みぬ。當世日本國には我も『法華經』を信じたり、信じたり、諸人の語の如きんば、一人も謗法の者なし。此經文には、末法に謗法の者十方の地土、正法の者爪上の土』等云云。經文

【三八】衆生成佛は法華經に限ることを說く、法華と諸經を相對的地位に置くは尚ほ謗法なるを力說す。先づ嘉祥、慈恩の謗法を擧ぐ。

と世間とは水火なり。世間の人云く、『日本國には日蓮一人ばかり謗法の者』等云云。又經文には大地せり。『法滅盡經』には、『善者一二人。』『涅槃經』には、『信者爪上土』等云云。經文の如くならば、日本國は但だ日蓮一人こそ爪上土一二人にては候へ。經文をか用ゆべき。世間をか用ゆべき。」

【三八】問うて云く、『涅槃經』の文には、『涅槃經の行者は爪上の土』等云云。汝が義には、『法華經』等云云。如何。答へて云く、『涅槃經』に云く、『法華の中の如し。』等云云。妙樂大師云く、『大經自ら法華を指して極と爲す。』等云云。大經と申すは『涅槃經』なり。『涅槃經』には『法華經』を極と指して候なり。而るを涅槃宗の人の、『涅槃經』を『法華經』に勝ると申せしは、主を所從といひ下郎を上郎といひし人なり。『涅槃經』を讀むと申すは、『法華經』を讀むを申すなり。譬へば賢人は國主を重んずる者をば、我を下ぐれども悅ぶなり。『涅槃經』は『法華經』を下げて我を讃むる人をば、強ちに敵と憎ませ給ふ。此の例を以て知るべし。『華嚴經』、『觀經』、『大日經』等を讀む人も、『法華經』を劣ると讀まば、彼彼の經經の心には背くべし。此を以て知るべし。『法華經』を讀む人の、此經をば信ずるやうなれども、諸經にても得道成ると思ふは、此經を讀まぬ人なり。例せば嘉祥大師は『法華玄』と申す文十卷造りて、『法華經』をほめしかども、妙樂彼を責めて云く、毀り其の中に在り、何ぞ弘讃と成らん。』等云云。『法華經』を破る人なり。されば嘉祥は落ちて天台に仕へて、『法華經』を讀まず。我經を讀むならば、惡道免がれじとて、七年まで

身を橋とし給ひき。慈恩大師は『玄贊』と申して、『法華經』をほむる文十卷あり。傳教大師責めて云く、「『法華經』を讃むると雖も、還つて法華の心を死す」等云云。此等を以て思ふに、『法華經』を讀み讃歎する人人の中に、無間地獄は多く有るなり。嘉祥、慈恩すでに一乘誹謗の人ぞかし。弘法、慈覺、智證、豈に『法華經』蔑如の人にあらずや。嘉祥大師の如く、講を廢し衆を散じて、身を橋となせしも、猶已前の『法華經』誹謗の罪や消えざるらん。不輕輕毀の者は、不輕菩薩に信伏隨從せしかども、重罪未だ殘りて、千劫阿鼻に墮ちぬ。されば弘法、慈覺、智證等は、設ひ飜す心ありとも、尚ほ『法華經』を讀むならば、重罪消え難し。況んや飜る心なし。又『法華經』を失ひ、眞言教を晝夜に行ひ、朝暮に傳法せしをや。世親菩薩、馬鳴菩薩は小を以て大を破せる罪をば、舌を切らんとこそせしか。世親菩薩は佛說なれども、『阿含經』をば戯れにも舌の上に置かじと誓ひ、馬鳴菩薩は懺悔の爲に『起信論』を造りて、小乘を破り給ひき。嘉祥大師は天台大師を請じ奉りて百餘人の智者の前にして、五體を地に投げ、遍身に汗を流し、紅の涙を流して、今よりは弟子を見じ、『法華經』を講せじ、弟子の面を守り『法華經』を讀み奉れば、我が力の此經を知るに似たりとて、天台よりも高僧老僧にて在せしが態と人の見る時、負ひ參らせて河を越え高座に近附きて、背に乘せ參らせて高座に上せ奉り、結句御臨終の後には、隋の皇帝に參り給ひて、小兒が母に後れたるが如くに、足を摺りて泣き給ひしなり。嘉祥大師の『法華玄』を見るに、甚う『法華經』を謗じたる疏にはあらず。但だ『法華經』

【一九】善無畏三藏の謗法を擧ぐ。

【今此三界】譬喩品の有名なる主師親三德の文。

【畏】善無畏の略。

と諸大乘經とは、門は淺深あれども、心は一とを書きてこそ候へ。これが謗法の根本にて候か。華嚴の澄觀も、眞言の善無畏も、『大日經』と『法華經』とは理は一つとこそ書かれて候へ。誹謗科あらば、善無畏三藏も脫れ難し。

【一九】されば善無畏三藏は中天の國主なり。位を捨てて他國に至り、殊勝・招提の二人に遭ひて『法華經』を受け、百千の石の塔を立てしかば、『法華經』の行者とこそ見えしか。然れども『大日經』を習ひしより以來、『法華經』を『大日經』に劣るとや思ひけん、始めは甚う其義もなかりけるが、漢土に渡りて玄宗皇帝の師となりぬ。天台宗を猜み思ふ心つき給ひけるかの故に、忽に頓死して、二人の獄卒に鐵の繩七つ附けられて、閻魔王宮に到りぬ。命未だ盡きずといひて返されしに、法華經謗法とや思ひけん、眞言の觀念、印、眞言等をば投棄てて、『法華經』の『今此三界』の文を唱へて、繩も切れ返され給ひぬ。又雨の祈りを仰せ付けられたりしに、忽に雨は下りたりしかども、大風吹きて國を損ふ。結句死し給ひてありしには、弟子等集りて臨終いみじきやうを讚めしかども、無間大城に墮ちにき。問うて云く「何を以てかこれを知る。」答へて云く「彼の傳を見るに云く、『今畏の遺形を觀るに、漸く加す縮小し、黑皮隱隱として、骨其れ露はなり』等云云。彼の弟子等は死後に地獄の相の顯はれたるを知らずして、德を揭ぐると思へども、書き著はせる筆は、畏が失を書けり。死してありければ身漸く縮まり小さく、皮は黑し、骨露はなり等云云。人死して後色の黑きは地獄の業と定むる事は佛陀の金言ぞかし。善無畏三藏の地獄の業は

【三〇】金剛智、不空三藏の惡法を擧ぐ。

【智】金剛智の略。

何事ぞ。幼少にして位を棄てぬ、第一の道心なり。月氏五十餘箇國を修行せり。慈悲の餘りに、漢土に渡れり。天竺、震旦、日本、一閻浮提の內に眞言を傳へ鈴をふる、此人の德にあらずや、如何にして地獄に墮ちけると、後生を思はん人人は御尋ねあるべし。

【三〇】又金剛智三藏は南天竺の大王の太子なり。『金剛頂經』を漢土に渡す。其の德善無畏の如し、又互に師となれり。而るに金剛智三藏勅宣によつて雨の祈りありしかば、七日が中に雨下つて、天子大に悅ばせ給ふほどに、忽に大風吹き來る。王臣等興覺め給ひて、使を附けて追はせ給ひしかども、兎角して留まりし程に、結句は姬宮の御死去ありしに祈りをなすべしとて、身の代に殿上の二人の女子七歲になりしを、薪に積み込めて燒き殺せし事こそ、無慚には覺ゆれ。而れども姬宮も蘇生り給はず。不空三藏は金剛智と、月支より御供せり。此等の事を不審とや思ひけん。畏と智と入滅の後、月支に還りて、龍智に値ひ奉り、眞言を習ひ直し、天台宗に歸伏してありしが、心ばかりは歸れども、身は還る事なし。雨の御祈り受けたりしが、三日と申すに雨下る。天子悅ばせ給ひて我と御布施ひかせ給ふ。須臾ありしかば、大風落ち下りて、內裏をも吹き破り、雲閣月卿の宿所一所もあるべしとも見えざりしかば、天子大に驚かせ給ひき、宣旨なりて風を止めよとありしかども、且らくありては又吹き、又吹きせしほどに、數日が間止むことなし。結句は使を附けて追うてこそ、風も止みてありしか。此三人の惡風は、漢土日本の一切の眞言師の大風なり。さにてあるやらん。去ぬる文永十一年四月十二日の大風は、阿彌陀堂加賀法印、東

【三一】弘法大師の惡法を説く。

【三二】慈覺大師の惡法謗法を擧ぐ。

寺第一の智者の雨の祈りに、吹きたりし逆風なり。善無畏、金剛智、不空の惡法を、少しも違へず傳へたりけるか。心にくし、心にくし。

【三一】弘法大師は去ぬる天長元年の二月、大旱魃のありしに、先には守敏祈雨して、七日が内に雨を下す。但だ京中に雨りて、田舍に灑がず。次に弘法承取りて、一七日に雨氣なし、二七日に雲なし。三七日と申せしに、天子より和氣の眞綱を使者として、御幣を神泉苑に參らせたりしかば、雨下ること三日。此をば弘法大師並びに弟子等、此の雨を奪ひ取り、我が雨として、今に四百餘年、弘法の雨といふ。慈覺大師の夢に日輪を射しと、弘法大師の大妄語に云く、弘仁九年の春大疫を祈りしかば、夜中に大日輪出現せりと云云。成劫より已來、住劫の第九の減、已上二十九劫が間に、日輪夜中に出でしといふ事なし。

【三二】慈覺大師は夢に日輪を射るといふ。内典五千七千、外典三千餘卷に、日輪を射ると夢に見るは、吉夢といふ事ありや否や。修羅は帝釋を寇みて日天を射奉る。其矢却りて我が眼に立つ。殷の紂王は日天を的に射て身を亡す。日本の神武天皇の御時、度美長と五瀨命と合戰ありしに、命の手に矢たつ。命の云く、我はこれ日天の子孫なり。日に向ひ奉りて弓をひく故に、日天の責めを蒙れりと云云。阿闍世王は佛に歸し參らせて、内裏に返りて御寢なりしが、驚いて諸臣に向つて云く、日輪天より地に落つと夢にみる。諸臣の云く、佛の御入滅か云云。須跋陀羅が夢又斯の如し。我國は殊に忌むべき夢なり。神をば天照といふ。國をば日本といふ。又教主釋尊をば日種と申す。摩耶夫人日を孕むと夢に

【楊柳房】善導のこと、楊柳より投身して死せるより斯くいふ。

【三】重ねて弘法大師の誑惑を評述す。

【心經】般若心經の略。

見て、擧げ給へる太子なり。慈覺大師は大日如來を叡山に立て、釋迦佛を棄て眞言の三部經を崇めて、『法華經』の三部の敵となせし故に、此の夢出現せり。例せば漢土の善導が始めは密州の明勝といひし者に値うて、『法華經』を讀みたりしが、後には道綽に値うて、『法華經』を棄て『觀經』に依りて疏を造り、『法華經』をば『千中無一』念佛をば『十卽十生、百卽百生』と定めて、此義を成ぜんが爲に、阿彌陀佛の御前にして祈誓をなす。佛意に叶ふや否や『毎夜夢の中に常に一人の僧ありて、來つて指授す。』と云云。乃至『一ら經法の如くせよ。乃至觀念法門經等』云云。『法華經』には、『若し法を聞く者あれば、一として成佛せざるなし。』と。善導は、『千の中に一も無し。』等云云。『法華經』と善導とは水火なり。善導は『觀經』をば『十卽十生、百卽百生』、『無量義經』に云く、『觀經は未だ眞實を顯さず。』等云云。『無量義經』と楊柳房とは天地なり。此を阿彌陀佛の僧となりて、來つて眞なりと證せば、豈に眞ならんや。抑も阿彌陀は『法華經』の座に來りて舌をば出し給はざりけるか。觀音、勢至は『法華經』の座にはなかりけるか。此をもて思へ、慈覺大師の夢は禍なり。」

【三】問うて云く、「弘法大師の『心經の秘鍵』に云く、『時に弘仁九年の春、天下大疫す。爰に皇帝自ら黄金を筆端に染め、紺紙を爪掌に握つて、『般若心經』一卷を書寫し奉り給ふ。予講讀の撰に範て、經旨の宗を綴る。未だ結願の詞を吐かざるに、蘇生の族途に彳む。夜變じて日光赫赫たり。是れ愚身の戒徳にあらず。金輪御信力の所爲なり。

【入我我入】主客一如のこと。
【即身頓證】即身成佛のこと。

但だ精舎に詣でん輩は、此の秘鍵を酌し奉れ。昔、予、鷲峯説法の莚に陪して親り其の深文を聞き奉りき。豈に其の義に達せざらんのみ。」等云云。又『孔雀經の音義』に云く、「弘法大師歸朝の後、眞言宗を立てんと欲し、諸宗を朝廷に群集す、即身成佛の義を疑ふ。大師智拳の印を結んで南方に向ふに、面門俄に開けて、金色の毘盧遮那と成り、即ち本體に還歸す。入我我入の事、即身頓證の疑ひ、此日釋然たり。然るに眞言瑜伽の宗、秘密曼荼羅の道、彼の時よりして建立しぬ。」又云く、「此時に諸宗の學徒大師に歸して、始めて眞言を得て、請益し習學す。三論の道昌、法相の源仁、華嚴の道雄、天台の圓澄等、皆其の類なり。」弘法大師の傳に云く、「歸朝泛舟の日、發願して云く、我が所學の教法若し感應の瑞あらば、此の三鈷其處に到るべしと。仍て日本の方に向つて三鈷を擲げ上ぐ、遙に飛んで雲に入る。十月に歸朝す。」云云。又云く、「高野山の下に入定の所を占む。乃至、彼の海上の三鈷、今新に此に在り。」等云云。此れ大師の徳無量なり、其の兩三を示す。斯の如くの大徳あり、いかんが此人を信ぜずして却りて阿鼻地獄に墮つると云はんや。」答へて云く、「予も仰いで信じ奉る事斯の如し。但し古の人人も不可思議の徳ありしかども、佛法の邪正は其にはよらず、外道が或は恒河を耳に十二年留め、或は大海を吸ひ干し、或は日月の手を握り、或は釋子を牛羊となしなんどせしかども、彌大慢を起して、生死の業とこそなりしか。此をば天台云く『名利を邀め見愛を増す』とこそ釋せられて候へ。光宅が忽ちに雨を下らし、須臾に花を感ぜしも、妙樂は『感應此の如くなれども、猶ほ理に稱は

【成劫、住劫】世界の生成破壞の四期たる四劫(成、住、壞、空)の初二つ。

【淫女】泉式部を指す。

【破戒の法師】能因法師のこと。

ず。』とこそ書かれて候へ。されば天台大師の『法華經』を讀みて、須臾に甘雨を下せ、傳教大師の三日が内に甘露の雨を下らして在せしも、其を以て佛意に叶ふとは仰せられず。弘法大師如何なる徳ましますとも、『法華經』を『戯論の法』と定め、釋迦佛を『無明の邊域』と書かせ給ふ御筆は、智慧賢からん人は用ゆべからず。何に況んや上に擧げられて候徳どもは、不審ある事なり。『弘仁九年の春天下大疫す』等云云。春は九十日、何れの月何れの日ぞ。是れ一。又弘仁九年には大疫ありけるか。是れ二。又『夜變じて日光赫赫たり』と云云。此事第一の大事なり。弘仁九年は嵯峨天皇の御宇なり。左史右史の記に載せたりや。是れ三。設ひ載せたりとも信じ難き事なり。成劫二十劫、住劫九劫、已上二十九劫が間に未だ無き天變なり。夜中に日輪の出現せる事如何。又如來一代の聖教にも見えず。未來に夜中に日輪出づべしとは、三皇五帝の三墳五典にも載せず。佛經の如きんば、滅劫にこそ二つの日、三つの日、乃至七つの日は出づべしとは見ゆれども、彼れは晝の事ぞかし。夜日出現せば、東西北の三方は如何。設ひ内外の典に記せずとも、現に弘仁九年の春、何れの月、何れの日、何れの夜、何れの時に日出づるといふ公家、諸家、叡山等の日記あるならば、少し信ずる邊もや有りなん。次下に『昔予鷲峰說法の筵に陪して親り其の深文を聞き奉る。』等云云。此筆は人に信ぜさせしめんが爲に、權へ出す大妄語か。されば靈山にして『法華』は戯論、『大日經』は眞實と佛の說き給ひけるを、阿難、文殊が誤りて、『妙法華經』をば眞實と書けるか如何。言ふに效なき淫女、破戒の法師等が歌を詠みて降

【謀書】偽書のこと。

らす雨を、三七日まで下らさざりし人は、斯る徳あるべしや。是れ同じ『孔雀經の音義』に云く『大師智拳の印を結んで南方に向ふに、面門俄に開けて金色の毘盧遮那となる。』等云云。此れ又何れの王、何れの年時ぞ。漢土には建元を初めとし、日本には大寶を初めとして、緇素の日記、大事には必ず年號のあるが、是ほどの大事に爭でか王も臣も、年號も日時もなきや。又次に云く『三論の道昌、法相の源仁、華嚴の道雄、天台の圓澄』等云云。抑も圓澄は寂光大師、天台第二の座主なり。其時何ぞ第一の座主義眞、根本の傳教大師は召さざりけるや。圓澄は天台第二の座主、傳教大師の御弟子なれども、又弘法大師の弟子なり。弟子を召さんよりは、三論、法相、華嚴よりは、天台の傳教、義眞の二人を召すべかりけるか。而も此の日記に云く『眞言瑜伽の宗、祕密曼荼羅彼時よりして建立す。』等云云。此筆は傳教、義眞の御存生かと見ゆ。弘法は平城天皇大同二年より弘仁十三年までは、盛に眞言を弘めし人なり。此時は此の二人現に在します。又義眞は天長十年まで在せしかば、其時まで弘法の眞言は弘まらざりけるか。旁不審なり。『孔雀經の疏』は弘法の弟子、眞濟が自記なり、信じ難し。又邪見の者が公家、諸家、圓澄の記を引かるべきか。又道昌、源仁、道雄の記を尋ぬべし。『面門俄に開けて、金色の毘盧遮那と成り』等云云、面門とは口なり、口の開けたりけるか、眉間開くと書かんとしけるが、誤りて面門と書けるか。謀書を作る故に、斯る誤りあるか。『大師智拳の印を結んで南方に向ふに、面門俄に開けて金色の毘盧遮那と成る。』等云云。『涅槃經』の六に曰く『迦葉、佛に白して言さく、世尊、我

【三四】邪法の祈禱無効のことを述ぶ。

今是の四種の人に依らず。何を以ての故に、瞿師羅經の中の如き、佛瞿師羅の爲に說き給はく、若し天、魔、梵、破壞せんと欲するが爲に、變じて佛の像と爲り、三十二相、八十種好を具足し莊嚴し、圓光一尋、面部圓滿なること、猶ほ月の盛明なるが如く、眉間の毫相白きこと珂雪に踰え、乃至左の脇より水を出し、右の脇より火を出す」等云云。又七の卷に云く『佛迦葉に告げ給はく、我般涅槃して、乃至後是の魔波旬、漸く當に我が正法を沮壞すべし。乃至、化して阿羅漢の身、及び佛の色身となる。魔王此の有漏の形を以て無漏の身となり、我が正法を壞らん」等云云。弘法大師は『法華經』を『華嚴經』、『大日經』に對して戲論等云云。而も佛身を現ず。此れ『涅槃經』には魔有漏の形を以て佛となつて、我が正法を破らんと說き給ふ。『涅槃經』の正法は『法華經』なり。故に經の次下の文に云く『久く已に成佛す。」又云く「法華の中の如し」等云云。釋迦、多寶、十方の諸佛は、一切經に對して『法華經』は眞實、『大日經』等の一切經は不眞實等云云。弘法大師は佛身を現じて、『華嚴經』、『大日經』に對して『法華經』は戲論等云云。佛說眞ならば、弘法は天魔にあらずや。又三鈷の事、殊に不審なり。漢土の人の日本に來りて、掘出すとも信じ難し、已前に人をや遣はして埋みけん。況うや弘法は日本の人、斯る誑亂其數多し。此等を以て佛意に叶ふ人の證據とは知り難し。

【三四】されば此の眞言、禪宗、念佛等、漸く斯うなり來たる程に、人王八十二代尊成隱岐の法王、權太夫殿を失はんと、年來勵ませ給ひける故に、國主なれば何となくとも、師

【三五】謗法を責めて難に遭ふことを再び詳述す。

子王の兎を伏するが如く、鷹の雉を取るやうにこそあるべかりし上、叡山、東寺、園城、奈良七大寺、天照大神、正八幡、山王、加茂、春日等に、數年が間、或は調伏し、或は神に申させ給ひしに、二日三日だにも支へかねて、佐渡國、阿波國、隱岐國等に流し失はせて終に崩れさせ給ひぬ。調伏の上首御室は、東寺をかへらるるのみならず、眼の如く愛せさせ給ひし第一の天童勢多伽が頸切られたりしは、調伏の即「還著於本人」の故とこそ見えて候へ。これは僅の事なり。此後定めて日本の國臣、萬民一人もなく、乾草を積みて火を放つが如く、大山の崩れて谷を埋むるが如く、我國他國に攻めらるる事出來すべし。

【三五】此事日本國の中に、但だ日蓮一人ばかり知りたり。いひ出すならば、殷の紂王の比干が胸を割きしが如く、夏の桀王の龍逢が頸を切るが如く、檀彌羅王の師子尊者が頭を刎ねしが如く、竺の道生が流されしが如く、法道三藏の火印を燒かれしが如くならんずらんと、豫て知りしかども、『法華經』には『我身命を愛せず、但だ無上道を惜む。』と說かれ、『涅槃經』には、「寧ろ身命を喪ふも、教を匿さざれ」と諫め給へり。今度命を惜むならば、何の世にか佛になるべき、又何なる世にか父母師匠をも救ひ奉るべきと、偏へに思ひ切りて申し始めしかば、案に違はず、或は所を追ひ、或は罵り或は撃たれ、或は疵を蒙る程に、去ぬる弘長元年辛酉五月十二日に、御勘氣を蒙りて、伊豆國伊東に流されぬ。又同じき弘長三年癸亥二月廿二日に赦りぬ。其の後菩提心彌盛にして申せば、いよいよ大難重なる事、大風に大波の起るが如し。昔の不輕菩薩の杖木の責め、我身につみ知られたり。覺

【權人、權女房】勢力ある人、勢力ある女房。

德比丘が歡喜佛の末の大難も、此には及ばじと覺ゆ。日本六十六箇國、島二つの中に、一日片時も何れの所に住むべきやうもなし。古は二百五十戒を保つて忍辱なる事、羅云の如くなる持戒の聖人も、富樓那の如くなる智者も、日蓮に値ひぬれば惡口を吐く。正直にして魏徴、忠仁公の如くなる賢者等も、日蓮を見ては理を狂げて非を行ふ。況うや世間の常の人人は犬の猿を見たるが如く、獵師が鹿をこめたるに似たり。日本國の中に一人として故こそあるらめといふ人もなし、道理なり。人毎に念佛を申す、人に向ふごとに念佛は無間に墮つるといふ故に。人毎に眞言を尊む、眞言は國を亡す惡法といふ。國主は禪宗を尊む、日蓮は天魔の所爲といふ故に。我と招ける禍なれば、人の罵るをも咎めず、咎むとても一人ならず。打つをも惜まず、本より存せしが故に。斯う彌彌身を惜まず責めしかば、禪僧數百人、念佛者數千人、眞言師百千人、或は奉行につき或は權人に附き、或は權女房に附き、或は後家尼御前等に附いて、無盡の讒言を作せし程に最後には天下第一の大事、日本國を失はんと呪咀する法師なり、故最明寺殿、極樂寺殿を無間地獄に墮ちたりと申す法師なり、御尋ねあるまでもなし、但だ須臾に頸を召せ。弟子等をば又或は頸を切り、或は遠國に遣はし或は牢に入れよと、尼御前達怒らせ給ひしかば、其の儘行はれけり。去ぬる文永八年辛未九月十二日の夜は、相模國龍口にして切らるべかりしが、如何にしてやありけん其夜は延びて、依智といふ處へ着きぬ。又十三日の夜は赦りたりと多口きしが、又如何にやありけん佐渡の國まで往く、今日切る明日切るといひし程に、四箇年といふに、

【三六】不惜身命の弘通は報恩の爲なるを說き、父母、道善房に其功德を回向せんと願ふ。

結句は去ぬる文永十一年太歳甲戌二月の十四日に赦りて、同じき三月廿六日に鎌倉へ入り、同じき四月の八日、平左衛門尉に見參して、樣樣の事申したりし中に、「今年は蒙古は一定寄すべし」と申しぬ。同じき五月の十二日に鎌倉を出でて、此の山に入れり。

【三六】是は偏へに父母の恩、師匠の恩、三寶の恩、國の恩を報ぜんが爲に、身を傷り命を捨つれどもやぶれざれば、さてこそ候へ。又賢人の習ひ、三度國を諫むるに用ゐずば、山林に交はれといふ事は、定まる例なり。此の功德は定めて上三寶、下梵天、帝釋、日月までも知しめしぬらん。父母も、故道善房の聖靈も、扶かり給ふらん。但し疑ひ念ふ事あり。目連尊者は扶けんと思ひしかども、母の青提女は餓鬼道に堕ちぬ。大覺世尊の御子なれども、善星比丘は阿鼻地獄へ堕ちぬ。これは力のまま救はんと思せども、自業自得果の邊は救ひ難し。故道善房は惜う弟子なれば、日蓮をば憎しとは思せざりけるらめども、極めて臆病なりし上、清澄を離れじと執せし人なり。地頭景信が恐ろしといひ、提婆、瞿伽利に異らぬ圓智、實成が、上と下とに居て嚇せしを、強ちに恐れて、甚惜しと思ふ年頃の弟子等をだにも捨てられし人なれば、後生は如何と疑ふ。但し一つの冥加には、景信と圓智、實成とが先に往きしこそ、一つの助かりとは思へども、彼等は「法華經」の十羅刹の責めをかほりて早く失せぬ。後に少し信ぜられてありしは、嘩ひの後のちぎり木なり、晝の燈火何かせん。其の上如何なる事あれども、子弟子なんどいふ者は不便なる者ぞかし。力なき人にもあらざりしが、佐渡の國まで往きしに、一度も訪はれざりし事は、信じたる

【各各二人】聖人の法兄淨顯房義淨房を指す。

【三七】妙法五字は法華經一部の肝心なるを說く。

にはあらぬぞかし。其に附けても淺ましければ、彼人の御死去と聞くには、火にも入り水にも沈み、走り立ちても往いて御墓をも叩いて、經をも一卷讀誦せんとこそ思へども、賢人の習ひ、心には遁世とは思はねども、人は遁世とこそ思ふらんに、故もなく走り出るならば、末も通らずと人思ふべし。されば如何に思ふとも參るべきにあらず。但し各各二人は日蓮が幼少の師匠にて在します。勤操僧正、行表僧正の傳教大師の恩師たりしが、還りて御弟子とならせ給ひしが如し。日蓮が景信に怨まれて清澄山を出でしに、追ひて忍び出でられたりしは天下第一の『法華經』の侍公なり。後生は疑ひ思すべからず。

【三七】問うて云く、『法華經』一部八卷二十八品の中に、何物か肝心なる。答へて云く、「『華嚴經』の肝心は、大方廣佛華嚴經、『阿含經』の肝心は、佛說中阿含經、『大集經』の肝心は、大方等大集經、『般若經』の肝心は、摩訶般若波羅蜜經、『雙觀經』の肝心は、佛說無量壽經、『觀經』の肝心は、佛說觀無量壽經、『阿彌陀經』の肝心は、佛說阿彌陀經、『涅槃經』の肝心は、大般涅槃經、斯の如くの一切經は皆『如是我聞』の上の題目、其の經の肝心なり。大は大につけ、小は小につけ、題目を以て肝心とす。『大日經』、『金剛頂經』、『蘇悉地經』等、亦復斯の如し。佛も又斯の如し。大日如來、日月燈明佛、燃燈佛、大通佛、雲雷音王佛、此等も又名の内に其の佛の種種の德を具へたり。『法華經』も亦以て斯の如し。『如是我聞』の上の『妙法蓮華經』の五字は、即ち一部八卷の肝心、亦復一切經の肝心、一切の諸佛、菩薩、二乘、天人修羅、龍神等の頂上の正法なり。」

【二八】法華經の題目に非れば功德なきを述ぶ。

【二九】二十八品の肝心は南無妙法蓮華經なること、法華經の題目に勝る題目なきを述ぶ。

【二八】問うて云く、「『南無妙法蓮華經』と心も知らぬ者の唱ふると、『南無大方廣佛華嚴經』と心も知らぬ者の唱ふると斉等なりや、淺深の功德差別せりや。」答へて云く、「淺深等あり。」疑つて云く、「其の心如何。」答へて云く、「小河は露と涓と井と渠と江とをば收むれども大河を收めず。大河は露乃至小河を收むれども、大海を收めず。『阿含經』は井江等、露涓を收めたる小河の如し。『方等經』、『阿彌陀經』、『大日經』、『華嚴經』等は小河を收むる大河なり。『法華經』は露涓井江小河大河天雨等の一切の水を、一滴も漏らさぬ大海なり。譬へば身の熱き者の、大寒水の邊に寢ねつれば涼しく、小水の邊に臥しぬれば苦きが如し。五逆謗法の大一闡提人、『阿含』、『華嚴』、『觀經』、『大日經』等の小水の邊にては、大罪の大熱散じ難し。『法華經』の大雪山の上に臥しぬれば、五逆誹謗一闡提等の大熱忽ちに散ずべし。されば愚者は必ず『法華經』を信ずべし。各各經經の題目は易き事同じといへども、愚者と智者との唱ふる功德は天地雲泥なり。譬へば大綱は大力も切り難し。小力なれども小刀をもつて容易くこれを切る。譬へば堅き石をば鈍き刀を以ては大力も破り難し利き劍をもつては小力も破りぬべし。譬へば藥は知らねども、服すれば病止みぬ、食は服せども病止まず。譬へば仙藥は命を延べ、凡藥は病を癒せども命を延べず。」

【二九】疑つて云く、「二十八品の中に、何れか肝心なる。」答へて云く、「或は云く、品品皆事に隨つて肝心なり。或は云く、『方便品』、『壽量品』肝心なり。或は云く、『方便品』肝心なり。或は云く、『壽量品』肝心なり。或は云く、開示悟入肝心なり。或は云く、實相肝心

【記者】 章安自らのこと。

なり。」問うて云く、「汝が心如何。」答ふ、『南無妙法蓮華經』肝心なり。」「其の證如何。」答へて云く、「阿難文殊等、『如是我聞』等云云。」問うて曰く、「心如何。」答へて云く、「阿難と文殊とは八年が間、此の『法華經』の無量の義を、一句一偈一字も殘さず聽聞してありしが、佛の滅後に結集の時、九百九十九人の阿羅漢が筆を染めてありしに『妙法蓮華經』と書かせて、『如是我聞』と唱へさせ給ひしは、妙法蓮華經の五字は、一部八卷二十八品の肝心にあらずや。されば過去の燈明佛の時より『法華經』を講ぜし、光宅寺の法雲法師は、「如是とは將に所聞を傳へんとして、前題に一部を擧ぐるなり」等云云。靈山にまのあたり聞召してありし、天台大師は、「如是とは所聞の法體なり」等云云。章安大師の云く、「記者釋して曰く、蓋し序王とは經の玄意を叙し、玄意は文心を述す」等云云。此の釋に文心といふは、題目は『法華經』の心となり。妙樂大師云く、「一代の教法を收むるに、法華の文心より出づ」等云云。天竺は七十箇國なり、總名は月氏國、日本は六十六箇國、總名は日本國、月氏の名の内に七十箇國、乃至人畜珍寶皆あり。日本と申す名の内に六十六箇國あり、出羽の羽も、奧州の金も、乃至國の珍寶人畜、乃至寺塔も神社も、皆日本と申す二字の名の内に攝れり。天眼を以ては、日本と申す二字を見て、六十六箇國、乃至人畜等を見るべし。法眼を以ては、人畜等の此に死し彼こに生ずるをも見るべし。譬へば人の聲を聞いて體を知り、跡を見て大小を知る。蓮を見て池の大小を計り、雨を見て龍の分齊を推す。是は皆一に一切の有る理なり。『阿含經』の題目には、大旨一切はあるやうなれども、但だ小釋

【當體の自用】其もの自身の作用。

【四】印度に法華經顯れざりし理由を述ぶ。

迹一佛ありて他佛なし。「華嚴經」、「觀經」、「大日經」等には、又一佛あるやうなれども、二乘を佛になすやうと久遠實成の釋迦佛なし。例せば草咲いて果ならず、雷鳴つて雨下らず、鼓あつて音なし、眼あつて物を見ず、女人あつて子を產まず、人あつて命なし、又神なし。大日の眞言、藥師の眞言、阿彌陀の眞言、觀音の眞言等又斯の如し。彼の經經にしては、大王、須彌山、日月、良藥、如意珠、利劍等のやうなれども、法華經の題目に對すれば、雲泥の勝劣なるのみならず、皆各各當體の自用を失ふ。例せば衆星の光の一つの日輪に奪はれ、諸の鐵の一つの磁石に値うて利性の盡き、大火の小火に値うて用を失ひ牛乳驢乳等の師子王の乳に値うて水となり、衆狐が術一犬に値うて失ひ、狗犬が小虎に値うて色を變ずるが如し。南無妙法蓮華經と申せば、南無阿彌陀佛の用も、南無大日眞言の用も、觀世音菩薩の用も、一切の諸佛諸經諸菩薩の用、皆悉く妙法蓮華經の用に失はる。彼の經經は妙法蓮華經の用を借らずば、皆徒のものなるべし。當時眼前の理りなり。日蓮が南無妙法蓮華經と弘むれば、南無阿彌陀佛の用は月の缺くるが如く、潮の干るが如く、秋冬の草の枯るるが如く、氷の日天に溶くるが如くなりゆくを見よ」

【四】問うて云く、「此の法實にいみじくば、など迦葉、阿難、馬鳴、龍樹、無著、天親、南岳、天台、妙樂、傳教等は、善導が、南無阿彌陀佛と勸めて漢土に弘通せしが如く、慧心、永觀、法然が日本國を皆阿彌陀佛になしたるが如く勸め給はざりけるやらん。」答へて云く、「此の難は、古の難なり今初めたるにはあらず。馬鳴、龍樹菩薩等は、佛の滅後六百

【四二】支那に法華經未だ顯れず、天台大師偉に弘通せるを述ぶ。

年七百年等の大論師なり。此の人人世に出でて大乘經を弘通せしかば、諸の小乘の者疑つて云く、迦葉、阿難等は佛の滅後二十年四十年住壽し給ひて正法を弘め給ひしは、如來一代の肝心をこそ弘通し給ひしか。而るに此人人は只だ苦、空、無常、無我の法門をこそ詮とし給ひしに、今馬鳴、龍樹等賢しといふとも迦葉、阿難等には過ぐべからず。是一迦葉は佛に値ひ參らせて解を得たる人なり。此人人は佛に値ひ奉らず。是二外道は常、樂、我、淨と立てしを、佛世に出でさせ給ひて、苦、空、無常、無我と說かせ給ひき。此者共は常、樂、我、淨といへり。されば佛も御入滅なりぬ、迦葉等も隱れさせ給ひぬれば、第六天の魔王が此者共が身に入り替りて、佛法を破り外道の法となさんとするなり。されば佛法の敵をば、頭を破れ頸を切れ、命を斷て食を止めよ、國を追へと、諸の小乘の人人申せしかども、馬鳴、龍樹等は但だ一二人なり。晝夜に惡口の聲を聞き、朝暮に杖木を被りしなり。而れども此の二人は佛の御使ぞかし。正しく摩耶經には、六百年に馬鳴出でて、七百年に龍樹出でんと說かれて候。其の上、楞伽經等にも記せられたり。又付法藏經には申すに及ばず。されども諸の小乘の者どもは用ゐず但だ理不盡に責めしなり。如來の現在にすら猶ほ怨嫉多し、況んや滅度の後をや。此の經文は、此時に當りて少しつみ知られけり。提婆菩薩の外道に殺され、師子尊者の頭を切られし、此事を以て思ひ遣らせ給へ。

【四二】又佛滅後一千五百餘年に當りて、月氏よりは東に漢土といふ國あり。陳隋の代に

【四】日本の傳教大師法華經を弘通せるを述ぶ。

天台大師出世す。彼人の云く、「如來の聖教に大あり小あり、顯あり密あり、權あり實あり。迦葉、阿難等は一向に小を弘め、馬鳴、龍樹、無著、天親等は權大乘を弘めて、實大乘の「法華經」をば、或は但だ指をさして義をかくし、或は經の面を述べて、始中終を述べず、或は迹門を述べて本門を顯はさず、或は本迹あつて觀心なし」と言ひしかば、南三北七の十流が末學數千萬人、時をつくりどつと笑ふ。「末世の末になるままに不思議の法師も出現せり、時に當りて我等を偏執する者はありとも、後漢の永平十年丁卯の歳より、今陳隋に至るまでの三藏、人師、二百六十餘人を、物も知らずと申す上、謗法の者なり、惡道に墮つるといふ者出來せり、餘りの物狂はしさに「法華經」を持ち來り給へる羅什三藏をも、物知らぬ者と申すなり。漢土はさてもおけ、月氏の大論師、龍樹、天親等の數百人の四依の菩薩も、未だ實義を述べ給はずといふなり。此を殺したらん人は、鷹を殺したるものなり、鬼を殺すにも過ぐべし」と罵りき。又妙樂大師の時、月氏より法相、眞言渡り、漢土に華嚴宗の始まりたりしを、兎角責めしかば此等もまた隨せしたり。

【四】日本國には、傳教大師佛滅後一千八百年に當りて出でさせ給ひ、天台の御釋を見て、欽明より已來二百六十餘年が間の六宗を責め給ひしかば、「在世の外道、漢土の道士、日本に出現せり」と謗せし上、「佛滅後一千八百年が間、月氏、漢土、日本に無かりし、圓頓の大戒を立てん」といふのみならず、西國の觀音寺の戒壇、東國下野小野寺の戒壇、中國大和國東大寺の戒壇は、同じく小乘臭糞の戒なり、瓦石の如し、其を持つ法師等は野干猿

【內證】內心の證悟。

【四三】天台傳教未弘の正法、本門の三大秘法を顯はす。この一段は一鈔の肝心なり。

猴等の如し」とありしかば、「あら不思議や、法師に似たる大蝗蟲、國に出現せり。佛教の苗一時に失せなん。殷の紂、夏の桀、法師となりて日本に生れたり。後周の宇文、唐の武宗二たび世に出現せり。佛法も但今失せぬべし、國も亡びなん」といひしなり。「大乘小乘の二類の法師出現せば、修羅と帝釋と項羽と高祖と、一國に並べるなるべし。」諸人手を叩き舌を振ふ。『在世には佛と提婆が二つの戒壇ありて、許多の人人死にき。されば、他宗には背くべし、我が師天台大師の立て給はざる圓頓の戒壇を立つべしといふ、不思議さよ、あら恐ろし、恐ろし』と罵り合へりき。されども經文分明にありしかば、叡山の大乘戒壇已に立てさせ給ひぬ。されば內證は同じけれども、法の流布は迦葉、阿難よりも馬鳴、龍樹等は勝れ、馬鳴等よりも天台は勝れ、天台よりも傳教は超えさせ給ひたり。世末になれば人の智は淺く、佛教は深くなる事なり。例せば輕病は凡藥、重病には仙藥、弱き人には強き方人ありて扶くる、是れなり。」

【四三】問うて云く、「天台、傳教の弘通し給はざる正法ありや。」答へて云く、「有り。」求めて曰く、「何物ぞや。」答へて云く、「三つあり。末法の爲に佛留め置き給ふ。迦葉、阿難等、馬鳴、龍樹等、天台、傳教等の弘通せさせ給はざる正法なり。」求めて云く、「其の形貌如何。」答へて云く、「一には日本乃至一閻浮提一同に本門の教主釋尊を本尊とすべし。所謂寶塔の內の釋迦、多寶、外の諸佛、並びに上行等の四菩薩脇士となるべし。二には本門の戒壇、三には日本、乃至、漢土、月氏、一閻浮提に、人每に有智無智を嫌はず、一同に他事

【三】興宣流布の功徳を道善房に回向す。

を捨てて、南無妙法蓮華經と唱ふべし。此事未だ弘まらず、一閻浮提の內に、佛滅後二千二百二十五年が間、一人も唱へず。日蓮一人、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經等と、聲も惜まず唱ふるなり。例せば風に隨つて波の大小あり。薪によりて火の高下あり。池に隨つて蓮の大小あり。雨の大小は龍による。根深ければ枝繁し。源遠ければ流れ長しといふ、是なり。周の代の七百年は、文王の禮孝による。秦の世程もなし、始皇の左道なり。日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華經は萬年の外、未來までも流るべし。日本國の一切衆生の盲目を開ける功徳あり。無間地獄の道を塞ぎぬ。此功徳は傳教、天台にも超へ、龍樹、迦葉にも勝れたり。極樂百年の修行は、穢土一日の功に及ばず。正像二千年の弘通は、末法の一時に劣るか。是れ偏へに日蓮が智の賢きには非ず、時の然らしむるのみ。春は花さき、秋は菓なる。夏は暖かに、冬は冷たし。時の然らしむるに有らずや。

【四】我滅度の後、後の五百歳の中に、廣宣流布して、閻浮提に於て斷絶して、惡魔魔民、諸の天、龍、夜叉、鳩槃荼等に其便りを得せしむること無かれと等云云。此の經文若し空しくなるならば、舎利弗は華光如來とならじ、迦葉尊者は光明如來とならじ、目連は多摩羅跋栴檀香佛とならじ、阿難は山海慧自在通王佛とならじ、摩訶波闍波提比丘尼は一切衆生喜見佛とならじ、耶輸陀羅は具足千萬光相佛とならじ、三千塵點も戯論、五百塵點も妄語となりて、恐らくは教主釋尊は無間地獄に墮ち、多寶佛は阿鼻の炎に咽び、十方の諸佛は八大地獄を栖處とし、一切の菩薩は一百三十六の苦みを受くべし。寧でか其義あ

るべき。其義なくば、日本國は一同の南無妙法蓮華經なり。されば花は根に返り、眞味は土に留まる。此の功德は故道善房の聖靈の御身に集まるべし。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

建治二年太歲丙子七月廿一日記之

自甲州波木井ノ郷蓑歩ノ嶽奉送安房國東條郡淸澄山淨顯房義淨房ノ本一

教義篇

〔縮遺二〇五一頁〕弘安四年（六十歲）の作。「日蓮聖人の宗教的理想たる本門の三大祕法（本門の題目、本門の本尊、本門の戒壇）を顯示せるもの也」

【一】本化別付囑の文を擧ぐ。「付囑の法」と

【二】は本門壽量品の三大祕法なるを說く

【四味】法華以前の四味を五味中の前四味とし、法華を最後の醍醐味とす。

【三教】化法四教中の藏、通、別

【廣開三顯一】方便品に至りて廣く三乘の權教を開いて一乘の實教を顯はすこと。

【略開近顯遠】涌出品に於て、始成正覺の假、久遠の成道の實なるを略して顯はすこと。

【寂光本有の國土】法性眞理の理想國土。

【三】弘通の時を

三大祕法鈔

【一】夫れ「法華經」の第七「神力品」に云く、「要を以て之を言はば如來の一切の所有の法、如來の一切の自在の神力、如來の一切の祕要の藏、如來の一切の甚深の事、皆此の經に於て宣示顯說す」等云云。釋に云く「經中の要說、要は四事に在り」等云云。

【二】問ふ、「所說の要言の法とは何物ぞや」。答へて云く、「夫れ釋尊初成道の始めより四味三教乃至「法華經」の廣開三顯一の席を立ちて、略開近顯遠を說かせ給ひし「涌出品」まで祕せさせ給ひし實相證得の當初修行し給ひし「壽量品」の本尊と戒壇と題目の五字也。教主釋尊此の祕法をば三世に隱れ無き普賢文殊等にも讓り給はず、況や其の已下をや。此の祕法を說き給ひし儀式は四味三教並に「法華經」の迹門十四品に異なりき。所居の土は寂光本有の國土也、能居の教主は本有無作の三身也、所化以て同體也。かゝる砌なれば久遠稱揚の本眷屬上行等の四菩薩を寂光の大地の底よりはるばると召し出して付屬し給ふ。道暹律師云く、「法是れ久成の法なるに由るが故に久成の人に付す」等云云。

【三】問て云く、「其の所屬の法門佛の滅後に於ては何れの時に弘通し給ふべきぞ」。答て云く、「經の第七「藥王品」に云く、「後の五百歲の中に廣宣流布して閻浮提に於て斷絶せしむること無けん」等云云。謹で經文を拜見し奉るに、佛の滅後正像二千年過ぎて第五の五

明すため經證を引き、妙法は末法の相應なるを明す。

【諸佛の和光利物】佛がその大智慧の光をおほひかくして凡夫の中に示同して敎化利益し給ふ。

【四】末法は法華經に限ることを壽量品を引て證す。

【五】三大祕法の法體を明す。

白法、闘諍堅固白法隱沒の時」云云と。問ふ、「夫れ諸佛の慈悲は天月の如し、機緣の水澄めば月の影を惜く萬機の水に移し給ふべき處に、正像末の三時の中に末法に限ると定め給ふは釋尊の慈悲に於て偏頗あるに似たり如何。」答ふ、「諸佛の和光、利物の月影は九法界の闇を照すと雖も、謗法一闡提の濁水には影をうつさず。正法一千年の機の前には唯小乘、權大乘相叶へり。像法一千年には法華經の迹門機感相應せり。末法に入て始の五百年には法華經本門前後の十三品をば置て只『壽量品』の一品を弘通すべき時也。機法相應せり。今此の本門『壽量』の一品は像法の後の五百歳の機すら尚堪へず。況や始の五百年をや。何に況や正法の機は迹門尚日淺し、增して本門をや。末法に入つては爾前迹門は全く出離生死の法にあらず。但專ら本門『壽量』の一品に限つて出離生死の要法也。是れを以て思ふに諸佛の化導に於ては全く偏頗無し」等云云。

【四】問ふ、「佛の滅後正像末法の三時に於て本化迹化の各各の付囑分明也。但『壽量』の一品に限つて末法濁惡の衆生の爲なりといへる經文未だ分明ならず。慥に經の現文を聞かんと欲す如何。」答ふ、「汝、强に之を問ふ、聞いて後に堅く信を取る可きなり。所謂『壽量品』に云く、『是の好き良藥を今留て此に在く、汝取て服すべし、差えじと憂ふることなかれ』等云云。」

【五】問ふ、「『壽量品』專ら末法惡世に限る經文顯然なる上は私に難勢を加ふべからず。然りと雖ども三大祕法の其體如何。」答へて云く、「予が己心の大事之に如かず。汝が

【疏】天台文句の釋。

【名體宗用敎】天台大師玄義にてこの五重によりて一經題を解釋せらる。名とこゝろとはたらきと効用と說明となり。これすべて五字に具足す。

【有德王】涅槃經に出づ、覺德比丘、正法を弘めて難に値ふ、王往て戰鬪して比丘を護り爲に命を隕す、その功德によりて佛となる。

【一八】天台宗の戒壇は迹門の理戒なれば無益とす『

志無二なれば少し之を言はん、『壽量品』に建立する所の『本尊』とは五百塵點の當初より以來、此土有緣深厚本有無作三身の教主釋尊是也。『壽量品』に云く『如來祕密神通之力』等云云。『疏』の九に云く、『一身即三身なるを名けて祕と爲し、三身即一身なるを名けて密と爲す。又昔說かざる所を名けて祕と爲し唯佛のみ自ら知るを名けて密と爲す。佛三世に於て等く三身あり、諸教の中に於て、之を祕して傳へず』等云云。『題目』とは二意あり。所謂正像と末法と也。正法には天親菩薩、龍樹菩薩題目を唱へさせ給ひしかども自行ばかりにしてさて止ぬ。像法には南岳、天台等亦題目計り『南無妙法蓮華經』と唱へ給ひて、自行の爲にして廣く他の爲に說かず。是れ理行の題目也。末法に入りて今日蓮が唱る所の題目は前代に異り自行化他に亘りて『南無妙法蓮華經』也。名體宗用教の五重玄の五字也。『戒壇』とは王法佛法に冥し佛法王法に合して王臣一同に本門三祕密の法を持ちて、有德王、覺德比丘の其乃往を末法濁惡の未來に移さん時、勅宣並びに御教書を申し下して靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立す可き者歟。時を待つ可き耳。事の戒法と申すは是也。三國並びに一閻浮提の人の懺悔滅罪の戒法のみならず、大梵天王、帝釋等も來下して蹋給ふべき戒壇也。

【一八】此戒法立ちて後、延曆寺の戒壇は迹門の理戒なれば益あるまじき處に、叡山の座主始まつて第三第四の慈覺、智證存の外に本師傳教、義眞に背いて理同事勝の狂言を本として我山の戒法をあなづりて戲論と謗せし故に、存の外に延曆寺の戒、淸淨無染の中道

【七】三秘稟承の淵源を示す。

【八】一念三千事理の文證と今正しく本門事の一念三千流布の時なるを明す。

【九】造作の意趣を述べて三秘を合む法華經は諸佛の生命なるを明す。

の妙處なりしが徒に土泥と成ぬる事云ても餘りあり、歎きても何かはせん。彼の摩梨山の瓦礫の土と成り、栴檀林の荊棘と成りたらんにも過ぎたるなるべし。夫れ一代聖敎の邪正偏圓を辨へたらん學者の人をして今の延暦寺の止觀堂に踏ましむべき乎。此の法門は義を案じて理を詳ひらかにせよ

【七】此の三大秘法は二千餘年の當初、地涌千界の上首として日蓮慥に敎主大覺世尊より口決相承せし也。今日蓮が所行は靈鷲山の稟承に芥子計りも相違なき色も替らぬ壽量品の事の三大事なり。

【八】問ふ、一念三千の正しき證文如何。答へて云く、「此に於て二種有り。『方便品』に云く、『諸法實相所謂諸法如是相乃至欲令衆生開佛知見』等云云。底下の凡夫理性所具の一念三千也。『壽量品』に云く、『然我實成佛已來無量無邊』等云云。大覺世尊久遠實成の當初證得の一念三千也。今日蓮が時に感じて此法門廣宣流布する也。」

【九】予年來己心に秘すと雖も此の法門を書き付けて留め置かずんば門家の遺弟等定めて無慈悲の讒言を加ふべし。其後は何と悔ゆとも叶ふまじきと存ずる間貴邊に對して書き送り候。一見の後秘して他見有るべからず。口外も詮なし。『法華經』を諸佛出世の一大事と説せ給ひて候は此三大秘法を含みたる經にて渡らせ給へばなり。秘すべし、秘すべし。

弘安四年卯月八日　　日蓮

【　】縮遺一七九四頁　弘安元年（五十七歳）の作。末代の衆生の本尊は法華經の題目なり、祈禱開眼の唯一の教法なりと論定し、眞言等は誑惑の宗還つて亡國の法なることを史實上より論證して法華經の信心を勵ましたるものなり。

【一】末代惡世の本尊は法華經の題目也」と經釋を擧て證し、天台四種三昧に關る疑を會し法華經の正意の本尊を示す。

【舍利】（Sarira）佛骨のこと。

【法華三昧】天台大師の著、法華三昧懺儀。

【四種三昧】天台の觀法に四種の行あり、常行、常坐、非行非坐、半行半坐なり。

【觀智儀軌】不空三藏の譯、成就妙法蓮華經王瑜伽觀

本尊問答鈔

大田金吾殿御返事

【一】問うて云く、「末代惡世の凡夫は何物を以て本尊と定むべきや。」答へて云く、「法華經の題目を以て本尊とすべし。」問うて云く、「何れの經文、何れの人師の釋にか出でたるや。」答ふ「『法華經の第四法師品』に云く『藥王、在在處處に若は說き、若は讀み、若は誦し、若は書き、若は經卷所住の處には皆應に七寶の塔を起てて、極めて高廣嚴飾ならしむべし。復舍利を安ずることを須ゐざれ。所以は何ん。此中には已に如來の全身有す』等云云。『涅槃經の第四如來性品』に云く、『復次に迦葉、諸佛の師とする所は、所謂る法なり。是故に如來、恭敬供養す。法常なるを以ての故に、諸佛も亦常なり』等云云。天台大師の『法華三昧』に云く、『道場の中に於て、好き高座を敷き、法華經一部を安置し、亦未だ必ずしも形像、舍利、並びに餘の經典を安ずべからず、唯法華經一部を置く』等云云」疑つて云く、「天台大師の『摩訶止觀』の第二の、四種三昧の御本尊は阿彌陀佛なり。不空三藏の『法華經の觀智の儀軌』は、釋迦、多寶を以て本尊とせり。汝何ぞ此等の義に相違するや。」答へて云く、「是れ私の義にあらず、上に出す處の經文、並びに天台大師の御釋なり。但し『摩訶止觀』の四種三昧の本尊は阿彌陀佛といふは、彼の常坐、常行、非行非坐の

智儀軌の略稱。

【二】佛教の十宗 [illegible]の本尊は經を以て人、佛を以てす。今法華經を本尊とする所以は、佛は所生、法は能生なり。法華經は佛の精神なり、と說き、久遠本佛を開顯し、[illegible]に限る供養は[illegible]とす。

【劣應身の小釋迦】 生身の釋尊、小乘の佛。

【大釋迦】 通教の佛、小乘の佛に對していふ。

【臺上の盧舍那】 華嚴經の教主、蓮華藏世界の中台にいます報身如來、微塵數の相好を具せる佛。

三種の本尊は阿彌陀佛なり。文殊問經、般舟三昧經、請觀音經等に依る、是れ爾前の諸經の内、未顯眞實の經なり。半行半坐三昧には二あり、一には方等經の七佛八菩薩等を本尊とす、彼の經による。二には『法華經』の釋迦、多寶等を引き奉れども、『法華三昧』を以て案ずるに、『法華經』を本尊とすべし。不空三藏の『法華儀軌』は、『寶塔品』の文によれり。此は『法華經』の教主を本尊とす、『法華經』の正意にはあらず。上に擧ぐる所の本尊は釋迦、多寶、十方の諸佛の御本尊、『法華經』の行者の正意なり。」

【二】問うて云く、日本國に十宗あり。所謂る倶舍、成實、律、法相、三論、華嚴、眞言、淨土、禪、法華宗なり。此宗は皆本尊まちまちなり。所謂る倶舍、成實、律の三宗は、劣應身の小釋迦なり。法相、三論の二宗は、大釋迦佛を本尊とす。華嚴宗は臺上の盧舍那報身の釋迦如來、眞言宗は大日如來、淨土宗は阿彌陀佛、禪宗にも釋迦を用ゐたり。何ぞ天台宗に獨り『法華經』を本尊とするや。答ふ、彼等は佛を本尊とするに、是は經を本尊とす。其義あるべし。問ふ、其義如何、佛と經と何れか勝れたるや。答へて云く、本尊とは勝れたるを用ゆべし。例せば儒家には三皇五帝を用ゐて本尊とするが如く、佛家にも又釋迦を以て本尊とすべし。問うて云く、然らば汝云何ぞ釋迦を以て本尊とせずして『法華經』の題目を本尊とするや。答ふ、上に擧ぐる所の經釋を見給へ、私の義にはあらず。釋尊と天台とは、『法華經』を本尊と定め給へり。末代今の日蓮も、佛と天台の如く、『法華經』を以て本尊とするなり。其故は『法華經』は釋尊の父母、諸佛の眼目なり。釋迦、大日、

【普賢經】法華經の結經たる佛說觀普賢菩薩行法經。
【方等經】大乘經なり。
【五眼】佛のみ之を具す、佛眼、慧眼、法眼、天眼、肉眼。
【佛の三種の身】法身、報身、應身。
【大法印】眞實絕對の證印。
【涅槃海】實相の大法印よく卽身成佛の大涅槃を證認す。
【福田】福德の果を實らしむる田地。
【應供の中の最】德あるものは能く人の供養を受くるに堪ふ、その中の最上。
【開眼】木畫像等に佛の精神魂魄を入るゝを譬て眼を開くといふ。
【三】眞言(東寺、台密)の法華眞言勝劣を牒し經文を引て之を破す。
【四】法門は身の貴賤德不德を論ぜず

總じて三世十方の諸佛は、法華經より出生し給へり。故に今能生を以て本尊とするなり。」
問ふ、「其の證據如何。」答ふ、「『普賢經』に云く、『此の大乘經典は諸佛の寶藏なり。十方三世の諸佛の眼目なり。三世の諸の如來を出生する種なり』等云云。又云く、『此の方等經は是れ諸佛の眼なり。諸佛是に因つて五眼を具することを得給へり。佛の三種の身は方等より生ず。是れ大法印にして、涅槃海を印す。此の如き海中より、能く三種の佛の淸淨の身を生ず。此の三種の身は人天の福田、應供の中の最なり』等云云。此等の經文、佛は所生、『法華經』は能生、佛は身なり、『法華經』は神なり。然れば卽ち木像畫像の開眼供養は唯法華經に限るべし。而るに今木畫の二像を設けて、大日佛眼の印と眞言とを以て開眼供養を爲すは、最も逆なり。」

【三】問うて云く、「『法華經』を本尊とすると、大日如來を本尊とすると、何れか勝るや。」答ふ、「弘法大師、慈覺大師、智證大師の御義の如くならば、大日如來は勝れ、法華經は劣るなり。」問うて云く、「其義如何。」答へて云く、「弘法大師の『祕藏寶鑰』『十住心』に云く、『第八法華、第九華嚴、第十大日經』等云云。是は淺きより深きに入る。慈覺大師の『金剛頂經の疏』『蘇悉地經の疏』、智證大師の『大日經の旨歸』等に云く、『大日經第一、法華經第二』等云云。」問ふ、「汝が意如何。」答ふ、「釋迦如來、多寶佛、總て十方の諸佛の御評定に云く、『已今當の一切經の中に、法華經最も爲れ第一なり』云云。」

【四】問ふ、「今日本國中の天台、眞言等の諸僧、並びに王臣萬民疑つて云く、日蓮法師

佛に依り、その教法に依るべしとの難を開し、弘法、慈覺、智證の三人の邪義は佛說との經に違するを示す。

【五】眞言の三大師の德望を擧てその不可信の人なるを難ず。

るは弘法、慈覺、智證大師等に依るべきか、如何。」答ふ「日蓮反詰して云く、弘法、慈覺、智證大師等は、釋迦、多寶、十方の諸佛に勝るべきか、一是、今日本の國王より民までも、教主釋尊の御子なり。釋尊の最後の御遺言に云く、「法に依りて人に依らざれ」と云云。諸國王臣萬民等所用第一二と申すは法に依るなり。然るに三大師等に勝るべしやと云ふ。從生懸等に至るまで、豈に佛の子にあらずや。」問ふ「弘法大師は「法華經」を見給はずや。」答ふ「弘法大師も一切經を讀み給へり。其中に「法華經」、「華嚴經」、「大日經」の淺深勝劣を讀み定め給ふに、「法華經」を讀み給ふ樣に云く、「文殊師利、此の「法華經」は諸佛如來の祕密の藏なり。諸經の中に於て、最も其の上に在り。」文。讀み給ふ樣に云く、「藥王、今汝に告ぐ、我が所說の諸經あり、而も此經の中に於て、法華最も第一なり」と云云。又讀み給ふ、智證大師の讀み給ふ樣に云く、「諸經の中に於て、最も其中に在り」又最も爾れば第一と云云。釋迦如來、多寶佛、大日如來、一切の諸佛、法華經を一切經に相對して說いて言はく、「法華最第一」と說いて云く、「法華最も其上に在り」と云云。所詮釋迦十方の諸佛と、慈覺、智證、弘法等の三大師と、何れを本とすべきや。但し事を日蓮に寄せて、釋迦十方の諸佛に永く背きて、三大師を本とすべきか、如何。」

【五】問ふ「弘法大師は讃岐國の人、勤操僧正の弟子なり。三論、法相等の六宗を極む。去ぬる延曆二十三年五月に桓武天皇の勅宣を帶びて漢土に入り、順宗皇帝の勅に依りて、青龍寺に入りて惠果和尙に眞言の大法を相承し給へり。惠果和尙は大日如來よりは七代に

【谷響】文德帝の御守し

なり給ふ。人は替れども法門は同じ。譬へば瓶の水を瓶に移すが如し。大日如來と金剛薩埵、龍猛、龍智、金剛智、不空、惠果、弘法との瓶は異れども、所傳の智水は同じ眞言なり。此の大師、彼の眞言を習ひて三千の波濤を渡りて日本國に着き給ひ、平城、嵯峨、淳和の三帝に授け奉る。去ぬる、弘仁十四年正月十九日に、東寺を建立すべき勅を給はつて、眞言の秘法を弘通し給ふ。されば今に至る迄、六十六ケ國、二の島に至るまでも鈴をとり杵を握る人、誰か此の人の末流にあらざるべきや。又慈覺大師は下野國の人、廣智菩薩の弟子なり。大同二年御年十五にして傳教大師の御弟子となりて、叡山に登りて十五年の間、六宗を習ひ、法華、眞言の二宗を習ひ傳へ、承和五年に御入唐、漢土の會昌天子の御宇なり。法全、元政、義眞、寶月、宗叡、志遠等の天台眞言の明師に値ひ奉りて、顯密の二道を習ひ極め給ふ。其の上殊に眞言の秘法は十年の間功を盡し給ふ。大日如來よりは九代なり。嘉祥元年仁明天皇の御師となり給ひしなり。仁壽、齊衡に金剛頂經、蘇悉地經の二經の疏を造り叡山に總持院を建立して、第三の座主となり給ふ。天台の眞言是より始まる。又智證大師は讃岐國の人、天長四年御年十四、叡山に登りて義眞和尚の御弟子となり給ふ。日本國にては義眞、圓澄、慈覺等の諸徳に八宗を習ひ極め、去ぬる仁壽元年に文德天皇の勅を給ひて漢土に入り、宣宗皇帝の大中年中に、法全、良諝和尚等の諸大師に、七年の間顯密の二道を習ひ極め給へり。天安二年に御歸朝、文德、清和等の皇帝の御師なり。何れも現の尋常の佛、月の如く、日の如く、代代の國王、國母の御信仰御歸

【八】前難に答て三國（印度支那日本）佛教史上、眞言法華の勝劣の問題見難きを明し當時の眞言の邪義國中に瀰漫せるを示す。

りあり、歸依奉りたし。故に愚痴の一頭、偏へに信ずるばかりなり。既に「依法不依人」の金言を示し給へるの外は、何ぞ佛に依らずして、然も我等が人に依るべきや。所詮其の如何。」

【八】答ふ「夫れ教主釋尊の御入滅より一千年の間、月氏に佛法の弘通せし次第は、先の五百年は小乘、後の五百年は大乘、小大、權實の諍論はありしかども、端的の定めは微なりき。像法に入りて十五年と申せしに、漢土に佛法渡る。始めは儒道と釋教と諍論して、定め難かりき、されども佛法やうやく弘通せしかば、大小、權實の諍論出來、されども甚うの相違も無かりしに、漢土に佛法渡りて六百年、玄宗皇帝の御宇に、善無畏、金剛智、不空の三三藏、月氏より入り給ひて後、眞言宗を立てしかば、華嚴、法華等の諸宗は以ての外に下されき。上一人より下萬民に至るまで、眞言には法華經は劣なりと思ひしなり。其後德宗皇帝の御宇に、妙樂大師と申す人、眞言は「法華經」に劣りたりと思しめししかども、甚く立てらるる事もなかりしかば、法華、眞言の勝劣を明らむる人なし。日本國の人王三十代欽明の御時、百濟國より佛法始めて渡りたりしかども、神と佛との諍論强くして、三十餘年は廢れにき。三十四代推古天皇の御宇に、聖德太子始めて佛法を弘通し給ふ。慧觀、觀勒の二人來り、百濟國より渡りて三論宗を弘め、孝德の御宇に、道昭、禪宗を渡す。文武の御宇に、新羅國の智鳳、法相宗を渡す。第四十四代元正天皇の御宇に、善無畏三藏「大日經」を渡す、然れども弘まらず。聖武の御宇に、審祥大德

【大日經の疏】大日經義疏、善無畏一行に依りてその宗義を述ぶ。

【座主】延暦寺の寺主の稱。

【御室】仁和寺道助法親王。

良諝和尚等眞言宗を渡す。人王四十六代孝謙天皇の御宇に、唐の代の鑑眞和尚、律宗と『法華經』を渡す。律をば弘め、法華をば弘めず。第五十代桓武天皇の御宇、延暦二十三年七月に傳教大師勅宣を給ひて漢土に渡り、妙樂大師の御弟子道邃、行滿に値ひ奉りて『法華經』の定、慧を傳へ、道宣律師の菩薩戒を傳へ、順曉和尚と申せし人の眞言の秘教を習ひ傳へて日本國に歸り給ひて、眞言、法華の勝劣は漢土の師の教に依りては定め難しと思しめしければ、爰にして『大日經』と『法華經』と、彼釋と此釋とを引き並べて、勝劣を判じ給ひしに、『大日經』は『法華經』に劣りたるのみならず、『大日經の疏』は天台の心をとりて眞言宗に入れたりけりと勘へ給へり。其後弘法大師、眞言經を下されける事を遺恨とや思しめしけん、眞言宗を立てんと謀かりて、『法華經』は『大日經』に劣るのみならず、『華嚴經』に劣れりと云云。あはれ慈覺、智證、叡山、園城に此義を許さずば、弘法大師の僻見は日本國に弘まらざらまし。彼の兩大師華嚴、法華の勝劣をば許さねど、法華、眞言の勝劣をば永く弘法大師に同心せしかば、存外に本師傳教大師の大怨敵となる。其後日本國の諸々の碩德等、各智慧高くおはしけれども、彼の三大師に超えざれば、今に四百餘年の間、日本一同に眞言は『法華經』に勝れけりと定め畢んぬ。たま〳〵天台宗を習へる人人も、眞言は法華に及ばざるの由存ずとも、天台の座主、御室等の高貴に恐れて申す事なし。或は又其義をも辨へぬかの故に、辛くして同の義を云へば、一向眞言師はさもなき事思ひもよらずと笑ふなり。されば日本國中に數十萬の寺社あり、皆眞言宗なり。たま〳〵法

【要旨】國家宗旨
とも
【語釋】行者の一
【通釋】行者の一

【七】日蓮の郷里と修學し特に諸宗の勝劣を明かにしたるを明す

眞言宗を捨てよと云へ、國家は今の如く、或は他宗の如くなり。或は禪宗の人も、念佛は一向に歸伏なり。而るに、民部、將校、細戒一向に信じたる上、上一人より下萬民に至るまでなれば、一人も洩れず謗法の者なり。されば日本國は或は口には「法華經」最第一とは云へども、心は「眞言」最第一なり。或は身口意ともに謗法なり。「法華經」の行者は國中に一人もなし。況んや「法華經」の行者あるべしとも見えず。『佛の記文』の如く正法を誹謗し、況んや一切の衆生は上一人より下萬民に至るまで「法華經」の怨敵となれり。

【七】然るに日蓮は東海道十五箇國の内、第十二に相當る安房の國長狹郡東條郷片海の海人が子なり。生年十二にして同じき郷の内、清澄寺と申す山にまかりぬ。遠國なる上、寺とは名けて候へども修學の人なし。然るに隨分諸國を修行して學問し候ひし程に、我が身は不肖なり、人は教へず、十宗の元起勝劣たやすくわきまへがたき所に、たまたま佛に祈請して、一切の經論を勘へて、十宗に合せたるに、倶舍宗は淺近なれども一分は小乘經に相當するに似たり。成實宗は大小兼雜して謬誤あり。律宗は本は小乘、中比は權大乘、今は一向に大乘宗と思へり。又傳教大師の律宗あり、頗る問ふ事なり。法相宗は權大乘、經の中の淺近の法門にてありけるが、次第に增長して權實と並び、結句は彼の宗宗を打ち隨へんと存ぜり。譬へば日本國の將軍、將門純友等の下に居て上を破るが如し。三論宗も又權大乘の空の一分なり。此も我は實大乘と思へり。華嚴宗は又權大乘といひな

【劉聰】支那、前趙の王、晋を伐て愍帝を虜にし之を從者として酷使す。
【王莽】漢の平帝を弑して位を簒奪して新と稱す。

から餘宗に勝れたり。譬へば[illegible]の如し。然れども「法華經」を蔑しろにして立てる宗なる故に、臣下の身を以て大王に背かんとするが如し。淨土宗と申すも權大乘の一分なれども、善導・法然が誑かりかしこくして、諸經をば上げ「法華經」をば下し、正像の機をば上げ末法の機をば下して、末法の機に相叶ひたる念佛を取出して、機を以て經を打ち、一代の聖教を失ひて、念佛の一門を立てたり。譬へば心かしこくして身は賤しき者が、身を上げ心はかなきものを敬ひて、賢人を失ふが如し。禪宗と申すは一代聖教の外に眞實の法ありと云云。譬へば親を殺して子を用ゐ、主を殺して所從のしかも其位に即けるが如し。眞言宗と申すは一向に大妄語にて候が、深く其根源を隱して候へば、淺機の人顯はしがたし。一向に誑惑せられて、數年を經て候。先づ天竺に眞言宗と申す宗なし。然るにありと云云。其證據を尋ぬべきなり。所詮「大日經」此に渡れり。「法華經」に引き向けて其勝劣を見る處に、「大日經」は「法華經」より七重下劣の經なり。證據彼の經、此の經に分明なり。此を見るに[illegible]、「法華經」に[illegible]の主君、或は[illegible]なりと云ふ。以ての外の大僻見なり。譬へば劉聰が下劣の身として愍帝に馬の口を取らせ、王莽と云ひし者民の身として、遂に帝位に即きしが如し。又彼の天竺の大慢婆羅門が釋尊を床として坐せしが如し。漢土にも知る人なく、日本にも知る人なくして、已に四百餘年を經れり。是の如く佛法の邪正亂れしかば、王法も漸く盡きぬ。結句は此國他國に破られて、亡國となるべきなり。此事日蓮獨り勘へ知れる故に、佛法の爲、王法の爲、諸經の要文を集め

【八】眞言亡國の現證を擧ぐ。

て一卷の書を造る。仍て故最明寺入道殿に奉る。『立正安國論』と名けき。其書に委く申したれども、愚人は知り難し。所詮現證を引いて申すべし。

【八】抑も人王八十二代隱岐の法皇と申す王在しき。去ぬる承久三年太歳辛巳五月十五日伊賀太郎判官光季を打捕まします。鎌倉の義時を打ち給はんとての門出なり。やがて五畿七道の兵を召して、相州鎌倉の權太夫義時を打ち給はんとし給ふ處に、還りて義時に負け給ひぬ。結句我身は隱岐國に流され、太子二人は佐渡國阿波國に流され給ふ。公卿七人は忽ちに頸を刎ねられてき。是れは如何にして負け給ひけるぞ。國王の身として民の如くなる義時を打ち給はんは、鷹の雉をとり、猫の鼠を食むにてこそあるべけれ。是は猫の鼠に食はれ、鷹の雉に捕られたるやうなり。しかのみならず調伏の力を盡せり。所謂る、天台の座主慈圓僧正、眞言の長者、仁和寺の御室、園城寺の長吏、總じて七大寺十五大寺、智慧戒行は日月の如く、祕法は弘法、慈覺、智證等の三大師の心中の深祕の大法、十五壇の祕法なり。五月十九日より六月の十四日に至るまで、汗を流し頭腦を碎きて行ひき。最後には御室、紫宸殿にして、日本國に渡りて未だ三度までも行はぬ大法を、六月八日に始めて、之を行ふ程に、同じき十四日に關東の軍兵、宇治勢多を押渡りて洛陽に打入り、三院を生捕り奉りて、九重に火を放ちて一時に燒失す。三院をば三國へ流罪し奉りぬ、又公卿七人は忽ちに頸を斬る。しかのみならず御室の御所に押入りて、最愛の弟子の小兒、勢多伽と申せしを攻め出して、終に頸を切りにき。御室思ひに堪へずして死に給ひ畢んぬ。

【密嚴淨土】大日如來の淨土、三密を以て莊嚴せる故

母も死し、童も死す。都て此の祈りを賴みし人、幾千萬といふ事を知らず死にき。たまたま生きたるも效なし。御室祈りを始め給ひし六月八日より、同じき十四日まで、中を數ふれば七日に滿じける日なり。此の十五壇の法と申すは、一字金輪、四天王、不動、大威德、轉輪、如意輪、愛染王、佛眼、六字、金剛童子、尊星王、太元、「守護經」等の大法なり。此法の詮は、國敵王敵となる者を降伏して、命を召取りて、其魂を密嚴淨土へ遣はすと云ふ法なり。其行者の人人も又輕からず、天台の座主慈圓、東寺御室、三井の常住院の僧正等の四十一人、竝びに伴僧等三百餘人なり云云。法といひ行者といひ、又代も上代なり、何にとして負け給ひけるぞ。假令勝つ事こそなくとも、卽時に負け畢りて、斯る恥に遭ひたりける事、如何なる故といふ事を、餘人未だ知らず。國主として民を討たん事、鷹の鳥を捕らんが如し。假令負け給ふとも、一年二年十年二十年も支ふべきぞかし。五月十五日に起りて、六月十四日に負け給ひぬ。僅に三十餘日なり。權太夫殿は、此事を兼て知られねば、祈禱も無し、構へもなし。然るに日蓮小智を以て勘へたるに、其故あり。所謂る彼の眞言の邪法の故なり。僻事は一人なれども、萬國の煩ひなり。一人として行ずとも、一國二國破れぬべし。況んや三百餘人をや。國主と共に『法華經』の大怨敵となりぬ、いかでか滅びざらん。斯る大惡法、年を經て漸く關東に落下りて、諸堂の別當供僧となり、連連と行へり。素より邊域の武士なれば、教法の邪正をば知らず、ただ三寶をば崇むべき事とばかり思ふ故に、自然として是を用ゐ來りて漸く年數を經る程に、今他國の攻めを蒙りて、

【九】同じく第二第三の現證を示す

【還著於本人】法華經觀世音菩薩普門品の明說「諸毒藥所欲害身者、念彼觀音力、還著於本人」の文。

【一〇】法華經の利生を示す。

【地頭】安房東條の地頭東條左衛門景信。

此國已に亡びなんとす。關東八國のみならず、叡山、東寺、園城、七寺等の座主別當、皆關東の御計らひとなりぬる故に、隱岐の法皇の如く大惡法の檀那と定まり給ひぬるなり。

【九】國主となる事は大小皆、梵王、帝釋、日月、四天の御計らひなり。『法華經』の怨敵となり定まり給はゞ、忽ちに治罰すべき由を誓ひ給へり。隨って人王八十一代安德天皇に太政入道の一門與力して、兵衛佐頼朝を調伏せんが爲に、叡山を氏寺と定め、山王を氏神と頼みしかども、安德は西海に沈み、明雲は義仲に殺され、一門皆一時に滅び畢んぬ。其の證已に第二度なり。今度は第三度に當るなり。日蓮が諫めを御用ゐなくて、眞言の惡法を以て大蒙古を調伏せられば、日本國還って調伏せられなむ。『還著於本人』と說けりと申すは是れなり。

【一〇】然れば則ち罰を以て利生を思ふに、『法華經』に過ぎたる佛になる大道は無かるべきなり。現世の祈禱は兵衛佐殿、『法華經』を讀誦する現證なり。此道理を存ぜる事は、父母と師匠との御恩なれば、父母は已に過去し給ひ畢んぬ。故道善の御房は師匠にて在しかども、『法華經』の故に地頭に怖れ給ひて、心中には不便と思しめしつらめども、外には敵のやうに憎み給ひぬ。後には少し信じ給ひたる樣に聞えしかども、臨終には如何樣にか在しける、覺束なし。地獄まではよも在せじ、又生死を離るる事はあるべしとも覺えず、中有には漂ひましますらむと歎かし。貴邊は地頭の怒りし時、義淨房と共に清澄寺を出でて在せし人なれば、何となくとも是を『法華經』の御奉公と思しめして、生死を離れさせ

六

【二】本尊流行の人、時を示し本書の趣旨を結ぶ。

【續遺一〇三五頁】文永十一年（五十三歳）の作。法華經は末法を正意として說かれ、其の肝要は妙法五字なることを論述し、傍ら諸宗の邪見迷見を破したるもの也。

【一】諸宗の人師の邪教を擧ぐ。

給ふべし。

【二】此御本尊は世尊說きをかせ給ひて後二千二百三十餘年が間、一閻浮提の内に未だ弘めたる人候はず。漢土の天台、日本の傳教、粗知しめして、僅か弘めさせ給はず。當時こそ弘まらせ給ふべき時に當りて候へ。經には上行、無邊行等こそ、出でて弘めさせ給ふべしと見えて候へども、未だ見えさせ給はず。日蓮は其人には候はねども、粗心得て候へば、地涌の菩薩の出でさせ給ふまでの口ずさびにあらあら申して、況滅度後のほこさきに當り候なり。願はくは此功德を以て、父母と師匠と、一切衆生に回向し奉らんと、祈請仕り候。其旨を知らせ參らせむが爲に、御不審を書きて送り參らせ候に、他事を捨てて此御本尊の御前にして、一向に後世をも祈らせ給ひ候へ。又是より申さんと存じ候。いかにも御房達計らひ申させ給へ。

弘安元年九月二十日　日蓮　花押

法華取要鈔

【一】夫れ以れば、月支西天より漢土、日本に渡來する所の經論、五千七千餘卷なり。其中の諸經論の勝劣、淺深、難易、先後、自見に任せて之を辨ふるは、其分に及ばず。人に隨ひ宗に依て之を知るは、其義紛紕たり。所謂る華嚴宗の云く、「一切經の中に此經第一」

【二】人師の邪義を捨てて本經に就きて見るに、法華の「已今當」は一代に亙りて法華最第一なることを證す。

と。法相宗の云く、「一切經の中に『深密經』第一」と、三論宗の云く、「一切經の中に『般若經』第一」と、眞言宗の云く、「一切經の中に『大日の三部經』第一」と、禪宗の云く、「或は云く、敎內には『楞伽經』第一」と。或は云く、「『首楞嚴經』第一」と。或は云く、「敎外別傳の宗なり」と。淨土宗の云く、「一切經の中に『淨土の三部經』、末法に入つては機敎相應して第一なり」と。倶舍宗、成實宗、律宗の云く、「『四阿含』並びに律論は佛說なり。『華嚴經』、『法華經』等は佛說に非ず、外道の經なり」と。或は云く、而るに彼彼の宗宗の元祖等、杜順、智儼、法藏、澄觀、玄奘、慈恩、嘉祥、道朗、善無畏、金剛智、不空、道宣、鑑眞、曇鸞、道綽、善導、達磨、慧可等なり。此等の三藏、大師等は皆聖人なり、賢人なり。智は日月に齊しく、德は四海に彌る。其の上各各經、律、論に依り、互ひに證據有り。隨つて王臣國を傾け、土民之を仰ぐ。末世の偏學、設ひ是非を加ふとも、人信用を致さず。爾りと雖も寶山に來り登りて瓦石を採り取り、栴檀に歩み入りて伊蘭を懷き收らば、恨悔有らん。故に萬人の謗を捨てて、猥りに取捨を加ふ。我が門弟委細に之を尋討せよ。

【二】夫れ諸宗の人師等、或は舊譯の經論を見て新譯の聖典を見ず。或は新譯の經論を見て舊譯を捨て置き、或は自宗の曲に執着して已義に隨ひ、愚見を註し止めて後代に之を加添し、株杌に驚き騒ぎ、兎獸を尋ね求め、智圓扇に發して仰いで天月を見る。非を捨てて理を取るは、智人なり。今末の論師、本の人師の邪義を捨て置き、專ら本經本論を引き見るに、五十餘年の諸經の中、『法華經』第四『法師品』の中の『已今當』の三字、最第一

【邪會】邪にこぢつけること。

【今日涅槃理】般若法華亦煩惱所汚と名く、今涅槃の理は流動なく得失なく起滅なし、故に所汚と爲さずの文。

【弘傳】弘通傳持の義。

【三】法華經の諸經に超過の事を說き、先づ此土は釋尊知行の國土なるを定む。

【動踰塵劫】通教の菩薩の修行期間

なり。諸の論師、諸の人師、定めて此の經文を見けるか。然りと雖も或は相似の經文に狂ひ、或は本師の邪會に執し、或は王臣等の歸依を恐るるか。所謂る『金光明經』の「是れ諸經の王」、『密嚴經』の「一切經中の勝」、『六波羅蜜經』の「總持第一」、『大日經』の「云何菩提」、『華嚴經』の「能く是の經を信ずる最も難しとなす」、『般若經』の「法性に會入すれば一事をも見ず」、『大智度論』の「般若波羅蜜最第一」、『涅槃論』の「今日涅槃理」等なり。此等の諸文は、『法華經』の「已今當」の三字に相似せる文なり。然りと雖も或は梵、帝、四天等の諸經に對當すれば、是れ諸經の王なり。或は小乘經に相對すれば、諸經の中の王なり。或は『華嚴』、『勝鬘等』の經に相對すれば、一切經の中の勝なり。全く五十餘年の大小、權實、顯密の諸經に相對して、是れ諸經の王の大王なるに非ず。所詮、所對を見て經經の勝劣を辨ふべきなり。強敵を臥伏するに、始めて大力を知見する是れなり。其上諸經の勝劣は釋尊一佛の淺深なり。全く多寶分身の助言を加ふるに非ず、私說を以て公事に混ずること勿れ。諸經は、或は二乘、凡夫に對揚して、小乘經を演說し、或は文殊、解脫月、金剛薩埵等の弘傳の菩薩に對向して、全く地涌千界の上行等には非ず。

【三】今『法華經』と諸經とを相對するに、一代に超過すること二十種之れあり、其中最要二あり、所謂る三五の二法なり。三とは三千塵點劫なり。諸經は或は釋尊の因位を明すこと、或は三祇、或は動踰塵劫、或は無量劫なり。梵王の云く、此土には廿九劫より已來知行の主なり。第六天、帝釋、四天王等も以て是の如し。釋尊と梵王等と、始めて知行

【四】諸佛の因位につきて、釋尊は此土の生養兩緣深厚の佛なるを論證す。

【五】諸佛の果位につきて、法華本門壽量品の佛は十方三世諸佛の大王にして、本佛と一切衆生とは父子の緣なり、この佛を棄つる諸宗並に念佛者等は邪義不孝なる旨を明す。

の[illegible]位之を評論す、[illegible]一指を舉げて之を降伏してより已來、[illegible]字を命せ、三界の衆生をして[illegible]に歸伏せしめ[illegible]なり。

【四】又諸佛の因位と釋尊の因位と、之を[illegible]するに、諸佛の因位は、或は[illegible]、或は[illegible]左[illegible]なり。釋尊の因位は、[illegible]三千塵點劫より已來、[illegible]一切衆生の[illegible]の本主なり。此世界の六道の一切衆生は、他土の他の菩薩に[illegible]の者一人もなし。『法華經』に云く、『爾の時に[illegible]、諸佛の所に在り。』[illegible]云く、『[illegible]方の佛別に[illegible]異なり。故に子父の[illegible]云ふ。[illegible]樂云く、『[illegible]、[illegible]佛の領に[illegible]る、況んや[illegible]昔の[illegible]別にして、[illegible]からざるをや。結緣は生の如く、[illegible]は養の如し。生養[illegible]れば、父子成せず。[illegible]日本國の一切衆生の、彌陀の[illegible]を[illegible]は、譬へば牛の子に馬の乳を呑め、[illegible]に天の月を[illegible]るが如し。

【五】又[illegible]位を[illegible]て之を[illegible]れば、諸佛如來は或は十劫、百劫、千劫已來の過去の佛なり。[illegible]日に[illegible]左[illegible]劫より已來、[illegible]の佛なり。大日如來、阿彌陀如來、藥師如來等の盡十方の諸佛は、我等が本師、[illegible]の所從等なり。天月の萬水に浮ぶ是れなり。『[illegible]』の十方[illegible]の[illegible]那、大日經、『金剛頂經』の兩界の大日如來は、『寶塔品』の多寶如來の左右の脇士なり。例せば世の王の兩臣の如し。此の多寶佛も、『壽量品』の教主釋尊の所從なり。此土の我等衆生は、五百塵點劫より已來、教主釋尊の愛子なり。不孝の失に依て今に覺知せずと雖も、他方の衆生には似る可からず。有緣の佛と結緣

【十八】法華經は末法を以て正意となし、就中日蓮を以て正意となすと斷ず

の衆生とは、譬へば天月の清水に浮ぶが如く、無縁の佛と衆生とは、譬へば聾者の雷の聲を聞き、盲者の日月に向ふが如し。而るに或る人師は釋尊を下して、大日如來を仰崇し、或る人師は世尊は無縁なり、阿彌陀は有縁なりと。或る人師の云く、「小乘の釋尊」と、或は「華嚴經」の釋尊」と、或は「法華經」迹門の釋尊」と。此等の諸師並に檀那等の、釋尊を棄てて諸佛を取るは、例せば阿闍世太子の頻婆娑羅王を殺し、提婆に付いて提婆達多に付きしが如し。二月十五日は釋尊御入滅の日、乃至十二月十五日も三界慈父の御遠忌たり。善導、法然、永觀の提婆達多に誑かされて阿彌陀佛の日と定め畢んぬ。四月八日は世尊御誕生の日なり、藥師佛に取り畢んぬ。我が慈父の忌日を他佛に替ふるは、孝養の者なるか、如何。『壽量品』に云く、「我も亦爲れ世の父、狂子を治せん者爲るの故に」等云云。天台大師云く、「本此の佛に從つて初めて道心を發し、亦此の佛に從つて不退の地に住す」乃至、「譬へば百川の海に潮すべきが如く、緣に牽かれて應生すること亦復是の如し」等云云。

【十八】 問うて曰く、『法華經』は誰人の爲に之を說くぞや。答へて曰く、『方便品』より『人記品』に至るまでの八品に二意あり。上より下に向つて次第に之を讀めば第一は菩薩、第二は二乘、第三は凡夫なり。『安樂行』より『勸持』、『提婆』、『寶塔』、『法師』と、逆次に之を讀めば、滅後の衆生を以て本と爲し、在世の衆生は傍なり。滅後を以て之を論ずれば、正法一千年、像法一千年は傍なり。末法を以て正と爲し、末法の中には、日蓮を以て

【七】末法爲正を本門につきて論じ略開は在世の爲、廣開は滅後のためなるを說く。

【不思議解脫】凡夫や小乘の者の思測することを得ぬ圓通自在の境界。

正と爲すなり」。問うて曰く、「其の證據如何」。答へて曰く、「『況滅度後』の文是れなり」。疑つて云く、「日蓮を正と爲す正文如何」。答へて云く、「『諸の無智の人有り、悪口罵詈等し、及び刀杖を加ふる者』等云云」。問うて云く、「自讃は如何」。答へて曰く、「喜び身に餘るが故に、堪へ難くして自讃するなり」。

【七】 問うて曰く、「本門の心如何」。答へて曰く、「本門に於て二の心有り。一には『涌出品』の略開近顯遠は、前四味並びに迹門の諸衆をして脫せしめんが爲なり。二には『涌出品』の動執生疑の一半、『壽量品』、『分別功德品』の半品、已上一品二半を廣開近顯遠と名く、一向に滅後の爲なり」。問うて曰く、「略開近顯遠の心如何」。答へて云く、「文殊、彌勒等の諸大菩薩、梵天、帝釋、日月、衆星、龍王等は、初成道の時より『般若經』に至る已來は、一人も釋尊の御弟子に非ず。此等の菩薩、天人は、初成道の時、佛未だ說法し給はざりし已前に、不思議解脫に住して、我と別圓二教を演說す。釋尊其後に『阿含』『方等』『般若』を宣說し給ふ。然りと雖も全く此等の諸人の得分に非ず。既に別圓二教を知りぬれば、藏通をも又知れり、勝は劣を兼ぬる是れなり。委細に之を論ぜば、或は釋尊の師匠なるか、善知識とは是れなり。釋尊に隨ふに非ず。『法華經』の迹門の八品に來至して、初めて未聞の法を聞いて、此等の人人は弟子と成りぬ。舍利弗、目連等は、鹿苑より已來、初發心の弟子なり。然りと雖も、權法のみを許せり。今『法華經』に來至して、實法を授與し給ふ。『法華經』の本門の略開近顯遠に來至して、『華嚴』よりの大菩薩、二乘、大梵天、

帝釋、日月、四天、龍王等位妙覺に隣り、又妙覺の位に入りしなり。若し爾らば今我等天に向つて之を見れば、生身の妙覺の佛が本位に居して、衆生を利益する是れなり。」

【八】問うて曰く「誰人の爲に廣開近顯遠の「壽量品」を演說するや。」答へて曰く「壽量品」の一品二半は、始めより終りに至るまで、正しく滅後の衆生の爲なり。滅後の中には、末法今時の日蓮等の爲なり。」疑つて云く「此の法門前代に未だ之を聞かず、經文に之れ有りや。」答へて曰く「予が智前賢に超えず。設ひ經文を引くと雖も、誰人か之を信ぜん。卞和が啼泣、伍子胥の悲傷是れなり。然りと雖も略開近顯遠、動執生疑の文に云く、「然るに諸の新發意の菩薩、佛の滅後に於て、若し是の語を聞かば、或は信受せずして、法を破する罪業の因緣を起さん」等云云。文の心は「壽量品」を說かざれば、末代の凡夫皆惡道に墮せん等となり。「壽量品」に云く、「是の好き良藥を今留めて此に在く」等云云。文の心は、上に過去の事を說くに似たる樣なれども、此文を以て之を案ずるに、滅後を以て本と爲し、先づ先例を引くなり。「分別功德品」に云く、「惡世末法の時」等云云。『神力品』に云く、「佛滅度の後、能く是經を持たんを以ての故に、諸佛皆歡喜して、無量の神力を現じ給ふ」等云云。「藥王品」に云く、「我が滅度の後、後の五百歲の中に、廣宣流布して、閻浮提に於て斷絕せしむること無けん」等云云。又云く「此經は則ち爲れ閻浮提の人の病の良藥なり」等云云。「涅槃經」に云く「譬へば七子の、父母平等ならざるに非ざれども、然も病める者に於て心即ち偏へに重きが如し」等云云。七子の中の第一第二は、一

【八】次に廣開は一向に滅後末法の爲なるを經を引て證し、末法の法華經は南無妙法蓮華經なる事を明す。

【卞和】支那楚の人、璞を王に獻ぜしに石と思はれて足を斬られ王を知るものなきを啼泣す。

【伍子胥】支那、春秋時代呉王に仕へて王を諫む怒を招き死を命ぜられ死後三年呉王、越に亡さる。

【動執生疑】彌勒菩薩地涌の菩薩の出現を見て迷の執の爲に疑を起せる段。

闡提謗法の衆生なり。諸病の中には、『法華經』を謗ずるが第一の重病なり。諸藥の中には、『南無妙法蓮華經』は第一の良藥なり。此の一閻浮提は縱廣七千由善那にして八萬の國之れ有り。正像二千年の間、未だ廣宣流布せざる『法華經』、當世に流布せしめずんば、釋尊は大妄語の佛、多寶佛の證明も泡沫に同じく、十方分身の佛の助舌も芭蕉の如くならん。」

【九】疑つて云く、「多寶の證明、十方の助舌、地涌の涌出、此等は誰人の爲ぞや」答へて曰く、「世間の情に云く、在世の爲と。」日蓮云く、舍利弗、目連等は、現在を以て之を論ずれば、智慧第一、神通第一の大聖なり。過去を以て之を論ずれば、金龍陀佛、青龍陀佛なり。未來を以て之を論ずれば、華光如來、靈山を以て之を論ずれば、三惑頓盡の大菩薩、本を以て之を論ずれば、內祕外現の古菩薩なり。文殊、彌勒等の大菩薩は過去の古佛現在の應生なり。梵、帝、日月、四天等は、初成已前の大聖なり。其上前四味四教、一言に之を覺りぬ。佛の在世には一人に於ても、無智の者之れ無し、誰人の疑を晴さんが爲に、多寶佛の證明を借り、諸佛舌を出し、地涌の菩薩を召さんや。方方以て謂れ無き事なり。隨つて經文に「況滅度後。」『法をして久住せしむ』等云云。此等の經文を以て之を案ずるに、偏へに我等が爲なり。隨つて天台大師當世を指して云く、『後の五百歲、遠く妙道に沾はん』。傳教大師當世を記して云く、『正像稍過ぎ已つて、末法太だ近きに有り。』等云云。『末法太だ近きに有り』の五字は、我が世は『法華經』流布の世に非ずと云ふ釋なり。

【由善那】梵語、（三三三）支那の四十里、日本の六里餘。

【芭蕉】芭蕉のやうに舌の破れ裂けるは虛言の證の故、

【九】諸佛證明、地涌涌出は偏に末法衆生の爲なるを說く。

【三惑頓盡】すべての迷妄罪過盡き果てたること。

【內祕外現】內に菩薩行を祕して外に聲聞なりと現ずるの謂。

【應生】佛菩薩の衆生救濟の爲めに現世に生るること。

【初成已前】釋尊の成道せらるる以前。

【一〇】末法爲正の教法の内容は本門の三大祕法なるを明す。

【不輕品】不輕菩薩、人の惡口罵詈するを忍び、ことさらに往て禮拜の行をなすことを說く。

【一一】五字の要法を取る所以を說く。

【支道林】支那晉朝の僧。達意的の講經もて名あり。

【一二】末法に妙法五字の流布する瑞相を說く。

【一〇】問うて云く「如來滅後二千餘年に、龍樹、天親、天台、傳教の殘し給へる所の祕法とは何物ぞや。」答へて曰く「本門の本尊と、戒壇と、題目の五字となり」問うて曰く、「正像等に何ぞ弘通せざるや。」答へて曰く「正像に之を弘通せば、小乘、權大乘、迹門の法門、一時に滅盡す可きなり。」問うて曰く「佛法を滅盡するの法、何ぞ之を弘通せんや」答へて曰く「末法に於ては、大小、權實、顯密、共に敎のみ有つて得道無し。一閻浮提皆謗法と爲り畢んぬ。逆緣の爲には、但だ『妙法蓮華經』の五字に限るのみ、例せば『不輕品』の如し。我が門弟は順緣、日本國は逆緣なり」

【一一】疑つて云く「何ぞ廣略を捨てて要を取るや」答へて曰く「玄奘三藏は略を捨てて廣を好み、四十卷の『大品經』を六百卷と成す。羅什三藏は廣を捨てて略を好み、千卷の『大論』を百卷と成せり。日蓮は廣略を捨てて肝要を好む。所謂る上行菩薩所傳の『妙法蓮華經』の五字なり。九包淵の馬を相するの法は、玄黃を略して駿逸を取る。支道林の經を講ずるには、細科を捨てて元意を取る等云云。佛既に寶塔に入つて二佛座を竝べ、分身來集し、地涌を召し出し、肝要を取つて末代に當てて五字を授與し給ふこと。當世に異議ある可からず」

【一二】疑つて云く「今世に此法を流布すること先相之れ有りや」答へて曰く「『法華經』に『如是相、乃至、本末究竟等』云云。天台の云く『蜘蛛掛りて喜事來り、䳭鵲鳴いて客人來る。』小事すら猶ほ以て是の如し、何に況んや大事をや」問うて曰く「若し爾れば

【一三】經證を擧げて諸難の起因は正法を壞り聖人を罰するに由ると說く。

其相これ有りや。」答へて曰く、「去ぬる正嘉年中の大地震、文永の大彗星、其より已後今に種種の大なる天變地夭、此等は此れ先相なり。『仁王經』の七難、二十九難、無量の難、『金光明經』、『大集經』、『守護經』、『藥師經』等の諸經に擧ぐる所の諸難皆之れ有り。但だ無き所は二三四五の日の出る大難なり。而るを今年佐渡の國の土民口口に云く、今年正月廿三日の申の時に、西方の二の日出現す。或は云く三の日出現す等云云。二月五日には東方に明星二つ並び出づる、其中間は三寸計り等云云。此の大難は日本國先代にも未だこれ有らざるか。『最勝王經』の王法正論品に云く、「變化の流星墮ち、二の日俱時に出で、他方の怨賊來つて、國人喪亂に遭ふ」等云云。『首楞嚴經』に云く、「或は二の日を見る或は兩の月を見る」等。『藥師經』に云く、「日月薄蝕の難」等云云。『金光明經』に云く、「彗星數數出で、兩日並び現じ、薄蝕恒無し」。『大集經』に云く、「佛法實に隱沒せば、乃至、日月明を現ぜず」等。『仁王經』に云く、「日月度を失ひ、時節返逆し、或は赤日出で、黑日出で、二三四五の日出で、或は日蝕して光無く、或は日輪一重二三四五重輪現はる」等云云。此の日月等の難は、七難、二十九難、無量の諸難の中に第一の大惡難なり。」

【一三】問うて曰く、「此等の大中小の諸難は、何に因て之れ起るや。」答へて曰く、「『最勝王經』に云く、「非法を行ずる者を見て、當に愛敬を生じ、善法を行ずる人に於て、苦楚して治罰す」等云云。『法華經』に云く、『涅槃經』に云く、『金光明經』に云く、「惡人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に、星宿及び風雨皆時を以て行はれず」等云云。『大集經』に云は

【一四】今の難古例に超ゆるの疑に答て、人の科の淺深は所弘の法の大小權實に由る、前代未聞の大難は未曾有の大白法、大聖出現の前兆なりと決す。

【弗舍密多羅王】印度の王、八萬四千の佛塔を毀ち、僧を殺さんとせしが果さずして怪死す。

【會昌天子】唐の武宗帝、佛教を迫害す。

く、『佛法實に隱沒し、乃至、是の如き不善業の惡王、惡比丘、我が正法を毀壞す。』等。『仁王經』に云く、『聖人去る時七難必ず起る。』等。又云く、『法に非ず律に非ずして比丘を繫縛すること、獄囚の法の如くす。爾の時に當つて法滅せんこと久しからじ。』等。又云く、『諸の惡比丘多く名利を求め、國王、太子、王子の前に於て、自ら破佛法の因緣、破國の因緣を說かん。其王別へずして、此語を信聽せん。』等云云。此等の明鏡を齎て、當時の日本國を引き向ふるに、天地を浮ぶること宛も符契の如し。眼有らん我が門弟は之を見よ。當に知るべし。此國に惡比丘等有つて、天子王子將軍等に向つて讒奏を企て、聖人を失ふ世なり。

【四】問うて曰く『弗舍密多羅王、會昌天子、守屋等は月支、震旦、日本の佛法を滅失し、提婆菩薩、師子尊者等を殺害す。其時何ぞ此の大難を出さざるや。』答へて曰く、『災難は人に隨つて大小有るべし。正像二千年の間の惡王、惡比丘等は、或は外道を用ゐ、或は道士を語らひ、或は邪神を信ず。佛法を滅失すること大なるに似たれども、其科尚ほ淺きか。今當世の惡王、惡比丘の佛法を滅失するは、小を以て大を打ち、權を以て實を失ふ。人心を削りて、身を失はず、寺塔を燒き盡さずして、自然に之を喪す。其失前代に超過せるなり。我が門弟之を見て、『法華經』を信用せよ。目を瞋らして鏡に向ふが如し、天の瞋るは人に失有ればなり。二の日並び出るは、一國に二の國王を並ぶる相なり、王と王との鬪諍なり。星の日月を犯すは、臣の王を犯す相なり。日と日と競ひ出るは、四天下一同の

諍論なり。明星並び出るは、太子と太子との諍論なり。是の如く國土亂れて後、上行等の聖人出現し、本門の三つの法門之を建立し、一天四海一同に『妙法蓮華經』の廣宣流布疑無からんか。」

教機時國鈔

【一】一に教とは、釋迦如來所說の一切の經、律、論五千四十八卷、四百八十帙、天竺に流布すること一千年。佛の滅後一千一十五年に當つて、震旦國に佛經渡る。後漢の孝明皇帝永平十年丁卯より、唐の玄宗皇帝開元十八年庚午に至る六百六十四歳の間に、一切經渡り畢りぬ。此の一切の經、律、論の中に小乘、大乘、權經、實經、顯教、密教あり。此等を辨ふべし。此の名目は論師人師よりも出でず、佛說より起る。十方世界の一切衆生、一人も無く之を用ゆべし。之を用ゐざる者は外道と知るべきなり。『阿含經』を小乘と說く事は『方等』、『般若』、『法華』、『涅槃』等の諸大乘經より出たり。『法華經』には一向に小乘を說きて法華經を說かずんば佛慳貪に墮すべしと說き給ふ。『涅槃經』には一向に小乘經を用ゐて佛を無常なりと云はん人は、舌口中に爛る可しと云云。

【二】二に機とは、佛教を弘むる人は必ず機根を知るべし。舍利弗尊者は、金師に不淨觀を教へ、浣衣の者には數息觀を教ふる間、九十日を經て所化の弟子、佛法を一分も覺ら

【一】縮遺四二四頁、弘長二年（四十一歳）伊豆流罪中の作、法を弘めて難に値ふこと佛說の如きを見て、法華經行者の自覺を得、日蓮宗旨顯現の由來、弘經者須知の弘經の因緣次第を五綱教判に依て示す。

【二】漢譯佛典の畢、並に類をあげ略して教判を示し佛の本意の經を暗示す。

【無常】常住ならぬこと、あてにならぬこと。

【三】機の知り難きを例し、末代の凡師の用意は相手によらず極善の教を以てせよとなり

【金師】鍛冶屋。
【不淨觀】物すべて不淨なりと觀じて貪欲を治す五停心の一の觀法。
【浣衣の者】洗濯屋。
【數息觀】五停心の一、息を數へて散心を治す。
【闡提】梵語一闡提の略、佛の正法を信ぜざるもの。
【毒鼓】鼓に毒を塗りて之を撃つに聞く者毒に中りて死す。教法の威力てよく人の好惡を超越して利益するに譬ふ。
【不輕菩薩】法華經第二十、不輕品に出づ。
【下種】衆生の心田に成佛の種子を蒔くこと。
【三】時の大切なる例、佛の說教の時によること、佛の滅後に正像末の三時あり。正像二千年後、末法は法華經の時と判ず。

ずして、還つて邪見を起し、闡提と成り畢んぬ。佛は金師に數息觀を教へ、浣衣の者に不淨觀を教へ給ふ故に、須臾の間に覺ることを得たり。智慧第一の舍利弗すら尚ほ機を知らず、何に況んや末代の凡師は機を知り難し。但し機を知らざる凡師は、所化の弟子に一向に法華經を教ふ可し。問うて云く「無智の人の中にして此經を說くこと莫れ」との文は如何。答へて曰く、機を知るは智人の說法する事なり。又謗法の者に向つては、一向に法華經を說く可し、毒鼓の緣と成さんが爲なり、例せば不輕菩薩の如し。亦智者と成る可き機と知らば、必ず先づ小乘を教へ、次に權大乘を教へ、後に實大乘を教ふ可し。愚者と知らば、必ず先づ實大乘を教ふ可し。信謗共に下種と爲ればなり。

●【三】三に時とは佛教を弘めん人は必ず時を知るべし。譬へば農人の秋冬田を作るに、種と地と人の功勞とは違はざれども、一分も益無く還つて損す。一段を作る者は少損なり、一町二町等の者は大損なり。春夏耕作すれば、上中下に隨つて皆分分に益有るが如し。佛法も亦復是の如し。時を知らずして法を弘むれば、益無き上、還つて惡道に墮するなり。佛出世し給ひて、必ず「法華經」を說かんと欲するに、縱ひ機有れども時無きが故に、四十餘年此經を說き給はず。故に經に云く「說く時未だ至らざるが故なり」等云云。佛の滅後の次の日より、正法一千年は持戒の者多く破戒の者少し。正法一千年の次の日より、像法一千年は破戒の者多く無戒の者少く、像法一千年の次の日より、末法一萬年は破戒の者少く無戒の者多し。正法には破戒無戒を捨てて、持戒の者を供養すべし。像法には無戒を

【三災七難】火、水、風の三、人衆疾疫、他國侵逼、自界叛逆、星宿變怪、日月薄蝕、非時風雨、過時風雨の七難、今一說による。

【無間大城】地獄中の最極苦の所、阿鼻地獄ともいふ、正法に背き信ぜざるもの墮つ。

【四】國に種類あり。我日本國はその中の何れかを明す。

【五】教法流布の前後とは宗教は必ず雙方の順序を知つて弘めよといふ也。第一の教綱の下に教法の價値を判じ、第五の序綱にその進化的應用を示す。

【六】五綱（五義）の第一、教の最高を說き、具は法華經なりと斷ず。是より以下五綱を具體的に示さる。

【國師】正法（正しき宗教）を以て

捨てて、破戒の者を供養すべし。末法には無戒の者を供養すること佛の如くすべし。但し「法華經」を謗ぜん者をば、正像末の三時に亙りて、持戒の者をも無戒の者をも破戒の者をも、共に供養すべからず。供養せば必ず國に三災七難起り必ず無間大城に墮す可きなり。法華經の行者の權經を謗するは、主君親師の所從子息弟子等を罰するが如し。權經の行者の「法華經」を謗するは、所從子息弟子等の主君親師を罰するが如し。又當世は末法に入つて二百二十餘年なり。權經念佛等の時か、「法華經」の時か、能く能く時刻を勘ふ可きなり。

【四】國に國とは、佛教は必ず國に依て之を弘むべし。國には寒國熱國、貧國富國、中國邊國、大國小國、一向偷盜國、一向殺生國、一向不孝國等之れ有り。又一向小乘の國、一向大乘の國、大小兼學の國も之れ有り。而るに日本國は一向に小乘の國か、一向に大乘の國か、大小兼學の國なるか、能く能く之を勘ふべし。

【五】五に教法流布の先後とは、未だ佛法渡らざる國には、未だ佛法を聽かざる者あり。既に佛法渡れる國には、佛法を信ずる者あり。必ず先に弘まれる法を知りて、後の法を弘むべし。先に小乘、權大乘弘まらば、後に必ず實大乘を弘むべし。先に實大乘弘まらば、後に小乘、權大乘を弘むべからず。瓦礫を捨てて金珠を取るべし。金珠を捨てて瓦礫を取ること勿れ。

【六】以上此の五義を知りて佛法を弘めば、日本國の國師と成る可きか。所以に「法華經」は一切經の中の第一の經王なりと知るは、是れ教を知る者なり。但し光宅の法雲、道

【光宅の法雲】一國を指導する人、光宅寺の法雲法師、支那南北朝時代の高僧。

【道場の慧觀】道場寺の慧觀、前者と同時代。

【清涼山の澄觀】唐の人、華嚴宗の第六祖、五臺山に居す、淸涼山ともいふ故。

【七】我日本國の機根は何ぞといふに答ふ。

【八】如來滅後第二千年後は正しく第五の五百歲に當る經文によれば此時法華經の廣宣流布すべしとの斷ず。

場の慧觀等は『涅槃經』は『法華經』に勝れたりと。清涼山の澄觀、高野の弘法等は『華嚴經』『大日經』等は『法華經』に勝れたりと。嘉祥寺の吉藏、慈恩寺の基法師等は『般若』『深密』等の二經は法華經に勝れたりといふ。天台山の智者大師只一人のみ、一切經の中に『法華經』勝れたりと立つるのみならず、法華經に勝れたる經之れ有りと云はばん者を諫曉せよ。止まずんば現世に舌口中に爛れ、後生は阿鼻地獄に墮す可し等云云。此等の相違を能く能く之を辨へたる者は、教を知れる者なり。當世の千萬の學者等一一之に迷へるか、若し爾らば教を知れる者少きか。教を知れる者之れ無ければ、法華經を讀む者之れ無し。法華經を讀む者之れ無ければ、國師となる者無きなり。國師となる者無ければ國中の諸人一切經の大小、權實、顯密の差別に迷ひ、一人に於ても生死を離るる者之れ無く、結句は謗法の者と成り、法に依て阿鼻地獄に墮する者は大地の微塵よりも多く、法に依て生死を離るる者は爪上の土よりも少し。恐る可し恐る可し。

【七】日本國の一切衆生は桓武皇帝より已來四百餘年、一向に『法華經』の機なり。例せば靈山八箇年の純圓の機なるが如し。天台大師、聖德太子、鑒眞和尚、根本大師、安然和尚、惠心等の記にこれ有り。是れ機を知れる者なり。而るに當世の學者の云く、日本國は一向に稱名念佛の機なり等云云。例せば舍利弗の機に迷ひて、所化の衆を一闡提と成せしが如し。

【八】日本國の當世は、如來の滅後二千二百二十餘年、後五百歲に當つて、妙法蓮華經廣宣流布の時刻なり。是れ時を知れるなり。而るに日本國の當世の學者或は法華經を抛ち

【勝意比丘】過去の師子音王佛の滅後、喜根菩薩の法華を説くを誹り、害して現身に地獄に墮つ。

【德光論師】印度の小乘毘婆沙論の學者、疑ありて神通力に依て彌勒を兜率天に訪ひ、彌勒を輕慢して教を受けずに去れりといふ。

【九】日本國は一向大乘法華の國なるを說く。

【二〇】日本佛教の歷史上に於て、桓武天皇の御宇以後は法華經弘まりて、權教はそれに劣れり。念佛等の邪見は惡知識なりと說く。

【所詮】肝要、第一義の意。

【崑崙山】支那西部の山脈、古來靈山と傳へられ、多くの名玉を產す。

【蓬萊山】支那の傳說の神仙の山、不死の藥ありと。

て一向に稱名念佛を行じ、或は小乘の戒律を竝へて叡山の大戒を蔑り、或は教外を立てて法華の正法を謗じ、此等は時に迷へる者か。例せば勝意比丘が喜根菩薩を謗じ、德光論師が彌勒菩薩を蔑りて、阿鼻の大苦を招きしが如し。

【九】日本國は一向に『法華經』の國たり。例せば舍衛國の一向に大乘たりしが如し。又天竺には、一向に小乘の國、一向に大乘の國、大小兼學の國も之れ有り。日本國は一向大乘の國たり、大乘の中にも法華經の國たる可きなり。（瑜伽論、肇公の記、聖德太子、傳教大師、安然等の記に之れ有り。）是れ國を知れる者なり。而るに當世の學者、日本國の衆生に向つて、一向に小乘の戒律を授け、一向に念佛者と成すは、譬へば寶器に穢食を入れたるが如し等云云。（寶器の譬は傳教大師の守護章に有り。）

【二〇】日本國には欽明天皇の御宇に、佛法百濟國より渡り始めしより、桓武天皇に至るまで二百四十餘年の間、此國に小乘、權大乘のみ弘まる。『法華經』ありと雖も、其義未だ顯はれず。例せば震旦國に法華經渡つて三百餘年の間、法華經ありと雖も、其義未だ顯はれざりしが如し。桓武天皇の御宇に傳教大師出現して、小乘、權大乘の義を破して法華經の實義を顯はせしより已來、又異議なく、純一に『法華經』を信ず。設ひ華嚴、般若、深密、阿含大小の六宗を學する者も、『法華經』を以て所詮と爲す。況んや天台、眞言の學者をや。何に況んや在家の無智の者をや。例せば崑崙山に石無く、蓬萊山に毒無きが如し。建仁より已來今に五十餘年の間、大日、佛陀、禪宗を弘め、法然、隆寛、淨土宗を興し、實大乘を破して權宗に付き、一切經を捨てて教外を立つ。譬へば珠を捨てて石を取り、地を離れ

【大日、佛陀】鎌倉時代の禪僧、大日房能忍とその弟子佛地房覺晏。
【二】以上の五義を知りて說の如く修行せば三類の敵人必ずあるべしとてその覺悟を經釋に依つて示す。
【三類】法華經の行者を害する法敵。俗衆道門僭聖の增上慢なり。一は無智の民衆、二は一般僧侶、三は自ら聖者と僭稱して世に崇めらるる者。
【師子尊者】佛滅一千二百年中印度の僧、罽賓に敎化す、國王之を迫害して首を斬る時、王の手墮ち七日にて悶死す。
【提婆菩薩】南印度、龍樹の弟子、外道と對論して之を破り、外道の弟子に刺し殺さる、菩薩諸弟子に報復を誡めて寂すといふ。

て空に登るが如し。此は教法流布の先後を知らざる者なり。佛誡めて云く「惡象に値ふとも惡知識に値はざれ」等云云。

【二】『法華經』の勸持品に後五百歲、二千餘年に當つて『法華經』の敵人三類ある可しと記し置き給へり。當世は後五百歲に當れり。日蓮佛語の實否を勘ふるに、三類の敵人之れ有り。之を隱さば法華經の行者に非ず、之を顯はさば身命定めて喪はんか。『法華經』第四に云く『而も此經は如來の現在にすら猶ほ怨嫉多し、況んや滅度の後をや』等云云。同第五に云く『一切世間、怨多くして信じ難し』。又云く『我身命を愛せず、但だ無上道を惜む』。同第六に云く『自ら身命を惜まず』云云。『涅槃經』第九に云く『譬へば王使の善く談論し、方便に巧なる、命を他國に奉け、寧ろ身命を喪ふとも終に王の所說の言教を匿さざるが如し。智者も亦爾なり。凡夫の中に於て、身命を惜まずして、要らず大乘方等を宣說すべし。』云云。章安大師釋して云く『寧ろ身命を喪ふとも教を匿さずとは、身は輕く法は重し、身を死して法を弘めよと』等云云。此等の本文を見れば、三類の敵人を顯はさずんば法華經の行者に非ず。之を顯はすは法華經の行者なり。而れども必ず身命を喪はんか。例せば師子尊者、提婆菩薩等の如くならん。云云。

二月十日　　日　蓮　花　押

【一】縮遺九五八頁、文永十年（五十二歳）の作。諸法實相の義を説き、事の一念三千。凡夫即佛、諸法即妙法の妙理を明せるもの。

【二】諸法實相の文を引いて、台家の釋を擧げて、當家の肝心の經意を闡顯す。

【極聖】佛をいふ。

【毘盧遮那】毘盧遮那佛の略、佛の法身を稱す。

【凡下】下劣の凡夫なり。

【三】此の法門の所出の人を論ず。

諸法實相鈔

【二】問うて云く、『法華經』の第一『方便品』に云く、「諸法實相、乃至、本末究竟等。」云云。此の經文の意如何。答へて云く、下地獄より上佛界までの十界の依正の當體、悉く一法も遺らず、『妙法蓮華經』の姿なりと云ふ經文なり。依報あるならば、必ず正報住すべし。釋に云く、「依報正報常に妙經を宣ぶ。」等云云。又云く、「實相は必ず諸法、諸法は必ず十如、十如は必ず十界、十界は必ず身土。」云云。又云く、「阿鼻の依正は全く極聖の自心に處し、毘盧の身土は凡下の一念を逾えず。」云云。此等の釋義分明なり、誰か疑網を生ぜんや。されば法界の姿、『妙法蓮華經』の五字に變る事なし。釋迦多寶の二佛と云ふも、妙法等の五字より用の利益を施し給ふ時、事相に二佛と顯れて、寶塔の中にして、うなづき合ひ給ふ。

【三】斯くの如き等の法門、日蓮を除きては申し出す人一人もあるべからず。天台、妙樂、傳教等は心には知り給へども、言に出し給ふまではなし、胸の中に思ひ隱らし給ふ。其も道理なり。付屬なき故に、時の未だ到らざる故に、佛の久遠の弟子にあらざる故に、地涌の菩薩の中の上首唱導、上行、無邊行菩薩等より外は、末法の始めの五百年に出現して、『妙法蓮華經』の五字を弘め給ふのみならず、寶塔の中の二佛竝座の儀式を作り顯

【三】本佛迹佛の體用、衆生と佛の關係を明す。

【四】實相の文につきて、釋の實意を明す。

【五】能弘の人の功德を明す。

すべき人なし。是れ即ち本門『壽量品』の事の一念三千の法門なるが故なり。

【三】されば釋迦多寶の二佛と云ふも、用の佛なり。『妙法蓮華經』こそ本佛にては御座し候へ。經に云く、『如來祕密神通之力』是れなり。『如來祕密』は體の三身にして、本佛なり。『神通之力』は用の三身にして、迹佛ぞかし。凡夫は體の三身にして、本佛、佛は用の三身にして、迹佛なり。然れば釋迦佛は、我等衆生の爲には主師親の三德を備へ給ふと思ひしに、然にてはよも候はず。返つて佛に三德を被らせ奉るは、凡夫なり。其故に、如來といふは、天台の釋に、『如來とは十方三世の諸佛、二佛三佛、本佛迹佛の通號なり。』と判じ給へり。此の釋に本佛といふは、凡夫なり。迹佛といふは、佛なり。然れども迷悟の不同にして、生佛異るに依つて、倶體倶用の三身といふ事をば衆生知らざるなり。さてこそ諸法と十界を擧げて、實相とは說かれて候へ。

【四】實相といふは『妙法蓮華經』の異名なり。諸法は『妙法蓮華經』といふ事なり。地獄は地獄のすがたを見せたるが、實相なり。餓鬼と變ぜば、地獄の實相にはあらず。佛は佛のすがた、凡夫は凡夫のすがた、萬法の當體のすがたが『妙法蓮華經』の當體なりといふ事を、諸法實相とは申すなり。天台云く『實相の深理、本有の妙法蓮華經なり』云云。此の釋の意は、實相の名言は迹門に主づけ、本有の『妙法蓮華經』といふは、本門の上の法門なり。此の釋能く能く心中に案じさせ給ひ候へ。

【五】日蓮末法に生れて、上行菩薩の弘め給ふべき所の妙法を、先立て粗弘め、作

【流類】流を汲む一類。
【經に云く】法華經法師品の文。
【六八】持經の人の功德を述て、信心を勸め、廣宣流布と成佛の決定を示す。

り著はし給ふべき本門『壽量品』の古佛たる釋迦佛、迹門『寶塔品』の時涌出し給ふ多寶佛、『涌出品』の時出現し給ふ地涌の菩薩等を、先づ作り顯し奉る事、予が分斉には過ぎたり。日蓮をこそ惱むとも、内證には如何が及ばん。されば斯る日蓮を此の島まで遠流しける罪、無量劫にも消えぬべしとも覺えず。『譬喩品』に云く、『若し其の罪を說かば劫を窮むるも盡きじ』とは是れなり。又日蓮を供養し、又日蓮が弟子檀那となり給ふ事、其の功德をば佛の智慧にても量り盡し給ふべからず。經に云く、『佛の智慧を以て多少を籌量すとも其の邊を得ず』といへり。地涌の菩薩の數にもや入りなまし。若し日蓮地涌の菩薩の數に入らば、豈に日蓮が弟子檀那、地涌の流類にあらずや。經に云く『能く竊かに一人の爲に法華經の乃至一句を說かば當に知るべし、是人は即ち如來の使、如來の所遣として如來の事を行ずるなり』と。豈に別人の事を說き給ふならんや。されば餘りに人の我を讃むる時は、如何やうにもなりたき意の出來し候なり。是れ讃むる處の言より起り候ぞかし。

【六八】末法に生れて『法華經』を弘めん行者は、三類の敵人有つて、流罪死罪に及ばん。然れども堪へて弘めん者をば、衣を以て釋迦佛覆ひ給ふべき也。諸天は供養を致すべきぞ、肩に掛け、背中に負ふべきぞ、大善根の者にてあるぞ、一切衆生の爲には大導師にてあるべしと、釋迦佛、多寶佛、十方の諸佛菩薩、天神七代、地神五代の神神、鬼子母神、十羅刹女、四大天王、梵天、帝釋、閻魔法王、水神、風神、山神、海神、普賢、文殊、日月等の諸尊たちに讃められ奉る間、無量の大難をば堪忍して候也。ほめられぬれば、我が

【七】法華經の行者、本化の自覺を披瀝し、勸發す。

【經に云く】法華經涌出品。

【令法久住】法華經寶塔品に出づ。

身の損ずるをも顧みず、毀られぬる時は、又我身の破るるをも知らず巣動ふ事は、凡夫のわざなり。

【七】如何にも今度信心を致して、『法華經』の行者にて、日蓮が一門と成り通し給ふべし。日蓮と同意ならば、地涌の菩薩たらんか。地涌の菩薩に定まりなば、釋尊久遠の弟子たる事豈に疑ふべきや。經に云く、『我久遠より來、是等の衆を敎化せり』とは是れなり。末法にして『妙法蓮華經』の五字を弘めん者は、男女は嫌ふべからず、皆地涌の菩薩の出現にあらずんば、唱へ難き題目なり。日蓮一人初めは『南無妙法蓮華經』と唱へしが、二人三人百人と、次第に唱へ傳ふるなり。未來も又然るべし。是れ豈に地涌の義にあらずや。剩へ廣宣流布の時は、日本一同に『南無妙法蓮華經』と唱へん事は大地を的とするなるべし。兎も角も『法華經』に名を立て、身を任せ給ふべし。釋迦佛、多寶佛、十方の諸佛、虛空にして二佛うなづき合ひ定めさせ給ひしは、別の事にはあらず。唯偏へに末法の『令法久住』の故なり。既に多寶佛は半座を分ちて釋迦如來に奉り給ひし時、『妙法蓮華經』の旛をさし顯し、釋迦、多寶の二佛大將として定め給ひし事、豈に僞りなるべきや。併ながら我等衆生を佛になさんとの御談合なり。日蓮は其の座には住し候はねども、經文を見候に少しも曇りなし。又其の座にもやありけん、凡夫なれば過去を知らず。現在は見えて『法華經』の行者なり。また未來は決定として、當詣道場なるべし。過去をも是を以て推するに虛空會にもやありつらん。三世各別あるべからず。

【八】法悦の情涙につきての實感を述ぶ。

【九】以上肝要の秘法を述べ畢つて行學二道を一信にて結歸す。

【八】此の如く思ひ續けて候へば、流人なれども喜悦はかりなし。嬉しきにも涙、つらきにも涙なり。涙は善惡に通ずるものなり。彼の千人の阿羅漢、佛の事を思ひ出でて涙を流しながら、文殊師利菩薩は『妙法蓮華經』と唱へさせ給へば、千人の阿羅漢の中の阿難尊者は、泣きながら『如是我聞』と答へ給ふ。餘の九百九十人は泣く涙を硯の水として、又『如是我聞』の上に『妙法蓮華經』と書きつけし也。今日蓮も亦かくの如し。斯る身となるも、『妙法蓮華經』の五字七字を弘むる故也。釋迦佛・多寶佛、未來日本國の一切衆生の爲に留め置き給ふ處の『妙法蓮華經』也と、斯の如く我も聞きし故ぞかし。現在の大難を思ひ續くるにも涙、未來の成佛を思うて喜ぶにも涙せきあへず、鳥と蟲とは鳴けども涙落ちず、日蓮はなかねども涙隙なし。此の涙世間の事にはあらず、但偏へに法華經の故なり。若し然らば甘露の涙とも云ひつべし。『涅槃經』には、父母兄弟妻子眷屬に別れて流す所の涙は、四大海の水よりも多しと云へ共、佛法の爲には一滴をも零さずと見えたり。『法華經』の行者となる事は、過去の宿習なり。同じ草木なれども、佛と作らるるは宿縁なるべし。佛なりとも權佛となるは、又宿業なるべし。

【九】此文には日蓮が大事の法門ども書きて候ぞ、よくよく見開かせ給へ、意得させ給ふべし。一閻浮提第一の御本尊を信じさせ給へ。相構へ相構へて、信心強く候うて、三佛の守護を蒙らせ給ふべし。行學の二道を勵み候べし。行學絶えなば佛法はあるべからず、我もいたし、人をも教化候へ。行學は信心より起るべく候。力あらば、一文一句な

【一】師弟の本地の契約を肯きあふ

【六萬恒沙】法華經涌出品に出づ。

【〇】縮遺九七三頁、文永十年（五十二歳）の作。經釋を擧げて、自ら末法の大導師、全世界の救主たるを證するもの。

【一】一嘆一喜の中佛の未來記、後五の眞文を悅ぶ。

りとも語らせ給ふべし。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、恐恐謹言。

五月十七日　日蓮　華押

【一】追申候。日蓮が相承の法門等、前に書き進らせ候ひき。殊に此の文には、大事の事ども記して進らせ候ぞ。不思議なる契約なるか、六萬恒沙の上首、上行等の四菩薩の變化歟、定めて故あらん。總じて日蓮が身に當っての法門、渡し參らせ候ぞ。日蓮もし六萬恒沙の地涌の菩薩の眷屬にもやあるらん。「南無妙法蓮華經」と唱へて、日本國の男女を導かんと思へばなり。經に云く、「一名上行、乃至唱導の師」とは説かれ候はぬか。眞に宿縁の追ふ處、予が弟子となり給ふ。此の文を心得て、日蓮が己證の法門等書きつけて候ぞ、とどめ畢んぬ。

最蓮房御返事

顯佛未來記

【一】「法華經」の第七に云く、「我が滅度の後、後の五百歳の中に閻浮提に廣宣流布して斷絶せしむること無けん」等云云。予一たびは歎いて云く、「佛滅後既に二千二百二十餘年を隔つ。何なる罪業に依て佛の在世に生れず、正法の四依、像法の中の天台、傳教等にも値はざるや。」亦一たびは喜んで云く、「何なる幸ありて後五百歳に生れ、此の眞文を拜見す

【二】擬ぶ所以を明すに釋を引いて。留難あるを示す。

るにしぞ。在世も無益なり、前四味の人は未だ「法華經」を聞かず、正像も又由無し、南三北七並びに華嚴、眞言等の學者は「法華經」を信ぜず。天台大師曰く、「後の五百歳、遠く妙道に沾はん。」等云云。廣宣流布の時を指すか。傳教大師云く、「正像稍過ぎ已つて、末法太だ近きに有り。」等云云。末法の始めを願樂するの言なり。時代を以て果報を論ずれば、龍樹、天親に超過し、天台、傳教にも勝るるなり。

【三】問うて云く「後五百歳は汝一人に限らず、何ぞ殊に之を喜悦せしむるや。」答へて云く、「法華經」の第四に云く、「如來の現在にすら猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや。」天台大師云く、「何に況んや未來は理化し難きに在るをや。」妙樂大師云く、「理化し難きに在りとは、此理を明すことは、意衆生の化し難きを知らしむるに在り。」智度法師云く、「俗に良藥口に苦しと言ふが如く、此經は五乘の異執を廢して、一極の玄宗を立つ。故に凡を斥け聖を呵し、大を排し小を破る。乃至、此の如きの徒、悉く留難を爲す。」等云云。傳教大師云く、「代を語れば則ち像の終り、末の始め、地を尋ぬれば唐の東羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生、闘諍の時なり。經に云く、猶多怨嫉況滅度後と、此言良に以有るなり。」等云云。此の傳教大師の筆跡は其時に當るに似たれども、意は當時を指すなり。「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」の釋は心ある哉。經に云く、「惡魔魔民、諸天龍夜叉鳩槃荼等、其便りを得ん。」云云。又云く、「若は夜叉、若は羅刹、若は餓鬼、若は富單那、若は吉遮、若は毘陀羅、若は犍馱、若は烏摩勒伽、若は阿跋摩羅、若は夜叉吉遮、若は人吉

【三】留難の所以を正像末に經て論じ、末法廣布の大白法と能弘の人とを以て先聖の例と對す。

【教行證】教とは佛の教、行は教に依る修行、證は修行に因りて證悟する所あるをいふ。

遮し」等云云。此文の如きは先生に四味三教、乃至外道、人天等の法を持得して、今生に惡魔、諸天、諸人等の身を受けたる者が、圓實の行者を見聞して、留難を致す可きの由を說くなり。」

【三】疑つて云く「正像の二時を末法に相對するに、時と機と共に正像は殊に勝るるなり。何ぞ其の時機を捨てて偏へに當時を指すや。」答へて云く、「佛意測り難し、予未だ之を得ず。試みに一義を案じ、小乘經を以て之を勘ふるに、正法千年は教行證の三つ具さに之を備ふ。像法千年には教行のみ有つて證無し、末法には教のみ有つて行證無し」等云云。「法華經」を以て之を探るに、正法千年に三事を具するは、在世に於て「法華經」に結緣する者、其後正法に生れて小乘の教行を以て緣と爲し、小乘の證を得るなり。像法に於ては在世の結緣微薄の故に、小乘に於て證する人無く、權大乘を以て緣と爲して十方の淨土に生ず。末法に於ては大小の益共に之れ無し、小乘には教のみ有つて行證無し。大乘には教行のみ有つて冥顯の證之れ無し。其上正像の時所立の權小の二宗、漸漸末法に入つて執心彌強盛にして、小を以て大を打ち、權を以て實を破り、國土に大謗法の者充滿するなり。佛教に依て惡道に墮つる者は大地の微塵よりも多く、正法を行じて佛道を得る者は爪上の土よりも少し。此時に當つて諸天、善神、其國を捨離し、但邪天、邪鬼等有つて、王、臣、比丘、比丘尼等の身心に入住し、「法華經」の行者を罵詈毀辱せしむ可き時なり。而りと雖も佛の滅後に於て、四味三教等の邪執を捨てて眞大乘の「法華經」に歸せ

【我深敬】法華經常不輕品。二十四字とは、「我深敬汝等、不敢輕慢、所以者何、汝等皆行菩薩道、當得作佛」

【四】法華經の行者の證文を示し、佛記を助くるの人日蓮の他になきを陳ず。

【四禪比丘】四禪を得て慢心を生じ羅漢の位に達せりと思ひて地獄に墮つ。

ば、諸天、善神並びに地涌千界等の菩薩、法華の行者を守護せん。此の人は守護の力を得て「本門の本尊」、「妙法蓮華經」の五字を以て閻浮提に廣宣流布せしめんか。例せば威音王佛の像法の時、不輕菩薩「我深敬」等の二十四字を以て彼の土に廣宣流布し、一國の杖木等の大難を招きしが如し。彼の二十四字と、此の五字と、其の語殊なりと雖も其意是れ同じ。彼の像法の末と、是の末法の初と全く同じ。彼の不輕菩薩は初隨喜の人、日蓮は名字の凡夫なり。

【四】疑つて云く、「何を以て之を知る、汝を末法の初の法華經の行者なりと爲すことを。」答へて云く、『法華經』に曰く、「況んや滅度の後をや。」又云く、「諸の無智の人の、惡口罵詈等し、及び刀杖を加ふる者あらん。」又云く、「數數擯出せられん。」又云く、「一切世間、怨多くして信じ難し。」又云く、「杖木瓦石もて之を打擲す。」又云く、「惡魔魔民、諸天龍夜叉、鳩槃荼等其便りを得ん。」等云云。此の明鏡に付いて佛語を信ぜしめん爲に、日本國中の王臣四衆の面目に引き向へたるに、予よりの外には一人も之れ無し。時を論ずれば末法の初め一定なり。然れば則ち日蓮無くば、佛語は虚妄と成らん。」難じて云く、「汝は大慢の法師にして大天に過ぎ、四禪比丘にも超えたり、如何。」答へて云く、「汝日蓮を蔑如するの重罪、又提婆達多に過ぎ、無垢論師にも超えたり。我が言は大慢に似たれども、佛記を扶け如來の實語を顯はさんが爲なり。然りと雖も日本國中に日蓮を除き去つて誰人を取り出して『法華經』の行者とせん。汝日蓮を謗らんとして佛記を虚妄にす。豈に大惡人に非ず

すや。

【五】疑つて云く、「如來の未來記汝に相當れり。但し五天竺並びに漢土等にも法華經の行者之れ有るか如何。」答へて云く、「四天下の中に全く二日無し、四海の内豈に兩主有らんや。」疑つて云く、「何を以て汝之を知る。」答へて云く、「月は西より出でて東を照し、日は東より出でて西を照す。佛法も又以て是の如し。正像には西より東に向ひ、末法には東より西に往く。妙樂大師の云く、豈に中國に法を失つて、之を四維に求むるに非ずや。」等云云。天竺に佛法無き證文なり。漢土に於て高宗皇帝の時、北狄東京を領して、今に一百五十餘年、佛法王法共に盡き了んぬ。漢土の大藏の中に小乘經は一向これ無く、大乘經は多分之を失す。日本より寂照等少少之を渡す。然りと雖も傳持の人無ければ、猶ほ木石の衣鉢を帶持せるが如し。故に遵式の云く、「始め西より傳ふ、猶ほ月の生ずるが如し。今復東より返る、猶ほ日の昇るが如し。」等云云。此等の釋の如くんば、天竺漢土に於て佛法を失せること勿論なり。」問うて云く、「月氏、漢土に於て佛法無きことは之を知れり、東西北の三洲に佛法無きことは何を以て之を知る。」答へて云く、「法華經の第八に云く、「如來の滅後に於て、閻浮提の内に廣く流布せしめて斷絶せざらしめん」等云云。内の字は三洲を嫌ふ文なり。」

【六】問うて曰く、「佛記既に此の如し、汝が未來記は如何。」答へて曰く、「佛記に順じて之を勘ふるに、既に後五百歲の始めに相當れり。佛法必ず東土の日本より出づ可きなり。」

【五】意につきて月氏漢土に佛法無きを示し、四洲の中三洲に無きを示す、以て一世界の中日本國のみにあることを明す。

【遵式】支那天台宗の學者。

【東西北の三洲】世界の中央にある須彌山、高さ八萬四千由旬その四圍の海に四洲あり、東弗于逮、西瞿耶尼、南閻浮提、北鬱單越等に人類住す、吾人は南の洲にありと、印度の世界是なり。

【六】佛記に順じて、法華の未來記を示し、日本の佛法興るべきを明す。

【七】法悦を述べて一切を救はんの願を起す。

其の前相として、必ず正像に超過せる大瑞現じて有るか。所謂る佛生の時、轉法輪の時、入涅槃の時、吉瑞凶瑞共に前後に絕えたる大瑞なり。佛は此れ聖人の本なり。經經の文を見るに、佛の御誕生の時は、五色の光氣四方に遍くして、夜も晝の如し。佛の御入滅の時には、十二の白虹南北に亘り、大日輪光無くして闇夜の如くなりき。其の後正像二千年の間、內外の聖人生滅有れども、此の大瑞には如かず。而るに去ぬる正嘉年中より今年に至るまで、或は大地震、或は大天變、宛も佛陀の生滅の時の如し。當に知るべし、佛の如き聖人生れ給はんか、滅し給はんか、大虛に亘つて大彗星出づ、誰の王臣を以て之に對せん。大地を傾動して三たび振裂す、何れの聖賢を以て之に課せん。當に知るべし、通途世間の吉凶の大瑞には非る可し。惟れ偏へに此の大法興廢の大瑞なり。天台云く、『雨の猛きを見て龍の大なることを知り、華の盛なるを見て池の深きことを知る』等云云。妙樂の云く、『智人は起を知り、蛇は自ら蛇を識る』等云云。日蓮此の道理を存じて既に二十一年なり。日來の災、月來の難、此の兩三年の間の事、既に死罪に及ばんとす。今年今月萬が一も身命を脫れ難きなり。世の人疑ひ有らば、委細の事は弟子に之を問へ。

【七】幸なる哉、一生の内に無始の謗法を消滅せんことよ。悅ばしい哉、未だ見聞せざる教主釋尊に侍へ奉らんこと。願くは、我を損する國主等をば最初に之を導かん。我を扶くる弟子等をば、釋尊に之を申し、我を生める父母等には、未だ死せざる已前に此の大善を進めん。但し今夢の如く『寶塔品』の心を得たり。此經に云く、『若し須彌を接つて他

【八】三國四師の自覺と使命を述ぶ

【三國四師】法華經の行者、眞佛教の正統。

三國四師（釋尊—印度、天台—支那、傳教・日蓮—日本）

【一】縮遺五四一頁、文永二年（四十四歲）の作。聖人と愚者との問答に托して、當時盛なる四宗（律、念佛、眞言、禪）の立義を破責し、法華經の肝要の信行を認め、邪教折伏の正義を立つるを旨趣とす。

【一】無常觀より出發す。

【白駒】日影をいふ、光陰といふに同じ。

方無數の佛土に擲げ置かんも、亦未だ爲れ難しとせず。乃至、若し佛の滅後に惡世の中に於て能く此經を說かん、是れ則ち爲れ難し。」等云云。傳教大師云く、「淺きは易く深きは難しとは釋迦の所判なり。淺きを去つて深きに就くは、丈夫の心なり。

【八】天台大師は釋迦に信順し、法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し、法華宗を助けて日本に弘通す。」等云云。安州の日蓮は恐らく三師に相承し、法華宗を助けて末法に流通す。三に一を加へて、三國四師と號けん。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

文永十年太歲癸酉後五月十一日　桑門日蓮記之

聖愚問答鈔上

【一】夫れ生を受けしより死を免れざる理りは、賢き帝より卑しき民に至るまで、人ごとに是を知るといへども、實に是を大事とし、是を歎く者若干萬人に一人も有がたし。無常の現起するを見ては、疎きをば恐れ親きをば歎くといへども、先立ははかなく留るは賢きやうに思ひて、昨日は彼事、今日は此事とて徒らに世間の五欲に纏されて、白駒の影過るをやすく、羊の歩み近づく事を知らずして、空く衣食の獄につながれ、徒らに名利の穴に落ち、三途の舊里に歸り、六道の巷に輪回せん事心あらん人誰か歎かざらん、誰か悲まざらん。

【北邙】[illegible]

【一】出離、解脱の上を求む。

【愛別離苦】愛する者の互に別離する苦。

【怨憎會苦】怨み憎めるものの相ひ會はざるを得ぬ苦。

【求不得苦】欲望不滿の苦。

【五陰盛苦】肉體的感覺的等の五の要が熾盛となりて苦を生ず。

【五衰の苦】天人もその果報衰へると五種の衰相を示す。衣裳に垢つき、頭上の花萎み、身に臭氣發し、腋下に汗滴り、本座を樂まずと。

嗚呼老少不定は娑婆の習ひ、會者定離は浮世の理りなれば始めて驚くべきにあらねども、正盛の[illegible]を早うせし人のありさまを見るに、或は幼き子を振り捨て、或は老たる母を留めをき、未だ壯年の齢にて黄泉の旅に趣く心の中、さこそ悲しかるらめ、行くも悲み留るも悲む。彼の楚王が神女を伴ひし情を一時の夢に覺し、劉氏が仙客に値ひし思ひをも七世の後胤に得む。予が若き昔、ただに臨て[illegible]を休めん[illegible]山の[illegible]しき心なれば身には思ひなかれかしと云けん人の言さへ、思ひ出られて、末の代の記念にもとて、難波のもしほ草をかきあつめ、水くきのあとを形の如くしるしをく也。

【一】悲しい哉、痛ましい哉、我等無始より已來無明の酒に醉て、六道四生に輪廻して或時は焦熱、大焦熱の炎に咽び、或時は紅蓮、大紅蓮の氷にとぢられ、或時は餓鬼飢渇の悲みに値うて五百生の間飲食の名をも聞かず、或時は畜生殘害の苦みを受て小さきは大きなるにのまれ、短きは長きにまかる。是を殘害の苦と云ふ。或時は修羅闘諍の苦をうけ、或時は人間に生れて八苦をうく、生、老、病、死、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦等也、或時は天上に生れて五衰をうく。此の如く三界の間を、車輪の如く廻り、父子の中にも親の親たる子の子たる事を悟らず。夫婦の會遇へるも會遇うたる事をしらず。迷へる事は羊目に等く、暗き事は狼眼に同じ。我を生たる母の由來をもしらず。生を受たる我身も死の終りを知らず。嗚呼受け難き人界の生をうけ、値ひ難き如來の聖教に値ひ奉れり、一眼の龜の浮木の穴にあへるが如し。今度若し生死の緣を切らず、三界の籠樊を出で

【三】先づ戒律を敎ふ。

【菩提心】衆生救濟の大心、又は佛を渴仰するの心、成佛の發心。

【伶倫】支那の昔の樂師、樂を聞き分くる能力勝れし人。理の正邪をきき別くるにたとふ。

【離朱】支那上古黃帝の世の人。視力勝れ、眼力徹底の例に引かる。

【良觀】眞言律僧極樂寺にありて慈善事業をなす。

ざらん事、悲しかるべし。悲しかるべし。

【三】爰に或智人來つて示して云く「汝が嘆く所は實に理あり。此の如く無常の理を思ひ知り善心を發す者は麟角よりも希なり。此道理を覺らずして惡心を發す者は牛毛よりも多し、汝早く生死を離れ菩提心を發さんと思はば吾最第一の法を知れり、志あらば汝が爲めに之を說て聞かしめん」其時愚人座より起て掌を合せて云く「我は日來外典を學し、風月に心をよせて未だ佛教と云ふ事を委細に知らず、願くは上人我が爲めに之を說き給へ」其時上人の云く「汝耳を伶倫が耳に寄せ目を離朱が眼にかつて心を靜めて我が教へを聞け、汝が爲めに之を說かん。夫れ佛教は八萬の聖教多けれども諸宗の父母たる戒律にはしかず。されば天竺には世親、馬鳴等の薩埵、唐土には慧曠、道宣と云し人是を重んず。我朝には人皇四十五代聖武天皇の御宇に鑒眞和尚此宗と天台宗と兩宗を渡して東大寺の戒壇之を立つ。爾しより已來當世に至るまで崇重年舊り尊貴日に新なり。就中極樂寺の良觀上人は上一人より下萬民に至まで、生身の如來と是を仰ぎ奉る。彼の行儀を見るに實に以て爾也。飯島の津まで六浦の關米を取ては諸國の道を作り、七道に木戸を構へ、人別の錢を取ては諸河に橋を渡す。慈悲は如來に齊しく德行は先達に越えたり。汝早く生死を離れんと思はば五戒二百五十戒を保ち慈悲を深くして物の命を殺さずして、良觀上人の如く道を造り橋を渡せ、是れ第一の法也。汝持たんや否や」愚人彌掌を合せて云く「能能持ち奉らんと思ふ。具さに我が爲めに是れを說き給へ。抑五戒二百五十戒と云ふ事は

【破戒】律を破して之を言ふ。【知音】知人。【居士】在家の佛教信者。有徳の人。

【行雲廻雪】美人の形容。【利錢借請】金貸業をいふ。【敎行】佛の敎と爲す行と。

我等未だ有智せず、委細に是を示し給へ」智人云く、「汝は無下に愚也。五戒二百五十戒と云ふ事は誰人も是を知る。然れども汝が爲に之を説かん。五戒とは一には不殺生戒、二には不偷盗戒、三には不妄語戒、四には不邪婬戒、五には不飲酒戒是れ也。二百五十戒の相は多き間之を略す。」其時に彼人禮拜恭敬して云く「我今日より深く此法を持ち奉るべし」と。

【四】爰に予が年來の知音、或所に隱居せる居士一人あり。予が愁嘆を訪はんが爲に來れるが、始には往事渺茫として夢に似たる事を語り、終には行末の冥冥として辨へ難き事を談ず。悼りを散じ、思ひを延べて後、予に問うて云く、「抑人の世にある誰か後世を思はざらん。貴邊何なる佛道をか持ちて出離を願ひ、又亡者の後世をも訪ひ給ふや」。予答へて云く、「一日或上人來つて予が爲に二百五十戒を授け給へり。實に以て心肝に染みて貴し。我深く良觀上人の如く及ばぬ身にも、淺き道を作り、深き河には橋を渡さんと思へる也」其時居士示して云く、「汝が道心貴きに似て愚か也。今談ずる處の法は淺ましき小乘の法なり。されば佛は則ち八種の喩を設け、文殊は又十七種の差別を宣べたり。或は螢火日光の喩を取り、或は水精瑠璃の喩あり。爰を以て三國の人師も其破文一にあらず。尊重の聖、必ず人の敬ふに依て法の貴きにあらず。されば佛は「法に依て人に依らざれ」と定め給へり。我れ傳へ聞く、上古の持律の聖者の振舞は、殺を言ひ收を言ふには知淨の語あり、行雲廻雪には死屍の想をなす。而るに今の律僧の振舞を見るに布絹財寶を貯へ、利錢借請を業とす。敎行既に相違せり、誰か是を信受せん。次に道を作り橋を渡す

【鹿苑施小云云】鹿苑にて初めて佛が説法せられし小乗法は法華經の資所へ導く爲め、途中に於て假に城を化現して見せられし如きもの、法華經に來つては小乗の途といふもの別になし。
【無惡不造】惡として造らざるなき大惡人。
【惠心僧都】比叡山の學僧源信。文は往生要集に出づ
【法然上人】淨土宗の開源宗。文は選擇集を指す。

事、還て人の歎き也。飯島の津まで六浦の關米を取る、諸人の歎き是れ多し。諸國七道の木戸、是れ旅人の煩ひ、只此事に在り、眼前の事なり。汝見ざるや、否や。」愚人色を作して云く、「汝が智分を以て上人を謗じ奉り、其法を誹る事謂れ無し。知りて云ふ歟、愚にして云る歟。恐ろし恐ろし。」其時居士咲て云く、「嗚呼愚なり愚なり。彼の宗の僻見をあらあら申すべし。抑も教に大小あり、宗に權實を分てり。鹿苑施小の昔は化城の戸ぼそに導くといへども、靈鷲開顯の筵には其得益更に之れなし。」其時愚人忙然として居士に問うて云はく、「文證現證實に以て然也。さて何なる道を修行してか生死を離れ、速に佛に成らんや。」居士示して云く、「我在俗の身なれども粗ぼ佛道を修行して、幼少より多くの人師の語を聞き、粗ぼ經教をも開き見るに、末代我等が如くなる無惡不造のためには念佛往生の教へにしくはなし。されば惠心僧都は『夫れ往生極樂の教行は濁世末代の目足也』と云ひ、法然上人は諸經の要文を集めて一向專修の念佛を弘め給ふ。中にも彌陀の本願は諸佛超過の崇重也。始め無三惡趣の願より、終り得三法忍の願に至るまで、いづれも悲願目出たけれども、第十八の願殊に我等が爲に殊勝也。又十惡五逆をも嫌はず一念多念をも撰ばず。されば上一人より下萬民に至るまで此の宗をもてなし給ふ事他に異なり。又往生の人それ幾ぞや。」其時愚人の云く、「實に小を捨て大を慕ひ、淺を去て深に就くは佛教の理のみに非ず、世間にも是れ法也。我早く彼宗にうつらんと思ふ。委細に彼旨を語り給へ。彼佛の誓願の中に五逆十惡をも簡はずと云へる五逆とは何等ぞや。十惡とは如何。」智人の云く、「五逆とは殺

【一五】念仏を破して真言を敎ふ。

【始には狂言】まづ初に真言宗の教相によりて法華経は第三戯論なりと立つるを狂言なりと論す

【秘法】秘密なる法

【自受法楽】自ら證得の法門を受け樂むこと。

【一六】教を破して禅を敎ふ。

文、[illegible]、[illegible]心、[illegible]心、[illegible]、[illegible]と云ふ也。[illegible]と云ふは[illegible]、[illegible]、[illegible]也。[illegible]とは[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]也。[illegible]と云ふ也。」愚人の云く、「我今[illegible]、今日より[illegible]往生に[illegible]を[illegible]くべき也」と。

【一五】爰に愚人又云く、「以ての外の[illegible]にいみじき尊き[illegible]の行人あり。[illegible]も予が嘆きを[illegible]て、[illegible]に[illegible]して、始には狂言、終には[illegible]の[illegible]を示し、後には顕密二宗の法門を談じて、予に問うて云く、『汝は何なる仏法をか修行し、何なる経論をか読誦し奉るや』。予答へて云く、『我れ一日[illegible]る所の教へに依て浄土の三部経を読み奉り、西方極楽の教主に憑を深く懸る也』。行者の云く、『仏教に二種有り。一には顕教、二には密教也。顕教の極理は密教の初門にも及ばず云云。汝が帰心の法を聞けば、浄土の顕教也。我が所持の法は大日覚王の秘法也。實に三界の火宅を恐れ、寂光の宝台を願はば、須く顕教を捨て密教に就くべし』。愚人驚いて云く、『我れいまだ顕密二道と云ふ事を聞かず。何なるを顕教と云ひ、何なるを密教と云へるや』。行者の云く、『予は是れ頑愚にして敢て賢を存ぜず。然りと雖ども今一二の文を挙げて汝が蒙昧を挑げん。顕教とは舎利弗等の請に依て応身如来の説き給ふ諸教也。密教とは自受法楽の為めに法身大日如来の金剛薩埵を所化として説き給ふ処の「大日経」等の三部也』。愚人の云く、『實に以て然なり、先非を翻して貴き教に付き奉らん』と思ふ也。」

【一六】又爰に萍の如く諸州を廻り蓬の如く県県に移する非人のそれとも知らず来り、門

の柱に寄り立て、笑を含んで語る事なし。不審をなして是を問ふに始には云ふ事なし、後に強て問を立つる時、彼が云く、「月蒼々として風忙々たり」と、形質常に異に言語通せず、其の至極を尋ぬれば當世の禪法是也。予彼人の有様を見、其言語を聞て佛道の眞因を問ふ時、非人の云く、「修多羅の教は月をさす指、教網は是れ言語に滯る妄事なり。我が心の本分に安定と出で立つ法は其名を禪と云ふ也」。愚人云く、「願くは我れ聞かんと思ふ」。非人云く、「實に其志深くば壁に向ひて坐禪して本心の月を澄しめよ。爰を以て西天には二十八祖系亂れず、東土には六祖の相傳明白也。汝此を悟らずして教網に滯る、不便不便。是心即佛、即心是佛なれば此身の外に更に何にか佛あらんや」。

【七】愚人此の語を聞いてつくづくと諸法を觀じ、閑かに義理を案じて云はく、「佛教萬差にして理非明め難し、宜なるかな常啼は東に請ひ、善財は南に求め、藥王は臂を燒き、樂法は皮を剝ぐ、善知識實に値ひ難し。或は教內と談じ或は教外と云ふ。此の理を思ふに未だ淵底を究めずして法水に臨む者は深淵の思を懷き、人師を信ずる類は薄氷の心を成す。爰を以て金言には「依法不依人」と定め、又「爪上土」の譬あり。若し佛法の道理を知る人あらば尋て師とすべし、來て學ぶべし。夫れ人界に生を受くるを天上の爪に譬へ、佛法の値遇は浮木の穴に類せり。身を輕くして法を重んずべし」と思ふに依て當山に來り、咲きに引れて諸寺を回る、是に任せて一の巖窟に至るに後には青山峨峨として松風、常、樂、我、淨を奏し、前には碧水湯湯として岸うつ波、四德波羅蜜を響かす。深谷に開敷せ

【形質】形體のこと。
【七】教說多岐に迷うて求法の業に出で、法華の行人にあふ。
【常啼】大品經に出づ、常に啼いて法を求めしによる。
【善財】華嚴經入法界品。長者の子。南方に求法し、一百十城を經、五十餘人に及ぶ。
【樂法】無佛の世に法を求む、魔現れて骨を筆とし、皮を紙とし、血を墨として寫さば、佛の偈を說かんと、その如くす、魔身亡ぶ、時に佛現れて法を說く。
【藥王】法華經、藥王品に出づ。身を燒いて佛を供養す。
【未だ圓底を云云】未だ道理を深く悟らずして教法を見れば、ただ深遠及ぶべからずと思ひ、法を說くものを見

ては薄氷の如く危く想ふ。

【人界に生を云云】人に生れて佛法に値ふこと、天上より絲を垂れて海に浮ぶ木の孔に通すが如し。

【四德波羅蜜】常樂我淨の四德以て一乘を莊嚴す。

【商山四皓】漢の賢君子、四人、年老鬚眉皓白。故に四皓といふ、商山にかくる。

【非想の雲の上】天上界の最上、非想天をいふ。

る花も中道實相の色を顯し、廣野に綻ぶる梅も一如三千の薫を添ふ。言語道斷心行所滅せり。商山の四皓の所居とも謂ひつべく、又知らず古佛經行の跡なる歟。景雲朝に立ち靈光夕に現ず。嗚呼心を以て計るべからず、詞を以て宣ぶべからず。予此砌に沈吟とさまよひ、彷徨とたちもとをり、徘徊とたたずむ。此の處に忽然として一りの聖人坐ます。其の行儀を拜すれば法華讀誦の聲は深く心肝に染み、閑窓の戸ぼそを伺へば玄義の牀に臂をくたす。爰に聖人、予が求法の志を酌みて詞を和げ予に問うて云く「汝なにに依て此深山の窟に至れるや。」予答へて云く「生を輕くして法を重んずる也。」聖人問て云く「其行法如何。」予答へて云く「本より我は俗塵に交りて未だ出離を辨へず。適善知識に値うて、始には律、次には念佛、眞言并に禪、此等を聞くといへども未だ眞偽を辨へず。」聖人云く「汝が詞を聞くに實に以て然也。身を輕くして法を重くする者は先聖の教へ、予が存する所也。抑も上は非想の雲の上、下は奈落の底までも生を受て死を逃るる者やはある。然れば古人の詞にも「朝に紅顔あつて世路に誇るとも、夕には白骨と爲つて郊原に朽ちぬ。」と云へり。雲上に交りて雲の鬢づらあざやかに、雪の袂をひるがへすとも、其の樂みを思へば夢の中の夢也。山の麓、蓬が下は終の栖也。玉の臺、錦の帳も後世の道には何かせん。小野の小町、衣通姫が花の姿も無常の風に散り、樊噲、張良が武勇も獄卒の杖をかなしむ。されば心ありし古人の云く「あはれなり鳥邊の山の夕煙送る人とてとまるべきかは。」『末の露本の雫や世の中の後れ先だつためしなるらん。』「先亡後滅の理り、始て驚くべきにあら

【八】如來一代の教說に衆生教化の大方針あり、法華經に至りて佛の本懷を明されたるを說き、善導法然等が佛意に違犯するを示す。

【七處八會】成道後三七日華嚴經の會座七處八會に亙る、華嚴の說を指す。

【跋提河】佛の入滅せられし河の名、涅槃經の所說を指す。

【本願に任せて】佛の本願には、我が如く等しくして異ることなからしめん。佛の知見をもて開示悟入せしむるに在り、佛の知見は法華經なれば也。

ず。願うても願ふべきは佛道、求めても求むべきは經教也。抑汝が云ふ所の法門を聞けば、或は小乘、或は大乘、位の高下は且く置く、還て惡道の業たるべし。」

【八】爰に愚人驚いて云く、「如來一代の聖教は何れも衆生を利せんが爲也。始め七處八會の莚より終り跋提河の儀式まで何れか釋尊の所說ならざる。設ひ一分の勝劣をば判ずとも、何ぞ惡道の因と云ふべきや。」聖人云く、「如來一代の聖教に權あり、實あり、大あり、小あり、又顯密二道相分ち、其の品一にあらず。須く其の大途を示して、汝が迷を悟しめん。夫れ三界の教主釋尊は十九歲にして迦毘羅城を出で檀特山に籠りて難行苦行し、三十成道の刻に三惑頓に破し、無明の大夜爰に明しかば、須く本願に任せて一乘妙法蓮華經を宣べしと云へども、機緣萬差にして其の機佛法に堪へず。然れば四十餘年に所被の機緣を調へて、後八箇年に至て出世の本懷たる『妙法蓮華經』を說き給へり。然れば佛の御年七十二歲にして序分『無量義經』に說き定て云く『我れ先きに道場菩提樹の下に端坐すること六年にして阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。佛眼を以て一切の諸法を觀ずるに宣說すべからず。所以はいかん、諸の衆生の性欲不同なるを知れり。性欲不同なれば種種に法を說く。種種に法を說くこと方便力を以てす。四十餘年には未だ眞實を顯はさず。』此の文の意は佛の御年三十にして寂滅道場菩提樹下に坐して佛眼を以て一切衆生の心根を御覽ずるに、衆生成佛の直道たる『法華經』をば說くべからず。是を以て空拳を擧げて嬰兒をすかすが如く、樣樣のたばかりを以て四十餘年が間は、未だ眞實を顯はさずと年

記をさして、靑天に日輪の出、闇夜に滿月のかかるが如く說き定めさせ給へり。此の文を見て何ぞ同じ信心を以て佛の慈悲を蒙る「法華」已前の權敎に執着して、珍しからぬ三界の故宅に歸るべきぞや。されば「法華經」の一の卷『方便品』に云く、『正直に方便を捨てて但だ無上道を說く』。此文の意は前き四十二年の經經、汝が語る所の念佛、眞言、禪、律を正直に捨よと也。此文明白なる上、重て誡めて第二の卷『譬喩品』に云く、『但だ樂て大乘經典を受持し、乃至餘經の一偈をも受けざれ』。此文の意は年紀彼れ此れ煩はし、所詮「法華經」より自餘の經をば一偈をも受くべからずとなり。然るに八宗の異義蘭菊に、道俗稱を異にすれども、一同に「法華經」をば崇る由を云ふ。されば此等の文をば何辨へたる。正直に捨よと云ひ、餘經の一偈をも禁るに、或は念佛、或は眞言、或は禪、或は律、是れ餘經にあらずや。今此「妙法蓮華經」は諸佛出世の本意、衆生成佛の直道也。されば釋尊は付囑を宣べ、多寶は證明を遂げ、諸佛は舌相を梵天に付て『皆是眞實』と宣べ給へり。此經の一字は諸佛の本懷、一點は多生の助也。一言一語も虛妄あるべからず、此經の文を用ゐざる者は諸佛の舌を切り賢聖を噉く人に非ずや。其罪實に恐るべし。されば二の卷に云く、『若し人信ぜずして此の經を毀謗せば則ち一切世間の佛種を斷ぜん』。此文の意は若し人此經の一偈一句をも背かん人は過去現在未來三世十方の佛を殺さん罪と定む。經敎の鏡を以て當世にあてみるに「法華經」を背かぬ人は實に以て有がたし。事の心を案ずるに不信の人尙ほ無間を免れず。況や念佛の祖師法然上人は「法華經」を以て念佛に對

【調達】提婆達多のこと。

【非器五障の龍女】女はすべて成佛等の器にあらずと諸經にあれど法華經に依てのみ成佛す。龍女、卽成する旨、提婆達多品に明す。

【九】共に、念佛を難ずるため、法門は法に依りて人に依らざるの大義を論證し、善導の五種雜行の世間出世間共に通ずるを明し、彼の所立の義の難行道にその宗徒却つて違背するを示す。

して拋てよと云云。五千七千の經教に何れの處にか『法華經』を拋てよと云ふ文ありや。三昧發得の行者、生身の彌陀佛と崇むる善導和尚、五種の雜行を立て『法華經』をば『千中無一』とて千人持つとも、一人も佛になる可らずと云へり。經文には『若有聞法者無一不成佛』と說じて此經を聞けば、十界の依正皆佛道を成ずと見えたり。爰を以て五逆の調達は天王如來の記莂に預り、非器五障の龍女は南方に無垢成道を唱ふ。況や復た具縛の六卽を立て機を漏す事なし。善導の言と『法華經』の文と、實に以て天地雲泥せり、何れに付くべきや。就中其の道理を思ふに諸佛衆經の怨敵、聖人賢哲の違犯也。經文の如くならば爭か無間を免るべきや。」

【九】爰に愚人色を作して云はく、「汝賤しき身を以て恣ままに莠言を吐く。悟つて云ふ賤、迷うて言ふ賤、理非辨へ難し。就中善導和尚は彌陀善逝の應化、或は勢至菩薩の化身と云へり。法然上人も亦然也。勢至の化身といへり。上古の先達たる上、行德秀發し解了底を極めたり。何ぞ惡道に墮ち給ふと云ふや。」聖人云く、「汝が言ふ所實に爾也。余も仰いで信を取ること此の如し。但し佛法は強ちに人の貴賤には依るべからず、只經文を先とすべし。身の賤きを以て、其の法を輕ずる事なかれ。『有人樂生惡死、有人樂死惡生』の十二字を唱へし毘摩大國の狐は帝釋の師と崇められ、『諸行無常』等の十六字を唱へし鬼神は雪山童子に貴まる。是れ必ず狐と鬼神との貴きに非ず、只法を重ずる故也。」されば我等が慈父教主釋尊雙林最後の御遺言『涅槃經』の第六には『依法不依人』とて、普賢、文殊等の等覺已

【圓光章】唐圓光年中に作れる紀錄

家の大聖淨土門を説き給ふとも、經文を手に把らずば用ゐざれとなり。天台大師の云く、「經を修し論に依らずんば之を用ゆ、文無く義無きは信受すべからず」と。此の意は經文に明かならんを用ゐよ、文證無からんをば捨てよと也。傳教大師の云く、「佛説に依憑して口傳を信ずる事なかれ」前の釋と同意也。龍樹菩薩の云く、「修多羅に依るは白論、修多羅に依らざるは黑論。」者は「法華」已前の權教を棄て此經につけよと也。經文にも「法華」に對して前經の四十餘年を捨よと云ふ正直捨方便也。然るに「開元錄」に載する所の五千七千の經の中に「法華經」を捨よ乃至抛てよと嫌ふことも、又雜行に攝して之を捨てよと云ふ經文も全く無し。されば慥の經文を勘へ出して源空、法然の地獄の苦を救はるべし。今の世の念佛の行者、俗男俗女經文に違するのみならず、又師の釋にも背けり。五種の雜行とて念佛申さん人の捨つべき由記せる釋之れあり。其の雜行とは「選擇」に云く、「第一に讀誦雜行とは上の觀經等の往生淨土の經を除いて已外、大小乘顯密の諸經に於て、受持、讀誦するを悉く讀誦雜行と名く。乃至、第三に禮拜雜行とは上の彌陀を禮拜するを除いて已外、一切諸餘の佛、菩薩及び諸の世天に於て禮拜恭敬するを悉く禮拜雜行と名く。第四に稱名雜行とは上の彌陀の名號を稱するを除いて已外、自餘の一切の佛、菩薩等、及び諸の世天等の名號を稱するを悉く稱名雜行と名く。第五に讃歎供養雜行とは、上の彌陀佛を除いて已外、一切諸餘の佛、菩薩等、及び諸の世天等に於て讃歎し供養するを悉く讃歎供養雜行と名く。」此釋の意は「第一の讀誦雜行とは念佛申す道俗男女讀む

べき經あり、讀むまじき經ありと定めたり。讀むまじき經とは『法華經』、『仁王經』、『藥師經』、『大集經』、『般若心經』、『轉女成佛經』、『北斗壽命經』、殊更行住坐臥に讀み奉る八卷の中の一品、或は一卷、此等の諸經を一句一偈も讀みならば、たとひ念佛をはげむ行者なりとも雜行に攝せられて往生すべからず」云云。予愚見を以て之を見るに、念佛申す人なれども、此經を讀む人は多く淨土の教主に對しても許容(?)なり。又第三の禮拜雜行とは、念佛の行者は彌陀三尊より外は上に擧ぐる所の諸佛、菩薩、諸天善神を禮するをば禮拜雜行と名け、又之を嫌ふ。然るに日本は是れ神國として伊弉諾、伊弉冊の尊此國を作り、天照太神跡を垂れ御裔として御裳濯河の流れ久しくして今にたえず、豈此國に生を受けて此邪義を用ゆべきや。又普天の下に生れて三光の恩を蒙りながら、猶に日月星宿を輕する事尤も恐れあり。又第四の稱名雜行者、「念佛申さん人は唱ふべき佛菩薩の名あり、唱ふまじき佛菩薩の名あり。唱ふべき佛菩薩の名とは彌陀三尊の名號、唱ふまじき佛菩薩の名號とは釋迦、藥師、大日等の諸佛、地藏、普賢、文殊、日月星、二所の三島、熊野、羽黑、天照大神、八幡大菩薩、此等の名を一遍も唱へん人は念佛を十萬遍申したりとも、往生の望は難かるべし、日吉明神等の名を唱ふる過に依つて往生には漏つとも往生すべからず」と云云。和讃(?)にも念佛を申す人も此等の諸佛菩薩、諸天善神の名を唱ふる故に雜の數に入る。又第五の讃歎供養雜行とは、「念佛申さん人は彌陀三尊を供養せん外は上に擧ぐる所の佛、菩薩、諸の天神に香華の少をも供養せん人は、念佛の功は貴けれども此過に依つて雜行に攝す」と是を嫌ふ。

【一〇】 具さに眞言を破せんため、眞言宗の「法華戯論」を牒出し、一切經論に義無き邪說なり。又經論にあるとも、其の經の大小權實、說時の前後譯者等を尋究すべき用意あるべしとて內外の聖者の例を引いて論す。

【後唐院】 叡山の智證をいふ。

み。然るに世を見るに社壇に詣でては幣帛を捧げ、宗廟に臨みては神拜を致す。是文の義に背けり。汝若不審ならば『選擇』を見よ。其文明白也。又善導和尚の『觀念法門』に云く、「酒肉五辛誓て發願して手に捉らされ口に喫はされ、若し此の語に違せば、即ち身口倶に惡瘡著かんと願ぜよ。」此文の意は「念佛申さん男女、尼法師は酒を飲まされ魚鳥を食はされ、其外韮、蒜等の五つの辛く臭き物を食はされ、是を持たさらん念佛者は今生には惡瘡身に出で後生には無間に墮すべし」と云云。然るに念佛申す男女、尼法師此誡めを顧みず、恣に酒を飲み魚鳥を食ふ事剣を飲む譬にあらずや。」

【一〇】 爰に愚人云く、「誠に上の法門を聞くに念佛の法門實に往生すと雖も其行儀修行し難し、況や彼の憑む所の經論は皆以て權說なり、往生すべからざる由條分明なり。但し眞言を破せん事は其謂れ無し。夫れ『大日經』とは大日覺王の秘法也。大日如來より系も亂れず善無畏、不空之を傳ふ。弘法大師は日本に弘め玉ふ。兩界の曼陀羅は尊高に、三十七尊は秘奥なる者也。されば顯敎の極理尚ほ密敎の初門にも及ばず。爰を以て後唐院は、『法華尚ほ及ばず況や自餘の敎をや。』と釋し給へり。此事如何が心うべきや。」聖人示して云く、「余も始は大日に憑みを懸けて密宗に志を立つ。然れども彼の宗の最底を見るに其の立義も亦謗法なり。汝が云ふ所の高野の大師は嵯峨天皇の御宇の人師也。然るに皇帝より佛法の淺深を判釋すべき由宣旨を給ひて『十住心論』十卷之を造る。此書廣博なる間要を取つて三卷に之を縮む。其の名を『祕藏寶鑰』と號す。始め『異生羝羊心』より終り『祕

【乘乘】經經又は教教の意。
【自乘】自經又は自教の意。
【意樂】意向。
【根本大師】傳教大師をいふ。日本の始めての大師號故に。

密莊嚴心」に至るまで十に分別し、第八法華、第九華嚴、第十眞言と立てて『法華』は『華嚴』にも劣れば『大日經』には三重の劣と判じて、『此の如き乘乘は自乘に佛の名を得れども後に望むれば戲論と作る。』と書いて『法華經』を狂言綺語と云ひ、釋尊をば無明に迷へる佛と下せり。仍て傳法院建立せし弘法の弟子正覺房は『法華經は大日經の履物とりに及ばず、釋迦佛は大日如來の牛飼にも足らず』と書けり。汝心を靜めて聞け、一代五千七千の經敎、外典三千餘卷にも『法華經』は戲論三重の劣、『華嚴經』にも劣り、釋尊は無明に迷へる佛にて大日如來の牛飼にも足らずと云ふ慥なる文ありや。設ひさる文有りと云ふとも能能思案あるべき歟。經敎、西天より東土に渡す時譯者の意樂に隨つて經論の文不定也。さて後秦の羅什三藏は『我れ漢土の佛法を見るに多く梵本に違せり。我が譯する所の經若し誤りなくば我死して後身は不淨なれば燒くると云ふとも舌計りは燒けじ』と常に說法し、終に燒き奉る時身は皆骨と成ると雖も舌計りは靑蓮華の上に光明を放つて日輪を映奪し給ひき、有難き事也。さてこそ殊更彼の三藏所譯の『法華經』は唐土に寧やすと弘まらせ給ひしか。されば延暦寺の根本大師諸宗を責め給ひしには『法華經を譯する三藏は舌の燒けざる驗あり。汝等が依經は皆誤れり』と破し給ふは是也。『涅槃經』にも『佛の我が法は他國へ移らん時誤り多かるべし』と說き給へば、經文に設ひ『法華經』は戲事、釋尊をば無明に迷へる佛也とありとも、權敎、實敎、大乘、小乘、說時の前後、譯者、能能尋ぬべし。所謂老子孔子は『九思一言、三思一言。』周公旦は食するに三度吐き沐するに三度にぎる。外典の

【一】先づ法門は神通力に依らざることを例證し、次に法華經の最勝十喩を略示し、最大日經、法華經の教理的優劣を對擧して示す。

【法雲法師】梁の光宅のこと。

淺き[illegible]跡の如し、況や內典の淺義を習ふ人をや。其の上眞言經には讃嘆もなし、人を責めず法を謗じては惡道に墮つべしとは弘法大師の釋也。必ず地獄に墮ん事疑ひなき者なり。」

【二】爰に愚人依然として良久うして云く、「此大師は內外の明鏡、衆人の導師たり、德行世に勝れ名譽普く聞えて、或は唐土より三鈷を八萬餘里の海上に投るに即ち日本に至り、或は心經の旨を綴るに蘇生の族途に彳む。されば此人凡人にあらず大聖權化の垂迹也。仰いで信を取らんにはしかじ。」聖人云く、「予も始めは爾なり。但し佛道に入て理非を勘へ見るに、佛法の邪正は必ず得通自在には依らず。是を以て佛は『依法不依人』と定め給へり。前に示すが如し、彼の阿竭多仙は恒河を片耳に湛へて十二年、耆兎仙は一日の中に大海を吸乾す、張階は霧を吐き、欒巴は雲を吐く。然れども未だ佛法の是非を知らず、因果の道理をも辨へず。異朝の法雲法師は講經勤行の砌りに須臾に天華を下せしかども、妙樂大師は『感應斯の若きも猶ほ理に稱はず』とて未だ佛法をば知らずと破し給ふ。夫れ此の『法華經』と申すは『已今當』の三說を嫌つて、已前の經をば『未顯眞實』と打ち破り、肩を並ぶる經をば今說の文を以て責め、已後の經を當說の文を以て破る、實に三說第一の經也。第四の卷に云く、『藥王今汝に告ぐ、我が所說の諸の經、而も此經の中に於て法華最も第一なり』。此文の意は靈山會上に藥王菩薩と申せし菩薩に佛告て云く、始め『華嚴』より終り『涅槃經』に至るまで無量無邊の經、恒河沙等の數多し、其中には今の『法華經』最第一と說かれたり。然るを弘法大師は『第一』の字を『第三』と讀まれたり。同卷に云く、『我佛道の爲に無量の土に於

て始めより今に至るまで廣く諸經を說く、而も其中に於て此經第一なり。」此文の意は又釋尊無量の國土にして或は名字を替へ、或は年紀を不同になし、種種の形を現じて說く所の諸經の中には此『法華經』を第一と定められたり。同き第五の卷には、「『最在其上』」と宣べて、『大日經』『金剛頂經』等の無量の經の頂に此經は有るべし」と說かれたるを弘法大師は『最在其下』と謂へり。釋尊と弘法と、『法華經』と『寶鑰』とは實に以て相違せり。釋尊を捨て奉つて弘法に付くべき歟。又弘法を捨て釋尊に付き奉るべき歟。又經文に背いて人師の言に隨ふべき歟。人師の言を捨て金言を仰ぐべき歟。用捨心に有るべし。又第七の卷『藥王品』に十喩を擧げて經を較するに第一は水の譬也。江河を諸經に譬へ大海を法華に譬へたり。然るを『大日經』を勝れたり『法華』は劣れりと云ふ人は、即ち大海は小河よりも小しと云はん人也。然るに今の世の人は、海の江河に勝る事をば知るといへども、『法華』の第一なる事をば辨へず。第二には山の譬なり。衆山を諸經に譬へ須彌山を法華に譬へたり。須彌山は上下十六萬八千由旬の山也。何れの山か肩を並ぶべき。『法華經』を『大日經』に劣ると云ふ人は富士山は須彌山より大也と云ん人也。第三には星月の譬也。諸經を星に譬へ『法華經』を月に譬ふ。月と星とは何れ勝りたりと思へるや。乃至次下には「此經も亦復是の如し、一切の如來の所說、若は菩薩の所說、若は聲聞の所說、諸の經法の中に最も爲れ第一なり。」とて、此『法華經』は只だ釋尊一代の第一と說き給ふのみにあらず、大日、及び藥師、阿彌陀等の諸佛、普賢、文殊等の菩薩の一切の所說、諸經の中に此『法華經』第一と說けり。

【一】大日如来は久遠実成の釈尊の応化なるを示す。
【和光同塵】光を和らげ塵に同ず。
【毘盧遮那】(Vairocana)の音写、「日」と訳す。一際摩訶(Mahā)を冠すれば大日となる。
【四教含蔵】蔵、通、別、円の四教を含むこと。
【一】具さに禅宗を碎破するため先づ其の立義を挙ぐ。

されば若し此経に勝りたりと云ふ経有らば外道天魔の説と知るべき也。

【三】其の上大日如来と云ふは久遠実成の教主釈尊四十二年和光同塵して其機に応ずる時、三身即一の如来暫く毘盧遮那と示せり。是の故に開顕実相の前には釈迦の応化と見えたり。爰を以て『普賢経』には『釈迦牟尼仏を毘盧遮那遍一切処と名づく』と説けり。今『法華経』は十界互具、一念三千、三諦即是、四土不二と談ず。其の上に一代聖教の骨髄たる二乗作仏、久遠実成、今経に限れり。汝が語る所の『大日経』『金剛頂経』等の三部の秘経に此等の大事ありや。善無畏、不空等此等の大事の法門を盗み取て己が経の眼目とせり。本経本論には跡形もなき誑惑なり。能能是を改むべし。抑大日経とは四教含蔵して尽形寿戒等を明せり。唐土の人師は天台所立の第三時、方等部の経たりと定めたる権教也。あさまし／＼。誠実に道心あらば急いで先非を悔ゆべし。夫れ以れば此の法華経とは、一代の肝心を一念に統べ十界の依正を三千に約めたり。」

聖愚問答鈔　下

【一】爰に愚人聊か和いで云く、経文明鏡也。疑慮を致すに及ばず。但し法華経は三説に秀で一代に超るといへども、言説に拘はらず経文に留まらざる我等が心の不分の禅の一法にはしくべからず。凡そ万法を払遣して言語の及ばざる処を禅法とは名けたり。され

【一四】先づ禪宗の教外別傳を難ず。

【一五】【如來禪】佛の禪。【教禪】經文の禪。【祖師禪】達磨の禪。

【補註】天台三大部補註。從義の著。

ば跋提河の邊り沙羅林の本にして釋尊金棺より御足を出し、拈華微笑して此法門を迦葉に付囑ありしより已來、天竺二十八祖系も傳れず、唐土には六祖次第に弘通せり。達磨は西天にしては二十八祖の終り、東土にしては六祖の始め也。相承を失はず祖前に承るべからず。爰を以て「大梵天王問佛決疑經」に云く、「吾に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門有り、教外に別に傳ふ、文字を立てず、摩訶迦葉に付囑す」とて、迦葉に此禪の一法をば教外に傳ふと見えたり。總て修多羅の經義は月をさす指、月を見て後は指何かはせん。心の本分禪の一理を知て後は佛教に心を留むべしや。されば古人の云く、「十二部經は總じて是閑文字」と云云。仍つて此の宗の六祖慧能の「壇經」を披見するに會に以て然也。言下に契會して後は教何かせん。此の理如何か辨へんや。」

【一五】學人示して云く、「汝先づ法門を値いて道理を案ぜよ。抑我れ一代の大道を伺はず十宗の淵底を究めずして圖を濫め人を教ふべき歟。汝が談ずる所の禪は我れ昔前に此宗を習ひ極めて其至極を見るに此れ以て偏頗也。既に三種あり。所謂如來禪と教禪と祖師禪と也。汝云ふ所の祖師禪等の一端之を示めさん。聞て其の旨を知れ。若し教を離れて之を傳ふといはば教を離れて理無く、理を離れて教無し、理全く教、教全く理と云ふ道理汝之を知らざるか。拈華微笑して迦葉に付囑し給ふと云ふも是れ教也。「不立文字」と云ふ四字も即ち教也文字也。此の事和漢兩國に事舊ぬ。今いへば事新しきに似たれども一兩句の文を添へて汝が迷を拂はしめん。「[illegible]」の十二に云く、文殊若し言説に滯ると謂はば且らく爰

娑婆世界には何を以て佛事と爲るや。[illegible]徒言說を將て人に示さざらんや。文字を離れて解脫を談ずるの義なし、豈耳に聞かざらんや。「乃至次下に云く、「陸閑直指人心見性成佛」、而るに華嚴等の諸大乘經に豈此の事無からん耶。嗚呼世人何ぞ其れ愚なる也、汝等當に佛の所說を信ずべし、諸佛如來は言虚妄なし。」此の文の意は禪宗の教外別傳に誇り言說に離るとて教の外に修行すといはゞ、此娑婆國にはさて如何がして佛事を作すべき、さやうに云ふ所の禪人も人に向ふ時は言を以て云はざるべしや。其の上佛道の解了をば云ふ時、文字を離れて義なし。又初發心より來て直ちに人心を指して佛也と云ふ。是れ程の理は「華嚴經」「大集經」「大般若」等の「法華」已前の權大乘經にも在在處處にこれを說けり。是をいみじき事とせんは無下に云ひがひなき事也。嗚呼今世の人何ぞ迷に沈めるや。只須く中道實相の理に契當せる妙覺果滿の如來誠諦の言を信ずべき也。又[illegible]一に教の理を釋して云はく、「世人教を蔑にして理觀を尚ぶといふは誤れる哉、誤りたる哉」。此の文の意は今の世の人人は觀心觀法を先として經論を尋ね學ばず、還て教を蔑り經を輕しむる是れ誤りと云ふ文也。其上當世の禪人自宗に迷へり。「續高僧傳」を披見するに習禪の初祖、達磨大師の傳に云く、「教に藉て宗を悟る」といへり。如來一代の聖教の道理を習學し法門の旨宗宗の沙汰を知るべき也。又達磨の弟子六祖の第二祖慧可の傳に云く、「達磨禪師四卷の楞伽を以て可に授けて云く、我れ漢地を觀るに唯此經のみ有り、仁者依行せば自ら世を度することを得んと」。此の文の意は達磨大師天竺より唐土に來て四卷の「楞伽經」を以て慧可

【大慢】一、大增上慢をいふ、未だ證得せざるをせりと謂ふ。二、印度の外道の名、上慢にして釋尊等の像を席にす

【三階禪師】支那の三階教の祖、常の人、佛教を破壞す。五十[illegible]、死して蛇身となる

【二五】丈に[illegible]宗に於て二十八祖を立つるを[illegible]じ、隨つて祖師を[illegible]をず。

に授けて云く、我れ此[illegible]を見るに是の經味に[illegible]れたり、汝等も修行して佛に成れとなり。此等の祖師既に經文を前とす。若し之に依て經に依るといはば大乘經、小乘經、權教經、實教經、[illegible]へし。或は經を用ゐるには禪宗も楞伽經、首楞嚴經、金剛般若經等に依る。是れ皆諸經以前の權教方便の說也。只諸經に心佛衆生是三無差別等の理の方を說ける一兩句の文に迷ひて大小、權實顯密、前後をも辨へず、只一心を立てて而も之を知らず、己れ禪に即して云ふ大慢を成せり。昔の月氏の大慢が跡を繼ぐ此の日本の禪師が舌頭を[illegible]ふ。[illegible]と僧ず大慢は生きながら無間に入り、禪師は死して大地に沈めぬ、おそろしおそろし。禪宗は三世了達の解了朗然に[illegible]の智[illegible]無くして未來を鑒みるに、「像法決疑經」に說して云く、「諸の惡比丘或は禪を修する有りて經論に依らず、自ら己見を逐て非を以て是と爲し、是れ邪是れ正と分別する能はず、偏く道俗に向て是の如き言を作さく、我れ能く是を知り、我れ能く之を見ると、當に知るべし、此人は速に我が法を滅す」と。此の文の意は諸の惡比丘あつて禪を信仰して經論を尋ねず、邪見を本として、法門の是非をば辨へずして、而も男女、尼法師等に向て我れよく法門を知れり、人は知らずと云て此の禪を弘むべし、當に知るべし、此の人は我が正法を滅すべしと也。此文を以て當世を見るに宛も符契の如し、汝愼むべし汝畏るべし。

【二五】先に談ずる所の文[illegible]に二十八祖ありと云ふ事其の證據何に出でたるや。佛法を相傳する人二十四人或は二十三人と見えたり。然るを二十八祖と立つる事所據の

【罽賓國】　カシミラ國。

謂禪何にかある。[illegible]師子尊者[illegible]

分明也。其の付法藏傳に云く、復比丘有り、名を師子と曰ふ。罽賓國に於て大に佛事を作す。時に彼の國王をば彌羅掘と名く。邪見熾盛にして心に敬信なく、罽賓國に於て塔寺を毀壞し衆僧を殺害す。即ち利劍を以て用て師子の頸を斬る。頸の中に血無く唯乳のみ流出す。法を相付する人是に於て便ち絶えぬ。其の意は佛我れ入涅槃の後に我が法を相付する人二十四人あるべし。其の中に最後の人に當るをば師子比丘と云はん、罽賓國と云ふ國にて我が法を弘むべし。彼の國の王をば彌羅掘王と云ふべし、邪見熾盛にして佛法を信ぜず、衆僧を敬はずして堂塔を破り失ひ、劍を以て諸僧の頸を切るべし。即ち師子比丘の頸を切らん時に中に血無く只だ乳のみ出づべし。是の時に佛法を相付せん人絶ゆべしと定められたり。案の如く佛の御言違はず師子尊者頸切られ給ふ事眼前に見て顯也。王の腕共に連て落ち畢ぬ。二十八祖を立つる事最も以て僻見也。禪の僻事是より興るなるべし。今禪宗が[illegible]に二十八祖を立つる事は達磨を高祖と定むる時、師子と達磨との年紀遠なる間、一人の祖師を私に作り入れて是豈に未曾有の付法藏系脈を[illegible]て人に重んぜさせん爲の僻事也。此の事異朝にして既に[illegible]補註の十一に云く、又禪宗は二十八祖を用ず、豈謬り行らん哉。若し二十八祖を立つるは未だ所出の[illegible]を見ず、近來更に石に刻み版に鏤め七佛二十八祖を圖狀し、各一偈を以て傳授相付すること有り。[illegible]何ぞ其れ甚だしきや。儻し智者力有らば宜しく斯の弊を革むべし。[illegible]も二十八祖を立て石に刻み板に鏤めて傳

【一六】法華經の得益たる二乘、惡人、女人の成佛を示し一乘を受持せよと勸む。

【顯本遠壽】佛の久遠の壽命の說を明けるときのこと。

【增道損生】道を增して生死の苦を減じて成佛を早く遂ぐること。

【提婆、龍女】法華經提婆品に出づ。

る事甚だ以て僻れり。此經を知る人あらば此義を改め出せと也。但し佛陀耶舍なる事を見にあり。先に引く所の「大覺世尊開佛知見」の文と「其外數數の說」に迷ひを引く、既に自語相違せり。其上此經は是諸佛の秘要也、又開三顯一の肝要の目録にも全く載せず、是れ餘外の經たる上備と見えたり。然れば世間の學者用ゐざる所也。權經とするにたらず。

【一六】抑今の法華經を說る時益を得る衆、遠は三千塵點の時、大通の一乘佛種を萌す。四十二年の間は未不成佛と嫌はれて在在處處の聖衆にして爾前諸經の益を聞き、人天大會に與ひ連まれて既に佛死ぬべかりし人々も、今の經に來て舍利弗は華光如來、目連は多摩羅跋栴檀香如來、阿難は山海慧自在通王佛、羅睺羅は蹈七寶華如來、五百の羅漢は普明如來、二千の聲聞は寶相如來の記莂に預かる。顯本遠壽の日は微塵數の菩薩、增道損生して位大覺に隣る。されば天台大師の釋を披見するに他經には菩薩は佛になると云て二乘の得道は全く之れなし。善人は佛になると云て惡人の成佛を明さず、男子は佛になると說て女人は地獄の使と定む。人天は佛になると云て畜類は佛になるといはず。然るを今の經は是等皆佛になると說く。ためもしきかな、末代濁世に生を受くといへども提婆が如くに五逆をも造らず三逆をも犯さず。而るに提婆達多天王如來の記莂を得たり。況や其さる我等が身をや。八歲の龍女既に蛇身を改めずして南方に妙果を證す、況や人界に生を受けたる女人をや。只得難きは人身、値ひ難きは正法なり。汝早く邪を翻し正に付き凡を轉じて聖を證せんと思はば、念佛、眞言、禪、律を捨てて此の一乘妙典を受持すべし。若

【一七】領解を述べ、更に他宗の信多く、且つ父母先祖等の宗に背くは不孝ならずやとの難を設ぐ。

【弘演】衛の懿公のこと。春秋、衛の懿公の臣弘演、使して公の命を公より帰る。狄人衛を攻め懿公狄人の爲に殺されて肝を留む。弘演自ら腹をさきて公の肝を入れて死す。

【豫譲】晋の智伯の臣。智伯、趙襄子の爲に殺さる。豫譲其仇を報ぜんとして果さず、身を漆し炭を呑みて自殺す。

【丁蘭】漢の人、早く母を失ひ、母の像を刻みて之に事ふ。

【伯瑜】漢の人、孝子。母に杖たれて泣く。母曰く、嘗て痛まず、今痛まず、力の衰へたるを悲しむと云ふ。

【一八】人の多少に依らず、法の邪正に依る。我が宗は人情に背くとも最勝の経に依る。

し然らば妄染の塵穢を払て清浄の覚体を証せん事疑ひなかるべし。」

【一七】爰に愚人云く「今聖人の教誡を聴聞するに日来の朦昧忽に開けぬ。天台真言と
も云つべし。理非顕然なれば誰か信仰せざらんや。但し世上を見るに上一人より下万民に
至るまで念仏、真言、禅、律を深く信受し帰依す。国土に生を受けながら争か王命を背か
んや。其の上我が親と云ひ、師と云ひ、皆念仏等の法を信じて後世の蹤に交はる。又日
本には上下の人幾許ぞや。賢りと雖も権教権宗の者は悉く浄土門に帰する人にして其者
を聞かず、□で□□□□とし、邪法正法を簡ばず、内典五千七千の□をも、
の□□□、只□□の□に随ひ、父母の義に叶ふが肝心也。されば教主釈尊は天竺にして
孝養報恩の理を説き、孔子は大唐にして忠功孝行の道を示す。師の恩を報ずるに同を爲
き、身を投ぐ。主の恩をしる人は弘演は腹をさき、豫譲は剣を呑む。親の恩を思ふ人は丁
蘭は木を刻み伯瑜は杖に泣く。儒外内道異なりといへども報恩謝徳の教へ廃る事なし。
然れば主師親の未だ信ぜざる法理を我れ始めて信ぜん事、違背の過に沈みなん。法門の道
理は経文明白なれば感激せしむ。□□を顧れば□□の世に落ちぬべし。□□に□れり。
我れ如何がせん。」聖人云く、

【一八】「汝此理を知りながら□□の詞をなす。理の通ぜざる歟、□の及ばざる歟。我れ釈
尊の遺法を学び仏法に肩を入れしより已来、知恩を以て最とし報恩を以て前とす。世に
四恩あり。之を知るを人倫と名け知らざるを畜生とす。予父母の後世を助け国家の恩徳を

を持つが却て報恩なるを明す。

報ぜんと思ふが故に身命を捨る事敢て他事にあらず。唯知恩を旨とする計也。先づ汝目を塞ぎ心を静めて道理を思へ。我は善道を知りながら親と主との悪道にかかられんを諫めざらんや。又愚人狂ひ酔て毒を服せんを我れ知りながら是を禁しめざらんや。其如く法門の道理を存じて火血刀の苦みを知りながら争か恩を蒙むる人の悪道に落ちん事を歎かざらんや。身を投げ命をも捨つべし。諫めてもあきたらず歎きても限りなし。今生に眼を合する苦み猶是を悲む、況や悠悠たる冥途の悲み豈に痛まざらん哉。恐れても恐るべきは後世、慎ても慎むべきは来世也。而るを是非を弁ぜず親の命に随ひ、邪正を簡ばず主の命に随はんと云ふ事、愚癡の前には忠孝に似たれども賢人の意には不忠不孝是れに過ぐべからず。されば教主釈尊は転輪聖王の末、師子頬王の孫、浄飯大王の嫡子として五天竺の大王たるべしといへども、生死無常の理を悟り出離解脱の道を願て世を厭ひ給ひしかば、浄飯大王是を歎き、四方に四季の色を顕して太子の御意を留め奉らんと巧み給ふ。先づ東には霞たなびく絶間より雁金路に帰り、窓の梅の香玉簾の中に通ひ、嬋娟たる桜の色百囀の鶯春の気色を調はせり。南には泉の色白妙にして玉の卯の華を咲し、仙人の蓮の子夏の姿を顕はせり。西には紅葉常葉に交ればさながら錦を織交へ、荻吹く風閑かにして松の嵐物淒し。過にし夏の名残には澤辺に見ゆる螢の光、天空なる星かと誤まり、松虫鈴虫の声々涙を催せり。北には枯野の色何時しか物憂く、池の汀に氷柱ゐて谷の小川も音信ぬ。かかる有様を造りて御意を慰め給ふのみならず、四門に五百人づつの兵を置きて守護し給ひしかども、

【伽耶】 (Gaya)の音写。
【檀特山】 (Dantaloka)の音写。
【無為】 涅槃のこと。
【浄蔵浄眼】 法華経、妙荘厳王品に出づ。

終に太子の御年十九と申せし二月八日の夜半の比、車匿を召して金泥駒に鞍置かせ、伽耶城を出でて檀特山に入り十二年高山に薪を採り深谷に水を結んで難行苦行し給ひ、三十成道の妙果を感得して三界の聖父一代の教主と成りて父母を救ひ群生を導き給ひしをば、さて不孝の人と申すべき歟。仏を不孝の人と云ひしは九十五種の外道也。父母の命に背いて無為に入り還て父母を導くは孝の手本なる事仏其の証拠なるべし。彼の浄蔵浄眼は父の妙荘厳王外道の法に著して仏法に背き給ひしかども、二人の太子は父の命に背きて雲雷音王仏の御弟子となり、終に父を導きて娑羅樹王仏と申す仏になし申されけるは不孝の人と云ふべき歟。経文には「恩を棄てて無為に入るは真実に恩を報ずる者」と説いて、今生の恩愛をば皆捨てて仏法の実の道に入る是れ実に恩を知れる人也と見えたり。又主君の恩の深き事汝よりも能く知れり。汝若し知恩の者ならば深く諫め強ひて奏せよ。非道にも主命に随はんと云ふ事佞臣の至り不忠の極り也。殷の紂王は悪逆、比干は忠臣也。政ごと理に違ひしを見て強ちに諫めしかば即ち比干胸を割る。紂王は比干死して後周の武王に打たれぬ。今の世までも比干は忠臣といはれ紂王は悪王といはる。夏の桀王を諫めし竜逢は頭を刎られぬれども桀王は悪王竜逢は忠臣とぞ云ふ。主君を三度諫むるに用ゐずば山林に交はれとこそ教へたれ。何ぞ其の非を見ながら黙せんと云ふや。古の賢人世を遁れて山林に交はる。先規を集めて敢て汝が愚耳に聞しめん。殷の代の太公望は磻渓と云ふ谷に隠る、周の代の伯夷、叔斉は首陽山と云ふ山に籠る。秦の綺里季は商洛山に入り、漢の厳光は孤亭に居し、晋の

【摩尼】寶珠の名

【一九】法華經を信ずる行相を說明して、攝受折伏の二門を擧げ、今は正しく折伏の時なるを明す。

介之綏は綿上山に隱れぬ。此等をば不忠と云ふべき歟、愚かなり。汝忠を存せば諫むべし、孝を思はば言ふべき也。先づ汝權宗の人は多く此の宗の人は少し、何ぞ多きを捨てて少きに付くと云ふ事、必ず多きが尊くして少きが卑きにあらず。賢善の人は希れに、愚惡の者は多し。麒麟鸞鳳は禽獸の奇秀也。然れども是等は少し。牛羊烏鵲は畜鳥の拙卑也。されども是は增多し。必ず多きが尊くして少きが卑しくば、麒麟を捨てて牛羊をとり、鸞鳳を閣いて烏鵲をとるべき歟。摩尼金剛は金石の靈異也。此の寶は乏しく、瓦礫土石は徒物の至り、是は又巨多也。汝が言の如くならば玉をば捨てて瓦礫を用ふべき歟。はかなしはかなし。聖君は希にして、千年に一度出で、賢佐は五百年に一度顯はる。摩尼は空く名のみ聞く、麟鳳誰か實を見たるや。世間出世善き者は乏しく惡き者は多き事眼前也。然れど何ぞ少なきを蔑にして多きを證とするや。土沙は多けれども米穀は希也。木皮は充滿すれども布絹は些少也。汝只だ正理を以て前きとすべし。別して人の多きを以て本とすることなかれ。」

【一九】爰に愚人席を去り袂をかいつくろひて云く、誠に聖教の理を聞くに人身は得難くして天上の糸筋の海底の針に貫けるよりも希に、佛法は聞き難くして一眼の龜の浮木に遇ふよりも難し。今既に得難き人界に生を受け値ひ難き佛教を見聞しつ、今生をもだしては又何れの世にか生死を離れ菩提を證すべき。夫れ一劫受生の骨は山よりも高けれども佛法の爲には未だ一骨をもすてず。多生恩愛の淚は海よりも深けれども尚後世の爲には一滴をも落さず。拙きが中に拙く、愚なるが中に愚かなり。設ひ命を捨て、身を破るとも生

【開宗の文】吾人本来の心の宗を開宗と云ふ。宗文旨文の二章。

【修證の儀】我が心中の佛性自ら教化し、文の如く文につけて法化すること。

【折伏に】各各其の主にいふこと。

【部】與奪き義理

を行じ一佛道に入りて又は己の當機を修せ、然身は破戒をも忍ぶべし。能信心を示し給へ、「折『法華經』を信ずる者の行相如何、五種の行の中には先づ何れの行をか修すべき。」「以學に修くは取捨を用ひん。」私に人に示して云く、一度佛家の門に入りて既に佛の弟子となる。然に本國主に赤子が如に遇ては聲と共なく、佛弟子となるに非ず文に入て三千塵に折伏し、折伏を除て正理に入らば此行の成に適せしむべし、又方便の爲に修行せん事必然なるべし。「妙法蓮」を弘通し衆生を利益せんには必ず教、機、時、國、教法流布の前後を辨ふべきなり。所以は時に正像末あり、法に大小乘あり。修行に摂折あり。攝受の時折伏を行ずるも非也、折伏の時攝受を行ずるも非也。然るに今の世は攝受の時か、折伏の時か、先づ之を知るべし。攝受の行は此國に法華一乘に弘をもて正法時代、人もなしといはん、此時は山林に交て觀法を修し五種六種乃至十種等を行ずべき也。折伏の時はかくの如くならず、經教の明文に、唯折の邪法を捨て、権教を禁じ、大小乗を争はん時は、身命を捨てて唯法を貫ぬべし是れ折伏の修行也。此の旨を知らずして摂折の法に時には佛道は成ずまじ。佛道に進んでべしと云ふ事、『涅槃經』、『法華經』に定め置き、天台妙樂の解釋にも分明也。是れ佛法修行の大事なるべし。譬へば文武兩道を以て天下を治むるに、武を先とすべき時もあり、文を旨とすべき時もあり。天下無爲にして國土静かならん時は文を先とすべし。東夷、南蠻、西戎、北狄、四夷蜂起して野心を挿まんには武を先とすべき也。文武のまゝ事法を心得て時をも知らず、萬國安堵の思ひをなして世間無爲ならん時、甲冑をよろひ兵杖をもたん事も非

也。又兵亂起らん時戰場にして武具をば用ひて筆硯を抛つ。是れ亦時に相應せり。攝受折伏の法門も亦是の如し、正法のみ弘まつて邪法謗法無らん時は深谷にも入り閑靜にも居して讀誦書寫をもし、觀念工夫を凝すべし。是れ天下の靜なる時筆硯を用ゆるが如し。權宗謗法國にあらん時は諸事を閣いて謗法を責べし。是れ合戰の場には兵杖を用ゆるが如し。然れば章安大師涅槃の疏に釋して云く、「昔は時平にして法弘まる、戒を持すべし杖を持する事なかれ。今は時嶮くして法翳る。杖を持すべし戒を持する事なかれ。今昔倶に平ならば倶に戒を持すべし、今昔倶に嶮ならば倶に杖を持すべし。取捨宜きを得て一向にす可らず」。此の釋の意分明也。昔は世も直に人も正くして邪法邪義無りき。されば威儀を正し穩便に行業を積で杖を以て人を責めず、邪法を咎むる事無りき。今の世は濁世、人の情も僻み歪んで權教謗法のみ多ければ正法弘まり難し。此時は讀誦書寫の修行も觀念工夫修練も無用也。只折伏を行じて力あらば威勢を以て謗法をくだき、又法門を以ても邪義を責めよと也。取捨其の旨を得て一向に執する事なかれと書けり。今の世を見るに正法一純に弘まる國か、邪法の興盛する國か勘ふべし。然るを淨土宗の法然は念佛に對して「法華經」を捨閉閣拋とよみ、善導は「法華經」を雜行と名け、剩へ千中無一とて千人持すとも一人も佛になるべからずと書けり。眞言宗の弘法は「法華經」を華嚴經にも劣れば三重の劣と書き、戲論の法と定めたり。正覺房は「法華經」は「大日經」の履取にも及ばずと云ひ、釋尊をば大日如來の牛飼にも足らずと判せり。禪宗は「法華經」を、吐たる唾を

【一】[illegible]

【不惜身命】[illegible]

【寧喪身命】[illegible]

言ず哉、能制なれと下す。小乗律等は「正法経」には犯戒大魔の所説と名けたり。
にあらずや。責めても猶あまりあり禁めても余りあらず。」

【三】愚人云く、「日本六十余州人替り法異なりといへども、或は念仏、或は真言、或は禅、或は律、誠に一人として謗法ならざる人はなし。然りと雖も人の上沙汰してなにかせん。只我が心中に深く信受して人の誤りをば余所の事にせん」と。聖人示して云く、「汝が言ふ所実にしかなり。我も其の義を存ぜし処に経文には或は『不惜身命』とも、或は『寧喪身命』とも説く。何故にかやうには説かるるやと存ずるに、只人をはばからず経文のままに法理を弘通せば、謗法の者多からん世には必ず三類の敵人有りて命にも及ぶべしと見えたり。其の仏法の違目を見ながら我もせめず国主にも訴へずば、教へに背いて仏弟子にはあらずと説かれたり。『涅槃経』第三に云く、『若し善比丘あつて法を壊る者を見て置いて呵責し駈遣し挙処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり。若し能く駈遣し呵責し挙処せば是れ我が弟子真の声聞なり』と。此の文の意は仏の正法を弘めん者経教の義を悪く説かんを聞き見ながら、我もせめず、我が身及ばずば国主に申し上げても是を対治せずば仏法の中の敵なり。若し経文の如くに人をも憚らず、我もせめ国主にも申さん人は仏弟子にして真の僧なりと説かれて候。されば『仏法中怨』の責を免れんとてかやうに諸人に悪まるれども、命を『法華経』に奉り、慈悲を一切衆生に与へて謗法を責むるを心えぬ人は口をすくめ眼を瞋らす。汝実に後世を恐れば身を軽しめ法を重んぜよ。是を以て章安大師の云く、『寧喪身

【忉利】三界の中欲界の第二、三十三天あり、天人の壽命人間の百年を一日一夜として一千年也。

【仙豫國王】涅槃經に出づ、外道、佛乘を毀る、王直ちにその命を斷つ。

【四安樂行】四安樂行儀なり。

【三】受持の法體は妙法五字なること、及び其の行相並に利益を明す。

命を喪ふとも教を匿さざれと云云、身は輕く法は重し、身を死して法を弘めよと、此文の意は身命をば亡すとも正法を隱さざれ。其故は身は輕く法は重し身をば死すとも法をば弘めよと也。悲い哉生者必滅の習ひなれば設ひ長壽を得たりとも終には無常を免るべからず。今世は百年の内外の程を思へば夢の中の夢也。非想の八萬歳未だ無常を免かれず、忉利の一千年も猶退沒の風に破らる。況や人間閻浮の習ひは露よりも危く、芭蕉よりも脆く、泡沫よりもあだ也。水中に宿る月の有るか無きかの如く、草葉におく露の後れ先だつ身也。若し此道理を得ば後世の一大事とせよ。歡喜佛の末の世の覺德比丘正法を弘めしに、無量の破戒此行者を怨て責しかば、有德國王正法を守る故に、謗法を責て終に命終して阿閦佛の國に生れて彼の佛の第一の弟子となる。大乘を重じて五百人の婆羅門の謗法を誡めし仙豫國王は不退の位に登る。憑しい哉正法の僧を重んじて邪惡の侶を誡むる人此の如くの德あり。されば今の世に攝受を行ぜん人は謗人と倶に惡道に墮ん事疑ひなし。南嶽大師の「四安樂行」に云く、「若し菩薩あつて惡人を將護し治罰する事能はずんば、乃至、其人命終して諸の惡人と倶に地獄に墮せん。」と。此文の意は若し佛法を行ずる人有て謗法の惡人を治罰せずして觀念思惟を專にして邪正權實をも簡ばず、詐つて慈悲の姿を現ぜん人は諸の惡人と倶に惡道に墮つべしと云ふ文也。今眞言、念佛、禪、律の謗人をたださず詐つて一乘を現ずる人此文の如くなるべし。」

【三】爰に愚人意を竊にし言を顯にして云はく、「誰か君を諫め家を正しくする事先賢の

【六千張の疏】天台、妙樂の法華經の註釋をいふ。

【三】功德は文句の多少に依らざること、妙法五字の意義及成佛の功德を述ぶ。

執へ本文に明白也。外典此の如し、内典豈に違ふべからず。惡を見て禁しめず謗を見て責めずば經文に背き祖師に違せん。其の禁實に重し。今よりは信心を致すべし。但し此經を修行し奉らん事叶がたし。若し其最要あらば命ずるを聞かんと思ふ。」聖人示して云く、「今汝が道意を見るに鄭重慇懃也。所謂諸佛の誠諦得道の最要は只是れ「妙法蓮華經」の五字也。檀王の寶位を退き龍女が蛇身を改めしも只此五字の致す所也。夫れ以みるに今の經は受持の多少をば一偈一句と宣べ、修行の時刻をば一念隨喜と定めたり。凡そ八萬法藏の廣きも一部八卷の多きも只是れ五字を說んため也。靈山の雲の上鷲峰の霞の中に釋尊要を結び地涌附囑を得る事ありしも法體は何事ぞ、只此の要法に在り。天台、妙樂の六千張の疏、玉を連ぬるも、道邃行滿の數軸の釋、金を並べたるも併ながら此義趣を出でず。誠に生死を恐れ涅槃を欣び信心を運び渇仰を致さば遷滅無常は昨日の夢、菩提の覺悟は今日の現なるべし。只「南無妙法蓮華經」とだにも唱へ奉らば、滅せぬ罪や有るべき來らぬ福や有るべき。眞實也甚深也、是を信受すべし。」

【三】愚人掌を合せ膝を折つて云く、「貴命肝に染み教訓意を動かす。然りと雖も上能兼下の理なれば廣きは狹きを攝め多きは少きを兼ぬ。然る處に五字は少く文言は多し。首題は狹く八軸は廣し。如何ぞ功德齊等ならんや。」聖人云く、「汝愚也、捨少取多の執須彌よりも高く、輕狹重廣の情溟海よりも深し。今の文の初後は必ず多きが尊く少きが卑しきにあらざる事前に示すが如し。爰に又小が大を兼ね一が多に勝ると云ふ事之を談ぜ

【尼拘類樹】(Nyagrodha) の音譯。印度に成長する高大なる樹木。
【背契】背馳するか契合するか。
【三】妙法受持唱題の益證を出す。

ん。彼の尼拘類樹の實は芥子三分が一の長也。されども五百兩の車を隱す德あり。是れ小が大を含めるにあらずや。又如意寶珠は一つあれども萬寶を雨して缺る處之れ無し。是又少きが多きを兼たるにあらずや。世間の諺にも一は萬が母といへり。此等の道理を知らずや。詮ずる所は實相の理の背契を論ぜよ。強ちに多少を執する事なかれ。汝至て愚也。今一の譬を假らん。夫れ『妙法蓮華經』とは一切衆生の佛性也。佛性とは法性也。法性とは菩提也。所謂釋迦、多寶十方の諸佛、上行、無邊行等、普賢、文殊、舍利弗、目連等、大梵天王、釋提桓因、日月、明星、北斗七星、二十八宿、無量の諸星、天衆地類、龍神八部、人天大會、閻魔法皇、上は非想の雲の上、下は那落の炎の底まで所有一切衆生の備ふる所の佛性を『妙法蓮華經』とは名くる也。されば一遍此首題を唱へ奉れば、一切衆生の佛性が皆呼れて爰に集る時、我身の法性の法報應の三身倶に引れて顯れ出る、是を成佛とは申す也。例せば籠の内にある鳥の鳴く時、空を飛ぶ衆鳥同時に集る、是を見て籠の内の鳥も出んとするが如し。」

【三】爰に愚人云く「首題の功德妙法の義趣今聞く所詳か也。但し此の旨趣正く經文に是をのせたりや如何。」聖人云く「其理詳かならんには文を尋ぬるに及ばざる歟。然れども請に隨つて之を示さん。『法華經第八陀羅尼品』に云く、『汝等但能く法華の名を受持せん者を擁護せん、福量る可らず』。此文の意は鬼子母神、十羅刹女の『法華經』の行者を守らんと誓ひ給ふを讃るとして、汝等法華の首題を持つ人を守るべしと誓ふ。其功德は

【二四】圓頓の教は知不知を問はず、但信を以て本旨とするを述べ、妙法經力によつて即身成佛することを說く。

三世了達の佛の智慧も尚及びがたしと說れたり。佛智の及ばぬ事何かあるべき、なれども法華の題名受持の功德ばかりは之を知らずと宣べたり。法華一部の功德は只妙法等の五字の内に籠れり、一部八卷文文ごとに廿八品旨趣かはれども首題の五字は同等也。譬へば日本の二字の中に六十餘州島二つ、入らぬ國やあるべき、籠らぬ郡やあるべき。飛鳥と呼べば空を翔る者と知り、走獸といへば地を走れる者と心うる。一切名の大切なる事蓋し以て是の如し。天台は『名詮自性句詮差別』とも『名者大綱』とも判ずる此謂也。又名は物を召す德あり、物は名に應ずる用あり。法華題名の功德も亦以て此の如し。」

【二四】愚人云く「聖人の言の如くば實に首題の功莫大也。但し知ると知らざるとの不同あり。我は弓箭に携り兵杖を旨として未だ佛法の眞味を知らず、若し然らば得る所の功德何ぞ其れ深からんや。」聖人云く「圓頓の教理は初後全く不二にして初位に後位の德あり。一行一切行にして功德の備はらざるは之れ無し。若し汝が言の如くば功德を知て植ゑずんば上は等覺より下は名字に至るまで得益更にあるべからず。今の經は『唯佛與佛』と談ずるが故也。『譬喩品』に云く、『汝舍利弗尚此經に於ては信を以て入ることを得たり。況や餘の聲聞をや。』文の心は大智舍利弗も『法華經』には信を以て入る、其の智分の力にはあらず。況や自餘の聲聞をやと也。されば『法華經』に來つて信ぜしかば永不成佛の名を削つて華光如來となり、嬰兒に乳を含むるに其の味ひを知らずといへども自然に其身を生長す。醫師が病者に藥を與ふるに病者藥の根源を知らずといへども服すれば任運と病愈

【傳教大師云】大師の著、法華秀句の文。一師弟ともにこの經を持つによりて年劫を經るになく、經力の故に即身成佛す。」の意。

ゆ。若し藥の源を知らずと云て醫師の與ふる藥を服せずば其病愈ゆべしや。藥を知るも知らざるも服すれば病の愈ゆる事以て是同じ。既に佛に良醫と號し法を良藥に譬へ衆生を病人に譬ふ。されば如來一代の教法を擣篩和合して妙法一粒の良藥に丸せり。豈知るも知らざるも服せん者の煩惱の病愈ざるべしや。病者は藥をも知らず病をも辨へずといへども服すれば必ず愈ゆ。行者も亦然也。法理をも知らず煩惱をも知らずといへども、只信ずれば見思、塵沙、無明の三惑の病を同時に斷じて實報、寂光の臺にのぼり、本有三身の膚を磨ん事疑ひあるべからず。されば傳教大師云く、「能化所化倶に歴劫無く妙法經の力即身に成佛す」と。「法華經」の法理を教へん師匠も又習はん弟子も久しからずして「法華經」の力を以て倶に佛になるべしと云ふ文也。天台大師も「法華經」に付て「玄義」「文句」「止觀」三十卷の釋を造り給ふ。妙樂大師は又「釋籤」「疏記」「輔行」三十卷の末文を造て重て消釋す、天台六十卷とは是也。「玄義」の名、體、宗、用、教の五重玄は「妙法蓮華經」の五字の功能を判釋す。五重玄を釋する中の宗の釋に云く、「綱維を提ぐるに目として動かざる事なく、衣の一角を牽くに縷として來らざる事無きが如し。」と。意は此「妙法蓮華經」を信仰し奉る一行に功德として來らざる事なく、善根として動ざる事なし。譬へば網の目無量なれども一の大綱を引くに動かざる目もなく、衣の絲筋巨多なれども一角を取るに絲筋として來らざることなきが如しと云ふ義也。さて「文句」には「如是我聞」より「作禮而去」まで文文句句に因緣、約教、本迹、觀心の四種の釋を設けたり。次に「止觀」に

は妙境の上に立つる所の觀不思議境の一念三千、是れ本覺の立行本具の理心也。今爰に委くせず。悦ばしき哉、生を五濁惡世に受くるといへども、一乘の眞文を見聞する事を得たり。熈連恒沙の善根を致せる者此經にあひ奉つて信を取ると見えたり。汝今一念隨喜の信を致す、函蓋相應感應道交疑ひなし。」

【三五】愚人頭を低れ手を舉げて云く、「我れ今よりは一實の經王を受持し、三界の獨尊を本師として今身より佛身に至るまで此の信心敢て退轉なけん。設ひ五逆の雲厚く覆ふとも提婆達多が成佛を續ぎ、十惡の波荒くとも願くは王子覆講の結緣に同じからん。」聖人云く、「人の心は水の器に從ふが如く、物の性は月の波に動くに似たり。汝當座は信ずといふとも後日は必ず飜へさん。魔來り鬼來るとも騷亂する事なかれ。夫れ天魔は佛法を惜む、外道は内道を嫌ふ。されば猪の金山を摺り、衆流の海に入り、薪の火を盛になし、風の求羅を益が如くせば、豈に好き事にあらずや。」

持妙法華問答抄

【一】「抑も希に人身を受け適適佛法を聞けり。然るに法に淺深あり、人に高下ありと云へり。何なる法を修行してか、速に佛になり候べき。願くは其道を聞かんと思ふ。」答へて云く、「家家に尊勝あり、國國に高貴あり。皆其君を貴み其親を崇むと雖も、豈に國王

【本覺の立行云云】一切衆生、佛性を本より具するによりて、皆あて成佛の行立つ也。

【熙連恒沙】印度拘尸那城の北にある河の砂の數の如き大數。涅槃經に出づ。

【三五】不惜身命、無有退轉の信心を勸む。

【王子覆講】法華經化城喩品に出づ。

【猪の金山を】猪金山を揩り突くに、いよいよ金光かがやくを、法華持者の大難を忍ぶによりて、いよいよ光あるに譬ふ。

【求羅】迦縷求羅の略。印度に棲む蜥蜴の一種、風を食て生長すると。

◇縮遺四六五頁、弘長三年(四十二歲)の作。成佛の開題につきて、先づ邪を捨て正に歸するの要義を示し、之が實踐は唯だ信

心に限るの旨を明し、世間の無常の事實に訴へて勸進したるもの。

【一】成佛の直道は一代聖教中獨勝の法華經にあることを指南す。

【二】法華獨勝を難ずるに答て、經釋を引て論證す。

に勝るべきや。爰に知んぬ。大小、權實は家家の諍ひなれども一代聖教の中には『法華經』獨り勝れたり。是れ頓證菩提の指南、直至道場の車輪なり。」

【二】疑つて云く、「人師は經論の心を得て釋を作る者なり。然らば則ち宗宗の人師、面面各各に教門をしつらひ、釋を作り義を立て證得菩提を志す、何ぞ咀しめるべきや。然るに『法華』一經の獨り勝ると候はば、心狹くこそ覺え候へ。」答へて云く、「『法華經』獨りいみじと申すが心狹く候はば、釋尊程心狹き人は世に候はじ。何ぞ誤りの甚しきや。且く一經一流の釋を引いて其迷ひを悟らせん。『無量義經』に云く、『種種に法を說き、種種に法を說くこと方便力を以てす。四十餘年に未だ眞實を顯さず。』云云。此文を聞いて、大莊嚴等の八萬人の菩薩一同に『無量無邊、不可思議、阿僧祇劫を過ぐるとも終に無上菩提を成ずることを得ず。』と領解し給へり。此文の心は、『華嚴』、『阿含』、『方等』、『般若』の四十餘年の經に付いて、いかに念佛を申し、禪宗を持ちて佛道を願ひ、無量無邊不可思議阿僧祇劫を過ぐるとも、無上菩提を成ずる事を得じと云へり。しかのみならず『方便品』には『世尊の法は久しくして後、要らず當に眞實を說き給ふべし。』と說き、又『唯一乘の法のみ有り、二も無く亦三も無し。』と說いて、此經ばかり實なりと云ひ、又二の卷には『唯我一人のみ能く救護を爲す。』と教へ、『但樂つて大乘經典を受持し、乃至、餘經の一偈をも受けざれ。』と說き給へり。文の心は、唯我一人して能く救ひ護る事をなす。『法華經』を受け持たん事をねがひて、餘經の一偈をも受けざれと見えたり。又云く、『若し人信ぜずして此經

【二】爾前の諸經にも經王と稱する難に答へて、法華經は已今當一代に互りて第一なりと示す。

【了義經】涅槃經に出づ。佛の本懷の眞實の義を明し了へたる經。

を毀謗せば、則ち一切世間の佛種を斷ぜん、乃至、其人命終して阿鼻獄に入らん」と云云。此文の心は、若し人此經を信ぜずして此經に背かば、則ち一切世間の佛の種を斷つ者なり。其人命終らば阿鼻地獄に入るべしと說き給へり。此等の文を承けて、天台は「前に魔の佛と作るに非ずやの詞正しく此文に依れり」と判じ給へり。唯だ人師の釋計りを憑みて佛說に依らずば、何ぞ佛法といふ名を付くべきや。言語道斷の次第なり。之に依て智證大師は、「經に大小なく、理に偏圓なし」と云ひて、「一切人によらば佛說無用なり」と釋し給へり。又天台は「若し深く所以有り、復修多羅と合せるをば錄して之を用ゐ、無文無義は信受すべからず」と判じ給へり。又云く「文證無きは悉く是れ邪の謂」とも云へり。如何に心得べきぞ。」

【二】問うて曰く、「人師の釋はさも候べし。爾前の諸經に此經第一と說き諸經の王とも宣べたり。若し爾らば佛說なりとも用ゆべからず候か。如何。」答へて曰く、設ひ爾前の經に『第一』とも『諸經の王』とも申し候へ、皆是れ權教なり。其語に依るべからず。之に依て佛は「了義經によりて不了義經に依らざれ」と說き、妙樂大師は「縱ひ經有りて諸經の王と云ふとも、已今當說最爲第一と云はざれば、兼但對帶、其義知んぬべし」と釋し給へり。此釋の心は、設ひ經ありて諸經の王とは云ふとも、前に說きつる經にも、後に說かんずる經にも、此經は勝れりと云はずば方便の經と知れと云ふ釋なり。されば爾前の經の習として、今說く經より後に又經を說くべき由を云はざるなり。唯だ「法華經」計りこそ最後の極說なる

【四】未顕真実は二乗に限るの難には答へて之を破し、次に二乗作仏は今経に限り一代諸経に絶えたる所以なる、法華に独勝の所以なるを断ず。

【徳一】奥州筑波山寺の僧、法相の学僧。

【一代化儀】教化の方針方法也。

【三周善巧】上中下の三根に応じて法説譬説因縁の三重に説かれし巧妙なる説法の方法。

かるが故に、已今当の中に此経独り勝れたりと説かれて候へ。されば釈には「唯だ法華に至つて前教の意を説いて、今経の意を顕はす。」と申して、「法華経」にて如来の本意も、教化の儀式も定まりぬと見えたり。之に依て天台は「如来成道四十余年未だ真実を顕はさず、法華始めて真実を顕はす。」と云へり。此文の心は、如来世に出させ給ひて四十余年が間は真実の法をば顕はさず、「法華経」に始めて仏になる実の道を顕はし給へりと釈し給へり。

【四】問うて云く、「已今当の中に「法華経」勝れたりと云ふ事は、さも候べし。但し有る人の云く、「四十余年未顕真実」と云ふは、「法華経」にて仏になる声聞の得益の為には未顕真実と云ふべからずと云ふ義をば如何心得候べきや。答へて曰く、「法華経」は二乗の為なり、菩薩の為にあらず。されば未顕真実と云ふ事も二乗に限るべしと云ふは、徳一大師の義か。此は法相宗の人なり。此事を伝教大師破して云く、「現在の麁食者は偽章数巻を作つて法を謗し人を謗す、何ぞ地獄に堕せざらんや。」と破し給ひしかば、徳一大師其語に責められて、舌八つに裂けて失せ給ひき。未顕真実とは二乗の為なりと云はば、最も理を得たり。其故は頓漸諸教の元付は元より二乗の為なり、一代の化儀、三周の善巧、併ながら二乗を正意とし給へり。されば「華厳経」には、地獄の衆生は仏になるとも、二乗は仏になるべからずと嫌ひ、「方等」には、高峰に蓮の生ひざるやうに、二乗は仏の種を焦りたりといはれ、「般若」には、五逆罪の者は仏になるべし、二乗は叶ふべからずと捨てらる。かかる浅ましき捨者の仏になるを以て如来の本意とし、「法華経」の規模とす。

【五】末代愚癡の凡夫の成佛の要道は、唯だ信心にあることを說く。

之に依て天台の云く、「華嚴、大品も之を治すること能はず、唯だ法華のみ有つて能く無學をして還つて善根を生じ、佛道を成ずることを得せしむ。所以に妙と稱す。又闡提は心有り、尚ほ作佛す可し、二乘は智を滅す、心生ずべからず。法華能く治す、復稱して妙と爲す。」云云。此文の心は委しく申すに及ばず。誠に知んぬ、『華嚴』、『方等』、『大品』等の法藥も二乘の重病をば癒さず。又三惡道の罪人をも菩薩ぞと爾前の經にはほむれども、二乘をばゆるさず。之に依て妙樂大師は「餘趣を眞に會すること諸經に或は有れども、二乘は全く無し。故に菩薩に合して二乘に對し、歎きに從つて說く。」と釋し給へり。しかのみならず、二乘の作佛は一切衆生の成佛を顯はすと、天台は判じ給へり。蚊虻が大海を渡らんをば遲れ難しとやせん、嬰兒の力士を投げん何ぞ難しとせん。然れば則ち佛性の種ある者は佛になるべしと爾前にも說けども、未だ焦種の者作佛すべしとは說かず。かかる重病を易く癒すは、獨り『法華經』の良藥なり。只須らく汝佛にならんと思はば、慢の幢を倒し、忿りの杖をすてて、偏へに一乘に歸すべし。名聞名利は今生の飾り、我慢偏執は後生の紲なり。嗚呼恥づべし、恥づべし、恐るべし、恐るべし。」

【五】問うて云く、一を以て萬を察する事なれば、あらあら『法華』の謂れを聞くに、耳目始めて明なり。但し『法華經』をば如何やうに心得候てか、速に菩提の岸に到るべきや。傳へ聞く、一念三千の大虛には慧日曇る事なく、一心三觀の廣池には智水濁る事なき人こそ、其の修行に堪へたる機にて候なれ。然るに南都の修學に臂をくだく事なか

【北嶺】叡山のこと。

【瓮を蒙り云云】土製の瓶をかぶりて云云の義にて、全然解らぬといふ意。

【經には】法華經提婆品。

【泥梨】(Niraya)の音寫、地獄と譯す。

【六八】最勝の經を信ずべきこと、法貴きが故に人貴きの理を示して法華の信心をすすむ。

りしかば、「瑜伽」「唯識」にも昏し。北嶺の學文に眼をさらさざりしかば、『止觀』『玄義』にも迷へり。天台、法相の兩宗は、瓮を蒙りて壁に向へるが如し。されば『法華』の機には既に漏れて候にこそ、如何し候べき。」答へて云く、「利智精進にして觀法修行するのみ『法華』の機ぞと云ひて、無智の人を妨ぐるは、當世の學者の所行なり。是れ還つて愚癡邪見の至なり。一切衆生皆成佛道の教へなれば、上根、上機は觀念觀法も然るべし。下根、下機はただ信心肝要なり。されば經には『淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は地獄、餓鬼、畜生に墮ちずして、十方の佛前に生ぜん。』と說き給へり。いかにも信じて、次の生の佛前を期すべきなり。譬へば高き岸の下に人ありて、登る事能はざらんに、又岸の上に人ありて繩を下して、此の繩に取付かば我岸の上に引登さんと云はんに、引く人の力を疑ひ、繩の弱からん事を危ぶみて、手を納めて是を取らざらんが如し。爭でか岸の上に登る事を得べき。若し其の詞に隨ひて、手をのべ是を捉へば、即ち登る事を得べし。『唯だ我れ一人のみ、能く救護をなす。』の佛の御力を疑ひ、『信を以て入ることを得』との『法華經』の教への繩を危ぶみて、『決定して疑あることなし』の妙法を唱へ奉らざらんは力及ばず、菩提の岸に登る事難かるべし。不信の者は『泥梨に墮在する』の根元なり。されば經には『疑を生じて信ぜざらん者は則ち當に惡道に墮つべし。』と說かれたり。

【六八】受け難き人身を受け、値ひ難き佛法に値ひて、爭でか虛しくて候べきぞ。同じく信を取るならば、又大小、權實のある中に、諸佛出世の本意、衆生成佛の直道の一乘

【三途】地獄、餓鬼、畜生の三悪道のことにて、火途と血途と刀途となり。

【八難】仏法を聞き得ざる処に生るるに八處あり。最苦處、長寿天、辺地、不具、世智、仏前仏後なり。

【七方便】未だ、仏の位に至らざる人天乗等の修行者の類也。

【五十展転】法華経随喜功徳品に出づ。聞法の随喜を伝へて第五十人目の人の功徳を明せり。

【七】法華経及び法華の持者を軽んじ謗るの罪科を明して謗法を誡しむ。

たこそ信ずべけれ。持つ法の勝劣に随ひて之を顕はさば、即ち持つ人も亦諸人に勝れたり。経を以て経に説く、「能く是の経を持つ者は、一切衆生の中に於て亦為れ第一なり」と説き給へり。又此の心を会せず、疑ひ無し。然るに人此理を知らずして、若し謗法を行じ致せるは地獄の業たり。只聞くに罪を作りて、名を十方の阿鼻の獄に流し、我れと三世の菩提の萌芽を焦すべし。然れば謗法の罪を犯す人は、大焦熱八寒地獄を以て我が眷属とするなり。しかのみならず阿鼻の内に無量の苦悩を受け、有為の凡夫に悲歎の果を得ぬれば、三途に堕れなく、八難に懸ることなし。七方便の山の頂に登りて、九法界の雲を払ひ、無明煩悩の闇に開き、法性の空に月明かならん。「是の人仏道に於て、決定して疑ひ有ること無けん」の文顕然なり。「唯我一人のみ能く救護を為す」の言頼もし。一念信解の功徳は五波羅蜜の行に越え、五十展転の随喜は八十年の布施に勝れたり。頓証菩提の教へは遥かに群典に秀で、顕本遠寿の説は永く諸乗に絶えたり。又是を以て八歳の龍女は大海より来りて経力を刹那に示し、本化の上行は大地より涌出して仏寿を久遠に顕はす。百千道理の経王、心行所証の妙法なり。

【七】　然るに此理を忽諸にして諸経に等しむるは、謗法の至り大罪の至極なり、譬を取るに物なし。仏の神力にても何ぞ是を説き尽さん、菩薩の智力にても争でか是を量るべき。されば譬喩品に云く、「若し其罪を説かば、劫を窮むとも尽きず」云云。文の心は「法華経を一度もそむける人の罪をば、劫を窮むとも説き尽し難しと見えたり。然る間末世の

【八】佛の平等の悲願力、經法の妙智力に約して無常苦海の衆生に信心を勸む。【望めても】對してもの意。

諸佛の化導にも漏れ、恒沙の如來の法門にも捨てられ、冥きより冥きに入りて、阿鼻大城の苦患争でか免れん。誰か心あらん人、長劫の悲みを恐れざらんや。爰を以て經に云く、『經を讀誦し書持すること有らん者を見て、輕賤憎嫉して結恨を懷かん』『其人命終して阿鼻獄に入らん』と云云。文の心は、『法華經』を讀み持たん者を見て、輕しめ賤しみ憎み嫉み、恨みを結ばん。其人は命終りて阿鼻大城に入らんと云へり。大聖の金言、誰か是を恐れざらんや。『正直捨方便』の明文豈に是を疑ふべきや。然るに人皆經文に背き、世悉く法理に迷へり。汝何ぞ惡友の敎へに隨はんや。されば邪師の法を信じ受くる者を名づけて、毒を飮む者なりと天台は釋し給へり。汝能く是を愼むべし。是を愼むべし。倩世間を見るに法をば貴しと申せども、其人をば萬人是を惡む。汝能く能く法の源に迷へり。何にと云ふに、一切の草木は地より出生せり。是を以て思ふに、一切の佛法も又人によりて弘まるべし。之に依て天台は佛世すら猶ほ人を以て法を顯はす、末代はいづくんぞ法は貴けれども人は賤しと云はんやとこそ、釋して御坐候へ。されば持たるる法だに第一ならば、持つ人隨つて第一なるべし。然らば即ち其人を毀るは、其法を毀るなり。其子を賤しむるは即ち其親を賤しむなり。爰に知んぬ、當世の人は詞と心と總て合はず、『孝經』を以て其親を打つが如し。豈に冥の照覽恥かしからざらんや。地獄の苦み恐るべし、恐るべし、愼むべし、愼むべし。

【八】上根に望めても卑下すべからず、下根を捨てざるは本懷なり。下根に望めても憍

【色なき】心なきの意味。

慢なりされ、上根も漏るる事あり。心を致さざる故に、凡そ其里遠かしけれども道絶え縁なきには、通ふ心も疎かに、其人戀しけれども憑めず契らぬには、待つ思ひも等閑なるやうに、彼の月卿雲客に勝れたる靈山淨土の行き易きにも未だ行かず、『我即是父』の柔顔の御姿見奉るべきをも未だ見奉らず。是れ偏に袂をくだし胸を焦す歎きならざらんや。暮れ行く空の雲の色、有明方の月の光までも、心を催す思ひなり。事にふれ折に付けても後世を心にかけ、花の春、雪の朝も是を思ひ、風騒ぎ村雲迷ふ夕にも忘るる隙なかれ。出る息は入る息を待たず、何なる時節ありてか『毎自作是念』の悲願を忘れ、何なる月日ありてか『無一不成佛』の御經を持たざらん。昨日が今日になり、去年の今年となる事も是れ期する處の餘命にはあらざるをや。總て過ぎにし方を數へて、年の積るをば知ると雖も、今行末に於て一日片時も誰か命の數に入るべき。臨終今に在りとは知りながら、我慢、偏執、名聞、利養に著して、妙法を唱へ奉らざらん事は、志の程無下にあさまし。さこそは『皆成佛道』の御法とは云ひながら、此人爭でか佛道に懶からざるべき。色なき人の袖には、そぞろに月の宿る事かは。又命已に一念に過ぎざれば、佛は『一念隨喜の功德』と說き給へり。若し是れ二念三念を期すと云はば、平等大慧の本誓、頓教一乘皆成佛の法とは云はるべからず。流布の時は末世法滅に及び、機は五逆謗法をも納めたり。故に頓證菩提の心におきてられて、狐疑執著の邪見に身を任する事なかれ。生涯幾くならず、思へば一夜の假の宿を忘れて、幾くの名利をか得ん。又得たりとも、是れ夢の中の榮え、珍しか

【九】滅難生福の祈禱に約して信心を勸む

【髻の中の明珠】法華經安樂行品に出づ。

らぬ樂みなり。只先世の業因に任せて營むべし。世間の無常を悟らん事は、眼に遮り耳に充てり。雲とやなり、雨とやなりけん、昔の人は只名のみ聞く。露とや消え、煙とや登りけん、今の友も又見えず。我いつまでか三笠の雲と思ふべき。春の花の風に隨ひ、秋の紅葉の時雨に染むる、是れ皆ながらへぬ世の中のためしなれば、「法華經」には「世皆牢固ならざること、水沫泡焰の如し。」とすゝめたり。「何を以てか衆生をして無上道に入ることを得せしめん。」この御心の底、順縁逆縁の御言の葉已に本懷なれば、暫くも持つ者も又本意に叶ひぬ。又本意に叶ふ故に佛の恩を報ずるなり。悲母深重の經文心安ければ、「唯我一人」の御苦みもかつや休み給ふらん。釋迦一佛の悅び給ふのみならず、諸佛出世の本懷なれば十方三世の諸佛も悅び給ふべし。「我即ち歡喜す、諸佛も亦然なり。」と說かれたれば佛悅び給ふのみならず、神も即ち隨喜し給ふなるべし。傳教大師是を講じ給ひしかば、八幡大菩薩は紫の袈裟を布施し、空也上人是を讀み給ひしかば、松尾大明神は寒風を防がせ給ふ。

【九】「されば「七難即滅七福即生」と祈らんにも此御經第一なり。『現世安穩』と見えたればなり。他國侵逼の難、自界叛逆の難の御祈禱にも此妙典に過ぎたるはなし。『百由旬の內に諸の衰患無からしむ』と說かれたればなり。然るに當世の御祈禱はさかさま也。先代流布の權教なり。末代流布の最上眞實の祕法にあらざるなり。譬へば去年の暦を用ひ、鳥を鵜に使はんが如し。是れ偏へに權教の邪師を貴みて、未だ實教の明師に値はせ給はざる故なり。惜しい哉、文武の卞和があら玉何くにか納めけん。嬉ばしい哉、釋尊出世の髻

【一】總じて三世遠々の輪廻を示して、信心唱題の妙果を結勸す。

【弄引】手引の意。

【一】縮遺一〇九六頁文永十二年（五十四歳）の作。檀越曾谷氏、太田氏等に與へて、末法逆謗の良藥は要法五字なる所以を教機時國序師の六義を以て論證し、大法護持、公場對決の用意として、大藏聖教の聚集を勸命したるものなり。

の中の明珠、今度我が身に得たる事よ。十方諸佛の證誠として虚偽ならず。さてこそ過去二國位間には怨多くして信じ難し」と知りながら、爭でか一分の疑心を殘して『法華經』に疑ひあることも無き」の佛にならざらんや、

【二】「過去遠々の苦みは徒にのみこそ受け來しか。などか暫く不變常住の妙因を植ゑざらん。未來永々の樂みはかつがつ心を養ふとも、強ひてあながちに電光朝露の名利をば貪るべからず。」「三界は安きこと無し、猶ほ火宅の如し。」とは如來の教へ、「所以に諸法は幻の如く化の如し。」とは菩薩の詞なり。寂光の都ならずば、何くも皆苦なるべし。本覺の栖を離れて何事か樂みなるべき。願くば「現世安穩、後生善處」の妙法を保つのみこそ、只今生の名聞、後世の弄引なるべけれ。須らく心を一にして『南無妙法蓮華經』と我も唱へ、佗をも勸めんのみぞ、今生人界の思ひ出なるべき。『南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。』

曾谷鈔

【一】夫れ以みれば重病を療治するには良藥を構索し、逆謗を救助するには要法に如かず。所謂る時を論ずれば正像末、教を論ずれば小大、偏圓、權實、顯密、國を論ずれば中邊の兩國、機を論ずれば已逆と未逆と、已謗と未謗と、師を論ずれば凡師と聖師と、二乘と菩薩と、佗方と此土と、迹化と本化となり。故に四依の菩薩等、滅後に出現し、佛の付

【一】末法逆謗を救ふの良藥は五字の大綱要法たる所以を示し、先づ弘教の用捨を辯ずるに經文の異を擧ぐ。

【逆謗】逆緣謗法の者。

【二】釋を引いて經文の相異を會して尙在世爾前の設化は將護調機して法華に入る爲なるを明す。

【造次】倉卒をいふ。わづかの間。

【寂滅等云云】寂滅とは華嚴經の座、鹿野とは鹿野苑、阿含部を指す大寶とは大集經の會大寶坊方等部白鷺は白鷺池、一大般若經の說會の般若部の諸經を指す。

【三五の塵點】法華經化城喩品の三千塵點と、壽量品の五百億塵點なり。

屬に隨つて、妄りに經法を演說し給はず。所詮無智の者、未だ大法を謗ぜざるには、忽ちに大法を與へざれ。惡人たる上已に實大を謗ずる者には、强ひて之を說くべし。「法華經」第二の卷に、佛舍利弗に對して云はく、「無智の人の中にして此經を說くことなかれ。」又第四の卷に、藥王菩薩等の八萬の大士に告げ給はく、「此經は是れ諸佛祕要の藏なり、分布して妄りに人に授與すべからず。」等云云。文の心は、無智の者の未だ正法を謗らざるには、左右なく此經を說くこと莫れ。「法華經」第七の卷、「不輕品」に云く、「乃至遠く四衆を見ても、亦復故らに往いて」等云云。又云く、「四衆の中に瞋恚を生じ、心不淨なる者あり、惡口罵詈して言はく、是の無智の比丘、何れの所より來てか」等云云。又云く、「或は杖木瓦石を以て之を打擲す。」等云云。第二第四の卷の經文と、第七の卷の經文と天地水火なり。

【二】 問うて曰く、「一經二說、何れの義に就いて、此經を弘通すべき」。答へて云く、「私に會通すべからず、靈山の聽衆たる、天台大師、並びに妙樂大師等、處處に多くの釋あり先づ一兩の文を出さん。「文句」の十に曰く、「問うて曰く、釋迦は出世すれども踟蹰して說かず、今は此れ何の意ぞ、造次にして說くは何ぞや。答へて曰く、本已に善あるには、釋迦小を以て之を將護し、本未だ善あらざるには、不輕大を以て之を强毒す」等云云。釋の心は、寂滅、鹿野、大寶、白鷺等の前四味の小大、權實の諸經、四敎八敎の所被の機緣、彼等が過去を尋ね見れば、久遠、大通の時に於て純圓の種を下せしかども、諸業一乘經を謗ぜしかば、三五の塵點を經歷す。然りと雖も下せし所の下種、純熟の故に、時至つて

【二】[illegible]の得道[illegible]下種の[illegible]に[illegible]。[illegible]大日經[illegible]道[illegible]は實義なし[illegible]す

【初住】[illegible]な[illegible]の機[illegible]。[illegible]ひ[illegible]と

【種熟脫】[illegible]佛の化導の始め[illegible]佛種を下す[illegible]ち[illegible]それを生長[illegible]遂に[illegible]終始[illegible]大日[illegible]いふも、[illegible]出無佛[illegible]と[illegible]の佛果[illegible]也

【四】滅後の弘教につきて、正像末の機教の相當を明し、之に對する諸宗の邪義を簡び、正義を示す。

自ら疑網を晴はす。但だ四十餘年の間、過去に已に結緣の者も、猶ほ謗を爲すべきの故に、且らく權小の諸經を演說して、根機を練らしむ。

【二】問うて曰く、「華嚴」の時、別圓の大菩薩、乃至「觀經」等の諸の凡夫の得道は如何。答へて曰く、彼等の衆は時を以て之を論ずれば、其の經の得道に似たれども、實を以て之を勘ふるに、三五下種の輩なり。問うて曰く、其の證如何。答へて曰く、「法華經」第五の「涌出品」に云く、「是の諸の衆生は世世より已來、常に我が化を受く。乃至、此の諸の衆生は始め我が身を見、我が所說を聞いて、即ち皆信受して如來の慧に入りにき」等云云。天台釋して云く、「衆生久遠」等云云。妙樂大師の云く、「脫は現に在りと雖も、具に本種を騰ぐ。」又云く、「故に知んぬ、今日の逗會は、昔の成熟の機に赴く。」等云云。經釋顯然たる上は、私の料見を待たず。例せば王女と下女と天子の種子を下されば國主と爲らざるが如し。問うて曰く、「大日經」等の得道の者は如何。答へて曰く、「種種の異義ありと雖も、繁きが故に之を載せず。但し所詮彼彼の經經に、種熟脫を說かざれば、還って灰斷に同ず、化に始終なきの經なり。而るに眞言師等の談ずる即身成佛は、譬へば窮人の妄りに帝王と號して、自ら誅滅を取るが如し、王莽、趙高の輩外に求むべからず、今の眞言家なり。

【四】此等に因て論ずれば、佛の滅後に於て三時あり。正像二千餘年には、猶ほ下種の者あり。例せば在世四十餘年の如し。根機を知らずんば左右なく實經を與ふべからず。今は

【毒鼓】不輕菩薩の杖木の難を忍びての但行禮拜は、之を鼓に毒を塗りて之を撃ち、好惡を問はず一同に強て毒を中るが如きに譬へてその逆化の益を言ふ。

【三部經】大日、金剛頂、蘇悉地の眞言三部經。

【三一相對】三乘一乘の相對。

【會二破二・二云六】大日經等は二乘を破し二乘を會するを說く一乘にして華嚴經の如く三乘一乘を說かず。況や法華經の如く三歸一の唯一佛乘ならず。

【一行阿闍梨】撰時抄に詳說せるを見よ。

【五性の邪義】法華經の意有性、皆成佛の道に會し、法相宗は五性各別を立て、[illegible]性は

既に末法に入って、在世の結縁の者は漸漸に衰微して、權實の二機皆悉く盡きぬ。彼の不輕菩薩末世に出現して、毒鼓を撃たしむるの時なり。而るに今時の學者、時機に迷惑して或は小乘を弘通し、或は權大乘を授與し、或は一乘を演說すれども、題目の五字を以て下種と爲すべきの由來を知らざるか。殊に眞言宗の學者、迷惑を懷いて「三部經」に依憑し、單に會二破二の義を宣べ、猶ほ三一相對を說かず、即身頓悟の道路を削り、草木成佛は名をも聞かざるのみ。而るに善無畏、金剛智、不空等の僧侶、月氏より漢土に來臨せし時、本國に於て未だ存せざる天台の大法、盛に此國に流布せしむるの間、自愛所持の經弘め難きに依り、一行阿闍梨を語らひ得て、天台の智慧を盗み取り、「大日經」等に摂入して、天竺よりあるの由之を僞る。然るに震旦一國の王臣等、竝びに日本國の弘法、慈覺の兩大師、之を辨へずして信を加ふ。已下の諸學は言ふに足らず。但し漢土、日本の中に、傳教大師一人之を推し給へり。然れども未だ分明ならず。所詮善無畏三藏、閻魔王の責を蒙って此の過罪を悔ゐ、不空三藏の還って天竺に渡って、眞言を捨てて漢土に來臨し、天台の戒壇を建立して兩界の中央の本尊に「法華經」を置きし是れなり。問うて曰く、今時の眞言宗の學者等、何ぞ此義を存せざるや。答へて曰く「眉は近けれども見えず、自の禍を知らず」とは是の謂か。嘉祥大師は三論宗を捨てて天台の弟子となる。今の末學等之を知らず。法藏、澄觀は華嚴宗を置いて智者に歸す。彼宗の學者之を存せず。玄奘三藏、慈恩大師は五性の邪義を廢して一乘の法に移る。法相の學者堅く之を諍ふ。問うて曰く、「其證如

内佛し、聲聞性、緣覺性、無性有情、性は成佛せず、不定性は兩者に互るといふを指す。

【四】或は心を移し云云　心を移すはその教學を信じ、服せること、身を移すは改宗し、身口に身には明に信服を表するをいふ。

【五】正像末三時弘通の教法を述ぶ、先づ正法時代を說き因みに眞言宗の邪義を破す。

何。答へて曰く、「或は心を作して身を修さず、或は身を修して心を移さず、或は身心共に移さす。其證文は別紙に之を出すべし。正像の並に形ずれば之を出さず。」

【五】佛滅後に三時あり。所謂る正法一千年の前の五百年には迦葉、阿難、商那和修、末田地、脇比丘等一向に小乘の藥を以て衆生の輕病を對治す、『四阿含經』、『十誦』、『八十誦』等の諸律と『相續解脫經』等の三藏を弘通す、後には律宗、倶舍宗、成實宗と號する是れなり。後の五百年には馬鳴菩薩、龍樹菩薩、提婆菩薩、無著菩薩、天親菩薩等の諸の大論師、初めは、諸の小乘の弘めし所の小乘經を通達し、後には一一に彼の義を破失し了つて、諸の大乘經を弘通す。是れ又中藥を以て衆生の中病を對治す。所謂、『華嚴經』、『般若經』、『大日經』、『深密經』等、三論宗、法相宗、眞言陀羅尼、禪法等なり。」問うて云く、「迦葉、阿難等、諸の小乘、何ぞ大乘經を弘めざるや。」答へて曰く、「一には自身堪へざるが故に、二には所被の機なきが故に、三には佛より譲り與へざるが故に、四には時來らざるが故也。」問うて曰く、「龍樹、天親等何ぞ一乘經を弘めざるや。」答へて曰く、「四つの義あり、先の如し。」問うて曰く、「諸の眞言師の云く、佛の滅後八百年に相當つて、龍猛菩薩月氏に出現して、釋尊の顯教たる『華嚴』、『法華』等を馬鳴菩薩等に相傳し、大日の密經をば自ら南天の鐵塔を開拓し、面あたり大日如來と金剛薩埵とに對し之を口決す。龍猛菩薩に二人の弟子あり、提婆菩薩には釋迦の顯教を傳へ、龍智菩薩には大日の密教を授く。龍智菩薩は阿羅苑に隱居して人に傳へず。其間に提婆菩薩の傳ふ

【六八】像法時代を說き、諸宗及天台の興起、盛衰の相を述ぶ。
【圓慧、圓定】圓教の慧及び定。

る所の顯教は先づ漢土に渡る。其後數年を經歷して、龍智菩薩の傳ふる所の祕密の敎を善無畏、金剛智、不空、漢土に渡す等云云。此義如何。」答へて曰く、「一切の眞言師是の如し。又天台、華嚴等の諸家も一同に之を信ず。抑も龍猛已前には、月氏國の中には大日の三部經なしと云ふか。釋迦より外に、大日如來世に出現して、三部經の經を說くと云ふか。顯を提婆に傳へ、密を龍智に授くる證文、何れの經論に出でたるぞ。此の大妄語は提婆の虛誑罪にも過ぎ、瞿伽利の誑言にも超ゆ。漢土日本の王位の盡き、兩朝の僧侶の謗法となるの由來、專ら斯に在らずや。然れば則ち彼の震旦既に北狄の爲に破られ、此日域も亦西戎の爲に侵されんと欲す。此等は且らく之を置く。

【六八】像法に入つて一千年、月氏の佛法漢土に渡來するの間、前四百年には南北の諸師異義蘭菊にして、東西の佛法未だ定まらず。四百年の間、五百年の前、其中間一百年の間に、南岳、天台等漢土に出現して、粗粗「法華」の義を弘宣し給ふ。されど圓慧、圓定に於ては國師たりと雖も、圓頓の戒場未だ之を建立せざるが故に、國を擧つて戒師と仰がず。六百年の已後、法相宗西天より來れり。太宗皇帝之を用ゆる故に、天台法華宗に歸依するの人漸く薄し。茲に就て隙を得て、則天皇后の御宇に、先に破られし華嚴亦起つて、天台宗に勝れたるの由之を稱す。太宗より第八代玄宗皇帝の御宇の、眞言始めて月氏より來れり。所謂る開元四年には、善無畏三藏の「大日經」、「蘇悉地經」、開元八年には金剛智不空の兩三藏の「金剛頂經」。此の如く、三經を天竺より漢土に持ち來り、天台の釋を見聞

【七】末法時代の逆謗五濁の相を示す。

【勝母の閭】閭は里、勝母は支那地名、曾子は至孝にしてこの名を嫌うて避くといふ。

【會昌天子】會昌年間に大破佛を行ひし後唐の武帝をいふ。

して、曾て三學を修して『大日經』と『法華經』とを一經と爲し、其上印、眞言を加へ、『法華經』の勝るの由を說し、三經を以て三重を下す。漢土の學者此事を知らず。像法の末八百年に相當つて、傳教大師和國に生れて、華嚴宗等の六宗の邪義を糾明するのみにあらず、加之、南岳、天台も未だ弘め給はざる圓頓の戒壇を、叡山に建立す。日本一州の學者、一人も殘らず大師の門弟となる。但し天台と傳教との智者に於ては、眞言と知つて而も分明ならず。所詮末法に讓り給ふか。此等は兩方たるの故に、明らかにこれを聞く。吾が師傳教大師、三國に未だ弘まらざる圓頓の大戒壇を、叡山に建立し給ふ。是れ偏へに上要を用ゐて衆生の邪執を治せんとする心なり。

【七】今末法に入つて二百二十餘年、五濁強盛にして三災頻りに起り、衆見の二濁國中に充滿し、逆謗の二輩四海に散在す。専ら一闡提の輩を仰いで棟梁と恃み、謗法の者を尊重して國師と爲す。孔丘の『孝經』之を提げて、父母の頭を打ち、釋尊の『法華經』を口に誦して、教主に違背す。不孝の國は此國なり。勝母の閭、他境に求めざれ。故に靑天眼を瞋らして此國を睨み、黃地は憤りを含んで大地を震はす。去ぬる正嘉元年の大地震、文永元年の大彗星、此等の災夭は佛滅後二千二百二十餘年の間、月氏、漢土、日本の内に未だ出現せざる所の大難なり。彼の弗舍密多羅王が五天の寺塔を燒き失ひ、漢土の會昌天子の九國の僧尼を還俗せしめしに超過する事百千倍なる、大謗法の輩國中に充滿し、一天に彌るに依て起る所の天災なり。『大般涅槃經』に云く、「末法に入つては不信謗法の者、大地微

【八】以下末法逆謗の大良藥たる一大秘法の傳聞の次第を述ぶ、先づ見寶塔品の盛儀を示す

【九】次に地涌大士の不思議事を提す

雲の如し」（取意）『法滅盡經』に「法滅盡の時は、狗犬の僧尼、恒河の沙の如し」等云云（取意）今親あたり此國を見聞するに、人々に此の二つの惡あり。此等の大惡の輩は、何なる秘術を以て之を扶救せん。

【八】大覺世尊佛眼を以て末法を鑒知し、此の逆謗の二罪を對治せしめんが爲に、一大秘法を留め置き給ふ。所謂、法華經本門久成の釋尊、寶淨世界の多寶佛、高さ五百由旬、廣さ二百五十由旬の大寶塔の中に於て、二佛座を並べしこと、宛かも日月の如く、十方分身の諸佛は、高さ五百由旬の、寶樹の下に、五由旬の師子の座を並べ敷き、衆星の如く列坐し給ひ、四百萬億那由佗の大地に、三佛二會に充滿し給ふの儀式は、華嚴寂場の華藏世界にも勝れ、眞言兩界の千二百餘尊にも過ぎたり。一切世間の眼なり。此の大會に於て、六難九易を擧げて、『法華經』を弘通せんと、諸の大菩薩に諫曉せしめ給ふ。金色世界の文殊師利、兜率内院の彌勒菩薩、補陀落山の觀世音菩薩、頭陀第一の迦葉、智慧第一の舍利弗等、三千世界を統領する無量の梵天、須彌の頂に居住する無數の帝釋、一四天下に照耀せる日月、十方の佛法を擁護する無數の四天王、大地微塵の諸の龍王等、彼にも此にも此經を付屬せられよと競ひ望みしかども、世尊黙止して之を許し給はず。

【九】爾の時に下方の大地より未見今見の四大菩薩を召出し給ふ。所謂上行菩薩、無邊行菩薩、淨行菩薩、安立行菩薩なり。此の大菩薩各六萬恒河沙の眷屬を具足す。形貌

【補處】 未來佛たる位置。

【瞿伽梨】 釋迦種佛弟子の無實の罪を誹謗して墮獄す

藏、言を以て宣べ盡く、心を以て量りてかぞへず。初成道の法慧、功徳林、金剛幢、金剛藏等の四菩薩、各各十方世界の菩薩を聚集し、佛前を莊嚴せし『大集經』の欲色二界の中間の大寶坊に於て來臨せし十方の諸大菩薩、乃至『大日經』の八葉の中の四大菩薩も、『金剛頂經』の三十七尊の中の十六大菩薩等も、此の四大菩薩に比校すれば猶ほ帝釋と猿猴と、須彌山と芥子との如し。彌勒菩薩、衆の疑を擧げて云く、「乃し一人をも識らず」等云云。天台大師云く、「寂滅道場より已降、今座より已往、十方の大士來會絶えず、限るべからずと雖も、我補處の智力を以て悉く見、悉く知る。而も此の衆に於ては、一人をも識らず」等云云。妙樂云く、「今見るに皆識らざる所は、乃至、智人は起を知り、蛇は自ら蛇を識る」等云云。天台云く、「雨の猛きを見て龍の大なるを知り、華の盛なるを見て池の深きを知る」云云。例せば漢王の四將の張良、樊噲、陳平、周勃の四人を、商山の四皓、綺里季、角里先生、東園公、夏黄公等の四賢に比するが如し。天地雲泥なり。四皓が爲體、頭には白雪を頂き、額には四海の波を疊み、眉には半月を移し、腰には多羅枝を張り、惠帝の左右に侍して世を治められたる事は、堯舜の古に移し、一天安穩なりし事は、神農の昔に異ならず。此の四大菩薩も亦復是の如し。法華の會に出現し、三佛を莊嚴し、謗人の慢幢を倒すこと大風の小樹の枝を吹くが如く、衆會の敬心を致すこと諸天の帝釋に從ふが如く、提婆が佛を打ちしも、舌を出して掌を合せ、瞿伽梨が無實を構へしも、地に臥して失を悔ゆ。文殊等の大聖は、身を慙ぢて言を出さず。舍利弗等の小聖

【一〇】次に要法を略示す。

【一一】地涌の大士末法に出現すべき約束を明す。

【發起、影向】佛の說法の會座における四衆のうち、發起は說法の端緒を開く菩薩。影向は他方より會座莊嚴、勸信の爲に來現せる菩薩なり。

【一二】地涌大士の末法出現の所以を釋す。

は、智を失して頭を低る。

【一一】爾の時に大覺世尊、『壽量品』を演說し、然して後に十神力を示現して、四大菩薩に付囑し給ふ。其の所囑の法は何物ぞや。『法華經』の中にも廣を捨てて略を取り、略を捨てて要を取る。所謂る『妙法蓮華經』の五字、名體宗用敎の五重玄なり。例せば九包淵が相馬の法には、玄黃を略して駿逸を取り、史陶林が講經の法には、細科を捨てて元意を取るが如し等。

【一二】此の四大菩薩は、釋尊成道の始めに寂滅道場の砌にも來らず、如來入滅の終りに跋提河の邊にも至らず、加之、靈山八年の間にも、進んでは迹門序正の儀式に、文殊、彌勒等の發起、影向の諸聖衆にも列らず。退いては本門流通の座席に、觀音、妙音等の發誓弘經の諸大士にも交はらず。但だ此の一大秘法を持して本處に隱居するの後、佛の滅後正像二千年の間に於て、未だ一度も出現せず。所詮佛專ら末法の時に限つて此等の大士に付囑せしの故なり。『法華經』の『分別功德品』に云く、『惡世末法の時、能く是經を持たん者』云云。『涅槃經』に云く、『譬へば七子の父母平等ならざるにあらず、然も病者に於ては、心則ち偏に重きが如し』云云。『法華經』の『藥王品』に云く、『此經は則ち爲れ閻浮提の人の病の良藥なり』云云。七子の中に上の六子は且らく之を置く、第七の病子は一闡提の人、五逆謗法の者、末代惡世の日本國の一切衆生なり。

【一三】正法一千年の前五百年には、一切の聲聞涅槃し了んぬ。後の五百年には、他方來

【傅大士】支那南北朝時代、兜率天より仏法を傳へて經論を講ず。

の諸大士未此に來り給はず。像法に入つての一千年には文殊、觀音、藥王、彌勒等、南岳、天台と誕生し、傅大士、行基、傳敎等と示現して、衆生を利益す。今末法に入つて、此等の諸大士も皆本處に隱居しぬ。其外閻浮守護の天神地祇も、或は他方に去り、或は此土に住すれども、惡國を守護せず、或は法味を嘗めざれば、守護の力なし。例せば法身の大士に非ざれば三惡道に入らざるが如し。大苦忍び難きが故なり。而るに地涌千界の大菩薩、一には娑婆世界に住すること多塵劫なり。二には釋尊に隨つて、久遠より已來初發心の弟子なり。三には娑婆世界の衆生の最初下種の菩薩なり。是の如き等の宿緣の方便、諸大菩薩に超過せり。問うて曰く、其の證據如何。答へて曰く、法華經の涌出品に云く、「爾の時に他方の國土より、諸の來れる菩薩摩訶薩、八恒河沙の數に過ぎたる、乃至、爾の時に佛、諸の菩薩摩訶薩衆に告げ給はく、止みね善男子、汝等が此經を護持せんことを須ゐず」等云云。天台云く、「他方は此土の結緣の事淺し、宣授せんと欲すと雖も、必ず巨益なし」云云。妙樂云く、「尚ほ偏へに他方の菩薩に付せず、豈に獨り身子のみならんや」云云。又云く、「告八萬大士とは、乃至、今の下の文に下方を召すが如く、尚ほ本眷屬を待つ。驗けし、餘は未だ堪へざる事を」云云。經釋の心は、迦葉、舍利弗等の一切の聲聞、文殊、藥王、觀音、彌勒等の迹化他方の諸大士は、末世の弘經に堪へずと云ふなり。經に云く、「我が娑婆世界に、自ら六萬恒河沙等の菩薩摩訶薩あり、一一の菩薩に、各六萬恒河沙の眷屬あり。是の諸人等、能く我が滅後に於て、護持し讀誦し、廣く此經を說かん」。

【二】總付屬は正像の機の爲なるを示す。

【法華經の要よりの外】これは總付之に對して要法の付屬卽結要付屬を別付と稱し、本化の菩薩之なり。

佛是を說き給ふ時、娑婆世界の三千大千の國土、地皆震裂して、其中より無量千萬億の菩薩摩訶薩あつて同時に涌出せり。乃至、是の菩薩衆の中に四導師あり、一をば上行と名け、二をば無邊行と名け、三をば淨行と名け、四をば安立行と名く。其衆の中に於て、最も爲れ上首唱導の師なり」等云云。天台云く「是れ我が弟子、應に我が法を弘むべし」云云。妙樂云く「子父の法を弘む」云云。道暹云く、「付屬とは、此經は唯、下方涌出の菩薩に付す。何が故に爾る、法是れ久成の法なるに由るが故に、久成の人に付す」等云云。此等の大菩薩、末法の衆生を利益し給ふこと、猶ほ魚の水に練れ、鳥の天に自在なるが如し。濁惡の衆生、此の大士に遇つて佛種を殖うること、例せば水精の月に向つて水を生じ、孔雀の雷の聲を聞いて懷妊するが如し。天台云く、「猶ほ百川の海に潮すべきが如し、緣に牽かれて應生するも、亦復是の如し」云云。慧日大聖尊、佛眼を以て兼て之を鑒み給ふ故に、諸の大聖を捨棄し、此の四聖を召し出して、要法を傳へ、末法の弘通を定め給ひしなり。」問うて曰く、「要法の經文如何」。答へて曰く、「口傳を以て之を傳へん」。

【二】釋尊然る後正像二千年の衆生の爲に、寶塔より出でて虛空に住立し、右の手を以て文殊、觀音、梵帝、日月、四天等の頂を摩で、斯の如く三反して、『法華經』の要より外の廣略二門、竝びに前後の一代の一切經を此等の大士に付屬し給ひしは、正像二千年の機の爲めなり。其後『涅槃經』の會に至つて、重ねて『法華經』竝びに前四味の諸經を說いて、文殊等の諸大菩薩に授與し給ふ。此等は捃拾の遺囑なり。

【一四】正像二千年中、仏教の内外の弘経は仏の付嘱に従ふ事を明かす。

【逆路】逆路伽耶陀の略。師敵対、師説を破し不順なるをいふ。

【一四】爰を以て滅後の弘経に於ても、仏の所属に随って、弘法の限りあり。然れば則ち迦葉、阿難等は一向に小乗経を弘通して、大乗経を申べず。竜樹、天親等は権大乗経を申べて、一乗経を弘通せず。設い之を申べしかども、纔かに以て之を指示し、或は迹門の一分のみ之を宣べて、全く化道の始終を説かず。南岳、天台等は観音、薬王等の化身として、小大、権実、迹本二門、化道の始終、師弟の遠近等、悉く之を宣べて、其上に『已今当』の三説を立てて、一代超過の由を判ぜしこと、天竺の諸論にも勝れ、真旦の人師にも過ぎたり。旧訳、新訳の三蔵も、宛も此の師には及ばず。顕密二道の元祖も、敢て敵對にあらず。然りと雖も広略を以て本と為して、未だ肝要に能はず。自身之を存すと雖も、敢て他伝に及ばず。此れ偏へに付属を重んぜしが故なり。伝教大師は仏の滅後一千八百年、像法の末に相当って日本国に生れて、小乗、大乗、一乗の諸戒、一々に之を分別し、『梵網経』の別受戒を以て小乗二百五十戒を破失し、又『法華経』、『普賢経』の円頓の大戒を以て諸大乗経の臣民の戒を責め下す。此の大戒は霊山八年を除いては、一閻浮提の内に未だあらざる所の大戒場を叡山に建立す。然る間八宗共に偏執を倒し、一国を挙げて弟子と為り、観勒の流の三論、成実、道昭の渡せる法相、俱舎、良弁の伝ふる所の華厳宗、鑑真和尚の渡す所の律宗、弘法大師の門弟等、誰か円頓の大戒を持たざらん。此の義に違背するは、逆路の人なり。此の戒を信仰するは伝教大師の門徒なり。日本一洲円機純一、朝野遠近同帰一乗とは、是の謂ひか。

【一五】邪宗の諸宗人師の中、別して眞言の害法を暴はす

【一五】此外は漢土の三論宗の吉藏大師、並びに一百餘人、法相宗の慈恩大師並びに華嚴宗の法藏、澄觀、眞言宗の善無畏、金剛智、不空、惠果、日本の弘法、慈覺等の三藏の諸師は四依の大士にあらざる暗師なり、愚人なり。經に於ては大小、權實の旨を辨へず、顯密兩道の趣を知らず。論に於ては通申と別申とを糾さず、申と不申とを曉らめず。然りと雖も彼宗宗の末學等、此諸師を崇敬して、之を聖人と號し、之を國師と尊ぶ。今先づ一を擧げんに、萬を察せよ。弘法大師の『十住心論』、『祕藏寶鑰』、『二教論』等に云く、『此の如き乘乘、自乘に名を得れども、後より望めば戲論と作す』。又云く、『無明の邊域』。又云く、『震旦の人師等諍つて醍醐を盜み、各自宗に名く』等云云。釋の心は『法華經』の大法を『華嚴經』と『大日經』とに對して、戲論の法と蔑み、無明の邊域と下し、剩へ震旦一國の諸師を盜人と罵る。此等の謗法謗人は、慈恩、得一の三乘眞實、一乘方便の妄言にも超過し、善導法然が『千中無一』、『捨閉閣抛』の過言にも雲泥せるなり。『六波羅蜜經』をば唐の末に、不空三藏月支より之を譯す。後漢より唐の始めに至るまで、都て此經あらず。南三北七の兩傳、未だ此經を見ず。三論、天台、法相、華嚴の人師、誰人か彼の經の醍醐を盜まんや。又彼の經の中に『法華經』は醍醐に非ずといふ文これありや不や。而るに日本國の東寺の門人等、堅く之を信じて、種種に僻見を起し、非より非を増し、暗に入る、不便の次第なり。彼の門家の傳法院の本願たる正覺房の『舍利講の式』に云く、『尊高なる者は不二摩訶衍の佛、驢牛の三身は車を扶くること能はず。秘奧たる者は兩部曼陀羅の教、顯乘

【二五】 諸師の謬釋を判ずること私曲にあらずと、古今東西の例を示す。

の四依の人は國をも取る事はず。」云云。三論、天台、法相、華嚴等の元祖等に、眞言の師に相對するに、中國にも及ばず、外國にも及ばずと申しける事なり。之に付ては、彼の門徒等、心有らん人は之を案ぜよ。大日經は法華經にあらずや。[illegible]の理由は、弘法大師の『[illegible]』の意は日より勝るか。[illegible]、多寶十方の諸佛は『法華經』を以て已今當の說に相待して、『[illegible]』と定め、然るに[illegible]は[illegible]に[illegible]し、[illegible]は各各本土に還り給ひぬ。三佛を除くの外、誰か之を[illegible]せん。[illegible]弘法[illegible]の[illegible]經の中に、三教を[illegible]すのぞ之ありや不や。弘法[illegible]に之を[illegible]さず、[illegible]の[illegible]せん。而るに弘法大師一人のみ『法華經』を『華嚴』、『大日』の二經に相對して戯論[illegible]と號す。所詮釋尊、多寶、十方の諸佛を以て、[illegible]と[illegible]するか。[illegible]を閉ぢて之を案ぜよ。」

【二六】 問うて曰く、[illegible]已來、[illegible]て此の如きの謬言を聞かず。何ぞ上古清代の貴僧に違背して、寧ろ當今濁世の愚侶を歸信せんや。」答へて曰く、「汝が言ふ所の如くば愚人は定めて理運なりと思はんか。然れども此等は皆人の偏見に因つて如來の金言を知らざる者なり。大覺世尊『涅槃經』に滅後を誡めて言はく、「善男子、我が所說に於て若し疑を生ずる者は、尚ほ受くべからず。」云云。されば佛尚ほ我が所說なりと雖も、不審あらば之を叙用せざれとなり。今予を諸師に比べて謗難を加ふ。然りと雖も敢て私曲を構へず專ら釋尊の遺誡に順つて、諸人の謬釋を糾すなり。夫れ齊の始めより梁の末に至るまで二百餘年の間、南北の碩德、光宅、智誕等の二百餘人『涅槃經』の「我等悉く邪見の人と名づく。」の文を引

【得一】德一のこと

【一七】肝要の祕法を弘宣する時と國とを明し、末法の日本國とす。

いて、『法華經』を以て邪見の經と定め、一國の僧尼並びに王臣等を迷惑せしむ。陳隋の比智者大師之を糾明せし時、始めて南北の僻見を破り了んぬ。唐の始め太宗の御宇に、基法師、『勝鬘經』の「若し如來彼の欲する所に隨つて方便して說くも即ち是れ大乘にして、二乘有ること無し」の文を引いて、一乘方便、三乘眞實の義を立つ。此の邪義、震旦に流布するのみに非ず、日本の得一が稱德天皇の御時、盛んに非義を談ず。爰に傳教大師悉く彼の邪見を破し了んぬ。後鳥羽院の御代に源空、法然『觀無量壽經』の『讀誦大乘』の一句を以て、『法華經』を攝入し、還つて稱名念佛に對すれば雜行方便なれば抛閣抛せよと云云。然りと雖も五十餘年の間、南都北京、五畿七道、諸寺諸山の衆僧等、此の惡義を破ること能はざりき。予が難破分明たるの間、一國の諸人殆ど彼の『選擇集』を捨て了んぬ。根露るれば枝枯れ、源乾けば流竭くとは、蓋し此の謂なるか。加之、唐の末、玄宗皇帝の御世に、善無畏、不空等、『大日經』の『住心品』の『如實一道心』の一句に於て、『法華經』を攝入し返つて權經と下す。日本の弘法大師は『六波羅蜜經』の五藏の中の、第四の般若波羅蜜藏に於て、『法華經』『涅槃經』等を攝入し、第五の陀羅尼藏に相對して、『爭つて醍醐を盜む』等云云。此等の禍咎は日本一州の內四百餘年、今に之を糾明せし人あらず。予が所存の難勢遍く一國に滿つ。必ず彼の邪義破られんか。此等は且らく之を止む。

【一七】迦葉、阿難等、龍樹、天親等、天台、傳教等の諸大聖人知つて、而も未だ弘宣せざる所の肝要の祕法は、『法華經』の文赫赫たり。論釋等に載せざること明明たり。生知は

【所詮】　肝要の意

【扶桑國】　日本國の異名。

自ら知るべし、賢人は明師に値遇して、之を信ぜよ。罪根深重の輩は、邪推を以て人を輕しめ之を信ぜず、且らく耳に拊め本意に付かば之を喩さん。『大集經』の五十一に大覺世尊月藏菩薩に語つて云く、「我が滅後に於て五百年の中は解脱堅固、次の五百年は禪定堅固已上一千年、次の五百年は讀誦多聞堅固、次の五百年は多造塔寺堅固已上一千年、次の五百年は我が法の中に於て闘諍言訟して、白法隱沒せん」等云云。今末法に入つて二百二十餘年、「我が法の中に於て闘諍言訟、白法隱沒」の時に相當れり。『法華經』の第七『藥王品』に、教主釋尊、多寶佛と共に、宿王華菩薩に語つて云く、「我が滅度の後、後の五百歳の中に廣宣流布して、閻浮提に於て、斷絶して惡魔魔民、諸の天龍夜叉、鳩槃荼等に其の便を得せしむること無けん」。『大集經』の文を以て之を案ずるに、前四個の五百年は、佛の記文の如く既に符合せしめ了んぬ。第五の五百歳の一事、豈に唐捐ならんや。隨つて當世の體たる、大日本國と大蒙古國と闘諍合戰す。第五の五百に相當れるか。彼の『大集經』の文を以て、此の『法華經』の文を推するに、「後の五百歳の中に廣宣流布して、閻浮提に於て」の鳳詔は、豈に扶桑國に非ずや。彌勒菩薩の『瑜伽論』に云く、「東方に小國有り、其中唯大乘の種姓のみ有り」云云。慈氏菩薩、佛の滅後九百年に相當つて、無著菩薩の請に赴いて、中印度に來下して、『瑜伽論』を演說す。是れ或は權機に隨ひ、或は付屬に順ひ或は時に依て權經を弘通す。然りと雖も、『法華經』の『涌出品』の時、地涌の菩薩を見て近成を疑ふの間、佛請に赴いて『壽量品』を演說し、『分別功德品』に至つて地涌の菩薩を勸獎して云く、「惡世末法

【叡公】羅什の弟子僧叡のこと。

の時、能く是經を持つ者』と、彌勒菩薩自身の付囑に非ざれば之を弘めずと雖も、粗あたり靈山會上に於て、『惡世末法時』の金言を聽聞せし故に、『瑜伽論』を説く時、末法に日本國に於て地涌の菩薩、『法華經』の肝心を流布せしむ可きの由、兼て之を示すなり。叡公の『翻經の記』に云く『大師須梨耶蘇摩、左の手に法華經を持し、右の手に鳩摩羅什の頂を摩でて、授與して云く『佛日西に入つて、遺耀將に東に及ばんとす。此の經典、東北に緣有り、汝愼んで傳弘せよ』」云云。予此の記文を拜見して、兩眼瀧の如く、一身悅びを徧くす。『此の經典、東北に緣有り』云云。西天の月支國は未申の方、東方の日本國は丑寅の方なり。天竺に於て東北に緣有りとは、豈に日本國に非ずや。遵式の筆に云く『始め西より傳ふ、猶ほ月の生ずるが如く、今復東より返る、猶ほ日の昇るが如し』云云。正像二千年には、西より東に流る。暮月の西空より始むるが如し。末法五百年には、東より西に入る、朝日の東天より出づるに似たり。根本大師の記に云く『代を語れば、則ち像の終り、末の初め、地を尋ぬれば唐の東、羯の西、人を尋ぬれば則ち五濁の生、鬪諍の時なり。經に云く、猶多怨嫉、況滅度後と。此言良に以有るなり』云云。又云く『正像稍過ぎ已つて、末法太だ近きに在り。法華一乘の機、今正しく是れ其時なり。何を以て知ることを得ん、安樂行品に云く、末世法滅の時なり』云云。此釋は語美しく心隱れたり。讀まん人之を解し難きか。傳教大師の語は我が時に似て、心は末法を勵み給ふなり。大師出現の時は佛の滅後一千八百餘年なり。『大集經』の文を以て之を勘ふるに、大師存生の時は第四の多

【西王母】支那の女仙。

【一八】時國正備し大法弘通の眞意を示し、護法の志を勵まし、信者の罪福の相を述ぶ。

闘諍堅固の時に相當る、若くは未だ闘諍堅固の時に非ず。而るに像法の中に、「末法太だ近きに有り」の言有り。之を以て知んぬ、闘諍堅固の事は我が時を指すに非ざることを。予、神力品の情を案ずるに、大師、藥王菩薩として靈山會上に侍して、佛、上行菩薩出現の時を兼て之を記し給ふ故に、粗之を喩すか。而るに予地涌の一分に非ざれども、兼て此事を知る故に、地涌の大士に前だちて、粗五字を示す。例せば西王母の先相には青鳥、客人の來るには鵲鵲の如し。

【一八】此の大法を弘通せしむるの法には、必ず一代の聖教を安置し、八宗の章疏を習學すべし。然れば予所持の聖教、多多之れ有りと雖も兩度の御勘氣、衆度の大難の時、或は一卷二卷散失し、或は一字二字脫落し、之は魚鳥の誤寫、或は一部二部損朽す。若し默止して一期を過ぐるの後には、弟子等定めて謬義出來の基なり。爰を以て愚身老耄已前に之を糾調せんと欲す。而るに風聞の如くんば、貴邊並に大田金吾殿、越中の御所領の內、竝びに近邊の寺寺に、數多の聖教あり等云云。兩人共に大檀那たり、所願を成ぜしめ給へ。『涅槃經』に云く、「內には智慧の弟子有って甚深の義を解り、外には清淨の檀越有って佛法久住せん」云云。天台大師は毛喜等を相語らひ、傳教大師は國道、弘世等を恃怙む云云。『仁王經』に云く、「千里の內をして七難起らざらしむ」云云。『法華經』に云く、「百由旬の內に諸の衰患無からしむ」云云。國主正法を弘通すれば、必ず此德を備ふ。臣民等此法を守護せんに、豈に家內の大難を攘はざらんや。又『法華經』の第八に云く、「所

【自反他逼】自界叛逆難他國侵逼難。七難の中の二。內亂と外寇なり。

【一九】決定の信を堅め、章安用意の必要を結ぶ。

願虚しからず、亦現世に於て其の福報を得ん。」又云く、「當に今世に於て、現の果報を得べし。」云云。又云く、「此人現世には白癩の病を得ん。」又云く、「頭破れて七分と作らん。」又第二の卷に云く、「經を讀誦し書持すること有らん者を見て、輕賤憎嫉して結恨を懷かん、乃至、其人命終して阿鼻獄に入らん。」云云。第五の卷に云く、「若し人惡み罵らば口則ち閉塞せん。」云云。傳教大師の云く、「讚する者は福を安明に積み、謗する者は罪を無間に開く。」等云云。安明とは須彌山の名なり、無間とは阿鼻の別名なり。國主持者を誹謗せば位を失ひ、臣民行者を毀呰すれば身を喪す。一國を擧りて用ゐざれば、定めて自反、他逼出來せしむべきなり。又上品の行者は大の七難、中品の行者は二十九難の內、下品の行者は無量の難の隨一なり。又大の七難に於て、七人有り、第一は日月の難なり。第一の內に、又五の大難有り。所謂る日月度を失し、時節反逆し、或は赤日出で、或は黑日出で、二三四五の日出づ。或は日蝕して光無く、或は日輪一重二三四五重輪現ぜん。又經に云く、「二の日並び出でん。」今此の國土に有らざるは、二の日二の月等の大難なり。餘の難は大體之れ有り。今此の龜鏡を以て、日本國を浮べ見るに、必ず法華經の大行者有らんか。既に之を謗る者に大罰有り、之を信ずる者何ぞ大福無からん。

【一九】今兩人微力を勵まし、予が願に力を副へ、佛の金言を試みよ。經文の如く之を行ぜんに徵無くんば、釋尊正直の經文、多寶證明の誠言、十方分身の諸佛舌相、有名無實とならんか。提婆の大妄語に過ぎ、瞿伽利の大誑言に超えたらん。日月地に落ち、大地

【殷の湯王】德を以て王たり。雨無きこと七年、自ら野に禱りて六事を以て身を責め雨を降らす。

【戒日大王の云云】北印度の羯王（西紀七世紀頃）德政を布き佛教に歸す。無遮大會の際伽藍炎上す。王、我力あらば火消え、なくば壽命盡きんとて火中に入る。火消ゆ。王の貌もとの如し。

【ア】縮遺二〇三一頁　弘安三年（五十九歳）の作。本鈔は一乘の行者としての大自覺に基き、國神八幡大菩薩に對し、堂々たる論理と、熱烈なる信仰とを以て、神たるの使命、王法擁護謗法退治を諫曉したるものにして神に寄せて人を諫曉したるなり。

反覆し、天を仰いで[illegible]に臥し[illegible]殷の湯王の玉體を薪に積み、戒日大王の龍顔を火に入れしも、今[illegible]に當る[illegible]して、宿習有らば、其心を[illegible]すべし。使者に此書を持たせ、早早[illegible]、金吾殿の返報を取りて、速速是非を聞かしめよ。此願若し[illegible]、崑崙山[illegible]に、[illegible]ずして蟻に收まり、大海の[illegible]掬かざるに、掌に在らん。[illegible]謹言。

[illegible]十日　　日蓮　[illegible]押

曾谷入道殿

大田金吾殿

諫曉八幡鈔

【一】夫れ馬は一歳二歳の時は、設ひつがひ延び、[illegible]に膝細く、[illegible]延びて[illegible]へども、病あるべしとも見えず。[illegible]れども七八歳なんどになりて、身も肥え血太く、上勝り下後れ候へば、小船に大石を積めるが如く、小さき[illegible]に多くの果のなれるが如く、[illegible]くは[illegible]出來して人の用にも合はず、力も弱く壽も短し。天神等も又斯の如し。成劫の始めには先生の果報秀逸き衆生生れ來る上、人の惡も候はねば、身の光も鮮かに心も潔く、日月の如く師子象の勇みなして[illegible]し程に、成劫やうやく過ぎて住劫になるまゝに、前の天神等は

【一】譬を引いて天神の果報漸衰の理を示す。
【成劫】印度の宇宙観、宇宙は四の過程を経て輪回す。成（成生）住（定住）壊（壊滅）空（空虚）この四各二十小劫あり。一回八十小劫を一大劫といふ。
【二】仏教によりて神の威力を増すことを明す。
【三】末法に於ては権経を以て神威を増さざるを明す。

年重りて下旬の月の如し。今生れ来れる天神は果報衰減し、下劣の衆生多分は生来す。然る間、天に三災やうやく起り、地に七難粗出現せしかば、一切衆生始めて苦と楽とを思ひ知る。

【二】此時仏出現し給ひて、仏教と申す薬を天と人と神とに与へ給ひしかば、灯に油を添へ老人に杖を与へたるが如く、天神等還つて威光を増し、勢力を増長せし事成劫の如し。仏教に又五味の味ひ分れたり。在世の衆生は成劫ほどこそなかりしかども、果報衰へぬ衆生なれば、五味の中に何の味を嘗めても、威光勢力をも増し候ひき。

【三】仏滅度の後、正像二千年過ぎて末法になりぬれば、本の天も神も阿修羅・大竜等も、年も重りて身も疲れ心も弱くなり、又今生れ来る天人・修羅等は或は小果報、或は悪天人等なり。小乗・権大乗等の乳・酪・生蘇・熟蘇味を服すれども、老人に夏食を与へ、病人に嘉膳等を与へるが如し。而るを当世此を弁へざる学人等、古に習ひて、日本国の一切の諸神等の御前にして、「阿含経」・「方等」・「般若」・「華厳経」・「大日経」等を法楽し、倶舎・成実・律・法相・三論・華厳・浄土・禅等の僧を護持の僧とし給へる、唯老人に夏食を与へ、小児に強き飯を与ふるが如し。何に況んや今の小乗経と小乗宗と、大乗経と大乗宗とは、古の大小乗の経宗にはあらず。天竺より漢土へ渡りし時、小大の経々は金言に私言交れり。宗宗は又天竺・漢土の論師・人師、或は小を大とあらそひ、或は大を小といふ。或は小に大をかきまじへ、或は大に小を入れ、或は先の経を後と争ひ、或は後を先とし、或は先を

【四】日本國の謗法と八幡の失威罰科を明す。

後につけ、『法華經』を顯經といひ、密經を顯經といふ。譬へば乳に水を入れ、藥に毒を加ふるが如し。『涅槃經』に、佛法を滅して云く、「酪の時に醍醐の味、醍醐を以ての故に、之に加ふるに水を以てす。水多きを以ての故に、乳、酪、醍醐一切倶に失す」等云云。阿含小乘經は乳味の如し、方等、大集經、『阿彌陀經』、『深密經』、『大日經』等は酪味の如し、『般若經』等は生蘇味の如く、『華嚴經』等は熟蘇味の如く、『法華』、『涅槃經』等は醍醐味の如し。設ひ小乘經の乳味なりとも、佛說の如くならば、爭でか一分の藥とならざるべき。況んや諸の大乘經をや、何に況んや『法華經』をや。然るに月氏より漢土に經を渡せる譯人は、一百八十七人なり。其中に羅什一人を除きて、前後の二百八十六人は、或は乳に水を加へ、或は藥に毒を入れたる人人なり。此理を辨へざる一切の人師、末學等、設ひ一切經を讀誦し、十二部經を胸に浮べたる樣なりとも、生死を離るる事難し。又一分のしるしはある樣なりとも、天地の知る程の祈りとは成るべからず。魔王魔民等守護を加へて、法に驗のあるやうなりとも、終には其身も檀那も安穩なるべからず。譬へば舊醫の藥に毒を雜へてさしおけるを、舊醫の弟子等或は盜み取り、或は自然に取りて、人の病を治せんとするが如し、爭でか安穩なるべき。

【四】當世日本國の眞言等の七宗、並びに淨土、禪宗等の諸學者等、弘法、慈覺、智證等の『法華經最第一』の醍醐に『法華第二第三』等の私の水を入れたるを知らず。佛說の如くならば、爭でか一切倶失の大科を脫れん。『大日經』は『法華經』より劣る事七重な

り。而るを弘法等顛倒して、『大日經最第一』と定めて、日本國に弘通せるは、『法華經一分の乳』に『大日經七分の水』を入れたるなり。水にもあらず、乳にもあらず、『大日經』にもあらず、『法華經』にもあらず。而も『法華經』に似たり『大日經』に似たり。佛このことを『涅槃經』に記して云く、『我が滅後に於て……正法將に滅盡せんと欲せんとす。爾の時に多く惡を行ずる比丘あらん。乃至、牧牛女の如き、乳を賣るに多利を貪らんと欲するを爲ての故に、二分の水を加ふ。乃至、此乳水多し……爾の時に是經、閻浮提に於て、當に廣く流布すべし。是の時、當に諸の惡比丘あって、是經を抄略し、分つて多分と作し、能く正法の色香美味を滅すべし。是の諸の惡人、復是の如きの經典を讀誦すと雖も、如來深密の要義を滅除せん。乃至、前を鈔りて後に著け、後を鈔りて前に著け、前後を中に著け、中を前後に著けん。當に知るべし、是の如きの諸の惡比丘は是れ魔の伴侶なり』等云云。今日本國を案ずるに、代始まりて已に久しく成りぬ。舊き守護の善神は定めて福も盡き壽も減じ、威光勢力も衰へぬらん。佛法の味を嘗めてこそ、威光勢力も増長すべきに、佛法の味は皆違ひぬ、齡は長けぬ。爭でか國の災を拂ひ、氏子をも守護すべき。其上謗法の國にて候を、氏神なればとて大科を責めずして守護し候へば、佛前の起請を毀つ神なり。然れども氏子なれば、愛子の失のやうに捨てずして守護し給ひぬる程に、『法華經』の行者をあだむ國主國人等を、對治を加へずして守護する失に依りて、梵、釋等の爲には八幡等は罰せられ給ひぬるか。此事は一大事なり、祕すべし、祕すべし。

【五】諸神總じて佛法守護の誓あることを明す。
【第六天の魔王】三界の中欲界他化自在天の主、佛道を妨害す。

【六】八幡大菩薩傳教大師に袈裟を布施されし道理を究明す。
【扶桑記】叡山の皇圓の著、日本歴史の資料。
【神宮寺】神社に法樂を供する爲の寺。宮寺又は神護寺といふ。
【禰宜祝】神主の下職。

【五】ある經の中に、佛此世界と他方の世界との梵、釋、日月、四天、龍神等を集めて「我が正像末の持戒・破戒・無智の弟子等を、第六天の魔王、悪鬼神等が、人王人民等の身に入りて惱亂せんを、見ながら聞きながら治罰せずして、須臾もすごすならば、必ず梵、釋等の使をして、四天王に仰せつけて治罰を加ふべし。若し氏神治罰を加へずば、梵、釋、日月、四天王も守護神に治罰を加ふべし。梵釋又かくの如し。他方の梵釋等必ず此世界の梵釋、日月、四天等を治罰すべし。若し然らずば、三世の諸佛の出世に漏れ、永く梵釋等の位を失ひて無間大城に沈むべし」と、釋迦、多寶、十方の諸佛の御前にして、起請を書き置かれたり。今之を案ずるに、日本小國の王となり神となり給ふは、小乘には三賢の菩薩、大乘には十信、『法華經』には名字五品の菩薩なり。何なる氏神ありて無盡の功徳を修すとも、『法華經』の名字を聞かず、一念三千の觀法を守護せずば、退位の菩薩と成りて、永く無間大城に沈み候べし。

【六】故に『扶桑記』に云く、「又傳教大師、八幡大菩薩の奉爲に、神宮寺に於て自ら法華經を講ず。乃ち聞竟つて、大神託宣すらく、『我法音を聞かずして久しく歳年を歴たり。幸ひ和尚に値遇して、正教を聞くことを得たり。兼て我が爲に種種の功徳を修す、至誠隨喜す。何ぞ徳を謝するに足らん。兼て我所持の法衣あり』と。即ち託宣の主、自ら寶殿を開いて、手づから紫の袈裟一つ、紫の衣一つを捧げ、和尚に奉上す。『大悲力の故に、幸に納受を垂れ給へ』と。是時に禰宜祝等、各歎異して云く、『元來是の如きの奇事を見ず聞

【弘世、眞綱】二人共に和氣清麻呂の子、朝に仕へて忠、厚く佛法を信じ、傳教大師に歸す。

かざるをや。『此大菩薩の給ふ所の法衣、今山王に在るなり』云云。今謂く、八幡は、人王第十六代應神天皇なり。其時は佛經なかりしかば、此袈裟衣あるべからず。人王第三十代欽明天皇の治、三十二年に神と顯はれ給ひ、其れより已來弘仁五年までは、禰宜祝等次第に寶殿を守護す。何れの王の時、此袈裟を納め置けると意うべし。而るに禰宜等云く『自ら來見ず聞かず』等云云。此大菩薩はいかにしてか此袈裟衣は持ち給ひけるぞ。不思議なり、不思議なり。又欽明より已來、弘仁五年に至るまでは、王は二十二代、佛法は二百六十餘年なり。其間に三論、成實、法相、倶舍、華嚴、律宗、禪宗等の六宗七宗日本國に渡りて、八幡大菩薩の御前にして經を講ずる人人、其數を知らず。又『法華經』を讀誦する人も何でか無からん。又八幡大菩薩の御寶殿の傍には、神宮寺と號して『法華經』等の一切經を講ずる堂、大師より已前に是あり。其時定めて佛法を聽聞し給ひぬらん。何ぞ今始めて『我れ法音を聞かずして久しく年歲を歷る』等と託宣し給ふべきや。幾くの人人か『法華經』一切經を講じ給ひけるに、何ぞ此御袈裟衣をば進らせさせ給はざりけるやらん。當に知るべし。傳教大師已前には『法華經』の文字のみ讀みけれども、其義は顯はれざりけるか。去ぬる延曆二十年十一月の中旬の頃、傳教大師比叡山にして、南都七大寺の六宗の碩德十餘人を請して、『法華經』を講じ給ひしに、弘世、眞綱等の二人の臣下、此法門を聽聞して嘆いて云く、『一乘の權滯を慨き、三諦の未顯を悲む』又云く、『長幼三有の結を摧破し、猶ほ未だ曠劫の轍を改めず』等云云。其後延曆二十一年正月十九日に、高雄寺に主上行

【怠狀】謝罪を意味した降伏狀。

【七】八幡大菩薩　今は謗法者を治罰せざる大科を擧ぐ

【加水の法華經】經意に依らず、自己の私見、情調の水を醍醐の經に加注せる經即ち經意を得たる天台以外の人師のよめる法華經なり。

【八】謗法の天台座主よりその袈裟を剝がざるの罪。

奉らせ給ひて、六宗の碩德と傳敎大師と御召し合せられて、宗の勝劣を聞し食すに、南都の十四人皆口を閉ぢて鼻の如くす。後に重ねて怠狀を捧げたり。其狀に云く、『聖德の弘化より以降、今に二百餘年の間、講ずる所の經論其數多し。彼此理を爭ひ、其疑未だ解けず。而も此の最妙の圓宗、猶未だ闡揚せず』等云云。此を以て思ふに、傳敎大師已前には、『法華經』の御心未だ顯はれざりけるか。八幡大菩薩の『見ず聞かず』と御託宣ありけるは、指すなり、指すなり。白かなり、白かなり。『法華經』の第四に云く、『我滅度の後に、能く竊かに一人の爲にも法華經を說かん、當に知るべし、是の人は即ち如來の使なり。乃至、如來則ち衣を以て之を覆ひ給ふべし』等云云。當來の彌勒佛は『法華經』を說き給ふべき故に、釋迦佛は大迦葉尊者を御使として衣を送り給ふ。又傳敎大師は佛の御使として『法華經』を說き給ふべき故に、八幡大菩薩を使として衣を送り給ふか。

【七】又此大菩薩は傳敎大師已前には、加水の『法華經』を服して在しましけれども、先生の善根に依りて、大王と生まれ給ひぬ。其善根の餘慶に神と顯はれて、此國を守護し給ひけるほどに、今は先生の福の餘慶も盡きぬ、正法の味も失ひぬ、謗法の者等國中に充滿して年久しけれども、日本國の衆生に久しく仰がれて在せし、大科あれども捨難く思しめし、老人の不孝の子を捨てざるが如くして、天の責に合ひ給ひぬるか。

【八】又此袈裟は、『法華經最第一』と說かん人こそかけ參らせ給ふべきに、傳敎大師の後は、第一の座主義眞和尚は法華第一の人なれば、かけさせ給ふ事其謂れあり。第二の座

【阿闍世王】印度の惡逆の王、提婆に惑はされて父を殺し母を幽閉す。
【九】行者守護の起請に違へる罪によりて諸天に罰せらるる事實を示す。

主圓澄大師は、傳教大師の御弟子なれども、又弘法大師の弟子なり、少し謗法に似たり。此袈裟の人にはあらず。第三の座主圓仁慈覺大師は、名は傳教大師の御弟子たれども、心は弘法大師の弟子、『大日經第一』『法華經第二』の人なり。此袈裟は一向にかけ難し。設ひかけたりとも、『法華經』の行者にはあらず。其上又當世の天台の座主は、一向眞言の座主なり。又當世の八幡の別當は、或は園城寺の長吏、或は東寺の末流なり。此等は遠くは釋迦、多寶、十方の諸佛の大怨敵、近くは傳教大師の讐敵なり。譬へば提婆達多が大覺世尊の御袈裟をかけたるが如し。又獵師が佛衣を被て師子の皮を剝ぎしが如し。當世叡山の座主は、傳教大師の八幡大菩薩より給ひて候ひし御袈裟をかけて、『法華經』の所領を奪ひ取りて、眞言の領となせり。譬へば阿闍世王の提婆達多を師とせしが如し。而るを大菩薩の此袈裟を剝ぎかへし給はざるは、第一の大科なり。

【九】此大菩薩は『法華經』の御座にして、行者を守護すべき由の起請を書きたるが、數年が間『法華經』の大怨敵を治罰せざる事不思議なる上、たまたま『法華經』の行者の出現せるを、守護こそ爲さざらめ、我が前にして國主等を怨する事、犬の猿を嚙み、蛇の蝦を呑み、鷹の雉を取るが如く、師子王の兎を殺すが如くするを、一度も誡めず。設ひ誡むるやうなれども、偽り愚なる故に、梵、釋、日月、四天等のせめを八幡大菩薩は給ひ畢るにや。例せば欽明天皇、敏達天皇、用明天皇、已上三代の大王、物部大連守屋が勸めに依りて、宣旨を下して金銅の釋尊を燒き奉り、堂に火を放ち僧尼を責めしかば、天より火下りて

【襄王】周の平王に忠を盡して封侯され秦の祖となる

【一〇】法華經の尊重を述て、讀者を守護し、行者を守らざる罪科を擧ぐ

内裏を焼く、其上日本國の萬民、失なくして惡術を好み、恒なること大唐に過ぎたり。結句三代の大王、二人の太子、其外多くの王子公卿等、或は討死、或は合戰に亡び給ひしが如し。其間日本國の四十餘代の王の崇み給ひし寶殿、神社は失せぬ。「釋迦佛に適する者を守護し給ひし大師なり。又園城寺は叡山已前の寺なれども、智證大師の眞言を傳へて、今に長吏と號す。叡山の末寺たる事疑ひなし。而るに山門の得分たる大衆の戒壇を奪ひ取り一闡提寺に立てて叡山に敵対す云云。譬へば小臣が大王に敵し、子が親に不孝なるが如し。斯る惡逆の寺を新羅大明神の眼耳はしく守護する故に、山王山門に冥罰を蒙かされ、今の八幡大菩薩は「法華經」の大怨敵を守護して、天火に焼かれ給ひぬるか。例せば秦の始皇の先祖襄王と申せし王、神となりて民皇等を守護し給ひし程に、秦の始皇大慢をなして、三皇五帝の墳典を焼き、三聖の孝經等を失ひしかば、沛公と申す人、剣を以て大蛇を切り死しぬ。秦皇の氏神是れなり。其後秦の代程なく亡び候ひぬ。此も亦斯の如し。安藝の國嚴島の大明神は平家の氏神なり。平家を驕らせし失に、伊勢太神宮八幡等に神はらに打失はれて、其後平家程なく亡び候ひぬ。此れも又斯の如し。

【一〇】「法華經」の第四に云く、「佛滅度の後、能く其義を解せんは、是れ諸の天人世間の眼なり。」等云云。日蓮が「法華經」の肝心たる題目を、日本國に弘通し候は、諸天世間の眼にあらずや。眼には五あり、所謂る肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼なり。此の五眼は「法華經」より出生せさせ給ふ。故に「普賢經」に云く、「此の方等經は是れ諸佛の眼なり、諸佛

【結構し】一緒になりてたくらむ。

【引き張らせて】引張りまはす。馬にのせたりして。引廻しにせること。

【二】謗者を示して八幡大菩薩を責しむ。

【常住佛性】一切衆生悉有佛性にして常住不滅なり。

【一乘妙行】佛の證覺たる妙法を信念行するなり。

【再生敗種】煎れる種の再び生ずるが如く、法華の妙益よく難治の二乘を成佛せしむ。

是に因つて五眼を具することを得給ふ。」云云。此方等經と申すは『法華經』を申すなり。又此經に云く、「人天の福田、應供の中の最なり。」等云云。此等の經文の如くば、『妙法蓮華經』は人天の眼、二乘、菩薩の眼、諸佛の御眼なり。而るに『法華經』の行者を怨む人は、人天の眼を抉る者なり。其人を罰せざる守護神は、一切の人天の眼をくじる者を結構し給ふ神なり。而るに弘法、慈覺、智證等は正しく誑を作りて、『法華經』を『無明の邊域にして明の分位にあらず、後に望むれば戲論となる』『力者に及ばず』『履物とりにたらず』と書付けて四百餘年、日本國の上一人より下萬民に至るまで『法華經』を侮らせ、一切衆生の眼を抉る者を守護し給ふは、豈に八幡大菩薩の結構にあらずや。去ぬる弘長と、又去ぬる文永八年九月の十二日に、日蓮一分の失なくして『南無妙法蓮華經』と申す大科に國主の計ひとして、八幡大菩薩の御前に引張らせて、一國の謗法の者どもに笑はせ給ひしは、豈に八幡大菩薩の大科にあらずや。其の咎めと思しきは、鎌倉の土打ばかりなり。日本國の賢王たりし上、第一第二の御神なれば、八幡に勝れたる神はよも坐せじ。又偏頗はよもあらじとは思へども、一切經並びに『法華經』の掟の如きんば、此神は大科の神なり。

【三】日本六十六ヶ國、二つの島、一萬三千三十七の寺の佛は、皆或は畫像、或は木像、或は眞言已前の寺もあり。或は已後の寺もあり。此等の佛は皆『法華經』より出生せり。『法華經』を以て眼とすべし。所謂る『此方等經は是れ諸佛の眼なり。』等云云。妙樂云く、『然も此經は常住佛性を以て咽喉と爲し、一乘の妙行を以て眼目と爲し、再生敗種を以て

【[illegible]】[illegible]

【清丸】八幡大菩薩の[illegible]を請ひし時の[illegible]。

【還著於本人】還つて本人に著すとて、呪咀せるも、相手正法の者ならば、その呪咀、呪へる本人に向ひ來りて著す。

心腑と爲し、顯に[illegible]を以て[illegible]何國の習ひ、[illegible]に隱らず、諸宗一同に[illegible]を以て[illegible]し、大日の[illegible]を以て本尊と定む。此等は「法華經」にして佛にたれる[illegible]を、[illegible]に一々[illegible]すれば、還つて佛を[illegible]し國を執り、善神を[illegible]を覆さんとする人人なり。[illegible]阿闍世王の[illegible]の人を[illegible]して[illegible]に位ひしに[illegible]、小國の王なり。阿闍世王は[illegible]大國の[illegible]なり。[illegible]と人と、王と民との勝劣なり。[illegible]阿闍世[illegible]に[illegible]八幡大菩薩[illegible]を除くべき。

【三】凡そ此の文永十一年に大蒙古より寄せて日本國の兵を多く殺すのみならず、八幡の宮殿に焼かれ[illegible]、其時何ぞ[illegible]の[illegible]を助け給はざるや。[illegible]に知るべし、彼[illegible]の大王は此國の神に觸れたる事なれども、[illegible]と[illegible]の[illegible]、[illegible]利帝に切られ給ひぬ。此を以て思ふべし、[illegible]が稱德天皇の[illegible]に於て、國王と成らんとせし時、清丸八幡大菩薩に祈請せし時、八幡の御託宣に云く、「天[illegible]に大小寄[illegible]あり、乃至、彼は衆く我は寡し、邪は強く正は弱し、乃ち當に佛力の加護を仰いで爲めに皇緒を紹隆すべし」等云云。當に知るべし、八幡大菩薩は正法を力として、王法を守護し給ひけるなり。叡山、東寺等の眞言の邪法を以て權大夫殿を調伏せし程に、權大夫殿は勝たせ給ひ、隱岐の法皇は負けさせ給ひぬ。「還著於本人」是れなり。今又日本國一萬一千三十七の寺、竝びに三千一百三十二社の神は、國家安穩の爲に崇められて候。而るに其寺寺の

【二】神を諫曉する所以を明す。

別當等、其社社の神主等は、皆皆其なる本寺と神との御心に相違せり。彼道の佛と神とは其身異儀なれども、其心は同心に『法華經』の守護神なり。別當と社主等は或は眞言師、或は念佛者、或は禪僧、或は律僧なり。皆一同に八幡等の御讐敵なり。謗法不孝の者を守護し給ひて、正法の行者を或は流罪、或は死罪等に行はする故に、天の責を被り給へるなり。

【三】我が弟子等の内、謗法の餘慶ある者の思ひて云く、「此御房は八幡を讐敵とす」と云云。是れ未だ道理ありて法の成就せぬには、本尊を責むるといふ事を存知せざる者の思ひなり。『付法藏經』と申す經に、大迦葉尊者の因緣を説いて云く、「時に摩竭國に婆羅門あり、尼倶律陀と名く。過去の世に於て久しく勝行を修し、多く財寶を饒にして、巨富無量なり。摩竭國王に比するに、千倍勝れりと爲す。財寶饒かなりと雖も、子息あること無し。自ら念はく、老朽して死の時將に至らんとす、庫藏の諸物委付する所なし。其舍の側に於て樹林神あり。彼の婆羅門子を求むる爲の故に、即ち往いて祈請す。年歳を經と雖も都て徴應なし。時に尼倶律陀大に瞋恚を生じて、樹神に語つて曰く、我汝に事へて已來、年歳を經れども、都て爲に一の福應を垂れられず。今當に七日至心に汝に事ふべし、若し復驗なくば、必ず相燒剪せん。樹神聞き已つて深く愁怖を懷き、四天王に向つて具に斯事を陳ぶ。是に於て四王往いて帝釋に白す。帝釋閻浮提の内を觀察するに、福德の人の彼の子とするに堪ふるなし。即ち梵王に詣て、具に上の事を宣ぶ。爾の時に梵王天

眼を以て觀見するに、梵天の當に命終に臨むべきあり。之に告げて曰く、「汝若し神を降さば、宜しく當に彼の閻浮提界の婆羅門の家に生ずべし。」梵天報へて曰く、「婆羅門の法、邪見多し。我今其の子となること能はざるなり。」梵天復言く、「彼の婆羅門、大威德あり。閻浮提の人、往いて生ずるに堪ゆるなし。汝必ず彼家に生れば、當に相護りて終に汝をして邪見に入らしめざらん。」梵天曰く、「諾、敬んで聖教を承けん。」是に於て帝釋即ち諸神に向つて斯の如き事を説く。諸神歡喜して、尋で其家に詣りて婆羅門に語らく、「汝今復恨みを我に起すこと勿れ。却後七日、當に卿が願を滿すべし。」七日に至つて已に娠むことあるを覺え十月を滿足して一明兒を生めり。乃至、今の迦葉是れなり。」又云く、「時に臨んで、尼倶律陀大に瞋忿を生ず。」又云く、「常の如くんば、氏神に向つて大瞋恚を生ぜん者は、今生には身を滅し、後生には惡道に墮つべし。然りと雖も尼倶律陀長者は氏神に向つて大惡口、瞋恚を生じて大願を成就し、賢子を儲け給ひぬ。當に知るべし瞋恚は善惡に通ずる者なり。

【一四】今日蓮は去ぬる建長五年癸丑四月二十八日より、今弘安三年太歲庚辰十二月に至るまで、二十八年が間、又他事なし。只『妙法蓮華經』の五字七字を、日本國の一切衆生の口に入れんと勵むばかりなり。此れ即ち母の赤子の口に乳を入れんと勵む慈悲なり。此れ又時の當らざるにあらず、已に佛記の五五百歲に當れり。天台、傳教の御時は、時未だ來らざりしかども、一分の機ある故に、少分流布せり。何に況んや今は已に時到りぬ。設ひ機

【一四】日蓮が諫曉道理にかなへるを證す、

【相應和尙】叡山の僧、無動寺祖、練行して祈驗あり。

【一五】弘通必ず留難あるの疑を決するに、强折の所以を明す。

たくして水火を爲すとも、爭でか弘通せざらむ。只不輕の如く大難には値ふとも、流布せん事疑ひなかるべきに、眞言、禪、念佛者等の讒奏に依りて、無智の國主等留難をなす。此れを對治すべき氏神八幡大菩薩、彼等の大科を治せざる故に、日蓮の氏神を諫曉するは、道理に背くべしや。尼俱律陀長者が樹神を諫むるに異らず。『蘇悉地經』に云く、「本尊に治罰すること、鬼魅を治するが如し。」等云云。文の心は、經文の如く所願を成ぜんが爲に、數年が間法を修行するに成就せざれば、本尊を或は縛り、或は打ちたんどせよと說かれて候。　相應和尙の不動明王を縛りけるは、此の經文を見たりけるか。此は他事には似るべからず。日本國の一切の善人は、或は戒を持ち、或は布施を行じ、或は父母等の孝養の爲に寺塔を建立し、或は成佛得道の爲に妻子を養ふべき財を止めて、諸僧に供養をなし候に、諸僧謗法の者たる故に、謀反の者を知らずして宿したるが如く、不孝の者に與へたるをなせるが如く、今生には災難を招き、後生も惡道に墮ち候べきを扶けんとする身なり。而るを日本國の守護の善神等彼等に與して、正法の敵となる故に、此を責むるは經文の如し。道理に任せたり。

【一五】我が弟子等が愚案に「我が師は『法華經』を弘通し給へども弘まらず。大難の來れるは、眞言は國を亡す、念佛は無間地獄、禪は天魔の所爲、律僧は國賊と言ふ故なり。例せば道理ある問注に、惡口の交れるが如しと」云云。日蓮反詰して云く、「汝若し爾らば我が問を答へよ。一切の眞言師、一切の念佛者、一切の禪宗等に向つて、『南無妙法蓮華經』

【一六】權小破折の理を示す。

と唱へ給へと勸進せば、彼等が云く、「我が祖師弘法大師は『法華經』と釋迦佛とを、『無明の邊域』『力者』はき物とりに及ばず」と書かせ給ひて候。物の用に合はぬ『法華經』を讀誦せんよりも其口に我が小呪を一反も誦すべし」。一切の在家の者云く「善導和尚は『法華經』をば『千中無一』、法然上人は『捨閉閣拋』、道綽禪師は『未有一人得者』と定めさせ給へり。汝が勸むる『南無妙法蓮華經』は我が念佛の障りなり。我等設ひ惡を作るとも唱へ、一切の禪宗の云く、「我が宗は教外別傳と申して、一切經の外に傳へたる法門なり。一切經は指の如し、禪は月の如し、天台等の愚人は指を守つて月を亡ひたり。『法華經』は指なり、禪は月なり、月を見て後は指は何の詮かあるべき」なんど申す。此の如く申さん時は、如何にとしてか『南無妙法蓮華經』の良藥をば、彼等が口には入るべき。佛は且らく『阿含經』を說き給ひて後、『法華經』に入れんとたばかり給ひしに、一切の聲聞等、只『阿含經』に著して『法華經』に入らざりしをば、如何やうにか歎かせ給ひし。此をば佛說いて云く、『譬ひ五逆罪の者をば佛種となすとも、罪は佛の種とはなるとも、彼等が善根は佛種とならじ』とこそ說かせ給ひしか。

【一六】小乘大乘はかはれども、同じく佛說なり。大が小を破して小を大となすと、大を破して『法華經』に入ると、大小は異なれども『法華經』に入らんと思ふ志は是れ一なり。されば『無量義經』に大を破して云く、『未顯眞實』と。『法華經』に云く、『此事は定めて不可なり』等云々。佛自ら云く、『我世に出て『華嚴』、『般若』等を說きて、『法華

【一六】強折の化、謗者の苦患に對する日蓮の慈悲より出づるを明す。

【大莊嚴佛の末の】五比丘あり、普事は正見にして、その衆は成佛し、他の苦岸等の四比丘の持る六百萬億等の衆は墮獄す。

【勝意比丘】正法を持せる喜根菩薩を誹りて墮獄す。

經」を說かずして入涅槃せば、愛子に財を惜み、病者に良藥を與へずして死するが如し。佛自ら地獄に墮つべし」と云云。何可と申すは地獄の名なり。況んや『法華經』の後、爾前の經に著して『法華經』へ移らざる者は、大王に民の從はざるが如し、子の親に見えざるが如し。

【一七】設ひ『法華經』を破せざれども、爾前の經經を讚むるは、『法華經』を毀るに當れり。妙樂云く、『若し昔を稱歎せば、豈に今を毀るにあらずや』。又云く『發心せんと欲すと雖も、偏圓を簡ばず、誓の境を解せざれば、未來法を聞くとも何ぞ能く謗を免れん』等云云。眞言の善無畏、金剛智、不空、弘法、慈覺、智證等は、設ひ『法華經』を『大日經』に相對して勝劣を論ぜずして『大日經』を弘通すとも、滅後に生れたる三藏人師なれば、謗法にはよも遁れ候はじ。何に況んや善無畏等の三三藏は『法華經』は略說、『大日經』は廣說と同じて、而も『法華經』の行者を『大日經』へ入し入れ、弘法等の三大師は『法華經』の名を書上げて『戲論』なんど書かれて候、大謗法を明めずして、此四百餘年一切衆生皆謗法の者になりぬ。例せば大莊嚴佛の末の四比丘が、六百萬億那由他の人を皆無間地獄に墮せると、師子音王佛の末の勝意比丘が、無量無邊の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を、皆阿鼻大城へ導きしと、今の三大師の教化に隨って、日本國四十九億九萬四千八百二十八人の一切衆生又四十九億等の人人、四百餘年に死して無間地獄に墮ちぬれば、其他方世界よりは生れて又死して無間地獄に墮ちぬ、前の如く墮つる者は大地微塵よりも多し。

【一八】八幡の託宣を釋するに世間出世間の正直と本地垂迹とを以てす。これを以て八幡この諫暁に終ふべき必定の道理を示す。

【黄帝中央】五色を五方にあてて配する時、中央を黄に配し、各その一方を司る義もて帝の字を加へたるなり。

【八葉は八幡】蓮華の花の八瓣を作用の八輻に、その中央の臺を本體の釋迦に擬ふ。

此れ偏に大陣の科ぞかし。此れを日蓮は見ながら而も黙止して申さずば、但に阿鼻地獄の者となりて、一分の科なき身が、十方の大阿鼻獄を經めぐるべし。いかでか身命を捨てざるべき。『涅槃經』に云く、「一切衆生の異の苦を受くるは、悉く是れ如來一人の苦なり。」等云云。日蓮云く、「一切衆生の一切の苦を受くるは、悉く是れ日蓮一人の苦と申すべし。」

【一八】平城天皇の御宇、八幡大菩薩の御託宣に云く、「我は是れ日本の鎮守八幡大菩薩なり。百王を守護せん誓願あり。」等云云。今云く、人王八十一二代隠岐の法王、三四五の諸王已に破られ畢んぬ。殘りの十餘代今捨て畢んぬ。已に此の願破るるが如し。日蓮料簡して曰く、百王を守護せんといふは、正直の王百人を守護せんと誓ひ給ふ。八幡の御誓願に云く、「正直の人の頂を以て栖と爲し、諂曲の人の心を以て亭とせず。」等云云。夫れ月は清水に影を宿す。濁水に住む事なし。王と申すは不妄語の人、右大將家、權大夫殿は不妄語の人、正直の頂なれば、八幡大菩薩の栖み給ふ百王の内なり。正直に二あり。一には世間の正直、王と申すは、天人地の三を串くを王と名づく。天人地の三は横なり。竪の點は縱なり。王と申すは黄帝中央の名なり。天の主、人の主、地の主を王と申す。隠岐の法皇は名は國王、身は妄語の人たり。横人たり。權大夫殿は名は臣下、身は大王、不妄語の人、八幡大菩薩の願ひ給ふ頂なり。二には出世の正直と申すは、爾前七宗等の經論釋は妄語、『法華經』天台宗は正直の經釋なり。本地は不妄語の經の釋迦佛、迹には不妄語の八幡大菩薩なり。八葉は八幡、中臺は教主釋尊なり。四月八日寅の日に生れ、八十年を經て、

【影を敬つて】釋尊は體、八幡はその影。

【薄倶羅尊者】佛弟子羅漢不殺の德にて九十一劫中夭せずと。

【鴦崛摩羅】指鬘と譯す。千人を殺してその指を切り鬘となさんと、一人足らず、母を殺さんとせしに佛に說かれて歸し、後大乘の法功をあぐと。

二月十五日申の日に隱れさせ給ふ。豈に今の日本國に生れ給ふにあらずや。大隅の正八幡宮の石文に云く、「昔靈鷲山に在つて妙法華經を說き、今正宮の中に在つて大菩薩と示現す」等云云。法華經に云く、「今此の三界」等云云。又「常に靈鷲山に在り」等云云。遠くは三千大千世界の一切衆生は、釋迦如來の御子なり。近くは日本國四十九億九萬四千八百二十八人は、八幡大菩薩の子なり、今日本國の一切衆生は、八幡を恃み奉るやうにもてなし、釋迦佛をば捨て奉るは、影を敬つて體を侮り、子に向つて親を罵るが如し。本地は釋迦如來にして、月氏國に出でては『正直捨方便』の『法華經』を說き給ひ、垂迹は日本國に生れては、正直の頂に住み給ふ。諸の權化の人人の本地は『法華經』の一實相なれども、垂迹の門は無量なり。所謂薄倶羅尊者は三世に不殺生を示し、鴦崛摩羅は生生に殺生を示す。舍利弗は外道となり。是の如く門門の不同なる事は、本と凡夫にてありし時、初發得道の始めを成佛の後、化他門に出で給ふ時、我が得道の門を示すなり。妙樂大師云く、「若し本に從つて說かば、亦是の如く、昔の所習の中に於て能く化する故に、過去の中に亦殺を以て利他の法門と爲す」等云云。今の八幡大菩薩は、本地は月氏の不妄語の『法華經』を、迹に日本國にして正直の二字となして、賢人の頂に栖まむと云云。若し爾らば此の大菩薩は寶殿をやきて天に上り給ふとも、『法華經』の行者日本國にあるならば、其の所に栖み給ふべし。『法華經』の第五に云く、『諸天晝夜に常に法の爲の故に、而も之を衛護す』。經文の如くんば、『南無妙法蓮華經』と申す人をば、大梵天、帝釋、日月、

西天竺、晝夜に守護すべしと見えたり。又第六の卷に云く『或は己身を說き、或は他身を說き、或は己身を示し、或は他身を示し、或は己事を示し、或は他事を示す。』觀音尙ほ三十三身を現じ妙音又三十四身を現じ給ふ。敎主釋尊何ぞ八幡大菩薩と現じ給はざらんや。天台云く『卽ち是れ形を十界に垂れて、種種の像を作すなり。』等云云。

【一九】天竺國をば月氏國と申す、佛の出現し給ふべき名なり。扶桑國をば日本國と申す、豈に聖人出で給はざらん。月は西より東に向へり、月氏の佛法の東へ流るべき相なり。日は東より西へ入る、日本の佛法の月氏へ返るべき瑞相なり。月は光明かならず、在世は但八年なり。日は光明月に勝れり、五五百歲の長き闇を照すべき瑞相なり。佛は法華經謗法の者を治し給はず、在世には無き故に。末法には一乘の強敵充滿すべし、不輕菩薩の利益此れなり。各各我が弟子等、勵ませ給へ、勵ませ給へ。

弘安三年太歲庚辰十二月日

日蓮　花押

法門可被申樣之事

【一】法門申さるべき樣。『選擇』をば打ち置きて先づ『法華經』の第二の卷の『今此三界』の文を開いて、釋尊は我等が親父也等定め了るべし、何れの佛か我等が父母にてはお

【觀音】法華經觀世音菩薩普門品に出づ。

【妙音】同妙音菩薩品に出づ。

【一八】八幡と釋尊の垂迹本地の關係より日本と月氏の因緣、佛法流行の瑞相を示して、門弟を勵ます。

【在世は但八年】法華經を最後八年間說かる。

【不輕菩薩の利益】不輕菩薩の罵詈杖木を忍びて民衆を禮拜する大行を行ひて彼等を佛道に結緣せしめし利益をいふ。

【一】縮遺六二〇頁、文永六年(四十八歲)の作。叡山に遊學中の門子三位房日行に與へて、關白に召され其の持佛堂に說法するに際し、念佛無間の義及び法門の心得を論したるもの。

【一】諸經の淺深勝劣は經文に明示せるを說く。
【選擇】法然の作選擇本願念佛集の略。

【二】爾前の方便權說を捨て、今經眞實の義を信奉するが眞の佛子なるを明す

はしますこ外典三千餘卷にも忠孝の二字こそ詮にて候なれ。忠は又孝の家より出づとこそ申し候なれ。されば外典は内典の初門、此心は内典に違はず候か。人に尊卑上下はありといふとも親を孝するにはすぎずと定められたるか。釋尊は我等が父母也、一代の聖教は父母の子を教へたる教經なるべし。其の中に天上・龍宮・天竺なんどには無量無邊の御經のましますなれども、漢土日本には僅に五千七千餘卷なり。此等の經經の次第勝劣等は私には賴へ難う候。而るに論師・人師・先德には末代の人の智慧越え難ければ、彼の人人の料簡を用ゆべきかの處に、華嚴宗の五教四教、法相三論の三時二藏、或は三轉法輪、「世尊法久後要當說眞實」の文は又『法華經』より出でて候。金口の明說也。佛說既に大に分れて二途也。譬へば世間の父母の敎の前判後判の如し。將又世間の前判後判は如來の金言を學びたるか。孝不孝の根本は前判後判の用不用より事起れり。

【二】かう立て申すたらば、人人さもやと思食たらん時申すべし。抑淨土の『三部經』等の諸宗の依經は、當分四十餘年之內也。世尊は我等が慈父として『未顯眞實』ぞと定めさせ給ふ御心は、彼の四十餘年の經經に付けと思食し候か、又『眞實』の言に移れと思食し候か。心あらん人人御賢察候べきかと、能く味ひて、よも佛陀の慈父の一切衆生を一子と思食すが、眞實なる事を捨てて、『未顯眞實』の不實なる事に付けとは思食めさじ。さて『法華經』に移り候はんは、四十餘年の經經を捨てて還り候べきか、はた又かの經經竝に南無阿彌陀佛等をば捨てずして還り候べきかとおぼしき上に、凡夫の私のはから

【三】義の權實を辨へざる輩は不孝の者なりと述ぶ。

ひ、此經に付けて恐れあるべし。權と申す親父の權せずして付つ處に、權實あて云く、「正直捨方便」等云云。方便と申すは「無量義經」に「[illegible]」と申す上に「以方便力」と申す方便也。「以方便力」の方便の内に「三部經」を籠め四十餘年の一切經は一字一點も漏るべからざるか。されば四十餘年の經經を捨てて「法華經」に入らざらん人人は、世間の孝不孝は知らず、佛法の中には第一の不孝の者なるべし。故に第二の卷に「譬喩品」に云く、「今此三界乃至唯我一人能爲救護雖復教詔而不信受」等云云。四十餘年の經經を捨てずして、「法華經」を並べて行ぜん人人は、主師親の三人の仰を用ひざる人人也。教と申すは師親の訓へ、詔と申すは上より下を制するなるべし。佛は閻浮第一の賢王聖師賢父也。されば四十餘年の經經に付きて、「法華經」へ遷らず、又遷れる人人も彼の經經を捨てて、遷らざるは、三德を備へたる親父の仰せを用ひざる人、天地の中に住むべき者には非ず。此の不孝の人の住處を經の文に定めて云く、「若し人信ぜず乃至其人命終して阿鼻獄に入らん」等云云。設ひ「法華經」を讀み奉るとも、遷り付かざらん人人、不孝の失疑なかるべし。不孝の者は又「惡道」疑なし。故に佛は「入阿鼻獄」と定め給ひぬ。何に況や爾前の經經に執心を固くなして、「法華經」へ遷らざるのみならず、善導が「千中無一」、法然が「捨閉閣抛」とかけるは、豈阿鼻地獄を脱るべしや。其の所化並に檀那は又申すに及ばず。

【三】「雖復教詔而不信受」と申すは、孝に二あり。世間の孝不孝は外典の人人是を知りぬべし。内典の孝不孝は設ひ論師等なりとも、實教を辨へざる樣の論師の流を受たる

【四】爾前の經經は入眞の方便として生雜の合顯を保つことを述ぶ

樣の高僧なんどは、後世の歎き事なるべし。何に况や末世の人人をや。「涅槃經」の第十四に云く、人身を受る事は爪上の土、三惡道に堕る事は十方世界の土、四重五逆乃至「涅槃經」を謗ずる事は十方世界の土、「涅槃經」を信ずる事は爪の上の土なんど說かれて候。末代には五逆の者と謗法の者とは十方世界の土の如しと見えぬ。されども當時五逆罪を作る者は爪の上の土、造らざる者は十方世界の土と見え候へば、經文そらごとなる樣に見え候を、委く勘へ見候へば、仁弉の者を五逆罪の者とは申し候か、又相似の五逆と申す事も候。さるならば前王の正法寶祚を弘めさせ給ひて候を、今の王の權法邪師の法を尊んで、天子本命の道場たる正法の御寺の御帰依薄くして、權法邪法の寺の國國に多く出で来るは、愚者の眼には佛法繁昌と見えて、佛天智者の御眼には古き正法の寺寺漸く失せ候へば、一には不孝なるべし、賢なる父母の氏寺を捨つる故。二には謗法なるべし。若し然らば日本國當世は國一同に不孝謗法の國なるべし。此國は釋迦如來の御所領、佛の左右の臣下たる大梵天王・第六天の魔王にたばせ給ひて、大海の死骸をとゞめざるが如く、寶山の曲林を嫌ふが如く、此國の謗法をかへんとおぼすかと勘へ申す也と申せ。

【四】此上に「捨られて候四十餘年の經經の今に候はいかに」と、たんと仰せ候はば、反詰して申すべし、塔をくむ足代は塔をくみ上ては切り捨つる也、なんど申すべし。此譬は「玄義」の第二に「今の大教若し起れば方便の教絶す」と申す釋の心也。絶と申すは絶と云ふ事、絶と申す事は此經起れば前前の經經を斷ち止むと申す事なるべし。「正直捨方

【五】外典餘經は皆研究の爲に學ぶものにして得道の爲に非ざる意を示す。

【六】念佛は謗法罪なることを說く

【七】日行の態度を誡む。

便の捨の文字の心、又蘇禪の日出ぬれば星隱るの心なるべし。但し爾前の經經は塔の足代なれば切捨つるとも、又塔を修理せん時は用ゆべし。又切り捨つべし。三世の諸佛の說法の儀式かくの如し。

【五】又俗の難に云く、「慈覺の大師常行堂」等の難。是をば答ふべし。「內典の人外典を讀む、得道のためにはあらず、才學のためか。山寺の小兒の倶舍の頌を讀む、得道のためか。傳教、慈覺は八宗を極め給へり、一切經を讀み給ふ。是皆『法華經』を詮と心得給はん梯磴なるべし。」

【六】又俗の難に云く、「何にさらば御房は念佛をば申し給はぬ。」答て云く、「傳教大師は二百五十戒を捨て給ふ。時に當りて法華圓頓の戒にまぎれし故也。當世は諸宗の行多けれども、時に當りて念佛をもてなして『法華經』を謗する故に、金石迷ひやすければ唱へ候はず。例せば佛十二年が間『常樂我淨』の名を忌み給ひき。外典には寒食の祭に火をいみ、赤物をいむ。不孝國と申す國をば孝養の人はとほらず。此等の義なるべし。」幾度も『選擇』をばいろはずして先づから立つべし。

【七】又「御持佛堂にて法門申したりしが面目」なんど書かれて候事、返返不思議に覺え候。其故は僧となりぬ、其上一閻浮提に希有法門なるべし。設ひ等覺の菩薩なりとも何とか思べき。まして梵天、帝釋等は我等が親父釋迦如來の御所領を預かりて、正法の僧を養ふべき者に付けられて候。毘沙門等は四天下の主、此等が門守り。又四州の王等は毘沙

【せう房】　少輔房

【京なめり】　京なまり。

【八】　眞言無得道と眞言の台盜を說き且つ台密を難ず

門天が所從なるべし。其上日本秋津島は四州の輪王の所從にも及ばず、但島の長なるべし。長なんどにつかへん者共に「召されたり」「上られたり」なんど書く上へ「面目」なんど申すは、旁旁、詮ずる處日蓮を賤しみてかけるか。總じて日蓮が弟子は京に登りぬれば始めは忘れざる樣にて後には天魔付て物に狂ふ。せう房が如し。和御房もそれ體に成て天の惡まれ蒙るな。登りて幾もなきに實名を替る條物狂はし。定めて詞つき音なんども京なめりに成たるらん。鼠が蝙蝠に成たる樣に、鳥にもあらず鼠にもあらず、田舍法師にもあらず京法師にもにず、せう房が樣に成ぬとおぼゆ。言をば但だ田舍言にてあるべし。中中あしき樣にて有也。「尊成」とかけるは隱岐の法皇の御實名か、旁旁不思議なるべし。

【八】且つ知れて候樣に、當世の高僧眞言天台等の人人の御祈叶ふまじき由、前前に申し候上、今年鎌倉の眞言師等は去年より「變成男子」の法を行はる。隆辨なんどは自讚する事限なし。七八百餘人の眞言師、東寺、天台の大法祕法盡して行ぜしが終に空くなりぬ。禪宗、律僧等も一同に行ぜしかどもかなはず。日蓮が「叶ふまじ」と申すとて「不思議也」なんどをどし候ひしかども皆空くなりぬ。小事たる今生の御祈の叶はぬを以て知るべし、大事たる後生叶ふべしや。眞言宗の漢土に弘まり始めしは天台の一念三千を盜取て眞言の教相と定め理の本とし、枝葉たる印、眞言を宗と立て、宗として天台宗を立て下す條、謗法の根源たるか。又華嚴、法相、三論も天台宗日本にわたりし時は謗法とも知らざりしが、傳教大師圓宗を勘へ出し給ひて後、謗法の宗とも知られたりし也。當世眞言等

【九】眞言謗法に就て論釋を引證し天台の末學之に迷へるを難ず。

の七宗の皆僻める謗法なれば、大聖の御前に叶ふべしとも覺えず。天台宗の人人は我が宗は正なれども邪なる他宗と同ずれば、我宗の正を失ひ知らぬ者なるべし。譬ば直に迷ふ者は對當の西に迷ひ、東西に迷ふ、故に十方に迷ふなるべし。外道の法と申すは本内道より出て候。而れども外道の法を以て內道の敵となる也。諸宗は『法華經』より出て天台宗を才覺として而も天台宗を失ふなるべし。天台宗の人人は我宗は眞義とも知らざる故に、他宗の亡び我身の亡くなるをば知らずして、他宗を助けて我宗を失ふなるべし。法華宗の人が『法華經』の題目、「南無妙法蓮華經」とは唱へずして、南無阿彌陀佛と常に唱へば『法華經』を失ふ者なるべし。例せば外道は三寶を立つ。其中に佛寶と申すは南無摩醯首羅天と唱へしかば、佛弟子は翻邪の三歸と申して、南無釋迦牟尼佛と申せし也。此を以て內外のしるしとす。南無阿彌陀佛とは淨土宗の依經の題目也。心は『法華經』の行者と行ずとも、南無阿彌陀佛を申さば傍輩は念佛者としりぬ。『淨土三部經』を捨てたる人と思ふべし。叡山の三千人は此旨を辨へずして王法にも背かれ叡山をも亡さんとする故に、自然に一實に申す事叶はず等と申すべし。

【九】人不審して云く、「天台、妙樂、傳教等の御釋に我やうに『法華經』並に一切經を心得ざらん者は惡道に墮つべしと申す釋や有。」と申すは『玄』の三、『籤』の三及び『已今當』等を出し給ふべし。傳教大師は六宗の學者日本國の十四人を呵して云く、『顯戒論』の下に云く、「昔は齊朝の光統を聞き、今は本朝の六統を見る。實なる哉法華の何況等。」云云。華

【一】正しく台密を破す。

【二】天台眞言の雜亂を論諍す。

嚴、眞言、法相、三論の四宗を呵して云く、「依憑集」に云く、「新來の眞言家は則ち筆受の相承を泯ぼし、舊到の華嚴宗は則ち影響の軌模を隱す。沈空の三論宗は弾呵の屈恥を忘れて稱心の心醉を覆ひ、著有の法相宗は僕陽の歸依を非し、青龍の判經を撥らふ」と云云。天台、妙樂、傳教等は、眞言等の七宗の人人は設ひ戒定は全くとも謗法の故に悪道臨るべからずと定められたり。何に況や禪宗淨土宗等は勿論なるべし。されば止觀は偏に達磨をこそ破して候ひぬれ。而るに當世の天台宗の人人は諸宗に得道を許すのみならず、諸宗の行を奪ひ取て我行とする事いかん。

【一】當世の人人殊に眞言宗を不審せんか。立申すべき樣。日本國に八宗あり、眞言宗大に分て二流あり、所謂東寺、天台なるべし。法相、三論、華嚴、東寺の眞言等は大乘宗なり、設ひ定慧は大乘なれども東大寺の小乘戒を持つ故に戒は小乘なるべし。退大取小の者小乘宗なるべし。叡山の眞言宗は天台圓頓の戒をうく、全く眞言宗の戒なし。されば天台宗の圓頓戒に墮ちたる眞言宗也等申すべし。而るに座主等の高僧名を天台宗にかりて、一向眞言宗に寄て法華宗を下る故に、叡山皆謗法になりて御祈驗しなきか。

【二】問て云く、「天台法華宗に別して眞言宗の名を削らるる證文如何。」答へて云く、『學生式』に云く（傳教大師作也）、「天台法華宗年分學生式一首、年分度者二人（柏原先帝新加天台法華宗傳法者）凡そ法華宗天台の年分は弘仁九年より叡山に住せしめて、一十二年山門を出でずして兩業を修學せしむ。凡そ止觀業者。凡そ遮那業者等」云云。「顯戒論緣起」の上に云く、「新法華宗を加へん

【二】天台の人師は獅子身中の蟲なるを以て靈驗なきを示す。

事を請ふ表一首』沙門最澄○華嚴宗二人、天台法華宗二人等』云云。又云く、『天台の業に二人一人令レ讀二大毘盧遮那經一一人令レ讀二摩訶止觀一』此等は天台宗の內に眞言宗をば入れてこそ候ひぬれ。嘉祥元年六月十五日の格に云く、『右入唐還つて請益す、傳燈法師位圓仁の表に稱く、伏して天台宗の本朝に傳ふることを尋ぬれば、延曆二十四年○二十五年特に天台の年分度者二人を賜ふに一人は眞言の業を習はし、一人は止觀の業を學ばす。○然れば則ち天台宗の止觀と眞言の兩業は是桓武天皇の崇建する所なり』等云云。叡山に於ては天台宗に對しては眞言宗の名を削り、天台宗を骨として眞言をば肉となせるか。而るに末代に及て天台眞言兩宗中惡くなりて、骨と肉と分れ、座主は一向に眞言となる、骨なき者の如し。大衆は多分天台宗也、肉なきものの如し。佛法に諍ひある故に、世間の相論も出來して叡山靜ならず、朝家に煩ひ多し。此等の大事を內內存ずべし。此法門は未だ數へざりき、能能存知すべし。

【三】又念佛宗は『法華經』を背いて淨土の三部經に付く故に、阿彌陀佛を正として釋迦佛をあなづる。眞言師は大日を詮と思ふ故に、釋迦如來をあなづる戒に於ては大小殊なれども釋尊を本とす、餘佛の證明なるべし。諸宗殊なりとも釋迦を仰ぐべきか。師子の中の虫師子を食ふ。佛教をば外道は破り難し、內道の內に事出來りて佛道を失ふべし。佛の遺言也。佛道の內には小乘を以て大乘を失ひ、權大乘を以て實大乘を失ふべし。此等は又外道の如し。又小乘權大乘よりは實大乘『法華經』の人人が、還て『法華經』を失はんが大事にて候べし。佛法の滅不滅は叡山に有るべし。叡山の佛法滅せるかの故に、異國我朝を

【三】天台眞言の學者無智にして念佛禪二宗の學者に欺かれたる事實を出し倂せて念禪二宗は亡國の原因なる旨を說く。

亡さんとす。叡山の正法失はるる故に、大天魔日本國に出來して法然、大日等が身に入り、此等が身を橋として王臣等の御身に移り住み、還て叡山三千人に入る故に、師檀中不和にして御祈請驗しなし、御祈請驗しなければ三千の大衆等檀那に捨てはてられぬ。

【三】又王臣等天台眞言の學者等に向ひ問うて云く、「念佛禪宗等の極理は天台眞言とは一つか」と問はせ給へば、名は天台眞言に借て其心も辨へぬ高僧の天魔にぬかれて答て云く、「禪宗の極理は天台眞言の極理也。彌陀念佛は『法華經』の肝心也」なんど答へ申す也。而るを念佛者禪宗等の輩には天魔乘うつりて、當世の天台眞言の僧よりも智慧賢き故に、全くしからず。『禪は遙に天台眞言に超たる極理也。』或は云く、「諸教は理深我等衆生は解微なり、機教相違せり得道あるべからず」なんど申す故に、天台眞言等の學者、王臣等の檀那皆奪ひ取られ御歸依無ければ、現身に餓鬼道に墮て友の肉を喰み佛神に瞋をなし、檀那を呪咀し年年に災を起し、或は我生身の本尊たる大講堂の教主釋尊を燒拂ひ、或は生身の彌勒菩薩を亡す。進では教主釋尊の怨敵となり、退いては當來彌勒の出世を遮んと狂ひ候か。此大罪は經論に未だ說れず。又此大罪は叡山三千人の失にあらず、公家武家の失となるべし。日本一州上下萬人一人もなく謗法なれば、大梵天王、帝釋竝に天照大神等、隣國の聖人に仰せ付られて謗法をためさんとせらるるか。例せば國民たりし淸盛入道が王法を傾け奉り結句は山王大佛殿を燒拂ひしかば、天照大神正八幡山王等與力せさせ給ひて、源賴義が末の賴朝に仰せ下して平家を亡されて國土安穩なりき。今一國擧て佛

【一四】日蓮は日本唯一人の正直者なれば天下を諫曉し屢屢難を受けたる事を説く。

神の敵となれり。我國に此國を領すべき人なきかの故に、大蒙古國は起ると見えたり。例せば震旦高麗等は天竺に次では佛國なるべし。彼國國禪宗念佛宗に成て蒙古に亡されぬ。日本國は彼二國の弟子也。二國の亡されんに豈此國安穩なるべしや。國を助け家を思はん人人は急ぎ禪念の輩を經文の如く誡しめらるべきか。經文の如くならば佛神日本國にましまさず。彼を請じまいらせん術はおぼえげならでは叶ひ難し。

【一四】先づ世間の上下萬人云く、「八幡大菩薩は正直の頂にやどり給ふ、別の栖なし」等云云。世間に正直の人なければ大菩薩の栖ましまさず。又佛法の中に「法華經計こそ正直の御經にてはおはしませ。」法華經の行者なければ大菩薩の御栖おはせざるか。但し日本國には日蓮一人計これ世間、出世正直の者にては候へ。其故は故最明寺入道殿に向て禪宗は天魔の所爲なるべし。後に勘文を以て是を告知しむ。日本國の皆人無間地獄に墮べし。是程ある事を正直に申す者は先代にも有がたくこそ。是を以て推察あるべし、其より外の小事曲べしや。又聖人は言をかざらずと申す。又未だ顯れざる後を知るを聖人と申すか。日蓮は聖人の一分に當れり。此法門の故に二十餘所を追はれ、結句流罪に及び、身に多の疵を蒙り、弟子をあまた殺されたり。比干にも超え伍子胥にも劣らず。提婆菩薩の外道に殺され師子尊者の檀彌利王に頸を刎られしにも劣るべきか。若爾らば八幡大菩薩は日蓮が頂を離れさせ給ひては、何れの人の頂にか住給はん。日蓮を此國に用ひずば如何すべきと歎かれ候也と申せ。

【一五】國家安穏の基は釋迦一佛を尊崇するにあることを述ぶ。

【一五】又日蓮房の申し候。佛菩薩幷に諸大善神を還し進らせん事は別の術なし。禪宗念佛宗の寺寺を一もなく失ひ、其僧等を誡め、叡山の講堂を造り、靈山の釋迦牟尼佛の御魂を請じ入れ奉らざらん外は、諸神も還り給ふべからず。諸佛も此國を扶け給はん事はかたしと申せし。

信行篇

【一】縮遺九六六頁、文永十年（五十二歳）の作。法華經を信じて疑はず、不惜身命に南無妙法蓮華經と唱ふる人は如說修行の行者なることを力說し、末法の修行を明にしたるものなり。

【二】如說行者の行者には三類の敵人ありて諸難に遭ふことを述ぶ。

【猶多怨嫉】如來現在につづく文。

【況滅度後】猶多怨嫉につづく文。

【三】如說修行の行者に三類の敵人あるを述べ、皆歸妙法の時には現世後世共に安穩なるべきを說く。

如說修行鈔

【一】夫れ以みれば末法流布の時、生を此土に受け、此經を信ぜん人は、如來の在世より猶多怨嫉の難甚しかるべしと見えて候也。其故は、在世は能化の主は佛なり、弟子又大菩薩、阿羅漢なり、人天、四衆、八部、人非人等なりといへども、調機調養して『法華經』を聞かし給ふ。猶怨嫉多し。何に況んや末法今の時は、教機時刻當來すといへども、其師を尋ぬれば凡師なり、弟子又闘諍堅固、白法隱沒、三毒強盛の悪人等なり。故に善師をば遠離し、悪師には親近す。其上眞實の『法華經』の如說修行の行者の師弟檀那とならんには、三類の敵人定まれり。されば此經を聽聞し始めん日より思ひ定むべし、『況滅度後』の大難、三類甚しかるべしと。然るに我が弟子等の中にも、兼て聽聞せしかども、大小の難來る時は、今始めて驚き肝を消して信心を破りぬ。兼て申さざりける歟。經文を先として『猶多怨嫉、況滅度後』、『況滅度後』と、朝夕教へし事は是れなり。予が或は所を追はれ、或は疵を蒙り、或は兩度の御勘氣を蒙りて遠國に流罪せらるるを見聞くとも、今始めて驚くべきにあらざるものをや。

【二】問うて云く、「如說修行の行者は『現世安穩』なるべし。何が故ぞ三類の強敵盛んならんや。」答へて云く、「釋尊は『法華經』の御為に、今度九横の大難に値ひ給ふ。過去の

【法王】釋尊を指す。

【天下萬民以下】本鈔の眼目として有名なる一段。

【義農の世】支那太古の平和安穩なりし時代。伏羲神農時代の略。

不輕菩薩は『法華經』の故に杖木瓦石を蒙り、竺の道生は蘇山に流され、法道三藏は面に火印を當てられ、師子尊者は頭を刎ねられ、天台大師は南三北七にあだまれ、傳教大師は六宗に憎まれ給へり。此等の佛、菩薩、大聖等は、法華經の行者にして、而も大難に値ひ給へり。此等の人人を如說修行の人と云はずば、何處かに如說修行の人を尋ねん。然るに今の世は闘諍堅固、白法隱沒なる上、惡國惡王惡臣惡民のみ有つて、正法に背きて邪法邪師を崇重すれば、國土に惡鬼亂れ入れて、三災七難盛んに起れり。斯る時刻に日蓮佛敕を蒙りて、此土に生れけるこそ時の不祥なれども、法王の宣旨背き難ければ、經文に任せて權實二教の軍を起し、忍辱の鎧を著て妙教の劍を提げ、一部八卷の肝心、妙法五字の旗を指上げて、『未顯眞實』の弓を張り、『正直捨權』の箭をはげて、『大白牛車』に打乘つて權門をかつぱと破り、彼處へ押懸け此處へ押寄せ、念佛、眞言、禪、律等の八宗十宗の敵人を攻むるに、或は逃げ或は引退き、或は生捕られし者は我が弟子となる。或は攻め返し攻落しすれども、敵は多勢なり、法王の一人は無勢なり、今に至つて軍止む事なし。『法華折伏破權門理』の金言なれば、終に權教權門の輩を一人もなく攻落して、法王の家人となし、天下萬民諸乘一乘佛となりて、妙法獨り繁昌せん時、萬民一同に『南無妙法蓮華經』と唱へ奉らば、吹く風枝を鳴さず、雨壤を碎かず、代は義農の世となりて、今生には不祥の災難を拂ひ、長生の術を得、人法共に不老不死の理顯れん時を御覽ぜよ。『現世安穩』の證文疑ひあるべからざる者なり。」

【三】如說修行の人とは法華經のみを信じ持つ人を云ふ。

【榜示】しるし、標準のこと。

【三】問うて云く、「如說修行の行者とは、何やうに信ずるを申し候べきや。」答へて云く、「當世日本國中の諸人一同に如說修行の人と申し候は、諸乘一佛乘と開會しぬれば、何れの法も皆『法華經』にして勝劣淺深ある事なし。念佛を申すも、眞言を持つも、禪を修行するも、總じて一切の諸經、並びに佛菩薩の御名を持ちて唱ふるも皆『法華經』なりと信ずるが、如說修行の人とは云はれ候」也等云云。予が云く、然らず。所詮佛法を修行せんには人の言を用ゆべからず、只仰いで佛の金言をまもるべきなり。我等が本師釋迦如來は、初成道の始めより法華を說かんと思食ししかども、衆生の機根未熟なりしかば、先づ權教たる方便を四十餘年が間說きて、後に眞實たる『法華經』を說かせ給ひしなり。此經の序分、『無量義經』にして、權實の榜示を指して、方便眞實を分け給へり。所謂る「方便力を以て四十餘年には未だ眞實を顯さず」と是れなり。大莊嚴等の八萬の大士、施權、開權、廢權等の謂れを心得分け給ひて、領解して云く、「法華已前の歷劫修行等の諸經は、終不得成無上菩提」と申し切り給ひぬ。然して後正宗の法華に至つて、「世尊は法久しくして後、必ず當に眞實を說き給ふべし」と說き給ひしを始めとして、「二も無く亦三も無し。佛の方便の說を除く。」「正直に方便を捨て」乃至、「餘經の一偈をも受けず。」と禁め給へり。是より已後は「唯有一佛乘」の妙法のみ一切衆生を佛になす大法にて、『法華經』より外の諸經は一分の得益もあるまじきに、末法の今の學者、何れも如來の說教なれば、皆得道あるべしと思ひて、或は眞言、或は念佛、或は禪宗、三論、法相、俱舍、成實、律等の

【四】攝受、折伏二門を明し、今は折伏の時なるを說く。

諸宗諸經を取取に信ずるなり。是の如きの人をば「若し人信ぜずして此經を毀謗せば、則ち一切世間の佛種を斷ぜん」乃至「其人命終して阿鼻獄に入らん」と定め給へり。此等の經文の明鏡を本として一分も違へず「唯有一乘法」と信ずるを、如說修行の人とは佛定めさせ給へり。

【四】難じて云く「左樣に方便權教たる諸經諸佛を信ずるを、『法華經』と云はばこそ、只だ一經に限りて、經文の如く五種の修行を盡し、『安樂行品』の如く修行せんは如說修行の者とは云はれ候まじき賢、如何」答へて云く、「凡そ佛法を修行せん者は、攝折二門を知るべきなり。一切の經論、此の二を出でざる也。されば國中の諸宗の學者等、佛法を粗學すと雖も、時刻相應の道を知らず。四節四季取取に替れり。夏は熱く冬は冷たく、春は花咲き秋は果なる。春種子を下して、秋果を取るべし、秋種子を下して、春果を取らんに、豈に取らるべけんや。極寒の時は厚き衣は用なり。極熱の夏は何かせん。涼風は夏の用なり、冬は何かせん。佛法も亦復是の如し。小乘の流布して得益あるべき時もあり、權大乘の流布して得益あるべき時もあり、實教の流布して佛果を得べき時もあり。然るに、正像二千年は、小乘、權大乘の流布の時なり。末法の始めの五百年には、純圓一實の『法華經』のみ廣宣流布の時なり。此時は闘諍堅固、白法隱沒の時と定めて、權實雜亂の砌なり。敵ある時は刀杖弓箭を持つべし、敵なき時は弓箭兵杖何かせん。今の時は權教即ち實教の敵となるなり。一乘流布の時は、權教あつて敵と成りて紛らはしくば、實教より之を

【五】末法の法華經の行者は日蓮並に弟子檀那等なるを說く。

責むべし。是を攝折二門の中には、法華經の折伏と申す也。天台云く、『法華折伏破權門理』と良に故ある哉。然るに攝受たる四安樂の修行を今の時行ずるならば、冬種子を下して春果を求むる者にあらずや。鷄の曉に鳴くは用也、宵に鳴くは物怪也。權實雜亂の時、『法華經』の御敵を責めずして、山林に閉籠り、攝受を修行せんは、豈に『法華經』修行の時を失ふ物怪にあらずや。されば末法今の時、法華經の折伏の修行をば、誰か經文の如く行じ給へる。誰人にても坐せ、諸經は無得道、墮地獄の根源、『法華經』獨り成佛の法なりと、音も惜まず呼はり給ひて、諸宗の人法共に折伏して御覽ぜよ。三類の强敵來らん事疑ひなし。我等が本師釋迦如來は、在世八年が間折伏し給ひ、天台大師は三十餘年、傳教大師は二十餘年、今日蓮は二十餘年の間權理を破す。其間の大難數を知らず、佛の九横の難に及ぶか及ばざるかは知らず、恐らくは天台、傳教も『法華經』の故に日蓮が如く大難に値ひ給ひし事なし。彼は只だ惡口怨嫉ばかりなり。是は兩度の御勘氣、遠國に流罪せられ、龍口の頸の座、頭の疵等、其外惡口せられ、弟子等を流罪せられ、籠に入れられ、檀那の所領を取られ、御内を出さる。是等の大難には龍樹、天台、傳教も爭でか及び給ふべき。されば如說修行の法華經の行者には、三類の强敵打ち定んであるべしと知り給へ。

【五】されば釋尊御入滅の後二千餘年が間に、如說修行の行者は、釋尊、天台、傳教の三人はさて置き候ひぬ、末法に入ては日蓮並に弟子檀那等是れ也。我等を如說修行の者といはずば、釋尊、天台、傳教等の三人も如說修行の人なるべからず。提婆、瞿伽利、善

星、弘法、慈覺、智證、善導、法然、良觀房等は即ち法華經の行者と云はれ、釋尊、天台、傳敎、日蓮、並びに弟子檀那は念佛、眞言、禪、律等の行者なるべし。『法華經』は方便權敎と云はれ、念佛等の諸經は還って『法華經』となるべき歟。東は西となり、西は東となるとも、大地に持つ所の草木共に飛び上って天となり、天の日月星宿は共に落ち下て地となる例はありとも、爭でか此理あるべき。

【六八】哀れなる哉、今日本國の萬人、日蓮並びに弟子檀那等が三類の强敵に責められ大苦に値ふを見て、悦んで笑ふとも、今日は人の上、明日は身の上なれば、日蓮並びに弟子檀那共に霜露の命の日影を待つばかりぞかし。只今佛果に叶ひて、寂光の本土に居住して、自受法樂せん時、汝等が阿鼻大城の底に沈みて、大苦に値はん時、我等いかばかり無慚と思はんずらん、汝等何ばかり羨しく思はんずらん。一期を過ぐる事程なし、如何に强敵重なるとも、努努退く心なかれ、恐るる心なかれ。縦ひ頸をば鋸にて引き切り、胴をば稜鉾を以て突き、足には鉗を打ちて錐を以て揉むとも、命の通はん程は『南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經』と唱へて、唱へ死に死するならば、釋迦、多寶、十方の諸佛、靈山會上にして御契約なれば、須臾の程に飛び來て手を取り肩に引懸けて、靈山へ走り給はば、二聖、二天、十羅刹女は受持の者を擁護し、諸天善神は蓋を指し旛を上げて、我等を守護して慥かに寂光の寶刹へ送り給ふべき也。あら嬉しや、あら嬉しや。

文永十年癸酉五月日　　日蓮　華押

【六八】折伏逆化の大果報を法悦とす。

【自受法樂】自ら法悦を樂しむ。

【無慚】あはれの意。

【寶刹】寶土、淨土といふに同じ。

人人御中へ

此書御身を離さず、常に御覽有るべく候。

四信五品鈔

【一】青鳧一結送り給び候ひ畢んぬ。近來の學者一同の御存知に云く「在世滅後異なりと雖も、法華を修行するには必ず三學を具す、一を缺いても成せず」云云。予又年來此義を存ずる處、一代聖教は且らく之を置く、「法華經」に入つて此義を見聞するに、序、正の二段は且らく之を置く、流通の一段末法の明鏡、尤も依用と爲す可し。流通に於て二有り、一には所謂る迹門の中の『法師』等の五品、二には所謂る本門の中の『分別功德』の半品より、經を終るまでの十一品半なり。此の十一品半と五品と、合せて十六品半、此中に末法に入つて法華を修行する相貌分明なり。是れに尙ほ事行かざれば『普賢經』、『涅槃經』等を引き來りて之を糾明せんに、其の隱れ無きか。其中の『分別功德品』の「四信」と「五品」とは、法華を修行するの大要、在世滅後の龜鏡なる。荊谿の云く『一念信解とは卽ち是れ本門立行の初なり。』云云。

【二】其中に現在の四信の初の『一念信解』と、滅後の五品の第一の『初隨喜』と、此の二處は一同に百界千如、一念三千の寶篋、十方三世の諸佛の出門なり。天台、妙樂の二

【一】縮遺一五三八頁建治三年（五十六歲）の作。「末代法華の行者の位並に用心の事」の異稱あるが如く、廣く四信五品を明す中に於て特に初隨喜の位と一念信解とを力說したるもの。

【二】法華經の修行に關する經證を擧げ、分別功德品の四信と五品とが大要龜鏡なるを述ぶ。

【青鳧】錢の異稱。

【三學】戒、定、慧。

【二】現在の四信の初の一念信解と、滅後の五品の第一初隨喜とが肝要なるを說く。

【三】法華經を信ずれば種種なる惡友に迷はされ邪教に陥り易き故強き信念が肝要なることを說く。

の中間、此の二處の位を定むるに、三つの釋有り。所謂る或は相似十信、鐵輪の位、或は觀行五品の初品の位、未斷見思、或は名字即の位なり。『止觀』に其の不定を會して云はく、「佛意知り難し、機に赴きて異說す。此を借りて開解せば、何ぞ勞しく苦に諍はん。」等云云。予が意に云く、三釋の中、名字即は經文に叶ふか。滅後の五品の初の一品を說いて云く「而も毀呰せずして、隨喜の心を起す。」若し此文相似の五品に渡らば、「而も毀呰せず」の言は便ならざるか。就中『壽量品』の「失心」「不失心」等は、皆名字即なり。『涅槃經』に「若は信、若は不信、乃至熈連」とあり、之を勘へよ。又「一念信解」の四字の中の信の一字は、四信の初に居し、解の一字は後に奪はるる故なり。若し爾らば無解有信は、四信の初位に當る。經に第二信を說いて云く、「略言趣を解す。」と云云。『記』の九に云はく「唯初信を除く、解無きが故に。」『隨喜品』に至つて、上の初隨喜を、重ねて之を分明にす。五十人是れ皆展轉なり。第五十人に至つて二釋あり。一には謂く、「第五十人は初隨喜の內なり。」二には謂く、「第五十人は、初隨喜の外なり。」と云ふは名字即となり。「教彌實なれば、位彌下れり。」と云ふ釋は此意なり。四味三教より圓教は機を攝し、爾前の圓教より『法華經』は機を攝し、迹門より本門は機を盡すなり。「教彌實位彌下」の六字に、心を留めて案ずべし。

【三】問ふ、「末法に入つて、初心の行者必ず圓の三學を具するや否や。」答へて曰く、「此義大事たるが故に經文を勘へ出して貴邊に送付す。所謂る五品の初二三品には、佛正

【知識】指導者の意。

【四】末代初心の者は專ら南無妙法蓮華經と唱題修行すれば可なることを說く。

しく戒定の二法を制止して、一向に慧の一分に限る。慧又堪へざれば、信を以て慧に代ふ、信の一字を詮と爲す。不信は一闡提謗法の因、信は慧の因、名字即の位なり。天台云く、「若し相似の益は、隔生すれども忘れず。名字、觀行の益は、隔生すれば卽ち忘る。或は忘れざるも有り。忘るる者も若し知識に値へば、宿善還つて生ず。若し惡友に値へば、則ち本心を失ふ」云云。恐らくは中古の天台宗の慈覺、智證の兩大師も天台、傳敎の善知識に違背して、心、無畏、不空等の惡友に遷れり。末代の學者、慧心の「往生要集」の序に誑惑せられて、法華の本心を失ひ、彌陀の權門に入る。退大取小の者なり。過去を以て之を推するに、未來無數劫を經て、三惡道に堕せん。若し惡友に値へば、卽ち本心を失ふとは是れなり。問うて曰く「其義如何」答へて曰く「止觀」第六に云く、「前敎其位を高うする所以は、方便の說なればなり。圓敎の位下きは、眞實の說なればなり」「弘決」に云く「前敎と云ふより下は、正しく權實を判ず、敎彌實なれば位彌下く、敎彌權なれば位彌高き故に」又「記」の九に云く、「位を判ずることをいはば、觀境彌深く、實位彌下きを顯はす」云云。他宗は且らく之を置く、天台一門の學者等、何ぞ「實位彌下」の釋を閣いて、慧心僧都の筆を用ゐるや。畏、智、空と覺、證との事は、追つて之を習へ。大事なり、大事なり。一閻浮提第一の大事なり。心有らん人は、聞いて後に我を外め。」

【四】問うて云く、「末代初心の行者何者をか制止するや」答へて云く、「檀戒等の五度を制止して、一向に『南無妙法蓮華經』と稱せしむるを『一念信解初隨喜』の氣分と爲すな

【五度】六度の中般若波羅蜜即智慧を除く五を指す智慧は信を以て之に代へ一向信行を勧發す。

り。是れ則ち此經の本意なり。』疑つて云く、「此義未だ見聞せず、心を驚かし耳を逆はす。明かに證文を引いて、請ふ愚に之を示せ。」答へて曰く、「經に云く、『我が爲に復塔寺を起て、及び僧坊を作り、四事を以て衆僧を供養することを須ゐざれ。』此の經文明かに初心の行者に、檀戒等の五度を制止する文なり。」疑つて云く、「汝が引く所の經文は、但だ寺塔と衆僧と計りを制止して、未だ諸の戒等に及ばざるか。」答へて曰く、「初を擧げて後を略す。」問うて曰く、「何を以て之を知らん。」答へて云く、「次下の第四品の經文に云く、『況や復人有つて、能く是の經を持ち、兼て布施、持戒等を行ぜんをや。』云云。』經文分明に、初二三品の人には、檀、戒等の五度を制止し、第四品に至つて、初めて之を許す。後に許すを以て知んぬ、初に制することを。」問うて云く、「經文一往相似たり、又疏釋有りや。」答へて曰く、「汝が尋ぬる所の釋とは、月氏四依の論か、將又漢土日本の人師の書か。本を捨てて末を尋ね、體を離れて影を求め、源を忘れて流を貴ぶ。分明なる經文を閣いて、論釋を請ひ尋ぬ。本經に相違する末釋有らば、本經を捨てて末釋に付く可きか。然りと雖も好みに隨つて之を示さん。『文句』の九に云く、『初心は緣に紛動せられて、正業を修するを妨げんことを畏る。直ちに專ら此經を持つは、即ち上供養なり。事を廢して理を存するは、所益弘多なり。』此釋に緣と云ふは五度なり。初心の者が兼て五度を行ずれば、正業の信を妨ぐるなり。譬へば小船に財を積んで海を渡るに、財と倶に沒するが如し。『直ちに專ら此經を持つ』といふは、一經に亙るに非ず。專ら題目を持ちて、餘文を雜へず。尚ほ一經の

【五】南無妙法蓮華經は法華經一部の精神眞髓骨子なることを說く。

【三會八年】三會とは法華經を說くに初後の二會は靈鷲山上、中の一會は虛空に於てせ

讀誦だも許さず、何に況んや五度をや。『事を廢して理を存す』と云ふは戒等の事を捨てて題目の理を專にするなり云云。『所益弘多』とは、初心の者が諸行と題目と竝び行ずれば、所益全く失ふと云云。『文句』に云く、『問ふ若し爾らば經を持つは、卽ち是れ第一義の戒なり。何が故ぞ復能く戒を持つ者と言ふや。答ふ、此は初品を明す。後を以て難を作すべからず。』等云云。當世の學者此釋を見ずして、末代の愚人を以て南岳、天台の二聖に同ず。誤の中の誤なり。妙樂重ねて之を明して云く、『問ふ若し爾らば、若し事の塔及び色身の骨を須ゐずば、亦事の戒を持つを須ゐざるべし。乃至、事の僧を供養することを須ゐざるや。』等云云。傳教大師の云く、『一百五十戒忽ちに捨て畢んぬ。』唯に教大師一人に限るに非ず、鑑眞の弟子如寶、道忠、竝びに七大寺等、一同に捨て畢んぬ。又教大師未來を誡めて云く、『末法の中に持戒の者有らば、是れ怪異なり。市に虎有るが如し。此れ誰か信ず可き。』云云。」

【五】問ふ、「汝何ぞ一念三千の觀門を勸進せずして、唯題目許りを唱へしむるや。」答へて曰く、「日本の二字に六十六國の人畜財を攝盡して、一つも殘さず、月氏の兩字に豈に七十箇國無からんや。妙樂の云く、『略して經題を擧ぐるに、玄に一部を收む。』又云く、『略して界如を擧ぐるに、具に三千を攝す。』『文珠師利菩薩、阿難尊者、三會八年の間の佛語、之を擧げて『妙法蓮華經』と題し、次下に領解して云く、『如是我聞』と云云。」

【六】問ふ、「其義を知らざる人、ただ『南無妙法蓮華經』と唱へて、解義の功德を具す

り、之を二處三會と言ふ。八年とは法華經を說き給へる間。

【六】題目が法華經一部の精神の要約なりと言ふ義理は捕へずとも一心に唱題すれば功德あることを說く。

【七】重ねて妙法五字は法華一部の妙旨なることを說く。

【八】法華經を信奉する日蓮の弟子檀那は、義理を理解せずとも但だ南無妙法蓮華經と唱ふれば功德甚だ多く、位高し、之に反し、それに害を加へ、或は誹謗輕蔑する者は直ちに佛罰を蒙ることを說く。

るや不や。」答ふ「小兒乳を含むに、其味を知らざれども、自然に身を益す。耆婆が妙藥、誰か辨へて之を服せん。水心無けれども火を消し、火物を燒く、豈に覺あらんや。龍樹、天台皆此意なり。重ねて示すべし。」

【七】問ふ「何が故に題目に萬法を含むや。」答ふ「章安の云く、『蓋し序王とは經の玄意を敍す。玄意は文心を述す』文心は迹本に過ぎたるは莫し。妙樂の云く、『法華の文心を出して、諸教の所以を辨ず』云云。濁水心無けれども、月を得て自ら清めり。草木雨を得て豈に覺有つて花さくならんや。『妙法蓮華經』の五字は經文に非ず、其義に非ず、唯一部の意のみ、初心の行者其心を知らざれども、而も之を行ずるに、自然に意に當るなり。」

【八】問ふ「汝が弟子一分の解無くして、但だ一口に『南無妙法蓮華經』と稱ふる其位如何。」答ふ「此人は但だ四味、三教の極位、並びに爾前の圓人に超過するのみに非ず、將た又眞言等の諸宗の元祖、畏、嚴、恩、藏、宣、磨、道等に勝出すること、百千萬億倍なり。請ふ國中の諸人、我が末弟等を輕んずること勿れ。進んで過去を尋ぬれば、八十萬億劫に供養せし大菩薩なり、豈に熙連一恒の者に非ずや。退いて未來を論ずれば、八十年の布施に超過して、五十の功德を備ふ可し。天子の襁褓に纏はれ、大龍の始めて生ぜるが如し。蔑如すること勿れ、蔑如すること勿れ。妙樂の云く、『若し惱亂する者は、頭七分に破れ、供養すること有らん者は、福十號に過ぐ。』優陀延王は賓頭盧尊者を蔑如して、七年の

【頭破七分】陀羅尼品の作文。法華經の行者を惱亂する者は鬼子母神が其頭を破るべしとなり。

【福過十號】妙樂「文句記」の斷章。法華經を供養する者は十號具足せる佛世尊を供養するに過たる福德なりとの意。

【九】皇紀一二一二年日本に佛教傳來してより幾多の宗派分立して混沌たり、傳教大師出世して之を統一せしことを說く。

【一〇】弘法大師及び傳教大師の弟子の或者が誤解して法華經を蔑視し、ために日本國守護の善神が國を去りて國亂ることを明す。

【王法】國家の政治を言ふ。

内に身を喪失し、相州は日蓮を流罪して、百日の内に兵亂に遇へり。經に云く、『若し復是の經典を受持する者を見て、其の過惡を出さん。若は實にもあれ、若は不實にもあれ、此人現世の白癩の病を得ん。乃至、諸の惡重病あらん。』又云く、『當に世世に眼無かるべし。』等云云。明心と圓智とは現に白癩を得、道阿彌は無眼の者と成りぬ。國中の疫病は『頭破七分』なり。罰を以て徳を推するに、我が門人等は『福過十號』疑ひ無き者なり。

【九】夫れ人王三十代欽明の御宇に、始めて佛法渡りし以來、桓武の御宇に至るまで、二十代二百餘年の間、六宗有りと雖も、佛法未だ定まらず。爰に延暦年中に一の聖人有つて、此國に出現せり。所謂る傳教大師是れなり。此人先より弘通せる六宗を糾明して、八寺を弟子と爲し、終に叡山を建てて本寺と爲し、諸寺を取りて末寺と爲す。日本の佛法唯一門なり。王法も二に非ず。法定まり國清めり。其效を論ぜば、源已今當の文に出たり。

【一〇】其後弘法、慈覺、智證の三大師、事を漢土に寄せて、大日の三部は『法華經』に勝ると謂ひ、剩さ、教大師の制する所の眞言宗の宗の一字之を副へて八宗と云云。三人一同に勅宣を申し下して、日本に弘通し、寺毎に『法華經』の義を破る。是れ偏へに已今當の文を破らんとして、釋迦、多寶、十方の諸佛の大怨敵と成りぬ。然して後佛法漸く廢れ、王法次第に衰へ、天照大神、正八幡等の久住の守護神は力を失ひ、梵、帝、四天は國を去つて、已に亡國と成らんとす。情有らん人、誰か傷み嘆かざらん。所詮三大師の邪法の興る所は、所謂る東寺と叡山の總持院と園城寺との三所なり。禁止せずんば國土の滅亡と、

衆生の惡道と、疑ひなき者か。予ほぼ此旨を勘へ國主に示すと雖も、敢て叙用なし。悲しむべし、悲しむべし。」

〔〕縮遺七四二頁、文永九年(五十一歲)の作。佐渡にて門下となりし最蓮房に與へて法華經の正信正行は佛心佛行相續の血脈にして生死の事を決すべき要道ここにありと信行上大切なる法門を示したる書。

【一】釋尊と法華經と一切衆生は本來無差別なりと悟つて唱題修行することが肝心なりと說く。

生死一大事血脈鈔

【一】御狀委細披見せしめ候ひ畢ぬ。夫れ生死一大事の血脈とは、所謂『妙法蓮華經』是れなり。其故は釋迦、多寶の二佛寶塔の中にして、上行菩薩に讓り給ひて、此の『妙法蓮華經』の五字、過去遠遠劫より已來寸時も、離れざる血脈なり。妙は死、法は生なり。此の生死の二法が十界の當體なり。又此を『當體蓮華』とも云ふなり。天台云く、『當に知るべし、依正の因果は悉く是れ蓮華の法なり。』云云 此釋に依正と云ふは生死なり。生死之れ有れば、因果又蓮華の法なる事明けし。傳教大師云く、『生死の二法は一心の妙用、有無の二道は本覺の眞德。』と。天地、陰陽、日月五星、地獄乃至佛果、生死の二法に非ずと云ふことなし。是の如く生死も唯『妙法蓮華經』の生死なり。天台の『止觀』に云く、『起は是れ法性の起、滅は是れ法性の滅。』云云。釋迦、多寶の二佛も生死の二法なり。然れば久遠實成の『釋尊』と、皆成佛道の『法華經』と、我等『衆生』との三つ全く差別無く、『妙法蓮華經』と解りて唱へ奉る處を、生死一大事の血脈とは云ふなり。」此事但だ日蓮が弟子檀那等の肝要なり。『法華經』を持つとは是れなり。

【二】法華不信の者は死後の成佛を保證すること能はざれども、法華經を信受する者は成佛疑なきを說く。

【三】異體同心の修行により皆歸妙法の時に理想を實現することが理想なりと說く。

【四】法華經の行者は如何なる迫害にも信仰を破せられざるを尊ぶ。

【二】所詮臨終只今にありと解いて、信心を致して『南無妙法蓮華經』と唱ふる人を、『是の人命終せば、千佛手を授けて、恐怖せず、惡趣に墮ちざらしめ給ふことを爲す。』と說かれて候。悅ばしい哉、一佛二佛に非ず、百佛二百佛に非ず、千佛まで來迎し手を取り給はん事、歡喜の感淚押へ難し。法華不信の者は『其人命終せば阿鼻獄に入らん』と說かれたれば、定めて獄卒迎へに來つて、手をや取り候はんずらん、淺まし、淺まし。十王は裁斷し、俱生神は呵責せん歟。今日蓮が弟子檀那等、『南無妙法蓮華經』と唱へん程の者に、千佛の手を授け給はん事、譬へば蓏夕顏の手を出すが如くと思食せ。過去に『法華經』の結緣强盛なる故に、現在に此經を受持し、未來に佛果を成就せん事疑ある可からず。過去の生死、現在の生死、未來の生死、三世の生死に『法華經』を離れ切らざるを、法華の血脈相承とは云ふなり。謗法不信の者は『卽斷一切世間佛種』とて、佛に成るべき種子を斷絕するが故に、生死一大事の血脈之れ無き也。

【三】總じて日蓮が弟子檀那等、自他彼此の心なく、水魚の思ひを成して、異體同心にして『南無妙法蓮華經』と唱へ奉る處を、生死一大事の血脈とは云ふなり。然かも今日蓮が弘通する處の所詮是れなり。若し然らば廣宣流布の大願も叶ふ可きもの也。剩へ日蓮が弟子の中に同體異心の者之れ有れば、例せば城者として城を破るが如し。

【四】日本國の一切衆生に『法華經』を信ぜしめて、佛に成る血脈を繼がしめんとするに、還つて日蓮を種種の難に合はせ、結句此島まで流罪す。而るに貴邊、日蓮に隨順し又

【五】強盛の信念を以て唱題修行すれば、臨終は必ず平安にして其が法華經を受持する功徳なることを述ぶ。

難に値ひ給ふ事、心中思ひ遣られて痛ましく候。金は大火にも燒けず、大水にも漂はず朽ちず、鐵は水火共に堪へず。賢人は金の如く、愚人は鐵の如し。貴邊豈に眞金に非ずや。「法華經」の金を持つ故か。經に云く、「衆山の中に須彌山爲れ第一、此の「法華經」も亦復是の如し。」又云く、「火も燒くこと能はず、水も漂はすこと能はず。」云云。過去の宿縁追ひ來たりて、今度日蓮が弟子と成り給ふか、釋迦多寶こそ御存知候らめ。「在在諸佛土、常に師と倶に生ず。」と、よも虚事候はじ。殊に生死一大事の血脈の御尋ね、先代未聞の事なり、此文に委悉なり、能く能く心得させ給へ。「南無妙法蓮華經」釋迦、多寶、上行菩薩、血脈相承、修行し給へ。

【五】火は燒照すを以て行と爲し、水は垢穢を淨むるを以て行と爲し、風は塵埃を拂ふを以て行と爲し、又人畜草木の爲に魂となるを以て行と爲す。大地は草木を生ずるを以て行と爲し、天は潤すを以て行と爲す。「妙法蓮華經」の五字も又是の如し、本化地涌の利益是れなり。上行菩薩、末法今の時、此法門を弘めんが爲に御出現之れ有る可きの由、經文には見え候へども如何候やらん。上行菩薩出現すとやせん、出現せずとやせん。日蓮先づ粗弘め候なり。相構へ相構へて、強盛の大信力を出して『南無妙法蓮華經、臨終正念』と祈念し給へ。生死一大事の血脈此より外に全く求むることなかれ。煩惱即菩提、生死即涅槃とは是れなり。信心の血脈なくんば、『法華經』を持つとも無益なり。委細の旨は又又申す可く候。恐恐謹言。

【◇】縮遺八二七頁、文永九年（五十一歳）の作。佐渡の配所より鎌倉在住の信心の弟子檀那等に信を固め、疑惑を除いて奮起すべく、自らの覺悟、安心、法悦を述べられたる御書なり。

【一】世間のはかなき事に捨つる命を佛法にささげて佛となるべきを示す。

文永九年壬申三月二十日
最蓮房上人御返事

佐渡御書

桑門　日蓮　花押

此文は富木殿の方、三郎左衛門殿、大藏塔の辻十郎入道殿等、棧敷の尼御前、一一に見させ給ふべき人人の御中へなり。京鎌倉に軍に死せる人人を書きつけて給ひ候へ。「外典鈔」、「文句の二」、「玄の四の本末」、「勘文」、「宣旨」等此へ（これへ）の人人持ちて渡らせ給へ。

【一】世間に人の恐るる者は、炎の中と劔の影と、此身の死するとなるべし。牛馬猶身を惜む、況や人身をや。癩人猶命を惜む、何に況や壯人をや。佛說いて云く「七寶を以て三千大千世界に滿つるとも、手の小指を以て佛經に供養せんには如かじ」取意。雪山童子の身を投げし、樂法梵志が身の皮を剝ぎし、身命に過ぎたる惜き者のなければ、是を布施として佛法を習へば、必ず佛となる。身命を捨つる人、他の寶を佛法に惜むべしや。又財寶を佛法に惜まんもの、勝る身命を捨つべきや。世間の法にも、重恩をば命を捨て報ずるなるべし。又主君の爲に命を捨つる人は、少きやうなれども其數多し。男子は恥に命を捨て、女人は男の爲に命を捨つ。魚は命を惜む故に、池に栖むに、池の淺き事を歎きて、

【一】佛道修行は必ず時に依るべきを、古例先聖の蹟を擧げて、當今の行者の覺悟を明す。

【薩埵】釋尊の菩薩行の時の前生の名、王子山林に遊ぶ時に七子を產める虎飢ゑて子を養ひ得ざるを愍み、わが身を虎に與へしと。

【道安】周の人、武帝佛道二教を禁ず、論を造つて是非を論じ死に臨みても門下を勵ます。

【慧遠】隋の代の僧、周の武王が經典無用を唱へしを反駁せし人。

池の底に穴をほりて栖む。然れども餌に欺されて釣を呑む。鳥は木に栖む。木の低き事を恃みて、木の上枝に栖む。然れども餌に欺されて網に懸る。人も又是の如し。世間の淺き事には身命を失へども、大事の佛法なんどには捨つる事難し。故に佛になる人もなかるべし。

【二】佛法は攝受、折伏時に依るべし、譬へば世間の文武二道の如し。されば昔の大聖は、時によりて法を行ず。雪山童子、薩埵王子は、身を布施とせば法を教へん。菩薩の行となるべしと責めしかば、身を捨つ。肉を欲しからざる時、身を捨つべきや。紙なからん世には身の皮を紙とし、筆なからん時は骨を筆とすべし。破戒無戒を毀り、持戒正法を用ゐん世には、諸戒を堅く持つべし。儒教道教を以て釋教を制止せん日は、道安法師、慧遠法師、法道三藏等の如く、王と論じて命を輕うすべし。釋教の中に小乘、大乘、權經、實經、雜亂して明珠と瓦礫と、牛驢の二乳を辨へざる時は、天台大師、傳教大師等の如く、大小、權實、顯密を强盛に分別すべし。畜生の心は弱きを威し、强きを恐る。當世の學者等は畜生の如し、智者の弱きを侮り、王法の邪を恐る。諛臣と申すは是れなり。强敵を伏して、始めて力士を知る。惡王の王法を破るに、邪法の僧等が方人を爲して、智者を失はん時は、師子王の如くなる心を持てる者、必ず佛になるべし。例せば日蓮が如し。是れ傲れるにはあらず、正法を惜む心の强盛なるべし。傲る者は必ず强敵に値うて、恐るる心出來するなり。例せば修羅の傲り帝釋に責められて、無熱池の蓮の中に、小身と成つて隱

【三】現證を擧げて、後生の疑をなすべからざるを明す。
【寶治】寶治元年六月北條時賴三浦泰村を討滅す。
【華報】實の果報を受くるに先ちてそれに似たる報をいふ。
【四】日蓮の留難は釋尊の上なるを述べ、難に値ふを嘲笑せる者を憐れむ。

れしが如し。正法は一字一句なれども、時機に叶ひぬれば必ず得道なるべし。千經萬論を習學すれども、相機相違しぬれば叶ふべからず。

【三】寶治の合戰已に二十六年、今年三月十一日十七日又合戰あり。外道惡人は如來の正法を破り難し。佛弟子等必ず佛法を破るべし。獅子身中の蟲の獅子を食む等云云。大果報の人をば、他の敵破り難し、親しみより破るべし、『藥師經』に云く、『自界叛逆難』と、是れなり。『仁王經』に云く、『聖人去る時、七難必ず起らん』云云。『金光明經』に云く、『三十三天各瞋恨を生ずるは、其の國王惡を縱にし治せざるに由る。』等云云。日蓮は聖人にあらざれども、『法華經』を說の如く受持すれば聖人の如し。又世間の作法兼て知るによつて注し置くこと、是れ違ふべからず。現世に云ひおく言の違はざらんをもて後生の疑をなすべからず。日蓮は此の關東の御一門の棟梁なり、日月なり、龜鏡なり、眼目なり。日蓮捨て去る時七難必ず起るべしと、去ぬる年九月十二日、御勘氣を蒙りし時、大音聲を放ちて呼はりし事是れなるべし。纔に六十日、乃至百五十日に、此事起るか。是は華報なるべし。實果の成ぜん時、如何歎かはしからんずらん。

【四】世間の愚者の思ひに云はく、『日蓮智者ならば、何ぞ王難に値ふや』なんど申す。日蓮兼ての存知なり。父母を打つ子あり、阿闍世王なり。佛阿羅漢を殺し血を出す者あり、提婆達多是れなり。六臣これを讚め、瞿伽利等これを悅ぶ。日蓮當世には此の御一門の父母なり、佛阿羅漢の如し。然るを流罪して、主從共に悅びぬ、あはれに無慚なる者なり。

謗法の法師等が自ら禍の既に顯るるを歎きし故に、斯くなるを一旦は悦ぶなるべし。後には彼等が歎き、日蓮が一門に劣るべからず。例せば泰衡が弟を討ち、九郎判官を討ちて悦びしが如し、既に一門を亡ぼす大鬼の此國に入るなるべし。『法華經』に云く、『惡鬼入其身』と是れなり。

【五】日蓮も又斯く責めらるるも先業なきにあらず。『不輕品』に云く、『其罪畢已』等云云。不輕菩薩の無量の謗法の者に罵詈打擲せられしも先業の所感なるべし。何に況や日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ、旃陀羅が家より出でたり。心こそ少し『法華經』を信じたる樣なれども身は人身に似て畜身なり。魚鳥を混丸して赤白二渧とせり。其の中に識神を宿す。濁水に月の映れるが如し。糞嚢に金を包めるなるべし。心は『法華經』を信ずる故に、梵天、帝釋をも猶恐れと思はず。身は畜生の身なり。色心不相應の故に、愚者の侮る道理なり。心も又身に對すればこそ月金にも譬ふれ。又過去の謗法を案ずるに誰か知る、勝意比丘が魂にもや、大天が神にもや、不輕輕毀の流類なるか、失心の餘殘なるか、五千上慢の眷屬なるか、大通第三の餘流にもやあるらん。宿業料り難し。鐵は炎ひ打てば劍となる、賢聖は罵詈して試るなるべし。我今度の御勘氣は世間の失一分もなし。偏に先業の重罪を今生に消して、後生の三惡を脫れんずるなるべし。

【六】『般泥洹經』に云く、『當來の世、假りに袈裟を被て、我法の中に於て出家學道し、懶惰懈怠にして此等の方等契經を誹謗すること有らん。當に知るべし、此等は皆是れ今日

【泰衡】藤原秀衡の子、賴朝に迫られて弟、泉三郎忠衡を討ち、九郎判官義經を殺す。

【五】日蓮の留難の所以を說き、現世の色心不相應と、過去の謗罪とに依ることを明す。

【先業】前世の業。

【旃陀羅】梵語音譯、屠者。ここにては漁師なり。

【勝意】過去の師子音佛の世、喜根菩薩を謗じて墮獄す。

【大天】佛滅後百年印度末土羅生、父母を殺せる罪を悔て歸佛せるも、自ら羅漢を得たりと僭し、邪見に陷る。

【不輕輕毀】不輕菩薩を罵り輕んじ杖を加へし者。

【失心の餘殘】壽

量品の毒を服んで心を失へるものの殘れるもの。
【五千上慢】方便品、五千の四衆増上慢のために座を去る。
【大通第三】大通佛の教化をうけて、今なほ佛種を發せざる機。
【七】謗法者の相狀を示して自ら過去の罪科を歎く。
【六師外道】印度の外道の六學派。

の諸の異道の華なり」等云云。此の經文を見ん者、自身を恥づべし。今我等が出家して袈裟をかけ、懶惰懈怠なるは、是れ佛在世の六師外道が弟子なりと、佛記し給へり。法然が一類、大日が一類、念佛宗、禪宗と號して、『法華經』に「捨閉閣抛」の四字を副へて制止を加へて、權經の彌陀稱名ばかりを取立て、教外別傳と號して、『法華經』を月を指す指、只文字を筭ふるなんど笑ふ者は、六師が末流の佛教の中に出來せるなるべし。憂へなるかなや『涅槃經』に、佛光明を放つて地の下一百三十六地獄を照し給ふに、罪人一人もなかりけり『法華經』の「壽量品」にして、皆成佛せる故なり。但し一闡提人と申して、謗法の者ばかり、地獄守に留められたりき。彼等が生み廣げて、今の世の日本國の一切衆生となれるなり。日蓮も過去の種子、已に謗法の者なれば、今生に念佛者にて數年が間、『法華經』の行者を見ては、「未有一人得者」、「千中無一」等と笑ひしなり。今謗法の醉さめて見れば、酒に醉へる者父母を打ちて悦びしが、醉覺めて後歎きしが如し。歎けども甲斐なし、此罪消えがたし。何に況んや過去の謗法の、心中に染みけんをや。經文を見候へば、烏の黑きも鷺の白きも、先業の强く染みけるなるべし。外道は知らずして自然といひ、今の人は謗法を顯して扶けんとすれば、我が身に謗法なき由を强ちに陳答して、『法華經』の門を閉ぢよと法然が書けるを、兎角爭ひなんどす。念佛者はさて置きぬ、天台、眞言等の人人、彼が方人を强ちにするなり。今年正月十六日十七日に、佐渡の國の念佛者等數百人、印性房と申すは念佛者の棟梁なり」日蓮が許に來て云く、「法然上人は『法華經』を

【七】經を引いて、自らの身を省み、八難の因全く謗法にあることを明め、今諸難に値ふは過去の謗業を消すること、及び行者を迫害する者の罪狀を不輕品に合して說く

提よと書かせ給ふにはあらず、一切衆生に念佛を申させ給ひて候、此の大功徳に御往生疑ひなしと書付けて候を、山僧等の流されたる、並に寺法師等、善哉、善哉とほめ候を、如何之を破し給ふと申しき。鎌倉の念佛者よりも遥にはかなく候ぞ、無慚とも申すばかりなし。又此日蓮が先生、今生、先日の謗法おそろし。斯りける者の弟子と成りけん、斯る國に生れけん、如何になるべしとも覺えず

【七】『般泥洹經』に云く、『善男子、過去に無量の諸罪、種種の惡業を作らんに、是の諸の罪報、或は輕易せられ、或は形狀醜陋、衣服足らず、飲食麁疎、財を求めて利あらず、貧賤の家及び邪見の家に生れ、或は王難に遭ふ』等云云。又云く、『及び餘の種種の人間の苦報、現世に輕く受くるは斯れ護法の功徳力に由る故』等云云。此經文は日蓮が身なくば、殆ど佛の妄語となりぬべし。一には或被輕易、二には或形狀醜陋、三には衣服不足、四には飲食麁疎、五には求財不利、六には生貧賤家、七には及邪見家、八には或遭王難等云云。此八句は只日蓮一人が身に感ぜり。高山に登る者は必ず下り、我人を輕しめば還つて我が身人に輕易せられん。形狀端嚴を謗れば、醜陋の報ひを得、人の衣服飲食を奪へば必ず餓鬼となる。持戒尊貴を笑へば、貧賤の家に生ず。正法の家を謗れば、邪見の家に生ず。善戒を笑へば、國土の民となり王難に値ふ。是は常の因果の定まれる法なり。日蓮は此の因果にはあらず、『法華經』の行者を過去に輕易せし故に、『法華經』は月と月とを並べ、星と星とを連ね、華山に華山を重ね、玉と玉とを連ねたるが如くなる御經を、或は上

【如何なる利錢云云】如何に多く地頭に金を借すも、平生は意に介せざるが如くなれども、地頭のその地を去らんとするときは我も我もとみな貸金をとりに來るが如し。

【跋陀婆羅】不輕菩薩を杖もて打ちける人。

【三五の塵點】三千塵點劫と五百塵點劫の如き限量もなき長年長劫。

【八】日蓮が深大の折伏の行を推測し非難する者の罪科を説きたることを警む。

げ或は下して嘲弄せし故に、此の八種の大難に値へる也、此の八種は盡未來際が間、一つづつこそ現ずべかりしを、日蓮強く『法華經』の敵を責むるによつて一時に聚り起れる也。譬へば民の郷郡なんどにあるには、如何なる利錢を地頭等に償せたれども、痛く責めず、年年に延べ行く。其所を出づる時に、競ひ起るが如し。「斯れ護法の功德力に由る故」等は是れ也。『法華經』には、『諸の無智の人有り、惡口罵詈等し、刀杖瓦石を加ふ。乃至、國王、大臣、婆羅門、居士に向つて、乃至、數數擯出せらる』等云云。獄卒が罪人を責めずば、地獄を出づる者難かりなん。當世の王臣なくば、日蓮が過去謗法の重罪消し難し。日蓮は過去の不輕の如く、當世の人人は彼の輕毀の四衆の如し、人は替れども、因は是れ一なり。父母を殺せる人異れども、同じ無間地獄に墮つ。如何なれば不輕の因を行じて、日蓮一人釋迦佛とならざるべき。又彼の諸人は跋陀婆羅等と云はれざらんや。但だ千劫阿鼻地獄にて責められん事こそ、不便には覺ゆれども、如何とすべき。彼の輕毀の衆は、始めは謗ぜしかども、後には信伏隨從せり。罪多分は滅して、少分ありしが、父母千人殺したる程の大苦を受く。當世の諸人は翻る心なし、『譬喩品』の如くば無數劫をや經んずらん。三五の塵點をや送らんずらん。是はさて置きぬ。

【八】 日蓮を信ずるやうなりし者どもが、日蓮が斯くなれば疑を起して『法華經』を捨つるのみならず。却りて日蓮を教訓して、我賢しと思はん僻人等が、念佛者よりも久しく阿鼻地獄にあらん事、不便とも申す計りなし。修羅が、佛は十八界、我は十九界と云ひ、外

道が云く、佛は一究竟道、我は九十五究竟道と云ひしが如く、「日蓮御房は師匠にては在せども餘りに剛し、我等は柔かに『法華經』を弘むべし」と云はんは、螢火が日月を笑ひ、蟻塚が華山を下し、井江が河海を侮り、烏鵲が鸞鳳を笑ふなるべし、笑ふなるべし。南無妙法蓮華經。

文永九年壬申三月二十日　日蓮　花押

日蓮弟子檀那等御中

〔縮遺一〇二四頁文永十一年（五十三歳）の作。佐渡の謫地より弟子檀那中へ賜はりし御書。良観の請により武藏前司宜時私の御教書を下して迫害するに値ひ、況滅度後の大難我にあり、予言せられたる學者、三大謗法の宗主なるを宣べ併せて不惜身命の信念を激勵す。【二】法華行者値難の歴史的事實を擧ぐ。

法華行者値難事

【一】『法華經』の第四に云く、『如來の現在すら猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや。』等云云。同じく第五に云く、『一切世間怨多くして信じ難し。』等云云。『涅槃經』の三十八に云く、『爾の時に外道に無量の人あり。（中略）心に瞋恚を生ず。』等云云。又云く、『爾の時に多く無量の外道あり、和合して共に摩訶陀の王阿闍世の前に往きぬ。（中略）今唯一の大惡人あり瞿曇沙門なり。（中略）王未だ檢校せず我等甚だ畏る。一切世間の惡人利養の爲の故に、其の所に往集して眷屬となる。乃至迦葉、舍利弗、目犍連』等云云。『如來現在猶多怨嫉』の心是れなり。得一大德天台智者大師を罵詈して曰く、『智公汝は是れ誰が弟子ぞ、三寸に足らざる舌根を以て覆面舌の所説の教時を謗ず。』又云く、『豈是れ顛狂の人にあらずや』等云云。南都七大寺の高德等、護命僧都、景信律師等三百餘人傳敎大師を罵詈して曰く、『西國に鬼

【禿頭沙門】破戒の僧。

【二】導師の曲正を辯明す。

【三】末法に於ける佛說の如き行者は誰なるかと大疑を起す。

【四】法華經の行者として佛(印)天台(支)傳教(日)日蓮(日)の三國四師を擧げ佛記に符合する末法の眞の行者は日蓮我身是なるを悦ぶ。

【炳誡】嚴誡に同じ。

辨婆羅門あり、東土に巧言を吐く禿頭沙門あり。此れ乃ち物類冥召して世間を誑惑す。』等云云。『秀句』に云く『淺きは易く深きは難しとは釋迦の所判なり。淺きを去つて深きに就くは丈夫の心なり。天台大師は釋迦に信順して法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す。』云云。

【二】夫れ在世と滅後と正像二千年の間に『法華經』の行者唯三人あり、所謂佛と天台、傳教となり。眞言宗の善無畏、不空等、華嚴宗の杜順、智儼等、三論、法相等の人師等は實經の文を會して權の義に順ぜしむる人人なり。龍樹、天親等の論師は內に鑒みて外に發せざる論師なり。經の如く宣傳する事、正法の四依も天台、傳教には如かず。

【三】而るに佛記の如くんば『末法に入つて『法華經』の行者ある可し、其の時の大難在世に超過せん』と云云。佛に九橫の大難あり、所謂孫陀梨の謗と、金鏘と、馬麥と、琉璃の釋を殺すと、乞食空鉢と、旃遮女の謗と、調達が山を推すと、寒風に衣を索むると等なり。其の上一切の外道の讒奏、上に引くが如し。記文の如くんば天台、傳教も佛記には及ばず。之れを以て是を案ずるに末法の始めに佛說の如き行者世に出現せん歟。

【四】而るに文永十年十二月七日武藏の前司殿より佐渡の國へ下だす狀に云く、「自判之れあり。佐渡の國の流人の僧日蓮弟子等を引率して惡行を巧むの由其の聞えあり。所行の企て甚だ以て奇怪なり。今より以後彼の僧に相隨はん輩に於ては炳誡を加へしむべし。猶以て違犯せしめば交名を注進せらるべきの由の所に候なり。仍て執達件の如し。文永

十年十二月七日、依智六郎左衛門尉殿、沙門観恵上る。」等云云。此の状に云く、「一凶行を巧む。」等云云。外道が如く、『羅什は大悪人なり』」等云云。又九横の難一一に之れあり。所謂調達殺釈と乞食空鉢と寒風索衣とは仏世に超過せる大難なり。恐らくは天台、伝教も未だ此の難には値ひ給はず。当に知るべし、三人に日蓮を入れて四人となして『法華経』の行者は末法にあるか。喜ばしい哉、『況滅度後』の記文に当れり。悲しい哉、国中の諸人阿鼻獄に入らんことを。茂きを厭うて之れを子細に記さず。心を以て之れを推せよ。

文永十一年甲戌正月十四日　　日蓮　花押

一切の諸人之れを見聞して志あらん人人は互に之れを語れ。

追て申す。龍樹、天親は共に千部の論師なり。但し権大乗を申べて『法華経』をば心に存じて口に吐き給はず。此れに口伝あり天台、伝教は之れを宣べて本門の本尊と四菩薩と戒壇と『南無妙法蓮華経』の五字と、之れを残し給ふ。所詮一には仏授与し給はざるが故に、二には時機未熟の故なり。今既に時来れり四菩薩出現し給はん歟。日蓮此の事先づ之れを知りぬ。西王母の先相には青鳥、客人の来相には鳱鵲是れなり。各各我が弟子たらん者は深く此の由を存ぜよ。設ひ身命に及ぶとも退転することなかれ。富木三郎左衛門尉、河野辺等、大和阿闍梨等、殿原御房達各各互に読み聞けまいらせさせ給へ。かかる濁世には互に常に言合はせて間もなく後世願はせ給ひ候へ。

河野辺殿等中

【龍樹、天親は】龍天二師は内鑒冷然にして法華経を説かず。天伝二師は法華経迹門を説きて本門の大事を知れども弘めず。時機未到の故なり。

【西王母】「書文類聚後書」に出づ。西王母は支那伝説の神女。東方朔と共に長寿を以て聞ゆ。

【鳱鵲】客来の前兆と考へられし支那の俚諺。

大和阿闍梨御房等中
一切我弟子等中
三郎左衛門尉殿

轉重輕受法門

【一】修利槃特と申すは兄弟二人なり、一人もありしかば修利槃特と申すなり。各各三人は又斯の如し、一人來らせ給へば三人と存じ候なり。

【二】『涅槃經』に轉重輕受と申す法門あり。先業の重き今生に盡きずして、未來に地獄の苦を受くべきが、今生に斯る重苦に値ひ候へば、地獄の苦みぱつと消えて、死候へば人天三乘一乘の益を得る事の候。不輕菩薩の惡口罵詈せられ、杖木瓦礫を被むるも故なきにあらず。過去の誹謗正法の故かと見えて『其罪畢已』と說かれて候へば、不輕菩薩の難に遭ふ故に過去の罪の滅するかと見えはんべり。

【三】又付法藏の二十五人は、佛を除き奉りては皆佛の兼て記し置き給へる權者なり。其中に第十四の提婆菩薩は外道に殺され、第二十五の師子尊者は檀彌栗王に頸を刎られ、其外佛陀密多、龍樹菩薩なんども多くの難にあへり。又難なくして王法に御歸依いみじくて、法を弘めたる人も候。これは世に惡國善國有り、法に攝受折伏ある故かと見え侍る。

【一】縮遺六九二頁、文永八年(五十歲)の作。太田、蘇谷、金原の三氏に與へて不輕菩薩及び付法藏の例を引き龍口法難の悲歎を慰め自から法華經の行者たるの法悅を述ぶ。
【一】授與者三人が一人の如く心を合せ流難の身を慰問せしを謝す。
【修利槃特】釋尊の弟子、愚鈍、至誠至信に法華經を信ず。兄莫訶半託迦は頗る聽明。
【二】今世の受難は過去世の誹謗正法の滅罪なりと說く。
【三】付法藏に就て懺悔滅罪を說く

【四】佛記の如く諸難に値ふは正しく我身法華の行者なりとの法悦を述ぶ。

正像猶怨嫉の如し、中間久しかなり。是は濁世なり、末法の始めなり。かかる事あるべしとは先に思ひ定めぬ。期をこそ待ち候ひつれ。此上の法門はいにしへ申し置き候ひき、めづらしからず。

【四】圓教の六即の位に觀行即と申すは『所行所言の如く、所言所行の如し』と云云。理即、名字の人は圓人なれども、言のみありて眞なる事難し。例せば外典の三墳五典等は讀む人數を知らず。彼が如くに世を治め振舞ふ事千萬が一つも難し。されば世の治まる事も又難し。『法華經』は紙付に音をあげて讀めども、彼の經文の如く振舞ふ事は難く候か。『譬喩品』に云く、『經を讀誦し書持すること有らん者を見て、輕賤憎嫉して結恨を懷かん。』『法師品』に云く、『如來の現在すら猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや。』『勸持品』に云く、『刀杖を加へ、乃至、數數擯出せられん。』『安樂行品』に云く、『一切世間怨多くして信じ難し。』此等は經文には候へども、何の世に斯るべしとも知られず。過去の不輕菩薩覺德比丘なんどこそ身に當りて讀み參らせて候ひけると見え侍れ。現在には、正像二千年はさて置きぬ、末法に入っては此日本國には、當時は日蓮一人見え候か。昔の惡王の御時、多くの聖僧の難に値ひ候ひけるには、又所從眷屬等、弟子檀那等、いくそばくか歎き候ひけんと、今を以て推量り候。今日蓮『法華經』一部よみて候。一句一偈に猶受記を蒙れり、何に況んや一部をやと、いよ／＼頼もし。但しおほけなく國土までとこそ思ひて候へども、我と用ひられぬ世なれば力及ばず。しげき故に止め候ひ畢んぬ。

文永八年辛未十月五日　　　　　　　　　日蓮　花押

大田左衛門尉殿

蘇谷入道殿

金原法橋御房

御返事

法蓮鈔

◇縮遺一、一四八頁。建治元年（五十四歳）の作。曾谷氏に與へて、亡父追福の讀經の功徳、孝養の志を賞し、法華經罪福のすぐれたることを詳述し、受持の得意を示さる。【一】持經者を毀訾する罪、佛を毀るに過ぎたることを經證す。

【一】夫れ以みれば、『法華經』第四の『法師品』に云く、『若し惡人有つて不善の心を以て、一劫の中に於て現に佛前に於て常に佛を毀罵せん、其の罪尚ほ輕し。若し人一の惡言を以て、在家出家の法華經を讀誦する者を毀訾せん、其の罪甚だ重し。』等云云。妙樂大師云く、『然も此の經の功高く理絶えたるに約して、此の說を作すことを得、餘經は然らず。』等云云。此經釋の心は、一劫とは人壽八萬歳より、百年に一歳を捨て、千年に十歳を捨つ。此の如く次第に減ずる程に、人壽十歳になりぬ。此の十歳の時は、當時の八十の翁の如し。又人壽十歳より百年ありて十一歳となり、又百年ありて十二歳となり、乃至一千年あらば二十歳となるべし。乃至八萬歳となる。此の一滅一增を一劫とは申すなり。是は一途の義なり。又種種の劫ありと言へども、且く此の劫を以て申すべし。此の一劫が間、身口意の三

【須陀比丘】修羅陀比丘の略、婆羅門の僧。

【六畜】家畜なり牛、馬、羊、犬、豕、鷄。

【常露座】常に屋外に居坐す。

業より事起りて、佛を憎み奉る者あるべし。例せば提婆達多が如し。佛は淨飯王の太子、提婆達多は斛飯王の子なり。兄弟の子息なる間、佛の御弟子にて侍せしかども、今も昔も、人の中を違ふ事、聖人も凡夫も、これ同じ。其緣は女人第一なり。釋迦如來は悉達太子として在しし時、提婆達多も同じ太子なり。耶輸大臣に女あり、耶輸多羅女と名づく、五天竺第一の美女、四海名譽の天女なり。悉達と提婆と共に后にせん事を爭ひ給ひし故に、中惡くならせ給ひぬ。後に悉達は出家して佛とならせ給ひ、提婆達多も又須陀比丘を師として出家し給ひけり。佛は二百五十戒を持ち、三千の威儀を整へ給ひしかば、諸の天人これを渇仰し、四衆これを恭敬す。提婆は戒行の闕けたる事は牛馬の如く、威儀のなき事は六畜に異ならず。人貴む事之れなし。故に惡心を發して嘲じて云く、如何してか世間に名譽して佛に勝れ、四衆に渇仰せられんとたばかる程に、巧み出して云く「佛に勝るべき事五あり。」「四分律」に云く「一には糞掃衣、二には常乞食、三には一座食、四には常露座、五には鹽及び五味を受けず。」等云云。佛は人の施す衣を受け給ふ、提婆は糞掃衣、佛は人の施す食を受け給ふ。提婆は只常乞食、佛は一日に二三度も食し給ふ、提婆は只一座食、佛は塚間樹下にも宿し給ふ、提婆は常露座なり。佛は便宜には鹽又は五味を服し給ふ、提婆は鹽等を服せず。斯うありしかば、世間提婆の佛に勝れたる事雲泥なり。斯の如くして佛を失ひ奉らんと伺ひし程に、頻婆舍羅王は佛の檀那なり。日日に五百輛の車を數年が間、一度も缺かさず送りて、佛並びに御弟子等を供養し奉る。これを嫉み取らんが爲に、

【未生怨】 阿闍世の譯名。

【三業相應】 身も口も意も全く一つとなつてすること。一生懸命。

【西域】 大唐西域記の略。

未生怨太子を語らひて、父頻婆舍羅王を殺させ、我は佛を殺さんとして、或は石を以て佛を打ち奉るは身業なり。佛は誑惑の者と罵詈せしは口業なり。内心より宿世の怨と思ひしは意業なり。三業相應の大惡、此には過ぐべからず。此の提婆が、三業相應の惡心を以て一中劫の間、釋迦佛を罵詈打擲し嫉妬し奉る大罪は、幾ら程か重く候ふべきや。此の大地は、厚さ十六萬八千由旬なり。されば四大海の水をも、九山の土石をも、三千の草木をも頂戴し、一切衆生をも任持すれども、落る事なく、傾かず破れず候ぞかし。然れども提婆達多が身は既に五尺の人身なり、僅に三逆罪に及びしかば、大地破れて地獄に入りぬ。此の穴天竺に未だ候。玄奘三藏漢土より月支に修行して此を見る。「西域」と申す文に載せられたり。而るに上に出す所の經文の意は『法華經』の末代の行者を心にも思はず、色にも嫉まず、只だ戲れて罵りて候か、上の提婆達多が如く三業相應して、一中劫佛を罵詈し奉るに過ぎて候と說かれて候。何に況んや當世の人の提婆達多が如く、三業相應の大惡心を以て、多年が間『法華經』の行者を罵詈毀辱し、嫉妬打擲せる罪過をや。問うて云く、「末代に『法華經』の行者を怨ある者は、如何なる地獄に墮ちんや」。答へて云く、「『法華經』の第二に云く、『經を讀誦し書持すること有らん者を見て、輕賤憎嫉して結恨を懷かん。乃至、其人命終して阿鼻獄に入らん。一劫を具足して、劫盡きては、復死し、展轉して無數劫に至らん』等云云。此大地の下五百由旬を過ぎて、閻魔王宮あり。其の閻魔王宮より下一千五百由旬が間に八大地獄、並びに一百三十六の地獄あり。其中に一

【二】持經者を歎美せん功德、佛の言それに過ぐとの經文を擧ろに釋明す。【轉輪聖王】德を以て全世界を統一すべき王なり。輪棒(印度の武器)よく轉じて順服せざるなき威德によりていふ。

【無遮の大善】へだてなき、平等の大善根をいふ。

【四無量心】之を修すれば無量の功德あり。

百二十八の地獄は輕罪の者墮つ、八大地獄は重罪の者の住處なり。八大地獄の中に七大地獄は、十惡の者の住處なり。第八の無間地獄は五逆と不孝と誹謗と此の三人の住處なり。今の經は末代の『法華經』の行者を輕賤し罵詈・誹謗せん人人は阿鼻大城に墮つべしと說き給へる經文なり。

【二】『法華經』の第四法師品に云く、「人有つて佛道を求めて一劫の中に於て乃至持經者を歎美せんは、其の福復彼に過ぎん」等云云。妙樂大師云く、「若し惱亂する者は、頭七分に破れ、供養することあらん者は福十號に過ぐ」等云云。夫れ人中には轉輪聖王第一なり。此の輪王出現し給ふべき前相として、大海の中に優曇華と申す大木生いて華さき實なる。金輪王出現して、四天の山海を平かになす。大地は綿の如く柔かに、大海は甘露の如く甘く、大山は金山、草木は七寶となり、此の輪王、須臾の間に四天下を廻る。されば天も守護し、鬼神も來て仕へ、龍王も時に隨つて雨を降らす。劣夫なれども、これに從ひ奉れば須臾に四天下を廻る。是れ偏へに轉輪王の十善の感得せる大果報なり。毘沙門等の四大天王は又これには似るべくもなき、四天下の自在の大王なり。帝釋は忉利天の主、第六天の魔王は欲界の頂に居して、三界を領す。此は上品の十善戒、無遮の大善の所感なり。大梵天王は三界の天尊なり。色界の頂に居して魔王、帝釋を隨へ、三千大千界を手に握る。有漏の禪定を修行せる上に、慈悲喜捨の四無量心を修行せる人なり。聲聞と申して、舍利弗、迦葉等は、二百五十戒、無漏の禪定の上に、苦、空、無常、無我の觀を凝

【見思】見とは誤れる見解、迷信をいひ、思とは貪瞋癡等の情執の煩惱をいふ。

【壞劫】成住壞空の四劫の中第三、世界が壞滅する時期。

らし、三界の見思を斷盡して、水火に自在なり。故に梵王、帝釋をも眷屬とせり。緣覺は又聲聞に似るべくもなき大人なり。佛と出世を爭ふ人なり。昔饑饉ありき。飢ゑたる世に利吒と申す辟支佛に稗の飯を一盃供養し奉りて、彼の饑饉九十一劫が間、人中天上の長者と生れ、今生には阿那律と申す天眼第一の御弟子なり。此を妙樂大師釋して云く、「稗飯輕しといへども所有を盡し、及び田勝るるを以ての故に勝るる報を得」等云云。稗の心は稗の飯は輕しと雖も貴き辟支佛を供養する故に、斯る大果報に度度生るとこそ書かれて候へ。又菩薩と申すは文殊、彌勒等なり。此大菩薩等は彼の辟支佛に似るべからざる大人なり。佛は四十二品の無明と申す闇を破る妙覺の佛なり。八月十五夜の滿月の如し。此の菩薩等は四十一品の無明を盡して等覺の山の頂に登る、十四夜の月の如し。佛と申すは上の諸人には百千萬億倍勝れさせ給へる大人なり。佛には必ず三十二相あり。其相と申すは梵音聲相、無見頂相、肉髻相、白毫相乃至千輻輪相等なり。此の三十二相の中の一相をば、百福を以て成じ給へり。百福と申すは、假令へば大醫ありて、日本國漢土、五天竺十六の大國、五百の中國十千の小國、乃至一閻浮提、四天下、六欲天、乃至三千大千世界の一切衆生の眼の盲ひたるを、本の如く一時に開けたらん程の大功德を一つの福として、此の福百を重ねて候はんを以て、三十二相の中の一相を成せり。されば此の一相の功德は、三千大千世界の草木の數よりも多く、四天下の雨の足よりも過ぎたり。設ひ壞劫の時、僧佉陀と申す大風ありて、須彌山を吹き拔いて色究竟天に上げて、碎つて微塵となす大風な

【色究竟天】色界天上界の最上天なり。

【瞻婆長者】長者の妻の胎兒を外道は女子、佛は男子といふ。外道之を聞き婦に毒を與へて殺す、長者、佛に尋ねし時火葬中より男子生る。長者謝すと。

り。然れども佛の御身の一毛をば動かさず、佛の御胸に大火あり、釋迦大悲、大智光明、火坑三昧といふ。涅槃の時は其の大火を胸より出して、一身を焼き給ひしかば、六欲四海の大神龍衆等、佛を惜み奉る故に、雨を降りて大雨を下し、三千の大地を水となし、須彌は流れんとすれども此の大火は消えず。佛に斯かる大徳ましますに、阿闍世王は十六大國の惡人を集め、一四天下の外道を語らひ、提婆を師として無量の惡人を放ちて、佛弟子をのりうち殺害せしのみならず、賢王にて失もなかりし父の大王を、一尺の釘を以て七處まで打付け磔にし、生母をば王の后を摑み、刀を頭に當つ。重罪の積りて、惡瘡七處に出でき。三七日を經て、三月の七日に大地破れて、無間地獄に墮ちて、一劫を經べかりしかども、佛の所に詣で、罪消ゆるのみならず、無間地獄の大苦を免かれ、四十年の壽命延びたりき。又耆婆大臣も御使ひなかりしかば、炎の中に入つて、瞻婆長者が子を取り出したりき。之を以て之を思ふに、一度も佛を供養し奉る人は、如何なる惡人女人なりとも成佛得道疑ひなし。提婆には三十相のみありて二相缺けたる。所謂る白毫と千輻輪となり。佛に二相劣りたりしかば、弟子等輕く思ひぬべしとて、螢火を集めて眉間につけて白毫と云ひ、千輻輪には、鍛冶に菊形を作らせて足に付けて往く程に、足燒けて大事なり、結句死せんとせしかば、佛に申す。佛御手を以て撫で給ひしかば、苦痛去りき。此にて改悔あるべきかと思ひしに、さはなくして、瞿曇が習ふ醫師は小賢しかりけり、又術にてあるなど云ひしなり。斯る敵なれども、佛は怨を爲し給はず。何に況んや佛を一度も信

【優塡大王】佛天上して、母の爲に說法せらる、王、佛を戀慕して佛の像を木に刻む。木像の始。

【摩騰】後漢明帝の時佛教を支那に傳へし僧。

【三】上の法門を信ずべきの理を、近き現證を引いて示す。

じ奉る者をば、爭でか捨て給ふべきや。斯る佛なれば、木像畫像に寫し奉るに、心なきやうなれども、優塡大王の木像は步みを爲し、摩騰の畫像は一切經を說き給ふ。是程に貴き教主釋尊を、一時二時ならず、一日二日ならず、一年二年ならず。百千萬億乃至一劫が間、佛前にして掌を合せ、兩眼を佛の御顏に當て、頭を傾れて他事を捨て、頭の火を消さんと欲するが如く、渇して水を思ひ飢ゑて食を思ふが如く、間なく供養し奉る功德よりも、戲論に一言も繼母の繼子を讃むるが如く、志なくとも末代の「法華經」の行者を讃め供養せん功德は、彼の三業相應の信心にて、一劫が間生身の佛を供養し奉るには、百千萬億倍過ぐべしと說き給ひて候。これを妙樂大師は、「福過十號」とは書かれて候なり。十號と申すは、佛の十の御名なり。十號を供養せんよりも、末代の「法華經」の行者を供養せん功德は勝ると書かれたり。妙樂大師は「法華經」の一切經に勝れたる事を二十集めて擧げらるる其の一なり。已上

【三】上の二つの法門は、佛說にては候へども、心得られぬ事なり。爭でか佛を供養し奉るよりも、凡夫を供養するが勝るべきや。而れどもこれを妄語と云はんとすれば、釋迦如來の金言を疑ひ、多寶佛の證明を輕しめ、十方諸佛の舌相を破るになりぬべし。若し爾らば現身に阿鼻地獄に墮つべし。巖石に登りて荒馬を走らするが如し、心肝穩ならず。又信ぜば、妙覺の佛にもなりぬべし。如何にしてか、今度「法華經」に信心を取るべき。信なくして此經を行ぜんは、手なくして寶山に入り、足なくして千里の道を企つるが如し。

但し近き現證を引いて遠き信を取るべし。佛は御年八十の正月一日、『法華經』を說き始めさせ給ひて、御物語あり。「阿難、彌勒、迦葉よ、我世に出でし事は、『法華經』を說かんが爲なり。我既に本懷を遂げぬ。今は世にありて詮なし。今三月ありて、二月十五日に涅槃すべし。」云云。一切內外の人人疑ひを爲せしかども、佛語相違なかりしかば、遂に二月十五日に御涅槃ありき。されば佛の金言は實なりけるかと、少し信心は取られて候。又佛記し給ふ、「我滅度の後一百年と申さんに、阿育大王と申す王出現して、一閻浮提三分の一分が主となりて、八萬四千の塔を立て、我が舍利を供養すべし」と云云。人疑ひ申せし程に、一百十年と申せしに案の如くに出現す。是にてこそ、信心をば取りて候ひつれ。又云く、「我滅後に四百年と申さんに、迦膩色迦王と申す大王あるべし。五百の阿羅漢を集めて、『婆沙論』を造るべし」と。是れ又佛記の如くなりき。是等をもてこそ、佛の言文は信ぜられて候へ。若し上に擧ぐる所の二の法門妄語ならば、此の一經は皆妄語たるべし。『壽量品』に『我は過去五百塵點劫のその昔の佛なり』と說き給ふ。我等は凡夫なり、過ぎにし方は生れてより已來すら、尚ほ覺えず。況んや一生二生をや。況んや五百塵點劫の事をば、爭でか信ずべきや。又舍利弗等に記して云く、『汝未來世に於て、無量無邊不可思議劫を過ぎ、乃至、當に佛と作ることを得べし。號をば華光如來と曰はん。』云云。又摩訶迦葉に記して云く、『未來世に於て、乃至、最後の身に於て佛と成ることを得ん。名を光明如來と曰はん。』云云。此等の經文は、又未來の事なれば、我等凡夫は信ずべしとも覺えず。

【四】法蓮上人の亡父の追善に妙經讀誦せし功德を稱揚す。即ち世尊の孝養第一を說き、內典の孝經たる法華經の力を示す。

【竹杖外道】佛在世の婆羅門、佛の身長一丈六尺なるを疑ひ竹杖もて量るに恒に杖端丈六を存す、かく增高して、貫を窮むる能はず、乃ち杖を捨て去ると。

されば過去未來を知らざらん凡夫は、此經は信じ難し。又修行して、何の詮かあるべき。是を以て之を思ふに、現在に眼前の證據あらんずる人、此經を說かん時は、信ずる人もあるべし。

【四】今法蓮上人の送り給へる諷誦の狀に云く、「慈父幽靈第十三年の忌辰に相當り、一乘妙法蓮華經五部を轉讀し奉る」等云云。夫れ教主釋尊をば、大覺世尊と號し奉る。世尊と申す尊の一字を高と申す。高の一字は、又孝と訓ずるなり。一切の孝養の人の中に、第一の孝養の人なれば、世尊とは號し奉る。釋迦如來の御身は金色にして、三十二相を備へ給ふ。彼の三十二相の中に、無見頂相と申すは、佛は丈六の御身なれども、竹杖外道も其の御長を計らず、梵天も其の頂を見ず。故に無見頂相と申す。是れ孝養第一の大人なれば、斯る相を備へまします。「孝經」と申すに二あり。一には外典の孔子と申せし聖人の書に「孝經」あり。二には內典、今の「法華經」是れなり。內外異れども、其の意は是れ同じ。釋尊塵點劫の間修行して、佛にならんと勵み給ひしは何事ぞ、孝養の事なり。然るに六道四生の一切衆生は皆父母なり、孝養おへざりしかば、佛にならせ給はず。今「法華經」と申すは、一切衆生を佛になす秘術まします御經なり。所謂る地獄の一人、餓鬼の一人、乃至九界の一人を佛になせば、一切衆生皆佛になるべき道理顯はる。譬へば竹の節を一つ破りぬれば、餘の節亦破るるが如し。圍碁と申す遊びに、四目と云ふ事あり。一の石死しぬれば、多くの石死ぬ。「法華經」も又此の如し。金と申すものは、木草を失ふ用

を備へ、水は一切の火を消す徳あり。『法華經』も又一切衆生を佛になす用在します。六道四生の衆生に男女あり。此の男女は皆我等が先生の父母なり。一人も漏れば佛になるべからず。故に二乘をば不知恩の者と定めて、永不成佛と說かせ給ふ。孝養の心あまねからざる故なり。佛は『法華經』を悟らせ給ひて、六道四生の父母孝養の功徳を身に備へ給へり。此佛の御功徳をば『法華經』を信ずる人に譲らせ給ふ。例せば悲母の食ふ物の乳となりて、赤子を養ふが如し。『今此の三界は皆是れ我が有なり。其中の衆生は悉く是れ我が子なり』等云云。教主釋尊は此の功徳を『法華經』の文字となして、一切衆生の口に嘗めさせ給ふ。赤子の水火を辨へず、毒薬を知らざれども、乳を含めば身命を續ぐが如し。『阿含經』を習ふ事は、舍利弗等の如くならざれども、『華嚴經』を悟る事、解脱月等の如くならざれども、乃至一代聖教を胸に浮べたる事、文殊の如くならざれども、一字一句をもこれを聞きし人、佛にならざるはなし。彼の五千の上慢は聞きて悟らず、不信の人なり。然れども謗ぜざりしかば、三月を經て佛になりき。『若しは信じ、若しは信ぜざるも、則ち不動國に生る。』と『涅槃經』に說かるるは、此人の事なり。『法華經』は不信の者すら、謗ぜざれば、聞きつるが不思議にて佛になるなり。所謂る七步蛇に食れたる人、一步乃至七步を過ぎず。毒の用の不思議にて、七步を過さぬなり。又胎内に七日有るが如きは、七日の内に轉じて餘の形となる、八日を過さず。今の法蓮上人も又此の如し。教主釋尊の御功徳御身に入り替らせ給ひぬ。法蓮上人の御身は、過去聖靈の御容貌を殘し置かれたるなり。譬へば種

【七步蛇】毒蛇の一種。

【五】自我偈讀誦の功德を歎ずるに、法華經書寫の勝用を述べ、次に讀誦の益を說く。

【道士】老子を祖とする宗教、道教の僧に當るもの。

の苗となり、華の菓となるが如し。其の華は落ちて菓はあり、種は隱れて苗は現に見ゆ。法蓮上人の御功德は、過去聖靈の御財なり。松榮ふれば柏喜ぶ、芝枯るれば蘭泣く。情なき草木すら此の如し、何に況や情あらんをや、又父子の契りをや。

【五】彼の諷誦に云く、「慈父閉眼の朝より第十三年の忌辰に至るまで、釋迦如來の御前に於て、自ら自我偈一卷を讀誦し奉りて、聖靈に回向す」等云云。當時こそ日本國の人佛法を信じたるやうには見えて候へども、古へ未だ佛法の渡らざりし時は、佛と申す事も法と申す事も知らず候ひしを、守屋と上宮太子の合戰の後、信ずる人もあり、又信ぜざるもあり。漢土も此の如し。摩騰漢土に入つて後、道士と諍論あり。道士負けしかば、始めて信ずる人もありしかども、不信の人多し。されば烏龍と申せし能書は、手跡の上手なりしかば人之を用ゆ。然れども佛經に於ては、如何なる依怙ありしかども書かず。最後臨終の時、子息の遺龍を召して云く、「汝我が家に生れて藝能を嗣ぐ。我が孝養には佛經を書くべからず、殊に『法華經』を書く事なかれ。我が本師の老子は天尊なり。天に二つの日なし。而るに彼の經に『唯我一人』と說く、奇怪第一なり。若し遺言を違へて書く程ならば、忽ちに惡靈となりて命を斷つべし」と云つて、舌八つに裂け、頭は七分に破れ、五根より血を吐いて死し畢んぬ。されども其子善惡を辨へざれば、我が父の謗法の故に惡相現じて、阿鼻地獄に墮ちたりとも知らず。遺言に任せて佛經を書く事なし、況んや口に誦する事あらんや。斯く過ぎ往く程に、時の王を司馬氏と號し奉る。御佛事のありしに、書寫の經あ

るべしとて、漢土第一の能書を尋ねらるるに、遺龍に定まり畢ぬ。召して仰せ付けらるるに、再三辭し申せしかば、力及ばずして他筆にて、一部の經を書かせられけるが、帝王快からず。尚ほ遺龍を召して、仰せに云く、「汝親の遺言とて御經を書かざる事、其の謂れなしと雖も、且らく之を免す。但だ題目ばかりは書くべし」と、三度勅定あり。遺龍猶ほ辭退申す。大王龍顏快からずして云く、「天地尚ほ王の進退なり。然れば汝が親は即ち我が家人にあらずや。私を以て公事を輕んずる事あるべからず。題目ばかりは書くべし。若し然らずば佛事の庭なりと雖も、速かに汝が頭を刎ぬべし」とありければ、題目ばかり書きけり。所謂る「妙法蓮華經卷第一」乃至「卷第八」等云云。其の暮に私宅に歸りて歎いて云く、「我親の遺言を背き、王勅術なき故に佛經を書きて不孝の者となりぬ。天神も地祇も定んで瞋り、不孝の者と思すらん」とて、寢ぬる。夜の夢の中に、大光明出現せり、朝日の照すかと思へば、天人一人庭上に立ち給へり。又無量の眷屬あり、此の天人の頂上の虛空に、佛六十四佛在ます。遺龍合掌して問うて云く、「如何なる天人ぞや」。答へて云く、「我は是れ汝が父烏龍なり。佛法を謗せし故に、舌八つに裂け、五體より血を出し、頭七分に破れて無間地獄に墮ちぬ。彼の臨終の大苦をこそ堪忍すべしと思ひきりしに、無間の苦は尚ほ百千億倍なり。人間にして鈍刀をもて爪を放ち、鋸をもて頸を斬られ、炭火の上を歩ばせ、棘に籠められなんどせし人の苦を、此の苦に譬へば數ならず。如何にしてか我が子に告げんと思ひしかども叶はず。臨終の時汝を誡めて、佛經を書く事勿れと遺言

せし事の悔しさ申すばかりなし。後悔先に立たず、我身を恨み、舌を責めしかども叶はざりしに、昨日の朝より『法華經』の始めの『妙』の一字、無間地獄の鼎の上に飛び來て、變じて金色の釋迦佛となる。此の佛三十二相を具し、面貌滿月の如し。大音聲を出して說いて云く『假使法界に遍き、斷善の諸の衆生も、一たびも法華經を聞かば、決定して菩提を成ぜん』云云。此の文字の中より大雨降りて、無間地獄の炎を消す。閻魔王は冠を傾けて敬ひ、獄卒は杖を捨てて立てり。一切の罪人は如何なる事ぞと慌てたり。又『法』の一字來れり、前の如し。又『蓮』又『華』又『經』此の如く六十四字來つて、六十四佛と成りたまひぬ。無間地獄に佛六十四佛ましませば、日月の六十四、空に出でたるが如し。天より甘露を下して罪人に與ふ。抑も此等の大善は何なる事ぞと、罪人等佛に問ひ奉りしかば、六十四の佛の答へに云く、『我等が金色の身は栴檀寶山よりも出現せず、是は無間地獄にある烏龍が子の遺龍が書ける『法華經』八巻の題目の、八八六十四の文字たり、彼の遺龍が手は烏龍が生める身の分身なり。書ける文字は烏龍が書けるにてあるなり』と說き給ひしかば、無間地獄の罪人等は、我等も娑婆にありし時は、子もあり弟子もありき、如何に訪らはぬやらん、又訪へども善根の用の弱くして來らぬやらんと、嘆けども甲斐なし。或は一日二日、一年二年、半劫一劫になりぬるに、斯る善知識に値ひ奉りて、助けられぬると云ひ、我等も眷屬となりて忉利天に上るが、先づ汝を禮まんとて來れるなりと語りしかば、夢の中に嬉しさ身に餘りぬ。別れて後又何時の世にか見んと思ひし親の姿をも見

【都率】兜率のこと

【五種法師】法華經法師品に出づ。受持、讀、誦、解說、書寫の五種を行する法師なり。

【六】自我偈讀誦の功德廣大なるを說く。

奉り、佛をも拜し奉りぬ。六十四佛の物語に云く、『我等は別の主なし、汝は我等が檀那なり。今日よりは汝を主と守護すべし、汝忘る事勿れ。一期の後は必ず來つて、都率の內院へ導くべし』と、御約束ありしかば、遺龍殊に畏みて、誓つて云く、『今日以後外典の文字を書くべからず』等云云。彼の世親菩薩が『小乘經を誦せじ』と誓ひ、日蓮が、『彌陀念佛を申さじ』と願せしが如し。扨て夢覺めて、此の由を王に申す。大王の敕宣に云く、『此の佛事已に成じぬ。此の由を願文に書き奉れ』とありしかば、敕宣の如くす。是さてこそ漢土日本國は『法華經』にはならせ給ひけり。此狀は漢土の『法華傳』に候。是れは書寫の功德なり。五種法師の中には、書寫は最下の功德なり。何に況んや讀誦なんど申すは、無量無邊の功德なり。今の施主十三年の間、每朝讀誦せらるる『自我偈』の功德は、『唯佛と佛とのみ乃し能く究盡す』なるべし。

【六】 夫れ『法華經』は一代聖敎の骨髓なり。『自我偈』は二十八品の魂なり。三世の諸佛は『壽量品』を命とし、十方の菩薩は『自我偈』を眼目とす。『自我偈』の功德をば私に申すべからず、次下の『分別功德品』に載せられたり。此の『自我偈』を聽聞して佛になりたる人人の數を擧げて候には、小千大千三千世界の微塵の數をこそ擧げて候へ。其上『藥王品』已下の六品の得道の者も、『自我偈』の餘殘なり。『涅槃經』四十卷の中に集まりて候ひし五十二類にも、『自我偈』の功德をこそ佛は重ねて說かせ給ひしか。されば初、寂滅道場に十方世界微塵數の大菩薩、天人等、雲の如くに集まりて候も、『大集』、

【田村】坂上田村麿、武功德望あり。
【利仁】藤原利仁、延喜年中の人、武威あり。
【七】法華經の文字は生身の佛なりと說く。

『大品』の諸聖も、『大日經』、『金剛頂經』等の千二百餘尊も、過去に『法華經』の『自我偈』を聽聞してありし人人、信力弱くして三五の塵點を經しかども、今度釋迦佛に値ひ奉りて『法華經』の功德進む故に、靈山を待たずして、爾前の經經を緣として得道なると見えたり。されば十方世界の諸佛は、『自我偈』を師として佛にならせ給ふ。世界の人の父母の如し。今『法華經壽量品』を持つ人は、諸佛の命を續ぐ人なり。我得道なりし經を持つ人を、捨て給ふ佛あるべしや。若し此を捨て給はば、佛還つて我が身を捨て給ふなるべし。これを以て思ふに、田村利仁などの樣なる兵を、三千人生みたらん女人あるべし。此の女人を敵とせん人は、此の三千人の將軍を敵に受くるにあらずや。『法華經』の『自我偈』を持つ人を敵とせんは、三世の諸佛を敵とするになるまじきか。

【七】今の『法華經』の文字は皆生身の佛なり。我等は肉眼なれば、文字と見るなり。例へば餓鬼は恒河を火と見る、人は水と見、天人は甘露と見る。水は一なれども、果報にしたがつて見る所各別なり。此の『法華經』の文字は盲目の者は之を見ず、肉眼は黑色と見、二乘は虛空と見、菩薩は種種の色と見、佛種純熟せる人は佛と見奉る。されば經文に云く『若し能く持つこと有れば、即ち佛身を持つなり』等云云。天台の云く『稽首妙法蓮華經、一帙八軸四七品、六萬九千三八四、一一文文是れ眞佛、眞佛の說法衆生を利す』等と書かれて候。之を以て之を案ずるに、法蓮法師は每朝口より金色の文字を出現す。此の文字の數は五百十字なり。一一の文字變じて日輪となり、日輪變じて釋迦如來と

【非想非非想】無色界の最高天。

【八】法華經受持の心得を示す。

なり、大光明を放つて大地を突通し、三惡道、無間大城を照し、乃至東西南北上方に向つては、非想非非想へも上り、如何なる處にも過去聖靈の在すらん處まで尋ね行き給ひて、彼の聖靈に語り給ふべし「我をば誰とか思食す。我は是れ汝が子息法蓮が每朝誦する所の、『法華經』の「自我偈」の文字なり。此の文字は汝が眼とならん、耳とならん、足とならん、手とならん」とこそ、懇に語らせ給ふらめ。其の時過去聖靈は「我が子息法蓮は子にはあらず、善知識なり」とて、娑婆世界に向つて拜せさせ給ふらめ。是こそ實の孝養にては候なれ。

【八】抑も『法華經』を持つと申すは、經は一なれども、持つ事は時に隨つて色々なるべし。或は身肉を裂いて師に供養して佛になる時もあり。又身を牀として師に供養し、又身を薪となし、又此經の爲に杖木を蒙り、又精進し、又持戒し、上の如くすれども佛にならぬ時もあり。故に時に依つて不定なるべし。されば天台大師は「時に適ふのみ」と書かれ、章安大師は「取捨宜しきを得て、一向にすべからず。」等云云。問うて云く「何なる時か身肉を供養し、何なる時か持戒なるべき。」答へて云く「智者と申すは此の如き時を知りて『法華經』を弘通するが第一の祕事なり。例へば渇者は水をこそ用ゆる事なれ、弓箭兵杖はよしなし。裸なる者は衣を求む、水は用なし。一をもて萬を察すべし。大鬼神ありて『法華經』を弘通せば、身を布施すべし、餘の衣食は詮なし。惡王あつて『法華經』を失はば、身命を亡すとも隨ふべからず。持戒精進の大僧等『法華經』を弘通するやうにて、

【九】法華經持者の留難を述べ、持者供養の志を謝し功徳を歎ず。

而も失ふならば、是を知つて責むべし。『法華經』に云く、「我れ身命を愛せず、但だ無上道を惜む。」云云。『涅槃經』に云く、「寧ろ身命を喪ふとも、終に王の所說の言教を匿さざれ。」等云云。章安大師の云く、「寧ろ身命を喪ふも教を匿さずとは、身は輕く法は重し、身を死して法を弘む。」等云云。」

【九】然るに今日蓮は、外見の如くば日本第一の僻人なり。我が朝六十六箇國、二の島、百千萬億の四衆、上下萬人に怨まる。佛法日本國に渡つて七百餘年、未だ是程に『法華經』の故に、諸人に惡まれたる者なし。月氏漢土にもありとも聞えず、又あるべしとも覺えず。されば一閻浮提第一の僻人ぞかし。斯る者なれば、上には一朝の威を恐れ、下には萬民の嘲りを顧みて、親類も訪らはず、外人は申すに及ばず。出世の恩のみならず、世間の恩を蒙りし人も、諸人の眼を恐れて口を塞がん爲にや、心に思はねども謗るよしを爲す。數度事にあひ、兩度御勘氣を蒙りしかば、我が身の失に當るのみならず、行通ふ人の中にも或は御勘氣、或は所領を召され、或は御內を出され、或は父母兄弟に捨てらる。されば付きし人も捨て果てぬ、今又付く人もなし。殊に今度の御勘氣には死罪に及ぶべきが、いかが思はれけん、佐渡の國に遣はされしかば、彼の國へ趣く者は、死は多く生は希なり。辛くして行き着きたりしかば、殺害謀叛の者よりも猶重く思はれたり。鎌倉を出でしより、日日に強敵重なるが如く、ありとある人は、念佛の持者なり。野を行く山を行くにも、岨坦の草木の風に隨つてそよめく聲も、敵の我を責むるかと覺え、漸く國に着きぬ。北國の習ひ

【蘇武】漢の忠臣、匈奴に使して捕へらるゝこと十九年。【李陵】匈奴を伐ちて重圍に陷りて降る、節を持して歸らず、二十年常に艱苦す

【一〇】天災の災異の因由、全く法華經及び行者誹謗なりと示し、謗者の罪報を明す。【三墳五典】支那の聖人、伏羲、神農、黄帝の書を三墳、五帝の法典を五典。【内典】佛教經典。

なれば、冬は山に風はげしく雪深し、衣薄く食乏し。根を移されし橘の自然に枳となりけるも、身の上につみ知られたり。栖には尾花苅萱生ひ茂れる野中の三昧原に、朽ち破れたる草堂の、上は雨漏り、壁は風も堪らぬ傍に、晝夜耳に聞く者は、枕に冴ゆる風の音、朝暮の眼に遮る者は、遠近の路を埋む雪霜なり。現身に餓鬼道を經、寒熱地獄に墮ちぬ。彼の蘇武が十九年の間、胡國に留められて雪を食し、李陵が巖窟に入つて、六年蓑を着て過しけるも、我が身の上なりき。今適ま御勘氣許りたれども、鎌倉中に用ひられず身を宿し迹を留むべき處なければ、斯る山中の石の間、松の下に身を隱し心を靜むれども、大地を食とし、草木を着ざらんより外は、食もなく衣も絶えたる處に、如何なる御心根にて、斯く掻き分けて御訪ひのあるやらん。知らず、過去の我が父母の御魂の御身に入り替らせ給ふか、又知らず、大覺世尊の御惠みにやあるらん。涙こそ抑へ難く候へ。

【一〇】問うて云く、「抑も正嘉の大地震、文永の大彗星、自他の叛逆は、我朝に『法華經』を失ふ故と知らせ給ふ故如何」。答へて云く、「此の二つの天災地夭は、外典三千餘卷にも載せられず。『三墳五典』、『史記』等に記する處の大長星大地震は、或は一尺二尺、一丈二丈、五丈六丈なり。未だ一天とは見えず。地震も又是の如し。内典を以て之を勘ふるに、佛御入滅已後は、斯る大瑞出來せず。月支には弗沙密多羅王五天の佛法を亡し、十六大國の寺塔を燒き拂ひ、僧尼の頭を刎ねし時も、斯る瑞はなし。漢土には會昌天子の寺院四千六百餘所を止め、僧尼二十六萬五百人を還俗せしめし時も出現せず。我朝には欽明の御宇に

佛法渡つて、守屋佛法に敵せしにも、清盛法師七大寺を燒き失ひ、山僧等園城寺を燒亡せしにも出現せざる大彗星なり。當に知るべし是よりも大事なる事の一閻浮提の内に出現すべきなりと勘へて、『立正安國論』を造りて、最明寺入道殿に奉る。彼の狀に云く、「取意」「此の大瑞は他國より此國を亡すべき先兆なり。禪宗、念佛宗等が法華經を失ふ故なり。彼の法師原が頸を斬りて、鎌倉由比の濱に捨てずば、國正に亡ぶべし」等云云。其後文永の大彗星の時は、又手に把りて之を知る。去ぬる文永八年九月十二日の御勘氣の時、重ねて申して云く「予は日本國の棟梁なり、我を失ふは國を失ふなるべし」と。今は用ゐまじけれども、後の爲とて申しにき。又去年の四月八日に、平の左衛門尉に對面の時、蒙古國は何時比の國に寄せ候ふべきと問ふに、答へて云く「經文は月日を指さず。但し天眼の怒り頻りなり、今年をば過ぐべからず」と申したりき。是等は如何にとして知るべしと、人疑ふべし。予不肖の身なれども、『法華經』を弘通する行者を、王臣人民之を怨む間、『法華經』の座にて守護せんと誓をなせる地神怒りをなして身を振ひ、天神身より光りを出して此の國を嚇す。如何に諫むれども用ゐざれば、結句は人の身に入つて自界叛逆せしめ、他國より責むべし。問うて曰く「此の事何なる證據あるや」。答ふ「經に云く、『惡人を愛敬し、善人を治罰するに由るが故に、星宿及び風雨皆時を以て行はれず』等云云。」夫れ天地は國の明鏡なり。今此國に天災地夭あり、知るべし、國主に失ありと云ふ事を。鏡に浮べたれば之を諍ふべからず。國主小禍のある時は、天鏡に小災見ゆ。今の大災は當に知るべし、

【雨行大臣】[illegible]臣を囲けて[illegible]す。

【月稱大臣】阿闍世王をして佛法を排斥せしたり。

【刹陀】須那刹多とも書く、涅槃經に出づ。惡を評ふ。

【耆利】摩掲陀國の人、殘忍、阿育王の下に人を殺し後、王の歸佛を背かず、爐中に投せらる。

大禍ありと云ふ事を。仁王經に云く、「小難は無量なり、中難は二十九、大難は七」とあり。此經をば一には仁王と名け、二には天地鏡と名く。此の國主を天地鏡に浮べて見るに、明白なり。又此の經文に云く、「聖人去らん時は、七難必ず起る」等云云。當に知るべし、此國に大聖人ありと。又知るべし、彼の聖人を國主信ぜずと云ふ事を。問うて曰く、先代に佛寺を失ひし時、何ぞ此の瑞なきや。答へて曰く、「瑞は失の輕重によりて大小あり。此度の瑞は怪むべし、一度二度にあらず、一返二返にあらず、年月を經るままに彌よ倍増したり。之を以て之を案ずるに、先代の失よりも過ぎたる國主に失あり。國主の身にて萬民を殺し、又萬臣を殺し、又父母を殺す失よりも、聖人を怨む事彼に過ぐる事を。今日本國の王臣並に萬民には、月氏・漢土・一閻浮提に、佛滅後二千二百二十餘年の間未だ無き大科、人ごとにあるなり。譬へば十方世界の五逆の者を一處に集めたるが如し。此國の一切の僧は、皆提婆・瞿伽利が魂を移し、國主は阿闍世、王は波瑠璃王の化身なり。一切の臣民は、雨行大臣・月稱大臣・刹陀・耆利等の惡人を集めて、日本國の民となせり。古は一人二人、逆罪不孝の者ありしかばこそ、其の人の在所は大地も破れて入りぬれ。今は此國に充滿せる故に、日本國の大地一時に破れて無間地獄に墮ちざらん外は、一人二人の住所の墮ちん事はなかるべし。例せば老人の一二の白毛をば抜けども、老耄の時は皆白毛なれば、何れを分けて抜き捨つべき、只一度に剃捨つる如くなり」。問うて云く、「汝が義の如くんば我『法華經』の行者なるを用ゐざるが故に、天變地夭等ありと。『法華經第八』に云く、

〔参〕縮遺一六三九頁 建治三年（五十六歳）の作。崇峻天皇の故事を引き、四條金吾の短慮を誡め陰忍自重を教へたるもの。

『頭破れて七分と作らん』第五に云く、「若し人悪み罵れば口即ち閉塞す」等云云。如何ぞ數年が間罵り詈めども、其の義なきや。」答ふ「反詰して曰く、不輕菩薩を毀呰し罵詈し打擲せし人は、口閉頭破ありけるが如何。」問ふ「然れば經文に相違する事如何。」答ふ「法華經を怨む人に二人あり。一人は先生に善根ありて、今生に緣を求めて菩提心を發して、佛になるべき者は、或は口閉ぢ、或は頭破る。一人は先生に謗人なり、今生にも謗じ、生生に無間地獄の業を成就せる者あり。是は罵れども口則ち閉塞せず。譬へば獄に入つて死罪に定まる者は、獄の中にて何なる僻事あれども、死罪を行ふまでにて別の失なし。終に免りぬべき者は、獄中にて僻事あれば、これを戒むるが如し。」問うて云く、「此事第一の大事なり、委細に承るべし」答へて云く、「『涅槃經』に云く、『法華經』に云く、云云。」

日　蓮　華押

崇峻天皇御書

【一】白小袖一領、錢一結。又富木殿の御文のみ何よりも、柿、梨、生ひじき、干たるひじき。種種の物受取り品品御使に給び候ひぬ。

【二】さては何よりも上の御所勞嘆き入つて候。たとひ上は御信用なき樣に候へども、殿其内に住して、其御恩の蔭にて『法華經』を養ひ參らせ給ひ候へば、偏へに上の御祈りと

【一】[illegible]に對す[illegible]を遂ぐ[illegible]を[illegible]ぶす

【耆婆】[illegible]、[illegible]千。

【二】[illegible]を積む[illegible]を激勵す。

【三】[illegible]を[illegible]する[illegible]罪業果を

【崇峻天皇】第三十二代の帝位[illegible]五年に[illegible]馬子[illegible]給ふ

【上】主君江馬入道光時

【龍象】龍象房。

【四】同僚の讒計に警戒し、併せて短慮なる性癖を現さざる樣にと懇篤に誡む、

あへたり候らん。大木の下の小木、大河の邊の草は正しく其雨に當らず、其水を得ずと雖へども、露を浸へ氣を得て榮ふる事に候。此も此の如し。阿闍世王は佛の御敵なれども、其內にありし耆婆大臣、佛に志ありて常に供養ありしかば、其功大王に歸すとこそ見えて候へ。佛法の中に內薰外護と申す大なる大事ありて宗論にて候。法華經には「我深く汝等を敬ふ」、涅槃經には「一切衆生悉く佛性有り」、馬鳴菩薩の起信論には「眞如の法常に薰習するを以ての故に妄心即滅して法身顯現す」、彌勒菩薩の瑜伽論には隱れたる事の顯はれたる德となり候と見えたるなり。

【三】されば御內の人人には天魔ついて、前より此事を知りて、殿の此法門を供養するを支へんが爲に、今度の大妄語をば造り出したりしを、御信心深ければ、十羅刹助け奉らんが爲に此病は起れるか。上は我が敵とは思さねども、一旦彼等が申す事を用ひ給ひぬるによりて、御所勞の大事になりて長引かせ給ふか。彼等が柱と賴む龍象既に倒れぬ。和讒せし人も又其病に犯されぬ。良觀は又一重の大科の者なれば、大事に値うて大事を起して、いかにもなり候はんずらん。よも只は候はじ。

【四】此につけても殿の御身もあぶなく、思ひ參らせ候ぞ。一定敵にねらはれさせ給ひなん。雙六の石は二つ並びぬればかけられず、車の輪は二つあれば道に傾かず。敵も二人ある者をばいぶせがり候ぞ。いかに科ありとも弟ども且らくも身を放ち給ふな。殿は一定腹あしき相、面に顯はれたり。いかに大事と思へども、腹あしき者をば天は守らせ

【甲の座】上座のこと。

給はぬと知らせ給へ。殿の人にあやまたれて在さば、設ひ佛にはなり給ふとも、彼等が悦びと云ひ、此よりの嘆きと申し、口惜しかるべし。彼等が如何にもせんと臨みつるに、古よりも上に引き付けられ參らせて在すれば、外の姿は靜まりたる樣にあれども、內の胸は燃ゆる計りにや有らん。常には彼等に見えぬ樣にて、古よりも家の子を數ひ、公達の參らせ給ひて在さんには、上の召しありとも且らく愼むべし。入道殿いかにもならせ給はば、彼の人人は惑ひ者になるべきをば顧みず、物怪えぬ心に殿のいよ〳〵來るを見ては、一定炎を胸にたき、氣を逆さまに吐くらん。若し公達、權者の女房達、「いかに上の御所勤は」と問ひ申されば、いかなる人にても候へ、膝を組めて手を合せ、「某が力の及ぶ事を御所勤には候はず候を、いかに御意申せども、ただと仰せ候へば御內の者にて、所領かくて候」とて、髮をもかかず、直垂なんどはからず、さはすかたなる小袖、色ある物なんども着ずして、且らく忍じて御覽あれ。返す返す御心得の上なれども、末代の有樣を佛の說かせ給ひて候には、濁世には聖人も居し難し。大火の中の石の如し。且らくはこらふるやうなれども終には燒け損けて灰となる。賢人も五常は口に說きて、身には振舞ひ難しと見えて候ぞ。甲の座をば去れと申すぞかし。若干の人の殿を讒り落さんとしつるを、落されずしてはや勝ちぬる身が、穩便ならずして造り落されなば、世間に申す漕いでの船溢れ、又食の後に湯の無きが如し。上より部屋を給ひて居して在せば、其庭にては何事無くとも日暮れ曉なんど、入り返りなんどに定めてねらふらん。又我が家の妻戶の脇、持佛堂、家の內

【五】如何なる迫害にも忍難を忘れず主にも奉公せよと勸む。

【六】龍口に於ける四條氏の捨身決定の心に聖感淺からず運命を共にすべしと迄四條氏に同情を寄す。

の板敷の下か天井などをば、強ちに心得て振舞ひ給へ。今度は先よりも彼等はたばかり賢かるらん。いかに申すとも鎌倉の荏柄、夜廻りの殿原には過ぎじ。いかに、心に合はぬ事有りとも語らはせ給へ。義經はいかにも平家をば攻落し難かりしかども、成良を語らひて平家を滅し、大將殿は長田を親の敵と思せしかども、平家を落さざりしには頸を切り給はず。況んや此四人は、遠くは『法華經』の故、近くは日蓮が故に命を懸けたる屋敷を上へ召されたり。日蓮と『法華經』とを信ずる人人をば、前前彼の人人いかなる事ありとも、かへりみ給ふべし。其上殿の家へ此人人常に通ふならば、敵は夜行きあはじと怖るべし。させる親の敵ならねば、顯はれてとはよも思はじ。隱れん者は是程の兵士は無きなり。常に睦ばせ給へ。殿は腹惡き人にて、よも用ゐさせ給はじ。若しさあるならば日蓮が祈りの力及び難し。

【五】龍象と殿の兄とは、殿の御爲には惡かりつる人ぞかし。天の御計らひに殿の御心の如くなるぞかし。いかに天の御心に背かんとは思はするぞ。設ひ千萬の財を滿ちたりとも上にすてられ參らせ給ひては何の詮かあるべき。已に上には親の樣に思はれ參らせ、水の器に隨ふが如く、犢の母を思ひ、老者の杖をたのむが如く、主の殿を思召されたるは『法華經』の御助けにあらずや。あら羨しやとこそ、御内の人人は思はるらめ、疾く疾く此四人語らひて日蓮に聞かせ給へ、さるならば強盛に天に申すべし。

【六】又殿の故父母の御事も、左衞門尉が餘りに嘆き候ぞと天にも申入れて候なり。

【在しまさずらめ】在しますであらう。

【七】王辟を求め榮名を輕づべしと誡む。

【八】短慮にして殺逆に遭ひ給ひし崇峻天皇の故事を出す。

定んで釋迦佛の御前に、子細候らん。返す返す今に忘れぬ事は、頸切られんとせし時、殿は供して馬の口に付きて泣き悲み給ひしをば、いかなる世にも忘れ難し。設ひ殿の罪深くして地獄に入り給はば、日蓮をいかに佛になれと釋迦佛こしらへさせ給ふとも、用ひ參らせ候べからず、同じく地獄なるべし。日蓮と殿と共に地獄に入るならば、釋迦佛・法華經も地獄にこそ在しまさずらめ。暗に月の入るが如く、湯に水を入るるが如く、氷に火をたくが如く、日輪に暗を投ぐるが如くこそ候はんずれ。若し少しも此事を違へさせ給ふならば日蓮恨みさせ給ふな。此世間の疫病は宣ふが如く、年歸りたば上へ、あがりぬと覺え候ぞ。十羅刹の御計らひか、今且く世に在して物を御覽あれかし。

【七】又世間の過ぎ得ぬやうばし歎いて人に聞かせ給ふな。若しさるならば、賢人には外れたる事なり。若しさるならば、妻子が後に留りて恥をいふとは思はねども、男の別れの惜しさに、他人に向ひて我が夫の恥を皆語るなり。此れ偏へに夫の恥にはあらず、我が振舞の惡かりつる故なり。人身は受け難し、爪の上の土、人身は持ち難し、草の上の露、百二十まで持ちて名を下して死せんよりは、生きて一日なりとも名をあげん事こそ大切なれ。中務三郎左衛門尉は、主の御爲にも、佛法の御爲にも、世間の心根もよかりけりと、鎌倉の人人の口に讃はれ給へ。あなかしこ、あなかしこ。藏の財よりも身の財すぐれたり、身の財よりも心の財第一なり。此御文を御覽あらんよりは、心の財を積ませ給ふべし。

【八】第一秘藏の物語あり、書いて參らせん。日本始まりて國王二人、人に殺され給ふ。

【九】支那先哲の教を示し隱忍自重を說き勸む。

其一人は崇峻天皇なり。此王は欽明天皇の御太子、聖德太子の伯父なり。人王第三十三代の皇にて在せしが、聖德太子を召して勅宣下さる。汝は聖智の者と聞く、朕を相して參らせよと云云。太子三度まで辭退申させ給ひしかども、頻りの勅宣なれば止み難くして、敬ひて相し參らせ給ふ。君は人に殺され給ふべき相ましますと。王の御氣色かはらせ給ひて、何と云ふ證據を以て、此事を信ずべき。太子申させ給はく、御眼に赤き筋通りて候、人にあだまるる相なり。皇帝勅宣を重ねて下し、いかにしてか此難を脫れん。太子の云はく、免れ難し。但し五常と申す兵あり、此を身に離し給はずば、害を脫れ給はん。此兵をば內典には忍波羅密と申して、六波羅密の其一なりと云云。且らくは此を持ち給ひて在せしが、ややもすれば腹惡き王にて、此を破らせ給ひき。有る時、人猪の子を參らせたりしかば、笄をぬきて猪の子の眼をづぶ〳〵と刺させ給ひて、いつか憎しと思ふ奴を斯くせんと仰せありしかば、太子其座に在せしが、あら淺ましや淺ましや、君は一定人にあだまれ給ひなん。此の御言は身を害する劍なりとて、太子多くの財を取り寄せて、御前に此言を聞きし者に御引出物ありしかども、有る人蘇我の大臣馬子と申せし人に語りしかば、馬子我が事なりとて、東漢直駒、直磐井と申す者の子を語らひて王を害し參らせつ。されば王位の身なれども、思ふ事をばたやすく申さぬぞ。

【九】孔子と申せし賢人は九思一言とて、九たび思ひて一たび申す。周公旦と申せし人は沐する時に三度握り、食する時に三度吐き給ひき。たしかに聞しめせ、我ばし恨みさせ

〔◇〕縮遺一七〇二頁

弘安元年（五十七歳）の作。三澤小次郎に賜ひし書。一代御弘通の法門は佐渡已前は未顯眞實、佐渡こそ眞實本懐の法門にして此法門は佛教の大革命を起すもの、世界は此法門に依りて統一せらる可きものなることを嚴誡し、併せて眞言亡國なる旨を明す。

【一】供養に對する謝辭を述ぶ。

【二】正法正師には値ひ難く隨つて成佛の至難なるを明す。

給ふた。佛法と申すは之にて候ぞ。一代の肝心は『法華經』、『法華經』の修行の肝心は『不輕品』にて候なり。不輕菩薩の人を敬ひしはいかなる事ぞ。教主釋尊の出世の本懐は人の振舞にて候ひけるぞ。あなかしこ、あなかしこ。賢きを人と云ひ、はかなきを畜といふ。

建治三年丁丑九月十一日　日蓮　花押

四條左衛門尉殿御返事

三澤鈔

【一】柑子一百、昆布海苔於胡等の生の物遥々と、態態山中へ送り給て候。並に内房の尼御前の小袖一つ給ひ畢んぬ。

【二】さては方方の御心ざし委しく見解き候。抑佛法を學する者は大地微塵より多けれども、實に佛に成る人は爪上の土よりも少しと、大覺世尊『涅槃經』に慥に說かせ給ひて候ひしを、日蓮見まいらせて候て、如何なれば斯くは難かるらんと考へ候ひし程に、實にも爾なるらんと思ふ事候。佛法を學すれども或は我が心の愚なるに依り、或は設ひ智慧は賢き様なれども師に依りて我が心の曲れるを知らず、佛教を直しく習ひ得る事難し。設ひ明師並に實經に値ひ奉りて、正法を得たる人なれども、生死を出で佛に成らんとする時には、必

【二】眞正法華の行者たる可く公私の法難を顧みずして法華經を弘み通せし聖意を明す。

影の身に添ふが如く、雨に雲の有るが如く、三障四魔と申して七の大事出現す。設ひ辛くして六は過れども第七に値ひぬれば佛に成る事難し。其六は且く置く。第七の大難は天子魔と申す物也。設ひ末代の凡夫、一代聖教の御心を悟り「摩訶止觀」と申す大事の御文の心を意得て佛になる可きに候ひけるを、第六天の魔王此事を見て驚いて云く、「あら淺猿や此の者此の國に跡を止むるならば、彼が我身の生死を出るかはさて置きぬ、亦人を導くべし。又此國土を押へ取て我土を淨土となす。如何せん」とて、欲、色、無色の三界の一切の眷屬を催し仰せ下して云く、「各各能能に隨つて彼の行者を惱まして見よ。其れに叶はずば彼れが弟子檀那並に國土の人の心の内に入り代りて、或は諫め或は威して見よ。其れに叶はずば我れ自ら打下りて國主の身心に入り替りて威して見むに爭か止まざるべき。」と僉議し候なり。

【三】日蓮生よりかかるべしと見聞き候て、末代の凡夫今生に佛に成る事は大事にて候ひけり。釋迦佛の佛に成給ひし事を諸經に載られて候に、第六天の魔王のいたしける大難何にも忍ぶ可しとも見え候はず。提婆達多、阿闍世王の惡事は偏へに第六天の魔王の謀とこそ見えて候へ。まして「如來現在猶多怨嫉況滅度後」と申して、大覺世尊の御時の御難だにも、凡夫の身日蓮等が樣なる者は片時一日も忍び難かる可し。まして五十餘年が間の種種の大難をや。まして、末代には是等には百千萬億倍勝れたるべく候なる大難をば、爭か忍び候べきと心に存じて候ひし程に、聖人は未萠を知ると申して三世

【四】外護の人人相携へて成佛す可きを誓ふ。

の中に未來の事を知るを實の聖人とは申す也。而るに日蓮は聖人にはあらざれども日本國の今の代にあたりて此國の亡ぶべき事を兼て知りて候ひしに、是こそ佛の說せ給ひて候『況滅度後』の經文に當りて候へ。是を申し出すならば佛の指せ給ひて候未來の『法華經』の行者也。知つて而も申さずば世世生生の間、瘖瘂に生れん上、教主釋尊の大怨敵、其國の國主の大讎敵他人にあらず。後生は又無間大城の人是也と考へ見て、或は衣食に責られ、或は父母兄弟師匠同行には諫られ、或は國主萬民に嚇されしに、少もたゆむ心あるならば、一度に申し出さじと、年來日來心を誡め候ひしが、抑過去遠遠劫より定めて『法華經』にも値ひ奉り菩提心をも發しけん、なれども設ひ一難二難をば忍びけれども大難次第に續き來りければ退しけるにや。今度如何なる大難にも退せぬ心ならば申し出すべしとて申し出でて候ひしかば、經文に違はず此の度度の大難には値ひて候ひしぞかし。今は一定也。何なる大難にも忍へてんと我が身に當つて試みて候へば、不審なき故に此山林には栖み候也。

【四】各は又設ひ捨させ給ふとも、一日片時も我が身命をたすけし人人なれば他人に似させ給ふべき。本より我れ一人いかにもなるべし。我いかにならんとも心に退轉なくして佛に成るならば、殿原をば導きたてまつらんと約束申して候ひき。各は日蓮程も佛法をば知らせ給はざる上俗也、所領あり、妻子あり、所從あり、何にも叶ひがたかるべし。只僞り愚に御坐せよかしと申し候ひき。さてこそ候べけれ。何事に付けても捨まゐらせ候べき。

ゆめゆめ他の洩らすべからず。

【五】又法門の事は佐渡の國へ流され候ひし以前の法門は但佛の爾前の經と思召せ。此國の國主我代をもたもつべくば眞言師等にも召合せ給はんずらん。爾時に眞の大事をば申すべし。弟子等にも内内申すならば披露して彼等知りなんず。さらばよも合じと思ひて各々にも申さざりし也。而るに去る文永八年九月十二日の夜龍の口にて頸を刎られんとせし時より後、不便也、我に付たりし者共に眞の事を云はざりけりと思ひて、佐渡の國より弟子共に内内申す法門あり。此は佛より後、迦葉、阿難、龍樹、天親、天台、妙樂、傳教、義眞等の大論師大人師は知つて而も御心の中に秘せさせ給ひて口より外には出し給はず。其故は佛制して云く、我滅度の後末法に入らずば此大法云ふべからずと有りし故也。日蓮は其御使にはあらざれども其時剋に當る上、存外に此法門を悟りぬれば、聖人の出させ給ふまで先づ序分にあらあら申す也。而るに此法門出現せば正法像法に論師人師の申せし法門は皆日出て後の星の光、巧匠の後に拙きを知るなるべし。此時には正像の寺塔の佛像僧等の靈驗は皆消失て但此大法のみ一閻浮提に流布すべしと見えて候。各々はかかる法門に契ある人なればたのもしと思すべし。

【六八】又内房の御事は御歳寄せ給ひて御わたりありし。痛しく思ひまいらせ候ひしかども、「氏神へ參りてある次で」と候ひしかば、見參に入るならば定めて罪深かるべし。其故は神は所從なり、『法華經』は主君也。所從の次でに主君への見參は世間にもおそれ候。其

【五】佐前は未顯眞實、此よりこそ日蓮の本懷たる法門を說出さんとの豫告なり。

【實の大事、内内申す法門】開目鈔(人本尊開顯)本尊鈔(法本尊開顯)の二鈔を指す。

【六八】十方の諸佛並に諸神、凡て法華守護神なる旨を明す。

【七】東寺台寺の人人を難じ眞言は亡國の邪法なることを明す。

上尼の御身になり給ひては、先づ佛を先とすべし。旁の御科ありしかば見參せず候。此又尼御前一人には限らず。其外の人人も下部の湯の次でと申す者を數多追返して候。尼御前は親の如くの御年也。御歎き痛はしく候ひしかども、此義を知らせまいらせんが爲也。

【七】又殿は一昨年かの見參の後虛事にてや候ひけん。御所勞と申せしかば、人を遣はして問んと申せしに、此御房達の申せしは「それはさる事にて候へど人を遣はしたらば不審や思はれ候はんずらん」と申せしかば、世間の習ひさもやあるらん。げに御心ざし實なる上、御所勞ならば御使ひもありなんと思ひしかども、御使も無りしかば、いつはりおろかにておぼつかなく候ひつる上、無常は常の習なれども、去年今年は世間法に過てみ見え參らすべしとも覺えず。戀しくこそ候ひつるに、御音信あるうれしとも申す計りなし。尼御前にも此由つぶつぶと語り申させ給ひ候へ。法門の事こまごまと書つけ申すべく候へども、事久しく成候へばとどめ候。但し禪宗と念佛宗、律宗等の事は少少前にも申して候。眞言宗が殊に此國と唐土をば亡して候ぞ。善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏、弘法大師慈覺大師、智證大師此六人が大日の「三部經」と「法華經」との優劣に迷惑せしのみならず、三三藏事をば天竺によせて兩界を造り出し誑惑しけるを、三大師打ぬかれて日本國に習ひ渡し、國臣並に萬民に傳へ、漢土の玄宗皇帝も代を亡し、日本國も漸く衰へて、八幡大菩薩の百王の誓も破れて、八十二代隱岐の法皇代を東に取られ給ひしは、偏に三大師の大僧等が祈りし故に、「還著於本人」して候。關東は此惡法惡人を對治せし故に、十八代をつぎ

⊠縮遺一九二九頁
弘安三年（五十九歳）檀越秋元太郎兵衛尉に與へて、本化妙宗の折伏立行と禁斷謗法の次第を明かし、國家と共に成佛を期するの大義を宣したるもの。
【一】供養に對する感謝の辭。
【二】器の覆漏汙雜の四種の例を擧げて純一なる法華經の信行を說示す。

て百王にこゆべく候ひつるを、又彼惡法の者共を御歸依ある故に、一國には主無ければ梵、釋、日月四天の御計ひとして、他國に仰せ付て攻して御誓あり、又『法華經』の行者を違はして御棄あるをあやしめずして、彼の法師等に心を合せ世間出世の政道を破り、法に過て『法華經』の御敵にならせ給ふ。既に時過ぎぬれば此國破れなんとす。疫病は既に軍せんしるしなり。あさましあさまし。

三月三日　　日蓮　華押

三澤殿

秋元御書

【一】筒御器一具付三十、並びに盞付六十送り給び候ひ畢んぬ。御器と申すはうつはものと讀み候。大地くぼければ水たまる、青天淨ければ月澄めり。月出でぬれば水淨し、雨降れば草木昌へたり。器は大地のくぼきが如し、水たまるは池に水の入るが如し。月の影を浮ぶるは、『法華經』の我等が身に入らせ給ふが如し。

【二】器に四の失あり、一には覆と申して、うつぶける也。又は覆へす、又は蓋をおほふ也。二には漏と申して、水もる也。三には汙と申して、けがれたる也。水淨けれども、糞の入りたる器の水をば用ゆる事なし。四には雜也。飯に或は糞、或は石、或は沙、或は

【筒の御器】略して筒ともいふ、竹筒の形せる器、液體を容るるに用ふ

土なんどを雜へぬれば人食ふ事なし。器は我等が心身を表す。我等が心は器の如し。口も器、耳も器なり。『法華經』と申す佛の智慧の法水を、我等が心に入れぬれば、或は打返し、或は耳に聞かじと左右の手を二つの耳に覆ひ、或は口に唱へじと吐き出しぬ。譬へば器を覆するが如し。或は少し信ずる樣なれども、又惡緣に値うて信心薄くなり、或は打ち捨て、或は信ずる日はあれども、捨つる日もあり。是は水の漏るが如し。或は『法華經』を行ずる人の、一口は『南無妙法蓮華經』一口は南無阿彌陀佛なんど申すは、飯に糞を雜へ、沙石を入れたるが如し。『法華經』の文に「但大乘經典を受持することを樂うて、乃至、餘經の一偈をも受けざれ」等と說くは是れなり。世間の學匠は、『法華經』に餘行を雜へても苦しからずと思へり。日蓮もさこそ思ひ候へども、經文は爾らず。譬へば后の大王の種子を姙めるが、又民とどつげば、王種と民種と雜りて、天の加護と氏神の守護とに捨てられ、其國破るる緣となる。父二人出で來れば、王にもあらず、民にもあらず、人非人なり。『法華經』の大事と申すは是れ也。種熟脫の法門は『法華經』の肝心なり。三世十方の佛は、必ず『妙法蓮華經』の五字を種として佛になり給へり。南無阿彌陀佛は佛種にはあらず。能く能く此事を習ひ給ふべし。是は雜也。此覆漏汙雜の四の失を離れて候器をば完器と申して、全き器なり。塹堤漏らざれば、水失する事なし。信心の心全ければ、平等大慧の智水乾く事なし。今此の筒の御器は固く厚く候上、漆淨く候へば、『法華經』の御信力の堅固なる事を顯はし給ふか。毘沙門天は佛に四つの鉢を進らせて、四天下第一の福天と

【三】身の迫害も顧みず破邪顯正して法門を說くが故に忍難弘法より言はば日蓮は日本第一の人なることを述ぶ。

【九方】十方の中、西方を除く九方を指す。上、下、東、西、南、北、東南、西南、東北、西北の九方。

云はれ給ふ。淨徳夫人は雲雷音王佛に八萬四千の鉢を供養し進らせて、妙音菩薩と成り給ふ。今『法華經』に鉢御器三十。桑六十進らせて、争でか佛にならせ給はざるべき。

【三】扶桑日本國と申すは十の名あり、扶桑、野馬臺、水穗、秋津洲等なり。別しては六十六箇國、島二つ、長さ三千餘里、廣さは不定也。或は百里、或は五百里等。五畿七道、郡は五百八十六、郷は三千七百二十九、田代は上田一萬一千一百二十町、乃至八十八萬五千五百六十七町、人數は四十九億八萬九千六百五十八人也。神社は三千一百三十二社、寺は一萬一千三十七所、男は十九億九萬四千八百二十八人、女は二十九億九萬四千八百三十人なり。其男の中に、只日蓮第一の者なり。何事の第一とならば、男女に惡まれたる第一の者なり。其故は、日本國に國多く人多しと雖も、其心一同に南無阿彌陀佛を口ずさみとす。阿彌陀佛を本尊とし、九方を嫌ひて西方を願ふ。設ひ『法華經』を行ずる人も、眞言を行ふ人も、戒を持つ者も、智者も愚人も餘行を傍として、念佛を正とし、罪を消さん謀は名號たり。故に或は六萬八萬、四十八萬遍、或は十遍百遍千遍なり。而るを日蓮一人、阿彌陀佛は無間の業、禪宗は天魔の所爲、眞言は亡國の惡法、律宗持齋等は國賊也と申す故に、上一人より下萬民に至るまで、父母の敵、宿世の敵、謀反夜討強盜よりも、或は畏れ或は瞋り、或は罵り或は打つ。是を譽る者には所領を與へ、是を責むる者をば其內を出し、或は過料を引かせ、殺害したる者をば褒美なんどせらるる上、兩度まで御勘氣を蒙れり。當世第一の不思議の者たるのみならず、人王九十代、佛法渡りては七百餘年なれ

【四】東台兩寺、念佛禪律、悉く謗法宗にして國難私災の原因たる旨を明す。

【尊成】後鳥羽上皇の御名。

ども、斯る不思議の者なし。日蓮は文永の大彗星の如し。日本國に昔より無き天變なり。日蓮は正嘉の大地震の如し。秋津洲に始めての地夭なり。日本國に代始まりてより、已に謀叛の者二十六人、第一は大山の王子、第二は大石の山丸、乃至第二十五人は頼朝、第二十六人は義時なり。二十四人は朝に責められ奉り、獄門に首を懸けられ、山野に骸を曬す。二人は王位を傾け奉り、國中を手に握る。王法既に盡きぬ。此等の人人も、日蓮が萬人に惡まれたるには過ぎず。

【四】其由を尋ぬれば、『法華經』には最第一の文あり。然るを弘法大師は法華最第三、慈覺大師は法華最第二、智證大師は慈覺の如し。今叡山、東寺、園城寺の諸僧、『法華經』に向ひては、法華最第一と讀めども、其義をば第二第三と讀む也。公家と武家とは子細は知しめさねども、御歸依の高僧等皆此義なれば、偏に一同の義なり。其外禪宗は『教外別傳』と云云。『法華經』を蔑如する言なり。念佛宗は『千中無一』、『未有一人得者』と申す。心は『法華經』を念佛に對して、擧げて失ふ義なり。律宗は小乘なり。正法の時すら佛遮し給ふ事なし。況んや末法に之を行じて、國主を誑惑し奉るをや。[illegible]の三女が、三王を誑して代を失ひしが如し。斯る惡法國に流布して、『法華經』を失ふ故に、安德尊成等の大王は、天照大神、正八幡に捨てられ、或は海に沈み、或は島に放たれ給ひ、相傳の所從等に傾けられ給ひしは、天に捨てられさせ給ふ故ぞかし。『法華經』の御敵を御歸依ありしかども是を知る人なければ、其失を知る事もなし。『智人は起を知り、蛇は自ら蛇

を離る」とは是なり。日蓮は智人に非ざれども、蛇は龍の心を知り、烏の世の吉凶を計るが如し。日蓮ばかりを勘へ得て候なり。此事を申すならば須臾に失に當るべし。申さずば又大阿鼻地獄に墮つべし。

【五】謗人墮獄を示す。併せて不惜身命の信行を勸發す。

【五】『法華經』を習ふには二の義あり。一には謗人、勝意比丘、苦岸比丘、無垢論師、大慢婆羅門等が如し。彼等は三衣を身に纏ひ、一鉢を眼に當て、二百五十戒を堅く持ちて、而も大乘の讎敵と成りて、無間大城に墮ちにき。今日本國の弘法、慈覺、智證等は、持戒は彼等が如く、智慧は又彼の比丘に異らず。但『大日經』眞言第一、『法華經』第二第三と申す事、百千に一つも日蓮が申す樣ならば、無間大城にやおはすらん。此事は申すも恐れあり。況して書付までは如何と思ひ候へども、『法華經』最第一と説かれて候に、是を二三等と讀まん人を聞いて、人を恐れ國を恐れて申さずば、『即ち是れ彼が怨』と申して、一切衆生の大怨敵たるべき由、經と釋とに載せられて候へば申し候なり。人を恐れず代を憚らず云ふ事、『我不愛身命、但惜無上道。』と申すは是なり。不輕菩薩の惡口杖石も他事にあらず。世間を恐れざるにあらず。唯『法華經』の責めの苦ろしければ也。例せば祐成時宗が大將殿の陣の内を簡ばざりしは、敵の戀しく恥の悲しかりし故ぞかし。此は謗人なり。

【六】謗家墮獄を説く。誹謗正法の家に生れし者或は其弟子は地獄に墮つ。

【六】謗家と申すは、都て一期の間『法華經』を謗せず、晝夜十二時に行ずれども、謗家に生れぬれば、必ず無間地獄に墮つ。例せば勝意比丘、苦岸比丘の家に生れて、或は弟

【七】謗國墮獄を說く。謗法者其國に充滿する時は國運衰微する旨を明す。

子と成り、或は檀那と成りし者どもが、心ならず無間地獄に墮ちたる是れなり。譬へば義盛が方の者、軍をせし者はさて置きぬ。腹の内にありし子も產むを待たれず、母の腹を裂かれしが如し。今日蓮が申す弘法、慈覺、智證の三大師の『法華經』を正しく無明の邊域、虛妄の法と書かれて候は、若し『法華經』の文實ならば、叡山、東寺、園城寺、七大寺、日本一萬一千三十七所の寺寺の僧は如何候はんずらん。先例の如くたらば、無間大城疑ひなし。是は謗家なり。

【七】謗國と申すは、謗法の者其國に住すれば、其一國皆無間大城になるなり。大海へは一切の水集り、其國は一切の禍集る。譬へば山に草木の茂きが如し。三災月月に重なり、七難日日に來る。飢渴發れば其國餓鬼道と變じ、疫病重なれば其國地獄道となる。軍起れば其國修羅道と變ず。父母兄弟姉妹を簡ばず、妻とし夫と憑めば、其國畜生道となる。死して三惡道に墮つるにはあらず、現身に其國四惡道と變ずる也。此を謗國と申す。例せば大莊嚴佛の末法、師子音王佛の濁世の人人の如し。又『報恩經』に說かれて候が如くんば、過去せる父母兄弟姉妹一切の人、死せるを食し又生きたるを食す。今日本國亦復是の如し。眞言師、禪宗、持齋等、人を食する者、國中に充滿せり。是れ偏へに眞言の邪法より事起れり。龍象房が人を食ひしは萬が一つ顯はれたるなり。彼に習ひて人の肉を或は猪鹿に交へ、或は魚鳥に切雜へ、或はたたき加へ、或は鮨として賣る。食する者數を知らず。皆天に捨てられ、守護の善神に放されたるが故なり。結句は此國他國より責めら

【八】謗法退治の大功徳を明す。

【九】表面のみ法華経に移りたるも心移らざれば罪謗法者に同じき旨を述ぶ。

れ、自国同志打して、此国変じて無間地獄と成るべし。日蓮此の大なる失を兼て見し故に、與同罪の失を脱れんが為め、仏の呵責を思ふ故に、知恩報恩の為め、国の恩を報ぜんと思ひて、国主並びに一切衆生に告げ知らしめしなり。

【八】不殺生戒と申すは、一切の諸戒の中の第一なり。五戒の初めにも不殺生戒、八戒、十戒、二百五十戒、五百戒、『梵網』の十重禁戒、『華厳』の十無盡戒、『瓔珞経』の十戒等の初めには、皆不殺生戒なり。儒家の三千の禁の中にも、大辟こそ第一にて候へ。其故は『遍満三千界無有直身命』と申して、三千世界に満つる珍宝なれども、命に替る事はなし。蟻を殺す者なほ地獄に堕つ、況んや魚鳥等をや。青草を切る者猶ほ地獄に堕つ、況んや死骸を切る者をや。是の如き重戒なれども、『法華経』の敵に成れば、此を害するは第一の功徳と説き給ふなり。況んや供養を展ぶべしや。故に仙豫国王は五百人の法師を殺し、覚徳比丘は無量の謗法者を殺し、阿育大王は十萬八千の外道を殺し給ひき。此等の国王比丘等は閻浮第一の賢王、持戒第一の智者なり。仙豫国王は釈迦仏、覚徳比丘は迦葉仏、阿育大王は得道の仁なり。今日本国も又是の如し。持戒破戒無戒、王臣萬民を論せず。一同に『法華経』誹謗の国なり。設ひ身の皮を剥ぎて『法華経』を書き奉り、肉を積みて供養し給ふとも、必ず国も滅び身も地獄に堕ち給ふべき大科あり。唯眞言宗、念佛宗、禅宗、持齋等の身を禁めて『法華経』に寄せよ。

【九】天台の六十巻を空に浮べて、国主等には智人と思はれたる人人の、或は智の及ば

【一〇】台家の末學謗法罪を犯せる史的事實を擧ぐ。

ざるか、或は知れども世を恐るるかの故に、或は眞言宗をほめ、或は念佛、禪、律等に同ずれば、彼等が大科には百千超えて候。例せば成良義村等が如し。慈恩大師は『玄贊』十卷を造りて、『法華經』を讃めて地獄に墜つ。此人は太宗皇帝の御師、玄奘三藏の上足、十一面觀音の後身と申すぞかし。音は『法華經』に似たれども、心は爾前の經に同ずる故なり。嘉祥大師は『法華玄』十卷を造りて、既に無間地獄に墜つべかりしが、『法華經』を讀む事を打捨て天台大師に仕へしかば、地獄の苦を脱れ給ひき。

【一〇】今法華宗の人人も又是の如し。比叡山は『法華經』の御住所日本國は一乘の御所領なり。而るを慈覺大師は『法華經』の座主を奪ひ取て眞言の座主となし、三千の大衆も又其所從と成りぬ。弘法大師は法華宗の檀那にて御坐します嵯峨の天皇を奪ひ取りて、內裏を眞言宗の寺と成せり。安德天皇は明雲座主を師として、賴朝の朝臣を調伏せさせ給ひし程に、右大將殿に罰せらるるのみならず、安德は西海に沈み、明雲は義仲に殺され給ひき。尊成王は天台座主慈圓僧正、東寺御室竝びに四十一人の高僧等を請ひ下し奉りて、內裏に大壇を立てて、義時右京權太夫殿を調伏せし程に、七日と申せし六月十四日に洛陽破れて、王は隱岐國或は佐渡島に遷され、座主御室は或は責められ、或は思ひ死に死に給ひき。世間の人人此の根源を知る事なし。此れ偏へに『法華經』『大日經』の勝劣に迷へる故なり。今も又日本國大蒙古國の責めを得て、彼の不吉の法を以て御調伏を行はると承はる。又日記分明なり。此事を知らん人、爭でか歎かざるべき。

【二】我身は善人ならずとも謗家謗國の失を逸れんとして忠諫を奉ずる行を示す

【三】謗法者を知つて之を責めざるは與同罪なるを說く。

【二】悲いかな我等誹謗正法の國に生れて大苦に値はん事よ。設ひ謗身は脫ると云へども、謗家謗國の失如何せん。謗家の失を脫れんと思はば、父母兄弟等に此事を語り申せ。或は悪まるるか、或は信ぜさせ奉るか。謗國の失を脫れんと思はば、國主を諫曉し奉りて死罪か流罪かに行はるべきなり。「我不愛身命、但惜無上道」と說かれ、「身は輕く法は重し、身を死して法を弘む」と釋せられし是れなり。過去遠遠劫より、今に佛に成らざりける事は、加樣の事に恐れて、云ひ出さざりける故なり。未來も亦復是の如くなるべし。今日蓮が身に當りてつみ知られて候。設ひ此事を知る弟子等の中にも、當世の責の恐ろしさと申し、露の身の消え難きに依りて、或は落ち、或は心ばかりは信じ、或はとかうす。御經の文に「難信難解」と說かれて候が、身に當つて貴く覺え候ぞ。謗ずる人は大地微塵の如し、信ずる人は爪上の土の如し。謗ずる人は大海、進む人は一滴。天台山に龍門と申す所あり、其瀧百丈なり。春の始に魚集りて此瀧へ登るに、百千に一つも登る魚は龍と成る。此瀧の早き事矢にも過ぎ、電光にも過ぎたり。登り難き上に、春の始めに此瀧に漁夫集りて、魚を取る網を懸くる事百千重、或は射て取り、或は酌んで取る。鷲、鵰、鴟梟、虎、狼、犬、狐、集りて、晝夜に取り噉ふなり。十年二十年に一つも龍となる魚なし。例せば凡下の者の昇殿を望み、下女が后に成らんとするが如し。『法華經』を信ずる事、此にも過ぎて候と思食せ。

【三】常に佛禁めて言く「何なる持戒、智慧高く御坐して、一切經並びに『法華經』を

【三】身延の棲居を叙べて、再び供養を謝す。

進退せる人なりとも、「法華經」の敵を見て、責め罵り、國主にも申さず、人を恐れて默止するならば、必ず無間大城に墮つべし」。譬へば我は謀叛を發さねども、謀叛の者の知りて國主にも申さねば、與同罪は彼の謀叛の者の如し。南岳大師の云く、「『法華經』の讎を見て呵責せざる者は謗法の者なり、無間地獄の上に墮ちん」と。見て申さぬ大智者は、無間の底に墮ちて、彼の地獄のあらん限りは出づべからず」。日蓮此禁めを恐るる故に、國中を責めて候程に、一度ならず流罪死罪に及びぬ。今は罪も消え過も脱れなんと思ひて、鎌倉を去りて此山に入つて七年なり。

【三】此山の爲體、日本國の中には七道あり。七道の内に東海道十五箇國、其中に甲州飯野、御牧、波木井、三箇鄕の内、波木井と申す。此鄕の内戌亥の方に入りて、二十餘里の深山あり。北は身延山、南は鷹取山、西は七面山、東は天子山なり。板を四枚衝立てたるが如し。此外を廻りて、四つの河あり、北より南へ富士河、西より東へ早河、此は後なり。前に西より東へ波木井河、中に一つの瀧あり、身延河と名けたり。中天竺の鷲峰山を此處に移せるか、將た又漢土の天台山の來れるかと覺ゆ。此の四山四河の中に、手の廣さ程の平かなる處あり。爰に庵室を結んで天雨を脱れ、木の皮を剝ぎて四壁とし、自死の鹿の皮を衣とし、春は蕨を折りて身を養ひ、秋は果を拾ひて命を支へ候ひつる程に、去年の十一月より雪降り積りて、改年の正月今に絕ゆる事なし。庵室は七尺、雪は一丈、四壁は氷を壁とし、軒の氷柱は道場莊嚴の瓔珞の玉に似たり。内には雪を米と積む。本より

◇縮遺八九四頁、文永九年（五十一歳）の作。本鈔は、諸宗の祈禱の叶はざることと、眞實に祈禱の叶ふは法華經によるのみなることを、經文道理現證を以て論じたる書。

【一】諸宗の祈は叶はず、法華經のみ叶ふを標示し、經文を引きて二乘成佛の經にて、必ず守護あるべき理を、人畜の古例、實事を示して況論す。

人も來らぬ上、雪深くして道塞がり、問ふ人もなき處なれば、現在に八寒地獄の業を身に償へり。生きながら佛にはならずして、又寒苦鳥と申す鳥にも相似たり。頭は剃る事なければ鶉の如し、衣は氷に閉ぢられて鴛鴦の羽を氷の結べるが如し。斯る處へは古へ眤びし人も問はず、弟子等にも捨てられ候ひつるに、此御器を給ひて、雪を盛りて飯と觀じ、水を飲んで漿と思ふ。志のゆく所、思ひ遣らせ給へ。又々申す可く候。恐恐謹言。

弘安三年正月二十七日　日蓮花押

秋元太郎兵衞殿御返事

祈禱鈔

【一】問うて云く、「華嚴宗、法相宗、三論宗、小乘の三宗、眞言宗、天台宗の祈りをなさんに、何れか必ずしるしあるべきや。」答へて云く、「佛説なれば何れも一往は祈りとなるべし。但し『法華經』を以て祈らむ祈りは必ず祈りとなるべし。」問うて云く、「其故如何。」答へて云く、「二乘は大地微塵劫を經て、先四味の經を行ずとも成佛すべからず。『法華經』は須臾の間此を聞いて佛になれり。若し爾らば舍利弗、迦葉等の千二百、萬二千、總じて一切の二乘界の佛は、必ず『法華經』の行者の祈りをかなへ給ふべし。又行者の苦にもかはるべし。故に『信解品』に云く、『世尊は大恩まします、稀有の事を以て憐愍教化して我等を利

益し給ふ。無量億劫にも、誰か能く報ずる者あらん。手足をもて供給し、頭頂をもて禮敬し、一切をもて供養すとも、皆報ずること能はず。若は以て頂戴し、兩肩に荷負して恒沙劫に於て心を盡して恭敬し、又美饌無量の寶衣、及び諸の臥具、種種の湯藥を以てし、牛頭栴檀及び諸の珍寶を以て塔廟を起て、寶衣を地に布き、斯の如き等の事、以て供養すること、恒沙劫に於てすとも、亦報ずること能はじ。」等云云。此文の心は、四大聲聞が『譬喩品』を聽聞して佛になるべき由を心得て、佛と『法華經』との恩の報じ難き事を説けり。

されば二乘の御爲には、此經を行ずる者をば父母よりも愛子よりも、兩眼よりも身命よりも、大事にこそ思しめすらめ。舍利弗、目連等の諸大聲聞は、一代聖教いづれをも讃歎せん行者を捨てんと思す事はあるべからずとは思へども、爾前の諸經は少し怨み思す事も有らん。佛法の中に於て已に敗種の如し』なんど、したたかに戒められ給ひし故なり。今の華光如來、名相如來、普明如來なんどならせ給ひたる事は、思はざる外の幸なり。例せば崑崙山の崩れて寶の山に入りたる心地してこれおはしぬらめ。されば領解の文に云く、『無上の寶珠、求めざるに自ら得たり。』等云云。されば一切の二乘界、『法華經』の行者をまぼり給ふ事は疑ひあるべからず、あやしの畜生なんども、恩をば報ずる事は候ぞかし。烏と申す鳥あり、必ず母の死なんとする時孝をなす。狐は塚を跡にせず。畜生すら猶ほ此の如し、況んや人類をや。されば王壽と云ひし者道を行きしに飢ゑ疲れたりしに、路の邊に梅の樹あり其實多し、壽取りて食して飢やみぬ。我此の梅の實を食して氣力を増す。其

【生飯】飯の初穗をいふ。

【二】法華經は菩薩凡夫の成佛の經、佛九横の大難を忍びて說かれし一大事の經、佛の御さとり、御魂の經なるを述べて、佛佛の守あるべき所以を示す。

【輪王】轉輪王の略。

恩を報ぜずばあるべからずと申して衣を脱ぎて梅に懸けて去りにき。王升と云ひし者は道を行くに水に渇して、河の水を飲んで錢を河に入れて是を水の値とす。龍は必ず袈裟を懸けたる僧を守る。佛より袈裟を給びて龍宮城の愛子に懸けさせて、金翅鳥の難を免るる故なり。金翅鳥は必ず父母孝養の者を守る。龍は須彌山を動して金翅鳥の愛子を食す。金翅鳥は佛の教によつて父母の孝養をなすとき、僧の生飯を須彌山の頂に置きて龍の難を免るるが故なり。天は必ず戒を持ち善を修する者を守る。人間界に戒を持ち善を修する者なければ、人間界より死して多く修羅道に生ず。修羅多勢なれば傲りをなして、必ず天を侵す。人間界に戒を持ち善を修する者多ければ、人死して必ず天に生ず。天多ければ修羅恐れをなして天を侵さず。故に戒を持ち善を修する者をば天必ず之を守る。何に況んや二乘は六凡より戒德も勝れ、智慧賢き人人なり。いかでか我成佛を遂げし『法華經』を行ぜん人をば捨て給ふべきや。

【二】又一切の菩薩並びに凡夫は、佛にならんが爲に四十四年の經經を無量劫が間行ぜしかども、佛になる事なかりき。而るに『法華經』を行じて佛になりて、今十方世界におはします。佛の三十二相八十種好を具へさせ給ひて、九界の衆生に仰がれ給ふ事は、月を星の回るが如く、須彌山を九山の回るが如く、日輪を四州の衆生の仰ぐが如く、輪王を萬民の仰ぐが如く仰がれさせ給ふは、『法華經』の恩德にあらずや。されば佛、『法華經』に戒めてのたまはく、『復舍利を安ずることを須ゐざれ。』『涅槃經』に云く、『諸佛の師とする所

【三二】法華經に成佛せる菩薩の數の

は所謂る法なり、是故に如來恭敬供養す。」等云云。「法華經」には、我が舍利を「法華經」に並ぶべからず、『涅槃經』には、諸佛は「法華經」を供敬供養すべしと說かせ給へり。佛は此の「法華經」をさとりて佛になり給ふ。而るを人に說き聞かせ給はずば、佛種を斷たせ給ふ失あり。此故に釋迦如來は此娑婆世界に出て說かんとせさせ給ひしを、元品の無明と申す第六天の魔王が一切衆生の身に入りて、佛をあだみて說かせ參らせじとせしなり。所謂る波瑠璃王の五百人の釋子を殺し、鴦崛摩羅が佛を追ひ、提婆が大石を放ち、旃遮婆羅門女が鉢を伏せて佛の御子と云ひし、婆羅門城に佛を入れ奉らじとせしかば道に糞を立て、井には糞を入れ、門には逆木を引き、食には毒を入れし、佛を惡む故に、華色比丘尼を殺せし、目連が竹杖外道に殺され、迦留陀夷が馬糞に埋れし、皆佛を怨みし故なり。而れども佛樣樣の難を逃れて成道四十二年御歲七十二歲の時中天竺王舍城の丑寅、耆闍崛山と申す山にして、「法華經」を說き始められて、八年まで說かせ給ひて、東天竺倶尸那城、跋提河の邊にして御年八十と申せし、二月十五日の夜半に御涅槃に入らせ給ふ。而りといへども御悟りをば「法華經」と說き置かせ給へば、此經の文字は即ち釋迦如來の御魂なり。一一の文字は佛の御魂なれば、此經を行ぜん人をば、釋迦如來我が御眼の如く守り給ふべし。人の身に影の添るが如くそはせ給ふらん。いかでか祈りとならせ給はざるべき。

【三二】一切の菩薩は又初め「華嚴經」より四十餘年が間、佛にならんと願ひ給ひしかど

多きこと及び法華經の說時より今日まで日數多く經ざることを述べ、諸天善神の守護あるべきを論ず。

【略開三顯一】方便品に略して三乘方便にて眞實には一佛乘の爲に假に設けしとの理を略に說せられしこと。

も叶はずして、『法華經』の『方便品』の『略開三顯一』の時、「佛を求むる諸の菩薩大數八萬有り、合掌して敬心を以て、具足の道を聞かんと欲す」と願ひしが、『廣開三顯一』を聞いて『菩薩是の法を聞いて、疑網皆已に除きぬ』と說かせ給ひぬ。其後自界佗方の菩薩雲の如く集り、星の如く列り給ひき。『寶塔品』の時、十方の諸佛各、無量無邊の菩薩を具足して集り給ひき。文殊は海より無量の菩薩を具足す。又八十萬億那由佗の諸菩薩、又過八恒河沙の菩薩、地涌千界の菩薩、『分別功德品』の六百八十萬億那由陀恒河沙の菩薩、又千倍の菩薩、復一世界の微塵數の菩薩、復三千大千世界の微塵數の菩薩、復二千中國土の微塵數の菩薩、復小千國土の微塵數の菩薩、復四四天下の微塵數の菩薩、三四天下、二四天下、一四天下の微塵數の菩薩、復八世界微塵數の衆生、『藥王品』の八萬四千の菩薩、『妙音品』の八萬四千の菩薩、又四萬二千の天子、『普門品』の八萬四千、『陀羅尼品』の六萬八千人、『妙莊嚴王品』の八萬四千人、『勸發品』の恒河沙等の菩薩、三千大千世界微塵數等の菩薩、此等の菩薩を委しく數へば、十方世界の微塵の如し、十方世界の草木の如し、十方世界の星の如し、十方世界の雨の如し。此等は皆『法華經』にして佛にならせ給ひて、此の三千大千世界の地上地下、虛空の中にまします。迦葉尊者は雞足山にあり。文殊師利は清涼山にあり、地藏菩薩は伽羅陀山にあり。觀音は補陀落山にあり。彌勒菩薩は兜率天に、難陀等の無量の龍王、阿修羅王は海底海畔にあり。帝釋は忉利天に、梵王は有頂天に、摩醯修羅は第六の佗化天、四天王は須彌の腰に、日月衆星は我等が眼に見えて衆生

【四】世間の誓言の道理、事例を述べ、女人成佛今經に限り龍女の誓約を示して、法華經の祈の叶ふべき理を立つ。

【范於期】支那戰國時代秦の將たりしが罪を得て逃げて燕に賴る、燕王の

の頂の上を照し給ふ。江神、河神、山神等も皆「法華經」會上の諸尊なり。佛「法華經」を説かせ給ひて、年數二千二百餘年なり。人間こそ壽の短き故に佛をも見奉り候人も侍らね、天上は日も永く、壽も長ければ、併ながら佛を拜み「法華經」を聽聞せる天人限りなく多くおはする也。人間の五十年は四王天の一日一夜なり。此一日一夜を始めとして三十日、一月、十二月を一年にして五百歳なり。されば人間の二千二百餘年は四王天の四十四日なり。されば日月並びに毘沙門天は佛に後れ奉りて、四十四日未だ二月にも足らず。帝釋、梵天なんどは佛に後れ奉りて一月一時にもすぎず。わづかの間に爭でか佛前の御誓ひ並びに自身成佛の御經の恩をば忘れて、「法華經」の行者をば捨てさせ給ふべきなんど思ひ連ぬれば、賴もしき事なり。されば「法華經」の行者の祈る祈りは響の音に應ずるが如く、影の體に添るが如く、すめる水に月の映るが如く、水精の水を招くが如く、磁石の鐵を吸ふが如く、琥珀の塵をとるが如く、明なる鏡の物の色を浮ぶるが如し。

【四】世間の法にも我が思はざる事も、父母主君師匠妻子、おろかならぬ友なんどの申す事は、恥ある者は意には合はざれども、名利をも失ひ、壽ともなる事侍るぞかし。何に況んや我が心より起りぬる事は、父母主君師匠なんどの制止を加ふれども爲す事あり。されば范於期と云ひし賢人は、我が頸を切りてだにこそ、荊軻と申せし人には與へき。季札と申せし人は、約束の劒を徐の君の塚の上に懸けたりき。而るに靈山會上にして卽身成佛せし龍女は、小乘經には五障の雲厚く、三從の繩強しと嫌はれ、四十餘年の諸大乘經

爲、自ら命を絶ちて首を致す。

【五障三從】女人の法器にあらざる、佛、轉輪聖王、魔王、帝釋、梵天王、この五に成れざる障、又、女は幼にしては親に從ひ、長じては夫に、老ては子に從ふを三從といふ。

【五】逆罪の提婆の成佛の經なるを說き、此法華經の行者の守護あるべきを示す。

には或は歴劫修行に堪へずと捨てられ、或は「初發心時、便成正覺」の言も有名無實なりしかば、女人成佛も許さざりしに、設ひ人間天上の女人なりとも成佛の道には望みなかりしに、龍畜下賤の身たるに女人と生れ、年さへ未だ長けず、わづかに八歳なりき、かたがた思ひも寄らざりしに、文殊の教化に依りて、海中にして「法師」、「提婆」の中間、わづかに『寶塔品』を說かれし時刻に、佛になりたりし事は有難き事なり。一代超過の『法華經』の御力にあらずば、爭でか斯くは候べき。さばれ妙樂は「行淺く功深し、以て經力を顯はす。」とこそ書かせ給へ『龍女は我が佛になれる經なれば、佛の御恩報なくとも、爭でか『法華經』の行者を捨てさせ給ふべき。されば自讃歎佛の偈には、「我大乘の教を闡いて、苦の衆生を度脱せん」等とこそ、すすませさせ給ひしか。龍女の誓ひは其所從の「非口所宣、非心所測」の一切の龍畜の誓ひなり。娑竭羅龍王は龍畜の身たれども、子を念ふ志深かりしかば、大海第一の寶、如意寶珠をも女に取らせて、即身成佛の御布施にせさせつれ。此珠は値三千大千世界にかふる珠なり。

【五】提婆達多は師子頰王には孫、釋迦如來には叔父たりし斛飯王の御子、阿難尊者の阿兄なり。善聞長者の娘の腹なり。轉輪聖王の御一門、南閻浮提には賤しからざる人なり。在家にましましし時は、夫妻となるべき耶輸多羅女を悉達太子に押へ取られ、宿世の敵と思ひしに、出家の後に人天大會集りたりし時、人の佛に汝は癡人、唾を食へる者と罵られし上、名聞利養深かりし人なれば、佛の人にもてなされしを嫉みて、我が身には五法

【千輻輪云云】佛に三十二相あり。提婆二相を缺く、それを人爲的に眞似んとせしことをいふ。

【一業所感】同じ行業を爲せば同じ果報を感得すること

【六】此經は諸菩薩の成佛の經、諸佛の慇懃の勸曉、諸菩薩の佛前の誓言の經なるを示して、行者守護疑なきことを明す。

【因分可說云云】佛に成る途中の諸

を行じて佛よりも尊げになし、鐵を延べて千輻輪につけ、螢火を集めて白毫となし、六萬寶藏、八萬寶藏を胸に浮べ、象頭山に戒壇を立て多くの佛弟子を奪ひ取り、爪に毒をぬり、佛の御足にぬらんと企て、蓮華比丘尼を打殺し、大石を放つて佛の御指をあやまちぬ。具に三逆を犯し、結句は五天竺の惡人を集め、佛並びに御弟子檀那等にあだをなす。頻婆娑羅王は佛の第一の御檀那なり。一日に五百輛の車を送りて、日日に佛並びに御弟子を供養し奉りき。提婆そねむ心深くして、阿闍世太子を語らひて、父を終に一尺の釘七つをもて磔になし奉りき、終に王舍城の北門の大地われて阿鼻地獄に墮ちにき。三千大千世界の人一人も是を見ざる事はなかりき。されば大地微塵劫に過ぐとも、無間大城をば出づべからずとこそ思ひしに、『法華經』にして天王如來とならせ給ひけるにこそ、不思議に尊けれ。提婆達多佛になり給はば、語らはれし所の無量の惡人は、一業所感なれば皆無間地獄の苦は離れぬらん。是れ偏へに『法華經』の恩德なり。されば提婆達多並びに所從の無量の眷屬は、『法華經』の行者の室宅にこそ住はせ給ふらめと賴もし。

【六】　諸の大地微塵の如くなる諸菩薩は、等覺の位までせめて、元品の無明計りもちて侍るが、釋迦如來に値ひ奉りて、元品の大石を破んと思ひしに、敎主釋尊四十餘年が間は、『因分可說、果分不可說』と申して、妙覺の功德を說き顯はし給はず。されば妙覺の位に登る人一人もなかりき、本意なかりし事なり。而るに靈山八年が間に『唯一佛乘、名爲果分』と說き顯はし給ひしかば諸の菩薩皆妙覺の位に上りて、釋迦如來と悟り等しく

分的のさとりは説き得るも、佛の極成せる妙覺の境地は説き得ぬこと。

【大悲代受苦】大慈悲の故に衆生の苦を代つて受くること、

【七】主師親三德の佛、微妙極尊の大法を宣べ盡し給へる恩德に對し、佛の涅槃會座に諸

して、須彌山の頂に登りて四方を見るが如く、長夜に日輪の出たらんが如く、暗にならせ給ひたりしかば、佛の仰せなくとも『法華經』を弘めじ、又行者に替らじとは思しめすべからず。されば『我身命を愛せず、但だ無上道を惜む』『身命を惜まず』『當に廣く此經を說くべし』等とこそ誓ひ給ひしか。其上、慈父の釋迦佛、悲母の多寶佛、慈父悲母に等しき同じ助證の十方の諸佛、一座に列らせ給ひて、月と月とを集めたるが如く、日と日とを並べたるが如くましましし時、『諸の大衆に告ぐ、我が滅度の後誰か能く此經を護持し讀誦せんものなる。今佛前に於て、自ら誓言を說け』と三度まで諫めさせ給ひしに、八方四百萬億那由佗の國土に充滿せさせ給ひし諸大菩薩、身を曲げ、頭を低れ、掌を合せ、俱に同時に聲をあげて『世尊の勅の如く、當に具さに奉行し奉るべし』と、三度まで聲を惜まず呼はりしかば、爭でか『法華經』の行者に代らせ給はざるべき。范於期と云ひし者荊軻に頭を取らせ、季札と云ひし者徐の君が塚に刀を懸けし、約束を違へじが爲なり。此等は震旦邊土の夷の如くなる者共だにも、友の約束に命をも亡ぼし、身に代へて思ひし刀を塚に懸くるぞかし。まして諸大菩薩は本より大悲代受苦の誓ひ深し。佛の御諫めなくとも、爭でか『法華經』の行者を捨て給ふべき。其上我が成佛の經たる上、佛慇懃に諫め給ひしかば、佛前の御誓ひ丁寧なり、行者を助け給ふ事疑ふべからず。

【七】佛は人天の主、一切衆生の父母なり、而も開導の師なり。父母なれども賤しき父母は、主君の義を兼ねず。主君なれども父母ならねば、畏ろしき邊もあり。父母主君なれ

菩薩法華經護持の誓約あるを示し行者の新の必成の理を立つ。

【佛なれども云云】法華經譬喩品に舍利弗の將に非ず魔ノ作レ佛、惱亂我心耶といへるを指す。

ども、師匠なる事なし。諸佛は又世尊にてましませば、主君にてはましませども、娑婆世界に出させ給はざれば、師匠にあらず、又「其中の衆生は悉く是れ吾が子」とも名乘り給はず。釋迦佛獨り主師親の三の義を兼ね給へり。然れども四十餘年の間は提婆達多を罵り給ひ、諸の聲聞をそしり、菩薩の果分の法門を惜み給ひしかば、佛なれども、よりよりは天魔波旬の我等を惱ますかの疑ひ、人にはいはざれども心の內には思ひしなり。此心は四十餘年より「法華經」の始めまで失せず。而るを靈山八年の間、寶塔虛空に現じ、二佛日月の如く竝び、諸佛大地に列り大山を集めたる如く、地涌千界の菩薩虛空に星の如く列り給ひて、諸佛の果分の功德を吐き給ひしかば、寶藏を傾けて貧人に與ふるが如く、崑崙山の崩れたるに似たりき。諸人此玉をのみ拾ふが如く、此の八年が間、珍しく貴き事、心髓にも徹りしかば、諸菩薩身命をも惜まず、言を殘さず誓ひをなせし程に、「屬累品」にして釋迦如來寶塔を出させ給ひて、戶を押し立て給ひしかば、諸佛國國へ還り給ひき。諸の菩薩等も諸佛に隨ひ奉りて還らせ給ひぬ。やうやく心細くなりし程に、「卻後三月、當に般涅槃すべし。」と唱へさせ給ひし事こそ、心細く耳驚かしかりしかば、諸菩薩二乘人天等、盡く「法華經」を聽聞して、佛の恩德心肝にそみて、身命をも「法華經」の御爲に投げて佛に見せ参らせんと思ひしに、佛の御仰せの如く若し涅槃せさせ給はば、いかに淺ましからんと胸騷ぎしてありし程に、佛の御年滿八十と申せし二月十五日の寅卯の時、東天竺、倶尸那城跋提河の邊にして佛の御入滅なるべき由の御音、上は有頂、横には三千大千世界まで響き

【粟散國】粟粒の如き無數の國。

【八】以上條條の道理誓約を擧示して、正しく法華經の行者の祈禱必定成就の道理を結示す

たりしこそ、日もくれ心も消え果てぬ。五天竺十六の大國、五百の中國、十千の小國、無量の粟散國等の無量の衆生、一人も衣食を調へず。上下を嫌はず、牛馬狼狗、鵰鷲蚊虻等の五十二類の一類の數、大地微塵をも盡しぬべし。況んや五十二類をや。此等の類、皆華香衣食をそなへて、最後の供養と當てがひき。一切衆生の寶の橋折れなんとす、一切衆生の眼脱けなんとす、一切衆生の父母主君師匠死なんとすなんど申す聲響きしかば、身の毛のいよ立つのみならず涙を流す。涙を流すのみならず、頭を叩き胸を押へ、音も惜まず叫びしかば、血の涙、血の汗、倶尸那城に大雨よりも繁くふり、大河よりも多く流れたりき。是れ偏へに『法華經』にして佛になりしかば、佛の恩を報ずる事難かりしなり。斯る歎きの庭にても、『法華經』の敵をば舌を切るべきよし、座に列なりし人人、ののしり侍りき。迦葉童子菩薩は、『法華經』の敵の國には、霜雹となつて降るべしと誓ひ給ひき。爾の時佛は臥より起きて悦ばせ給ひて、善哉善哉と讃め給ひき。諸の菩薩は佛の御心を推して、『法華經』の敵を打たんと申さば、暫くも生き給ひなんと思ひて、一一の誓ひは爲せしなり。されば諸菩薩、諸天人等は『法華經』の敵の出來よかし、佛前の御誓ひ果して、釋迦如來竝びに多寶佛、諸佛如來にも、實に佛前にして誓ひしが如く、『法華經』の御爲には、名をもあげ身命をも惜まざりけりと思はれ參らせんとこそ思すらめ。いかに申す事のおそきやらん。

【八】大地は指さば外るるとも、虚空を繋ぐ者はありとも、潮の滿ち干ぬ事はありとも、日は西より出るとも、『法華經』の行者の祈りの叶はぬ事はあるべからず。『法華經』の行者

を諸の菩薩、人天、八部等、二聖、二天、十羅刹女等、千に一も來りて守り給はぬ事侍らば、上は釋迦諸佛を侮り奉り、下は九界を誑す失あらん。行者は必ず不實なりとも智慧はおろかなりとも、身は不淨なりとも、戒德は備へずとも、『南無妙法蓮華經』と申さば必ず守護し給ふべし。袋きたなしとて、金を捨つる事なかれ、伊蘭を惡まば、栴檀あるべからず。谷の池を不淨なりと嫌はば蓮を取るべからず。行者を嫌ひ給はば誓ひを破り給ひなん。正像既に過ぎぬれば、持戒は市の中の虎の如く、智者は麟角よりも希ならん。月を待つまでは燈を憑むべし、寶珠の無き處には金銀も寶なり。白烏の恩をば黑烏に報ずべし。聖僧の恩をば凡僧に報ずべし。疾く疾く利生を授け給へと强盛に申すならば、爭でか祈りの叶はざるべき。

【九】問うて云く、「上に書かせ給ふ道理文證を拜見するに、誠に日月の天に在しますならば、大地に草木の生ふるならば、晝夜の國土にあるならば、大地だにも反覆せずば、大海の潮だも滿ち干るならば、『法華經』を信ぜん人、現世の祈り後生の善處は疑ひなかるべし。然りと雖も此二十餘年が間の天台、眞言等の名匠、多くの大事の祈りを爲すに、はかばかしくいみじき祈りありとも見えず。尙ほ外典の者共よりも拙きやうに打覺えて見ゆるなり。恐らくは經文のそら事なるか、行者の行ひの疎かなるか、時機の叶はざるかと疑はれて、後生も如何と覺ゆ。それはさて置きぬ。御房は山僧の御弟子と承はる。父の罪は子にかかり師の罪は弟子にかかると承はる。叡山の僧徒の園城寺門の堂塔、佛像經卷

【伊蘭】Eranda 梵語、印度の惡臭最も强き樹。花紅にて美しきも食へば狂死す。蓖麻の一種。

【栴檀】印度の香木。熱病を治す。一葉開いて四十由旬の惡臭を消すと。

【九】天台眞言の祈の叶はざる所以を問ふに答へて、日本天台宗の起源、山門と王法の關係、承久の祈りとその結果を述ぶ。

【隠岐の法皇】後鳥羽上皇のこと。

数千宇を焼き払ひ給ふが、ことに恐ろしく世間の人人も驚き疎みあへるはいかに。前にも少少承はり候ひぬれども、今度委しく聞き披き候はん。但し不審なる事は、かかる悪僧共なれば、三宝の御意にも叶はず、天地にも受けられ給はずして、祈りも叶はざるやらんと覚え候はいかに。」答へて云く「宅中にも少少申しつれども今度又あらあら申すべし。日本国に於ては、此事大切なり。これを知らざる故に、多くの人口に罪業を作る。山門の始まりし事は、此国に仏法渡りて二百余年、桓武天皇の御宇に、伝教大師立て始め給ひしなり。当時の京都は昔聖徳太子、王気ありと相し給ひしかども、天台宗の渡らん時を待ち給ふ間、都を立て給はず。又上宮太子記して云く、『我滅後二百余年に、仏法日本に弘まるべし』と。伝教大師延暦年中に叡山を立て給ふ、桓武天皇は平の京都を立て給ひき、太子の記文たがはざる故なり。されば山門と王家とは松と柏との如し、蘭と芝とに似たり。松枯るれば必ず柏枯れ、蘭萎めば又芝萎む。王法の栄えは山の悦び、王位の衰へは山の嘆きと見えしに、既に世間関東に移りし事何とか思食しけん。承久三年辛巳四月十九日、京夷乱れし時、関東調伏の為め、人王八十二代隠岐の法皇の宣旨に依て、始めて行はるる御修法、十五壇の秘法、四十一人の行者也。一字金輪法天台座主慈円僧正、伴僧十二口、関白殿基通御沙汰。四天王法成興寺宮僧正、伴僧八口、広瀬殿、修明門院御沙汰。不動明王成宝僧正、伴僧八口、花山院禅門御沙汰。大威徳法観厳僧正、伴僧八口、七条院御沙汰。転輪聖王法成賢僧正、伴僧八口、同御所御沙汰。十壇大威徳法伴僧六口、覚朝僧正、俊性法印、永信法印、豪円法印、猷円僧都、慈賢僧正、賢乗僧都、仙尊僧都、行遍僧都、実覚法眼、已上十人、大旨於本坊修之。如意輪法妙高院僧正、伴僧八口、宜秋門院御沙汰。毘沙門法常住院僧正、三井、伴僧六口、資賃御沙汰。御本尊一日に之を造らる。調伏の行儀

【二】次に叶はざる所以として眞言の邪敎たる證據を示す。

如法愛染王法之、仁和寺御室、行法五月三日始、於紫宸殿二七日被修之。佛眼法太政僧正、三七日修之。六字法快雅僧都、愛染王法觀嚴僧正、七日修之。不動法勸修寺僧正、伴僧八口、皆僧綱。大威德法安藝僧正、金剛童子法同人、已上十五壇の法了る。五月十五日伊賀太郎判官光季京にして討たる。同十九日鎌倉に聞え、同二十一日大勢の軍兵上ると聞えしかば、殘る所の法、六月八日之を始めらる。尊星王法覺朝僧正。太元法藏有僧都。五壇法太政僧正、永信法印、全尊僧都、猷圓僧都、行遍僧都。守護經法御室被行之、我朝二度行之。五月二十一日武藏守殿は海道より上洛し、甲斐源氏は山道を上る。式部殿は北陸道を上り給ふ。六月五日大津を堅むる手、甲斐源氏に破られ畢んぬ。同六月十三日、宇治橋の合戰、同十四日に京方破られ畢んぬ。同十五日に武藏守殿六條へ入り給ふ、諸人入り畢んぬ。七月十一日に本院は隱岐國へ流され給ひ、中院は阿波國へ流され給ひ、第三院は佐渡國へ流され給ふ。殿上人七人誅殺せられ畢んぬ。斯る大惡法年を經て漸漸に關東に落ち下りて、諸堂の別當供僧となり、連連之を行ふ。本より教法の邪正勝劣をば知ろし食さず。只三寶をば崇むべき事とばかり思しめす故に、自然として是を用ゐ來れり。關東の國國のみならず、叡山、東寺、園城寺の座主、別當、皆關東の御計ひと成りぬる故に、彼の法の檀那と成り給ひぬるなり。」

【一〇】問うて云く、「眞言の教を强ちに邪教と云ふ心如何。」答へて云く、「弘法大師云く、「第一大日經、第二華嚴經、第三法華經」と、能く能く此の次第を案ずべし。佛は何なる經にか此の三部の經の勝劣を說き判じ給へるや。若し第一大日經、第二華嚴經、第三法華經と說き給へる經あるならば、尤も然るべし。其義なくんば甚だ以て依用し難し。「法華經」

【二】大日法身說法の邪說を破す。附に念佛禪宗の祈の叶はぬ所以を示す。

に云く、「藥王、今汝に告ぐ、我が所說の諸經、而かも此經の中に於て、法華最も第一なり。」云云。佛則ち諸經を擧げて、其中に於て『法華第一』と說き給ふ、佛の說法と弘法大師の筆とは水火の相違なり。尋ね究むべき事なり。此筆を數百年が間、凡僧、高僧是を學し、貴賤上下是を信じて、『大日經』は一切經の中に第一と崇めける事、佛意に叶はず、心あらん人は能く能く思ひ定むべきなり。若し佛意に相叶はぬ筆ならば、信ずとも豈に成佛すべきや。又是を以て國土を祈らんに、當に不祥を起さざるべきや。又云く、『震旦の人師等諍つて醍醐を盜む』云云。文の意は、天台大師等眞言教の醍醐を盜んで『法華經』の醍醐と名け給へると云ふ事なり。此筆最第一の大事なり。『法華經』を醍醐と名け給へる事は、天台大師、『涅槃經』の文を勘へて、一切經の中には『法華經』を醍醐と名づくと判じ給へり。眞言教の天竺より唐土へ渡る事は、天台出世の以後、二百餘年なり。されば二百餘年の後に渡るべき眞言の醍醐を盜みて、『法華經』の醍醐と名け給ひけるか。此事不審なり、不審なり。眞言未だ渡らざる以前の二百餘年の人人を盜人と書き給へる事、證據何れぞや。弘法大師の筆をや信ずべき、『涅槃經』に『法華經』を醍醐と說けるをや信ずべき。若し天台大師盜人ならば、『涅槃經』の文をば云何が心得べき。さては『涅槃經』の文眞實にして、弘法の筆邪義ならば、邪義の教を信ぜん人人は云何。只弘法大師の筆と佛の說法と勘へ合せて、正義を信じ得るべしと申す計りなり」

【二】疑つて云く、「『大日經』は大日如來の說法なり、若し爾らば釋尊の說法を以て大日

【二二】諸宗の祈りの叶はぬことを結示す。

【二三】天台宗謗法の根源を夢證によりて判ず。

如來の敎法を打たるる事、都て道理に相叶はず、如何。答へて云く、「大日如來は何なる人を父母として、何なる國に出で、「大日經」を說き給ひけるやらん。若し父母なくして出世し給ふならば、釋尊入滅以後、慈尊出世以前、五十六億七千萬歲が中間に、佛出て說法すべしと云ふ事、何なる經文ぞや。若し證據なくんば、誰人か信ずべきや。斯る僻事をのみ構へ申す間、邪敎とは申すなり。其の迷謬盡し難し、纔か一二を出すなり。加之並びに禪宗、念佛等の是を用ゆる、此等の法は皆「未顯眞實」の權敎、不成佛の法、無間地獄の業なり。彼の行人又謗法の者なり、爭でか御祈禱叶ふべきや。

【二二】然るに國主と成り給ふ事は、過去に正法を持ち佛に仕ふるに依て、大小の王皆梵王、帝釋、日月、四天等の御計ひとして郡鄕を領し給へり。所謂る經に云く、「我今五眼をもて明に三世を見るに、一切の國王皆、過去世に五百の佛に侍するに由つて、帝王主と爲ることを得たり。」等云云。然るに「法華經」に背きて眞言、禪、念佛等の邪師に付いて、諸の善根を修せらるるとも、敢て佛意に叶はず、神慮にも違する者なり、能く能く案あるべきなり。人間に生を得る事都て希なり。適適生を受けて、法の邪正を極めて未來の成佛を期せざらん事、返す返す本意に非ざる者なり。

【二三】又慈覺大師御入唐以後、本師傳敎大師に背かせ給ひて、叡山に眞言を弘めんが爲に御祈請ありしに、日を射るに日輪動轉すと云ふ夢想を御覽じて、四百餘年の間諸人是を吉夢と思へり。日本國は殊に忌むべき夢なり。殷の紂王日輪を的にして射るに依て身亡び

【權化】衆生を救ふ爲に權りに化現せるもの。

【◇】縮遺一二九七頁延治元年（五十四歳）の作。身延山の景趣を叙し深信修行の肝要を力説したるものにして、聖人の文章には稀なる美文體なり。

【一】身延山の叙景。

【二】釋尊の求法を詳述す。

たり。此の御夢想は權化の事なりとも、能く能く思惟あるべきか。仍て九牛の一毛註する所件の如し。

身延山御書

【一】誠に身延山の栖は、ちはやふる神も恵みを垂れ、天下りましますらん。心無き賤の男賤の女までも心を留めぬべし。哀れを催す秋の暮には、草の庵に露深く、檐にすだく蜘蛛の絲玉を連ぬき、峰の紅葉いつしか色深うして、絶絶に傳ふ筧の水に影をうつせば、名にし負ふ龍田河の水上もかくやと疑はれぬ。又後には峨峨たる深山聳えて、梢に一乘の果を結び、下枝に鳴く蟬の聲しげく、前には湯湯たる流水湛へて、實相眞如の月浮び、無明深重の闇晴れて、法性の空に雲もなし。かゝる砌なれば、庵の内には晝は終日に一乘妙典の御法を論談し、夜は竟夜要文誦持の聲のみす。傳聞く釋尊の住み給ひけん靈鷲山を、我朝此砌に移し置きぬ。霧立ち嵐烈しき折々も、山に入りて薪をこり、露深き草を分けて、深谷に下て芹をつみ、山河の流れもはやき巖瀬に菜をすすぎ、袂しほれて干佗ぶる思ひは、昔人麿が詠じける、和歌の浦に藻汐たれつつ世を渡る海人もかくやとぞ思ひ遣る。

【二】つくづくと憂き身の有樣を案ずるに佛の法を求め給ひしに異らず。昔釋尊、樂

【刹利】刹帝利の略。

【須陀】首陀羅の略。

【阿防羅刹】Avorakṣasa の音譯。獄卒の名。

法梵志としては皮を剝ぎて紙とし、髓の水を取りて硯の水とし、肉を割きて墨とし、骨を摧きて筆として、下方の迦葉佛に値ひ奉りて、「如法は應に修業すべし、非法は應に行ずべからず、今世若は後世、行法の者は安穩なり。」と、此文を傳へ給ふ。薩埵王子としては、飢たる虎の爲に身を與へ、雪山童子としては、半偈の爲に身を投げ、尸毘王としては、鳩の爲に肉を秤にかけ、乞眼婆羅門には眼をくじりて取らせ給ひき。又佛大國の王と御座し時は、宿善內に催し、月卿雲客の政をも忘れ、百官萬乘に仰がる十善の樂も、風の前の燈、あだなる春の夜の夢、實にいたふ朝顏の日影をまつ程ぞかし。されば過去の戒善いみじきに依りて今生には大國の王たりと云ふも、無常の殺鬼にさそはれて、一期空しくして後、修する所の善なくば、阿鼻大城の炎の底に沈み、刹利も須陀もかはらぬ例にて、三熱の炎に交はり、鐵の繩にて五體をしばり、三熱の彈丸を口に入れ、阿防羅刹三鈷の稜矛を手に取り、邪見の音を荒らかにして、五體身分をとりどりに責むるならば、音を天に響かして叫ぶとも、地に臥て嘆くとも、百官萬乘も來りて助くること無く、親類眷屬も來りて救ふこと無からん。又錦の帳の內にして、夜夜の寢覺の牀にして、天にあらば比翼の鳥となり、地に住まば連理の枝とならんと、月日を送り年を重ねて契りし妻子も來りて訪ふ事はあらじなんどと、樣樣に思ひつづけ給ひて、自ら藏を開きて金銀等の七珍萬寶を僧に供養し、象馬妻子を布施し、然して後大法の螺を吹き、大法の鼓を擊ちて、四方に法を求め給ふ。爾の時に阿私仙人と申す仙人來つて申しけるやうは、實に法を求め

【三】成佛の要道は良師を求めて仕ふるにあるを教ふ

給ふ志おはさば、我が云はん樣に仕へ給へと云ひければ、大王悦んで、山に入つては果を拾ひ薪を伐り、菜をつみ水をくみ、給仕し給ひけること千歳なり。常の御口ずさみには『情に妙法を存ずるが故に身心懈倦無し』とぞ唱へ給ひける。文の心は、常に心に妙法を習はんと存ずる間、身にも心にも仕ふれども倦き事なしと云へり。此の如くして習ひ給ひける法は即ち『妙法蓮華經』の五字なり。爾時の王とは今の釋迦牟尼佛是なり。佛の仕へ給ひて法を得給ひし事を、我朝に五七五七七の句に結び置けり。今日法會の時、伽陀に誦する歌に、『法華經を我が得しことは薪こり菜つみ水くみつかへてぞ得し』此歌を見るに今は我身につみ知られてあはれに覺えけるなり。

【三】實に佛になる道は、師に仕ふるには過ぎず。妙樂大師の『弘決』の四に云く『若し弟子有りて師の過を見さば、若は實にもあれ、若は不實にもあれ、其の心自ら法の勝利を壞失す』云云。文の心は『若し弟子有りて師の過を見さば、若は實にもあれ、若は不實にもあれ、其心あらば、身所得の法の勝利を壞り失ふ者なり』云云。又『止觀』の一に云く、『如來曠劫に此法を惜み給へば聞く者歡喜す。常啼は東に請じ、善財は南に求め、藥王は手を燒き、普明は頭を刎ねらる。一日に三度恒河沙の身を捨つるとも、尚ほ一句の力を報ずること能はず。況んや、兩肩に荷負し百千萬劫すとも寧ぞ佛法の恩を報ぜんや』云云。文の心は、『如來れんこんに此法を稱歎し給へば聞く者即ち歡喜す。常啼菩薩は東に法を請ひ、善財菩薩は南に法を求め。藥王菩薩は臂を燒き、普明王は頭を刎られた

り。一日に三度恒河の沙の数ほど身をすつるとも、尚ほ一句の法恩を報ずる事あたはじ』況や二つの肩に荷負ひて百千萬劫すとも、佛法の恩を報ずる事あるべからず』と云へる心なり。『止観』の五に曰く『香城に骨を粉き雪嶺に身を投ぐとも、亦何ぞ以て徳を報ずるに足らんや』云云。『弘決』の四に云く、『昔、毘摩大国と云ふ国に狐あり獅子に追はれて逃げけるが、水もなき渇井に落入りぬ。獅子は井を飛越えて行きぬ。彼の狐井より上らんとすれども、深き井なれば上る事を得ざりき。既に日数を経る程に餓死なんとす。其時狐文を唱へて云く『禍なる哉、今日苦に逼られ、當に命を丘井に没すべし。一切萬物皆無常なり、恨むらくは身を以て獅子に飼はざることを、南無歸命十方佛、我心の浄うして已に無きを表知し給へ』と。文の心は、『禍なる哉今日苦みにせめられて、即ち當に命を渇井に没すべし。一切の萬物は皆是れ無常なり、恨むらくは身を獅子に飼はざりける事を。南無歸命十方佛、我心の浄きことを表知し給へ』と喚はりき。爾時に天の帝釋、狐の文を唱ふる事を聞き給ひて、自ら下界に下り、井の中の狐を取上げ給ひて、法を説き給へと宣ひければ、狐の云く、『逆なる哉弟子は上に、師は下に居たる事を』と云ひければ、諸天笑ひ給へり。帝釋誠に道理と思召して、下に居給ひて、法を説き給へと宣ひければ、又狐云く、『逆なるかな、師も弟子も同座なる事を』と云ひければ、帝釋諸天の上の御衣を脱ぎ、重ねて高座として、登せて法を説かしむ。狐説いて云く、『人あり生を樂ひ死を惡む、人あり死を樂ひ生を惡む』云云。文の心は、『人有りて生くる事を樂つて死せん事をにくみ、又

【四】受け難き人身を受け、値ひ難き妙法に値ひ、又一乘の行者たる善知識に値へり、然かも深信の者は稀なるを歎ず。

人有りて死せん事を願つて生きん事をにくむ」と。此文を狐に値て帝釋習ひ給ひて、狐を師として敬ひ給ひけり。天台の御釋に云く、「雪山は鬼に隨つて偈を請ひ、天帝は畜を拜して師と爲す。囊臭きをもて其金を捨つることなかれ」と。されば何に賤き者なりとも、實の法を知りたらん人を忽にする事あるべからず。されば『法華經』の第八に云く、「若は實にもあれ、若は不實にもあれ此人現世に白癩の病を得ん。』云云、文の心は、「法華經」の行者の失を、若は實にもあれ若は不實にもあれ云はん者は、現世には白癩の病をうけ、後生には無間地獄に墮つべしと說かれたり。

【四】此等の理を思ひつづくるに、大地の上に針を立てて、大梵天宮より絲を下して、あやまたず絲の針の穴に入る事はありとも、我等が人間に生るる事は難く、又億億萬劫不可思議劫をば過ぐるとも、如來の聖教に値ひ奉る事難し。而るに受け難き人間に生をうけ、値ひ難き聖教に値ひ奉る。設ひ聖教に値ふと云へども、惡知識に値ふならば、三惡道に墮ちん事疑ある可からず。「師墮つれば弟子墮つ、弟子墮つれば檀那墮つ」と云ふ文あるが故に。今幸に一乘の行者に値ひ奉れり。皮を剝ぎ肉を切り千歲仕へざれども、忝に一念三千、十界十如、一實中道、皆成佛道の妙法を學ぶ。實に過去の宿善拙うして末法流布の世に生れ値はずば、未來永永を過ぐとも解脫の道難かるべし。又世間の人の有樣を見るに、口には信心深き事を云ふといへども、實に神にそむる人は千萬人に一人もなし。『涅槃經』には、「佛法を信ぜずして惡道に墮せん者は大地の土の如く、佛法を信じ

【五】佛に値ひ奉らんとして心を碎きたる例を引く。

【六】須達長者の祇園精舍建立。

て佛に成らん者は爪上の土の如し。」と、說き給へるも理なり。

【五】昔佛摩耶の恩を報じ給はんが爲に、俄に人にも知られ給はずして、忉利天へ四月十五日に昇らせ給ひて御坐けるに、五天竺の國王大臣を始として、あやしの賤の男賤の女までも、佛を失ひ奉りて、泣き悲しみける歎き限りなく、誠に子を失ひ親に後れたるが如し。いとをしき妻を戀ひ、男を戀ふる思ひの闇すら忍び難し、何に况んや大覺世尊の三十二相、八十種好、紫磨金色の粧ひ嚴しくして、迦陵頻伽の御音を以て一切衆生を皆佛に成し給はんと、御經を說かせ給ふ。慈悲深重に御座す佛の御名殘惜み進らする歎き思ひ遣るに、上陽人が上陽宮に閉籠られて歎きし歎きにも勝れ、堯王の娘娥皇女英の二人、舜王に別れ奉りて歎きし歎きにも勝れ、蘇武が胡國に流されて十九年、雪中に住みけん思ひにも勝れたり。餘りの御戀しさに、木を以て佛の御形を作り奉るに三十二相の一相をだにも作り似せ奉らず。爾の時に優塡大王と申しける王、赤栴檀と云ふ木を以て、忉利天より毗首羯摩天を請じて作り奉りける佛の、忉利天へ木佛の御迎に參らせ給ひけるも、優塡大王の信心深き故なり。是こそ一閻浮提に佛を作り奉りける始なれ。

【六】又須達長者と云ひける人あり。佛は忉利天に御座すが、七月十五日に天竺へ下り給ふべきよし聞えければ、御設に御堂を作らんとしけるに、御堂造るべき地を持たざりければ、波斯匿王の太子、祇陀太子と云ひける人祇陀林と云ふ苑を持ちたりけるに、廣四十里ありける。此苑に人、太刀、刀を持ちて入れば折碎けける苑なり。須達、祇陀太子に値ひ

【七】貧女の一燈長者の萬燈に勝る例を擧げ信心の肝要を力說す。

奉りて、『此苑を賣らせ給へ、御堂を造らん』と云ひければ、太子宣ふやう、『此苑四十里に金を厚四寸に敷き給はば賣らん』とのたまひけり。須達之を買ふ可き由を申しければ、太子のたまはく、『戯にこそ云ひつれ、實には叶ふまじ』と宣ひけり。須達申しける樣は、『太子に二言なしと云ふ、爭か假且の戯にも虛言をし給ふべき』と申して、波斯匿王に此由を申しけり。大王のたまはく、『祇陀太子は我位を繼ぐべき者なり。爭でか假且の戯にも虛言をすべき』と仰せられければ、太子力なく賣らせ給ひけり。須達四十里に金を四寸に敷いて買ひ取りて、悦んで御堂を造らんとしけるに、舍利弗來りて繩を引き地を畫りけるに、舍利弗空を見上げて笑ひけり。須達が云く、『大聖は威儀を亂さぬ事あり、いかに笑はせ給ふぞ』と怪み申しければ、舍利弗の云く、『汝此堂を造らんとすれば、六欲天に宮殿起る。かかる大善根を修する者なれば、我天へこそ迎へんずれとて、互に諍ひをなす事のをかしと覺ゆるなり。汝は一期百年の後には兜率の內院に生る可し』とぞのたまひける。然して後此堂を作り畢れり。其名を祇園精舍と云ふ。

【七】此祇園精舍へ七月十五日の夜、佛入らせ給ふべき由有りしかば、梵天帝釋は忉利天より金銀水精の三つの橋をかけたりける。中の橋を佛は入らせ給ふに、佛の左には梵天右には帝釋、互に佛に天蓋を指かけ參らせ、佛の御後には四衆八部、迦葉、迦旃延、目連須菩提、千二百の羅漢、萬二千の聲聞、八萬の菩薩等を引具して下り給ひけるに、五天竺に有りとあらゆる人人、皆分分に隨つて油を儲けてともしけり。萬燈をともす人もあり、

【八】法華經の惡人女人の成佛を說く。

【九】本性たる眞如の月が無明の雲に覆はれて九界を輪廻するを懺悔す

千燈をともす人もあり、或は百燈、乃至一燈をともす人もありけるに此に貧女と云ふ者ありけり。貧しき事譬ふべき方もなし。身に纒ふ物とては、十布の菅薦にも及ばざる藤の衣ばかりなり。四方に馳せまはり、一燈の代を求むるにあたはず。空しく嘆を思ひつもれる涙、油ならましかば百千萬燈にともすとも盡きじ。思ひの餘に自ら髪を切り、手づから鬘にひねりて油一燈にかへて、わづかにぞ點したりけるに、佛神も三寶も天神も地神も納受を垂れ給ひけるにや、藍風、毘藍風と申す大風吹いて燈を吹き消しけるに、貧女が一燈ばかりぞ殘りたりける。此光にて佛は祇園精舍へ入らせ給ひけり。之を以て之を思ふに、樂しくして若干の財を布施すとも信心弱くば佛に成らん事叶ひ難し。縱ひ貧なりとも信心强うして志深からんは佛に成らん事疑あるべからず。されば無勝徳勝と云ひける者は土の餅を佛に供養し奉りて、此功徳により一閻浮提の主、阿育大王と生れて、終に八萬四千の石塔を作り、國國に送り給ひ、後に菩提の素懷を遂げ給ひき。

【八】されば『法華經』にて、四十餘年が程きらはれし女人も佛になり、五逆闡提と云はれし提婆も佛になりけり。されば末代濁世の謗法闡提五逆たる僧も俗も尼も女も、此經にて佛にならん事疑なし。されば『法華經』第七に云く、「我滅度の後に於て、應に此經を受持すべし、是の人佛道に於て、決定して疑有ること無けん。」云云。此文こそよによに憑もしく候へ。

【九】此等の樣を思ひつづけて、觀念の床の上に夢を結べば、妻戀ふ鹿の音に目をさま

し、我身の内に三諦即一、一心三觀の月曇りなく澄みけるを、無明深重の雲引覆ひつつ、昔より今に至るまで生死の九界に輪廻する事、此砌に知られつつ、自ら斯くぞ思ひつづける。

立わたる身のうき雲もはれぬべし、たえぬ御法の鷲の山風

建治元年八月二十一日　　日蓮

四恩鈔

【一】抑此流罪の身になりて候につけて二つの大事あり。一には大なる悦びあり。其故は此世界をば娑婆と名づく。娑婆と申すは忍と申す事なり。故に佛をば能忍と名け奉る。此娑婆世界の内に、百億の須彌山、百億の日月、百億の四州あり。其中の中央の須彌山、日月、四州に佛は世に出でまします。此日本國は其佛の世に出でましますよりは丑寅の角に當りたる小島なり。此娑婆世界より外の十方の國土は皆淨土にて候へば、人の心も柔かに、賢聖を罵り惡む事も候はず。此國土は十方の淨土に棄て果てられて候十惡五逆、誹謗賢聖、不孝父母、不敬沙門等の科の衆生が三惡道に墮ちて、無量劫を經て、還つて此世界に生れて候か、先生の惡業の習氣失せずして、ややもすれば十惡五逆を作り、賢聖を罵り父母に孝せず、沙門をも敬はず候なり。故に釋迦如來世に出でましませしか

◎縮遺四一七頁、弘長二年（四十一歳）伊豆流罪中の作。佛教を信奉する者は四恩を報ずべき旨を説き、流罪によつて此四恩を報ずる法悦を述ぶると共に、謗法の罪を誘發せしことを歎く人情味豐かなる文。

【一】迫害多難の生涯をば法華經の文に符合せりと悦ぶ。

【三惡道】地獄、餓鬼、畜生の三道は惡道なる故。

ば、或は毒藥を食に雑へて奉り、或は刀杖、惡象、師子、惡牛、惡狗等の方便を以て害し奉らんとし、或は女人を犯すと云ひ、或は卑賤の者、或は殺生の者と云ひ、或は行き合ひ奉る時は面を覆うて眼に見奉らじとし、或は戸を閉ぢ窓を塞ぎ、或は國王大臣の諸人に向つては邪見の者なり、高き人を罵る者なんど申せしなり。『大集經』、『涅槃經』等に見えたり。させる失も佛には在しまさざりしかども、只此國の癖かたわとして惡業の衆生が生れ集りて候上、第六天の魔王が此國の衆生を佗の淨土へ出さじと、たばかりを成して、斯く事にふれて僻める事をなすなり。此たばかりも詮ずる所は、佛に『法華經』を說かせ參らせじの料と見えて候。其故は魔王の習ひとして三惡道の業を作る者をば悅び三善道の業を作る者をば歎く。又三善道の業を作る者をば甚う歎かず、三乘とならんとする者をばいたう歎く。又三乘となる者をばいたう歎かず、佛となる業をなす者をば强ちに歎き、事にふれて障をなす。『法華經』は一文一句なれども耳にふるる者は既に佛になるべきと思ひていたう第六天の魔王も歎き思ふ故に、方便を囘して留難をなし、經を信ずる心を捨てしめんとたばかる。而るに佛の在世の時は濁世なりといへども五濁の始めたりし上、佛の御力をも恐れ、人の貪、瞋、癡、邪見も强盛ならざりし時だにも、竹杖外道は神通第一の目連尊者を殺し、阿闍世王は惡象を放つて三界の獨尊を威し奉り、提婆達多は證果の阿羅漢蓮華比丘尼を害し、瞿伽利尊者は智慧第一の舍利弗に惡名を立てき。何に況んや世漸く五濁の盛になりて候をや。況んや世末代に入つて『法華經』をかりそめにも信ぜん者の人に

【二】眞劍に法華經を弘通する我身に迫害多きは在世釋尊に迫害多きに似たりと、言ひ難き法悅に住す。

【三毒】貪瞋癡なり、此三は世間佛法の功德を害毒する故。

【三】多事多端の生涯は其儘止暇斷眠の法華經讀誦の修行なる法悅を記す。

そねみ嫉まれん事は夥しかるべきか。故に『法華經』に云く、『如來の現在にすら猶ほ怨嫉多し、況んや滅度の後をや』云云。始めに此文を見候ひし時は、さしもやと、思ひ候ひしに、今こそ佛の御言は違はざりけるものかなと殊に身に當つて思ひ知られて候へ。

【二】日蓮は身に戒行なく、心に三毒を離れざれども、此御經を若しや我も信を取り、人にも縁を結ばしむるかと思ひて、隨分世間の事穩かならんと思ひき。世末になりて候へば、妻子を帶して候比丘も人の歸依を受け、魚鳥を服する僧もさてこそ候か。日蓮は、さ せる妻子をも帶せず。魚鳥をも服せず、只『法華經』を弘めんとする失によりて、妻子を帶せずして犯僧の名四海に滿ち、螻蟻をも殺さざれども惡名一天に彌れり。恐らくは在世に釋尊を諸の外道が毀り作りしに似たり。是れ偏へに『法華經』を信ずる事の餘人よりも、少し經文の如く信をも向けたる故に、惡鬼其身に入つて、そねみを爲すかと覺え候へば、是程の卑賤無智無戒の者の二千餘年已前に說かれて候『法華經』の文に載せられて、留難に値ふべしと佛に記し置かれ參らせて候事のうれしさ、申し盡し難く候。

【三】此身に學文仕りし事、やうやく二十四五年にまかりなる也。『法華經』を殊に信じ參らせ候ひし事は、わづかに此六七年より以降なり。又信じて候ひしかども、懈怠の身たる上、或は學文と云ひ、或は世間の事に障へられて、一日にわづかに一卷一品、題目計りなり。去年の五月十二日より今年正月十六日に至るまで、二百四十餘日の程は、晝夜十二時に『法華經』を修行し奉ると存じ候。其故は『法華經』の故に斯る身となりて候へば、

【六道四生】四生とは卵生濕生胎生化生の四種の生れ方。六道とは地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六道也。成佛し能はざる者の輪廻する世界を云ふ。

【四】『法華經』を弘通する身に厄害を加ふる者こそ自分の恩人なりと逆即是順の聖意を述ぶ。

【五】四恩を細說す。

行住坐臥に『法華經』を讀み行ずるにてこそ候へ。人間に生を受けて、是程の悦びは何事か候べき。凡夫の習ひ、我と勵みて菩提心を發して後生を願ふといへども、自ら思ひ出し十二時の間に一時二時こそは勵み候へ。是は思ひ出ざるにも御經を讀み、讀まざるにも『法華經』を行ずるにて候か。無量劫の間、六道四生を輪回し候ひけるには、或は謀叛を起し、強盜夜打等の罪にてこそ、國主より禁をも蒙り、流罪死罪にも行はれ候らめ。是は『法華經』を弘むるかと思ふ心の強盛なりしに依て、惡業の衆生に讒言せられて斯る身になりて候へば、定めて後生の勤にはなりなんと覺え候。是程の心ならぬ晝夜十二時の『法華經』の持經者は、末代には有難くこそ候らめ。

【四】又止む事なくめでたき事侍り。無量劫の間、六道に回り候ひけるには、多くの國主に生れ値ひ奉りて、或は寵愛の大臣、關白等ともなり候ひけん。若し爾らば國を給はり、財寶官祿の恩を蒙りけるが、『法華經』流布の國主に値ひ奉り、其國にて『法華經』の御名を聞きて修行し、是を行じて讒言を蒙り流罪に行はれ參らせて候國主には、未だ値ひ參らせ候はぬ歟。『法華經』に云く、「是の法華經は無量の國中に於て、乃至名字をも聞くことを得べからず。何に況んや見ることを得て受持し讀誦せんをや。」云云。されば此の讒言の人と國主こそ我が身には恩深き人には在しまし候らめ。

【五】佛法を習ふ身には、必ず四恩を報ずべきに候か。四恩とは、『心地觀經』に云く、一には一切衆生の恩。一切衆生なくば、衆生無邊誓願度の願を發し難し。又惡人無くして

菩薩に習学を修さずば、いかでか功徳をば増長せしめ候ふべき。二には父母の恩。六道に生を受くるに必ず父母あり。其中に或は殺盗、悪律儀、謗法の家に生れぬれば、我と其科を犯さされども其業を成熟す。然るに今生の父母は我を生みて『法華経』を信ずる身となせり。梵天、帝釈、四大天王、転輪聖王の家に生れて、三界四天を領られて人天四衆に恭敬せられんよりも、恩重きは今の某が父母なる歟。三には国王の恩。天の三光に身を温め、地の五穀に神を養ふこと、皆是れ国王の恩なり。其上今度『法華経』を信じ、今度生死を離るべき国主に値ひ奉れり。争でか少分の怨に依て、おろかに思ひ奉るべきや。四には三宝の恩。釈迦如来、無量劫の間菩薩の行を立て給ひし時、一切の功徳を集めて六十四分と成して、功徳を身に得給へり。其一分をば我が身に用ひ給ふ。今六十三分をば此世界に留め置きて、五濁乱漫の時、非法の盛ならん時、謗法の者国に充満せん時、無量の守護の善神も法味を嘗めずして威光勢力減ぜん時、日月光りを失ひ、天龍雨を下さず、地神地味を減ぜん時、草木根茎枝葉華果薬等の七味を失せん時、十善の国王も貪、瞋、癡を増し、父母六親に孝せず親しからざらん時、我が弟子無智無戒にして髪ばかりを剃りて守護神にも捨てられて、活命の計無からん比丘比丘尼の命の支へとせんと誓ひ給へり。又果地の三分の功徳、二分をば我が身に用ひ給ひ、仏の寿命百二十まで世にましますべかりしが八十にして入滅し、残る所の四十年の寿命を留め置きて我等に与へ給ふ恩をば、四大海の水を硯の水とし一切の草木を焼いて墨となして、一切のけだものの毛を筆とし、

【古の聖人云云】雪山童子は鬼に肉を施し、常啼菩薩は啼いて法を求む、藥王菩薩臂を焚く、普明王は頭を捨つ、皆法華經護持の爲なり。

【六】法悅を結す。

【七】歎きを述ぶ。

十方世界の大地を紙と定めて注し置くとも、爭でか佛の恩を報じ奉るべき。法の恩を申さば、法は諸佛の師なり、諸佛の貴き事は法に依る。されば佛恩を報ぜんと思はん人は、法の恩を報ずべし。次に僧の恩をいはば、佛寶法寶は必ず僧によつて住す。譬へば薪無ければ火無く、大地無ければ草木生ずべからず。佛法有りといへども僧有りて習ひ傳へずんば、正法像法二千年過ぎて末法へも傳はるべからず。故に『大集經』に云く、「五箇の五百歳の後に、無智無戒なる沙門を失ありと云つて是を惱すは此人佛法の大燈明を滅せんと思へ」と說かれたり。然れば僧の恩を報じ難し。されば三寶の恩を報じ給ふべし。古の聖人は雪山童子、常啼菩薩、藥王大士、普明王等、此等は皆我が身を鬼の打飼となし、身の血髓を賣り、臂を焚き、頭を捨て給ひき。然るに、末代の凡夫、三寶の恩を蒙りて三寶の恩を報ぜず、いかにしてか佛道を成ぜん。然るに『心地觀經』、『梵網經』等には、佛法を學し、國王の恩を受ん人は必ず四恩を報ずべしと見えたり。

【六】某は愚癡の凡夫、血肉の身なり、三惑一分も斷ぜず。只『法華經』の故に罵詈毀謗せられて刀杖を加へられ流罪せられたるを以て、大聖の臂を燒き、髓をくだき、頭を刎ねられたるに擬へんと思ふ。是れ一つの悅びなり。

【七】第二に大なる歎きと申すは、『法華經』第四に云く、「若し惡人有つて不善の心を以て、一劫の中に於て、現に佛前に於て常に佛を毀罵せん、其罪尙ほ輕し。若し人一の惡言を以て在家出家の法華經を讀誦する者を毀呰せん、其罪甚だ重し。」等云云。此等の經

文を見るに信心を起し、身より汗を流し、兩眼より涙を流す事雨の如し。我一人此國に生れて、多くの人をして一生の業を造らしむる事を歎く。彼の不輕菩薩を打擲せし人、現身に改悔の心を起せしだにも、猶ほ罪消え難くして千劫阿鼻地獄に墮ちぬ。今我に怨を結べる輩は、未だ一分も悔ゆる心も起さず。是體の人の受くる業報を『大集經』に說いて云はく、「若し人あつて千萬億の佛の所にして、佛身より血を出さん、意に於て如何。此人の罪を得る事寧ろ多しとせんや否や。」大梵王言さく、「若し人只一佛の身より血を出さん、無間の罪尚ほ多し。無量にして算をおきても數を知らず、阿鼻大地獄の中に墮ちん。何に況んや萬億の佛身より血を出さん者を見んをや。終によく廣く彼人の罪業果報を說く事ある事なからん。但し如來をば除き奉る。」佛の言はく、「大梵王、若し我が爲に髮をそり、袈裟をかけ、片時も禁戒をうけず、缺犯をうけん者を、惱まし罵り、杖をもて打ちなんどする事有らば、罪を得る事彼よりは多し。」と。

弘長二年壬戌正月十六日　　日蓮　花押

工藤左近尉殿

◎縮遺一〇五四頁
文永十一年（五十三歳）の作。太田金吾殿に賜へる御書にして異體同心の修行を勸發し國難の起るは謗法退治なる旨を明す。

異體同心鈔

白小袖一つ、厚綿の小袖、伯耆房が便宜に鵞目一貫、竝に受給はる。伯耆房、佐渡房等

【鵞目一貫】鵞目は銅錢銀錢の總稱。錢の中央の孔、鵞鳥の目に似たるより此名あり。一貫とは千錢なり。故に錢一千錢のこと。

の事、熱原の者どもの御心ざし、異體同心なれば萬事を成じ、同體異心なれば諸事叶ふ事なしと申す事は、外典三千餘卷、內典五千餘卷に定まりて候。殷の紂王は七十萬騎なれども同體異心なれば戰に負けぬ。周の武王は八百人なれども異體同心なれば軍に勝ちぬ。一人の心なれども二つの心あれば、其の心違ひて成ずる事なし。百人千人なれども一つ心なれば必ず事を成ず。日本國の人人は多人なれども異體異心なれば諸事成ぜん事難し。日蓮が一類は異體同心なれば人人少く候へども大事を成じて一定『法華經』弘まりなんと覺えて候。惡は多けれども、一善に勝つ事なし。譬へば多くの火集れども、一水には消えぬ。此の一門も又斯の如し。其上貴邊は多年年積りて、奉公法華經に厚く在する上、今度は如何にも勝れて御心ざし見えさせ給ふよし、人人も申し候。又彼等も申し候。一一に承りて、日天にも大神にも申し上げて候ぞ。此文は急ぎ御返事申すべく候ひつれども、確なる便宜候はで、今まで申し候はず。辨阿闍梨が便宜は餘り忽忽にて、書得ず候ひき。さては各各年の頃如何と思しつる蒙古の事、既に近付きて候か。我國の滅びん事は淺ましけれども、是だにも空事になるならば、日本國の人人彌『法華經』を謗じて、萬人無間地獄に墮つべし。彼だにも強るならば、國は亡ぶとも、謗法は少くなりなん。譬へば灸治をして病を癒し、針治にて人をなほすが如し。當時は歎くとも、後は悅びたり。日蓮は『法華經』の御使ひ、日本國の人人は大族王の一閻浮提の佛法を失ひしが如し。蒙古國は雪山下王の如し、天の御使として『法華經』の行者をあだむ人人を罰せらるべし。又現身に改

悟を得してあるならば、阿闍世王の佛に歸して白癩を治め、四十年の壽を延べ、無根信と申す位に上りて現身に無生忍を得たりしが如し。恐々謹言。

八月六日　日蓮花押

太田殿御返事

下山鈔

【一】例時に於ては、尤も『阿彌陀經』を讀まるべきか、等云云。此事は仰せ候はぬ已前より、親父の代官といひ、私の計ひと申し、此四五年が間は退轉なく、例時には『阿彌陀經』を讀み奉り候ひしが、去年の春の末、夏の始めより『阿彌陀經』を止めて、一向に『法華經』の内、『自我偈』讀誦し候。又同じくは一部を讀み奉らむと勵み候。是れ又偏へに現當の御所祈の爲なり。

【二】但し『阿彌陀經念佛』を止めて候事は、此の日比日本國に聞えさせ給ふ日蓮聖人、去ぬる文永十一年の夏の比、同じき甲州飯野、御牧、波木井の郷の内、身延の嶺と申す深山に御隱居せさせ給ひ候へば、さるべき人人御法門承るべきの由候へども、御制止ありて入れられず。朧氣の強縁ならでは叶ひ難く候ひしに、有る人見參の候と申し候ひしかば、信じ參らせ候はん料には參り候はず、物の樣をも見候はん爲に、閑所より忍びて

【一】無生の忍　具さには無生法忍、無生の理に安住するを忍と云ふ。忍とは六度の一。

【一】縮遺一五五五頁　建治三年（五十六歳）の作。因幡房日永に代り、下山光基の譴責に對して、法華經に歸伏せしことが却つて至忠至孝なる旨を陳述せし代筆の辯明書なり。光基は後に、日永のため聖化に歸せり。

【二】阿彌陀經を捨てゝ法華經に歸伏せしことを明す。

【現當】現當二世。現在未來なり。

【二】兩經の淺深勝劣を辨じ、阿彌陀經を捨てゝ法華經を信ずる所以を明す。

【三】世人教の權實本末を顛倒せるを辨ず。

【四】機時國序によりて所說の經に大小乘の相異生ずるを明す。

參り、御庵室の後に隱れしに、人人の御不審に付きて、あらあら御法門說かせ給ひ候ひき。『法華經』と『大日經』と、『華嚴經』、『般若經』、『深密經』、『楞伽經』、『阿彌陀經』等の經經の勝劣淺深等を先として、說き給ひしを承り候へば、『法華經』と『阿彌陀經』等の勝劣は、一重二重のみならず、天地雲泥に候ひけり。譬へば帝釋と獼猴と、鳳凰と烏鵲と、大山と微塵と、日月と螢炬等の高下勝劣なり。彼彼の經文と『法華經』とを引き合せて比べさせ給ひしかば、愚人も辨へつ可し、白白也、赤赤也。されば、此法門は大體人も知れり、始めて驚くべきにあらず。

【三】又佛法を修行する法は、必ず經經の大小、權實、顯密を辨ふべき上、よくよく時を知り機を鑑みて申すべき事なり。而るに當世日本國は、人每に『阿彌陀經』並びに彌陀の名號等を本として、『法華經』を忽諸し奉る。世間に智者と仰がるる人人、我も我も時機を知れり知れりと存ぜられげに候へども、小善を以て大善を打ち奪り、權經を以て實經を失ふ失は、小善還つて大惡となり、藥變じて毒となる。親族還つて怨敵となるが如し、難治の次第なり。

【四】又佛法には賢げなる樣なる人なれども、時に依り、機に依り、國に依り、前後の弘通に依る事を辨へざれば、身心を苦しめて修行すれども、驗なき事なり。設ひ一向に小乘流布の國には、大乘をば弘通する事はあれども、一向大乘の國には小乘經を強ちに忌む事なり。强ひてこれを弘通すれば、國も傾ひ、人も惡道免れ難し。又初心の人には、二法

【五】我國に佛敎渡来せし當時の大小權實雜亂を述ぶ。

を竝べて修行せしむる事を許さず。月氏の習ひには、一向小乘の持者は王路を行かず、一向大乘の僧は左右の路を踏む事なし。井の水、河の水、同じく飲む事なし。何に況んや一房に栖みなんや。されば『法華經』に初心の一向大乘の寺を佛說き給ふに『但だ大乘經典を受持せんことを樂つて、乃至餘經の一偈をも受けざれ。』又云く、『又聲聞を求むる比丘比丘尼、優婆塞優婆夷に親近せざれ。』又云はく『亦問訊せざれ。』等云云。設ひ親父たれども一向小乘の寺に住する比丘比丘尼をば、一向大乘の寺の子息此を禮拜せず。親近せず。何に況んや其法を修行せんや。大小兼行の寺は、後心の菩薩なり。

【五】今日本國は、最初に佛法渡りて候ひし比は、大小雜行にて候ひしが、人王四十五代聖武天皇の御宇に、唐の楊洲龍興寺の鑑眞和尚と申せし人、漢土より我朝に『法華經』天台宗を渡し給ひてありしが、圓機未熟とや思しけん。此の法門をば己心に收めて、口にも出し給はず。大唐の終南山の豐德寺の道宣律師の小乘戒を、日本國の三所に建立せり。此れ偏へに法華宗の流布すべき方便なり。大乘出現の後には、肩を竝べて行ぜよとにはあらず。例せば儒家の本師たる、孔子老子等の三聖は、佛の御使として漢土に遣はされて、內典の初門に、禮樂の文を諸人に敎へたりき。『止觀』に經を引いて云く『我三聖を遣はして、彼の震旦を化す。』等云云。妙樂大師云く『禮樂前に馳せて、眞道後に啓く。』と云云。佛は大乘の初門に、且らく小乘戒を、說き給ひしかども、時過ぎぬれば禁めて云く、『涅槃經』に云く『若し人有つて、如來は無常なりと言はん、云何ぞ是の人、舌墮落せざら

【六八】本朝傳教大師が法華經中心に日本佛教を統一せし史的事實を擧ぐ。併せて權教を拋つて實教の眞の行者たらんことを激勵す。

ん」等云云。

【六八】其後人王第五十代桓武天皇の御宇に、傳教大師と申せし聖人出現せり。始めには華嚴、三論、法相、倶舍、成實、律の六宗を習ひ極め給ふのみならず、達磨宗の淵底を探り究め給ひ、剩へ未だ日本國に弘通せざる天台眞言の二宗をも尋ね顯はして、淺深勝劣を心中に究竟し給へり。去ぬる延暦二十一年正月十九日に、桓武皇帝高雄寺に行幸なり給ひ、南都七大寺の長者善議、勤操等の十四人を教大師に召し合せて、六宗と法華宗との勝劣を糾明せられしに、六宗の碩學、宗宗毎に我が宗は一代超過の由、各各に立て申されしかども、教大師の一言に萬事破れ畢んぬ。其後皇帝重ねて口宣す、和氣弘世を御使として諫責せられしかば、七大寺六宗の碩學、一同に謝表を奉り畢んぬ。十四人の表に云はく、『此界の含靈、而今而後、悉く妙圓之船に載り、早く彼岸に渡ることを得る。』云云。教大師云く、「二百五十戒忽ちに捨て畢んぬ。」云云。又云く、「正像稍過ぎ已つて、末法太だ近きにあり。」又云く、「一乘の家には都て權を用ゐざれ。」又云く、「穢食を以て寶器に置くことなかれ。」又云く、「佛世の大羅漢、已に此の呵責を被れり。滅後の小蚊虻、何ぞ之に隨はざる。」云云。此れ又、私の責めにはあらず。『法華經』には『正直に方便を捨て、但だ無上道を説く。』云云。『涅槃經』には『邪見の人』等云云。『邪見方便』と申すは、『華嚴』、『大日經』、『般若經』、『阿彌陀經』等の四十餘年の經經なり。『捨』とは天台の云く、『廢つるなり。』又云く、『謗とは背くなり。』『正直』とは初心の行者の『法華經』を修行する法は、上

【七】滅後流布に關しては佛の未來記顯然にして、自家の論をなすにて非ることを宣べ、本門三大秘法は天台傳教も弘通せざりし旨を說く。

に異なる所の正雜宗を抛ちて、一向に『法華經』を行ずるが、眞の正直の行者にては候なり。而るに雜心の行者、雜信の輩に、權教の行者と『法華經』とを並べて行ずれば、不正直の者となる。世間の法にも賢人は二君に仕へず、貞女は兩夫に嫁がずと申す是れなり。

【七】又私に異議を申すべきにあらず。如來は未來を鑒みさせ給ひて、我滅後正法一千年、像法一千年、末法一萬年が間、我が法門を弘通すべき人人並びに經經を一一にきりあてられて候。而るに此を背く人世に出來せば、設ひ國主たりとも用ゆべからず。所謂る我が滅後の次の日より、正法五百年の間は一向小乘經を弘通すべし。迦葉、阿難、乃至富那奢等の十餘人なり。後の五百年には權大乘經の内、『華嚴』、『方等』、『般若』、『大日經』、『觀經』、『阿彌陀經』等を、彌勒菩薩、文殊師利菩薩、馬鳴菩薩、龍樹菩薩、無著菩薩、天親菩薩等の四依の大菩薩等の大論師弘通すべしと云云。此等の大論師は、『法華經』の深義を知しめさざるにあらず。然も『法華經』流布の時も來らざる上、釋尊よりも仰せ付けられざる大法なれば、心には存じて、口に宣べ給はず。或時は粗ほのめかしたる樣なれども、實義をば一向に隱して演べ給はず。像法一千年の内に入りぬれば、月氏の佛法漸く漢土日本に渡り來る。世尊眼前に藥王菩薩等の迹化他方の大菩薩に、『法華經』の半分、迹門十四品に讓り給ふ。是は又地涌の大菩薩、末法の初めに出現せさせ給ひて、本門『壽量品』の肝心たる『南無妙法蓮華經』の五字を、一閻浮提の一切衆生

【八】末法今時こそ大法流布の時なるを述べ併て大法弘通に對する妨害者を擧ぐ。

に唱へさせ給ふべき先序の爲なり。所謂る迹門弘通の衆は、南岳、天台、妙樂、傳教等是れなり。

【八】今の時は世已に「上行菩薩等の御出現の時剋に相當れり。而るに余愚眼を以て之を見るに、先相已に現れたるか。而るに諸宗所依の『華嚴經』、『大日經』、『阿彌陀經』等は、其の流布の時を論ずれば、正法一千年の内、後の五百年乃至像法の始めの諍論の經經なり。而るに人師等經經の淺深勝劣等に迷惑するのみならず、佛の讓り状をも諍ひ、時機をも勘へず、猥りに宗宗を構へ、像末の行となせり。例せば晴に種を下して、玄冬に菓を求め、下弦に滿月を期し、夜中に日輪を尋ぬるが如し。何に況んや倶舍宗なんど申す宗は一向小乘なり。月氏には正法一千年の前の五百年の小法、又日本國にては像法の中頃、天台宗の流布すべき前に、且らく機を調養せんが爲なり。例せば日出でんとて明星前に立ち、雨下らんとて雲先づ起るが如し。日出で雨下りて後の星雲は何かせん。而るに今は時過ぎぬ。又末法に入りてこれを修行せば、重病に輕藥を授け、大石を小船に載するが如し。修業せば身は苦しく、暇は入りて驗しなく、華のみ開きて菓なからん。故に教大師像法の末に出現して、『法華經』の迹門の戒定慧の三が内、其中圓頓の戒壇を叡山に建立し給ひし時、二百五十戒忽ちに捨て畢んぬ。随つて又鑒眞の末の南都七大寺の一十四人三百餘人を加制して、大乘の人となり。一國擧つて小律儀を捨て畢んぬ。其券契の書を見るべし、分明なり。而るを今邪智の持齋の法師等、古捨てし小乘戒を取出して、一國も依た

【九】小乘律宗の盜法を明し、併せて國賊なる旨を說く

ぬ、名ばかりなる二百五十戒の法師原あつて、公家武家を誑惑して國師とのゝしる。剩へ我慢を發して、大乘戒の人を破戒無戒と罵る。例せば狗犬が師子を吠え、猿猴が帝釋を蔑るが如し。今の律宗の法師原は、世間の人人には持戒智者の樣には見ゆれども、其實を論ぜば天下第一の大不實の者なり。其故は、彼等が本文とする『四分律』『十誦律』等の文は、大小乘の中には一向小乘、小乘の中にも最下の小律なり。在世には十二年の後、方等大乘へ移る程の、且らくの息め言、滅後には正法の前の五百年の一向小乘の寺なり。此れ亦一向大乘の寺の毀謗となさんが爲なり。されば日本國には像法の半に、鑑眞和尚大乘の手習ひとし給ふ。傳教大師彼の宗を破し給ひて、人をば天台宗へ攝とし、宗をば失ふべしといへども、後に事の由を知らしめんが爲に、我が大乘の弟子を遣はして助け置き給ふ。而るに今の學者等は此由を知らずして、六宗は本より破れずしてありと思へり。墓なし、墓なし。

【九】又一類の者等、天台の才學を以て見れば、我が律宗は幼弱なる故に、漸漸に『梵網經』へ移りぬ。結句は『法華經』の大戒を我が小律に盜み入れて、還つて圓頓の行者を破戒無戒と笑へば、國主は當時の形貌の貴げなる氣色に誑され給ひて、天台宗の寺に寄せたる田畠等を奪ひ取つて彼等に與へ、萬民は又一向大乘の寺の歸依を抛て彼の寺に移る。手づから火を付けざれども、日本一國の大乘の寺を燒き失ひ、抉目鳥にあらざれども、一切衆生の眼を拔きぬ。佛の記し給ふ、阿羅漢に似たる闡提とは是なり。『涅槃經』に

【一〇】良觀房忍性を難ず。

云く「我涅槃の後無量百歳に、四道の聖人も悉く復涅槃せん。正法滅して後、像法の中に於て、當に比丘あるべし。持律に似像し、少し經を讀誦し、飮食を貪嗜して、其身を長養せん。乃至、袈裟を服すと雖も、猶ほ獵師の細視徐行するが如く、猫の鼠を伺ふが如く、外には賢善を現はし内には貪嫉を懷き、啞法を受けたる婆羅門等の如く、實に沙門に非ずして沙門の像を現し、邪見熾盛にして正法を誹謗せん」等云云。此の經文に世尊未來を記し置き給ふなり。抑も釋尊は我等が爲には賢父たる上、明師なり、聖主なり。一身に三德を備へ給へる佛の佛眼を以て、未來惡世を鑒み給ひて、記し置き給へる記文に云く、「我涅槃の後無量百歳」云云。佛滅後二千年已後と見えぬ。又「四道の聖人、悉く復涅槃せん」云云。付法藏の二十四人を指すか。「正法滅して後」等云云。像法の世と見えたり。「當に比丘あるべし、持律に似像し」等云云。

【一〇】今末法の代に比丘の似像を選び出さば、日本國には誰の人をか引き出して、大覺世尊をば不妄語の人とし奉るべき。俗男俗女比丘尼をば此の經文に載せたる事なし、但し比丘計りなり。比丘は日本國に數を知らず。然して其中に三衣一鉢を身に帶せれば似像と定めがたし。唯だ持齋の法師ばかり相似たり。一向の持齋の中には、次下の文に持律と說けり。律宗より外は又脫れぬ。次下の文に「少し經を讀誦す」云云。相州鎌倉極樂寺の良觀房にあらずば、誰を指し出して經文を助け奉るべき。次下の文に「猶ほ獵師の細視徐行するが如く、猫の鼠を伺ふが如く、外には賢善を現し、内には貪嫉を懷く」等云

【両火房】良観房に同じ、普通なるを以て特に書替的に呼びたり

【二】小律の者の偸盗及び欺瞞を指摘す。

云云。両火房にあらずば、誰をか三衣一鉢の猟師伺猫として佛法を信ずべき。哀れなるかな、當時の俗男俗女、比丘尼等、檀那等が山の鹿、家の鼠となりて、猟師猫に似たる両火房に伺はれ誑されて、今生には守護國土の天照大神正八幡等に捨てられ、他國の兵軍に破られて、猫の鼠を捕へ取るが如く、猟師の鹿を射殺すが如し。俗男武士等は射伏せられ、俗女は捕へ取られて他國へ赴かん。王昭君、楊貴妃が如くになりて後生には無間大城に一人もなく趣くべし。而るを余此事を見る故に、彼の檀那等が大悪心を恐れず、強盛に攻むる故に、両火房内内諸方に讒言を企てて、余が口を塞がんと勵みしなり

【二】又經に云く、「汝を供養する者は三悪道に堕つ」等云云。在世の阿羅漢を供養せし人、尚三悪道免れ難し。何に況んや滅後の誑惑の小律の法師原をや。小戒の大科をば、これを以て知んぬべし。或は又驢乳にも譬へたり。還つて糞となる。或は狗犬にも譬へたり。大乗の人の糞を食す。或は猿猴、或は瓦礫と云云。されば時を辨へず機を知らずして小乗戒を持たば、大乗の障りとなる。破れば又必ず悪果を招く。其上今の人人、小律の者どもは、大乗戒を小乗戒に盗み入れ、驢乳に牛乳を入れて、大乗の人を欺く。大偸盗の者、大謗法の者、其の科を論ずれば、提婆達多も肩を並べ難く、瞿伽利尊者が足も及ばざる、閻浮第一の大悪人なり。是を歸依せん國土安穏なるべしや。余此事を見るに自身だに辨へなばさてこそあるべきに、日本國に智者と思しき人人一人も知らず。國已に破れなんとす。其上佛の諫暁を重んずる上、一分の慈悲に催されて、國に代りて身命を捨て申せど

【三】極樂寺良觀房の雨を祈請に就て述べ、彼が破戒の僧なるを指摘す。

【事を切らん】事を決定せんとの意。

も、國主等彼に誑されて、用ゆる人一人もなし。譬へば熱鐵に冷水を投げ、睡眠の師子に手を觸るるが如し。

【三】爰に兩火房と申す法師あり。身には三衣を皮の如く放つ事なし、一鉢は兩眼を守るが如し。二百五十戒堅く持ち、三千の威儀を整へたり。世間の無智の道俗、國主より初めて萬民に至るまで、地藏尊者の伽羅陀山より出現せるか、迦葉尊者の靈山より下來するかと疑ふ。余『法華經』の第五の卷の『勸持品』を拜見し奉れば、末代に入りて『法華經』の大怨敵三類あるべし。其の第三の强敵は、此者かと見畢んぬ。便宜あらば國敵を攻めて、彼が大慢を倒して、佛法の威驗を現はさんと思ふ處に、兩火房常に高座にして歎いて云く、「日本國の僧尼には二百五十戒、五百戒、男女には五戒八齋戒等を一同に持たせんと思ふに、日蓮が此願の障りとなる。」と云云。余案じて云く、「現證に付いて事を切らんと思ふ」處に、彼常に雨を心に任せて、下らす由披露あり。古へも又雨を以て得失を現はす例これ多し。所謂る傳教大師と護命と、守敏と弘法と等なり。此に兩火房、上より祈雨の御祈りを仰せ付けられたりと云云。此に兩火房祈雨あり。去ぬる文永八年六月十八日より二十四日までなり。此に使を極樂寺へ遣はす、年來の御歎き是れなり。七日が間に若し一雨も下らば、御弟子となりて二百五十戒具に持たん上に、念佛無間地獄と申す事僻讀なりけりと申すべし。余だにも歸伏し奉らば、我が弟子等を始めて、日本國大體傾き候ひなんと云云。七日が間、三度の使をつかはす。然れども如何したりけん、一雨も下らざるの上、疾風、暴

【恃怙】たよりたのむこと。

風、隨風、暴風等の八風、十二時に止む事なし。剰へ二七日まで一雨も下らず、風も止む事なし。されば此事は何事ぞ、和泉式部と云ひし色好み、能因法師と申せし無戒の者、此は彼の雨火房が忌む所の三十一字ぞかし。彼の月氏の大盗賊、『南無佛』と稱せしかば天頭を得たり。彼の雨火房並びに諸僧等の二百五十戒、眞言法華の小法大法の數百人の佛法の靈驗、如何なれば、淫女等の誑言、大盗人が稱佛には劣るらんと、怪しき事なり。此を以て彼等が大科をば知るべきに、さはなくして還つて讒言を用ゐらるるは、譬とも堪えず。所詮日本國亡國となるべき期來るか。又祈雨の事はたとひ雨下らせりとも雨の形貌を以て祈る者の賢不賢を知る事あり。雨種種なり、或は天雨、或は龍雨、或は修羅雨、或は麤雨、或は甘雨、或は雷雨等あり。今の祈雨は都て一雨も下らざる上、二七日が間、前より遙に超過せる大旱魃大惡風、十二時に止む事なし。雨火房眞の人ならば忽に邪見をも翻し跡をも山林に隱すべきに、其義なくして面を弟子檀那等に曝す上、剰へ讒言を企て日蓮が頸を斬らせ參らせんと申し上げ、預かる人の國まで状を申し下して命を斷たんとする大惡人なり。而るを無智の檀那等は恃怙して、現世には國を破り、後生には無間地獄に墮ちなん事の不便さよ。『起世經』に云く、『諸の衆生ありて放逸を爲し、清淨の行を汚す故に天雨を下らさず。』又云く、『不如法なるあり。慳貪嫉妬邪見顛倒せる故に天則ち雨を下らさず。』又『經律異相』に云く、『五事あつて雨なし、一二三略之、四には雨師淫亂、五には國王理もて治めず、雨師瞋る故に雨らず。』云云。此等の經文の龜鏡をもて、雨火房が身に指し當

【二三】邪師を尊敬し日蓮を憎むは經文を憎むこととなる。然るに經、師の正邪を世人辨へざるより國運衰退せりと說く。

て見よ。少しも曇りなからん。一には名は持戒と聞ゆれども、實には放逸なるか。二には慳貪なるか。三には嫉妬なるか。四には邪見なるか。五には淫亂なるか。此の五には過ぐべからず。又此經は兩火房一人には限るべからず。昔を鑑み今をも知れ。弘法大師の祈雨の時、二七日の間一雨も下らざりしも奇しき事なり。而るを誑惑の心強盛なりし人なれば、天子の御祈雨の雨を盜み取つて我が雨と云云。善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏の祈雨の時も、小雨は下りたりしかども、三師ともに大風連連と吹いて、勅使を付けて追はれし淺ましさと、天台大師傳教大師の須臾と三日が間に、甘澤雨を下らして、小風も吹かざりしは貴くぞ覺ゆる。

【二三】『法華經』に云く、『或は阿練若に、納衣にして空閑に在りて、乃至、利養に貪著するが故に、白衣の與に法を說いて、世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くなる有らん』。又云く、『常に大衆の中に在りて、我等を毀らんと欲するが故に、國王、大臣、婆羅門、居士、及び餘の比丘衆に向つて、誹謗して我が惡を說き、乃至、惡鬼其身に入つて、我を罵詈毀辱せん。』又云く、『濁世の惡比丘は、佛の方便隨宜所說の法を知らずして、惡口して顰蹙し、數數擯出せられん。』等云云。『涅槃經』に云く、『一闡提あつて羅漢の像を作し、空處に住し、方等大乘經典を誹謗す。諸の凡夫人見已つて、皆眞の阿羅漢、是れ大菩薩なりと謂へり』等云云。今予、『法華經』と『涅槃經』との佛鑒を以て、當時の日本國を浮べて、其影を見るに、誰の僧か國主に六通の羅漢の如く尊まれて、而も『法華經』の行者

【一四】佛滅後日を經るにつれて愈濁惡亂世に需ふ旨を述ぶ。

を梟首して、頸を斬らせんとせし。又何れの僧か萬民に大菩薩と仰がれたる、誰の智者か『法華經』の故に度度處處を追はれ、頸を斬られ弟子を殺され、兩度まで流罪せられて、最後に頸に及ばんとせし。眼無く耳無きの人は除く、眼あり耳あらん人は經文を見聞せよ。今の人人は人每に、經文を我も讀む、我も信じたりといふ。只だ悩むところは日蓮ばかりなり。經文を信ずるならば、慥かに載せたる強敵を取出して、「經文を信じて讀む證」とせよ。若し爾らずは、經文の如く讀誦する日蓮を怒れるは、經文を怒れるにあらずや。佛の使を輕しむるなり。今の代の兩火房が『法華經』の第三の強敵とならずば、釋尊は大妄語の佛、多寶十方の諸佛は不實の證明なり。又經文眞ならば、御歸依の國主は現在には守護の善神に捨てられ、國は他國の有となり、後生には阿鼻地獄疑ひなし。而るに彼等が大惡法を尊まるる故に、理不盡の政道出來す。彼は國主の僻見の心を推するに、日蓮は阿彌陀佛の怨敵父母の建立の堂塔の讎敵なれば、假令政道を枉げたりとも、佛意には背かじ、天神も許し給ふべしと思はるるか、果敢なし、果敢なし。委細に語るべけれども、此は小事なれば申さず、心ある者は推して知んぬべし。上に書き擧げたるより雲泥大事なる、日本第一の大科、此國に出來して年久しくなる間、此國既に梵、釋、日月、四天、大王等の諸天にも捨てられ、守護の諸大善神も還つて大怨敵となり、『法華經』守護の梵帝等、隣國の聖人に仰せ付けて日本國を治罰し、佛前の誓狀を遂げんと思食す事あり。

【一四】 夫れ正像の古は世濁世に入ると雖も始めなりしかば國土さしも亂れず。聖賢も

【二五】傳教大師諸經諸宗の淺深勝劣を判ずるを明す。

間間出現し、福徳の王臣も絶えざりしかば、政道も曲る事なし。萬民も直かりし故に、小科を對治せんが爲に、三皇五帝三王三聖等出現して、墳典を作りて代を治す。世濟く治まりたりしかども、漸漸に末になるままに、聖賢も出現せず、福徳の人も少ければ、三災は多大にして、七難先代に超過せしかば、外典及び難し。其の時治を代へて、內典を用ゐて世を治す、隨つて世且らくは治まる。されども又世末になるままに、人の惡は日日に增長し、政道は月月に衰減するかの故に、又三災七難先より彌增長して、小乘戒等の力驗なかりしかば、其時治を代へて、小乘の戒等を止めて大乘を用ゐる。大乘又叶はねば、『法華經』の圓頓の大戒壇を叡山に建立して代を治めたり。所謂る傳教大師、日本三所の小乘戒竝びに華嚴、三論、法相の三大宗の戒を破失せし是れなり。

【二五】此の大師は六宗を攻落させ給ふのみならず、禪宗をも習ひ極め、剩へ日本國に未だ弘まらざりし法華宗、眞言宗をも勘へ出して、勝劣を鏡に懸け、顯密の差別黑白なり。然れども世間の疑を散じ難かりしかば、去ぬる延暦年中に御入唐、漢土の人人も他事には賢かりしかども、『法華經』、『大日經』、天台眞言の二宗の勝劣淺深は分明に知らせ給はざりしかば、御歸朝の後、本の御存知の如く、妙樂大師の記の十の不空三藏の改變の言を、含光が語りしを引載せて、天台勝れ眞言劣れる明證を、依憑集に載せ給ふ。剩へ眞言宗の宗の一字を削り給ふ。其故は善無畏、金剛智、不空の三人、一行阿闍梨を誑して本はなき『大日經』に天台の己證の一念三千の法門を盜み入れて、人の珍寶を我が有とせる大誑惑

【一六】弘法大師の科を擧出す。

【一七】慈覺等天台の末學が台眞勝劣に迷へるを明す。

【一八】慈覺智證の大科を擧ぐ。

の者なりと心得給へり。例せば澄觀法師が天台大師の十法成乘の觀法を華嚴に盜み入れて、還つて天台宗を末教と下せしが如しと御存知あつて、宗の一字を削りて、叡山は唯七宗たるべしと云云。

【一六】而るを弘法大師と申す、天下第一の自讃毀他の大妄語の人、教大師御入滅の後、對論なくして公家を掠め奉りて、八宗と申し立てぬ。

【一七】然れども本師の跡を紹繼する人人は、叡山の唯七宗にてこそあるべきに、教大師の第三の弟子慈覺大師と、叡山第一の座主義眞和尚の末弟子智證大師と、此二人は漢土に渡り給ひし時、日本國にて一國の大事と諍論せし事なれば、天台眞言の碩學等に値ひ給ふ毎に、勝劣淺深を尋ね給ふ。然るに其時の明匠等も、或は眞言宗勝れ、或は天台宗勝れ、或は二宗齊し、或は理同事異といへども、倶に慥かの證文を出さず、二宗の學者等併しながら胸臆の言なり。

【一八】然るに慈覺大師は學び極めずして歸朝して、疏十四卷を作れり。所謂る「金剛頂經」の疏七卷、「蘇悉地經」の疏七卷なり。此疏の爲體は、「法華經」と「大日經」等の三部經とは、理は同じく事は異なり等云云。此疏の心は、「大日經」の疏と義釋との心を出すが、猶ほ不審明らめ難かりけるかの故に、本尊の御前に疏を指し置きて、此の疏佛意に叶へりや否やと祈誓せし處に、夢に日輪を射ると云云。打驚きて、吉夢なり、眞言勝れたる事疑ひなしと思ひて、宣旨を申し下す。日本國に弘通せんとし給ひしが、程なく疫病病みて、

四ヶ月と申せしかば跡も無く失せ給ひぬ。而るに智證大師は、慈覺の御爲にも御弟子なりしかば、遺言に任せて宣旨を申し下し給ふ。所謂る「眞言法華齊等なり。譬へば鳥の二の翼、人の兩目の如し。又叡山も八宗なるべし」と云云。此の兩人は、身は叡山の雲の上に臥すと雖も、心は東寺里中の塵に交はる。本師の遺跡を紹繼する樣にて、還つて聖人の正義を忽諸にし給へり。『法華經』の「於諸經中最在其上」の、上の字を打返して、『大日經』の下に置き、先づ大師の怨敵となるのみならず、存外に釋迦多寶、十方分身、大日如來等の諸佛の讎敵となり給ふ。されば慈覺大師の夢に、日輪を射ると見しは是れなり。佛法の大科此より初まる。日本國亡國となるべき先兆なり。棟梁たる『法華經』、既に『大日經』の椽梠となりぬ。王法も下剋上して、王位も臣下に隨ふべかりしを、其時又一類の學者ありて、堅く此の法門を諍論せし上、座主も兩方を兼ねて事未だ切れざりしかば、世も忽ちに滅びずありけるか。例せば外典に云く、「一大國には諍臣七人、中國には五人、小國には三人諍論すれば、假令、政道に謬誤出來すれども、國破れず。乃至、家に諫むる子あれば、不義に陷ちず」と申すが如し。佛家も又是の如し。天台眞言の勝劣淺深、事斷れざりしかば、少少の災難は出來せしかども、靑天にも捨てられず、黃地にも犯されず、一國の內の事にてありし程に、人王七十七代後白河の法皇の御宇に當りて、天台座主の明雲、傳教大師の止觀院の『法華經』の三部を捨てて、慈覺大師の總持院の『大日經』の三部に付き給ふ。天台山は名ばかりにて、眞言の山になり、『法華經』の所領は『大日經』の地となる。天台と、眞

【一九】眞言宗隆盛の折も折、復復禪念權邪宗起り世人愈愈法華經を輕んずるが故に大災地變打續き下剋上が出來するに至りし旨を述ぶ。

言と、座主と大衆と、師弟あるべき序なり。國又王と臣と和合して、臣は王に隨ふべき序なり。一國亂れて、他國に破らるべき序なり。然れば明雲は義仲に殺されて、院も清盛に隨へられ給ふ。

【一九】然れども公家も叡山も共に此の故と知らずして、世間ならず過ぐる程に、又次第に增長して、人皇八十二代隱岐の法皇の御宇に到つて、一天違れば、一天亂ると申して、禪宗、念佛宗起り合ひぬ。善導房は『法華經は末代には千中無一』と書き、法然は『捨閉閣拋』と云ひ、禪宗は『法華經を失はんが爲に、『教外別傳、不立文字』とのゝしる。此の三つの大惡法、鼻を並べて一國に出現せし故に、此の國已に梵、釋、二天、日月、四王に捨てられ奉り、守護の善神も還つて大怨敵とならせ給ふ。然れば相傳の所從に責め隨へられて、主上上皇共に夷島に放たれ給ひ、御返りなくして空しく島の塚となり給ふ。詮ずる所は實經の所領を奪ひ取りて、權經たる眞言の知行と爲せし上、日本國の萬民等、禪宗、念佛宗の惡法を用ゐし故に、天下第一先代未聞の下剋上出來せり。而るに相州は謗法の人たらぬ上、文武極め盡せし人なれば、天許し國主となす。隨つて世且らく靜なりき。然るに又先に王法を失ひし眞言、漸く關東に落下る。存外に崇重せらるる故に、鎌倉又還つて大謗法一闡提の官僧、禪僧、念佛僧の檀那と成りて、新寺を建立して舊寺を捨つる故に、天神は眼を瞋らして此の國を睨め、地神は憤りを含んで身を震ふ。長星は一天に覆ひ、地震は四海を動かす。

【二〇】前代未聞の天變地夭起りし原因を擧ぐ。

【正嘉元年云云】立正安國論を時頼に建上せしを言ふ。此年着手、文應元年七月脫稿。

【二一】國敵邪師の讒言を用ひて憂國の正師日蓮を科むる非を攻む。

【二〇】余此等の災夭に驚きて、粗内典五千外典三千等を引見るに、先代にも希なる天變地夭なり。然るに儒者の家には記せざれば知る事なし。佛法は自迷なれば心得ず。此の災夭は常の政道の相違と、世間の謬誤より出來せるにあらず。定めて佛法より事起るかと勘へなしぬ。先づ大地震に付いて、去ぬる正嘉元年に書を一卷注したりしを、故最明寺の入道殿に奉る。御尋ねもなく御用ゐもなかりしかば、國主の御用ゐなき法師なれば過ちたりとも科あらじとや思ひけん。念佛者並びに檀那等、又さるべき人人も同意したるとぞ聞えし。夜中に日蓮が小庵に數千人押寄せて、殺害せんとせしかども、如何したりけん其夜の害も免れぬ。然れども心を合せたる事なれば、寄せたる者も科なくて、大事の政道を破る。

【二一】日蓮が生きたる、不思議なりとて、伊豆國へ流しぬ。されば、人の餘りに憎きには、我が亡ぶべき科をも顧みざるか。御式目をも破らるるか。御起請文を見るに、梵、釋、四天、天照大神、正八幡等を書き載せ奉る。予存外の法門を申さば、子細を辨へられずば、日本國の御歸依の僧等に召し合せられて、其に猶ほ事ゆかずば、漢土月氏までも尋ねらるべし。其に叶はずば、子細ありなんとて且らく待たるべし。子細も辨へぬ人人が、身の亡ぶべきを指し置きて、大事の起請を破らるる事心得られず。自讃には似たれども、本文に任せて申す。予は日本國の人人には、上は天子より下は萬民に至るまで、三の故あり。一には父母なり、二には師匠なり、三には主君の御使なり。經に云く、即ち如來の使なり。

【二】度度法難に値へるは正しく諸經所說の如くなるを悅ぶ。

【三】佛の守護を確信して龍口の斷頭臺に泰然自若たる法悅を述ぶ。

又云く、「眼目也」。又云く、「日月也」。章安大師の云く、「彼が爲に惡を除くは、即ち是れ彼が親なり」等云云。而るに謗法一闡提、國敵の法師原が讒言を用ゐて、其義を聞へず、左右なく大事たる政道を曲げらるるは、態と禍を招かるるか。墓なし、墓なし。然るに事錯まりぬれば、科なき事は恥かしきかの故に、程なく召し返されしかども、故最明寺の入道殿も、又早くかくれさせ給ひぬ。

【二】當御代に成りて、或は身に疵を被り、或は弟子を殺され、或は所所を追ひ、或は宿を攻めしかば、一日片時も地上に栖むべき便りなし。是に付けても、佛は「一切世間多怨難信」と說き置き給ひ、諸の菩薩は「我不愛身命、但惜無上道」と誓へり。「加刀杖瓦石」「數數見擯出」の文に任せて、流罪せられ、刀の尖に懸りなば、「法華經」一部讀み參らせたることぞと思ひ切りて、わざと不輕菩薩の如く、覺德比丘の樣に、龍樹菩薩、提婆菩薩、佛陀密多、師子尊者の如く、彌彌強盛に申し張る。

【三】今度、「法華經」の大怨敵を見て經文の如く、父母師匠朝敵、宿世の敵の如く、散散に責むるならば、定めて萬人も怒り、國主も讒言を收れて流罪し、頸にも及ばんずらん。其時佛前にして誓状せし、梵、釋、日、月、四天の願をも果させ奉り、「法華經」の行者をあだまんものを須臾ものがさじと起請せしを、身に當てて試みん。釋尊多寶、十方分身の諸佛の或は共に宿し、或は衣を覆はれ、或は守護せんと、懇ろに說かせ給ひしをも、實か虛言かと知りて、信心をも增長せんと、退轉なく勵みし程に、案に違はず、去ぬる文永

【二四】讒言を信じて是非も審判せずして直ちに日蓮に刑を科する爲政者の態度を非難す。

八年九月十二日に、都て一分の科も無くして、佐渡國へ流罪せらる。外には遠流と聞えしかども、内には頸を切ると定めぬ。予又兼ねて此事を推せし故に、弟子に向つて云く、我願既に遂げぬ、悦び身に餘れり。人身は受け難くして、破れ易し。過去遠遠劫より、由なき事には失ひしかども、「法華經」の爲に命を捨てたる事はなし。我頸を刎ねられて師子尊者が絶えたる跡を續き、天台、傳敎の功にも超え、付法藏の二十五人に一を加へて二十六人となり。不輕菩薩の行にも越えて、釋迦多寶十方の諸佛に如何せんと歎かせ參らせんと思ひし故に、言をも惜まず。已前にありし事、後に有るべき事の樣を平金吾に申し含めぬ。此事は語繁ければ委細には書かず。

【二四】抑も日本國の主となりて、萬事を心に任せ給へり。何事も兩方を召し合せてこそ勝負を決し御成敗を爲す人の、如何なれば日蓮一人に限りて、諸僧等に召し合せずして、大科に行はるるらん。是れ偏へに只事にあらず、假令日蓮は大科の者たりとも、國は安穩なるべからず。「御式目」を見るに、五十一箇條を立てて、終りに起請文を書き載せたり。第一第二は神事佛事、乃至五十一等云云。神事佛事の肝要たる「法華經」を手に握れる者を讒人等に召し合せられずして、彼等が申す儘に頸に及ぶ。然れば他事の中にも、此の起請文に相違する政道は有るらめども此は第一の大事なり。日蓮が憎さに國を代へ、身を失はんとせらるるか。魯の哀公が忘るる事の第一なる事を記せらるるには、移宅に妻を忘ると云云。孔子の云く、「身を忘るる者あり、國主と成りて政道を曲る是なり」云云。將又國主

【一五】如說修行の行者の言葉を用ひず却つて罰せんとすれば、必定一大事出來すべしと說く。

」此事を委細には知らせ給はざるか。如何に知らせ給はずと宣べらるゝとも、「法華經」の大怨敵と成り給ひぬる重科は脱るべしや。

【一六】多寶十方の諸佛の御前にして、教主釋尊の申し口として、末代當世の事を說かせ給ひしかば、諸の菩薩記して云く「惡鬼其身に入つて、我を罵詈毀辱せん。乃至、數數擯出せられん」等云云。又四佛と釋尊の所說の「最勝王經」に云く「惡人を愛敬し、善人を治罰するに由るが故に、乃至、他方の怨賊來つて國人喪亂に遭はん」等云云。假令日蓮をば輕賤せさせ給ふとも、教主釋尊の金言、多寶十方の諸佛の證明は空しかるべからず。一切の眞言師、禪宗、念佛者等の謗法の惡比丘をば、前より御歸依ありしかども、其大科を知らせ給はねば、少し天も許し、善神も捨てざりけるにや。而るを日蓮が出現して、一切の人を恐れず、身命を捨て指し申さば、賢なる國主ならば子細を聞き給ふべきに、聞きもせず、用ゐられざるだにも不思議なるに、剩へ頸に及ばむとせし事は、存外の次第なり。然れば大惡人を用ゆる大科と正法の大善人を恥辱する大罪と二惡鼻を並べて此國に出現せり。譬へば修羅を恭敬し、日天を射奉るが如し。故に前代未聞の大事此國に起るなり。是又先例なきにあらず。夏の桀王は龍逢が頭を刎ね、殷の紂王は比干が胸を割き、二世王は李斯を殺し、優陀延王は賓頭盧尊者を蔑如し、檀彌羅王は師子尊者の頸を斬る。武王は慧遠法師と諍論し、憲宗王は白居易を遠流し、徽宗皇帝は法道三藏の面に火印をさす。此等は皆諫曉を用ゐざるのみならず、還つて怨を爲せし人人、現世には國を亡し身を失ひ、後

【二六】三度諫曉して用ひられず古賢の教に從ひて身延山中に引籠る聖意を示す。

【二七】爾前未顯眞實とは自家の論に非ずして佛の金言なることを經文に依りて驗證す。

生には惡道に墮つ。是又人をあなづり讒言を納れて、理を盡さざりし故なり。

【二六】而るに去ぬる文永十一年二月に佐渡國より召し返されて、同じき四月の八日の平金吾に對面してありし時、理不盡の御勘氣の由、委細に申し含めぬ。又恨むらくは此國すでに他國に破れん事の淺ましさよと歎き申せしかば、金吾が云く、何の比か大蒙古は寄せ候べきと問ひしかば、經文には分明に年月を指したる事はなけれども、天の御氣色を瞋り見し奉るに、以の外に此國を睨みさせ給ふが、今年は一定寄せぬと覺ふ。若し寄するならば、一人も面を向ふ者あるべからず、此れ又天の責めなり。日蓮をば和殿原が用ゐぬ者なれば、力及ばず。穴賢、穴賢、眞言師等に調伏行はせ給ふべからず。若し行はする程ならば、いよいよ惡かるべき由、申し附けて、さて歸りてありしに、上下共に先の如く用ゐざりげにある上、本より存知せり、國恩を報ぜんが爲に、三度までは諫曉すべし、用ゐずば山林に身を隱さんと思ひしなり。又上古の本文にも、三度の諫め用ゐずば去れといふ本文に任せて、且らく山中に罷り入りぬ。其上は國主の用ゐ給はざらんに、其已下に法門申して何かせん。申したりとも國もたすかるまじ、人も亦佛になるべしとも覺えず。

【二七】又念佛は無間地獄、「阿彌陀經」を讀むべからずと申す事も、私の言にはあらず。夫れ彌陀念佛と申すは、源と釋迦如來の五十餘年の說法の内、前四十餘年の内の「阿彌陀經」等の三部經より出來せり。然れども如來の金言なれば、定めて眞實にてこそあるらめと信ずる處に、後八年の「法華經」の序分たる「無量義經」に、佛「法華經」を說かせ給はん

【三八】彌陀の來迎は人眞の方便として佛の說き給へるものなる事を明す。

ん爲に、先づ四十餘年の諸經並びに年紀等を具に數へあげて、『未だ眞實を顯はさず』。乃至、『終に無上菩提を成ずることを得ず』と、若干の經經並びに法門を、唯一言に打消し給ふ事、譬ば、大水の小火を消し、大風の衆の草木の露を落すが如し。然して後に正宗の『法華經』の第一卷に至つて、『世尊は法久しうして後、要らず當に眞實を說き給ふべし。』又云く、『正直に方便を捨て、但だ無上道を說く』と說き給ふ。譬へば闇夜に大月輪の出現し、大塔立ちて後足代を切り捨つるが如し。然して後、實義を定めて云く、『今此の三界は皆是れ我が有なり、其中の衆生は悉く是れ吾が子なり。而も今此處は諸の患難多し、唯我一人のみ能く救護を爲す。復教詔すと雖も、而も信受せず。』乃至、『經を讀誦し書持すること有らん者を見て、輕賤憎嫉して、結恨を懐かん、其人命終して阿鼻獄に入らん』等云云。經文の次第、普通の性相の法には似ず。常には五逆七逆の罪人こそ、阿鼻地獄とは定めて候に、此はさにては候はず。在世滅後の一切衆生、阿彌陀經等の四十餘年の經經を堅く執して、『法華經』へ移らざらんと、たとひ『法華經』へ入るとも、本執を捨てずして、彼彼の經經を『法華經』に並べて修行せん人と、又自執の經經を『法華經』に勝れたりと言はん人と『法華經』を法の如く修行すとも、『法華經』の行者を恥辱せん者と、此等の諸人を指しつめて、『其人命終入阿鼻獄』と定めさせ給ひしなり。

【三八】此事は唯釋迦一佛の仰せなりとも、外道にあらずば疑ふべきにてはあらねども、已今當の諸經の說に色をかへて、重き事をあらはさんが爲に、寶淨世界の多寶如來は、自

【廣長舌】法華經神力品所說十神力の一。佛言僞なき證左。

【二九】法華經に於て無始の古佛顯るるや彌陀も觀音勢至も皆本佛の眷屬なるを說く。

ら遥遥來り給ひて證人とならせ給ひ、釋迦如來の先判たる、『大日經』、『阿彌陀經』、『念佛』等を堅く執して、後の『法華經』へ入らざらむ人人は、入阿鼻獄は一定なりと證明し、又阿彌陀佛等の十方の諸佛は、各各の國國を捨て、靈山虚空會に詣で給ひ、寶樹の下に坐して廣長舌を出し大梵天に付け給ふこと、無量無邊の虹の虚空に立ちたるが如し。心は四十餘年の中の『觀經』、『阿彌陀經』、『悲華經』等に法藏比丘等の諸菩薩、四十八願等を發して、凡夫を九品の淨土へ來迎せんと說く事は、且らく『法華經』已前のやすめ言なり。實には彼彼の經經の文の如く十方西方への來迎はあるべからず。實と思ふ事なかれ。釋迦佛の今說き給ふが如し。實には釋迦多寶、十方の諸佛、『壽量品』の肝要たる『南無妙法蓮華經』の五字を信ぜしめんが爲なりと、出し給ふ廣長舌なり。我等と釋迦佛とは同じ程の佛と思ふ事勿れ、釋迦佛は天月の如し。我等は水中の影の月なり。釋迦佛の本土は、實には娑婆世界なり。天月動き給はずば、我等も移るべからず。此土に居住して、『法華經』の行者を守護せん事、臣下が主上を仰ぎ奉らんが如く、父母の一子を愛するが如くならんと、出し給ふ舌なり。

【二九】其時阿彌陀佛の一二の弟子觀音勢至等は、阿彌陀佛の臣下なり、雙翼なり、左右の臣なり、兩目の如し。然れば極樂世界より遥遥と御供し奉りたりしが、『無量義經』の時、佛の『阿彌陀經』等の四十八願等は『未顯眞實』、乃至『法華經』にて、『一名阿彌陀』と名をあげて、此等の法門は眞實ならずと說き給ひしかば、實とも覺えざりしに、阿彌陀

【十二】通じて爾前經、別して淨土三部經に二乘成佛の授記なきを明す。

【十三】權實の判別に迷惑せる世人、教主釋尊と阿彌陀佛とを混同雜亂せるを述ぶ。

佛正しく來りて合點し給ひしを打見て、さては我等が念佛者等を九品の淨土へ來迎の蓮臺と、合掌の印とは惡しかりけりと聞き定めて、さては我等も本土に還りて何かせんとて、八萬二萬の菩薩の中に入り、或は「觀音品」に「遊於娑婆世界」と申して、此土の「法華經」の行者を守護せんと、懇に申せしかば、日本國より近き一閻浮提の內、南方補陀落山と申す小所を釋迦佛より給はりて、宿所と定め給ふ。

【十二】阿彌陀佛は左右の臣下たる觀音勢至に捨てられて、西方世界へは還り給はず。此世界に留りて「法華經」の行者を守護せんとありしかば、此世界の內欲界第四の兜率天、彌勒菩薩の所領の內、四十九院の一院を給ひて、阿彌陀院と額を打つて在するところこそ承はれ。其上「阿彌陀經」には、佛舍利弗に對して、凡夫の往生すべき樣を說き給ふ。舍利弗、舍利弗、又舍利弗と、三十餘處まで幾何もなき經に呼び給ひしは、かまびすしかりし事ぞかし。然れども四紙の一卷が內すべて、舍利弗等の「諸」の聲聞の往生成佛を許されず。『法華經』に來りてこそ、始めて華光如來、光明如來とは記せられ給ひしか。一閻浮提第一の大智者たる舍利弗すら、淨土の三部經にて往生成佛の跡をけづる。まして末代の牛羊の如くなる男女、彼彼の經經にて生死を離れなんや。

【十三】此由を辨へざる末代の學者等並びに『法華經』を修行する初心の人人、忝く「阿彌陀經」を讀み念佛を申して、或は『法華經』に鼻を並べ、或は後に此を讀みて「法華經」の肝心とし、功德を「阿彌陀經」等にあつらへて、西方へ回向し往生せんと思ふは、譬へ

【三一】他佛を崇めまた崇めしめたる念禪眞の諸師等の罪果を擧ぐ。

ば、飛龍が驢馬を乗物とし、師子が野干をたのみたるか。將又日輪出現の後の衆生の光、大雨の盛なる時の小露なり。故に教大師云く、「白牛を賜ふ朝には三車を用ひず、家業を得る夕に何ぞ除糞を須ひん。」故に經に云く、「正直に方便を捨て、但だ無上道を説く。」又云く「日出ぬれば星隱れ、巧を見て拙きを知る。」云云。『法華經』出現の後は、已今當の諸經の捨てらるる事は勿論なり。たとひ修行すとも『法華經』の所從にてこそあるべきに、今の日本國の人人、道綽が「未有一人得者」、善導が「千中無一」、慧心が『往生要集』の序、永觀が『十因』、法然が「捨閉閣抛」等を堅く信じて、或は『法華經』を抛ちて、一向に念佛を申す者もあり、或は念佛を本として、助けに『法華經』を持つ者もあり、或は彌陀念佛と『法華經』とを、鼻を竝べて左右に念じて、二行とする者もあり、或は念佛と『法華經』と一法の二名なりと思ひて行ずる者もあり。此等は皆教主釋尊の御居處の内に居して、師主をば指し置き奉りて、阿彌陀堂を釋迦如來の御所領の内に、國ごとに鄕ごとに家家ごとに竝べ立て、或は一萬二萬、或は七萬返、或は一生の間、一向に修行して、主師親を忘れたるだに不思議なるに、剩へ親父たる教主釋尊の御誕生御入滅の兩日を奪ひ取りて、十五日は阿彌陀佛の日、八日は藥師佛の日等云云。一佛誕入の兩日を、東西二佛の死生の日となせり。是れ豈に不孝の者にあらずや、逆路七逆の者にあらずや。人ごとに此重科ありて、しかも人ごとに我身は科なしと思へり。無慚無愧の一闡提人也。

【三二】『法華經』の第二の卷に、主と親と師との三つの大事を説き給へり。一經の肝心

【一三】今世の人人念禪眞を崇重すれば阿鼻獄に墮するを說く。

ぞかし。其經文に云く『今此の三界は皆是れ我が有なり。其中の衆生は悉く是れ我が子なり。而も今此處は諸の患難多し。唯我一人のみ能く救護を爲す。』等云云。又此經に背かん者を、文に說いて云く、『復敎詔すと雖も、而も信受せず。』乃至『其人命終して、阿鼻獄に入らん。』等云云。されば念佛者が本師の導公は『其中衆生』の外か。『唯我一人』の經文を破りて『千中無一』といひし故に、現身に狂人と成りて、楊柳に上りて身を投げ、堅土に落ちて死にかねて、十四日より二十七日まで十四日が間、顚倒狂死し畢んぬ。又眞言宗の元祖、善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏等は、親父を捨てたる敎主釋尊法王を立て下して、大日他佛を崇めし故に、善無畏三藏は閻魔王の責めにあづかるのみならず、又無間地獄に墮ちぬ。汝等此事疑ひあらば、眼前に閻魔堂の畫を見よ。金剛智不空の事は繁ければ書かず。又禪宗の三階信行禪師は、『法華經』等の一代聖敎をば別敎と下し、我が作れる經をば普敎と崇重せし故に、四依の大士の如くなりしかども、『法華經』の持者の優婆夷にせめられて聲を失ひ、現身に大蛇となり、數十人の弟子を呑み食ふ。

【一三】今日本國の人人は、たとひ『法華經』を持ち、釋尊を崇重し奉るとも眞言宗、禪宗、念佛者を崇むるならば、無間地獄は免れ難し。何に況んや三宗の者どもを日月の如く渴仰し、我が身にも念佛を事とせむ者をや。心あらん人人は、念佛『阿彌陀經』等をば父母師君宿世の敵よりも忌むべきものなり。例せば逆臣が旗をば、官兵は指す事なし。寒食の祭には、火を忌むぞかし。されば古の論師天親菩薩は、小乘經を舌の上に置かじ

【三四】念佛と法華經の二行を許さず强く念佛修行を彈訶せり。

【三五】諫言を用ひざりし爲政者が國難に値うて初めて後悔せし事を言ふ。

と誓ひ、賢者たりし吉藏大師は、『法華經』をだに讀み給はず。此等はもと小乘經を以て大乘經を破失し、『法華經』を以て天台大師を毀謗し奉りし、謗法の重罪を消滅せんが爲なり。今日本國の人人は、一人もなく不輕輕毀の衆の如く、苦岸勝意等の如く、一國萬人皆無間地獄に墮つべき人人ぞかし。佛の『涅槃經』に記して、末法には『法華經』誹謗の者は大地微塵よりも多かるべしと記し給ひし是れ也。

【三四】而るに今『法華經』の行者出現せば、一國の萬人、皆『法華經』の讀誦を止めて、吉藏大師の天台大師に隨ふが如く、身を肉橋となし、不輕輕毀の四衆還つて不輕菩薩に信伏隨從せしが如く仕るとも一日二日、一月、二月、一年二年、一生二生が間には『法華經』誹謗の重罪はなほ滅し難かるべきに、其義はなくして、當世の人人は四衆俱に一慢を起せり。所謂る念佛者は『法華經』を捨て念佛を申す。日蓮は『法華經』を持つと雖も念佛を持たず。我等は念佛を持ち『法華經』をも信ず。戒をも持ち一切の善を行ず等云云。此等は野兎が跡を隱し、金鳥が頭を穴に入れ、魯人が孔子を侮り、善星が佛を嘲せしに異らず。鹿馬迷ひ易く、鷹鳩變じ難き者なり。墓なし墓なし。

【三五】當時は予が古へ申せし事の漸く合ふかの故に、心中には如何せんとは思ふらめども、年來餘りに法に過ぎて譏り惡口せし事が、忽に翻へり難くて、信ずる由をせず。而かも蒙古は强り行く、如何せんと、宗盛義朝が樣に咲くなり。あはれ人は心あるべきものかな。孔子は九思一言、周公旦は浴する時は三度握り、食する時は三度吐き給ふ。賢人は此

【三六】國難の原因は日蓮に敵對するにあるを明す。

の如く用意をなす也。世間の法にも、法に過ぎば怪しめと言ふぞかし。國を治する人なんどが、人の申せばとて委細にも尋ねずして、左右なく科に行はれしはあはれ悔しかるらんに、夏の桀王が湯王に責められ、呉王が越王に生捕にせられし時は、賢者の諫曉を用ゐざりし事を悔い、阿闍世王が惡瘡身に出で他國に襲はれし時は、提婆を眼に見じ耳に聞かじと誓ひ、乃至宗盛が戰に負け義經に生捕られて、鎌倉に下されて面を曝せし時は、東大寺を燒拂はせ、山王の御輿を射奉りし事を歎きし也。

【三六】今の世も又一分も違ふべからず。日蓮を賤み、諸僧を貴び給ふ故に、自然に『法華經』の強敵となり給ふ事を辨へず、政道に背きて行はるる間、梵、釋、日、月、四天、龍王等の大怨敵となり給ふ。『法華經』守護の釋迦多方、十方分身の諸佛、地涌千界の迹化他方の二聖、二天、十羅刹女、鬼子母神、他國の賢王の身に入り代りて、國主を罰し國を滅さんとするを知らず。眞の天のせめにてだにもあるならば、たとひ鐵圍山を日本國に引回らし、須彌山を蓋として、十方世界の四天王を集めて、波際に立て竝べて禦がするとも、『法華經』の敵となり、教主釋尊より大事なる行者の日蓮を、『法華經』の第五の卷を以て頭を打ち、十卷共に引き散して散散に踏みたりし大禍は、現當二世に逃れ難くこそ候はんずらめ。日本國守護の天照大神、正八幡等も、爭でか斯る國をば助け給ふべき。急ぎ急ぎ治罰を加へて、自らの科を脱れんとこそ勵み給ふらめ。遲く科に行ふ間、日本國の諸神共、四天大王に誡められてやあるらん、知り難き事なり。

【三七】蒙古襲來の國難は本來謗れる權經權師に依りて調伏せられざる事を述ぶ。

【三八】日永が光基の意に反しても念佛を捨てたるは至極合理的にして至忠至孝なる旨を結示す。

【三七】教大師の云く、『竊に以みれば、菩薩は國の寶なること『法華經』に載せたり、大乘の利他は摩訶衍の說なり。彌天の七難は、大乘經に非ずんば何を以てか除くことを得ん。未然の大災は、菩薩僧に非ずんば豈に冥滅することを得んや。』等云云。而るを今大蒙古國を調伏する公家武家の日記を見るに、或は五大尊、或は七佛藥師、或は佛眼、或は金輪等云云。此等の小法は大災を消すべしや。『還著於本人』と成りて、國忽ちに亡びなんとす。或は日吉の社にして法華の護摩を行ふと雖も、不空三藏が悞れる法を本として行ふ間、祈禱の儀にあらず。又今の高僧等は或は東寺の眞言、或は天台の眞言也。東寺は弘法大師、天台は慈覺智證なり。此三人は上に申すが如く、大謗法の人人也。其より已外の諸僧等は、或は東大寺の戒壇の小乘の者なり。叡山の圓頓戒は、又慈覺の謗法に曲げられぬ。彼の圓頓戒も迹門の大戒なれば、今の時の機にあらず、旁叶ふべき事にはあらず。只今國土やぶれなん、後悔先に立たじ。不便不便と語り給ひしを、千萬が一を書き付けて參らせ候。

【三八】但身も下賤に生れ、心も愚に候へば、此事は道理かとは承り候へども、國主も御用ゐなきかの故に、鎌倉にては如何候ひけん。不審に覺え候。返す返すも愚意に存じ候は、是程の國の大事をば、如何に御尋ねもなくして兩度の御勘氣には行はれけるやらんと、聞食しほどかせ給はぬ人人の、或は道理とも、或は僻事とも仰せあるべき事とは覺え候はず。又此身に『阿彌陀經』を讀み候はぬも、併しながら父母の御爲にて候。只理不盡に

積むべき山を仰せを蒙り候はば、其時重ねて申すべく候。いかにも聞食さずして、うしろの摂義をなさん人人の仰せをば、たとひ身は随ふ様に候へども、心は一向に用ゐ参らせ候まじ。又恐れにて候へども、兼ねてつみ知らせ参らせ候。此御房は唯一人在します、若の御事の候はん時は、御後悔や候はんずらん。『世間の人人の用ゐねばことは、一旦の愚の事なり。上の御用ゐあらん時は、諸人か用ゐざるべきや。其時は又用ゐたりとも何かせん。人を信じて法を信ぜず。又世間の人人の思ひて候は、『親には子は是非に随ふべしと、君臣師弟も此の如し』と。此等は外典をも弁へず。内典をも知らぬ人人の邪推なり。外典の『孝経』には、子は父と、臣は君と諍ふべき段もあり。内典には『恩を棄て無為に入るは、真実に恩を報ずる者なり』と、仏定め給ひぬ。悉達太子は閻浮第一の孝子なり。父の王の命を背きてこそ、父母をば引導し給ひしか。比干は親父の紂王を諫暁して胸を屠られてこそ、賢人の名をば流せしか。賤み給ふとも小法師が諫暁を用ひ給はずば、現当の御歎きなるべし。此は親の為に読み参らせ候はぬ『阿弥陀経』にて候へば、いかにも当時は叶ふべしとは覚え候はず。恐恐申上候。

建治三年六月一日　僧　日　永

下山兵庫五郎殿御返事

消息篇

船守彌三郎許御書

◇縮遺四一二頁、弘長元年(四十歳)伊豆流罪中の作。彌三郎夫婦が伊豆在島中密かに聖人を保護したる信心供養に對して謝意を表し、併せて凡夫即佛の義を教へたる文。

【一】種種の贈り物に對する禮辭。

【二】著島當初の懇篤なる庇護及び供養を回想し、新たなる感謝をささぐ。

【宿習】前世の因縁。

【一】わざと使を以て、粽、酒、干飯、山椒、紙、しなじな給候ひ畢んぬ。又使者申され候は「御隱密させ給へと申上候へ」と。日蓮心得申すべく候。

【二】日蓮去ぬる五月十二日流罪の時、その津につきて候ひしに、いまだ名をも聞及びまゐらせず候ところに、船より上り、くるしみ候ひきところに、ねんごろにあたらせ給ひ候ひし事いかなる宿習なるらん。過去に法華經の行者にてわたらせ給へるが、今末法に船守の彌三郎と生れかはりて、日蓮をあはれみ給ふか。たとひ男はさもあるべきに、女房の身として食をあたへ、洗足、手水、其外さも事ねんごろなる事、日蓮はしらず、不思議とも申すばかりなし。ことに三十日あまりありて、内心に『法華經』を信じ、日蓮を供養し給ふ事、いかなる事のよしなるや。かかる地頭萬民日蓮をにくみねたむ事、鎌倉よりもすぎたり。見るものは目をひき、聞く人は怨む。ことに五月の頃なれば、米も乏しかるらんに、日蓮を内内にてはぐくみ給ひしことは、日蓮が父母の伊豆の伊東、川奈といふところに生れかはり給ふか。『法華經第四』に云く、『及び清信の士女、法師を供養す。』と云云。『法華經』を行ぜん者をば諸天善神等或は男となり或は女となり、形をかへ、さまざまに供養して助くべしといふ經文なり。彌三郎殿夫婦の士女と生れて日蓮法師を供養する事疑

一

【三】地頭平癒の功德を彌三郎夫婦に回向す。
【案にあつかひて】あつかひかねての意か。
【いろくづ】魚族のこと。
【出現の佛體】隨身佛として生涯離さざりし立像の釋尊像。
【四】凡夫即佛、法界の成佛を說く。

ひたし、さきに參らせし文につぶさに書きて候ひし間、今はくわしからず。

【三】ことに當地頭の病惱について、祈せい申すべきよし仰せ候ひし間、案にあつかひて候。然れども一分信仰の心を日蓮に申し給へば『法華經』へ訴訟とこそ思ひ候へ。此時は十羅刹女もいかでか力をあはせ給はざるべきと思ひ候ひて、法華經、釋迦、多寶、十方の諸佛竝びに天照、八幡、大小の神祇等に申して候。定めて評議ありてぞ驗をばあらはし給はん、よも日蓮をば捨させ給はじ。痛きと痒きとの如く、あてがはせ給はんと思ひ候ひしに、つひに病惱たをり、海中いろくづの中より出現の佛體を日蓮にたまはる事、此病惱の故なり、さだめて十羅刹女のせめなり。此功德も夫婦二人の功德となるべし。

【四】我等衆生無始よりこのかた生死海の中にありしが、法華經の行者となりて、無始色心、本是理性、妙境妙智、金剛不滅の佛身とならん事あに彼の佛にかはるべきや。過去久遠五百塵點のそのかみ『唯我一人』の教主釋尊とは、我等衆生の事なり。『法華經』の一念三千の法門、『常住此說法』のふるまひなり。かかるたふとき『法華經』と釋尊にて在せども凡夫はしる事なし。『壽量品』に云く、『顚倒の衆生をして近しと雖も而も見ざらしむ』とは是れなり。迷悟の不同は沙羅の四見の如し。一念三千の佛と申すは、法界の成佛と云ふ事にて候ぞ。雪山童子の前に來りし鬼神は帝釋の變作なり、尸毘王の所へにげ入りし鳩は毗首羯摩天ぞかし。斑足王の城へ入りし普明王は教主釋尊にてましますす。肉眼はしらず、佛眼は此を見る。虚空と大海とには魚鳥の飛行するあとあり。此等は經文に見えたり。

【五】結文。

◎縮遺四七七頁、文永元年（四十三歲）の作。大學三郎夫人の問に答へて、月水の時（めぐりの時）の心得及び讀經唱題等の心得を教へたるもの。

【一】唱題の功德無量なるを說く。

木像即金色なり、金色即木像なり。阿㝹樓駄が金は兎となり、死人となる。釋摩男が掌には沙も金となる、此等は思議すべからず、凡夫即佛なり、佛即凡夫なり。一念三千我實成佛はこれなり。然らば夫婦二人は教主大覺世尊の生れかはり給ひて、日蓮をたすけ給ふか。

【五】伊東と川奈の道のほどは近く候へども、心は遠し。後のために文をまゐらせ候ぞ。人にかたらずして、心得させ給へ。すこしも人知るならば、御爲あしかりぬべし。胸のうちにおきて語り給ふ事なかれ。あなかしこ、あなかしこ。南無妙法蓮華經。

弘長元年六月二十七日　日蓮

船守彌三郎殿許へ遣之

月水御書

【一】傳へ承る御消息の狀に云く、『法華經を日ごとに一品づつ二十八日が間に一部を讀みまゐらせ候ひしが、當時は藥王品の一品を每日の所作にし候、ただ元の樣に一品づつを讀みまゐらせ候べきやらん』と云云。『法華經』は一日の所作に一部八卷、或は一品、一偈、一句、一字、或は題目ばかりを『南無妙法蓮華經』と只一遍唱へ、或は又一期の間に只一度唱へ、或は又一期の間に只一遍唱ふるを聞いて隨喜し、或は又隨喜する聲を聞い

【二】末法に法華經を持つ者ありがたきを述ぶ。

て隨喜し、是體に五十展轉して末になりなば、志も薄くなり、隨喜の心の弱き事二三歳の幼稚の者のはかなきが如く、牛馬なんどの前後を辨へざるが如くなりとも、佗經を學する人の利根にして智慧かしこく、舍利弗、目連、文殊、彌勒の如くなる人の諸經を胸の内に浮べておはしまさん人人の功德よりも、勝れたる事百千萬億倍なるべきよし、經文並びに天台、妙樂の六十卷の中に見え侍り。されば經文には「佛の智慧を以て多少を籌量すとも其邊を得ず」と說かれて、佛の御智慧すら此人の功德をばしろしめさず。佛の智慧のありがたきは、此三千大千世界に七日若くは二七日なんど降る雨の數をだにしろしめして御座候なるが、只『法華經』の一字を唱へたる人の功德をのみ知ろしめさずと見えたり。何に況んや我等逆罪の凡夫の、此功德を知り候ひなんや。

【二】然りと云へども如來滅後二千二百餘年に及んで、五濁さかりになりて年久し。事にふれて善なる事ありがたし。設ひ善を作す人も一の善に十の惡を作り重ねて、結句は小善につけて大惡を造り、心には大善を修したりと云ふ慢心を起す世となれり。然るに如來の世に出させ給ひて候ひし國よりしては、二十萬里の山海を隔てて東によれる、日域邊土の小島にうまれ、五障の雲厚うして、三從の紲につながれ給へる女人なんどの御身として、『法華經』を御信用候は、ありがたしなんどとも申すに限なく候。凡そ一代聖教を披き見て顯密二道を究め給へる樣なる智者學匠だにも、近頃は『法華經』を捨て念佛を申し候に、何なる御宿善ありてか、此『法華經』を一偈一句もあそばす御身と生れさせ給ひ

【燈火】たいまつ

【三】法華經は一部も一句も題目も功德同じきを說く

【四】一代聖教中に於て法華經こそ眞實の法なるを述べ、法華經を信ずる女人の必ず成佛すべきを述ぶ。

けん。されば此御消息を拜し候へば、優曇華を見たる眼よりも珍らしく、一眼の龜の浮木の穴に値へるよりも乏しき事かなと、心ばかりは有がたき御事に思ひまゐらせ候間、一言一點も隨喜の言を加へて善根の餘慶にもやと勵み候へども、只恐らくは雲の月を隱し、塵の鏡を曇らすが如く、短く拙き言にて、殊勝にめでたき御功德を申し隱しくもらす事にや候らんと、痛み思ひ候ばかり也。然りと雖も貴命默すべきにあらず、一滴を江海に加へ、燈火を日月にそへて、水をまし光を添ふると思食すべし。

【三】先づ「法華經」と申すは八卷、一卷、一品、一偈、一句、乃至題目を唱ふるも、功德は同じ事と思食すべし。譬へば大海の水は一滴なれども無量の江河の水を納れたり。如意寶珠は一珠なれども萬寶をふらす。百千萬億の滴珠も又これ同じ。「法華經」は一字も一の滴珠の如し、乃至萬億の字も又萬億の滴珠の如し。諸經諸佛の一字、一名號は江河の一滴の水、山海の一石の如し。一滴に無量の水を備へず、一石に無量の石の德を具有たず。若し然らば「此法華經」は何れの品にて御座ませ、只御信用の御座さん品こそ、めづらしくは候へ。

【四】總じて如來の聖教は何れも妄語の御座ますとは承り候はねども、再び佛教を勘へたるに、如來の金言の中にも大小、權實、顯密なんど申す事、經文より事起つて候。隨つて論師、人師の釋義にあらあら見えたり。詮を取つて申さば、釋尊の五十餘年の諸教の中に、先四十餘年の說教は猶燒はしく候ぞかし。佛自ら「無量義經」に「四十餘年

【五】法華經を持つ者は罪人も成佛し、法華經を持たざれば善人も惡道に墮つることを說く。

に未だ眞實を顯さず」と申す經文、まのあたり說かせ給へる故なり。「法華經」に於ては佛自ら一句の文字を『正直に方便を捨て、但無上道を說く』と定めさせ給ひぬ。其上、多寶佛大地より涌出させ給ひて「妙法華經、皆是眞實」と證明を加へ、十方の諸佛皆法華經の座にあつまりて、舌を出して『法華經』の文字は一字なりとも妄語なるまじきよし助成を添へ給へり。譬へば大王と后と長者等の一味同心に約束をなせるが如し。若し『法華經』の一字をも唱ふる男女等、十惡五逆四重等の無量の重業に引かれて惡道に墮つるならば、日月は東より出させ給はぬ事はありとも、大地は反覆する事はありとも、大海の潮は滿干ぬ事はありとも、破たる石は合ふとも、江河の水は大海に入らずとも、『法華經』を信じたる女人の世間の罪に引かれて、惡道に墮つる事はあるべからず。若し『法華經』を信じたる女人、物をねたむ故、腹のあしき故、貪欲の深き故なんどに引かれて惡道に墮つるならば釋迦如來、多寶佛、十方の諸佛、無量曠劫より以來持來り給へる不妄語戒忽ちに破れて調達が虛誑罪にも勝れ、瞿伽利が大妄語にも超えたらん。爭でかしかるべきや。『法華經』を持つ人、憑しく有がたし。

【五】但し一生が間一惡をも犯さず、五戒八戒十戒十善戒二百五十戒五百戒、無量の戒を持ち、一切經を空に浮べ、一切の諸佛菩薩を供養し、無量の善根を積ませ給ふとも「法華經」ばかりを御信用なく、又御信用はありとも、諸經諸佛にも竝べて思食し、又竝べて思食さずとも、他の善根をば隙なく行じて時時『法華經』を行じ、「法華經」を用ゐざる謗

【六】法華經一部の中には方便品と壽量品とが肝要にて女人成佛も此品が根本なるを說く

【七】月水時に法華經を讀誦することは差し控ゆる必要なきを諭す。

【例のこと】月經時のこと。

法の念佛者なんどにも語らひをなし、『法華經』を末代の機に叶はずと申す者を科とも思食さずは、一期の間行じさせ給ふ處の無量の善根も忽ちに失せ、並びに『法華經』の御功德も且く隱れさせ給ひて、阿鼻大城に墮ちさせ給ふ事、雨の空に止まらざるが如く、峰の石の谷へ轉ぶが如しと思食すべし。十惡五逆を造れる者なれども『法華經』に背く事なければ、往生成佛は疑なき事に侍り。一切經をたもち諸佛菩薩を信じたる持戒の人なれども、『法華經』を用ゆる事なければ、惡道に墮つる事疑なしと見えたり。予が愚見を以て近來の世間を見るに、多くは在家出家、誹謗の者のみあり。

【六】但し御不審の事『法華經』は何れの品も、先に申しつる樣に愚かならねども、殊に二十八品の中に勝れてめでたきは『方便品』と『壽量品』にて侍り。餘品は皆枝葉にて候也。されば常の御所作には『方便品』の長行と『壽量品』の長行とを習ひ讀ませ給ひ候へ。又別に書出してもあそばし候べく候。餘の二十六品は身に影の隨ひ、玉に財の備はるが如し。『壽量品』『方便品』を讀み候へば自然に、餘品はよみ候はねども備はり候なり。『藥王品』『提婆品』は女人の成佛往生を說かれて候品にては候へども、『提婆品』は『方便品』の枝葉、『藥王品』は『壽量品』の枝葉にて候。されば、常には此『方便品』『壽量品』の二品をあそばし候て、餘の品をば時時御いとまの間にあそばすべく候。

【七】又御消息の狀に云く『日ごとに三度づつ七つの文字を拜しまゐらせ候事と、『南無一乘妙典』と一萬遍申し候事とをば日每にし候が、例の事に成りて候程は御經を

【盛の女人】女盛の婦人。

【八】但し我國の習慣として月水時には愼しむべきを諭す。

【隨方毗尼】地方に隨ふ毗尼のこと。毗尼は戒の梵語。

ば讀みまゐらせ候はず、拜しまゐらせ候事も、『一乘妙典』と申し候事もそらにし候は、苦しかるまじくや候らん。それも例の事の日數の程は叶ふまじくや候らん。幾日ばかりにて讀みまゐらせ候はんずる』等云云。此段は一切の女人毎の御不審に、常に問はせ給ひ候。御事にて侍り。又古も女人の御不審に付て申したる人も多く候へども、一代聖教に、さして說かれたる處のなき故の故に、證文分明に出したる人もおはせず。日蓮粗聖教を見候にも、酒肉五辛婬事なんどの樣に、不淨を分明に月日をさして禁めたる樣に、月水を忌みたる經論を未だ見ず候也。在世の時多く盛の女人尼になり、佛法を行ぜしかども、月水の時と申して嫌はれたる事なし。是をもて推量り侍るに、月水と申す物は外より來れる不淨にもあらず、只女人の癖、かたわ、生死の種を繼ぐべき理にや。又長病の樣なるもの也。例せば屎尿なんどは人の身より出れども、能く淨くたしぬれば別に忌もなし。是體に侍る事歟。されば印度、尸那なんどにも、いたく忌むよし聞えず。

【八】但し日本國は神國なり。此國の習として、佛菩薩の垂迹不思議に經論に相似ぬ事も多く侍るに、是を背けば現に當罰あり。委細に經論を勘へ見るに、佛法の中に隨方毗尼と申す戒の法門は是に當れり。此戒の心は、甚う事缺けざる事をば、少少佛教にたがふとも、其國の風俗に違ふべからざるよし、佛一つの戒を說き給へり。此由を知らざる智者共、神は鬼神なれば敬ふべからずなんど申す強義を申して、多くの檀那を損ずる事ありと見えて候なり。若し然らば此國の明神、多分は此月水を忌ませ給へり。生を此國に受け

【九】法華經を遠ざからず、題目を唱ふべきを教ふ。

ん人人は大に忌み給ふべき歟。但し女人の日日の所作は苦しかるべからずと覺え候ふ歟。

【九】元より『法華經』を信ぜさる樣なる人人が、經をいかにもして云ひ疎めんと思ふが、さすがに直ちに經を捨てよとは云ひ得ずして、身の不淨なんどにつけて『法華經』を遠ざからしめんと思ふ程に、又不淨の時此を行ずれば、經を愚かにしまゐらするなんどと威して、罪を得させ候ふなり。此事をば一切御心得候て、月水の御時は七日までも其氣の有らん程は、御經をば讀ませ給はずして、暗に『南無妙法蓮華經』と唱へさせ給ひ候へ。禮拜をも、經に向はせ給はずして拜せさせ給ふべし。又不慮に臨終なんどの近づき候はんには、魚鳥なんどを服せさせ給ひても候へ、讀みぬべくば經をもよみ、及び『南無妙法蓮華經』とも唱へさせ給ひ候ふべし。又月水なんどは申すに及び候はず。又『南無一乘妙典』と唱へさせ給ふ事、是同じ事には侍れども、天親菩薩、天台大師等の唱へさせ給ひ候ひしが如く、唯『南無妙法蓮華經』と唱へさせ給ふべき歟。是れ子細ありてかくの如くは申し候ふ也。あなかしこ、あなかしこ。

文永元甲子四月十七日　日蓮　華押

大學三郎殿御內　御報

南條兵衞七郎殿御書

【一】御所勞の由承はり候へば、まことにてや候らん。世間の定めなき事は、病なき人も留まり難き事に候へば、まして病あらん人は申すに及ばず。但し心あらん人は、後世をこそ思ひ定むべきにて候へ。又後世を思ひ定めん事は、私には叶ひ難く候。一切衆生の本師にてまします釋尊の教こそ、本にはなり候べけれ。

【二】しかるに佛の教また區區なり、人の心の不定なる故か。しかれども釋尊の說敎五十年には過ぎず。其の中に先四十餘年の間の法門に、『華嚴經』には『心佛及び衆生、是の三差別無し。』『阿含經』には『苦、空、無常、無我。』『大集經』には『染淨融通』、『大品經』には『混同無二。』『雙觀經』、『觀經』、『阿彌陀經』には『往生極樂。』此等の說敎は正法、像法、末法の一切衆生を救はんが爲にこそ說かれ侍り候らめ。然れども又佛如何思しけん、『無量義經』に『方便の力を以てし、四十餘年には未だ眞實を顯はさず。』と說かれて、先四十餘年の往生極樂等の一切經は親の先判の如く悔い返されて『無量無邊不可思議阿僧祇劫を過ぐるとも、終に無上菩提を成ずることを得ず。』といひ切らせ給ひて、『法華經の方便品』に重ねて『正直に方便を捨て、但だ無上道を說く。』と說かせ給へり。方便を捨てよと說かれて侍るは、四十餘年の念佛等を捨てよと說かれて候。斯ら確かに悔い

【一】縮遺五一六頁、文永元年四十三歳）の作。南條七郎に寄せて法華經の信心を退轉すべからざるを教へたる文。

【一】病氣につけて佛法を信じ、後生善生を願ふべきを說く。

【所勞】病氣のこと。

【二】佛法中には法華經こそ眞實の經にて爾前の諸經は方便經なることを明す。

【三】釋尊は吾等の主師親なることを述べ、法華經を信ぜざるは大不忠大不孝なるを說く。

返して眞實を定むるには、「世尊の法は久うして後必ず當に眞實を說くべし」といひ、「久しく斯の要を默して、務いで速かに說かず」等と定められしかば、多寶佛は大地より涌き出でさせ給ひて、この事眞實なりと證誠を加へ、十方の諸佛は八方に集りて、廣長舌相を大梵天宮につけさせ給ふ。二處三會、二界八番の衆生、一人もなく之を見候ひき。此等の文を見候に、佛教を信ぜぬ惡人外道はさておき候ひぬ。佛教の中に入り候ても、爾前、權教、念佛等を厚く信じて、十遍、百遍、千遍、一萬、乃至六萬等を一日に勤みて、十年二十年の間にも、「南無妙法蓮華經」と一遍だにも申さぬ人人は、先判に付きて後判を用ゐぬ者にては候はぬか。

【三】此等は佛說を信じたりげには、我身も人も思ひたりげに候へども、佛說の如くならば不孝の者なり。故に「法華經の第二の卷」に云く、「今此の三界は皆是れ我が有なり。其中の衆生は悉く是れ吾が子なり。而も今此處は諸の患難多し、唯我一人のみ能く救護を爲す。復教詔すと雖も、而も信受せず」等云云。此文の心は、釋迦如來は、我等衆生には親なり、師なり、主なり。我等衆生の爲には阿彌陀佛は主にあらず、親にあらず、師にあらず。獨り三德を兼て恩深き佛は釋迦一佛に限り奉る。親も親にこそよれ、釋尊ほどの親、師も師にこそよれ、主も主にこそよれ、釋尊ほどの師主は有難くこそ候へ。この親と師と主との仰せを背かん者、天神地祇にすてられ奉らざらんや。不孝第一の者なり、故に「復教詔すと雖も、而も信受せず」等と說かれたり。たとひ爾前の經に、つかせ給ひ

【四】得道は利根鈍根共に可能なること、末世の衆生は信心なくんば得道せざることを說く。

【五】滅後の三時を判じ、末法には實大乘經の法華經のみ救濟力あるを說く。

て、百千萬億劫行せさせ給ふとも、法華經を一遍も「南無妙法蓮華經」と申させ給はずば、不孝の人たる故に、三世十方の聖賢にもすてられ、天神地祇にもあだまれ給はん歟。一是

【四】たとひ五逆十惡、無量の惡を作れる人も、根だにも利なれば得道なる事これ有り。提婆達多、鴦崛摩羅等是れなり。たとひ根鈍なれども、罪無ければ得道する事これ有り、須利槃特等是れなり。我等衆生は根の鈍なる事、須利槃特にも過ぎ、物の色形を辨へざる事盲目の如し。貪、瞋、癡極めて厚く、十惡は日日に犯し、五逆をば犯さざれども、五逆に似たる罪又日日に犯す。又十惡五逆に過ぎたる謗法は人毎にこれ有り。させる語を以て『法華經』を謗ずる人は少けれども、人毎に『法華經』をば用ゐず。又用ゐたるやうなれども、念佛等のやうには信心深からず。設ひ信心深き者も『法華經』の敵をば責めず。いかなる大善根を修し、『法華經』を千萬部讀み、書寫し、一念三千の觀道を得たる人なりとも、『法華經』の敵をだにも責めざれば得道あり難し。たとへば朝に仕ふる人の十年二十年の奉公あれども、君の敵を知りながら奏もせず、私にもあだまずば、奉公皆失せて、還つて科に行はれんが如し。當世の人人は皆謗法の者と知しめすべし。一是

【五】佛入滅の次の日より千年をば正法と申して、持戒の人多く、得道の人これあり。正法千年の後は像法千年なり、破戒の者は多く得道の者は少し。像法千年の後は末法萬年なり、持戒も無く、破戒も無く、無戒の者のみ國に充滿せん。而も濁世と申して、亂れたる世なり。清世と申して清める世には、直繩の曲れる木を削らするやうに、非をすて是を

【五濁】劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁のこと。

【六】國を知るべきを說く。

用ゆるなり。正像より五濁やうやう出來りて、末法になり候へば五濁盛りに過ぎて、大風の大波を起して岸を打つのみならず、又波と波とを打つが如くなり。見濁と申すは、正像やうやく過ぎぬれば僅かに邪法の一つを傳へて廣大の善根の正法を破るなり。世間の罪にて惡道に墮つる者よりも、佛法を以て惡道に墮つる者多しと見え侍り。然るに當世は正像二千年過ぎて、末法に入つて二百餘年、見濁盛りにして、惡よりも善根にて多く惡道に墮つべき時刻なり。惡は愚癡の人も惡と知れば從はぬ邊もあり、火は水を以て消すが如し。善は但だ善と思ふ程に小善に付いて大惡の起る事を知らず。所以に傳教等の聖跡あり、廢れ荒るれども念佛堂にあらずといひて捨て置き、その傍に新しく念佛堂を作り、彼の寄進の田畠を取りて念佛堂に寄す。此等は『像法決疑經』の文の如くならば、功德少しと見え侍り。此等を以て知るべし、善なれども大善を破る小善は、惡道に墮つべし。今の世は末法の始めなり。小乘經の機、權大乘經の機、皆失せ果てて、唯實大乘經の機のみあり。小船には大石をのせず。惡人愚者は大石の如し、小乘經竝びに權大乘經、念佛等は小船なり。大惡瘡は、病大なれば小治及ばず、末代濁世の我等には念佛等はたとへば、冬田を作るが如く、時當らざるなり。是三

【六】又國を知るべし。國に隨つて人の心不定なり。たとへば江南の橘を淮北に移せば枳となる。心なき草木すら所による、まして心あらん者何ぞ所によらざらん。されば玄奘三藏の西域と申す文に、天竺の國國を多く記したるに、國の習ひとして不孝なる國も

【七】日本は大乘國、法華有緣の國なるを明す。

あり、孝の心ある國もあり。瞋恚の盛んなる國もあり、愚癡のおほき國もあり、一向に小乘を用ゆる國もあり、一向に大乘を用ゆる國もあり、大小兼學する國もありと見え侍り。又一向に殺生の國、一向に偷盜の國、又穀の多き國、又粟等の多き國、不定なり。

【七】抑日本國は如何なる教を習ひてか生死を離るべき國ぞと勘へたるに、『法華經』に云く、『如來の滅後に於て、閻浮提の内に廣く流布せしめ、斷絕せざらしむ。』等云云。此文の心は、『法華經』は閻浮提の人の爲には有緣の經なり。彌勒菩薩の云く、『東方に小國有り、唯だ大乘の種の機のみ有り。』等云云。此等の文の如くんば、閻浮提の内にも東の小國に大乘經の機ある歟。肇公の『記』に云く、『此の典は東北の小國に有緣なり。』等云云。『法華經』は東北の國に緣ありと書かれたり。安然和尚の云く、『我が日本國、皆大乘を信ず。』等云云。慧心の『一乘要決』に云く、『日本一州、圓機純一なり。』等云云。釋迦如來、彌勒菩薩、須梨耶蘇摩三藏、羅什三藏、僧肇法師、安然和尚、慧心先德等の心ならば、日本國は純に『法華經』の機なり。一句一偈なりとも行ぜば必ず得道なるべし、有緣の法なるが故なり。たとへば鐵を磁石の吸ふが如く、方諸の水を招くに似たり。念佛等の餘行をすゝむるは、磁石の鐵を吸はず、方諸の水を招かざるが如し。故に安然の釋に云く、『如し實乘に非ずんば、恐らくは自他を欺かん。』等云云。此釋の心は、日本國の人に『法華經』にてなき法を授くる者は我が身を欺き人をも欺く者と見えたり。されば法は必ず國を鑑みて弘むべし。彼國によかりし法なれば、必ず此國にもよかるべしとは思ふべからず。四是

【八】佛法流布の前後を辨へ、今は法華經流布の時なるを明す。

【九】法華經の信心より退轉すれば墮獄疑ひなし、必ず退轉すべからずと誡む。

【八】又佛法流布の國に於ても、前後を勘ふべし。佛法を弘むる習ひ、必ず先に弘まりける法の樣を知るべきなり。例せば病人に藥を與ふるには、先に服したる藥の樣を知るべし。藥と藥とが行き合ひて爭ひをなし、人を損ずる事あり。佛法と佛法とが行き合ひて爭ひをなして、人を損ずるもかくの如し。先に外道の法の弘まれる國ならば、佛法を以て之を破るべし。佛の印度に出て外道を破り、摩騰迦、竺法蘭の震旦に來て道士をせめ、上宮太子和國に生れて守屋を斬りしが如し。佛教に於ても小乘の弘まれる國をば、大乘經を以て破るべし。無著菩薩の世親の小乘を破りしが如し。權大乘の弘まれる國をば、實大乘を以て之を破るべし。天台智者大師の南三北七を破りしが如し。而るに日本國は天台宗の『法華經』弘まらせ給ひて今に四百餘歳、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四衆、皆法華經の機と定まりぬ。善人、惡人、有智無智、皆五十展轉の功德をそなふ。たとへば、崑崙山に石なく、蓬萊山に毒無きが如し。而るを此五十餘年に法然といふ大謗法の者出來りて、一切衆生を賺して、珠に似たる石を以て、珠を投げさせ石を取らせたるなり。『止觀』の五に云く、「瓦礫を貴んで明珠を棄つ」と申すは是れなり。一切衆生、石を握りて珠と思ふ、念佛を申して『法華經』をすてたる是れなり。此事をば申せば還つて瞋を立ち、法華經の行者を罵りて、ことに無間の業を増すなり。五是

【九】但し殿は此義を聞召して、念佛をすてて『法華經』にならせ給ひて侍りしが、定めてかへりて念佛者にぞならせ給ひて侍るらん。『法華經』をすてて念佛者とならせ給はば峰

【一〇】他經權宗は劣るが故に論議に負けて迫害するを述ぶ。【還迹】おしはかること。

の石の谷へころび、空の雨の地に落つると思し召せ。大阿鼻地獄疑ひなし。大通結緣の者の三千塵點劫、久遠下種の者の五百塵點劫を經し事は、大惡知識にあひて、『法華經』をすてて念佛等の權教に移りし故なり。一宗の人人念佛者にてましましげに候ひしかば、定めて念佛をすすめ參らせ給ひ候らん。我が信じたる事なれば、それも道理にては候へども、總じて惡魔の法然が一類に誑かされたる人人なりと思して、大信心を起して、御用ゐあるべからず候。大惡魔の貴き僧となり、父母兄弟等につきて人の後世をば障ふるなり。いかに申すとも『法華經』をすてよとたばかりげに候はんをば御用ゐあるべからず。

【一一】先づ御還迹あるべし。念佛實に往生すべき證文强くば、此十二年が間、念佛者無間地獄と申すをば、如何なる所へ申し出しても詰めずして候べきか。よくよく弱き事なり。法然、善導等が書き置きて候ほどの法門は、日蓮等は十七八の時より知りて候ひき。此頃の人の申す事も、これに過ぎず。結句は法門かなはずして、寄せて戰ひにし候なり。念佛者は數千萬人の方人多く、日蓮は唯一人、方人は一人もこれなし。今までも生きて候は不可思議なり。今年も十一月十一日、安房國東條の松原と申す大路にして、申酉の時計りに、數百人の念佛者に待ちかけられて、唯人十人ばかりにて、物の用にあふ者は僅かに三四人なり。射る箭は雨の如し、打つ太刀は電の如し。弟子一人は當座に打殺され、二人は大事の傷にて候。自身は切られ打たれ、結句は命に及びたりしが、いかが候ひけん打ち漏されて今まで生きて侍り。いよいよ『法華經』の信心こそまさりて候へ。第四の卷

【二】法華經の行者日蓮の弟子たる大信念に安住すべきを勸む。

に云く、『而も此經は如來の現在すら猶ほ怨嫉多し、況んや滅度の後をや。』第五の卷に云く、『一切世間、怨多くして信じ難し。』等云云。日本國に『法華經』讀み學する人これ多し。人の妻をねらひ盜み等にて打張らるる人は多けれども、『法華經』の故にあやまたるる人は一人もなし。されば日本國の持經者は未だ此經文にあはせ給はず、唯日蓮一人こそ讀み侍れ。『我れ身命を愛せず、但だ無上道を惜む』是れなり。

【二】されば日蓮は日本第一の法華經の行者なり。若し先に立たせ給はば、梵天、帝釋、四大天王、閻魔大王等にも申させ給ふべし。『日本第一の法華經の行者日蓮房の弟子なり』と名のらせ給へ、よも芳心無き事は候はじ。但し一遍は念佛を申し、一遍は『法華經』を唱へ、二心ましまし、人の聞くに憚かりなんどだにも候はば、日蓮が弟子と申させ給ふとも御用ゐ候はじ、後に恨みさせ給ふな。但し『法華經』は今生の祈りともなり候なれば、もしやとして生きさせ給はば、あれは疾く疾く見參して自身申し開き候はばや。語は文に盡さず、文は心を盡し難く候へばとどめ候ひぬ。恐恐謹言

文永元年十二月十三日　　日蓮　花押

南條兵衛七郎殿

〔續遺六〇七頁、文永五年（四十七歳）の作。執權北條時宗に與へて、蒙古來襲の國難を除かんには日蓮の言を用ひて早く諸宗との勝劣を判ずべきを諫めたる文、龍口死罪の縁由をなす。十一通御書の一。

【二】蒙古國の牒狀到來を述べ、蒙古國を調伏する者は、之を豫言せし日蓮に限ることを明す、

【三】法華經を奉せざれば國神去つて七難來ることを警告す、

與北條時宗書

【一】謹んで言上せしめ候。抑正月十八日、西戎大蒙古國の牒狀到來すと。日蓮先年諸經の要文を集め之を勘へたる、「立正安國論」の如く少しも違はず普合しぬ。日蓮は聖人の一分に當れり、未萌を知るが故なり。然る間、重ねて此由を驚かし奉る。急ぎ建長寺、壽福寺、極樂寺、多寶寺、淨光明寺、大佛殿等の御歸依を止め給へ。然らずば重ねて又四方より責め來るべきなり。速に蒙古國の人を調伏して、我國を安泰ならしめ給へ。彼を調伏せられん事は、日蓮に非ずば叶ふべからず。諫臣國に在れば其國正しく、爭子家に在れば其家直し。國家の安危は政道の直否に在り、佛法の邪正は經文の明鏡に依る。

【二】夫れ此國は神國なり、神は非禮を稟け給はず。天神七代地神五代の神神、其外諸天善神等は一乘擁護の神明なり。然も「法華經」を以て食と爲し正直を以て力と爲す。「法華經」に云く、「諸佛救世者、大神通に住して衆生を悅ばしめんが爲の故に、無量の神力を現ず。」一乘棄捨の國に於ては、豈善神怒を成さざらんや。「仁王經」に云く、「一切の聖人去る時、七難必ず起る」と。彼の呉王は伍子胥が詞を捨て吾が身を亡ぼし、桀紂は龍比を失つて國位を喪ふ。今日本國既に蒙古國に奪はれんとす。豈歎かざらんや、豈驚かざらんや。日蓮が申す事御用ゐ無くば、定て後悔之れあるべし。日蓮は「法華經」の御使なり、經に

【三】萬祈を抛つて佛法の邪正を明にすべきを勸む。

【◇】縮遺六一七頁、文永五年(四十七歳)の作。十一通御書に依つて流罪死罪等來るべきを期し、弟子檀那を教誡したる文。【庶幾】こひねがふこと。

云く、『則如來の使、如來の所遣として如來の事を行ず』と。三世諸佛の事とは『法華經』なり。此由方方へ之を驚かし奉る。一所に集めて御評議有つて、御報に預るべく候。

【三】所詮は萬祈を抛て諸宗を御前に召合せ、佛法の邪正を決し給へ。澗底の長松を未だ知らざるは良匠の誤、闇中の錦衣を未だ見ざるは愚人の失なり。三國佛法の分別に於ては殿前に在り、所謂阿闍世、陳隋、桓武是なり、敢て日蓮が私曲に非ず、只偏に大忠を懷くが故に、身の爲に之を申さず、神の爲、君の爲、國の爲、一切衆生の爲に言上せしむる所也。恐恐謹言。

文永五年戊辰十月十一日　日蓮

謹上　宿屋入道殿

弟子檀那中御書

大蒙古國の牒狀到來に就て、十一通の書狀を以て方方へ申せしめ候。定めて日蓮が弟子檀那、流罪死罪一定ならん。少しも之を驚くこと莫れ。方方への強言申すに及ばず、是れ併ながら『而強毒之』の故なり。日蓮庶幾せしむる所なれば各各用心ある可し。少しも妻子眷屬を懷ふこと莫れ、權威を恐るること莫れ。今度生死の縛を切て佛果を遂げしめ給へ。鎌倉殿、宿屋入道、平左衞門尉、彌源太、建長寺、壽福寺、極樂寺、多寶寺、淨光

明寺、大佛殿、長樂寺、以上十一箇所、仍て十一通の状を書いて諫訴せしめ候ひ畢んぬ。定めて子細有るべし。日蓮が所に來て書状等披見せしめ給へ。恐恐謹言。

文永五年戊辰十月十一日　日蓮

日蓮弟子檀那中

◯縮遺六三四頁、文永七年（四十九歳）の作。檀越大田金吾に與へて、死罪を期待せる文。

【鵞目】錢の異稱

【去年方方へ申して】十一通御書のこと。

【上への】北條氏を指す。

金吾殿御返事

『止觀』の五、正月一日より讀み候ひて『現世安穩後生善處』と祈請仕り候。便宜に給ふべく候。本末失て候ひしかども、これに修理させて候。多く本入るべきに申し候。

大師講、鵞目五連給び候ひ畢んぬ。此大師講三四年に始めて候が、今年は第一にて候つるに候。抑此法門の事、勘文の有無に依りて弘まる可き歟弘まらざるべき歟。去年方方に申して候ひしかども、否諾の返事候はず候。今年十一月の比方方へ申して候へば少少返事ある方も候。おほかた人の心も和ぎてさもやとおぼしたりげに候。又上への見參にも入りて候やらん。此れ程の僻事申して候へば流死の二罪の内は一定と存ぜしが、今まで何にと申す事も候はぬは不思議とおぼへ候。いたれる道理にて候やらん。又自界叛逆難の經文も値ふべきにて候やらん。山門なんども古にも百千萬億倍すぎて動搖と承給は

り候、それならず子細ども候やらん。震旦高麗既に禪門、念佛になりて守護の善神の去るかの間、彼蒙古に從ひ候ひぬ。我朝も又此邪法弘まりて天台法華宗を忽諸の故に、山門安穩ならず。師檀違判の國と成り候ひぬれば、十が八九はいかんがと見え候。人身既にうけぬ、邪師又免かれぬ、「法華經」の故に流罪に及びぬ。今死罪に行はれぬこそ本意ならず候へ。あはれさる事の出來候へかしとこそ勵み候て、方方に強言を書きて上げをき候なり。既に年五十に及びぬ。餘命いくばくならず。徒らに曠野に捨てん身を同じくは一乘法華の方になげて、雪山童子、藥王菩薩の跡を追ひ、仙豫有德の名を後代に留めて、「法華」、『涅槃經』に說入れられまいらせんと願ふ所なり。南無妙法蓮華經。

十一月二十八日　　日蓮 華押

金吾殿御返事

四條金吾女房御書

◎縮遺六七一頁、文永八年(五十歳)の作。龍口にて腹切らんと願ひ出で「一法華宗の四條金吾」と宣傳せられたる大信者四條金吾の女房に與へて、安産を祈りたる文。

懷胎のよし承り候ひ畢んぬ。それについては符の事仰せ候。日蓮相承の中より選み出して候。能能信心あるべく候。たとへば祕藥なりとも毒を入れぬれば藥の用すくなし、劍なれども惡びれたる人の爲には何かせん。就中夫婦共に「法華經」の持者なり、「法華經」流布の種をつぐ所の王子出で生れん、目出度覺え候ぞ。色心二法をつぐ人なり、爭でか

◎縮遺六八八頁、文永八年(五十歳)の作。九月十二日の夜龍口の難をのがれてより、佐渡流罪となるまで、依智に滯在せし時、大檀那富木氏に與へてその悲歎を慰めたる文。

おそなはり候べき、とくとくこそ生れ候はんずれ、此藥のませ給はば、疑なかるべきなり。闇なれども、燈入りぬれば明なり。濁水にも月入りぬればすめり。明なる事日月にすぎんや、淨き事蓮華にまさるべきや。『法華經』は日月と蓮華となり、故に『妙法蓮華經』と名く。日蓮又日月と蓮華との如くなり。信心の水すまば、利生の月必ず應を垂れ守護し給ふべし。とくとく生れ候べし。『法華經』に云く、『如是妙法。』又云く、『安樂産福子。』云云。口傳相承の事は此辨公にくわしく申し含めて候。『則如來使』なり。返返も信心候べし。天照大神は玉を素戔雄尊に授けて、玉の如くの御子をまうけたり。然る間日の神、我子とて正哉吾勝とは名けたり。日蓮生るべき種をさづけて候へば、爭でか我子におとるべき。『一の寶珠有り、價値三千界』等。『無上の寶珠、求めざるに自ら得たり。』『釋迦如來、皆是れ吾が子なり』等云云。日蓮此義にかはるべしや。幸なり幸なり、めでたしめでたし。又又申すべく候。あなかしこ、あなかしこ。

文永八年五月七日　日蓮 華押

四條金吾殿女房御返事

土木殿御返事

此十二日辰の時御勘氣、武藏守殿御あづかりにて、十三日丑の時に鎌倉を出て、佐渡の

【たらじ】島司。

◇縮遺六九五頁、文永八年(五十歳)依智に於る作。龍口法難の時、囚へられて鎌倉の土牢に在る師孝第一の日朗上人に與へて之を慰めたる文。

國へ流され候が、たうじは本間の依智と申す處に、依智の六郎左衛門尉殿の代官、右馬太郎と申す者あづかりて候が、いま四五日はあるべげに候。御嘆きはさる事に候へども、これには一定と、本より期して候へば嘆かず候。今まで頸の切れぬこそ本意なく候へ。『法華經』の御故に過去に頸を失ひたらば、かかる少身のみにて候べきか。又『數數見擯出』と說かれて、度度失にあたりて重罪を消してこそ、佛にもなり候はんずれば、我と苦行をいたす事は心ゆゑなり。

上のせめさせ給ふにこそ、『法華經』を信じたる色もあらはれ候へ。月は虧けてみち、潮は干て滿つる事疑なし。此も罰あり必ず德あるべし。何しにかなげかん。

九月十四日　　日蓮　華押

土木殿御返事

土籠御書

日蓮は明日佐渡の國へまかるなり。今夜の寒きにつけても、牢のうちのありさま思ひやられて、痛はしくこそ候へ。あはれ殿は『法華經』一部を色心二法共にあそばしたる御身なれば、父母六親一切衆生をもたすけ給ふべき御身なり。『法華經』を餘人のよみ候は、口ばかり言ばかりは讀めども心はよまず。心はよめども身によまず。色心二法共にあそば

されたることこそ貴く候へ。「大諸童子、以爲給使、刀杖不加、毒不能害」と説かれて候へば、別の事はあるべからず。籠をばし出させ給ひ候はば、疾く疾く來り給へ。見たてまつり、見えたてまつらん。恐恐謹言。

文永八年辛未十月九日　　日蓮

筑後殿

寺泊御書

鵞目一結給び候ひ畢んぬ。心ざしあらん諸人は、一處にあつまりて御聽聞あるべし。

【一】今月十月也。十日、相州愛京郡依智の郷を起つて、武藏國久米河の宿に付き、十二日を經て越後國寺泊の津に付きぬ。此より大海を亙つて佐渡國に至らんと欲するに、順風定まらず、其期を知らず。道の間の事、心も及ぶこと莫く、又筆にも及ばず、但暗に推度るべし。又本より存知の上なれば、始めて歎く可きに非ずと之を止む。

【二】『法華經』第四に云く、「而も此經は如來の現在にすら猶ほ怨嫉多し、況んや滅度の後をや。」第五の卷に云く、「一切世間怨多くして信じ難し。」『涅槃經』三十八に云く、「爾の時一切外道の衆、咸く是の言を作す。大王今者唯一人の大惡人あり瞿曇沙門なり。一切

【筑後】筑後房の略にて、朗師の房名なり。

【〇】縮遺六九七頁、文永八年(五十歲)越後寺泊に於る作、大檀越富木氏に寄せて、今は文の如く勸持品二十行の偈を色讀せる法華經の行者なり隨つて本化上行菩薩の再身なるべしとの自覺心境を語れる文。

【一】依智より寺泊に至るまでの道程を記す。

【二】大難の必然なる所以を述ぶ。

【三】涅槃經の文及び天台の釋を引きて法華經こそ生命にして、諸經は法華經の生命を讃ふための重寶に過ぎずと說く。
【籤】釋籤の略。

世間の惡人、利用の爲の故に、其所に往き集りて眷屬と爲りて、善を修すること能はず。呪術力の故に迦葉及び舍利弗、目犍連等を調伏す。」云云。此の『涅槃經』の文は、一切の外道が我本師たる二天三仙の所說の經典を、佛陀に毀られて出す所の惡言なり。『法華經』の文は、佛を怨と爲すには非ず。經文は天台の意に云く、「一切の聲聞緣覺並びに近成を樂ふ菩薩」等云云。聞かんと欲せず、信ぜんと欲せず、其機に當らざるは、言を出して謗ること莫きも、皆怨嫉の者と定め了んぬ。在世を以て滅後を惟ふに、一切諸宗の學者等は皆外道の如し。彼等が云ふ一大惡人とは、日蓮に當れり。一切の惡人之に集るとは、日蓮が弟子等是れなり。彼の外道は先佛の說教流傳の後、之を謬つて後佛を怨とせり。今諸宗の學者等が亦復是の如し、所詮佛教に依つて、邪見を起す。目の轉ずる者、大山轉ずとおもふ。今八宗十宗等多門の故に諍論を致す。

【三】『涅槃經』第十八に「贖命重寶」と申す法門あり。天台大師の料簡に云く、「命とは法華經なり、重寶とは涅槃經に說く所の前三教なり。但し『涅槃經』に說く所の圓教は如何。此『法華經』に說く所の佛性常住を重ねて之を說いて歸本せしめ、『涅槃經』の圓常を以て『法華經』に攝す。『涅槃經』の得分は但前三教に限る」天台の『玄義』三に云く、『涅槃は贖命の重寶なり、重ねて掌を抵つのみ。』云云。『籤』の三に云く、「今家引く意は、大經の部を指し 以て重寶と爲す。」等云云。天台大師の『四念處』と申す文に、『法華經』の『垂示種種道』の文を引て、先四味を又重寶と定め了んぬ。若し爾らば「法華經」の前

後の諸經は、「法華經」の爲の重寶なり。世間の學者の想に云く、「此は天台一宗の義なり、諸宗には之を用ゐず」等云云。日蓮之を案じて云く、八宗十宗等、皆佛滅後より之を起し、論師人師之を立つ。滅後の宗を以て、現在の經を計る可からず。天台の所判は、一切經に叶ふに依つて、一宗に屬して、之を棄つ可からず。諸宗の學者等、自師の誤に執する故に、或は事を權に寄せ、或は前師に讓り或は賢王を語らひ、結句最後には惡心強盛にして、闘諍を起し、失無き者を之を損じて樂と爲す。諸宗の中に、眞言宗殊に僻案を致す。善無畏、金剛智等の想に云く、「一念三千は天台の極理一代の肝心なり。顯密二道の詮たる可きの心地の三千は、且く之を置く。此の外、印と眞言とは、佛教の最要」等云云。其後眞言師等、事を此義に寄せて、印、眞言無き經經をば、之を下すこと外道の法の如くせり。或義に云く、「『大日經』は釋迦如來の外の說なり」と。或義に云く、『教主釋尊第一の說たり』と。或義に云く、「釋尊と現じて顯經を說き、大日と現じて密經を說く」と。道理を得ずして、無盡の僻見之を起す。譬へば乳の色を辨へざる者、種種の邪推を作せども、本色に當らざるが如し。又象の譬の如し。今汝等知るべし。『大日經』等は「法華經」已前ならば「華嚴經」等の如く、已後ならば「涅槃經」等の如し。又天竺の「法華經」には印、眞言あれども、譯者之を略して、羅什は「妙法經」と名け、印眞言を加へて、善無畏は「大日經」と名くる歟。譬へば「正法華」、「添品法華」、「法華三昧」、「薩云分陀利」等の如し。佛滅後、天竺に於て此詮を得たるは龍樹菩薩、漢土に於て始めて之を得たるは、天台智者大師

【詮】こころの義

【四】勸持品、不輕品色讀の者は日蓮より外になきことを斷ず。

【邪難】邪まなる非難。

なり。眞言宗の善無畏等、華嚴宗の澄觀等、三論宗の嘉祥等、法相宗の慈恩等、名は自宗に依れども、其心は天台宗に落ちたり。其門弟等此事を知らず、如何ぞ謗法の失を免れんや。

【四】或人日蓮を難じて曰く、『機を知らずして麤義を立て難に値ふ』と。或人云く『勸持品の如きは深位の菩薩の義なり、安樂行品に違す。』と。或人云く『我も此義を存ずれども云はず。』と云云。或人云く『唯教門許り也』と。具に我之を存ずと雖も、卞和は足を切られ、清麿は穢麿と云ふ名を給ひて死罪に及ばんとす。時の人之を笑ふ。然りと雖も其人未だ善名を流さず。汝等が邪難も亦爾るべし。『勸持品』に云く、『諸の無智の人有りて惡口罵詈等す。』云云。日蓮此經文に當れり、汝等何ぞ此經文に入らざる。『及び刀杖を加ふる者。』等云云、日蓮は此經文を讀めり、汝等何ぞ此經文を讀まざる。『常に大衆の中に在つて、我等の過を毀らんと欲す。』等云云。『國王大臣婆羅門居士に向つて。』等云云。『惡口して顰蹙し、數數擯出せらる。』『數數』とは度度なり、日蓮は擯出衆度、流罪は二度なり。『法華經』は三世說法の儀式なり。過去の『不輕品』は今の『勸持品』、今の『勸持品』は過去の『不輕品』なり。今の『勸持品』は未來は『不輕品』たる可し。其時日蓮は即ち不輕菩薩たる可し。

一部八卷、二十八品。天竺の御經は一由旬に布くと承る。定めて數品有る可し。今漢土日本の二十八品は略の中の要なり。正宗は之を置く。流通に至つて、『寶塔品』の三箇の敕宣は靈山虛空の大衆に被らしむ。『勸持品』の二萬、八萬、八十萬億等の大菩薩の御誓言は

【四】富木氏より御供に遣はせる入道を還し、牢入の弟を愍れむ。

【囹僧等】土牢に囹はれたる日朗等の諸弟子のこと。

◇縮遺・七〇一頁、文永八年（五十歲）の作。佐渡到著の直後圓淨房に寄せて清澄の知友に與へ、法華色讀流罪の法悅を述べたる文。

日蓮が淺智には及ばざれども、但し「恐怖惡世中」の經文は末法の始を指すなり。此「恐怖惡世中」の次下の「安樂行品」等に云く、「於末世」等云云。同本異譯の「正法華經」に云く、「然後末世」又云く、「然後來末世」。「添品法華經」に云く、「恐怖惡世中」等云云。當時當世、三類の敵人は之れ有るに、但八十萬億那由陀の諸菩薩は一人も見え給はず。乾たる潮の滿たず、月の虧けて滿ちざるが如し。水を清せば月を浮べ、木を植ゆれば鳥を棲ましむ。日蓮は八十萬億那由陀の諸の菩薩の代官として之を申す。彼の諸の菩薩の加被を請る者なり。

【四】此入道佐渡國へ御供爲す可きの由、之を承り申す。然る可けれども、用途と云ひ方方煩あるの故に之を還す。御志始めて之を申すに及ばず。人人に是の如く申させ給へ。但し囹僧等のみ心に懸り候。便宜の時、早早之を聽かす可し。あな賢、あな賢。

十月二十二日酉時　　　　日蓮　花押

土木殿

佐渡御勘氣鈔

（與二清澄知友一書）

九月十二日に御勘氣を蒙つて、今年十月十日佐渡の國へまかり候也。本より學文し候

【旃陀羅】屠肉者の梵語。今は漁夫を意味す。

◇縮遺八三五頁、文永九年（五十一歳）の作。富木氏に寄せて、死期を覺悟し、惡人を善知識と悦び、法華經の行者の自覺を披瀝す。

ひし事は、佛教をきはめて佛になり、恩ある人をもたすけんと思ふ。佛になる道は必ず身命をすつる程の事ありてこそ、佛にはなり候らめと推しはからる。既に經文のごとく、『惡口罵詈』『刀杖瓦礫』『數數見擯出』と說かれて、かかる目に値ひ候こそ、『法華經』をよむにて候らめと、いよいよ信心も起り、後生もたのもしく候。死して候はば必ず各各をもたすけ奉るべし。天竺に師子尊者と申せし人は檀彌羅王に頭をはねられ、提婆菩薩は外道につき殺さる。漢土に竺道生と申せし人は蘇山と申す所へ流さる。法道三藏は面に火印をやかれて、江南と申す所へ流されき。是皆『法華經』の徳、佛法のゆゑなり。日蓮は日本國東夷東條、安房國海邊の旃陀羅が子也。いたづらに朽ちん身を『法華經』の御故に捨てまゐらせん事、あに石に金をかふるにあらずや。各各なげかせ給ふべからず。道善の御房にも斯う申聞かせまゐらせ給ふべし。領家の尼御前へも御文と存じ候へども、先かかる身の文なれば、なつかしやと思さざるならんと申しぬると、便宜あらば各各御物語申させ給へ。

十月　日　　　　日蓮　華押

富木殿御返事

日蓮臨終一分も疑無く、頭を刎らるるの時は殊に喜悦有るべく候。大賊に値ひて大

【四條三郎左衛門尉】四條金吾を指す。
【其書】開目鈔のこと。

◎縮遺八四九頁、文永九年（五十一歳）の作。四條金吾の女房に與へて、法華經の信心強盛なるを賞し、同生同名神の加護を說いて之を慰め勵ます文。

毒を寶珠に易ふると思ふべき歟。

鵞目員數の如く給び候ひ了んぬ。御志申し遂し難く候。法門の事は、先度四條三郎左衛門尉殿に書持せしむ、其書能能御覽有る可し。粗經文を勘へ見るに、日蓮法華經の行者たる事、疑無き歟。但し今に天の加護を蒙らざるは、一には諸天善神此惡國を去る故歟。二には善神法味を味はざる故に威光勢力無き歟。三には大惡鬼三類の心中に入り、梵天、帝釋も力に及ばざる歟等。一一の證文、道理追つて進ぜしむ可く候。但し生涯本より思ひ切り了んぬ。今に翻返ること無く、其上又遺恨無し。諸の惡人は又善知識なり。攝受、折伏の二義、佛說に依る。敢て私曲に非ず。萬事は靈山淨土を期す。恐恐謹言。

卯月十日　日蓮　花押

土木殿

四條金吾殿女房御返事

（同生同名御書）

此の御文は藤四郎殿の女房と、常に寄り合ひて御覽あるべく候。大闇をば日輪破る。女人の心は大闇の如し、法華經は日輪の如し。幼子は母を知らず、母は幼子を忘れず。釋迦佛は母の如し、女人は幼子の如し。二人互ひに思へばすべて離れ

ず。一人は思へども、一人思はざれば、或時はあはず。佛は思ふ者の如し、女人は思はざるものの如し。我等佛を思はば、爭でか釋迦佛見え給はざるべき。石を珠といへども珠とならず、又珠を石といへども石とならず。權經の當世の念佛等は石の如し。念佛は『法華經』ぞと申すとも、『法華經』にあらず。又『法華經』を謗るとも、珠の石とならざるが如し。昔唐國に徽宗皇帝と申せし惡王あり、道士と申す者に賺されて、佛像經卷を失ひ僧尼を皆還俗せしめしかば、一人として還俗せざる者なかりき。其の中に法道三藏と申せし人こそ、勅宣を恐れずして、面に火印を燒かれて江南と申せし處へ流されて候ひしが、今の世の禪宗と申す、道士の法門のやうなる惡法を御信用ある世に生れて日蓮が大難に値ふ事は、法道に似たり。各各僅の御身と生れて、鎌倉に居ながら、人目をも憚らず、命をも惜まず。『法華經』を御信用ある事、唯事とも覺えず。但だ推量るに、濁れる水に玉を入れぬれば、水の淸むが如し。知らざる事を善き人に敎へられて、其の儘に信用せば、道理に聞ゆるが如し。釋迦佛、普賢菩薩、藥王菩薩、宿王華菩薩等の 各 の御心中に入り給へるか、『法華經』の文に、閻浮提に此經を信ぜん人は、普賢菩薩の御力なりと申す、是なるべし。女人はたとへば藤の如し、男は松の如し、須臾も離れぬれば立ち上る事なし。然るにはかばかしき下人もなし、斯る亂れたる世に、此殿を遣されたる心ざし、大地よりもあつし、地神定めて知りぬらん。虛空よりも高し、梵天、帝釋も知らせ給ひぬらん。人の身には同生同名と申す二の使候。天生るる時よりつけさせ給ひて、影の身に從ふが如く、

〔☆〕縮遺八五一頁、文永九年（五十一歳）の作。大檀越四條金吾に與へて信心强盛を勸め、上行の自覺を述べたる文。

〔一〕度々の音問に對して謝す。

〔二〕日蓮の法門は天台傳敎よりも一重立入りて深きことを說く。

須臾も離れず。大罪小罪、大功德小功德、少しも落さず、かはるがはる天に上つて申し候と、佛說き給ふ。此事はや天も知ろしめしぬらん。頼もし、頼もし。

四月　日　　　　日蓮　花押

四條金吾殿女房御返事

四條金吾殿御返事

〔一〕日蓮が諸難に就て御とぶらひ、今に始めざる志ありがたく候。法華經の行者として、斯る大難にあひ候は、悔しく思ひ候はず。いか程生をうけ死に遭ひ候とも、是程の果報の生死は候はじ。又三惡四趣にこそ候ひつらめ今は生死切斷し、佛果を得べき身となれば悅ばしく候。

〔二〕天台、傳敎等は、迹門の理の一念三千の法門を弘め給ふすら、猶ほ怨嫉の難に遭ひ給ひぬ。日本にしては傳敎より義眞、圓澄、慈覺等、相傳して弘め給ふ。第十八代の座主、慈慧大師なり。御弟子數多あり、其の中に檀那、慧心、增賀、禪瑜等と申して四人まします。法門又二つに分れたり。檀那僧正は敎を傳ふ。慧心僧都は觀を學ぶ。されば敎と觀とは日月の如し。敎は淺く、觀は深し。されば檀那の法門は廣くして淺し、慧心の法門は、狹くして深し。今日蓮が弘通する法門は、狹きやうなれども甚だ深し。其の故は彼の

天台、傳教等の所弘の法よりは、一重立ち入りたる故なり。『本門壽量品』の三大事とは是れなり。『南無妙法蓮華經』の七字ばかりを修行すれば、狹きが如し。されども三世の諸佛の師範、十方薩埵の導師、一切衆生皆成佛道の指南にてましますなれば、深きなり。『經に云く、諸佛の智慧甚深無量』云云。此の經文に諸佛とは、十方三世の一切の諸佛、眞言宗の大日如來、淨土宗の阿彌陀、乃至諸宗諸經の佛、菩薩の過去未來現在の總諸佛、現在の釋迦如來等を、諸佛と說き擧げて、次に智慧といへり。此の智慧とは何ものぞ。諸法實相、十如果成の法體なり。其の法體とは又何物ぞ。『南無妙法蓮華經』是れなり。釋に云く、『實相の深理、本有の妙法蓮華經』といへり。其の諸法實相といふも、釋迦多寶の二佛と習ふなり。諸法をば多寶に約し、實相をば釋迦に約す。是れ又境智の二法なり。多寶は境なり、釋迦は智なり。境智而二にして、而も境智不二の內證なり。是等は由由しき大事の法門なり。『煩惱即菩提、生死即涅槃』といふも是れなり。正しく男女交會の時『南無妙法蓮華經』と唱ふる處を、煩惱即菩提、生死即涅槃といふなり。生死の當體、不生不滅と悟るより外に、生死即涅槃は無きなり。『普賢經』に云く『煩惱を斷ぜず五欲を離れず、諸根を淨むることを得て、諸罪を滅除す』。『止觀』に云く『無明塵勞は即是れ菩提、生死は即涅槃なり』。『壽量品』に云く『常に自ら是の念を作す。何を以てか衆生をして無上道に入り速かに佛身を成就することを得せしめんと』。『方便品』に云く『世間の相常住なり』等とは此意なるべし。此の如く、法體といふも全く餘にはあらず、ただ『南無妙法蓮華經』の

【三】現在の大難を、過去に法華經を疎略にしたる罪とす。

【四】强盛の信力を貫徹せよと勸む

事なり。

【三】斯かるいみじく尊き『法華經』を、過去にて膝の下に置き奉り、或は侮り、輕しみ、或は信じ奉らず、或は『法華經』の法門を習うて一人をも教化し法命を嗣ぐ人を、惡心を以て兎に寄せ角に寄せ嘲弄ひ、或は後生の勸めなれども、先づ今生叶ひ難ければ暫らく差措くなんどと、無量に言ひ疎め謗ぜしによつて、今生に日蓮種種の大難に遭ふなり。諸經の頂上たる御經を、低く置き奉る故によりて、現世に又人に下げられ用ゐられざるなり。『譬諭品』に、人に親み附くとも、人心に入れて不便と思ふべからずと說きたり。

【四】然るに貴邊『法華經』の行者となり、結句大難にも遭ひ、日蓮をも助け給ふ事、『法師品』の文に『遣化四衆、比丘比丘尼、優婆塞優婆夷』と說き給ふ。此の中の優婆塞とは、貴邊の事にあらずば、誰をか指さむ。已に法を聞いて信受して逆はざればなり。不思議也、不思議也。若し然れば日蓮『法華經』の法師なる事、疑ひなきか。『則如來使』にも似たるらん。行如來事をも行ずるになりなん。多寶塔中にして二佛並坐の時、上行菩薩に讓り給ひし題目の五字を日蓮粗ぼ弘め申すなり。此れ即ち上行菩薩の御使ひか。貴邊又日蓮に隨ひて、『法華經』の行事として、諸人に語り給ふ、是れ豈に流通にあらずや。『法華經』の信心を通し給へ。火を剪るに、休みぬれば火を得ず、强盛の大信力を出して、『法華宗の四條金吾、四條金吾』と、鎌倉中の上下萬人、乃至日本國の一切衆生の口に唄

〔解〕縮遺八五九頁、文永九年（五十一歳）の作、六老僧の一人日頂の母日妙に與へてその不惜身命の篤信を賞したる文。

【一】佛を求め法を求めて身命を捨てて惜しまざりし釋尊の因行を擧げ佛法の貴ぶべきを説く。

はれ給へ。悪しき名さへ流す、況んや善き名をや。何に況んや「法華經」故に流せる名をや。女房にも此由を言ひ含めて、日月兩眼、雙の翼と調ひ給へ。日月あらば、冥途あるべきや。兩眼あらば、三佛の顔貌拜見疑ひなし。雙の翅あらば、寂光の寶刹へ飛ばん事須臾刹那なるべし。委くは又又申すべく候。恐恐謹言。

五月二日　日蓮花押

四條金吾殿御返事

日妙聖人御書

【一】過去に樂法梵志と申す者ありき。十二年の間多くの國國を廻り如來の教法を求む。時に總て佛法僧の三寶一もなし。此梵志の意は渇して水を求め飢て食を求むるが如く佛法を尋ね給ひき。時に婆羅門あり來つて云く「我聖教を一偈持てり、若し實に佛法を願はば當に與ふべし。」梵志答へて云く「爾也。」婆羅門云く「實に志あらば皮を剝で紙とし、骨を摧いて筆とし、髓を摧いて墨とし、血を出して水として書かんと云はば佛の偈を書かん。」時に此梵志悦びをなして彼が申す如くして、皮を剝で乾て紙とし、乃至一言をも違へず。時に婆羅門忽然として失ぬ。此梵志天に仰ぎ地に伏して歎く。佛陀此を感じて下方より涌出て說いて云く、「如法修行、非法不修行、今世若後世、行法者安穩也」等云

云。此梵志須臾に佛になる。是は二十字也。昔釋迦菩薩轉輪王たりし時、一夫生輪死此滅爲ㇾ樂一」との八字を尊び給ふ故に、身をかへて千燈に燈して、此八字を供養し給ひ、天人を勸めて石壁要路に書付て見る人をして菩提心を發さしむ。此光明忉利天に至る、天の帝釋并びに諸天の燈となり給ひき。昔釋迦菩薩佛法を求め給ひき。癩人あり、此人に向つて云く、「我れ正法を持てり。其字二十字也。我が癩病を擦り懷き舐り日日に兩三斤の肉を與へば說べし」と云ふ。彼が申す如くして二十字を得て佛になり給ふ。所謂「如來證ニ涅槃ニ永斷ニ於生死ニ若有ニ至心聽ニ當ㇾ得ニ無量樂ニ」等云云。昔雪山童子と申す人ありき。雪山と申す山にして外道の法を通達せしかども未だ佛法を聞かず、時に大鬼神有りき。說いて云く、「諸行無常是生滅法」等云云。只八字計を說いて後を說かず。時に雪山童子此八字を得て悅び極なけれども、半如意珠を得たるが如く、華さき果ならざるに似たり。殘の八字を聞かんと申す。時に大鬼神の云く、「我數日の間飢て正念亂るる故に後の八字を說がたし。食を與へよ。」と云云。時に童子問て云く、「何をか食とする。」鬼神答へて云く、「我人の溫かなる血肉を食するなり。我飛行自在にして須臾の間に四天下を廻りて尋ぬれども溫かなる血肉を得がたし、人をば天守り給ふ故に科無ければ殺害する事かたし。」と云云。時に童子云く、「我身を布施として後の八字を習ひ傳へん」と云云。鬼神の云く、「汝は智慧甚だ賢し、我をや賺さんずらん。」童子答へて云く、「瓦礫に金銀を替んに是をかへざるべしや。我徒に此山にして死しなば鵄梟虎狼等に喰はれて一分の功德なかるべし。後の八字にか

【二】法華經は諸佛の證明ある經故此を持つ功徳無量にして、之を持つ者は佛子にして釋尊と等しきを述ぶ

へなば糞を飯に替るが如し。」鬼神の云く、「我未だ信ぜず。」童子の云く、「證人あり、過去の佛も立て給ひし、大梵天王、釋提桓因、日月四天も證人に立ち給ふべし。」是の鬼神後の偈を説かんと申す。童子身に着たる鹿の皮を脱いで座に敷き、蹈跪し合掌して此座につき給へと請ず。大鬼神此座に就て説て云く、「生滅滅已寂滅爲樂」等云云。童子此偈を習ひ學して若は木若は石等に書付て、木に登つて身を大鬼神の口に投げ入れ給ふ。彼童子は今の釋尊、彼鬼神は今の帝釋也。藥王菩薩は「法華經」の御前にて臂を七萬二千歳が間燈し給ひ、不輕菩薩は多年が間二十四字の故に無量無邊の四衆に「罵詈毀辱杖木瓦石而打擲之」せられ給ひき。所謂二十四字と申すは、「我深敬汝等不敢輕慢所以者何汝等皆行菩薩道當得作佛」云云。かの不輕菩薩は今の教主釋尊也。昔の檀王は「妙法蓮華經」の五字の爲に千歳が間阿私仙人に責め使はれ、身を床となさせ給ひて今の教主釋尊と成り給ふ。

【二】然るに「妙法蓮華經」は八卷也。八卷を讀めば十六卷を讀むなるべし。釋迦、多寶の二佛の御經なるが故に、十六卷は無量無邊の卷軸也。十方の諸佛の證明なる故に。一字は二字也。釋迦、多寶の二佛の字なる故に。一字は無量の字也。十方の諸佛の證明の御經なる故に。譬へば如意寶珠は一珠なれども無量の寶を降らし、乃至無量珠も寶をふらすこと是れ同じ。「法華經」の文字は一字は一の寶珠、無量の字は無量の寶珠也。妙の一字には二つの舌まします。釋迦、多寶の御舌なり。此二佛の御舌は八葉の蓮華也。此八葉の蓮華の上に寶珠あり、妙の一字なり。此妙の珠は昔釋迦如來の檀波羅密と申して、身を

【三】法華經を持つには不惜身命なるべきを說く。

飢たる虎に飼し功德、尸毘王として身を鴿に貿し功德等。尸羅波羅密と申して須陀摩王として虛言せざりし功德等、忍辱仙人として身を迦梨王に任せし功德、能施太子、尙闍梨仙人等の六度の功德を妙の一字に備へ給ひて、末代惡世の我等衆生、一善をも修せざれども六度萬行を滿足する功德を與へ給ふ。「今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子」是なり。我等具縛の凡夫忽に敎主釋尊と功德等しくなる事、彼の功德を全體にうけとる故なり。經に云はく、「我が如く等しくして異ること無けん」等云云。『法華經』を心得る者は釋尊と齊等也と申す文なり。譬へば父母和合して子をうむ。子の身は全體父母の身也。誰か是を諍ふべき。牛王の子は牛王也、未だ師子王とならず、師子王の子は師子王となる。未だ人王天王等とならず。今法華經の行者は、「其中衆生悉是吾子」と申して敎主釋尊の御子なり。敎主釋尊の如く法王とならん事難かるべからず。但し不孝の者は父母の跡をつがず。堯王には丹朱と申す太子あり、舜王には商均と申す王子あり、二人共に不孝の者なれば父の王に捨られて現身に民となる。重華と禹とは共に民の子也、孝養の心深かりしかば堯舜の二王召して位を讓り給ひき。民の身忽ちに玉體にならせ給ふ。民の現身に王となると、凡夫の忽ちに佛になると同じ事なるべし。一念三千の肝心と申すは是也。

【三】　然るをいかにとしてか此功德をば得べきぞ。樂法梵志、雪山童子等の如く皮を剝ぐべき歟、身を投ぐべき歟、臂を燒くべき歟等云云。章安大師云く、『取捨宜しきを得て一向にす可らず』等是也。正法を修して佛になる行は時によるべし。日本國に紙なくば

【四】日妙上人の不惜身命の求法を賞し、日本第一の法華經の行者の女人と言ふ。

剝ぐべし。日本國に『法華經』なくて知れる鬼神一人出來せば身を投ぐべし。日本國に油なくば臂をも燃すべし。厚き紙國に充滿せば皮を剝いでなにかせん。然るに玄奘三藏は西天に法を求めて十七年、二十萬里にいたれり。傳教は御入唐但二年也。波濤三千里を隔てたり。是等は男子なり、上古なり、賢人なり、聖人也。未だ聞かず女人の佛法を求めて千里の路を分し事を。龍女が卽身成佛も、摩訶波闍波提比丘尼の記莂に預かりしも、知らず權化にやありけん。又在世の事也。男子女人其性もとより別れたり。火は煖かに水は冷たし。海人は魚を取るに巧み也。山人は鹿をとるに賢し。女人は物を嫉むに賢しとこそ經文には明されて候へ。未だ聞かず佛法にかしこしとは、女人の心を淸風に譬へたり、風はつなぐとも取がたきは女人の心也。女人の心をば水に畫くに譬へたり。水の面には文字とどまらざる故也。女人をば狂人に譬へたり、ある時は實なり、ある時は虛也。女人をば河に譬へたり、心すなをならざる故なり。

【四】然るに『法華經』は『正直に方便を捨て』等、『皆是眞實』、『質直にして意柔輭』、『柔和質直なる者』等と申して正直なる事弓の絃をはれるが如く、墨の繩を打つが如くなる者の信じまいらする御經也。糞を栴檀と申すとも栴檀の香なし。妄語の者を不妄語と申すとも不妄語にはあらず。一切經は皆佛の金口の說、不妄語の御言也。然れども『法華經』に對しまいらすれば妄語の如し、綺語の如し、惡口の如し、兩舌の如し。此御經こそ實語にて候へ。實語の御經をば正直の者心得候也。今實語の女人にておはする歟。當に知る

〔〇〕縮遺一〇八八頁　文永十二年（五十四歳）身延に於る作。東條郷を領したる領家の尼は聖人の父母並に聖人にも恩惠を與へたる人、一度聖人に歸伏したれども後に背反せり、新尼は領家の尼の嫁にして信心稍厚かりし人なり、御本尊授與に就て切々の教訓を垂れたる文。

べし須彌山を投きて大海を渡る人をば見るとも此女人をば見るべからず。砂を蒸て飯となす人をば見るとも、此女人をば見るべからず。當に知るべし、釋迦、多寶、十方分身の諸佛、上行、無邊行等の大菩薩、大梵天王、帝釋、四天王等此女人をば影の身に副ふが如く守り給ひ候らん。日本第一の『法華經』の行者の女人也。故に名を一つつけ奉りて不輕菩薩の義になぞらへん。「日妙聖人」等云云。相州鎌倉より北國佐渡の國まで、其中間一千餘里に及べり。山海遙に隔て山は峨峨たり、海は漫漫たり、風雨時にしたがふ事なし。山賊海賊充滿せり。宿宿泊り泊り民の心虎の如し犬の如し。現身に三惡道の苦を經る歟。其上當世は世亂れて去年より謀叛の者國に充滿せり。今年二月十一日合戰。それより今五月の末未だ世間安穩ならず。而もひとりの幼子あり。預け置くべき父もたのもしからず離別すでに久し。かたがた筆も及ばず心辨へがたければとどめ畢ぬ。

文永九年太歳壬申五月二十五日　日蓮　華押

日妙聖人

新尼御前御返事

【一】あまのり一袋送り給び畢んぬ。又大尼御前よりあま海苔畏み入りて候。此所をば身延の嶽と申す。駿河の國は南に當りたり、彼國の浮島が原の海際より此の甲斐國波木井

【一】海苔の禮を陳べ身延山の棲居を詳述して、故郷を偲ぶ。

【二】正像末弘の本尊は獨り本化上行の弘むべきものなること。

の郷、身延の嶺へは百餘里に及ぶ。餘の道千里よりも煩はし。富士河と申す日本第一の早き河、北より南へ流れたり。此河は、東西は高山なり、谷深く、左右は大石にして、高き屏風を立て並べたるが如くなり。河の水は筒の中に強兵が矢を射出したるが如し。此河の左右の岸を傳ひ、或は河を渡り、或時は河早く石多ければ、舟破れて微塵となる。斯る所を過ぎ行きて、身延の嶺と申す大山あり。東は天子の嶺、南は鷹取の嶺、西は七面の嶺、北は身延の嶺なり。高き屏風を四つ衝立てたるが如し。峯に上りて見れば、草木森森たり。谷に下つて尋ぬれば、大石連連たり。大狼の音山に充滿し、猨猴の鳴き谷に響き、鹿の妻を戀ふる音憐れしく、蟬の響喧し。春の花は夏咲き、秋の果は冬に實る。偶見るものは山賤が薪を拾ふ姿、時時訪ふ人は昔馴れし同朋なり。彼の商山の四皓が世を脱れし心地、竹林の七賢が跡を隱せし山も斯くやありけむ。峯に上りて若布や生ひたると見候へば、然にては無くして蕨のみ並び立てたり。谷に下りてあま海苔や生ひたると尋ぬれば、誤りてや見るらん、芹のみ茂り伏したり。古郷の事遥に思ひ忘れて候ひつるに、今此のあまのりを見候て、よしなき心思ひ出でて憂くつらし。片海、市河、小湊の磯のほとりにて昔見しあまのりなり。色形味ひも變らず、など我が父母變らせ給ひけんと、方違へなる恨めしさ、涙抑へ難し。此はさて止め候ひぬ。

【二】 但大尼御前の御本尊の御事仰せ遣はされて、思ひ煩ひて候。其の故は、此の御本尊は天竺より漢土へ渡り候ひし數多の三藏、漢土より月氏へ入り候ひし人人の中にも記し

【日本紀】日本書紀のこと。

【法爾】自然といふ意味。

【補陀落山】觀音の住所（Potalaka）の音譯。

置かせ給はず、『西域』、『慈恩傳』、『傳燈錄』等の書どもを開き見候へば、五天竺の諸國の寺寺の本尊を皆記し盡して渡す。又漢土より日本に渡る聖人、日域より漢土へ入る賢者等の記されて候、寺寺の御本尊皆勘へ盡す。日本國最初の寺、元興寺、四天王寺等の無量の寺寺の本尊、『日本紀』と申す書より初めて、多くの日記に殘りなく註して候へば、其の寺寺の御本尊又隱れなし。其の中に此本尊は敢て在まさず。人疑つて云く、「經論に無きか」無ければこそ若干の賢者等は、畫像に書き奉り木像にも作り奉らざるらめと云云。而れども經文は眼前なり、御不審の人人は經文の有無をこそ尋ぬべけれ。前代に作り書かぬを難ぜんと思ふは僻案なり。例せば釋迦佛は悲母孝養の爲めに忉利天に隱れさせ給ひたりしをば、一閻浮提の一切の諸人知る事なし、但だ目連尊者一人此を知れり。此れ又佛の御力也と云云。佛法は眼前なれども、機なければ顯れず、時到らざれば弘まらざる事、法爾の道理也。例せば大海の潮の時に隨つて増減し、上天の月の上下に盈ち虧くるが如し。今此の御本尊は教主釋尊、五百塵點劫より心中に藏めさせ給ひて、世に出現させ給ひても四十餘年、其後又『法華經』の中にも、迹門をば過ぎて『寶塔品』より事起りて、『壽量品』に說き顯はし、『神力品』『屬累品』に事極りて候ひしが、金色世界の文殊師利、兜史多天宮の彌勒菩薩、補陀落山の觀世音、日月淨明德佛の御弟子の藥王菩薩等の諸大士、我も我もと望み給ひしかども叶はず、是等は智慧甚じく才學ある人人とは響けども、未だ日淺し、學も始めたり。末代の大難忍び難かるべし。我五百塵點劫より大地の底に隱し置きたる眞の

弟子あり、此に讓るべしとて、上行菩薩等を『涌出品』に召し出させ給ひて、『法華經』の本門の肝心たる『妙法蓮華經』の五字を讓らせ給ひて、あなかしこ、あなかしこ、『我滅度の後、正法一千年、像法一千年には弘通すべからず、末法の始めに謗法の法師一閻浮提に充滿して、諸天怒りを爲し、彗星は一天に渡り、大地は大波の如く踊らむ、大旱魃、大火大水大風、大疫病、大飢饉、大兵亂等の無量の大災難竝び起り、一閻浮提の人人各各甲冑を着て弓杖を手に握らむ時、諸佛諸菩薩諸天善神等の御力の及ばせ給はざらん時、諸人皆死して無間地獄に墮つること雨の如く繁からん時、此の『五字の大曼荼羅』を身に帶し心に存せば、諸王は國を扶け萬民は難を逃れん、乃至、後生の大火炎を脫るべし。』と、佛記し置かせ給ひぬ。

【三】而るに日蓮、上行菩薩にはあらねども、粗兼ねてこれを知れるは、彼の菩薩の御計らひかと存じて、此の二十餘年が間此を申す。此法門弘通せんには『如來の現在にすら猶ほ怨嫉多し、況んや滅度の後をや。』『一切世間怨多くして信じ難し』と申して、第一の敵は國主竝びに郡鄕等の地頭、領家、萬民等也。此れ又第二第三の僧侶が訴へに就いて、行者を或は惡口し、或は罵詈し、或は刀杖等云云。而るを安房國、東條の鄕は、邊國なれども日本國の中心の如し。其故は天照大神跡を垂れ給へり。昔は伊勢國に跡を垂れさせ給ひてこそありしかども、國王は八幡加茂等を御歸依深くありて、天照大神の御歸依淺かりしかば、大神嗔り恩せし時、源右將軍と申せし人御起請文を以て、會賀の小大夫に仰せ

【三】日本の中心とも言ふべき安房の國に生れて法華經を弘め、地頭より始めて詰難を加ふること。

【源右將軍】賴朝のこと。

【西府】 宇佐のこと。

【助阿闍梨】事蹟不明。清澄山僧の一人にして聖人に歸伏したる人かといふ。

つけて崇重し、伊勢の外宮を此所に御遷し置かせ給ひしかば、大神の御心に叶はせ給ひけるかの故に、日本を手に握る將軍となり給ひぬ。此人東條郷を天照大神の御栖と定めさせ給ふ。されば此の大神は伊勢の國には住しまさず、安房國東條郷に住ませ給ふか。例へば八幡大菩薩は、昔は西府に住せしかども、中比は山城國男山に移り給ひ、今は相州鎌倉鶴岡に栖み給ふ。是れも斯の如し。日蓮は一閻浮提の内、日本國安房國東條郷に始めて此の正法を弘通し始めたり。隨つて地頭敵となる。彼の者已に半分滅びて、今半分あり。領家は僞り愚にて、或時は信じ、或時は破る。不定なりしが、日蓮御勘氣を蒙りし時、已に法華經一を捨て給ひき。日蓮先より見參の序ごとに、「難信難解」と申せしは是れなり。日蓮が重恩の人なれば、扶け奉らん爲に此の本尊を渡し奉るならば、十羅刹定めて偏頗の法師と思召されなん。又經文の如く不信の人に渡し參らせずば、日蓮偏頗はないけれども、尼御前我身の咎をば知らせ給はずして恨みさせ給はんずらん。此の由をば委細に助阿闍梨の文に書きて候。召して尼御前の見參に入れさせ給ふべく候。

【四】御事に於ては、御一味なるやうなれども、御信心は色現はれて候。佐渡の國と申し、此國と申し、度度の御志ありて、弛む景色は見えさせ給はねば、御本尊は渡し參らせて候なり。それも終には如何と恐れ思ふ事、薄氷を踏み太刀に向ふが如し。委しくは又又申すべく候。それのみならず、鎌倉にも御勘氣の時、千人が九百九十九人は墮ちて候人人も、今は世間和らぎ候かの故に、悔ゆる人人も候と申すげに候へども、此はそれ

〔一〕縮遺一一八三頁建治元年（五十四歲）の作。檀越印東兵衞治郎左衞門尉祐信の妻（棧敷屋敷に住みたる故さじき女房といふ由）に與へて、帷の布施を謝したる文。

〔二〕皮を剝ぐうちに佛收めさせ給ふ〕皮を剝いで文字を寫す部類に收めたまふの意なり。

には候るべくもなし。如何にも不便には思ひ參らせ候へども、骨に肉をば替へぬ事にて候へば、『法華經』に相違せさせ給ひ候はん事をば叶ふまじき由、何時までも申し候べく候。恐恐謹言。

二月十六日　　　日蓮　華押

桟尼御前御返事

さじき女房御返事

女人は水の如し、器物に從ふ。女人は矢の如し弓に番はさる。女人は舟の如し梶のまかするに依るべし。而るに女人は夫盜人なれば女人盜人となる。夫王なれば女人后となる。夫善人なれば女人佛になる。今生のみならず後生も夫に依るなり。而るに兵衞左衞門殿は『法華經』の行者なり。たとひ如何なる事ありとも夫の妻なれば『法華經』の女人とこそ佛は知ろし召されて候らんに、我と心を發して『法華經』の御爲めに御帷贈りたびて候。『法華經』の行者に二人あり。聖人は皮を剝いで文字を寫す。凡夫は唯一つ着て候帷などを法華經の行者に供養すれば、皮を剝ぐうちに佛收めさせ給ふなり。此人の帷は『法華經』の六萬九千三百八十四の文字の佛にまいらせさせ給ひぬれば、六萬九千三百八十四の帷也。又六萬九千三百八十四の佛、一一六萬九千三百八十四の文字なれば、此帷も又

此の如し。譬へば春の野の千里ばかりに草の滿て候はんに、少の豆ばかりの火を草一つに放ちたれば一時に無量無邊の火となる。此帷も又此の如し。一つの帷なれども「法華經」の一切の文字の佛に奉るべし。此の功德は父母祖父母乃至無邊の衆生にもおよぼしてん。まして我がいと愛と思ふ男は申すに及ばずと思召すべし思召すべし。

五月二十五日　　　　日蓮　花押

さじき女房御返事

◇縮遺一一八五頁　建治元年（五十四歳）の作。妙一尼の事蹟不明。病める女子を殘して夫に先立たれたる老尼に對して滿腔の同情を寄せ之を鼓舞激勵したる文。

【過去の聖靈】先だちたる夫をいふ

妙一尼御前御消息

夫れ天に月なく日なくば、草木爭でか生ずべき。人に父母あり、一人も缺けば子息等育ち難し。其上過去の聖靈は、或は病子あり、或は女子あり、留め置く母も甲斐甲斐しからず、誰に言ひ託けてか冥途に赴き給ひけん。大覺世尊御涅槃の時歎いて宣はく「我涅槃すべし、但だ心に懸る事は阿闍世王のみ」と。迦葉童子菩薩、佛に申さく「佛は平等の慈悲なり、一切衆生の爲に命を惜み給ふべし。如何に揀別けて阿闍世王一人と仰せあるやらん」と問ひ參らせしかば、其の御返事に曰く「譬へば一人にして七子あり、是の七子の中に一子病に遭へり、父母の心平等ならざるにはあらず、然れども病子に於ては心則ち偏へに重きが如し」等云云。天台の「摩訶止觀」に、此經文を釋して云く「譬へば七子の

【頻婆舍羅王】摩揭陀國王にして阿闍世の父。

【給ひたりしかば】給ひたりしならばの意。

父母平等ならざるにあらず、然れども病者に於て心則ち偏へに重きが如し。」等云云とこそ、佛は答へさせ給ひしか。文の心は、人には數多の子あれども、父母の心は病する子にありとなり。佛の御爲には、一切衆生は皆子なり。其の中罪深くして世間の父母を殺し、佛經の敵となる者は、病みぬる子の如し。然るに阿闍世王は摩竭提國の主なり。我が大檀那たりし頻婆舍羅王を殺し、我が敵となりしかば、天も見捨てて日月に變出で、地も頂かじと震ひ、萬民皆佛法に背き、他國より摩竭提國を攻む。此等は偏へに惡人提婆達多を師とせる故なり。結句は今日より惡瘡身に出て、三月の七日無間地獄に堕つべし、これが悲しければ、我涅槃せん事心に懸るといふなり。我阿闍世王を救ひなば、一切の罪人阿闍世王の如しと歎かせ給ひき。然るに聖靈は或は病子あり、或は女子あり。我捨てて冥途に往きなば、枯れたる朽木のやうなる老尼が一人留りて、此の子どもを如何に心苦しかるらんと歎かれぬらんと覺ゆ。

彼の心の方方には、又日蓮が事心に懸らせ給ひけん。佛語空しからざれば「法華經」弘まらせ給ふべし。それに就ては「此御房は如何なる事もありて、いみじくならせ給ふべし」と思しつらんに、云ふ效なく流し失せしかば「如何にや、如何にや、「法華經」十羅刹は。」とこそ思はれけんに、今までだにも存生へ給ひたりしかば、日蓮が許りて候ひし時、如何に喜ばせ給はん。又言ひし事空しからずして、大蒙古國も寄せて、國土も危をしげになりて候へば、如何に悦び給はん。これは凡夫の心なり。「法華經」を信ずる人は冬の如し、冬

は必ず春となる、未だ昔より聞かず見ず、冬の秋と返れる事を、未だ聞かず、「法華經」を信ずる人の凡夫となる事を、經文には「若し法を聞くこと有らん者は、一として成佛せずといふこと無けん」と說かれて候。

故聖靈は「法華經」に命を捨てて在しき、僅の身命を支へし處を、「法華經」の故に召されしは、命を捨つるにあらずや、彼の雪山童子の半偈の爲に身を捨て、藥王菩薩の臂を燒き給ひしは、彼は聖人なり、火に水を入るるが如し、此は凡夫なり、紙を火に入るるが如し、此を以て案ずるに、聖靈は此功德あり、大月輪の中か、大日輪の中か、天鏡を以て妻子の身を浮べて、十二時に御覽あるらん、設ひ妻子は凡夫なれば見ず聞かず、譬へば耳聾たる者の雷の聲を聞かず、目潰れたる者の日輪を見ざるが如し、御疑ひあるべからず、定めて御守りとならせ給ふらん、其上さこそ御渡りあるらめ、力あらば訪ひ參らせんと思ふ處に、衣を一つ給ふ條、存外の次第なり、「法華經」はいみじき御經にて在すれば、若し今生に生きある身ともなり候ひなば、尼御前の生きて在しませ、若は草の蔭にても御覽あれ、幼き公達等をば顧み奉るべし、佐渡の國と申し、これと申し、下人一人附けられて候は、何時の世にか忘れ候ふべき、此の恩はかへりて仕へ奉り候ふべし。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、恐恐謹言。

五月　日　　　日蓮　花押

妙一尼御前

〔◇〕縮遺一三二四頁　建治元年（五十四歳）の作。池上兵衛志宗長に與へて兄宗仲と心を一にし、親に勘當せらるとも法華經を捨つべからずと、激勵したる文。

【辨殿】日昭上人のこと。

【右衛門志】兵衛志の兄宗仲。

【殿】兵衛志をいふ。

兵衛志殿御返事

方方の物、夫二人を以て賜り給びて候。其の志、辨殿の御文に申すげに候。さては何よりも御爲に第一の大事を申し候なり。正法、像法の時は、世も未だ衰へず、聖人賢人も續き生れ候ひき。天も人を守り給ひき。末法になり候へば、人の貪欲やうやく過ぎ候て、主と臣と、親と子と、兄と弟と、諍論暇なし。況て他人は申すに及ばず、是によりて天も其國を棄つれば、三災七難、乃至一二三四五六七の日出でて、草木枯れ失せ、小大河も盡き、大地は炭の如く起り、大海は油の如くになり、結句は無間地獄より炎出でて上梵天まで火炎充滿すべし。是體の事出でんとて、漸く世間は衰へ候なり。皆人の思ひて候は、父には子隨ひ、臣は君に適ひ、弟子は師に違すべからずと云云。賢き人も賤き者も知れる事なり。然れども貪欲、瞋恚、愚痴と申す酒に醉ひて、主に敵し、親を輕しめ、師を侮る、常に見えて候。但し師と主と親とに隨ひて、惡き事を諫めば、孝養となる事は、先の御文に書き付けて候ひしかば、常に御覧あるべし。但此度右衛門志殿重ねて、親の勘當あり。殿の御前に、是にて申せしが如く、一定勘當あるべし。「兵衛志殿覺束なし、御前構へて御心得あるべし」と申して候ひしなり。今度は殿は一定落ち給ひぬと覺ゆるなり。落ち給はんを如何にと申す事は努努候はず、但地獄にて日蓮を恨み給ふ事なかれ、知り候

【左衛門大夫】池上兄弟の親康光。
【殿】兵衛志のこと。
【和殿原】貴邊等の意。

まじきなり。千年の苅萱も一時に灰となる、百年の功も一言に破れ候は、法の理なり。左衛門大夫殿は今度『法華經』の敵に定まり給ふと見えて候。右衛門大夫志殿は、今度『法華經』の行者になり候はんずらん。殿は現前の計なれば親に附き給はんずらん。物狂はしき人人は、これを讃め候べし。宗盛が親入道の惡事に隨ひて篠原にて頸を切られし、重盛が隨はずして先に死せし、何れか親の孝人なる。『法華經』の敵になる親に隨ひて、一乘の行者なる兄を捨てば、親の孝養となりなんや。詮ずる處一筋に思ひ切つて、兄と同じく佛道を成じ給へ。親父は妙莊嚴王の如し、兄弟は淨藏、淨眼なるべし。昔と今はかはるとも、『法華經』の理は違ふべからず。當時も武藏入道は若干の所領所從等を捨てて遁世あり。況て和殿原が僅の事を諂ひて、心薄くて惡道に墮ちて、日蓮恨みさせ給ふな。返す返す今度殿に墮つべしと覺ゆるなり。此程志ありつるが、引換へて惡道に墮ち給はん事がふびんなれば申すなり。百に一つ千に一つも日蓮が義に附かんと思さば、親に向つて言切り給へ。「親なれば如何にも順ひ參らせ候べきが、『法華經』の御敵になり給へば、附き參らせては不孝の身となりぬべく候へば、捨て參らせて兄に附き候なり。兄を捨てられ候はば、兄と一同と思すべし」と申し切り給へ。少しも恐るる心なかれ。過去遠遠劫より『法華經』を信ぜしかども、佛にならぬ事是れなり。潮の干ると滿つと、月の出づると入ると、夏と秋と、冬と春との境には、必ず相違する事あり。凡夫の佛になる、又斯の如し。必ず三障四魔と申す障出で來れば、賢者は悦び、愚者は退く是れなり。此事は

【字註】 娑羅雙樹

態とも申し、又便宜にと思ひつるに、御使の宿所し、随ひ給ふたらばとて此の御使はあらじと思ひ候へば、若しやと申すなり。佛になり候事は、此の須彌山に針を立てて、彼の須彌山より絲を放ちて其の絲の直に渡りて針の穴に入るよりも難し。況や逆さまに大風の吹き迎へたらんは、いよ〳〵難き事ぞかし。經に云く「億億萬劫より不可議に至る、時に、乃し是の法華經を聞くことを得。億億萬劫より不可議に至る、諸佛世尊、時に是經を說き給ふ。是の故に、行者佛の滅後に於て、是の如き經を聞いて、疑惑を生ずること勿れ」等云云。此の經文は『法華經』二十八品の中に殊に珍し。『序品』より『法師品』に至るまで、等覺已下の人天四衆八部、其數ありしかども、佛は但だ釋迦如來一佛なり。重くて輕き邊もあり。『寶塔品』より『囑累品』に至るまでの十二品は、殊に重きが中の重きなり。其故は釋迦佛の御前に、多寶の寶塔涌現せり。月の前に日の出でたるが如し。又十方の諸佛は樹下に在します、十方世界の草木の上に火を燃せるが如し。此の御前にて說せられたる文なり。『涅槃經』に云く「昔無數無量劫より來、常に苦惱を受く、一一の衆生の一劫の中に積む所の身の骨は王舍城の毘富羅山の如く、飲む所の乳汁は四海の水の如く、身より出す所の血は四海の水より多く、父母兄弟妻子眷屬の命終に哭泣して出す所の涙は四大海より多く、地の草木を盡して四寸の籌と爲し、以て父母を數ふも、亦盡すこと能はじ」云云。此の經文は佛最後に雙林の木に臥して誡め給ひし御言なり。尤も心を留むべし。無量劫より已來、生む所の父母は、十方世界の大地の草木を四寸に切りて數ふとも、足る

【持齋】持律者のこと。

【雨火房】良觀房の異稱。

【守殿】北條執權を指す。

べからずと申す經文なり。此等の父母には値ひしかども、『法華經』には未だあはず。されば父母は儲け易し、『法華經』はあひ難し。今度あひ易き父母の言を背きて、あひ難き『法華經』の友に離れずば、我が身佛になるのみならず、背きし親をも導きなん。例せば悉達太子は淨飯王の嫡子なり國をも讓り、位に即けんと思して、已に御位に即け參らせたりしを、御心を破りて夜中城を逃出でさせ給ひしかば、不孝の者なりと恨みさせ給ひしかども、佛にならせ給ひては、先づ淨飯王、摩耶夫人をこそ導かせ給ひしか。親といふ親の、世を捨てて佛になれと申す親は一人もなきなり。是は兎に寄せ角に寄せて、和殿原を持齋、念佛者等が作り落さん爲に親に勸め嚇すなり。雨火房は百萬返の念佛を勸めて、人人の內を塞きて、『法華經』の種を斷たんと謀ると聞くなり。極樂寺殿はいみじかりし人ぞかし。念佛者等に誑らかされて、日蓮を怨ませ給ひしかば、我身といひ、其の一門皆亡びさせ給ふ。唯今は越後の守殿一人ばかりなり。雨火房を御信用ある人は、いみじきと御覽あるか。名越の一門の善光寺、長樂寺、大佛殿立てさせ給ひて、其の一門の成らせ給ふ事を見よ。又守殿は日本國の主にて在するが、一閻浮提の如くなるかたきを得させ給へり。和殿兄を捨てて兄が後を讓られたりとも、千萬年の榮え難かるべし。知らず、又僅の程にや。如何が此の世ならんずらん。能く能く思ひ切りて、一向に後世を賴まるべし。斯う申すとも、徒の文なるべしと思へば、書くも懶けれども、後の思出に記し申すなり。恐恐謹言。

十一月二十日　日蓮　花押

◎縮遺一三七〇頁　建治二年（五十五歳）の作。清澄寺の大衆に與へて、諸宗特に眞言宗の非を擧げ警告を加へたる文。

【一】新春の慶賀を述ぶると共に書籍の供覽を請ふ。

【二】眞言宗の非を擧ぐ。

兵衛志殿御返事

清澄寺大衆中

【一】新春の慶賀自他幸甚幸甚、去年より來らず如何、定めて仔細あらんか。抑參詣を企て候へば伊勢公の御房に「十住心論」・「秘藏寶鑰」・「二教論」等の眞言の疏を借用候へ。かくの如きは眞言師蜂起の故これを申す。又「止觀」の第一第二、御隨身候へ。「東春」・「輔正記」なんどや候らん。圓智房の御弟子觀智房の持ちて候なる「宗要集」借して給び候へ。其れのみならず「文句」の候、由大大事に候ひし也。早早に返すべきの由申させ給ひ候へ。

【二】今年は殊に佛法の邪正糺さるべきの年歟。淨顯の御房・義城房等には申し給ふべし。日蓮が度度殺害せられんとし、並に二度まで流罪せられ、頸を刎ねられんとせし事は別に世間の失は候はず。生身の虛空藏菩薩より大智慧を給はりし事ありき。「日本第一の智者となし給へ」と申せし事不便とや思食けん、明星の如くなる大寶珠を給ひて右の袖に請取候ひし故に、一切經を見て候ひしかば八宗並に一切經の勝劣ほぼこれを知りぬ。其上眞言宗は「法華經」を失ふ宗也。是は大事なれば、まづ序文に禪宗と念佛宗の僻見を責めて見んと思ふ。其故は月支漢土の佛法の邪正は且らくこれを置く。日本國の「法華經」の正義を失つて、一人も無く人の惡道に陷る事は、眞言宗が影の身に隨ふが如く、山山寺寺ごとに法華宗に眞

【三】諸宗及び國家諸難を述ぶ。

言宗を加へて、而も法華經に十八道を副へ、觀法に大日經を加へ、又眞言宗の學者の邪師を以て眞言宗を正とし、「法華經」を傍とせし故に、眞言經と申す邪經の内の「華嚴」「涅槃」にも劣れるを、弘法之れに迷惑して或は「法華經」に勝れ、或は勝れたりなんど申して佛を開眼するにも「大日經」の印眞言を以て開眼供養する故に日本國の木畫の諸像皆無魂無眼の者となりぬ。結句は天魔入り替りて檀那を亡す佛像となりぬ。王法の盡きんとするこれなり。此惡眞言鎌倉に來りて又日本國を亡さんとす。其上禪宗、淨土宗なんと申すは、又云ふばかりなき僻見の者也。

【三】 これを申さば必ず日蓮が命と成るべしと存知せしかども、虚空藏菩薩の御恩を報ぜんが爲めに建長五年四月二十八日、安房の國東條の郷清澄寺道善之房持佛堂の南面にして、淨圓房と申す者並に少少の大衆に是を申し始めて、其後二十餘年が間退轉なく申す。或は處を追ひ出され、或は流罪等、昔は聞く不輕菩薩の杖木等を、今は見る日蓮が刀劍に當る事を。日本國の有智無智上下萬人の云く「日蓮法師は古の論師人師大師先德に勝るべからず」と。日蓮此不審を晴さんが爲めに正嘉文永の大地震、大長星を見て勘へて云く、「我朝に二つの大難あるべし、所謂自界叛逆難他國侵逼難なり。自界は鎌倉の權太夫殿の御子孫同士打出來すべし。他國侵逼難は四方よりあるべし。其中に西より強くせむべし。是偏に佛法が一國擧て邪なる故に梵天帝釋の他國に仰せ付けて責めらるるなるべし。日蓮をだにも用ひぬ程ならば、將門、純友、貞任、利仁、田村の樣なる將軍の百千萬人有りとも叶ふ

【問】清澄山の大衆に對して警告す

【領家】東條の領主。

べからず。是をことならずば眞言宗と念佛宗等の僻見をば信ずべし」と申し弘め候ひき。

【四】就中清澄山の大衆は日蓮を父母にも三寶にも思ひ落させ給はば、今生には貧窮乞食の者とならせ給ひ、後生には無間地獄に墮させ給ふべし。所以者何、東條左衛門景信が惡人として清澄の飼鹿を狩取り、房房の法師等を念佛者の所從にしなさんとせしに、日蓮敵をなして、領家の方人となり、「清澄・二間の二箇の寺、東條が方に付くならば日蓮「法華經」を捨てん」と精誠の起請を書て、日蓮が御本尊の手に結付けて祈りて、一年が內に兩寺は東條の手をはなれ候ひしなり。此事は虛空藏菩薩も争か捨てさせ給ふべき。大衆も日蓮を心えず思はれん人人は天に捨てられ奉らざるべしや。かう申せば愚癡の者は「我をのろふ」と思ふべし。後生に無間地獄に墮ちんが不便さに申すなり。領家の尼御前は女人也。愚癡なれば人人のいひ嚇せばさこそとましまし候はめ。されど恩を知らぬ人となりて後生に惡道に墮ちさせ給はん事こそ不便に候へ。されども又一には日蓮が父母等に恩をかほらせたる人なれば如何にもして後生を扶け奉らむとこそ祈り候へ。「一法華經」と申す經は卽の諸も敬はず、我は過去に在世無量劫より此の佛なり。又舍利弗等は未來に佛になるべしと。これを信ぜざらん者は無間地獄に墮つべし。我のみならず申すにはあらず。多寶佛も證明し、十方の諸佛も舌を出してから御世尊、地涌千界の菩薩、文殊、觀音、梵王、帝釋、日月、四天、十羅刹女も「法華經」の行者を守護し給ふべしと說かれたり。されば佛になる道は此の外に樣なし。過去の事、未來の事を申し當てて候ふ事の「法華經」の行者にては候也。日蓮は

【[illegible]】[illegible]

【佐渡公】六老僧の第四日向上人のこと。

【ノ】縮遺一三八四頁 建治二年（五十五歳）の作。富木氏（入道して常忍といふ）に與へて其持經を忘れたるを詰り、訓誡を加へ併せて其孝養を賞したる文。

【槃特尊者】須梨槃特のこと。

【踟蹰】迷ふこと。

未だ験を見ず、祈を作さず、一切經を以て[illegible]、若し[illegible]は各各を不知恩の人たれば無間地獄に堕ち給ふべしと申すは[illegible]べき歟、今は[illegible]を御覽せ上、日本國は當時は壹岐對馬の様に[illegible]んずる也。[illegible]安房の國に蒙古が寄せて責め落さん時、日蓮が申せし事の[illegible]と申すまじきに、[illegible]の御口すくみて無間地獄に墮ちん事不便也不便也。

正月十一日　　日蓮　花押

安房國東條郡清澄寺大衆中

一、此の文は[illegible]上、虚空藏菩薩の御前にして大衆ごとに讀み聞かせ給

忘持經事

忘れ給ふ所の御持經、追て修行者に持たせて之を遣はす。魯の哀公云く「人好く忘るる者有り、移宅に乃ち其妻を忘れたり。」云云。孔子曰く「又好く忘るること此より甚しき者あり、桀紂の君は乃ち其身を忘れたり」等云云。夫れ槃特尊者は名を忘る。之れ閻浮第一の好く忘るる者なり。今常忍上人は持經を忘る、日本第一の好く忘るる仁か。大通結縁の輩は衣珠を忘れ、三千塵劫を經て貧路に踟蹰し、久遠下種の人は良藥を忘れ、五百塵

【羝羊】羊のこと愚者に譬ふ。

【下州】下總國。

點を送て三途の嶮地に顛倒せり。今眞言宗、念佛宗、禪宗、律宗等の學者等は佛陀の本意を忘失し、未來無數劫を經歷して阿鼻の火坑に沈淪せん。此より第一の好く忘るる者あり。所謂る今の世の天台宗の學者等と持經者等との日蓮を誹謗し念佛者等を扶助する是れなり。親に背いて敵に付き刀を持ちて自ら破る。此等は且く之を置く、

夫れ常啼菩薩は東に向つて般若を求め、善財童子は南に向つて華嚴を得、雪山の小兒は半偈に身を投げ、樂法梵志は一偈に皮を剝ぐ。此等は皆上聖大人なり。其迹を檢するに地住に居し、其本を尋ぬれば等妙なるのみ。身は八熱に入つて火坑三昧を得、心は八寒に入つて清涼三昧を證し、身心共に苦無し。譬へば矢を放ちて虚空を射、石を握つて水に投ずるが如し。

今常忍貴邊は末代の愚者にして、見思未斷の凡夫なり。身は俗に非ず道に非ず禿居士、心は善に非ず惡に非ず羝羊のみ。然りと雖も一人の悲母堂に有り。朝に出て主君に詣で、夕に入つて私宅に返り、營む所は悲母の爲め、存する所は孝心のみ。而るに去月下旬の比生死の理を示さんが爲に黃泉の道に趣く、此に貴邊と歎いて言く、齡既に九旬に及び、子を留めて親の去ること次第たりと雖も、倩ら事の心を案ずるに、去つて後來るべからず、何れの月日をか期せん。二母國に無し、今より後誰をか拜す可き。離別忍び難きの間、舍利を頸に懸けて足に任せて大道に出で、下州より甲州に至る。其の中間、往復千里に及ぶ。國々皆飢饉して、山野に盜賊充滿し、宿々粮米乏少なり。我が身羸弱にして所從亡きが若

【[illegible]】[illegible]

【一】縮遺一三八六頁　建治二年（五十五歳）の作。安房の故舊光日房に與へて、文永五年蒙古より牒状來り、安國論の豫言の適中を以て上下にその恚慢の破責攻撃をせし爲、怨を買ひ龍口の法難となり佐渡流罪となり遂に身延隠棲の生活までの追懐をものせる次。

【二】蒙古來書の豫言適中を叙ぶ。

く、牛馬も合期せず、峨峨たる大山重重として、漫漫たる大河多多なり。高山に登れば頭を天に挿み、幽谷に下れば足を雲に踏む。鳥に非ざれば渡り難く、鹿に非ざれば越え難し。眼眩き足冷ゆ。羅什三藏の葱嶺、役の優婆塞の大峰も只今なりと云云。然る後深洞に尋ね入りて一の庵室を見る。法華讀誦の音青天に響き、一乘談義の言山中に聞ゆ。案内に觸れて室に入り、教主釋尊の御寶前に母の骨を安置し、五體を地に投げ、合掌して兩眼を開き尊容を拜して、歡喜身に餘り、心の苦み忽ち息む。我が頭は父母の頭、我が足は父母の足、我が十指は父母の十指、我が口は父母の口なり。譬へば種子と菓子と、身と影との如し。教主釋尊の成道は淨飯、摩耶の得道、吉占師子、青提女、目犍尊者は同時の成佛なり。是の如く觀ずる時、無始の業障忽ちに消え、心性の妙蓮忽ちに開き給ふか。然して後に隨分佛事を爲し、事故無く還り給ふ云云。恐恐謹言。

富木入道殿

種種御振舞御書

（與光日房書）

【一】去ぬる文永五年後の正月十八日、西戎大蒙古國より日本國を襲ふべきよし牒状をわたす。日蓮が去ぬる文應元年太歳庚申に勘へたりし「立正安國論」すこしも違はず符合し

【白樂天】唐の詩人、樂府々詩を作りて時事を諷諫す 【佛の未來記】佛の豫言書。 【權狀】論功行賞

【二】忠言耳に逆へる公儀の非道を叙す。

【上】北條執權を指す。

【これも彼が云云】日本も古例の殷や吳の如く、忠言を用ひぬ爲めに亡びはせずやと、

ぬ。此書には白樂天が『樂府』にも越え、佛の『未來記』にもおとらず、末代の不思議、何事かこれにすぎん。賢王聖主の御世ならば、日本第一の權狀にも行はれ、現身に大師號もあるべし。定んで御たづねありて、軍の僉議もいひあはせ、調伏なんども申付けられぬらんと思ひしに。其義なかりしかば、其年の末十月に十一通の狀をかきて、方方へおどろかし申す。

【二】國に賢人なんども有るならば、不思議なる事かな、これは偏にただ事にはあらず、天照大神、正八幡宮の僧に託いて、日本國のたすかるべき事を御計らひのあるかとこそ思はれべきに、さは無くて、或は使を惡口し、或はあざむき、或はとりも入れず、或は返事もなく、或は返事をなせども上へも申さず。これ偏にただ事にはあらず。設ひ日蓮が身の事なりとも、國主となり政事をなさん人人は取りつぎ申したらんには、政道の法ぞかし。いはうやこの事は上の御大事いで來らむのみならず、各各の身にあたりて大なるなげき出來すべき事ぞかし。而るを用ゐる事こそなくとも、惡口まではあまりなり。此ひとへに日本國の上下萬人、一人もなく『法華經』の強敵となりて、年久しくなりぬれば、大禍のつもり、大鬼神の各各の身に入る上、蒙古國の牒狀に正念をぬかれて狂ふなり。例せば殷の紂王に比干といひし者諫めをなせしかば、用ゐずして胸を裂れ、周の文武王に亡ぼされぬ。吳王は伍子胥がいさめを用ゐず、自害をせしかば、越王勾踐の手にかかる。これも彼が如くなるべきかと、いよいよふびんに覺えて、名をも惜まず命をもすてて、強盛に申し張り

【所領】知行の領地。

【三】迫害、王難に對する自己の覺悟をのべて弟子等を激勵せしことを述ぶ。

【常啼】師の曇無竭菩薩を供養する爲に身を賣る。

【退轉なく】退くことなく。

しかば、風大なれば波大なり、龍大なれば雨たけきやうに、いよいよあだを爲し、ますます惡みて、御評定に詮議あり。「頸をはぬべきか、住家を追ふべきか、弟子檀那等をば、所領ある者は所領を召して頸を切り、或は籠にてせめ、或は遠流すべし」等云云。

【三】日蓮悦んで云く「本より存知の旨なり。雪山童子は半偈のために身をなげ、常啼菩薩は身をうり、善財童子は火に入り、樂法梵士は皮をはぐ。藥王菩薩は臂をやき、不輕菩薩は杖木をかうむり、獅子尊者は頭をはねられ、提婆菩薩は外道に殺さる。此等はいかなりける時ぞと尋ぬれば、天台大師は『時に適ふ而已』と說かれ、章安大師は『取捨宜しきを得て、一向にす可からず』と記され、『法華經』は一法なれども、機にしたがひ時によりて其行萬差なるべし。佛記して云く、我滅後正像二千年すぎて、末法の始に、此『法華經』の肝心題目の『五字』計りを弘めんもの出來すべし。其時惡王惡比丘等大地微塵より多くして、或は大乘、或は小乘等をもて競はんほどに、此題目の行者にせめられて、在家の檀那等をかたらひて、或は罵り、或はうち、或は牢に入れ、或は所領を召し、或は流罪し、或は頸をはぬべし、などいふとも、退轉なくひろむる程ならば、あだを爲す者は、國主は同士打をはじめ、餓鬼の子を喰ふが如く、後には他國よりせめらるべし。これ偏へに梵天、帝釋、日月、四天等の、『法華經』の敵なる國を他國より責めさせ給ふなるべしと說かれて候ぞ。各各我弟子と名のらん人人は、一人も臆しおもはるべからず。親をおもひ、妻子をおもひ、所領をかへりみることなかれ。無量劫よりこのかた、親子のため、所領の

ために命をすてたる事は、大地微塵よりも多し。『法華經』の故には未だ一度もすてず。『法華經』をば若干行ぜしかども、かかる事出來せしかば、退轉してやみにき。譬へば湯をわかして水を入れ、火を切るに遂げざるが如し。各各思ひ切り給へ。此身を『法華經』に替ふるは、石に金をかへ、糞に米をかふるなり。佛滅後二千二百二十餘年が間、迦葉、阿難等、馬鳴、龍樹等、南岳、天台等、妙樂、傳敎等だにも未だひろめ給はぬ『法華經』の肝心、諸佛の眼目たる『妙法蓮華經』の五字、末法の始に一閻浮提にひろまらせ給ふべき瑞相に、日蓮さきがけしたり。わたう共二陣三陣つづきて、迦葉、阿難にもすぐれ、天台、傳敎にもこえよかし。わづかの小島の主等が威さんに恐れては、閻魔王の責をばいかがすべき。佛の御使と名のりながら、臆せんことは無下の人人なり」と、申しふくめぬ。

【四】さありし程に念佛者、持齋、眞言師等、自身の智は及ばず、訴狀も叶はざれば、上﨟尼御前たちにとりつきて、種種に搆へ申す。「故最明寺入道殿、極樂寺入道殿を無間地獄に墮ちたりと申し、建長寺、壽福寺、極樂寺、長樂寺、大佛寺等を燒きはらへと申し、道隆上人、良觀上人等の頸をはねよと申す。御評定に何となくとも、日蓮が罪禍まぬがれ難し。但し上件の事一定申すか」と、召出して尋ねらるべしとて、召出されぬ。奉行人の云く、「上への仰せかくの如し」と申せしかば、「上件の事一言もたがはず申す。但し最明寺殿、極樂寺殿を地獄といふ事はそらごとなり。此法門は最明寺殿、極樂寺殿御存生の時

【無下の人人】不甲斐なき人人。
【四】糾問及び諌諍を運ぶ。
【上﨟尼御前】身分高き幕府役人の内室や後家尼御前。
【故最明寺】時頼。
【極樂寺】重時。
【御評定に云云】評議するまでもなく。

【太政入道】平清盛。

【五】御書集註の狀。

【了行】建長三年幕府の政權を謀りし僧。

【大夫律師】駿河前司義村の子、僧良賢、北條氏に叛き建長元年捕へらる。

【九卷の法華經】一部十卷中第五卷を少輔房取出せし殘り九卷あり。

との中さし事なり。詮ずるところ、上件の事ども此國をおもひて申す事なれば、世を安穩にたもたんと思さば、彼法師ばらを召合せてきこしめせ。さなくして彼等に代りて理不盡に失に行はるる程ならば、國に後悔あるべし。日蓮御勘氣をかほらば、佛の御使を用ひぬになるべし。梵天、帝釋、日月四天の御咎ありて、遠流死罪の後百日一年三年七年が内に、自界叛逆難とて、此御一門同士打はじまるべし。其後は他國侵逼難とて、四方よりことに西方よりせめられさせ給ふべし。其時後悔あるべし」と、平左衛門尉に申付けしかども、太政入道の狂ひしやうに、少しも憚かる事なく、物にくるふ。

【五】去ぬる文永八年辛未九月十二日御勘氣をかうむる。其時の御勘氣のやうも常ならず、法にすぎて見ゆ。了行が謀反を起し、大夫律師が世を亂さんとせしを召捕られしにも過ぎたり。平左衛門尉大將として數百人の兵者に胴丸着せて、烏帽子かけして、眼をいからし聲を荒うす。大體事の心を案ずるに、太政入道の世をとりながら國を破らんとせしに似たり。ただ事とも見えず。日蓮これを見て思ふやう「日頃月頃思ひまうけたりつる事はこれなり。幸なるかな、「法華經」のために身をすてん事よ。臭き頭を刎られたらば、砂に金をかへ、石に珠を買へるがごとし」。さて平左衛門尉が一の郎從、少輔房と申す者走りよりて、日蓮が懷中せる「法華經」の第五の卷を取出して、面を三度さいなみ、散散に打散す。又九卷の「法華經」を兵者ども打ちらして或は足にふみ、或は身にまとひ、或は板敷、たたみ等、家の二三間に散らさぬ所もなし。日蓮大高聲を放ちて申す。「あら面白や、

【六】第二の國諫のこと。

【八齋戒】小乘の戒。俗の男女の戒。中に不歡舞戲樂の戒あり。

【方人しかなへず】味方し切れず。

【七】八幡社頭の諫言のこと。

平左衛門尉が物に狂ふを見よ、殿ばら、但今日本國の柱を倒す」と呼はりしかば上下萬人あわてて見えし。日蓮こそ御勘氣をかほれば、臆して見ゆべかりしに、さは無くしてこれは、僻事なりとや思ひけん、兵者どもの色こそ變じて見えしか。

【六】十二日の夜、眞言宗の失、禪宗念佛等の失、良觀が雨ふらさぬ事、つぶさに平左衛門尉にいひ聞かせてありしに、或はどつと笑ひ、或は怒りなんどせし事どもは、しげければ記さず、詮ずる所は六月十八日より七月四日まで、良觀が雨の祈して、日蓮に支へられて降らしかね、汗を流し涙のみ降して、雨ふらざりし上、逆風ひまなくてありし事、三度まで使をつかはして、「一丈の堀を越えざるもの、十丈二十丈の堀を越ゆべきか。和泉式部は色好みの身にして、八齋戒にせいせる歌をよみて雨をふらし、能因法師が破戒の身として、歌をよみて天雨をふらせしに、いかに二百五十戒の人人百千人あつまりて、一七日、二七日せめさせ給ふに雨のふらざる上、大風は吹き候ぞ。これを以て存ぜさせ給へ、各各の往生は叶ふまじきぞ」と責められて、良觀が泣きし事。人人につきて讒せし事。一一に申せしかば、平左衛門尉等方人しかなへずして詰り伏しし事どもは繁ければ書かず。

【七】さて十二日の夜、武藏守殿の預りにて、夜半に及び頸を切らんがために、鎌倉をいでしに、若宮小路に打出て、四方に兵者の打包みてありしかども、日蓮云く、「各各騷がせ給ふな、別の事はなし。八幡大菩薩に最後に申すべき事あり」とて、馬よりさし下りて

高聲に申すやう「いかに八幡大菩薩はまことの神か、和氣の淸麿が頸を刎られんとせし時は、長一丈の月と顯はれさせ給ひ、傳教大師の『法華經』を講ぜさせ給ひし時は、紫の袈裟を御布施にさづけさせ給ひき。今日蓮は日本第一の『法華經』の行者なり。其上身に一分のあやまち無し。日本國の一切衆生の『法華經』を謗じて、無間大城におつべきを助けんが爲に申す法門なり。又大蒙古國より此國をせむるならば、天照大神、正八幡とて安穩におはすべきか。其上釋迦佛『法華經』を說き給ひしかば、多寶佛十方の諸佛菩薩あつまりて、日と日と、月と月と、星と星と、鏡と鏡とを竝べたるが如くなりし時、無量の諸天竝に天竺漢土日本國等の善神聖人あつまりたりし時、各各『法華經』の行者に疎略なるまじき由の誓狀まゐらせよとせめられしかば、一一に御誓狀を立てられしぞかし。さるにては日蓮が申すまでもなし、急ぎいそぎこそ誓狀の宿願を遂げさせ給ふべきに、いかに此處には落ちあはせ給はぬぞ」と、高高と申す。さて最後には「日蓮今夜頸切られて靈山淨土へ參りてあらん時は、まづ天照大神正八幡こそ起請を用ゐぬ神にて候ひけれと、さしきりて教主釋尊に申上げ候はんずるぞ。痛しとおぼさば急ぎいそぎ御計らひあるべし」とて、また馬にのりぬ。

【八】由井の濱に打出で御靈の前にいたりて又云く「しばし殿ばら、これに告ぐべき人あり」とて、中務三郎左衛門尉と申す者のもとへ、熊王と申す童子をつかはしたりしかば、急ぎいでぬ。「今夜頸切られにまかるなり、この數年が間願ひし事これなり。此娑婆世

【起請】誓を立てること。

【八】龍口刑場の變事とその前後。【御靈の前】鎌倉御靈社の略稱。俗に權五郎社といふ。平景政の廟。

【召人】　囚人。罪科ある人。
【先打】　道案内。

畜にして、雉となりし時は鷹につかまれ、鹿となりし時は獵に食はれ、或は妻に、子に、故に身を失ひし事大地微塵よりも多し。「法華經」の御爲には一度も失ふことなし。されば日蓮貧道の身と生れて、父母の孝養心に足らず、國の恩を報ずべき力なし。今度頭を「法華經」に奉りて、其功德を父母に回向し、其餘をば弟子檀那等に配當べしと申せし事これなり」と申せしかば、左衞門尉兄弟四人、馬の口にとりつきて、腰越龍の口につきぬ。
「此にてぞあらんずらん」と思ひしところに、案にたがはず兵士どもうちさはぎしかば、左衞門尉申すやう、「只今なり」と泣く。日蓮申すやう「不覺の殿ばらかな、これ程の悅をば笑へかし。いかに約束をば違へらるるぞ」と申せし時、江の島の方より月の如くなる光りもの、鞠のやうにて、辰巳の方より戌亥の方へ光りわたる。十二日の夜の明昧、人の面も見えざりしが、物の光り月夜のやうにて、人の面も皆みゆ。太刀取目くらみ倒れ臥し、兵士共おぢ怖れ興さめて、一町許り馳せ退き、或は馬より下りてかしこまり、或は馬の上にて蹲踞るものあり。日蓮申すやう「いかに殿ばら、かかる大禍ある召人には遠のくぞ、近く打ちよれや、打よれや」と、高高と呼はれども、急ぎ寄る人もなし。さて夜明けなばいかにいかに、頸切るべくば急ぎ切るべし、夜明けなば見苦しかりなん」と、勸めしかども、兎角の返事もなし。はるか計りありて云く、「相模の依智と申すところへ入らせ給へ」と申す。「此は道知る者なし、先打すべし」と申せども、打つ人もなかりしかば、さて憩ふほどに、或る兵士の云く、「それこそ其の道に候へ」と申せしかば、道にまかせて

【九】依智にて命を待つこと。

【いそぎあやなき事】もしも、早まりしことにてもありてはと。

【一〇】星降りの奇瑞のこと。

行く。午の時ばかりに、依智と申すところへ行き着きたりしかば、本間の六郎左衛門が家に入りぬ。酒取りよせて、兵士共に飲ませてありしかば、各帰るとて、頭をうなだれ手を合せて申すやう「この程はいかなる人にてや在すらん、我等がたのみて候阿弥陀仏をそしらせ給ふと承れば、にくみ参らせて候ひつるに、まのあたり拝み参らせ候ひつる事どもを見候へば、たふときに、年比申しつる念仏は捨て候ふ」とて、火打袋より珠数とり出してすつる者もあり「今は念仏申さじ」と誓状をたつる者もあり。六郎左衛門が郎従等番をば受取りぬ。左衛門尉もかへりぬ。

【九】其日の戌の時ばかりに、鎌倉より上の御使とて立文をもちて来ぬ。頸切れといふ、重ねての御使か」と、兵士共は思ひてありし程に、六郎左衛門が代官、右馬尉と申す者立文もて走り来り跪いて申す「今夜にて候べし、あらあさましと存じて候ひつるに、かかる御悦びの御文来りて候。武蔵守殿は今日卯の時に熱海の湯へ御出候へば、いそぎあやなき事もやと、まづこれへ走り参りて候」と申す。鎌倉より御使は二時に走りて候。今夜の内に熱海の御湯へ走り参るべし」とて、まかり出でぬ。追状に云く「此人は失なき人なり、今しばらくありて赦させ給ふべし、あやまちしては後悔あるべし」と云云。

【一〇】其夜は十三日、兵士ども数十人、坊の辺り並に大庭に並居て候ひき。九月十三日の夜なれば、月大にはれてありしに、夜中に大庭に立出でて月に向ひ奉りて、「自我偈」少少読み奉り、諸宗の勝劣・「法華経」の文あらあら申して、「抑今の月天は「法華経」

【名月天子】お月様のこと。
【佛前】佛は法王その仰せ。
【何なる事も云云】この國に別に何事も法の驗なくば、再び鎌倉に歸る面目なし。
【一】執權館の變事のこと。念佛者等の惡企のこと。
【守殿】相模守時宗。

の御座に列りまします名月天子ぞかし。『寶塔品』にしては佛勅を受け給ひ、『囑累品』にして佛に頂を摩られまゐらせ、『世尊の勅の如く當に具に奉行すべし』と誓狀を立てし天ぞかし。佛前の誓は日蓮なくば虚くてこそおはすべけれ。今かかる事出來せば、急ぎ悅を爲して『法華經』の行者にもかはり、佛勅をも果して、誓言の驗をも遂げさせ給ふべし。いかに今驗の無きは不思議に候ものかな。何なる事も國になくしては、鎌倉へも歸らんとは思はず。驗こそ無くとも嬉しがほにて澄み渡らせ給ふはいかに。『大集經』には『日月明を現ぜず』と說かれ、『仁王經』には『日月度を失ふ』と說かれ、『最勝王經』には『三十三天各瞋恨を生ず』とこそ見え侍るに「いかに、いかに。」と責めしかば、其のしるしにや、天より明星の如くなる大星下りて、前の梅の木の枝にかかりてありしかば、兵士共皆縁より飛下り、或は大庭にひれ伏し、或は家のうしろへ逃げぬ。やがて即ち天かきくもりて大風吹來りて、江の島の鳴るとて、空のひびく事大なる皷を打つが如し。

【一】夜明れば十四日、卯の時に十郎入道と申す者來りて云く「昨日の夜の戌の時計りに、守殿に大なるさわぎあり、陰陽師を召して御うらなひ候へば申せしは『大に國みだれ候べし。此御房御勘氣の故なり、急ぎ急ぎ召還さずば、世の中いかが候べかるらん』と申せば、『ゆりさせ給ひ候へ』と申す人もあり。又『百日の内に軍あるべしと申しつれば、それを待つべし』とも申す。」依智にして二十餘日、其間鎌倉に或は火をつくる事七八度、或は人を殺す事ひまなし。讒言の者共の云く、『日蓮が弟子共のつくる火なり。』『さも

【[illegible]】 [illegible]

【[illegible]】 [illegible]

【[illegible]】 [illegible]

【[illegible]】 [illegible]

あらん」とて、「日蓮が弟子等を鎌倉に置くべからず」とて、「二百六十余人しるさる。皆遠島へ遣はすべし、ろうにある弟子共をば頸をはねらるべし」と聞ふ。さる程に火をつくる等は持斎念仏者が計事なり。其の余はしげければかかず。

【三】 同十月十日に依智を立て、同十月二十八日に佐渡の国へ著きぬ。十一月一日に六郎左衛門が家のうしろ、塚原と申す山野の中に、洛陽の蓮台野のやうに死人を捨つる所に、一間四面なる堂の仏もなし、上は板間あはず、四壁はあばらに、雪ふりつもりて消ゆる事なし。かかる所に敷皮打ちしき蓑うちきて、夜をあかし日をくらす。夜は雪雹雷電ひまなし、昼は日の光もささせ給はず、心細かるべき住居なり。彼の李陵が胡国に入りて巌窟にせめられし、法道三蔵の徽宗皇帝にせめられて面に火印をさされて江南に放たれしも只今とおぼゆ。

【四】 あら嬉しや、檀王は阿私仙人にせめられて、『法華経』の功徳を得給ひき。不軽菩薩は上慢の比丘等の杖にあたりて、一乗の行者といはれ給ふ。今日蓮は末法に生れて『妙法蓮華経』の五字を弘めて、かかる責にあへり。仏滅度後二千二百二十余年が間、恐らくは天台智者大師も『一切世間多怨難信』の経文をば行じ給はず。『数数見擯出』の明文は但日蓮一人なり。『一句一偈、我皆与授記』は我なり、『阿耨多羅三藐三菩提』は疑なし。相模守殿こそ善知識よ。平左衛門こそ提婆達多よ。念仏者は瞿伽利尊者、持律者等は善星比丘なり。在世は今なり、今は在世なり。『法華経』の肝心は『諸法実相』と説かれ、『本末究竟

【此鎌倉の御一門云云】鎌倉の勢威を得て栄えたるは和田義盛と後鳥羽法皇とに依る。

等」と宣べられて候は是なり。「摩訶止観」第五に云く、「行解既に勤めぬれば、三障四魔紛然として競ひ起る」。又云く、「猪の金山を摺り、衆流の海に入り、薪の火を熾にし、風の求羅を益すが如き耳」。云云。此の心は、「法華経」を教の如く機に叶ひ時に叶うて解行すれば、七の大事出来す。其中に天子魔とて、第六天の魔王、或は国主、或は父母、或は妻子、或は檀那、或は悪人等について、或は随って「法華経」の行者を支へ、或は違して止ふべき時なり。何れの経をも行ぜよ、仏法を行ずるには分分に随って留難あるべし。其中に「法華経」を行ずるには、強盛に支ふべし。「法華経」を教の如く時機に当って行ずるには殊に難あるべし。故に「弘決」の八に云く、「若し衆生生死を出でず仏乗を慕はずと知れば、魔是の人に於て親の想を生ず」云云。此の心は、人善根を修すれども、念仏、真言、禅、律等の行をなして「法華経」を行ぜざれば、魔王親のおもひをなして人間につきて、其人をもてなし供養す。世間の人に実の僧と思はせんが為なり。例せば国主のたとむ僧をば諸人供養するが如し。されば国主等の敵にするは既に正法を行ずるにてあるなり。釈迦如来の御為には、提婆達多こそ第一の善知識なれ。今の世間を見るに、人をよく成す者は、方人よりも強敵が人をばよく成しけるなり。眼前に見えたり。此鎌倉の御一門の御繁昌は、義盛と隠岐の法皇ましまさずば、争でか日本の主となり給ふべき。されば此人人は、此御一門の御為には第一の方人なり。日蓮が仏にならん第一の方人は景信、法師には良観、道隆、道阿弥陀仏と、平左衛門尉、守殿ましまさずば、争でか「法華経」の行者とはなる

【一四】塚原宗論のこと。

【終には一定】早晩斬罪に處せらるるに相違なしの意。

べき。

【一四】かくて過る程に、庭には雪つもりて人も通はず、堂には荒き風より外はおとづる者なし。眼には『止觀』、『法華』をさらし、口には『南無妙法蓮華經』と唱へ、夜は月星に向ひ奉りて、諸宗の違目と『法華經』の深義を談ずる程に、年もかへりぬ。いづくも人の心の果敢なさは、佐渡の國の持齋、念佛者の唯阿彌陀佛、生喩房、印性房、慈道房等の數百人寄りあひて評議すと承るは『聞ゆる阿彌陀佛の大怨敵、一切衆生の惡知識の日蓮房、此國に流されたり。何となくとも、此國へ流されたる人の始終活らるる事なし。設ひ活らるるとも、歸る事なし。又打殺したりとも、御咎めなし。塚原といふ所に只一人あり。いかに剛なりとも力強くとも、人なき處なれば集りて射殺せかし』と云ふ者もありけり。又『何となくとも、頸を切らるべかりけるが守殿の御臺所の御懷妊なればしばらく切られず、終には一定と聞く。』又云く、『六郎左衛門尉殿に申して、切らずば、計らふべし』と云ふ。多くの義の中に、これについて守護所に數百人集りぬ。六郎左衛門尉の云く『上より殺しまゐらすまじき副狀下りて、蔑るべき流人にはあらず。過あるならば重連が大なる失なるべし。それよりは只法門にて攻めよかし』と云ひければ念佛者等、或は淨土の『三部經』或は『止觀』或は眞言等を、小法師等が頸にかけさせ、或は脇に挾みて、正月十六日にあつまる。佐渡の國のみならず、越後、越中、出羽、奥州、信濃等の國國より集れる法師等なれば、塚原の堂の大庭、山野に數百人、六郎左衛門尉兄弟一家、さな

【經文を云云】とは佛說の教。經とは菩薩又は印度論の人の經を祖述せるもの。釋とは上の經論を解釋せるもの。

【一五】自界叛逆豫言のこと。

らぬ者百姓の入道等、數を知らず集りたり。念佛者は口口に惡口をなし、眞言師は面面に色を失ひ、天台宗ぞ勝つべきよしをののしる。在家の者共は、聞ゆる阿彌陀佛の敵よとののしり、騒ぎひびく事震動雷電の如し。日蓮は暫く騒がせて後、「各各しづまらせ給へ、法門の御爲にこそ御渡りあるらめ、惡口等よし無し」と申せしかば、六郎左衞門を始め諸人「然るべし」とて、惡口せし念佛者をば素首を突出しぬ。さて止觀、眞言、念佛の法門、一一に彼が申す樣を牒じ揚げて承伏させては、丁とは詰め詰め、一言二言にはすぎず、鎌倉の眞言師、禪宗、念佛者、天台の者よりもはかなき者共なれば、只思ひやらせ給ふ。利劍をもて瓜をきり、大風の草木をなびかすが如し。佛法のおろかなるのみならず、或は自語相違し、或は經文を忘れて論と云ひ論を忘れて釋と云ふ。善導が柳より落ち、弘法大師の三鈷を投たる、大日如來と現じたる等をば、或は妄語、或は物にくるへる處を一一にせめたるに、或は惡口し、或は口を閉ぢ、或は色を失ひ、或は「念佛廢事なりけり」と云ふ者もあり。或は當座に袈裟平念珠をすてて、念佛申すまじきよし誓狀を立つる者もあり。皆人立歸る程に、六郎左衞門尉も立歸る、一家の者も返る。

【一五】日蓮不思議一つ云はんと思ひて、六郎左衞門尉を大庭より呼びかへして云く、「いつか鎌倉へ登り給ふべき」。彼答へて云く、「下人共に農させて、七月の頃」と云云。日蓮云く、「弓箭とる者は公邊の御大事にあひて、所領をも給はり候をこそ、田畠つくるとは申せ。只今軍のあらんずるに、急ぎ打のぼりて高名して所領を給はらぬか。さすがに和殿原

【一六】開目鈔述作のこと。

【一七】自界叛逆の豫言的中のこと、國の危をさとすこと。

は相模の國には名ある侍ぞかし。田舍にて田作りて、軍に外れたらんは恥なるべし」と申せしかば、いかにや思ひけん、あわてて物もいはず。念佛者、持齋、在家の者共も、「何と云ふ事ぞや」と怪しむ。

【一六】さて皆歸りしかば、去年の十一月より勘へたる『開目鈔』と申す文二卷造りたり。頸切らるるならば日蓮が不思議留めんと思ひて勘へたり。此文の心は、「日蓮によりて日本國の有無はあるべし。譬へば宅に柱なければたもたず。人に魂なければ死人なり。日蓮は日本國の人の魂なり。平左衛門既に日本國の柱を倒しぬ。只今世亂れて、それとも無く夢の如くに妄語出來して、此御一門同士討して、後には他國より攻めらるべし。例せば『立正安國論』に委しきが如し。」かやうに書付けて中務三郎左衛門尉が使に取らせぬ。附きたる弟子等も強義かなと思へども力及ばざりげにてある程に、二月の十八日に島に船つく。鎌倉に軍あり、京にもあり、その樣申す許りなし。

【一七】六郎左衛門尉、其夜早船をもて、一門相具して渡る。日蓮に掌を合せて、「たすけさせ給へ、去る正月十六日の御言いかにやと、此程疑ひ申しつるに、幾程なく三十日が内にあひ候ひぬ。又蒙古國も一定渡り候ひなん。念佛無間地獄も一定にてぞ候はんずらん。永く念佛申し候まじ」と申せしかば、「いかに云ふとも相模守殿等の用ゐ給はざらんには、日本國の人用ゐまじ。用ゐずば國必ず亡ぶべし。日蓮は幼若の者なれども、『法華經』を弘むれば、釋迦佛の御使ぞかし。わづかの天照大神、正八幡なんど申すは、此國には重

【此神人なんど云云】この小神に神仕へする人を殺してすら、その罪は常の人七人半を殺せるに當るといふ。

【此はかれには云云】日蓮は左樣な神に仕ふる者などとは比較を絶して尊しの意。

【一八】諸人驚畏のこと。

【一九】念佛者の陰謀のこと、虚御教書もて迫害のこと【既に國の者云云】既に佐渡の國の者は大體日蓮の信者となり了れり。

けれども、梵釋日月四天に對すれば小神ぞかし。されども此神人なんどを過ちぬれば、只の今を殺せるには七人半なんど申すぞかし。太政入道、隱岐の法皇等の亡び給ひしは是なり。此はかれには似るべくもなし。教主釋尊の御使なれば、天照大神、正八幡も頭を傾け手を合せて、地に伏し給ふべき事なり。『法華經』の行者をば梵釋左右に侍り、日月前後を照し給ふ。かかる日蓮を用ゐぬるとも、惡く敬はば國亡ぶべし。何に況んや數百人に憎ませ、二度まで流しぬ。此國の亡びん事疑なかるべけれども、且く禁をなして、國をたすけ給へと日蓮がひかふればこそ、今までは安穩にありつれども、法に過ぐれば罰あたりぬるなり。又此度も用ゐずば、大蒙古國より打手を向けて、日本國亡ぼさるべし。ただ平左衛門尉が好むわざはひなり。和殿原とても、此島とても安穩にあるべきか。」と申せしかば、淺ましげにて立歸りぬ。

【一八】さて在家の者ども申しけるは、「此御房は神通の人にてましますか、あら恐ろし恐ろし。今は念佛者をも養ひ、持齋をも供養すまじ。」「念佛者、良觀が弟子の持齋等が云く「此御房は謀叛の内に入りたりけるか。」さて且くありて、世間しづまる。

【一九】又念佛者集りて僉議す「斯くてあらんには、我等飢ゑ死ぬべし。いかにもして此法師を失はばや。既に國の者も大體靠きぬ、いかんがせん。」念佛者の長者、唯阿彌陀佛、持齋の長者性諭房、良觀が弟子道觀等、鎌倉に走り登りて武藏守殿に申す「此御房島に候ものならば、堂塔一宇も候べからず。僧一人も候まじ。阿彌陀佛をば或は火に

【私の下知】公儀より正當に發布せられず、權を私して下せる下知、虚御教書なり。

【一〇】赦免無事歸倉のこと。

【一一】鎌倉殿中第三國諫のこと。

入れ、或は河に沈す。夜も晝も高き山に登りて、日月に向つて大音聲を放つて、上を呪咀し奉る。其音聲一國に聞ゆ」と申す。武藏の前司殿是をきき、『上へ申すまでもあるまじし、先國中のもの日蓮房につくならば、或は國を追ひ、或は牢に入れよ」と、私の下知を下す。又下文下る。かくの如く三度、其間の事申さざるに心をもて計りぬべし。或は其前を通れりとて牢に入れ、或は其御房に物をまゐらせけりと云うて國をおひ、或は妻子をとる。

【一〇】かくの如くして上へ此由を申されければ、案に相違して、去る文永十一年二月十四日御赦免の狀、同三月八日に島につきぬ。念佛者等僉議して云く、『此程の阿彌陀佛の御敵、善導和尚、法然上人を罵るほどの者が、たまたま御勘氣を蒙りて此島に放されたるを、御赦免ありとて生けて歸さんは、心憂き事なり。』と云うて、やうやうの支度ありしかども、何なる事にや有りけん、思はざるに順風吹來りて、島をば立ちしかば、間合あしければ百日五十日にもわたらず、順風には三日なる所を、須臾の間に渡りぬ。越後の國府、信濃の善光寺の念佛者、持齋、眞言等は雲集して僉議す。『島の法師原は、今まで生けて還すは人乞丐なり。我等はいかにも、生身の阿彌陀佛の御前をば通すまじ』と、僉議せしかども、又越後の國府より兵者共あまた日蓮に添ひて、善光寺を通りしかば、力及ばず。三月十三日に島を立ちて、同三月二十六日に鎌倉へ打入りぬ。

【一一】同四月八日、平左衞門尉に見參しぬ。前には似るべくもなく、威儀を和げて正しくする上、或入道は念佛をとふ。或俗は眞言を問ふ。或人は禪を問ふ。平左衞門尉は爾前

【隱岐の法皇】後鳥羽上皇。
【權太夫】北條義時。
【公家】朝廷方。
【入道殿云云】左衛門殿は大事に遭ひ給ふべきも、その時に及んで、日蓮を恨み給ふべからず。
【三】眞言の雨祈逆變のこと。

得道の有無をとふ。一一に經文を引いて申す平左衛門尉は上の御使の樣にて、「大蒙古國はいつか渡り候べき」と申す。日蓮答へて云く、「今年は一定なり。それに取つては、日蓮已前より勘へ申すをば御用ゐなし。譬へば病の起を知らざらん人の病を治せば、彌病は倍增すべし。眞言師だにも調伏するならば、彌此國軍に負くべし。あなかしこあなかしこ。眞言師、總じて當世の法師等をもて御祈りあるべからず。各各は佛法を知らせ給はでおはすにこそ、申すとも知らせ給はず。又何なる不思議にやあるらん。佗事にはことにして、日蓮が申す事は御用ゐなし。後に思合させ奉らんが爲に申す。隱岐の法皇は天子なり、權太夫殿は民ぞかし。子の親をあだまんをば、天照大神受け給ひなんや。所從が主君を敵とせんをば、正八幡は御用ゐあるべしや。いかなりければ公家は負け給ひけるぞ。此は偏へに只事にはあらず、弘法大師の邪義、慈覺大師、智證大師の僻見を眞と思ひて、叡山、東寺、園城寺の人人の鎌倉をあだみ給ひしかば、『還著於本人』とて、其失還つて公家は負け給ひぬ。武家は其事知らずして、調伏も行はざれば勝ちぬ。今又かくの如くなるべし。蝦夷は死生不知のもの、安藤五郎は因果の道理を辨へて堂塔多く作りし善人なり。いかにとして頸をば蝦夷に取られぬるぞ。是をもて思ふに、此御房達だに御祈りあらば、入道殿事にあひ給ひぬと覺え候。あなかしこあなかしこ、さ云はざりけると仰せ候な」と、したたかに申付け候ひぬ。

【三】さて歸り聞きしかば、同四月十日より阿彌陀堂法印に仰付けられて、雨の御祈あ

【左右して免りたらば云云】やうやうと赦免になりし上は神妙にしてあるべきに。

り。此法印は東寺第一の智人、御室等の御師、弘法大師、慈覺大師、智證大師の眞言の祕法を鏡にかけ、天台華嚴等の諸宗を皆胸にうかべたり。それに隨ひて十日よりの祈雨に、十一日に大雨下りて風吹かず、雨しづかにて一日一夜ふりしかば、守殿御感のあまりに、金三十兩、馬、樣樣の御引出物ありと聞ゆ。鎌倉中の上下萬人手をたたき口を蹙めて笑ふやうは、『日蓮僻法門申して、すでに頸を切られんとせしが、左右して免りたらば、さては無くして、念佛禪をそしるのみならず、眞言の密敎なんどをもそしる故に、かかる法の驗めでたし』とののしりしかば、日蓮が弟子等興さめて、『これは御強義』と申せし程に、日蓮が申すやうは、『しばし待て、弘法大師の惡義まことにて國の御祈となるべくは、隱岐の法皇こそ軍に勝ち給はめ、御室最愛の兒勢多加も頸を切られざるらん。弘法の『法華經』を『華嚴經』に劣れりとかける狀は、『十住心論』と申す文にあり。『壽量品』の釋迦佛をば凡夫なりと記されたる文は、『祕藏寶鑰』に候。天台大師を盜人とかける狀は、『二敎論』にあり。『一乘法華經』を說ける佛をば眞言師の履取りにも及ばずとかける狀は、正覺房が『舍利講の式』にあり。斯る僻事を申す人の弟子、阿彌陀堂の法印が日蓮に勝つならば、龍王は『法華經』のかたきなり。梵釋四王にせめられなん。子細ぞ有らんずらん』と申せば、弟子共のいはく、『いかなる子細のあるべきぞ』と、嘲笑ひし程に、日蓮云く、『善無畏も不空も、雨の祈に雨はふりたりしかども、大風吹きてありけると見ゆ。弘法は三七日すぎて雨をふらしたり。此等はふらさぬが如し。三七二十一日にふらぬ雨やあるべき。設ひふりたりと

【千觀】天台宗の僧。應和二年夏祈雨に驗あり。

【三三】身延入山と蒙古来使につきて破佛破國の因由を證す。

も、何の不思議かあるべき。天台の如く、千觀なんどの如く、一座なんどこそ尊けれ。此は一定様あるべし。」と云ひもあはせず、大風吹来る。大小の舎宅堂塔古木御所等を或は天に吹きのぼせ、或は地に吹きいれ、空には大なる光り物飛び、地には棟梁みだれたり。人人をも吹殺し、牛馬多く倒れぬ。悪風なれども、秋の時なればなほ許す方もあり。此は夏四月なり。其上日本國には吹かず、但關東八箇國なり。八箇國にも、武藏相模の両國なり。両國の中には、相州につよく吹く。相州にも鎌倉、鎌倉にも御所、若宮、建長寺、極樂寺等につよく吹けり。只事とも見えず『ひとへに、此祈りの故にや』と覺えて、笑ひ口すくめせし人人も興さめてありし上、我弟子共も、『あら不思議や』と舌をふるふ。

【三三】本より期せし事なれば、『三度國を諫めんに用ゐずば、國を去るべし』と。されば同五月十二日に鎌倉をいでて此山に入る。同十月に大蒙古國よせて、壹岐對馬の二箇國を打取らるるのみならず、太宰府も破られて、少貳入道、大友等、聞逃げに逃げ、其外の兵者共その事ともなく大體打たれぬ。又今度寄するならば、いかにも此國弱弱と見ゆるなり。『仁王經』には『聖人去る時は七難必ず起る。』等云云。『最勝王經』に云く、『悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に、乃至、他方の怨賊来りて、國人喪亂に遭はん。』等云云。佛説まことならば、此國に一定悪人のあるを國主尊ませ給ひて、善人をあだませ給ふにや。『大集經』に云く、『日月明を現ぜず、四方皆亢旱す、是の如くにして不善業の悪王、悪比丘、我正法を毀壞せん。』云云。『仁王經』に云く、『諸の悪比丘多く名利を求め、國王太子王

【四重】四重禁戒

【二四】眞言邪法の現證のこと。

【拘留外道】八百年化石たり、陳那菩薩に責められて水と爲る。

【迦毘羅外道】印度六派外道の中數論の祖。

子の前に於て、自ら破佛法の因縁、破國の因縁を説く。其王別へずして此言を信聴せん。是を破佛法、破國の因縁と爲す。」等云云。『法華經』に云く「濁世の惡比丘」等云云。經文まことならば、此國に一定惡比丘のあるなり。夫れ寶山には曲林を伐り、大海には死骸をとどめず。佛法の大海、一乘の寶山には五逆の瓦礫、四重の濁水をば入るれども、誹謗の死骸と一闡提の曲林をばおさめざるなり。されば佛法を習はん人、後世を願はん人は、『法華誹謗』をおそるべし。

【二四】皆人思するやうは「『いかでか弘法、慈覺等をそしる人を用ゆべき』」と。他人はさて措きぬ。安房國の東西の人人は此事を信ずべき事なり、眼前の現證あり。いのもりの圓頓房、清澄の西堯房、道義房、片海の實智房等は貴かりし僧ぞかし。此等の臨終はいかがありけんと尋ぬべし。此等はさて措きぬ。圓智房は清澄の大堂にして三箇年が間、一字三禮の『法華經』を我と書き奉りて、十卷をそらに覺え、五十年が間、一日一夜に二部づつ讀まれしぞかし。彼をば皆人は『佛になるべし』と云云。日蓮こそ、『念佛者よりも道義房と圓智房とは無間地獄の底に墮つべし』と申したりしが、此人人の御臨終はよく候ひけるか、いかに。日蓮なくば、此人人をば佛になりぬらんとこそ思すべけれ。これを以て知ろしめせ。弘法、慈覺等はあさましき事共はあれども、弟子ども隱せしかば、公家にも知らせ給はず、末の代はいよいよ仰ぐなり。あらはす人無くば、未來永劫までもさであるべし。拘留外道は八百年ありて水となり、迦毘羅外道は一千年すぎてこそ其失はあらはれしか。

【一五】諸人、災亂に遭ふは謗法によること。

【一六】「頭破七分」の眞意を説す。

【一七】「阿梨樹枝」阿梨の樹、枝地におちて七に分るといふ

【一五】夫れ人身をうくる事は五戒の力による。五戒を持てる者をば、二十五の善神これを護る上、同生、同名と申して二つの天、生れしより以來左右の肩に守護する故に、失なくて鬼神あだむこと無し。しかるに此國の無量の諸人嘆きをなすのみならず、壹岐對馬の兩國の人皆事にあひぬ。大宰府又申すばかりなし。此國はいかなる失のあるやらん。知らまほしき事なり。一人二人こそ失もあるらめ、若干の人人いかん。これ偏へに『法華經』を下ぐる弘法、慈覺、智證等の末の眞言師、善導、法然が末の弟子等、達磨等の人人の末の者共國中に充滿せり。故に梵釋四天等の『法華經』の座の誓狀の如く、『頭破作七分』の失にあてらるるなり。

【一六】難じて云く、『法華經』の行者をあだむ者は『頭破作七分』と説かれて候に、日蓮房をそしれども頭もわれぬは、日蓮房は『法華經』の行者にはあらざるかと申すは、道理と覺え候はいかん。答へて云く、『日蓮を』『法華經』の行者にてなしと申さば、『法華經』をなげすてよとかける法然等、『無明の邊域』としるせる弘法大師、『理同事勝』と宣べたる善無畏、慈覺等が『法華經』の行者にてあるべきか。又『頭破作七分』と申す事はいかなる事ぞ。刀をもてきるやうに破るると知れるか。經文には、『如阿梨樹枝』とこそ説かれたれ。人の頭に七滴あり。七の鬼神ありて一滴食へば頭痛む、三滴食へば壽絶えんとす。七滴皆食へば死するなり。今の世の人人は皆頭、阿梨樹の枝の如くに破れたれども、惡業深くして知らざるなり。例せば傷負ひたる人の或は酒に醉ひ、或は寢入りぬれば覺えざるが如し。又『頭破

【二七】法華行者値難のこと。

【二八】身延山の険阻を叙して、篤なる音信を謝す。

作七分」と申すは、或は「心破作七分」とも申して、頂の皮の底にある骨の響通るなり。死ぬる時はわるる事もあり。今の世の人人は去る正嘉の大地震、文永の大彗星に皆頭われて候なり。其頭われし時喘息頻み、五臓の損ぜしとき赤き腹を病みしなり。これは「法華經」の行者をそしりしゆゑに當りし罰と知らずや。」

【二七】されば鹿は味ある故に人に殺され、龜は油ある故に命を害せらる。女人はみめ形よければ嫉む者多し。國を治むる者は他國の恐れあり。財有る者は命危し。「法華經」を持つ者は必ず成佛し候故に、第六天の魔王と申す三界の主、此經を持つ人をば強ちに嫉み候なり。此魔王、疫病の神の目にも見えずして人に付き候やうに、古酒の人の醉ひ候如く、國主父母妻子に付きて、「法華經」の行者を嫉むべしと見えて候。少しも違はざるは當時の世にて候。日蓮は「南無妙法蓮華經」と唱ふる故に二十餘度所を追はれ、二度まで御勘氣を蒙り、最後には此山にこもる。

【二八】此山の體たらくは、西は七面の山、東は天子の嶽、北は身延山、南は鷹取の山、四つの山高きこと天に付き、嶮しきこと飛鳥も飛びがたし。中に四つの河あり。所謂富士河、早河、大白河、身延河なり。其中に一町ばかり間の候に、庵室を結んで候。晝は日を見ず、夜は月を拜せず。冬は雪深く、夏は草茂り、訪ふ人稀なれば、道を踏分くること難し。殊に今年は雪深くして、人とふ事なし。命を期として「法華經」計りをたのみ奉り候に、御音信ありがたく候。しらず釋迦佛の御使歟、過去の父母の御使歟と、申すばかりな

〔◇〕縮遺一四四一頁
建治二年（五十五歳）の作。四條金吾に與へて唱題法樂の義を教へたる文。

【自受用身の佛】內心の智慧明かにして常に眞理を照し、自ら其樂を身に受用する佛。

く候。南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經。

四條金吾殿御返事

一切衆生『南無妙法蓮華經』と唱ふるより外の遊樂なきなり。經に云く、『衆生の遊樂する所』云云。此文豈自受法樂にあらずや。衆生の中に貴殿漏れ給ふべきや。所とは一閻浮提なり、日本國は閻浮提の內なり。遊樂とは我等が色心依正ともに、一念三千自受用身の佛にあらずや。『法華經』を持ち奉るより外に遊樂はなし。『現世安隱、後生善處』とは是れなり。ただ世間の留難來るとも取りあへ給ふべからず。賢人聖人も此事はのがれず。ただ女房と酒打ち飲みて、『南無妙法蓮華經』と唱へ給へ。苦をば苦とさとり、樂をば樂とひらき、苦樂共に思ひ合せて『南無妙法蓮華經』と打唱へ居させ給へ。これ豈に自受法樂にあらずや。いよいよ強盛の信力をいだし給へ。恐恐謹言。

建治二年丙子六月二十七日　日蓮　花押

四條金吾殿御返事

【◇】縮遺一六一七頁
建治三年（五十六歳）の作。三位房龍象房と問答して勝つ徒者ありて、此時四條金吾座にありて亂暴すと言ふ、主人江馬氏金吾をして法華經を信ぜざる起請文を書かしめんとす、金吾所領を捨つるとも書かじと覺悟し、聖人に誓狀を捧ぐ、聖人乃ち金吾の金剛信を賞し更に激勵訓誡せし文。

【二】起請を書かざる覺悟を賞す。

四條金吾殿御返事

（爲二法華經一不レ可レ惜二所領一事）

【一】去月二十五日の御文、同月の二十七日の酉の時に來て候。仰せ下さるる狀と、又起請書くまじきよしの御誓狀とを見候へば、優曇華の咲きたるを見るか、赤栴檀の嫩葉になるを得たるか、珍らし香ばし。三明六通を得給ふ上、『法華經』にて初地初住に上らせ給へる證果の大阿羅漢、得無生忍の菩薩になりし舍利弗、目連、迦葉等だにを、娑婆世界の末法に『法華經』を弘通せん事の大難こらへ難ければ叶ふまじき由辭退候ひき。まして三惑未斷の末代の凡夫爭でか此經の行者となるべき。設ひ日蓮一人は杖木瓦石、惡口王難をも忍ぶとも、妻子を帶せる無智の俗なんどは爭でか叶ふ可き。中中信せざらんはよかりなん。末通らずして貶れなば人に笑はれなんと、不便に思ひ候ひしに、度度の難、二箇度の御勘氣に心ざしを顯はし給ふだにも不思議なるに、斯く威さるるに二所の所領をすてて『法華經』を信じ通すべしと御起請候事、いかにとも申す計りなし。普賢、文殊等なほ末代は如何と佛思食して、『妙法蓮華經』の五字をば地涌千界の上首、上行等の四人にこそ仰せつけられて候へ。只事の心を案ずるに、日蓮が道を助けんと上行菩薩、貴邊の御身に入り替らせ給へるか。又教主釋尊の御計らひか。

【二】起請を書かず、所領を召上らるとも憶すべからざるを教ふ。

【有りし戰】佐渡中鎌倉にありし北條一門同志討のこと。

【三】陳狀を差出す場合の注意を與ふ。

【きらきらしく】はかばかしくの意味。

【二】彼の御内の人人打はびこつて、良觀、龍象が計らひにてや定めてあるらん。起請を書かせ給ひなば、いよいよ彼奴原驕りて方方に觸れ申さば、鎌倉の内に日蓮が弟子一人もなく攻め失ひなん。凡夫の習ひ、身の上は計らひ難し、これを能く能く知るを賢人聖人とは申すなり。遠きをばしばらく措かせ給へ。近きは武藏守殿兩所をすてて入道になり、結句は多くの所領男女の公達、御前等をすてて御遁世と承はる。殿は子なし、賴もしき兄弟なし、わづかの二所の所領なり。一生は夢の上、明日を期せず。いかなる乞食にはなるとも、『法華經』に疵をつけ給ふべからず。されば同じくは嘆きたる氣色なくて、此狀に書きたるが如く少しも諂はず振舞ひ仰せあるべし。中中諂ふならば、あしかりなん。設ひ所領を召され追ひ出し給ふとも、十羅刹女の御計らひにてぞあるらむと、深く賴ませ給ふべし。日蓮は流されずして鎌倉にだにもありしかば、有りし戰に一定打殺されなん。此も又御内にてはあしかりぬべければ、釋迦佛の御計らひにてやあるらむ。

【三】陳狀は申して候へども、又それに僧は候へども、あまりの覺束なさに三位房を遣はすべく候に、未だ所勞きらきらしく候はず候へば、同じ事に此御房を參らせ候。大學の三郎殿か、瀧の太郎殿か、富木殿かに、暇に隨ひて書かせて上げさせ給ふべし。これは上げなば事切れなむ。いたう急がずとも內內うちを認め、又外の彼奴原にもあまねく騷がせて差出したらば、若しや此文、鎌倉中にも披露し、上へも參る事もやあるらん。わざはひの幸はこれなり。『法華經』の御事は已前に申しふりぬ。然れども小事こそ善よりは起

【四】夜討暗殺等に備へよとの注意を與ふ。

〔〇〕縮遺一七一四頁弘安元年（五十七歳）の作。鎌倉の弟子等より諸宗對決の風聞を報じたるに對し、閻浮歸妙の悦をのぶる文。

【和風】使者。

【飛鳥】書翰。

りて候へ。大事になりぬれば必ず大なる騒ぎが大なる幸となるなり。此の陳状人毎に見るならば彼等が恥あらはるべし。只一口に申し給へ「我とは御内を出て所領を上ぐべからず。上より召され出さんは『法華經』の御布施の幸と思ふべし」とのゝしらせ給へ。返す返す奉行人に諂ふけしきなかれ。「此の所領は上より給びたるにはあらず。大事の御所勞を『法華經』の藥を以て助け參らせて給びて候所領なれば、召すならば御所勞こそ又かへりて候はんずれ。爾の時は賴基に御怠状候とも、用ひ參らせ候まじく候」と、打當て憎さう氣にてかへるべし。あなかしこ、あなかしこ。

【四】御寄合ひあるべからず。夜は用心嚴しく夜廻りの殿原かたらひて、常には寄り合はるべし。今度御内をだにも出されずは、十に九は内の者ねらひたらむ。構へてきたなき死にすべからず。

建治三年丁丑七月　日蓮　花押

四條金吾殿御返事

諸人御返事

（報二門人等一書）

三月十九日の和風並びに飛鳥同じく二十一日戌の時到來す。日蓮一生の間の祈請並びに

所願忽ちに成就せしむる歟。將た又五五百歳の佛記宛かも符契の如し。所詮眞言、禪宗等の謗法の諸人等に召し合せ是非を決せしめば、日本國一同に日蓮が弟子檀那となり、我が弟子等の出家は主上上皇の師となり、在家は左右の臣下に列らん。將た又一閻浮提皆此の法門を仰がん。幸甚幸甚。

弘安元年三月二十一日　　日蓮　花押

諸人御返事

◇縮遺一七一八頁
弘安元年（五十七歳）の作。四條金吾が、聖人の上に幕府の迫害加へられんとするとの風聞を報じたるに對し、いかなる迫害と雖、悦んで受けん、汝等檀越は安心して奉公第一に勤めよと諭したる文。

檀越某御返事

（四條金吾御返事）

御文うけ給はり候ひ畢んぬ。日蓮流罪して先先に災ども重りて候に、又何と申す事か候べきとは思へども、人の損ぜんとし候には、不可思議の事の候へば兆候はんずらん。若しその義候はば用ゐて候はんには百千萬億倍の幸なり。今度ぞ三度になり候。法華經もよも日蓮をば緩き行者とは思せじ。釋迦、多寶、十方の諸佛、地涌千界の御利生、今度見果て候はん。あはれあはれ、さる事の候へかし。雪山童子の跡を追ひ、不輕菩薩の身になり候はん。徒らに疫病にや侵され候はんずらん、老死にや死に候はんずらん。あら淺まし、淺まし。願はくは法華經の故に國主に怨まれて、今度生死を離れ候はばや。

天照大神、正八幡、日月、帝釋、梵天等の佛前の御誓ひ今度試み候はばや。事事さて置き候ひぬ。各各の御身の事は、此より申し計らふべし。さておはするこそ『法華經』を十二時に行ぜさせ給ふにては候らめ。あなかしこ、あなかしこ。御みやづかへを『法華經』と思しめせ。「一切世間の治生產業は皆實相と相違背せず」とは此なり。かへすがへす御文の心こそ思ひやられ候へ。恐恐謹言。

四月十一日　　日蓮　花押

千日尼御前御返事

【一】弘安元年戊寅七月六日に佐渡の國より千日尼と申す人、同き日本國甲州波木井の郷身延山と申す深山へ、同き夫の阿佛房を使として送り給へる御文に云く「女人の罪障は如何と存じ候へども、御法門には『法華經』は女人の成佛を先とするぞと仰せ候ひしを萬事は憑み進らせ候て」等云云。

【二】夫れ『法華經』と申し候御經は何かなる佛の說き給ひて候ぞと思ひ候へば、此日本國より西、漢土よりも又西、流沙葱嶺と申すよりは又遙西、月支と申す國に淨飯大王と申しける大王の太子、十九の年位をすてさせ給ひて檀特山と申す山に入り。御出家、三十にして佛にならせ給ふ。御身は金色と變じ、神は三世を驗みさせ給ふ。過にし事來る

【みやづかへ】宮仕。

〔◇〕縮遺一七五三頁　弘安元年（五十七歲）の作。佐渡に於て、夫阿佛房と共に聖人を不惜身命に給仕せる千日尼の問に答へて、法華經の一切皆成佛、就中女人成佛に就て詳細なる說明を與へたる文。【一】千日尼の語を揭げて序とす。【二】法華經の流傳を述べて、その有り難きを示す。

【三】法華經の最勝を說く。

べき事鏡にかけさせ給ひておはせし佛の、五十餘年が間一代一切の經經を說き置せ給ふ。此一切の經經佛の滅後一千年が間、月支國に漸く弘まり候ひしかども、未だ漢土日本國等へは來り候はず。佛滅度の後一千十五年と申せしに、漢土へ佛法渡り始めて候ひしかども、未だ『法華經』は渡り給はず。佛法漢土に渡りて二百餘年に及で、月支と漢土の中間に龜茲國と申す國あり。彼國の內に鳩摩羅炎三藏と申せし人の御弟子に鳩摩羅什と申せし人、彼國より月支に入り、須梨耶蘇摩三藏と申せし人に此『法華經』を授かり給ひき。其經を授けし時の御語に云く、「此法華經は東北の國に緣深し」と云云。此の御語を持ちて月支より東方漢土へは渡り給ひし也。漢土には佛法渡りて二百餘年、後秦王の御宇に渡りて候ひき、日本國には人王第三十代欽明天皇の御宇、治十三年壬申十月十三日辛酉の日此より西、百濟國と申す國より聖明皇日本國に佛法を渡す。是は漢土に佛法渡つて四百年、佛滅後一千四百餘年也。其中にも『法華經』は御坐しかども、人王第三十二代用明天皇の太子聖德太子と申せし人、漢土へ使を遣はして『法華經』を取り寄せまゐらせて日本國に弘通し給ひき。爾より已來七百餘年也。

【三】佛滅度後既に二千二百二十餘年になり候上、月氏漢土日本の山山河河海海遠く隔たり、人人心心國國各各別別にして語替り品異なれば爭か佛法の御心をば我等凡夫は辨へ候べき。但だ經經の文字を引合せてこそ知るべきに、一切經は樣樣に候へども、『法華經』と申す御經は八卷御坐す。流通に『普賢經』序分に『無量義經』各一卷、已上。此

【四】女人成佛は法華經の特色なるを示す。

御經を開き見まいらせ候へば、明なる鏡を以て我が面を見るが如し、日出でて草木の色を辨へるに似たり。序分の『無量義經』を見進せ候へば『四十餘年未顯眞實』と申す經文あり。『法華經』の第一の卷『方便品』の始めに『世尊の法は久しうして後要ず當に眞實を說くべし』と申す經文あり。第四の卷の『寶塔品』には『妙法華經は皆是眞實』と申す明文あり。第七の卷には『舌相至梵天』と申す經文掲げたり。其外は此經より前後なるべき經經をば星に譬へ、江河に譬へ、小王に譬へ、小山に譬へたり。『法華經』をば月に譬へ、日に譬へ、大海大山大王等に譬へ給へり。此語は私の言にあらず、皆如來の金言也。十方の諸佛の御評定の言也。一切の菩薩、二乘、梵天、帝釋今の天に懸りて明鏡の如くに御坐す、日月も見給ひき聞き給ひき。其日月の御言も此經にのせられて候。月氏漢土日本國の古き神達も皆其座に列り給ひし神神也。天照大神、八幡大菩薩、熊野鈴鹿等の日本國の神神も爭ひ給ふべからず。此經文は一切經に勝れたり。地走る者の王たる師子王の如し。空飛ぶ者の王たる鷲の如し。『南無阿彌陀佛經』等は雉の如し兎の如し。鷲に摑まれては淚を流し、師子に責られては腸を斷つ。念佛者、律僧、禪僧、眞言師等又かくの如し。『法華經』の行者に値ひぬれば色を失ひ魂を消す也。

【四】かかるいみじき『法華經』と申す御經は何なる法門ぞと申せば、一の卷『方便品』より打始めて菩薩二乘凡夫皆佛になり給ふ樣を說かれて候へども未だ其驗なし。設へば始めたる客人が相貌麗はしくして心も潔く口もきいて候へば云ふ事疑ひ無けれども、さき

【五】日本國の一切の女人皆法華經を信ずべきに、却て彌陀を信ずるを難ず。

も見ぬ人なれば未だ顯彰たる事なければ詞のみにては信じ難きぞかし。其時語に任せて大なる事度度合ひ候へば、さては後の事も憑もしなんと申すぞかし。一切信じて信ぜられざりしを、第五の卷に即身成佛と申す、一經第一の肝心あり。譬へば黒き物を白くなす事漆を雪になし、不淨を清淨になす事濁水に如意珠を入れたるが如し。龍女と申せし小蛇を現身に佛になして御坐き。此時こそ一切の男子の佛になる事をば疑ふ者は候はざりしか。されば此經は女人成佛を手本として說れたりと申す。されば日本國に『法華經』の正義を弘通し始めましませし叡山の根本傳敎大師此事を釋し給ふには『能化所化倶に歷劫無し妙法經力即身成佛す。』等云云。漢土の天台智者大師『法華經』の正義を讀み始め給ひしには『他經は但だ男に記して女に記せず、乃至今經は皆記す』等云云。是は一代聖教の中には『法華經』第一、『法華經』の中には女人成佛第一也と斷らせ給ふにや。されば日本の一切の女人は『法華經』より外の一切經には女人成佛せずと嫌ふとも『法華經』にだにも女人成佛許されなばなにか苦しかるべき。

【五】然に日蓮はうけ難き人身をうけ、値ひ難き佛法に値ひ奉る。一切の佛法の中に『法華經』に値ひ進せて候。其恩德を思へば、父母の恩、國主の恩、一切衆生の恩也。父母の恩の中に慈父をば天に喩へ、悲母をば地に喩へたり。何れも分がたし。其中にも悲母の大恩殊に報じ難し。是を報ぜんと思ふに、外典の『三墳』、『五典』、『孝經』等に依て報ぜんと思へば、現在を養ひて後生を助け難し。身を養ひ魂は扶けず。内典の佛法に入り

て、五千七千餘卷の小乘大乘は女人成佛難ければ悲母の恩報じ難し。小乘は女人成佛一向に許されず。大乘經は或は成佛、或は往生を許す樣なれども、佛の假言にて實事なし。唯『法華經』計りこそ女人成佛悲母の恩を報ずる實の報恩經にては候へと見候ひしかば、悲母の恩を報ぜんが爲めに此經の題目を一切の女人に唱へさせんと願す。而るに日本國の一切の女人は漢土の善導、日本の慧心、永觀、法然等にすかされて、詮とすべきに『南無妙法蓮華經』をば一國の一人の女人も唱ふる事無し。唯南無阿彌陀佛と一日に一遍十遍百千萬億遍、乃至、一生が間晝夜十二時に又他事なし。道心堅固なる女人も又惡人なる女人も彌陀念佛を本とせり。僅に『法華經』を事とする樣なる女人も月待つ迄の手遊び、思はしき男のひまに、心ならず志なき男に値ふが如し。されば日本國の一切の女人『法華經』の御心に叶ふは一人もなし。我が悲母の爲に詮とすべき『法華經』をば唱へずして彌陀に心をかけば、『法華經』は本ならねば助け給ふべからず。彌陀念佛は女人をたすくるの法に非ず、必ず地獄に墮ち給ふべし。如何せんと歎きし程に我が悲母を扶けんが爲に、彌陀念佛は無間地獄の業也。五逆には非ざれども五逆に過ぎたり。父母を殺す人は其肉身をば破れども父母を後生に無間地獄には入れず。今日本國の女人は必ず『法華經』にて佛になるべきを、たぼらかして一向に南無阿彌陀佛になしぬ。惡ならざればすかされぬ。佛になる種ならざれば佛にはならず。彌陀念佛の小善を以て『法華經』の大善を失ふ。小善の念佛は大惡の五逆罪に過ぎたり。譬へば承平の將門は關東八箇國を打平げ、天喜の貞

【六八】謗法の國に大難来るを述ぶ。

任は奥州を打止て民を王へ通ぜざりしかば朝敵と成りて終に亡されぬ。此等は五逆に過ぎたる謀叛也。今日本國の佛法も亦是の如し。色替れる謀叛也。『法華經』は大王也。然るを『大日經』、『觀無量壽經』、眞言宗、淨土宗、禪宗、律僧等は彼彼の小經に依て『法華經』の大怨敵と成ぬるを、日本の一切の女人等は我心の愚かなるをば知らずして、我を助くる日蓮を敵と思ひ、大怨敵たる念佛者禪律眞言師等を善知識とあやまてり。助けんとする日蓮還つて大怨敵と思はるる故に、女人衆りて國主に讒言して伊豆の國へ流せし上、又佐渡の國へ流されぬ。

【六八】　爰に日蓮願じて云く、日蓮は全く誤なし。設ひ僻事たりとも日本國の一切の女人を扶んと願ぜる志は捨がたかるべし。何に況や『法華經』のままに申す。而るを一切の女人等信ぜずばさてこそ有るべきに、還りて日蓮をうたする。日蓮が僻事か、釋迦多寶十方の諸佛菩薩、梵、釋、四天等如何に計ひ給ふぞ。日蓮僻事ならば其義を示し給へ。殊には日月天は眼前の境界也。又佛前にして聞かせ給へる上、『法華經』の行者を怨まん者をば『頭破作七分』等と誓はせ給ひて候へば、如何候べきと、日蓮強盛に責め進らせ候故に天此國を罰する故に此疫病出現せり。他國より此國を天仰せ付けて責めらるべきに兩方の人數多死すべきに、天の御計らひとして先づ民を滅して人の手足を切るが如くして大事の合戰なくして此國の王臣等を責め傾けて『法華經』の御敵を滅して正法を弘通せんとなり。

【七】佐渡流罪中の保護を謝す

【私の御教書】公の御教書の反對にて、田中日の手なる御教書。

【科料を引き】科料を取られの意。

【七】然るに日蓮佐渡の國へ流されたりしかば、彼國の守護等は國主の御計ひに隨ひて日蓮を怨む。萬民は其命に隨ふ。念佛者禪律眞言師等は鎌倉より如何にもして此へわたらぬ様計れと申し遣はし、極樂寺の良觀等は武藏の前司殿の私の御教書を申して弟子に持せて日蓮を怨みなんとせしかば、何にも命扶かるべき様はなかりしに、天の御計ひはさてをきぬ。地頭地頭等、念佛者念佛者等日蓮が庵室に晝夜に立ち副ひて、通ふ人もあるを惑はさんと責めしに、阿佛房に櫃をしをはせ夜中に度度御渡りありし事何の世にか忘れん。只悲母の佐渡の國に生れ替りてある歟。漢土に沛公と申せし人、王の相ありとて秦の始皇勅宣を下して云はく、沛公を討て進せん者には不次の賞を行ふべしと。沛公は里の中には隱れ難くして山に入りて七日二七日なんど有りしなり。其時命既に終りぬべかりしに沛公の妻女呂后と申せし人こそ山中を尋ねて時時命を助けしが、彼は妻なれば情捨て難し。此は後世を思食さずばなにしに斯くは御坐べき。又其故に、或は所を追はれ、或は科料を引き、或は宅を取られなんどせしに、終に徹らせ給ひぬ。『法華經』には過去に十萬億の佛を供養せる人こそ今生には退せぬとは見えて候へ。されば十萬億供養の女人也。其上、人は見る目の前には志有りとも、指離れぬれば、心は忘れずともさてこそ候に、去る文永十一年より今年弘安元年までは既に五箇年が間、此山中に候に、佐渡の國より三度まで夫を遣はす。いくら程の御志ぞ。大地よりも厚く大海よりも深き御志ぞかし。釋迦如來は我薩埵王子たりし時飢たる虎に身を飼ひし功德、尸毗王とありし時、鳩の代に身を飼

【八】疫病流行の厄を脱れ健在するを悦ぶ。

【九】澤の入道尼御前への心づかひを記す。

ひし功徳をば、我が末の代此の如く『法華經』を信ぜん人に譲らんとこそ、多寶十方の佛の御前にては申させ給ひしか。

【八】 其上御消息に云く、「尼が父の十三年は來る八月十一日。」又云く、「錢一貫文」等云云。餘りの御志切に候へば、ありえておはしますに隨ひて『法華經』十卷送り進せ候。日蓮が戀しく御坐せん時は學乘房に讀ませて御聽聞あるべし。此御經をしるしとして後生には御尋ねあるべし。抑去年今年の有樣は如何にかならせ給ひぬらんと、覺束なさに、『法華經』に懇に申し候ひつれども未だ不審く候ひつるに、七月二十七日の申の時に阿佛房を見付て、尼御前は如何に、こう入道殿は如何にと先づ問ひて候ひつれば未だ病まず。紺入道殿は同道にて候ひつるが、早稲は既に近づきぬ、子はなし如何がせんとて還られ候ひつると語りし時こそ、盲目の者の目のあきたる、死し給へる父母の閻魔宮より御音信の夢の内にあるを夢にて悦ぶが如し。哀れ哀れ不思議なる事哉。これも鎌倉も此方の者は此病にて死ぬる人は少く候。同じ船にて候へば何れも助かるべしとも覺えず候ひつるに、船破れて助船に値へる歟。又龍神の助にて事なく岸へ着ける歟とこそ不思議がり候へ。

【九】 さわの入道の事嘆く由尼御前へ申し傳へさせ給へ。但し入道の事は申し切り候ひしかば思ひ合せ給ふらん。如何に念佛堂ありとも阿彌陀佛は『法華經』の敵をば助け給ふべからず。還りて阿彌陀佛の御敵なり。後生に惡道に墮ちて悔られ候らん事あさまし。但し入道の堂の廊にて命を度度扶けられたりし事こそ、如何にすべしとも覺へ候はね。學

某坊を以て墓に常常『法華經』を讀ませ給へと誂らせ給へ。其れも叶ふべしとは覺えず。さても尼の何に賴りなかるらんと、嘆くと申し傳へさせ給ひ候へ。又又申すべし。

七月二十八日　日蓮　花押

佐渡國府阿佛房尼御前

〔縮遺一八一四頁〕弘安元年（五十七歳）の作。千日尼の度度の信施に對し、その功德の廣大なるを說き成佛疑なきをさとす文。

【漿】飲料のこと

千日尼御前御返事

青鳧一貫文、干飯一斗、種種のもの給び候ひ畢んぬ。佛に土の餅を供養せし德勝童子は阿育大王と生れたり。佛に漿をまいらせし老女は辟支佛と生れたり。『法華經』は十方三世の諸佛の御師也。十方の佛と申すは東方善德佛、東南方無憂德佛、南方栴檀德佛、西南方寶施佛、西方無量明佛、西北方華德佛、北方相德佛、東北方三乘行佛、上方廣衆德佛、下方明德佛也。三世の佛と申すは過去莊嚴劫の千佛、現在賢劫の千佛、未來星宿劫の千佛、乃至『華嚴經』、『法華經』、『涅槃經』等の大小、權實、顯密の諸經に列り給へる一切の諸佛、十方世界の微塵數の菩薩等も皆悉く『法華經』の「妙」の一字より出生し給へり。故に『法華經』の結經たる『普賢經』に云く、「佛の三種の身は方等より生ず」等云云。方等とは月氏の語、漢土には大乘と翻す。大乘と申すは『法華經』の名也。『阿含經』は外道の經に對すれば大乘經、『華嚴』、『般若』、『大日經』等は『阿含經』に對すれば大乘經、

【師子王】獅子は百獸の王なる故。

【白物】白粉のこと。

「法華經」に對すれば小乘經なり。「法華經」に勝れたる經なき故に一大乘經也。例せば南閻浮提八萬四千の國國の王王は其國國にては大王と云ふ、轉輪聖王に對すれば小王と申す。乃至六欲四禪の王王は大小に渡る、色界の頂の大梵天王獨り大王にして小の文字を付る事無きが如し、佛は子也、「法華經」は父母也。譬へば一人の父母に千子有りて一人の父母を讃歎すれば千子悦をなす、一人の父母を供養すれば千子を供養するに成りぬ。「法華經」を供養する人は十方の佛菩薩を供養する功德と同じき也。十方の諸佛は妙の一字より生じ給へる故也。譬へば一の師子に百子あり。彼百子、諸の禽獸に犯さるるに一の師子王吼れば百子力を得て、諸の禽獸皆頭七分にわる。「法華經」は師子王の如し。一切の獸の頂とす。「法華經」の師子王を持つ女人は一切の地獄、餓鬼、畜生等の百獸に恐るる事なし。譬へば女人の一生の間の御罪は、諸の乾草の如し。「法華經」の「妙」の一字は小火の如し。小火衆草につきぬれば衆草燒亡ぶのみならず大木大石皆燒失せぬ。「妙」の一字の智火以て此の如し。諸罪消るのみならず衆罪還つて功德となる。毒藥變じて甘露となる是也。譬へば黑漆に白物を入れぬれば白色となる。女人の御罪は漆の如し、「南無妙法蓮華經」の文字は白物の如し、人は臨終の時地獄に墮る者は黑色となる上、其身重き事千引の石の如し。善人は設ひ七尺八尺の女人なれども、色黑者なれども臨終に色變じて白色となる。又輕き事鵞毛の如し、輭なる事兜羅綿の如し。佐渡の國より此國までは山海を隔てて千里に及び候に、女人の御身として「法華經」を志ましまし、年年に夫を御使

【雷門の鼓】支那の古事。

〔◇縮遺一八二五頁〕弘安二年（五十八歲）の作。三箇年にわたる大疫、去年よりの飢渴に際し、檀那上野時光の志至れる供養に對し、その功德を說く文。

として御訪ひあり。定めて「法華經」、釋迦、多寶十方の諸佛其御心を知食すらん。譬へば天月は四萬由旬なれども大地の池には須臾に影を浮び、雷門の鼓は千萬里遠けれども打てば須臾に聞ゆ。御身は佐渡の國におはせども心は此國に來れり。佛に成る道も此の如し。我等は穢土に候へども心は靈山に栖むべし。御面を見てはなにかせん、心こそ大切に候へ。いつかいつか釋迦佛のおはします靈山會上に參りあひ候はん。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。恐恐謹言。

弘安元年後十月十九日　日蓮　花押

千日尼御前御返事

上野殿御返事

餅九十枚、薯蕷五十本、わざと御使を以て、正月三日未の時に、駿河國富士郡上野鄉より甲州波木井の鄉、身延山の洞へ送りたびて候。夫れ海邊には木を財とし、山中には鹽を財とす。旱魃には水を財とし、闇中には燈を財とし、女人は夫を財とし、夫は女人を命とし、王は民を親とし、民は食を天とす。此兩三個年は日本國の中に大疫起りて、人半分減じて候歟。去年の七月より大なる飢渴にて、里市遠き無緣の者と山中の僧等は、命存し難し。其上日蓮は法華經誹謗の國に生れて、威音王佛の末法の不輕菩薩の如し。將

【元三】正月三ケ日。

〔一〕縮遺一八七五頁弘安二年（五十八歳）の作。鎌倉の弟子檀那に與へて、如何なる難に遭ふとも信心を退轉すべからず、若し退轉せば法華經の信心を退轉せば更に重ねて難に遭ひ結局は地獄に墮つべきを論せるなり。
【一】建長五年開宗以來度度の大難を述べ、佛語の空しからざるを說く。

又歡喜增益佛の末の覺德比丘の如し。王もにくみ、民もあだむ。衣もうすく、食も乏し。布子は錦のごとし。草葉をば甘露とおもふ。其上去年の十一月より雪積りて、山里路たえぬ。年返れども、鳥の聲ならではおとづるる人も無し。友にあらずば誰か問ふべき。心細くて過し候處に、元三の內に十字九十枚、滿月の如し。心中も明かに、生死の闇も晴れぬべし。あはれなり、あはれなり。故上野殿こそ、色ある男と人は申せしに、その御子なれば紅の濃きよしを傳へ給へるか。藍よりも靑く、水よりも冷たき氷かなと、ありがたし、ありがたし。恐恐謹言。

正月二日　日蓮　花押

上野殿御返事

聖人御難事

（人人御中書）

【一】去ぬる建長五年四月二十八日に、安房の國、長狹郡の內、東條の郷、今は郡也、天照大神の御厨、右大將家の建て始め給ひし日本第一の御厨、今は日本第一なり。此郡の內清澄寺と申す寺の諸佛坊の持佛堂の南面にして午の時に此法門申しはじめて今に二十七年、弘安二年なり。佛は四十餘年、天台大師は三十餘年、傳教大師は二十餘年に出世の本

懐を遂げ給ふ。其の中の大難申す計りなし。先先に申すが如し。余は二十七年なり。其の間の大難は各各かつしろしめせり。法華經に云く、而も此經は如來の現在にすら猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや云云。釋迦如來の大難は數をしらず。其の中に馬の麥を以って九十日、小指の出佛身血、大石の頂にかかりし、善星比丘等の八人が、身は佛の御弟子、心は外道にともなひて晝夜十二時に佛の短をねらひし、無量の釋子は波瑠璃王に殺されし無量の弟子等が惡象にふまれし、阿闍世王の大難をたせし等。此等は如來現在の小難なり。『況滅度後』の大難は龍樹、天親、天台、傳教いまだ値ひ給はず。法華經の行者ならずと謂はば、いかでか行者にておはせざるべき。又行者といはんとすれば、佛の如く身より血を流されず。何に況んや佛に過ぎたる大難なし。經文虚しきが如し。佛說すでに大虚妄となりぬ。而るに日蓮二十七年が間、弘長元年五月十二日には伊豆の國へ流罪、文永元年十一月十一日頭に疵を被り、左の手を打ち折らる。同じき文永八年九月十二日佐渡の國へ配流、又頭の座にのぞむ。其外に弟子を殺され、切られ、追ひ出され、過料等數を知らず。佛の大難には及ぶか勝れたるかそれは知らず。龍樹、天親、天台、傳教は余に肩を並べがたし。日蓮末法に出でずば佛は大妄語の人、多寶十方の諸佛は大妄語の證明なり。佛滅後二千二百二十餘年が間、一閻浮提の内に佛の御言葉を助けたる人但日蓮一人なり。過去現在の末法の法華經の行者を輕賤する王臣萬民、始めは事なきやうにて、終に亡びざるは候はず。日蓮又かくの如し。始めは驗なき様なれども、今二十七年が間、『法華經』守護の梵

【大進房が落馬】大進房はもと聖人の門下なりしが背反せし人、熱原法難に關係あり、法敵となる。

【二】獅子王の如き心を持ち退轉せざれと誡む。

【此殿】四條金吾を指すか。

【平等も城等も】平等は平左衛門頼綱の一門のこと。城等とは秋田城介の一門をいふ。此の二家當時幕府の二權門なる故、對語として用ゐるたるならん。

釋、日月の四天等さのみ守護せずば、佛前の御誓ひ空しくて無間大城に墮つべしと、おそろしく想ふ間、今は各各はげむらむ。大田親昌、長崎次郎兵衛尉時綱、大進房が落馬等は法華經の罰のあらはるるか。罰は總罰、別罰、顯罰、冥罰の四つ候。日本國の大疫病と大飢渇と、同志討と他國より攻めらるるは總罰なり。疫病は冥罰なり。大田等は現罰なり別罰なり。

【二】各各獅子王の心を取り出して、いかに人威すとも怯づる事なかれ。獅子王は百獸に怖ぢず。獅子の子又かくの如し。彼等は野干の吼るなり。日蓮が一門は獅子の吼るなり。故最明寺殿の日蓮をゆるししと、此殿の許ししは禍なかりけるを、人の讒言と知りて許ししなり。今はいかに人申すとも聞き解かずしては人の讒言に用ひ給ふべからず。設ひ大鬼神のつける人なりとも、日蓮をば梵、釋、日月、四天等、天照大神、八幡の守護し給ふゆゑに、罰しがたかるべしと存じ給ふべし。月月日日に強より給へ。少しも弛む心あらば魔たよりを得べし。我等凡夫の拙なきは經論に存る事と、遠き事は畏るる心なし。一定として平等も城等も怒りて、此一門をさんざんとなす事も出來せば眼を閉いで觀念せよ。當時の人人の筑紫へ遣されんずらむ。又行く人、又かしこに向へる人人を我が身にひきあてよ。當時までは此一門に此なげきなし。彼等は現はかくの如し。殺されば又地獄へ行くべし。我等現には此大難に値ふとも後生は佛になりなん。設へば灸治の如し、當時は痛けれども後の藥なれば、痛くていたからず。

【二】退轉者を[illegible]けて教訓す

【三位房が事】事蹟不明なれども、晩年臆病なりしと思はる。

【二】彼の熱原の愚癡の者共、言ひ勵まして嚇す事なかれ。彼等には唯一圓に思ひ切れ、善からんは不思議、悪るからんは一定と思へ。空腹と思はば餓鬼道を教へよ。寒しといはば八寒地獄を教へよ。恐ろししと謂はば鷹にあへる雉、猫にあへる鼠を他人と思ふ事なかれ。此は細細と書き候事は、かく年年、月月、日日に申して候へども、名越の尼、少輔房、能登房、三位房なんどの様に候、臆病、物おぼへず。欲深く疑ひ多き者共は塗れる漆に水をかけ、空を切りたる様に候ぞ。三位房が事は大不思議の事ども候ひしかども、殿原の思ひには、智慧ある者をそねませ給ふかと、愚癡の人思ひなんと思ひて物も申さで候ひしが、侫心となりて大難にもあたりて候ぞ。なかなかさんざんとだにも申せしかば、助かるへんもや候ひなん。あまりに不思議さに申さざりしなり。又かく申せばをこ人どもは死亡の事を仰せ候と申すべし。鏡のために申す。又此事は彼等の人人も内内は怖ぢ恐れ候らむとおぼえ候ぞ。人の騒げばとて兵士なんど此一門にせられれば、此れへかきつけてたび候へ。恐恐謹言。

十月一日　日蓮　華押

人人御中

三郎左衛門殿のもとに、留めらるべし。

【一】縮遺一九一七頁
弘安二年（五十八歳）の作。佐渡流罪中夫婦共に其聖人に歸依して保護したる中興次郎入道の子中興入道及其女房に宛て信施を謝すと共に弘通の事蹟を叙し、父子相次で法華經を持つを賞せし文。
【二】盡辭。
【三】佛教渡來後の状況を述ぶ。

中興入道消息

【一】鵞目一貫送り給び候ひ畢んぬ。『妙法蓮華經』の御寶前に申し上げ候ひ畢んぬ。

【二】抑も日本國と申す國は須彌山よりは南、一閻浮提の内縦廣七千由旬也。其の内に八萬四千の國あり。所謂五天竺十六の大國、五百の中國、十千の小國、無量の粟散國、微塵の島島也。此等の國國は皆大海の中にあり。譬へば池に木の葉の散れるが如し。此の日本國は大海の中の小島なり。潮滿てば見えず、干れば少し見ゆる量の程にて候ひしを、神のつき出させ給ひて後、人王の始め神武天皇と申せし大王おはしましき。其れより已來、三十餘代は佛と經と僧とはましまさず、唯だ人と神とばかり也。佛法おはしまさねば、地獄も知らず淨土も欣はず、父母兄弟の別れありしかどもいかなるらん、ただ霜の消る樣に、日月の隱れさせ給ふ樣に打思ひてありけるか。然るに人王第三十代欽明天皇と申す大王の御宇に此國より戌亥の角に當りて百濟國と申す國あり。彼國より聖明王と申せし王、金銅の釋迦佛と、此佛の說かせ給へる一切經と申す文と、此を讀む僧とを渡して有りしかば、佛と申す者も生きたる者にもあらず、經と申す者も外典の文にもにず、僧と申す者も物はいへども道理もきこえず、形も男女ににざりしかば、かたがた怪しみ驚きて左右の大臣大王の御前にして兎角僉議ありしかども、多分は用ゆまじきにてありしかば、佛は捨られ僧

【三】聖人の弘法値難を叙し、佐渡流罪中、中興次郎入道の保護に遭へるを述ぶ

[illegible]いましめられて候ひし程に、用明天皇の御子聖徳太子と申せし人、生年二歳の二月十五日東に向ひて南無釋迦牟尼佛と唱へて御舍利を御手より出だし給ひき。同じき六年に『法華經』を讀誦し給ふ。其れより已來七百餘年、王は六十餘代に及ぶまで漸く佛法弘まり候て、日本六十六箇國二の島にいたらぬ國もなし。國國、郡郡、鄕鄕、里里、村村に堂塔と申し寺寺と申し、佛法の住所すでに十七萬一千三十七所なり。日月の如くに明かなる智者代代に佛法を弘め、衆星の如くにかがやく賢人國國に充滿せり。彼人人は自行には或は眞言を行じ、或は『般若』或は『仁王』或は阿彌陀佛の名號、或は觀音、或は地藏、或は三千佛、或は『法華經』を讀誦なんどは申せども、無智の道俗を勸むるには唯南無阿彌陀佛と申すべし。譬へば女人の幼子を儲けたるに、或は堀或は河或は獨なるには、母よ母よと申すに聞付ぬれば必ず佗事を棄て助くる習ひたり。阿彌陀佛も又是の如し。我等は幼子也、阿彌陀佛は母也。地獄の穴、餓鬼のほりなんどに墮ち入りぬるに南無阿彌陀佛と申せば音の響との如く必ず來迎し給ふ也と、一切の智人ども教へ給ひしかば、我が日本國かく申し習はして年久しくなり候。

【三】然るに日蓮は中國都の者にもあらず、邊國の將軍等の子息にもあらず。遠國の者、民の子にて候ふが、日本國七百餘年に一人も未だ唱へまいらせ候はぬ『南無妙法蓮華經』と唱へ候ふのみならず、皆人の父母の如く、日月の如く、主君の如く、渡に船の如く、渇して水の如く、飢て飯の如く思ひて候ふ南無阿彌陀佛を無間地獄の業也と申し候ふ故

に、食に石を咬たる様に巖石に馬のはねたる様に、渡に大風の吹き來る様に、聚落に大火のつきたる様に、俄に敵の寄せたる様に、遊女の㞍となる様に、驚き嫉み妬み候ふ故に、去る建長五年四月二十八日より今弘安二年十一月まで二十七年が間退轉なく申しつより候事、月の滿るが如く、潮のさすが如く、始めは日蓮唯だ一人唱へ候ひし程に、見る人、値ふ人、聞く人、耳をふさぎ眼をいからかし、口をひそめ手をにぎり、齒をかみ、父母兄弟師匠善友も敵となる、後には所の地頭、領家敵となる。後には一國騒ぎ萬人蔑く程に、或は人の口まねをして『南無妙法蓮華經』と唱へ、或は惡口の爲に唱へ、或は信ずるにて唱へ、或は毀るにて唱へなんどする程に、すでに日本國十分が一分は一向『南無妙法蓮華經』殘り九分は或は兩方、或は疑ひ、或は一向念佛者なる者は父母の敵、主君の敵、宿世の敵の様に罵しる。村主鄕主國主等は謀叛の者の如くあだまれたり。かくの如く申す程に大海の浮木の風に隨ひて定めなきが如く、輕毛の虛空に昇りて上下するが如く、日本國を追れあるく程に、或る時は打たれ、或時はいましめられ、或時は疵を蒙り、或時は遠流、或時は弟子をころされ、或時は打追れたんどする程に、去る文永八年九月十二日には御勘氣を蒙りて北國佐渡の島に遷されて候ひしなり。世間には一分の科もなかりし身なれども「故最明寺入道殿、極樂寺入道殿を地獄に墮ちたりと申す法師なれば謀叛人にも過ぎたり」とて、相州鎌倉龍口と申す處にて頸を切んとし候ひしが、科は大科なれども『法華經』の行者なればとて左右なく失はばいかんがと思はれけん、又遠國の島に捨て置きたるならばい

【四】日蓮は日本第一の忠の者なる事

かにもなれかし、上に憎まれたる上、萬民も父母の敵の樣に思ひたれば、道にても又國にても若は殺すか、若は餓ゑ死にかになさんずらんと案じ行きて行りしに、法華經の十羅刹の御恵みにや、且は大失なき由を御らんずるにやありけん、島にて怨む者は多かりしかども中興の次郎入道と申せし老人ありき。彼人は年ふりたる上、心賢く身も樂しくて國の人にも人と思はれたりし人か、此御房はゆゑある人にやと申しけるかの故に、子息等もいたうも憎まず。其以下の者ども大旨彼等の人人の下人にてありしかば内内あやまつ事もなく、唯上の御計ひのままにてありし程に、水は濁れども又すみ、月は雲かくせども又晴るることわりなれば、科なき事既に顯れて、云ひし事も空しからざるかのゆゑに、御一門諸大名は許すべからざる由申しけれども、相模守殿の御計ひばかりにて遂に許り候うてのぼりぬ。

【四】又日蓮は日本國には第一の忠の者也。肩を並ぶる人は先代にもあるべからず、後代にもあるべしとも覺えず。其故は去る正嘉年中の大地震、文永元年の大長星の時、内外の智人其故を占考しかども、何の故何なる事の出來すべしと申す事を知らざりしに、日蓮一切經藏に入て勘へたるに、眞言、禪、念佛、律等の權小の人人をもつて「法華經」を輕しめたてまつる故に、梵天、帝釋の御咎めにて西なる國に仰せ付けて日本國を攻むべしとかんがへて、故最明寺入道殿にまいらせ候ひ畢んぬ。此事を諸道の者嘲つき笑ひし程に、九箇年を過ぎて去ぬる文永五年に大蒙古國より日本國を襲ふべきよし牒状渡りぬ。此事の合ふ故に念佛者、眞言師等怨みて失はんとせしなり。例せば漢土に玄宗皇帝と申せし御門の御后に

【五】父子相次ぎ夫婦相共に法華經を信ずるを賞す。

上陽人と申す人あり。天下第一の美女にてありしかば、楊貴妃と申す后の御覽じて、此人王へまいるならば我おぼえ劣りなんとて、宣旨也と申しかすめて、父母兄弟をば或は流し、或は殺し、上陽人をば牢に入れて四十年まで責めたりし也。此れも其れに似て候。日蓮が勘文あらはれて大蒙古國を調伏し、日本國勝つならば此法師は日本第一の僧となりなん。我等が威德衰ふべしと思ふ驗の故に、讒言をなすをば知し召さずして彼等が言葉を用ひて國を亡ぼさんとせらるる也。例せば二世王は趙高が讒言によりて李斯を失ひ、還て趙高が爲めに身を亡ぼされ、延喜の御門は時平の大臣の讒言によりて菅丞相を失ひて地獄に墮ち給ひぬ。此れも又かくの如し。「法華經」の敵たる眞言師、禪宗、律宗、時齋、念佛者等が申す事を御用ひありて、日蓮を怨み給ふ故に、日蓮は賤しけれども所持の「法華經」を釋迦多寶、十方の諸佛、梵天、帝釋、日月、四天、龍神、天照太神、八幡大菩薩、人の眼を惜むが如く、諸天の帝釋を敬ふが如く、母の子を愛するが如く守り重んじ給ふゆゑに、「法華經」の行者を怨む人を罰し給ふ事、父母の敵よりも朝敵よりも重く大科に行ひ給ふ也。

【五】然るに貴邊は故次郎入道殿の御子にておはする也。御前は又嫁なり。いみじく心賢かりし人の子と嫁とにおはすればや、故入道殿の跡をつぎ、國主も御用ひなき「法華經」を御用ひあるのみならず、「法華經」の行者を養はせ給ひて、年年に千里の道を送り迎へ、去りぬる幼子の娘御前の十三年に丈六の卒都婆を立てて、其面に「南無妙法蓮華經」の七字を顯しておはしませば、北風吹けば南海の魚族其風に當りて大海の苦を離れ、東風吹け

ば西山の鳥鹿其風を身に觸れて、畜生道を脱れて都率の内院に生れん。況や彼の率都婆に題目をなし手を觸れ眼に見まいらせ候ふ人類をや。過去の父母彼率都婆の功德によりて天の日月の如く淨土を照し、孝養の人並に妻子は現世には壽を百二十年持ちて、後生には父母とともに靈山淨土にまいり給はん事、水すめば月うつり、鼓を打てば響のあるが如しとおぼしめし候へ云云。此れより後の御率都婆にも『法華經の題目』を顯し給へ。

弘安二年己卯十一月卅日　日蓮　花押

中興入道殿

女房

〔縮遺一九四八頁〕弘安三年（五十九歳）の作。妙一尼に與へて、信心の心得を諭したる文。

妙一尼御前御返事

夫れ信心と申すは別にはこれなく候。妻の夫を惜むが如く、夫の妻に命を捨つるが如く、親の子を棄てざるが如く、子の母に離れざるが如くに、『法華經』、釋迦、多寶、十方の諸佛菩薩、諸天善神等に信を入れ奉りて、『南無妙法蓮華經』と唱へ奉るを、信心とは申し候ふ也。しかのみならず『正直捨方便』『不受餘經一偈』の經文を、女の鏡をすてざるが如く、男の刀をさすが如く、すこしも捨つる心なく案じ給ふべく候。あなかしこ、あなかしこ。

◇縮遺一九八〇頁　弘安三年（五十九歳）の作。夫に死別し、老いて子に先立たれたる南條兵衛七郎の室（後家尼）に與へて、之を慰めたる文。

【てこ子】　美兒の意。

五月十八日　　日　蓮　華押

妙一尼御前御返事

上野殿後家尼御前御書

南條七郎五郎殿の御死去の御事。人は生れて死する習ひとは、智者も愚者も上下一同に知りて候へば、始めて歎くべし驚くべしとは覺えぬよし、我も存じ、人にも教へ候へども時にあたりて夢か幻か未だわきまへ難く候。まして母のいかんが歎かれ候らむ。父母にも兄弟にも後れはてて、いとをしき夫にすぎ別れたりしかども、子ども數多おはしませば、心なぐさみてこそおはし候らむ。いとをしきてこ子、而もをのこ子、みめかたちも人にすぐれ心もかひがひしく見えしかば、よその人人もすずしくこそ見候ひしに、あやなく、莟める花の風にしぼみ、滿る月のにはかに失たるが如くこそ思すらめ。まこととも覺え候はねば、書付くるそらも覺え候はず。又又申すべく候。恐恐謹言。

九月六日　　日　蓮　華押

上野殿御返事

追伸。此六月十五日に見奉り候ひしに、あはれ肝ある者かな、男なり男なりと見候ひしに、又見候はざらん事こそ悲しくは候へ。さは候へども、釋迦佛、「法華經」に身

〔〕縮遺二〇四四頁
弘安三年（五十九歳）の作。王日の事蹟不明、信施を謝すると共に女人成佛の義を教へし文。

を入れて[illegible]しかば、西塔日出度候ひけり。心は父祖と一所に靈山淨土に參りて、手をとり頭を合せてこそ悦ばれ候らめ。あはれなり、あはれなり。

王日殿御返事

辨房の便宜に三百文、今度二百文給び畢んぬ。佛は眞に尊くして物によらず。昔の得勝童子は沙の餅を佛に供養し奉りて、閻浮提大王と生れて一閻浮提の主たりき。貧女の我頭をおろして油と成せしが、須彌山を吹きぬきし風も此火を消さず。されば此二三の鵞目は日本國を知る人の國を寄せ、七寶の塔を忉利天に組み上げたらんにもすぐるべし。『法華經』の一字は大地の如し、萬物を出生す。一字は大海の如し、衆流を納む。一字は日月の如し、四天下を照す。此一字變じて佛となる。稻變じて苗となる、苗變じて草となる、草變じて米となる、米變じて人となる、人變じて佛となる、女人變じて『妙』の一字となる。『妙』の一字變じて臺上の釋迦佛となるべし。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。恐恐謹言。

日蓮　華押

王日殿

法衣御書

〔縮遺二〇四五頁〕弘安三年（五十九歳）の作。法衣並に單衣を信施したる某尼御前に與へて女人成佛の義を說きたる文。

御衣布並に單衣布給候ひ畢んぬ。抑食は命をつぎ、衣は身をかくす。食を有情に施すものは長壽の報をまねき、人の食を奪ふものは短命の報を受く。衣を人に施さぬ者は世世存生に裸形の報を感ず。六道の中にて、人道已下は皆形裸にして生る、天は隨生衣なり。其中の鹿等は無衣にして生るるのみならず、人の衣をぬすみし故に、身の皮を人にはがれて、盗みし衣を償ふ報を得たり。人の中にも鮮白比丘尼は、生ぜし時衣を被て生れぬ。佛法の中にも、裸形にして法を行ずる道なし。故に釋尊は摩訶大拇比丘尼の衣を得て正覺をなし給ひき。諸の比丘には三衣をゆるされき。鈍根の比丘は衣食調はざれば、阿羅漢果を證せずと見えて候。殊に『法華經』には柔和忍辱衣と申して、衣をこそ本と見えて候へ。又『法華經』の行者をば衣をもつて覆はせ給ふと申すも、私なる義なり。日蓮は無戒の比丘、邪見の者なり。故に天これを惡ませ給ひて、食衣乏しき身にて候。然りといへども、『法華經』を口に誦し、時時これを說く。譬へば大蛇の珠を含み、伊蘭より栴檀を生ずるが如し。伊蘭をすてて栴檀まゐらせ候、蛇形を隱して珠を授け奉る。天台大師曰く、『他經は但男に記して女に記せず。』等云云。『法華經』にあらざれば、女人成佛は許されざるか。具足千萬光相如來と申すは摩訶大比丘尼のことなり。此等もつて推量り候に女人の成佛

は『法華經』により候べきか。『要當說眞實』は教主釋尊の金言、『皆是眞實』は多寶佛の證明、『舌相至梵天』は諸佛の誓狀なり。日月は地に落つべしや、須彌山は崩るべしや。大海の潮は增減せざるべしや、大地は飜覆すべしや、此御衣の功德は『法華經』に說かれて候。但心をもつて思ひやらせ給ひ候へ。言にはのべがたし。

小蒙古御書（與二門人等一書）

◇縮遺二〇五五頁　弘安四年（六十歲）の作。蒙古の來襲に際し、深く自重すべき旨、誡めたる文。

小蒙古の人大日本國に寄せ來るの事。我が門弟並に檀那等の中に、若し他人に向ひ、將た又自ら言語に及ぶべからず。若し此旨に違背せば、門弟を離すべき等の由存知する所也。此旨を以て人々に示すべく候也。

弘安四年辛巳六月十六日　　日蓮　華押

人人御中

兵衛志殿御返事

◇縮遺二〇五六頁　弘安四年（六十歲）の作。

青鳧五貫文送り給び了んぬ、唱へ奉る『南無妙法蓮華經』一返の事。恐恐。

【縮遺二〇六二頁】弘安四年(六十歳)の作。母子共に法華經の信者なる光日尼に與へて靈山淨土疑ひなしと論せし文。

【一】無間地獄の大苦を述ぶ。

二月十八日　　日蓮　華押

兵衛志殿御返事

光日上人御返事

【一】『法華經』の二の卷に云く、『其人命終して阿鼻獄に入らん。』云云。阿鼻地獄と申すは天竺の言、唐土日本には無間と申す。無間はひまなしと書けり。一百三十六の地獄の中に一百三十五の地獄はひま候。十二時の中に熱けれども又涼しきこともあり、堪がたけれども又ゆるくなる時もあり。此の無間地獄と申すは十二時に一時も片時も大苦ならざることなし。故に無間地獄と申す。此の地獄は此の我等が居て候大地の底二萬由旬を過ぎて最下の處也。此れ世間の法にも輕き物は上、重き物は下にあり。大地の上に水あり地よりも水輕し。水の上に火あり水よりも火輕し。火の上に風あり火よりも風輕し。風の上に空あり風よりも空輕し。人をも此の四大を以て造れり。悪人は風と火と先づ去り地と水と留まる。故に死して後重し、地獄へ墮る相也。善人は地と水と先づ去りて風火留まる。重き物は去り輕き物は留まる、故に輕し、人天へ生るる相也。地獄の相重きが中の重きは無間地獄の相也。彼の無間地獄は縱横二萬由旬なり、八方は八萬由旬也。彼の地獄に墮る人人は一人の身大にして八萬由旬なり、多人も亦此の如し。身の柔和なる事綿の如し。火の強き事は

【詮】要の意。

【二】謗法の人人は此無間地獄に墮つべしと警告す。

大風の燒亡の如し、鐵の火の如し。詮を取て申さば我身より火の出ること十三あり。二の火あり足より出でて頂をとほる。二の火あり頂より出でて足にとほる。又二の火あり背より入りて胸に出づ。又二つの火あり胸より入りて背へ出づ。又二の火あり左の脇より入りて右の脇へ出づ。又二の火あり右の脇より入りて左の脇へ出づ。亦一の火あり首より下に向ひて雲の山を卷くが如くして下る。此の地獄の罪人の身は枯たる草を燒くが如し。東西南北に走れども逃げ去る所なし。他の苦は且く之を置く、大火の一苦也。此の大地獄の大苦を佛委しく說き給ふならば我等衆生聞いて皆死すべし。故に佛委しく說き給ふ事なしと見えて候。

【二】今日本國の四十五億八萬九千六百五十八人の人人は皆此の地獄に墮ちさせ給ふべし。されども一人として墮つべしとは思召さず。例せば此の弘安四年五月以前には日本の上下萬人一人も蒙古の責に値ふべしとも思食さざりしを、日本國に只日蓮一人計りかかる事此の國に出來すべしと知る。其の時日本國の四十五億八萬九千六百五十八人の一切衆生一人もなく他國より責められさせ給ひて、其大苦は譬へば焙烙と申す釜に水を入れて雜魚と申す小魚を數多入れて、枯たる柴木をたかんが如しと申せば、あないまいましおそろし、打はれ所を追へ、流せ殺せ、信ぜん人人をば田畠をとれ、財を奪へ、所領を召せと申せしかども、此五月よりは大蒙古の責に値ひて、あきれ迷ふ程に、さもやと思ふ人人もあるやらん。にがにがしくしてせめたくはなけれども、有る事なれば當りたり當りたり、日蓮が申せし事は當りたり。「化物の物の樣に候」と申し合へり。去る承久の合戰に隱岐の法皇の御前

【三】光日尼母子の篤信を賞す。

にして京の二位殿なんどと申せし何も知らぬ女房等の集まりて、王を勸め奉り戰を起して義時に責られあわてゝ給ひしが如し。今御覽ぜよ、『法華經』誹謗の科と云ひ、日蓮を卑みし罰と云ひ、經と佛と僧との三寶誹謗の大科に依て、現生には此の國修羅道を移し、後生には無間地獄へ行き給ふべし。此れ又偏へに弘法、慈覺、智證等の三大師の『法華經』誹謗の科と、達磨、善導、律僧等の一乘誹謗の科と、此等の人人を結構せさせ給ふ國主の科と、國を思ひ生處を忍びて兼て勘へて告げ示すを用ひずして還て怨を成す大科。先例を思へば呉王夫差の伍子胥が諫を用ひずして越王勾踐に亡され、殷の紂王が比干が言をあなづりて周の武王に責られしが如し。

【三】然るに光日尼御前は何なる宿習にて『法華經』をば御信用ありけるぞ。又故彌四郎殿が信じて候ひしかば子の勸めか。此の功德空しからざれば子と倶に靈山淨土へ參り合はせ給はん事疑なかるべし。烏龍と云ひし者は『法華經』を謗じて地獄に墮たりしかども、其の子に遺龍と云ひし者『法華經』を書きて供養し奉りしかば親佛に成りぬ。又妙莊嚴王は惡王なりしかども御子の淨藏、淨眼に導かれて娑羅樹王佛と成らせ給ふ。其故は子の肉は母の肉、母の骨は子の骨也。松榮ゆれば柏悅ぶ、芝枯るれば蘭泣く。情なき草木すら友の喜び友の歎き一なり。何に況や親と子との契り、胎內に宿して九月を經て生落し、數年まで養ひき。彼に荷はれ彼に弔はれんと思ひしに、彼を弔らふ恨めしさよ。後如何があらんと思ふ心苦しさ如何せん如何せん。子を思ふ金鳥は火の中に入りにき、子を思ひ

し貧女は恆河に沈みき。彼の金鳥は今の彌勒菩薩也。彼の河に沈みし女人は大梵天王と生れ給へり。何に況や今の光日上人は子を思ふ餘りに『法華經』の行者と成り給ふ。母と子と倶に靈山淨土へ參り給ふべし。其時御對面いかに嬉しかるべき嬉しかるべき。恐恐。

八月八日　　日蓮　華押

光日上人御返事

上野殿御返事

◇縮遺二〇七一頁　弘安四年（六十歳）の作。

家の芋一駄、牛蒡一苞、大根六本。芋は石のごとし、牛蒡は大牛の角のごとし。大根は大佛堂の大釘のごとし。味は忉利天の甘露のごとし。石を金にかふる國もあり。土を米に賣るところもあり。千金の金をもてる者も餓ゑて死す、一飯を苞につつめる者にこれ劣れり。經に云く、飢ゑたる世には米たつとしと云云。一切の事は國により、時による事なり。佛法も此道理をわきまふべきにて候。又又申すべし。恐恐謹言。

弘安四年九月廿日　　日蓮　華押

上野殿御返事

地引御書

◇縮遺二〇八〇頁　弘安四年（六十歳）の作。身延の大檀那南部六郎實長に造坊の模樣を報じたる文。

【地びき】地ならしのこと。【山づくりし】山を削りとること。

坊は十間四面に、また庇さして作りあげ、二十四日に大師講竝に延年心の如く仕りて、二十四日の戌亥の刻に御所に集會して三十餘人をもて一日經かきまいらせ、竝に申酉の刻に御供養少しも事故なし。坊は地びき、山づくりし候ひしに、山に二十四日、一日も片時も雨ふる事なし。十一月朔の日、小坊つくり、馬屋つくる。八日は大坊の柱立て、九日十日葺き候ひ了ぬ。然るに七日は大雨、八日、九日、十日は曇りて、しかも暖なる事春の終りの如し。十一日より十四日までは大雨ふり、大雪下りて今に里に消えず。山は一丈二丈雪氷りて、かたき事金の如し。二十三日四日は又空晴れて寒からず。人の參る事、洛中鎌倉の町の申酉の時の如し。定めて子細あるべきか。次郎殿等の御公達、親の仰せと申し、我が心に入れて御座します事なれば我と地を引き柱を立て、藤兵衛、右馬入道、三郎兵衛尉等已下の人一人も疎略の義なし。坊は鎌倉にては一千貫にても大事とこそ申し候へ。但し一日經は供養しさして候。其故は、御祈念の叶はせ給ひて候ならば、供養しては候はん。何と申して候とも、御祈念叶はずば、言のみ有りて實なく、華さいて果なからんか。今も御覽ぜよ。此事叶はずば、此度「法華經」にては佛になるまじきかと存じ候はん。叶ひて候はば、二人寄合ひ參らせて供養し果て參らせ候はん。「神ならはすは禰宜から」と申す。此事叶はずば「法華經」信じて何かせん。事事又又申すべく候。恐恐。

十一月二十五日　日蓮　花押

南部六郎殿

〔☒〕縮遺二〇八二頁　弘安四年（六十歳）の作。上野殿母尼が種種の旗物を贈りしに對し、深厚なる謝意を表すると共に夫と子供に先立たれたる哀しさを慰めたる文。
【のう米】納米又は能米の意、又方を兼たるならん。
【二十ひさげか】意味不明、ひさげは提子にて二十提子分といふ意
【かつかう】藿香と書す、香味ある食用草。

上野殿母尼御前御返事

のう米一だ、聖人一つつ、二十ひさげか、かつかうひと紙袋送り給び候畢。このところの樣前前申しなり候ぬ。さては去る文永十一年六月十七日この山に入り候て、今年十二月八日にいたるまで此山出ること一歩も候はず。ただし八年が間病と申し齢と申し、歳歳に身弱く心耄れ候つる程に、今年は春よりこの病起りて秋過ぎ冬に至るまで、日日に衰へ夜夜にまさり候つるが、この十餘日はすでに食も殆と止まりて候上、大雪は重なり、寒はせめ候。身の冷る事石の如し、胸の冷き事氷の如し。しかるにこの酒溫かにさし沸して、かつかうをはたと食ひ切りて一度飲み候へば、火を胸に焼が如し、湯に入るに似たり。汗に垢洗ひ、滴に足をすすぐ。此御志はいかんがせんと、うれしく思ひ候ところに、両眼より一の涙を浮べて候。まことやまことや去年の九月五日、故五郎殿のかくれにしは、いかなりけると、胸うちさわぎて指を折り數へ候へば、すでに二ケ年、十六月、四百餘日に過ぎ候が、それには母なれば御訪れ候らむ、いかに聞かせ給はぬやらむ。降りし雪も又降れり、散りし花も又咲て候き。無常ばかり又も歸りきこえ候はざりけるか。あらうらめしあらうらめし。餘所にても「よき志かな志かな、玉のやうなる男かな男かな、いくせ親のうれしく思すらむ。」と見候しに、滿月に雲のかかれるが、晴れずして山へ

【これも】わたくしもの意。
【合ひぬ】合ひなんのつまりたる形。

◎縮遺二〇八四頁 弘安四年(六十歳)の作。池上右衛門大夫宗仲に對する返事。
【聖人】清酒のこと。
【味文字】味噌のこと。

入り、盛なる花のあやなく風に散るが如しと、淺ましくこそ覺え候へ。日蓮は所勞の故に、人人の御文の御返事も申さず候つるに、この事はあまり歎かはしく候へば筆を取りて候ぞ。これも、よも、久しくも此世に候はじ。一定五郎殿に行き合ひぬと覺え候。母より先に見參し候はば、母の歎き申し傳へ候はん。事事又又申すべし。恐恐謹言。

十二月八日　　日蓮花押

上野殿母尼御前御返事

大夫志殿御返事

聖人一筒、味文字一桶、生和布一籠、聖人と味文字はさてをき候ひぬ。生和布は始にて候。將又病の聞由か世給ひて不日に此物して御使を以て脚力に遣はされて候事、心ざし大海より深く善根は大地より厚し。幸甚幸甚。恐恐。

十二月十一日　　日蓮花押

大夫志殿御返事

〔〕縮遺二〇九二頁弘安五年（六十一歳）の作。南條七郎次郎時光の信施を謝したる文。

【伯耆殿】日興上人のこと。

【過去の慈父】父南條兵衛七郎のこと。

【故五郎殿】弟七郎五郎のこと。

春初御消息

伯耆殿書きて候事悦び入りて候。

春の初め御悦び木に花の咲くが如く、山に草の生出づるが如しと我も人も悦び入りて候。さては御送物の日記、八木一俵、白鹽一俵。十字三十枚、芋一俵給び候ひ畢んぬ。深山の中に白雪三日の間に庭は一丈に積り、谷は峯となり、嶺は天に橋掛けたり。鳥鹿は庵室に入り、樵牧は山にさしいらず。衣は薄し食は絶えたり、夜は寒苦鳥にことならず、晝は里へ出でんと思ふ心ひまなし。頭に讀經の聲もたえ觀念の心もうすし。今生退轉して未來三五を經ん事を歎きつる所に、此御とぶらひに命生きて、又もや見參に入り候はんずらんと嬉しく候。過去の佛は凡夫にて御坐し候ひし時、五濁亂漫の世にかかる飢たる『法華經』の行者をやしないて、佛には成らせ給ふと見えて候へば、『法華經』實ならば此功德により過去の慈父は成佛疑ひなし。故五郎殿も今は靈山淨土に參り合せ給ひて、故殿に御頭を撫でられさせ給ふべしと思ひやり候へば、涙かきあへられず。恐恐謹言。

申す事恐れ入つて候。返す返す伯耆殿一一讀み聞かせ參らせ候へ。

正月二十日　　日蓮花押

上野殿御返事

◇縮遺二一〇四頁
弘安五年（六十一歳）の作。身延を出て池上に著きし時、大檀那南部六郎實長（波木井殿）に與へたる消息にて、聖人の絶筆なり。

波木井殿御報

畏み申し候。道の程別事候はで、池上まで著きて候。道の間、山と申し河と申し、そこばく大事にて候ひけるを、公達に守護せられまゐらせ候て、難もなく是までついて候事、恐入り候ながら悦び存じ候。さてはやがて歸り參り候はんずる道にて候へども、所勞の身にて候へば、不定なる事も候はんずらん。さりながら、日本國にそこばく持てあつかうて候身を、九年まで御歸依候ひぬる御心ざし、申すばかり無く候へば、いづくにて死に候とも、墓をば身延澤にせさせ候べく候。又栗鹿毛の御馬はあまり面白く覺え候程に、いつまでも失ふまじく候。常陸の湯へ引かせ候はんと思ひ候が、若し人にもぞ取られ候はん。又その外痛はしく覺えば、湯より歸り候はんほど、上總の藻原殿のもとに預け置きたてまつるべく候に、知らぬ舍人をつけて候ては、覺束なく覺え候。まかり歸り候はんまで、此舍人をつけ置き候はんと存じ候。そのやうを御存知のために申し候。恐恐謹言。

九月十五日　　　日蓮

進上　波木井殿　御侍

所勞のあひだ、判形を加へず候事恐れ入り候。

昭和三年十一月三十日印刷
昭和三年十二月十日發行

昭和新纂國譯大藏經 宗典部第七卷

不許複製

編纂者 昭和新纂國譯大藏經編輯部
代表者 三井晶史

發行者 東京市下谷區上野櫻木町五十番地
株式會社 東方書院
代表者 坂戸彌一郎

印刷者 東京市神田區表神保町十番地
同興舍
代表者 井波康三郎

發行所 東京市下谷區上野櫻木町五〇
株式會社 東方書院
電話下谷四二五九
振替東京六八六一一

印刷所 西村由太郎 ・ 製本所 岡山保孝

東京市赤門前
山喜房佛書林
振替東京一九〇〇
電話小石五三六一

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03023 3092